

夕暁のユウ

早起き三文

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球連邦軍のパイロット「ユウ・カジマ」は連邦軍とジオン公国軍の戦争終結後、新たなモビルスーツ運用実験部隊「新設モルモット隊」を任される事となる。

それはのちに彼に幾多もの「宇宙の光」を見せていく事に？がっていくのであった……

SSのソフト「機動戦士ガンダム外伝ブルーデイスティニー」の後日談です。

（原作キャラに改変がございます。御了承下さい。）

目次

第1話	青い残光	1
第2話	蒼の女	6
第3話	新設モルモット隊	10
第4話	騎士再び	15
第5話	モルモット達	20
第6話	宇宙の者	25
第7話	深紅の宙域	31
第8話	宇宙(そら)と空の間	43
第9話	ジャミトフの子	48
第10話	星の屑の欠片	52
第11話	新たなる動乱	59
第12話	グリーン・ノアの少年	67
第13話	オールドタイプとニュータイプ	71
第14話	大気圏激突	78
第15話	ジュピトリスのニュータイプ	89
第16話	マス・メディア	94
第17話	E X A Mの墓標	99
第18話	紅き宇宙の心	106
第19話	連邦の兵とティターンズの兵	115
第20話	アクシズ・ジオン	120
第21話	別れる道	127
第22話	ブルーデイスティニー4号機	134
第23話	Z対Z	139
第24話	ネオ・ジオンの艦	150

第25話	マリオン・システム	159
第26話	おでん	168
第27話	相容れぬ者	180
第28話	黄金の彗星	186
第29話	ダカールの日	195
第30話	ニュータイプの残の念	203
第31話	ミッシング・リンク	217
第32話	YOU	229
第33話	海の底の記憶	239
第34話	前夜	247
第35話	バトル・オブ・ゼダングート	254
第36話	宇宙を駆ける（前編）	268
第37話	ミネバの目	281
第38話	宇宙を駆ける（後編）	296
第39話	未来を見る騎士と過去を見る兵士	310
第40話	ラプラストアイプ	321
第41話	新たな蒼を受け継ぐ者	341
第42話	彼岸の島	357
第43話	鉄仮面	374
第44話	未来を創る老人達（前編）	400
第45話	未来を創る老人達（後編）	407
第46話	空の休暇	417
「夕暁のユウ」機体解説その1		429
第47話	絆の人形	436
第48話	マリオンの血	446

第49話	エグザム・マリオン（前編）	462
第50話	エグザム・マリオン（後編）	478
第51話	天国はここにある	497
第52話	灰色の心	507
第53話	十年の刻	516
第54話	火種	537
第55話	小人の焰	554
第56話	返り血を継ぐユウ	567
第57話	ニュータイプ（前編）	583
第58話	ニュータイプ（後編）	597
第59話	戦慄の紅きブルー	608
第60話	ミネバの殻まで何マイル？	628
第61話	蒼き騎士、駆ける	650
第62話	ユウ・カジマのラプラス	669
第63話	混成軍	685
第64話	幻影のラプラス（前編）	694
第65話	ダイナ・ソア・バトル（前編）	701
第66話	焰足ル	713
第67話	ダイナ・ソア・バトル（後編）	726
第68話	幻影のラプラス（後編）	750
第69話	可能性のハングド・マン	763
第70話	魂の上で雷鳴はその手を拍する（前編）	780
第71話	天に光を噴く者	801
第72話	魂の上で雷鳴はその手を拍する（後編）	815
第73話	ユウ・フロンタル	821

第74話	NT―B (ブルーデイスティニー)	855
第75話	父と娘	870
第76話	所詮なメビウスにもラプラスは顕る (前編)	893
第77話	所詮なメビウスにもラプラスは顕る (中編)	920
第78話	所詮なメビウスにもラプラスは顕る (後編)	957
第79話	ラプラスの悪魔	967
第80話	憎しみの光たち	981
第81話	贖罪の花	995
第82話	禊の剣	1003
第83話	ヨミツヒラザカ	1013
第84話	進出交奏曲 (前編)	1023
第85話	進出交奏曲 (後編)	1030
第86話	招待状	1037
第87話	空と宇宙 (ソラ)の間	1042
第88話	ロストスリーブス	1049
第89話	家族 (前編)	1055
第90話	家族 (後編)	1059
第91話	ラプラス事件再び	1063
第92話	ユニ・エグザム	1070
第93話	誘惑するユウ	1077
第94話	ジーク・ラプラス	1081
第95話	将人ユウ	1085
第96話	夕暁のユウ	1089
最終話1	ユニバーサル・センチュリー	1093
最終話2	白い影の中で	1097

第1話 青い残光

「機体性能がよ!!」

ユウがジムコマンドを駆るたびに機体から悲鳴があがる。

「ちっ!!」

集中火線をさけながら、地球連邦軍のパイロット「ユウ・カジマ」は叫ぶ。

「数だけが多い!!」

ジオン軍の宇宙要塞「ア・バオア・クー」を遠目に見やりながら、ユウは青く塗装されたジムコマンドを必死で駆る。

「休ませろ!!」

ユウの口と僚機から同時に声が出る。

「お前も疲れたか!」

ユウはビームガンを放ちながら僚機のフィリップへ声をかけた。

「お前さんの機体だよ!!」

通信機から怒鳴り声が聞こえる。

「ブースターやら何やらが吹き飛ぶ!!」

「敵の火線が多すぎる!!」

曲芸のようにユウ機が舞う。

「だめだつての!!」

「仕方無いだろ!」

「早くクセを無くせ!!」

フィリップの怒声を聞きながら、ユウはジムコマンドをフルに動かす。

「ブルーとは違うと言いたいんだろう!」

「だったら、少しは機体をいたわれ!!」

「かわしきれない!!」

「ジムが吹っ飛ぶぜ!？」

ジオンの火線を避けながら、ユウはビームガンをうち放つ。

「だったら!!」

蒼いジムのビームガンの残弾が無くなったのを見ながら、背中のジム用のライフルを取り出す。

「少しは俺を助ける!! フィリップ!!」

「手一杯だよ!!」

「サマナの奴はいないのかよ!？」

コクピットにやや童顔の男の顔が映る。

「ユウさんはエースでしょうに!!」

同僚のパイロットであるサマナが疲れたように答える。

「一応、専用機でしょう!？ その機体は!？」

「俺は不死身じゃない!!」

「なら、僕たちの方がより死にやすい!!」

「状況が悪いのか!？」

「良いわけないでしょ!？」

サマナの焦った声を聞きながら、ユウは試作品のジムライフルをゲルググとか言うジオンの新型へ向ける。ドウ!!

「よくあたるよ!!」

ライフルの集弾性が気に入ったユウは少し機体を停止させながら敵機を狙い打つ。

「止めんなよ!!」

フィリップが怒鳴る。

「止まったら死ぬぜ!？」

「お前が止めろと言ったんだらうが!？」

「よちよち動けって意味!!」

「余裕があるのかよ!!」

「帰還の途中だ!!」

「被弾したか!？」

「片腕が吹き飛んだよ!!」

フィリップはそう言いながら通信を切る。

「全く……!!」

ジムライフルの残弾が無くなる。

「これが俺の最後の人殺しになれば良いがな!!」

「上手くいくか!？」

男の声が出た。

ギューン……!!

「ゲルググ!？」

声とともに放たれたビームを紙一重でさけるユウ。

「機体に不満があるようじゃないかい!？」

「ジオンの奴には関係ないだろ!!」

「思うように人殺しが出来なくて不満かな!？」

再び放たれるビーム。ギュー!!

「二回もかわされた!？」

「ジムが壊れるだろうが!!」

「こっちはありがたいよ!!」

敵の笑い声が聞こえる。

ジムコマンドのアポジモーターからのレッドアラートを気にしながら、ユウはそのゲルググに対して残りのライフルを集弾させる。

「いまさら、新型のライフルなんぞ!!」

ゲルググのパイロットは笑いながら、ライフルをかわしきる。

「退きな!!」

ゲルググからビームが強く放たれる。

「くっ!!」

回避機動を取ろうとした時、ついにブースターの片方が爆発した。

「青ざめたジムが片足だな!!」

「ジオンのエースか!!」

右の片脚が撃ち抜かれながらも、ユウは予備の弾倉をライフルに装填する。バルカンで牽制。ババツ!!

「ブレニフ・オグス!!」

バルカンをかわしながら、ジオンのパイロットは名乗る。

「今からお前の前から逃げる男の名だよ!!」

「戦いで相手に名を名乗るなど!!」

接近してくるゲルググにライフルを乱射する。

もう片方の手にジムのビームサーベルを取り出す。

「傲慢な奴だ!!」

「良いだろうに!?!」

「その態度の為に死んだジオンのパイロットがいる!!」

「そうかい!?!」

ゲルググもビームサーベルを取り出し、軽くユウ機のサーベルにうち当てる。

「俺たちの負けだな!!」

オグスとか言うパイロットはそう言いながら、ゲルググの片手でジムを軽くパンチをする。

「投降するのか?」

「さあなあ……」

オグスはそう言いながら、ユウ機から離れる。

「お前達には行く当てがないだろうに……」

「そうでもない」

オグスはすこし自嘲の笑みを浮かべたようだ。

「ではな」

「俺を逃がしてくれるのか?」

半壊したジムからユウが語りかける。

「人殺しは出来れば避けたい」

「しかし、俺たちは軍人だろ?」

ユウはどこかフィーリングが合いそうなジオンのパイロットに語りかける。

「この戦争で」

ゲルググは狙撃用と思われるビームライフルを軽く振る。

「罪もない若者が死にすぎた」

「戦いは嫌いか?」

「好きだ」

ユウは苦笑する。

「ならば、なぜ」

「死ぬのは戦士だけで良い」

「そうか……」

「だがな」

ゲルググはライフルをユウ機に向ける。

「これからは、もっと戦士で無いものが死ぬ」

ビームライフルの引き金を引く。弾は出ない。

「戦争は続くか?」

「哀しいがね」

そのゲルググはライフルを宙に放ち、去っていった。

「ユウ」

所属艦サラミスのモーリンから通信が入る。

「戦争は終わったわ」

「ジオンが降伏したのか?」

モーリンが頷く。

「本当に戦争が終わったのね」

「そうだな……」

破損した蒼いユウ機にサマナのジムコマンドが接近してくる。

「帰りましょう、ユウさん」

「ん……」

サマナはユウのジムを引っ張ってくれた。

「終わったのか……?」

「違うと?」

「いや……」

「疲れてるんですよ」

サマナが微笑む。

「地球に帰りましょう」

「ああ……」

ユウ達は母艦へと帰っていった。

第2話 蒼の女

「ブルー?」

アルフはそう言いながら、一人の女性パイロットを紹介する。

「初めまして、ユウ・カジマ」

女は自分を「ブルー」と名乗りながらユウと握手をする。

「本名ではないでしょうに……」

「規則なもので……」

女はクスクスと笑う。

「彼女はな」

アルフは手元の資料をユウに手渡す。

「本来のブルーディステイニーのパイロットだった」

「ふん……」

フィリップがつまんなそうに鼻を鳴らす。

「気に入らねえな……」

「フィリップさん……」

サマナがフィリップを宥めながら、アルフに少し固い口調で訊ねる。

「彼女の方が適正はあったが」

アルフは眼鏡を拭きながら話す。

「ブルーディステイニーが拒絶した」

「……」

その言葉にユウは少し考え込む。

「良いのですか?」

「何がだよ?」

「あのブルーディステイニーの名を言って」

「ああ……」

そう言うサマナにアルフは自分の胸に指してあるレコーダーを見せる。

「あとで提出すれば問題ない」

「それ以外は問題か」

「流石にユウだな」

アルフは皮肉げな笑みを浮かべる。

「ニュータイプに近づけた人間だ」

「ブルーはニュータイプを作る機体ではなかった」

「単なる殺戮機械」

「そうだ」

アルフにユウは頷いてみせる。

「恐ろしいこと」

ブルーと言った女が口に手を当てて笑う。

「あなた達が身代わりになってよかった」

「嫌な女だ……」

「立場が逆であつたら？」

「そりゃあな……」

女にフィリップが苦笑した。

「なあ、アルフ」

ユウが少し姿勢を正してアルフに訊ねる。

「もしかして、彼女」

ユウは彼女のそのコードネームの通りの色をした髪を見て言う。

「ニュータイプか？」

「フフ……」

アルフは手を叩いて喜ぶ。

「ブルーの毒が残っているかもな」

「かもしれん」

「マリオンを連想したか？」

「似ている」

「小娘と女の違いはあるぞ」

ユウは苦笑いする。

「アルフから聞いたわ」

女は軽く笑いながら話す。

「女の子の膝の上に乗って戦ったんですってね……」

「無理矢理乗って、乗らされて……」

「いやらしい男……!!」

青い色をした髪の女は再び笑う。

「喧嘩を売りに？」

「違うわよ」

サマナのむつとした顔にブルーは真顔になる。

「新型機のテスト」

女は一枚の書類を取り出す。

「それが、私たちの仕事」

「テストパイロットに格下げか」

「お嫌？」

「別に……」

フィリップはおどけて肩をすくめる。

「給料が出れば別に良い」

「むしろ上がるぞ」

アルフが書類のある一面を指差す。

「ここにサインしろ」

「内容は見るまでもないな……」

ユウはそう言いながらも書類に目を通す。

「やっぱりだ」

「守秘義務？」

「に、決まっている」

ユウはフィリップ達にも書類を見せる。

「クルストの思想が受け継がれる」

「ブルーデイスティニーを作った者の意思がね……」

「地球連邦軍でニュータイプを越えるオールドタイプを誕生させよう
としている」

「オールドタイプ？」

「ニュータイプ以外の人間の事だ」

アルフはタバコに火を付けながら答える。

「まさに」

アルフの口から煙が吹き出される。

「クルスト博士の量産化だよ」

「ふん……」

ユウは書類にサインを書き込む。

「モーリンちゃんはよかったな」

「故郷に戻って結婚……」

「あの子は幸せになれるよ」

フィリップとサマナもサインをする。

「さて、これで」

アルフはタバコを灰皿でひねる。

「また俺たちはモルモットだ」

「テストパイロットである分、楽ではあるな」

「実戦相手はいる」

「ジオンの残党狩りもするのか?」

アルフに答えながらユウはサインをした書類をヒラヒラとさせる。

「書いてない」

「サインを入れる書類に真つ当な物があつて?」

ユウがブルーを睨み付ける。

「俺はあんたと仲良くはやっていきたい」

「私も……」

「ならなぜさつきから……」

「ロリコンは気に入らない」

ブルーの言葉にフィリップとサマナが笑った。

「嫌な女だよ……!!」

ユウは苦虫を噛む潰したような顔で茶を飲み始めた。

第3話 新設モルモット隊

廃坑の近くの荒野を夕陽が強く照す。

その紅い輝きの中を「新設モルモット隊」とジオンの残党軍が戦闘を繰り返していた。

「頭が痛え……」

フィリップが唸りながらも重モビルスーツ「ドム」のバズーカをかわす。

「確かに良い機体ではあるけどよ……」

「ろくな物じゃない……」

フィリップにサマナが答える。

サマナも頭痛がするようだ。

「デイスティニーに慣れていて？」

「また嫌味かよ」

「そんなんじゃないわ」

ユウにブルーが慌てて弁解する。

「サイコ・ジムの副作用にあなたは苦しめられていないから……」

「ブルーの毒のせいだよ……」

「やはり、慣れね」

「だろうな……」

ユウのサイコ・ジムは次々とジオンの残党を片付けていく。

「ブルーデイスティニーと同じ位だ」

ユウはサイコ・ジムの性能をそう判断した。

「俺たちも結局あれに乗っているようなもんか……」

「だろうな」

「だがなあ……」

愚痴りながらもフィリップの機体は従来のジムでは考えられない機動性でゲルググのライフルをかわす。

「この頭痛はどうかなんねえか……?」

「ピルの服用時間です」

オペレーターからのミーンリから通信が入る。

フィリップ達が胸ポケットの薬を取り出す。

「俺はもう少し様子を見る」

ユウは遠距離から正確に射撃をしてくる機体に目を向けた。

「手強いのがいる」

「二機で掛かりましょう」

ユウとブルーがホバーの出力を上げて敵機に接近する。

ガアーン……!!

「高出力だな……!!」

光条を見ながらユウは呟く。

「整備不良のスナイパーライフルではこんなもんかな？」

敵機からの呟きと同時に再びビームが飛ぶ。

「くう!!」

ブルーのサイコ・ジムが破損した。

「おっと!!」

敵機が驚いたような声を上げる。

その狙撃用のライフルから煙が上がる。

「推参!!」

ホバーの高速移動でその敵機に肉薄するユウ。

ジユガ!!

ユウ機と敵機のビームサーベルが交差する。

「おや!？」

ゲルググの改良型らしき機体から驚いた声が出る。

「一年前に仕留め損なつたジムの奴か？」

「へえ!!」

ユウ機からバルカンが走る。

「確かオグスとか言う!!」

「光荣だね!!」

バルカンはその機体を貫通しない。

逆に敵機からミサイルが飛んだ。

「ちい!!」

ホバースラスタを噴かし、そのミサイルの直撃を防ぐ。近接信管

でミサイルが爆発する。

「ドムから盗んだかな!？」

ミサイルにより若干の破損したユウの機体に驚異的な瞬発力でサーベルを突き立てる。

「ドムもどきのジムが!!」

「サイコ・ジムだよ!!」

「サイコミュ付きか!？」

オグスのサーベルの出力の高さにユウ機のサーベルが押され始める。

「ジオンからモビルスーツ技術を盗んだ連邦が!!」

接近戦ではオグスの機体に分があるようだ。

「何をお造るつもりなのかな!？」

「旧式に毛が生えた機体のくせに!!」

「ガルバルディだよ!!」

敵機からのキックがサイコ・ジムを蹴り上げる。

ガガッ!!

ジオン残党の部隊がオグスに加勢する。ザクのバズーカが体勢を崩したユウに直撃した。

「頭痛が……!!」

ユウはピルを噛み砕きながらも、ジムライフルを連射する。

「ここは踏ん張る所ではないかな?」

オグスはそう言いながらもユウ機にビームライフルを放つ。ユウはジャンプしてその一撃をかわした。

「ユウ!!」

追い付いたブルーからライフルがオグス機に襲う。

バツバツ……!!

「まずいな」

そう呟くオグス機と増援のジオン機は連携して二機のサイコ・ジムに攻撃する。

「重いな!! この機体は!!」

ユウは機体重量を取っているサイコミュシステムとやたらに悪態を

つく。

「まづくもないか」

そうオグスは苦笑しながら残党軍の増援が到着したのを見る。ガ
ルバルデイのライフルを放ち続ける。

「どこにそんな兵が？」

ブルー機が頭痛に堪えながらも、ザクを切り落とす。

「モルモット隊」

ミーリからの涼やかな声がコクピット内に響く。

「撤退の命令です」

「だろうな……」

機体の不調を起こし始めたフィリップが苦々しげに呟いた。

「上の連中はこの新型とやらを過信しすぎだ」

「残党の数も多い」

フィリップにサマナが相槌を打つ。

「大規模な支援を受けているわ、この残党軍は」

ブルー機のホバー推進器の出力が上がる。

「悪い物ではないみたいだがね、連邦のそのジムは」

オグスはしんがりを努めるユウからの射撃をかわしながら顔を
し
かめる。

「ユウ君」

「また、お前に塩を送られるのかよ……」

ユウは苦笑しながら最後のライフル弾を放った。

「戦争は続くな」

「ああ……」

落ちてきた夕陽を見ながら、二人の機体は離れていった。

「さすがにやるな……」

松葉杖をついた男が遠くで繰り広げられている新設モルモット隊
とジオン残党軍との戦いを眺めていた。

「EXAMに認められた人間だから……」

男の傍らでコンピュータのボードを叩いているアルフが皮肉げに言う。

「だが、奴はニュータイプではない」

「ああ……」

アルフが不満げに言葉を返す。

「ニュータイプとなるのは私だよ」

「だろうな」

アルフは男の隣へやって来て、タバコを吸う。

「強化人間の訓練にここまで適応できているのはお前だけだ」

「信念かな……」

「執念だろうか？」

「フフ……」

男は少し自嘲げに笑った。

第4話 騎士再び

音もなく降り続ける雪景色の中にその小さな基地はある。

「ユウ・カジマ少佐であります」

ユウは新設モルモット隊の責任者であるジャミトフ・ハイマン准将の元へ挨拶へ来ていた。

「よく来てくれた。ユウ・カジマ少佐」

ジャミトフは微笑みながらユウと握手をする。

よくみるとジャミトフの執務室の中にはもう一人男が立っていた。

「……」

その片足が不自由らしい松葉杖をついた男の姿を見たとき、ユウは体が凍りつく感覚がした。

「紹介しよう」

ジャミトフが松葉杖を付いている男の方を向く。

「旧ジオンの兵であったニムバス・シユターゼン君だ」

ユウとニムバスは互いに睨み合う。

その様子を面白そうにジャミトフは見つめる。

「彼はEXAMシステムを搭載した機体の残骸を回収していたときに偶然保護した」

昔、ユウ達の運命を狂わせた原因であったモビルスーツのオペレーターイングシステムの名前をジャミトフは言う。

「准将、その名前は……」

「かまわんさ」

ジャミトフは二人を見る目に笑いの色を浮かべながら答える。

「どうせ、ここにいる三人とも知っている」

「ニムバス…… いや、彼はジオンの人間ですよ」

「役に立ちそうなのだよ」

ニムバスの顔を見ながらジャミトフは含み笑いをする。

「その思想も経歴も」

「彼を連邦へ迎え入れると？」

「彼には旧ジオンから連邦軍に加わってもらおう代償として」

ジャミトフが数枚の書類をユウに手渡す。

「オーガスタ研究所である訓練に参加してもらっている」

「ある訓練？」

「人為的にニュータイプを作り出す訓練さ」

その言葉にユウは再びニムバスに顔を向ける。

平然とした顔でユウを見返すニムバス。

「彼好みの訓練内容ですね」

少し皮肉が入ったユウの言葉にジャミトフは苦笑いで返す。

「彼は元々、地球人だスペースノイドだという思想は無いようだ」

ジャミトフが執務椅子に座りながら机の上の飾りである地球儀に手を触れる。

「ニュータイプに近づく事には興味を持っているようだがね」

「だから、彼を連邦に？」

「極秘裏の訓練だ」

ジャミトフは地球儀を少し回す。

「彼のような一度死んだ人間はありがたいのだよ」

「パイロットとしての腕もある……」

「そういう事だ」

ジャミトフはコーヒーに口をつける。

「コーヒーは？」

「頂きます」

ジャミトフの机にあるコーヒーメーカーからコーヒーを受け取る。

ユウはニムバスにもカップを手渡してやる。

「……」

カップを渡したときのニムバスのからかうような視線にもユウは動じない。

「地球だの宇宙だのと言う主義思想にとられない人間は私は好きだ」

「平等が良いと？」

「地球にとっては全ての人間は平等だよ」

ジャミトフはコーヒーを飲み干し、話を続ける。

「地球を汚染し続ける邪魔者だ」

「……」

「だから、ニュータイプと言うものも私は夢を抱けない」

「しかし、現実にはニュータイプは……」

「いるさ」

ユウにジャミトフは軽い口調で言い放つ。

「邪魔なんだよ……」

「ニュータイプが？」

「地球の保全の為に人類が協力しなければならぬ時に」

ジャミトフは窓の外の雪景色を眺めながら、話を続ける。

「余計な争いを産む」

再びジャミトフは二人の方へ視線を向ける。

「ニュータイプはこの地球圏に居て欲しくはない」

「ニュータイプの否定ですか？」

「ニュータイプがいればいるほど、オールドタイプの肩身が狭くなるよ」

ジャミトフは軽く溜め息をつく。

「そして、ニュータイプ対オールドタイプの争いが生まれる」

「オールドタイプですか……」

「その内、地球圏の流行語になるよ」

ジャミトフはそう言いながら微笑む。

「だから、私はオールドタイプがニュータイプへとなれるような研究を支援している」

「その研究は……」

「人道的ではないな」

「……」

ジャミトフの腕時計がアラームを鳴らした。

「ニムバス君をよろしく頼むよ、ユウ・カジマ少佐」

ジャミトフはそう言いながら椅子に座ろうとした。

「ああ、そうだ」

ユウの顔をジャミトフが見やる。

「君の部隊に……」

「はい」

「ブルーというコードネームの女性がいるだろうか？」

「はっ……」

ジャミトフはユウの近くへ寄ってきて、彼の肩を叩く。

「彼女をよろしく頼むよ」

「お知り合いで……?」

「まあな……」

ジャミトフはそう言ったきり、仕事へ戻った。

「行こうか、ユウ上官殿」

ニムバスはユウに声をかけ、松葉杖を付きながらジャミトフの執務室から出ていった。

「……」

ユウはジャミトフに無言で一礼して部屋を出た。

「てつきり、私の事をほおっておいてスタスタ歩く物だと思っていたがね……」

「お前を気遣うつもりなどないだろうに」

「フフ……」

ユウはニムバスと歩調を合わせて通路を歩く。

「とっと……」

ニムバスが少しよろける。

ユウは溜め息をつきながらニムバスを支えてやる。

「ニムバス」

「なんだ？」

ニムバスを立たせてやりながら、ユウは疑問を口にする。

「お前は俺の事を恨んでいないのか？」

「騎士同士の戦いで的事だろうか……」

ユウのニムバスの不自由な脚への視線をあえて無視して、ニムバスは言葉を続ける。

「いつまでも遺恨にこだわるのは騎士のなす事ではない」

「俺は今でもお前を憎んではいる……」

「だろうな……」

ニムバスは苦笑する。

「普通の人間がニュータイプになるための訓練か……」

「厳しい訓練さ」

ユウの呟きにニムバスは軽く顔をしかめる。

「だが、達成できればもはやEXAMなど必要ない」

「ご立派な事だ」

ユウの皮肉にニムバスは肩をすくめる。

「マリオンはどうしている？」

ニムバスが昔のEXAMの因縁の娘の事を聞いてくる。

「知らん」

「ふむ……」

「俺も直接会って会話したわけではない」

「そうか……」

二人は黙ったまま廊下を歩く。

「ではな、ユウ・カジマ上官殿」

通路の分岐点でニムバスが少し唇の端を歪めながらユウと別れた。

「あいつが俺の部下になるのか……」

ユウは深い溜め息をつきながら廊下を歩く。

「フィリップ達は納得してくれるかな……」

それきりユウは口を開くことなく、基地の廊下を黙々と歩いていった。

第5話 モルモット達

「ランプライト」

ニムバスがその巨大な航空機を思わせる機体を指差す。

「特殊な訓練を受けた者用のモビルアーマーだよ」

「また両肩が赤い……」

その機体のメガ粒子砲が内蔵されていると思わしきバインダーをユウは苦笑しながら見やる。

「悪趣味が直っていないな……」

「どちらかというと」

ニムバスが赤い塗装のバインダーを少し触る。

「識別のためだ」

「EXAMの因縁を引きずっていないと？」

「今は忙しい」

ニムバスは少しぎこちない動きでコクピットへ乗り込む。

「あまり昔の事を思い出している暇がない」

「コクピットもお前専用か……」

「たとえば、お前が片足でもこの機体は扱えない」

ニムバスが唇の端を歪める。

「身体中の骨が砕ける」

「早いのか……」

「扱いづらいがな」

ニムバスはそう言ったきり、コンソールを叩き始めた。

「他の連中への挨拶の時は愉快であったよ」

「俺は居心地がとても悪かった」

「昔の事と割りきってくれんようだな……」

「フィリップの奴がどうにも表現できない顔をしていたよ」

ニムバスを他のメンバーに紹介したときの事を思い出して、ユウは不愉快そうに顔をしかめる。

「明日、出撃する」

「昔の仲間を撃つ事になるのか……」

「よく言う」

ユウは皮肉げにコクピット内のニムバスに声をかける。

「お前には元々ジオンの人間への仲間意識などない」

「私は選ばれし騎士であるからな」

「傲慢だな……」

「雑兵などどうでもよい」

「フン……」

ユウは顔をしかめて鼻を鳴らす。

「俺達は後ろから撃たないでくれよ、ニムバス君」

「フン……」

ニムバスのくぐもった笑いを無視してユウは自分のサイコ・ジムの調整へと戻っていった。

「少しはマシンになったな」

サマナが旧式のザクを撃ち抜きながら呟く。

「頭痛がなくなった」

「薬は必要だ」

フィリップがもうすぐ服薬の時間であることを告げる。

「機体の悪影響が無くなったか？」

「あなた達も」

他の機体よりも反応が良いブルーのサイコ・ジムが遠距離のドップ戦闘機を撃墜する。

「ブルーの毒と同じ症状が出たのではなくて？」

「嫌な慣れだな……」

フィリップが苦虫を噛み潰したような声で呻く。

「まさにモルモットだな」

「最近では連邦でどこもかしこもモルモットのような部隊が増えているわ」

ザクと戦車からのリサイクル兵器の射撃を装甲で受けるままにする。

ビューン……!!

上空からメガ粒子砲がジオン残党の移動砲台型のモビルスーツを撃ち抜く。

「死に損ないのモルモットが……」

ファイリップが上空で旋回しているニムバスのランプライトの機影を見上げながら忌々しそうに呟く。

「仲間であつて?」

「信用できるもんか……」

ファイリップが文句を言いながらも目の前の敵機に注意を向ける。

「よそ見のしすぎよ」

ファイリップ機のジムライフルの連射を敵機が機敏にかわす。旧式とは思えない動きでファイリップ機にマシンガンを叩きつける。

「旧ジオンの意地つて奴か……」

旧型のマシンガンの為か、ファイリップ機の損傷は軽微。

「油断は出来ないわ」

ブルーがヘルメット内に詰め込んだ自分の青い髪を気にしながら答える。

「この髪、切ろうかしら?」

「ユウが喜ぶ」

ファイリップが笑う。少しムツとした顔でブルーは返事をする。

「ショートが好みなの?」

「ユウもニムバスも」

サマナが上空のモビルアーマーを見やりながら苦笑いをする。

「短い青色の女の子を取り合って命懸けで戦ったんですよ」

「ロリコンが二人も……」

ブルーは溜め息をついて首を振る。

「真面目そうな隊長に見えたのにね……」

「真面目だからかもしれないよ」

「嫌なこと言わないでよ、サマナ」

ブルーが不機嫌さをぶつけるようにホバーの出力を上げた。

「なにのんきにやってんだか、あいつらは……」

余裕がありそうな部隊の様子を見て、ユウは微かに微笑む。

「ミーリ」

「降伏の勧告ですか？」

オペレーターのミーリの顔がサイドモニターに浮かぶ。

「勘が良いな？」

「ジオン残党の戦意がもうありません」

「では、頼むよ」

後方の部隊の中に控えている一台のホバートラックから信号弾が上がった。

「宇宙へ？」

ユウはモルモット隊の隊長であるヘンケン少佐に訊ね返す。

「宇宙が荒れてるらしい、少佐」

ヘンケンはそう言うのと少し笑みを浮かべる。

「階級が同じだとやりづらいな、ユウ」

「適当にやりましょうよ、部隊長……」

ユウはそう言いながら苦笑する。

「デラーズ・フリート」

「ジオン残党の中でも最大級の規模の物ですね」

「少し行動が活発になってる」

ヘンケンがモニターに映像を映す。

「観艦式もあるからね……」

「宇宙を落ち着かせたいという事ですか」

「デラーズ・フリートの他にも」

ヘンケンはモニターの画像を変える。

「レッド・ジオニズム」

モニターには宇宙を背景に赤いモビルスーツの姿が映る。

「ジオン残党の中でも手を焼いている連中ですね？」

「ジオンの英雄である赤い彗星を気取っている奴等だよ」

ヘンケンは笑いながらモニターの画像を消す。

「宇宙に上がった後に他の部隊とも合流する」

「計三隻の艦隊になる……」

「まあ……」

ヘンケンは少し顔を曇らせる。

「癖のあるパイロットがいる艦らしいがね」

「お互い様ですよ」

ユウはニムバス達の顔を思い浮かべながら答える。

「いつ、宇宙へ？」

「早ければ半月後かな」

「地球は少し飽きましたね」

「また恋しくなるよ……」

「フフ……」

二人の男達はそう言いながら笑いあった。

第6話 宇宙の者

「動きをもっとシャープに」

「こうですかい？」

黒いガンダムに乗ったパイロットが小刻みにブースターを噴かす。

「感じがいいな……」

サマナはガンダムのパイロットを誉めた。

「このガンダムのレプリカの調子が良いだけですよ」

「機体の癖をすぐに理解出来ている」

「いくら訓練で好成績を出してもね……」

「なら、模擬戦をやってみるか、ジェリド？」

「助かります」

ジェリドと呼ばれた新人パイロットはテスト用にリメイクされたガンダムをサマナのサイコ・ジムから少し離れさせる。

「先輩を倒せたら箔がつくってもんですよ」

「言ったな……」

サマナの機体にジェリド機の模擬弾が発射された。

「お前さんもあれだろ？」

「何だよ？」

「機体のお守りをしなければならぬ……」

ヤザン・ゲールはそう言いながらアクト・ザクで曲芸のような動きをする。

「スラスターやら何やらの気を使っているって事さ」

「よくわかるな」

「なあに……」

アクト・ザクがユウの機体を小突く。

「動きが良いんだよ……」

「あんたほどでないな」

「フン……」

ヤザンは少し笑いながら、遠くで訓練をしている黒いガンダムを見やる。

「悪くはない」

「黒いガンダムのパイロットが？」

「機体の癖にすぐに対応できている」

「見ただけでそこまでわかるのか？」

「ただの慣れだよ……」

そう言うヤザン機の付近をテスト飛行中のニムバスのランプライトが通りすぎていく。

「アイツの方は俺に似ている」

「どの辺りが？」

「自分以上に強い奴はいないって思っている所がさ……」
「当たり前だ」

ユウはヤザンの勘の良さに呆れる。

「ヤザン中尉」

「あん？」

「あんたはニュータイプか？」

「まさか」

笑いながらヤザンはアクト・ザクを艦へ帰還させる。

「単なるパイロットだよ」

「その腕では謙遜だな……」

「言ってくれる……」

ヤザン機と共にユウも母艦へ向かい始めた。

「ヤザン中尉」

ブルーがヤザンのアクト・ザクへ近づく。

「マグネットコーティング機の様子はどうですか？」

「悪くはない」

「機体を自滅させずにすむ？」

「とまではいかねえ」

アクト・ザクが自機の間接部を指差す。

「少しでも俺が本気を出すと悲鳴を上げる」

「リミッターは必要であって？」

「そうしたいな、女」

「女という名前はなくてよ？」

「フン……」

ヤザンは少し不機嫌そうにアクト・ザクを着艦させた。

「気に入らない男」

「そう言うな」

憤慨するブルーをユウは宥める。

「気の良いパイロットだよ」

「自分の機体壊しの名人が？」

「腕が良すぎるんだよ」

ユウが自分のサイコ・ジムを少し旋回させる。

空間戦闘用に換装された脚部のスタスターは良好のようだ。

「ジム・セカンドと言う名前になるんだって？」

「そう、ジムⅡ」

ブルーのサイコ・ジムがユウ機の隣に寄る。

「現行のジムタイプの統合タイプ」

「サイコ・ジムはネーミングセンスが悪いか」

「量産タイプにはサイコミュも取り外される」

「だろうね……」

ユウがサイコ・ジムを母艦「ブルーマリオン」へ着艦させる。

「アルフのセンスの無さには呆れる……」

「ブルーマリオン？」

「よくその名が通ったもんだ」

ブルーも機体を着艦させながら苦笑した。

「他に良い名前を思いつかなかったあたし達が悪い」

「だからと言ってな……」

小型万能艦である「ブルーマリオン」の通路を二人は歩く。

「万能艦のペカサス級とやらの小型艦か」

「艦長は使いやすいと喜んでいます」

「ヘンケン艦長ね……」

食堂にやって来た二人をフィリップが出迎える。

「パンがちょうど焼けた所だ」

「フィリップさんのパンは火が強すぎだつて……!!」

フィリップを手伝うミーリが文句を言う。

「やっぱり焼きすぎだったのか」

「独学だもの……」

ブルーが溜め息をつく。

「ミーリの方が上手い」

「うるせえな……」

ユウとブルーの前にシチューとパンが差し出される。

「パン屋にねえ……」

ユウは呟きながらパンを頬張る。

「しばらくは無理だな」

片付けをしているフィリップが不満げに言う。

「しばらくは軍属から離れられない」

「命令書にサインをしたからね……」

「早まった事をしたぜ……」

片付けを終えたフィリップとミーリがユウ達の隣へ座る。

「他の艦の連中は？」

「ユニークな奴らよ」

ブルーがシチューを口に運びながら微笑む。

「だけど、腕は良い」

「それはなりより……」

フィリップ達も食事を取り始める。

「どこの艦もジム、ジム、ジム……」

「連邦だからねえ」

ミーリが笑う。

「違うのもいるみたいだがね」

フィリップがヤザン・ゲープルの事を言う。

「ジム殺しの名人ですって……!!」

「ヤザンとやらが?」

「あなたと同じ」

食事を手早く終えたブルーがユウを見て笑う。

「サイコ・ジムはどうか保っている」

「いつまで保つことやら……」

フィリップがユウをニヤニヤと見つめる。

「エースは大変だねえ」

「連邦の量産機も性能は上がっているさ」

「だけど、それでも文句を言う奴がいる」

ジューズを飲んでいるユウにフィリップはスプーンを振りながら茶化す。

「だからヤザンとやらはジオンの機体を使っているんだらう?」

「ニムバスもそうかもな」

「アイツのあれは……」

フィリップは溜め息をつく。

「化け物専用だらう」

「次世代機のプロトタイプらしいな」

「騎士様も所詮はモルモットか」

フィリップが自分の作ったパンの味を確かめながら答える。

「騎士様に食事を届けてくる」

「俺が行こうか?」

「長い付き合いになるかも知れねえ」

フィリップは厨房に入ってしまった。

「仲良くしておいた方がいいだろうからよ……」

「良い心掛けだこと」

フィリップへのブルーの皮肉げな言葉にミーリが頷く。

「後ろから撃たれたくねえからなあ……」

「ケンカしないでよ」

「わかってるって」

ミーリの忠告にフィリップは笑って答える。

「ニムバスね……」

ユウはランチプレートを片付けながら呟く。

「もしかしてアイツも」

「ん？」

ブルーが首を傾げる。

「蒼い宇宙を見たのかもしれないな……」

「何、それ？」

少し馬鹿にしたように訊ねるブルー。

「いや、何でもない」

「フーン……」

少し不満そうな顔をしながら、ブルーも食事の片付けを始めた。

第7話 深紅の宙域

「あれが今回の獲物か……」

改良型のゲルググを駆るシーマ・ガラハウは遠目に見える三隻の艦を身やりながら眩く。

「報酬はいいんだがねえ……」

「我々の拠点の近くには困るのだよ」

シーマ機の近くにいる赤いゲルググから通信が入る。

「金持ちなようだね……!!」

シーマは声を上げて笑った。

「レッド・ジオニズムさんの所は」

「我らの理念に賛同してくれる者が多い」

「ご苦労なこった」

シーマに皮肉げな笑みが浮かぶ。

「貴女もジオンの兵でありましたでしょうに……」

赤いゲルググのパイロットが狙撃仕様のビームライフルを少し持ち上げながら笑う。

「給料はまあ良かったが」

シーマは口のタバコを弄びながら眩く。

「待遇が悪かったよ……」

「お互い様かもな」

「おやおや……」

シーマは噛みタバコを噛み締めながら笑う。

「不真面目なジオンの男だこと……!!」

「フフ……」

赤いゲルググのパイロットは微かに微笑んだ。

そのゲルググの近くを巨大な機体を通りすぎていく。

「ローベリア」

「わかってますよ」

ローベリアと呼ばれた女性パイロットは含み笑いをしながら言葉を返す。

「調子に乗るなと言う事でしょう?」

「モビルアーマーを過信するな」

「知ってますよ、オグス」

モビルアーマーはそのまま二機のゲルググから離れていった。

「モビルアーマーの改良型かい?」

「旧ジオンの出し惜しみだよ……」

「どっちでも良いけどね……」

シーマは苦笑しながら、レッド・ジオニズムの部隊を眺めまわした。

「おでましましたな」

サラミス級から浮上したヤザンのアクト・ザクに続いて、連邦のジムが編隊を組む。

「全軍が出ていいのか?」

「お客様が多そうだ」

「艦を潰されては元も子もないか」

フィリップの呟きにユウが軽い口調で答える。

「ガンダムは目立つな……」

左の方向のサラミス級から浮かんできたジェリドが乗る試験用に再生産された黒いRX-78型のガンダムにサマナは心配げな顔をする。

「守ってやんな……」

「はい」

「あのガンダムの艦はモビルスーツの数も少なければ練度も低い」

フィリップの言葉に聞き流しながら、サマナがジェリド機に通信をいれる。

「全く……!!」

「どうしたの……」

通信を切ったサマナの苛立った声にブルーがその綺麗に整った眉をしかめる。

「口うるさい先輩だと言われたよ……」

「あらあら……」

ブルーが少し甲高い声で笑う。

「よくあいつを見てた方がいいぞ」

「そうしますよ……」

フィリップの忠告にサマナは頷いた。

「ガンダムかい!？」

シーマはジェリド機に興味を持った。

「ガンダムタイプは真つ先に落とさなくてはねえ……」

シーマは部下達に黒いガンダムを狙うように指示を出した。

「ちい!!」

自分の機体が狙われている事を知ったジェリドはガンダムの出力を上げた。

「悪運だぜ!!」

ジェリド機からビームライフルが放たれる。

ガフォ!!

損傷しながらも敵のゲルググはジェリド機へと火線を集中させる。

「止まるな!!」

ブルーとサマナのサイコ・ジムがジェリド機へ接近しているゲルググにライフルを放つ。

「ガンダムが目立っている!!」

サマナがジェリドに注意を促す。

「とんだ宇宙での初陣だよ!!」

「無駄口!!」

「わかってる!!」

ブルーからの叱咤にジェリドは苛立ちながら答えた。

「赤い奴だ!!」

ジム隊の誰かが叫んだ。

「でかいぞ!!」

その言葉と同時にその敵機からメガ粒子砲が放たれる。

「強力な!?!」

シールドごと機体を吹き飛ばされたジムの尻目に、ユウは接近する機体に注意を向ける。

「モビルアーマーか!?!」

「見ればわかるだろうに!!」

真紅の塗装がされた巨大なモビルアーマーから笑い声と共にビームが発射される。

「ハサミ付きめ!!」

「ヴァル・ヴァロと言う名前がある!!」

ユウはジムライフルをその赤い甲殻類のような機体に向けて連射する。

「ジムがよ!!」

ローベリアは笑いながらユウのサイコ・ジムのそのハサミのようなクローアームで掴もうとする。

ギーン……!!

そのモビルアーマーに急接近したニムバスのランプライトからメガ粒子砲が放たれる。

「連邦のモビルアーマー!?!」

ニムバス機のビームが巨大なモビルアーマーを貫く。

「出力が高いか!?!」

破損したヴァル・ヴァロのコントロールに集中しながらローベリアは叫ぶ。

「気に入らないな!! 連邦のくせに!!」

ニムバス機からビームが連射される。

「嫌な感じの奴だ!!」

「こちらの台詞だ!!」

ニムバスがいったんヴァル・ヴァロから離れる。

「騎士が多少の身体の不調など!!」

ヴァル・ヴァロから感じる不快な感覚に頭痛を感じながらも、ニムバスはランプライトを旋回させようとした。

「ニムバスに任せるか!!」

ユウは自分のジムライフルがその敵のモビルアーマーに有効打を与えられない事がわかり、他の機体へ注意を向けようとした。

ギアーン……!!

「遠距離射撃!」

友軍のジムの改良型が撃破されたのを見て、ユウはサイコ・ジムのセンサー出力を上げる。

ガウウ!!

「あそこだ!!」

再びジムを撃ち落とした火線の方向を確認しながら、ユウは数機のジムと共にその敵機へ接近しようとした。

「気を付けろよ!!」

再度放たれたビームをかわしながら、随伴するジムに声をかけた。

ユウのサイコ・ジムのブースターが加速する。

ギアーン!!

「まさか!」

左腕を破損しながらも、ユウは機体のスピードを緩めない。

「またお前か!!」

「運命のビームの糸かな!」

オグスの狙撃型ゲルググからのビームがユウの随伴機を後退させる。

ガッ!!

ユウはそのスピードの余波を借り、オグスのゲルググヘサーベルを振るう。

「あんたがコソコソ狙撃するしかない奴だとはわかっているさ!!」

「そうかい!」

オグス機のサーベルをユウは防ぐ。

「イエーガーのゲルググと言えども!!」

オグスのゲルググがユウにキックを放つ。

「切り合いは出来るさ!!」

「同じ条件だよ!!」

キックを食らってもユウ機の体勢は崩れない。

ユウはすでにお馴染みのサイコ・ジムからの頭痛を防ぐ為のピルを噛み砕きながら、ビームサーベルを振るい続ける。

「連邦め!!」

周囲のジオン機がジム隊に押されているのを尻目にゲルググの腕から機関砲を発射する。

「うお!!」

不意をつかれたユウは軽くよろめく。

オグスのサーベルがユウに飛ぶ。

「甘いな!!」

「そのようだ!!」

そのサーベルを簡単にかわすと、ユウは機体をオグスへぶつける。
「ちっ!!」

ユウ機のタツクルをかわしたオグスにジム隊からの射撃が集中する。

オグスは狙撃用のライフルを連射モードにしてジムに叩きつける。

「お前の負けだよ!!」

その隙を見逃すユウではない。

ユウ機のサーベルがオグスの脚部を薙ぎ払う。

「連邦のモビルスーツが!!」

脚からスパークを散らしながらも、ライフルのストックでユウを殴り付ける。

「いつの間にこんな性能に!!」

「降伏しろ!!」

「ふん!!」

ゲルググのライフルからビームが乱射される。

狙いが定まっていない。

「そんなデタラメな撃ち方で!!」

ユウは機体を軽く叩くビームの音を聞きながら、オグス機の周囲のモビルスーツが撤退していくのを見た。

「なるほどな」

オーバーヒートを起こしたらしいゲルググのライフルを見ながらユウは呟く。

「時間稼ぎか」

「投降する」

オグスのゲルググは両手を上げた。

「お前はそっちの腕を持って」

ユウは友軍のジムに指示を出した。

「あのガンダムは大した事はない!!」

シーマはガンダムに攻撃を集中させ過ぎた自分の判断を罵りながら、接近するヤザン機へビームを放つ。

「他の奴等の方が危険だ!!」

シーマの改良型ゲルググからビームの連射がヤザン機を襲う。

「連射のくせに狙いが良い!!」

ヤザンの操縦にアクト・ザクが悲鳴を上げ始めた。

「場慣れしていやがるぜ!!」

ジオンのパイロットに軽い感心の気持ちをもちながらも、ヤザンはライフルで牽制しながら接近しようとする。

「割りにあわない!!」

「損得勘定を言っている暇があるのかよ!?!」

「あがつたりだよ!!」

シーマはアクト・ザクのヒート・ホークを辛うじてサーベルで防ぐ。

「頭!!」

シーマ艦隊のゲルググがシーマ機へ加勢する。

バツバツ……!!

ジム隊からの射撃が増援のゲルググ達を襲う。

「俺を撃つなよ!!」

フィリップのサイコ・ジムを初めとするジム隊の支援射撃の援護を受けながらヤザンは怒鳴った。

「勘が良いのか!？」

ローベリアのヴァル・ヴァアのビームを寸前でかわしたジェリド機に再びビーム砲を放つ。

「ジェリド機を守れ!! サマナ!!」

集中攻撃を受けているジェリドのガンダムをサマナが支援する。

「ガンダムが目立つのかよ!!」

ビームで盾が吹き飛ばされながらもジェリドは付近のゲルググにビームライフルを放つ。

「俺はデコイか!？」

「集中しろよ!!」

「了解!!」

ジェリド機に攻撃を加えているゲルググをサマナは撃ち落とす。

「くそ!!」

頭痛に悩まされながらもニムバスはヴァル・ヴァアにメガ粒子砲を撃ち放つ。

「うっとおしい!!」

ヴァル・ヴァアの左部にランプライトのビームが直撃する。

「この頭痛がなければな!!」

ニムバス機が接近するたびに起こる頭痛を忌々しく感じながらローベリアは巨大なヴァル・ヴァアを旋回させる。

ガガッ!!

「どこから!？」

ローベリアが再び被弾する。

「動きがスローに!？」

ブルーのサイコ・ジムから再度ライフルが奔る。

「破損箇所をえぐりとるつもりか!!」

被弾したヴァル・ヴァアの損害箇所を的確に狙ってくるジムの姿にローベリアは怒りを覚える。

「雑魚のくせに!!」

ヴァル・ヴァアから謎の兵器が射出される。

ブルーは弾倉を交換しながら、その兵器の発信源とおもしきパーツを正確に破壊する。

「サイコムシステムの効力か?」

先程から稼働状態が自動的に上昇したサイコ・ジムのサイコムをブルーは気にする。

「まさか、こいつはニュータイプ!?」

ブルーはそう呟きながら、アルフから言われた言葉を思い出した。

—ニュータイプ同士が戦闘を行うと、サイコムがその潜在的な機能を発揮する—

技術師アルフの言ったことを思い浮かべながら、ブルーは動きが鈍く見えるヴァル・ヴァアに的確な射撃を加えていく。

「あたしはペーパーテストのニュータイプ判定なんだけどね!!」

全く信用のおけないニュータイプ試験とやらの事を思いだし、ブルーは苦笑する。

無論、敵機からは目を離さない。

「つけあがるな!!」

ヴァル・ヴァアのクローアームがブルー機を捉えようとする。

「エイア!!」

ブルーはブースターを噴かしてそのアームをかわし、ヴァル・ヴァアの巨体に取りついた。

「離れる!! 女!!」

「あなたも女でしよう!」

ブルー機のサーベルが真紅の機体を貫く。

「おのれ!!」

ヴァル・ヴァアのモノアイが破損する。

「赤い彗星とやらの二番煎じが!!」

「良い色の機体だよ!!」

「何ですって!?!」

「宇宙の色だ!!」

ヴァル・ヴァアはどうかブルー機を振り払おうとする。

「羽虫どもが!!」

ブルーに続いてサマナと友軍のジムもヴァル・ヴァアに取りつく。

「くそお!!」

背後からニムバスのランプライトが接近しているのを見て、ローベリアは自分がかかなり危険な状態であることを理解する。ニムバス機からビームが奔る。ズウ!!

「くう!!」

機体の後方をめぐりとられたヴァル・ヴァアはブースターの出力を上げ、戦線を離脱しようとする。

「ブルー達、そのモビルアーマーから離れろ!!」

ニムバス機から声が飛ぶ。

ヴァル・ヴァアに取りついた機体が一斉に離れる。

「ブルーと言うのか!!」

「悪くって!?!」

「忌々しい名前だよ!!」

戦線を離れながらブルー機にヴァル・ヴァアは叫ぶ。

「宇宙にはない色だからな!!」

損害が激しいヴァル・ヴァアは猛烈なスピードで宙域から離脱していった。

「俺が女のパイロットを気に入るのは初めてだぜ!!」

「良い男じゃないか!!」

シーマは破損したゲルググを後退させる。

「一杯飲まねえか!?!」

「機会があればねえ!!」

煙を上げ始めたヤザンの紺色のアクト・ザクに軽く機関砲を撃ちながらシーマ隊は撤退していった。

「報酬分ははたらいたさ」

「傭兵稼業か？ 女？」

「海賊だよ……」

「イカした仕事だな……」

ヤザンは苦笑しながらも、他の機体へ後退の合図を送る。

「腹が減ったぜ……」

「ステーキを仕入れてくれたみたいですが、隊長」

「そりあぁいい……」

部下へヤザンが笑う。

「俺のパンはいかがかい？ エースの旦那」

「お前もなかなかの腕だろうに……」

「あんたは野獣だよ」

フィリップがヤザンを皮肉る。

「あんな戦い方……」

「そうだともさ……」

フィリップに言葉を返しながらも、戦闘が終息しているのを見やったヤザンは母艦へと帰還していった。

「やられたな……」

「地上とは訳が違うよ……」

サマナは手酷くやられたジエリドのガンダムの周りを見る。

「ガンダムは縁起が悪いんじゃないんですかい……？」

「かもな……」

「つつ!!」

ジエリドが悲鳴を上げた。

「怪我か!？」

「たいしたもんじゃない……!!」

サマナは急いでジエリド機を引っ張る。母艦にも通信を入れる。

「ざまあないな……」

「喋るな、傷にさわる……」

「はいはい……」

サマナ機はジェリドのガンダムを気遣いながらも帰還を急いだ。

「サイコミュがねえ……」

ブルーはぶつぶつと呟いている。

「なんなんだ、この頭痛は……」

ニムバスがランプライトを静かにブルー機へと近づける。

「ニュータイプ同士の共鳴とやらかもしれないわ」

「俺はニュータイプに近づけたか？」

「さあ……」

ニムバスの言葉にブルーは首を傾げた。

第8話 宇宙（そら）と空の間

大空と呼ぶにはあまりに高く、宇宙と呼ぶには低い蒼い高々度の空。

その世界を二機のモビルアーマーが飛んでいた。

「扱いつらいな……」

ユウのランプライトが少しバランスを崩しならその空間を飛ぶ。

「普通の人間のデータも欲しいらしいからな」

ユウ機の少し前をニムバスのランプライトが飛んでいる。

「流星に慣れが早い……」

点のような太陽からの刺すような光条に目を細めながらニムバスはユウ機の様子を観察する。

「強度のリミッターが効いているせいだよ」

「でなければ、強化人間以外では扱えない」

「強化人間か……」

「人間をモルモットとして扱うやり方だよ」

ニムバスは苦笑いしながら、空と宇宙の間にランプライトを滑らせる。

「可変機のテスト機体らしい」

「可変機？」

「モビルスーツとモビルアーマーの良いところ取りの機体の事さ」

「へえ……」

ユウはそう答えながらも高々度から見える景色を楽しんでいた。

「蒼い空だよ」

ランプライトを駆りながら、ニムバスは濃い紺色をした成層圏に視線を向ける。

「空と宇宙の狭間だ」

「詩人になったな」

ユウが眼下の雲を眺めながら口笛を吹く。

「ここから下も」

ニムバスはランプライトを軽く振る。

「ここから上も」

ニムバスの言葉にユウは成層圏を見上げる。

「戦いの地だ」

「そうだな」

一二機のランプライトはしばし無言で空と宇宙の間を飛び続ける。

「蒼い宇宙か……」

「私も見た」

ニムバスが呟く。

「俺に落とされた時にか？」

「そうだ」

「やはりな……」

ニムバスの答えにユウが息を吐く。

「冷たく研ぎ澄まされた宇宙」

「俺の見たのとは違うな」

「お前は何を見た？」

ニムバスの言葉にユウは少し昔の事を思い出そうとした。

「人の心かな……」

「お前らしい」

ニムバスは軽く苦笑する。

「私が見たのは諦観の心だろうか」

「なるほど……」

「マリオンが見せてくるたのであろう」

ニムバスが再び成層圏を見上げる。

「この色だ」

「蒼いな……」

「ああ」

ニムバスの機体が少し高度をあげる。

「マリオンが伝えたかったのはどちらの色だったのだろうか？」

「両方だろう」

ニムバスが事もなげに言い放つ。

「俺の見た人の心の宇宙は」

ユウも機体の高度を上げる。

「再び見る機会があるのだろうか？」

「さあな」

ニムバスはあまり関心がないように呟く。

「少なくとも私は」

ニムバス機が機首で成層圏を指す。

「その時の宇宙の色を、この今見ている」

「冷たい宇宙の色か……」

暗い成層圏の蒼から太陽が鋭く光を投げつける。

「どちらにしろ」

ニムバスがテスト飛行の終了時間であることを告げた。

「騎士である私のやることには変わりはない」

「戦いか」

「そうだ」

ニムバス機が下降を始める。

「私はニュータイプとやらを超えたい」

「何がそこまでお前を？」

ユウのランプライトも高度を下げる。

「壁を見たものの反発心かもな」

「ニュータイプとオールドタイプの違いか……」

「ああ」

雲の壁を二機は突き抜けていった。

「オグスは捕虜収容所へ？」

「なんとも言えない」

ユウの問いにブルーは肩を竦める。

「なにしろ、連邦の公式戦術書にも書かれている名うてのパイロットだから」

「もて余しぎみか」

ランプライトの機体を冷やしている最中にユウは食事を取る。

「お手柄ではあったけどね……」

「かなりのボーナスが出たな」

「それについては」

ブルーが含み笑いをする。

「あのヤザンとやらが褒めていた」

「フーン」

ユウは地上の基地から見えるはずもない宇宙の方へ顔を上げる。

「ボーナスを三艦の全員で山分け」

「それが道理だろう？」

「あのヤザンが言うには」

ブルーがジューズに手を伸ばしながら話を続ける。

「そういう事が出来る人間が上へのしあがって欲しいそうよ」

「そうかい……」

「ヤザンは悔しがっていたわ」

「俺の手柄に？」

ユウがジューズから口を離す。

「俺もあの乱暴な海賊の女を連邦に売り払いたかったって……」

「アイツらしいな」

ユウは苦笑しながら口にコップをつける。

「あれほどのパイロットなら売ったその金で部下に旨いもんを食わせ

てやれたってね」

「優しいな……」

「山賊の頭みたいなものよ、あんな男は」

「ハハッ……」

ユウは少しジューズにむせながら相槌をうつ。

「結局、あのガンダムの新人……」

「ジェリド君？」

「入院だって？」

「サマナの奴が哀しがっていた」

ブルーが少し顔を翳らせる。

「野心的だけど素直で真面目」

「あの新人君がね……」

「サマナの言う事を憎まれ口を叩きながらも真剣に学ぼうとしていたってね」

「サマナにとっては生意気な弟みたいな感じだったのか……」

「死んだ弟に似ていたと」

「そうか……」

ユウはボソリと呟いた。ランチプレートを片づけ終えたユウはランプライトの調整を始める。

「少し休んだら？」

「かもしれないけどね……」

コクピットに入ったまま、ユウは目を閉じる。

「そんな所で昼寝をしなくてもいいでしょうに……」

ブルーは苦笑しながらも、少し離れた場所にいるニムバスの様子を見に行った。

「宇宙と空の間か……」

再び高々度をランプライトで飛ぶユウはその景色を眺める。

「まさに天国だな」

すでに日が暮れようとしている。夕日が眼下の雲を紅く染める。

「紅い宇宙かな……？」

ユウは自分が何かセンチメンタルな気分になっていることに一人苦笑した。

第9話 ジャミトフの子

激しい雨が基地を覆い隠す。

「テイターンズ？」

「ジャミトフ准将が音頭をとって提案している新組織よ」

ブルーがユウにコーヒーマスターを手渡しながら話を続ける。

「主に地球環境保全の為の組織」

「ふうん……」

「それと、旧ジオンの残党狩りを兼ねる組織らしいわ」

「なるほど……」

ユウは以前に一度だけ会った事のあるジャミトフ准将の顔を思い出しながらコーヒーマスターに口をつける。

「地球の保護の為の新組織か」

「武装化された環境保護団体ってところかしらね」

「軍のやることではないだろう？」

「地球連邦軍から派生させて創るつもりらしいわ」

ブルーがテーブルの上の菓子を口にはおりこむ。

「何を考えておられるのかな……」

「少し前に」

ブルーが壁に掛けてある世界地図を眺めながら眉をひそめる。

「オーストラリアのトリントン基地から新型機がジオン残党に強奪されたらしいわね」

「そうみたいだな……」

ユウは少し前に聞いた噂の事を思い出した。

「今、その新設組織の是非を連邦議会で審議しているらしいわ」
「情報通だな」

ユウが感心したように笑みを浮かべる。

「父の昔の知り合いから聞いたのよ」

「お前の親父さんは連邦政府の人間なのか？」

「私の名前」

ブルーはその名の通りの色をしたショートヘアの髪に手をやりながら

話す。

「ハイリーン・ハイマン」

「ハイマン？」

ユウはコーヒーカップをテーブルに置く。

「もしかしてジャミトフ准将の……」

「父に当たるわ、彼は」

ブルーは微笑みながら席を立ち、コーヒーを淹れ直す。

「縁は切つてあるけど」

「……」

ユウは黙って菓子に手を伸ばす。

「理由を聞かないのね？」

「失礼だろうか？」

ブルーは肩を竦めながら再び椅子へ座る。

「理由が解らないの」

「何が？」

「父が私を含めて、突然戸籍上の全ての縁を切つた理由が」

「へんな話だ……」

ユウもコーヒーを淹れ直す。

「金銭問題か？」

「それこそ失礼な質問よ……」

ブルーはクスクスと笑う。

「ほんとに無理矢理」

「縁を切られた？」

「母や親戚が呆れてたわ」

「だろうね……」

ユウは苦笑する。

「世捨て人になる……？」

「まさか」

「だね」

二人は顔を見合わせて黙りこむ。

「以前にね」

「何？」

ユウがジャミトフと会ったときの事を思い出しながら話す。

「ジャミトフ准将がブルーの事をよろしく頼むってさ……」

「あなたに？」

「ああ」

「へえ……」

休憩室が沈黙に包まれる。雨が激しく窓を叩きつける。

「怖い感じの人だな……」

「父が？」

「ああ」

ユウは椅子から立ち上がり、窓の外の雨へと目を向ける。

「クルスト・モーゼス博士」

「EXAMとやらの産みの親ね」

「彼と同じ匂いがする」

「単なる加齢臭じゃなくて？」

「おい……」

ユウは窓からハンガーの中でメカニック達が整備してくれているランプライトを見ながら口を軽く綻ばせる。

「なんか」

「ん〜？」

ブルーが菓子を頬張りながら答える。

「世の中が荒れてきたな……」

「そうね〜」

ブルーがテレビをつけ始めた。

「結構気分がコロコロと変わる女だな……」

「リラックスよ」

「いい性格だな……」

ユウも仕方がないのでテレビを見始める。

「たまにはいいか……」

「あんたもオフでしように……」

「まあね……」

ユウは少し早い夕飯でもとろうかと思いはじめた。

「誰にも言わないでね」

夕食後にブルーがユウに言ってきた。

「本名の事か？」

「父はどうしても私と母との縁を切りたかったみたい」

ブルーが肩を竦める。

「嫌われたもんね」

「良い親父さんだった？」

「理屈っぽいけど、優しい人」

「そうか……」

ユウはテロのニュースを見ながら答える。

「テイターズか……」

「必要な組織かもね」

「ああ……」

二人は少し暗い気分のまま、休暇を過ごしていた。

第10話 星の屑の欠片

「ついにユウのワガママっぷりにこの機体もついていけなくなったか」

「言わないでくれよ……」

オーバーヒートを起こしかけたユウのサイコ・ジムをニヤニヤと笑いながらフィリップが見つめる。

「次世代機が凄いですピードで開発されているよ」

ランプライトから下りたニムバスがユウに話しかける。

「すでにサイコ・ジム、いやジムⅡですら旧式と見なす動きがある」

「早すぎるぜ……」

「ランプライトもそうだ」

フィリップの呆れた声にニムバスが笑いながら頷く。

「私はギャプランのテストもさせられていてな……」

「ランプライトの正式採用の機体か」

「従来の機体と隔世の感がある」

「ご立派なものだ」

フィリップが軽く嫌みを言う。

「宇宙は荒れているらしいな……」

ニムバスの言葉にブルーが頷く。

「ジオン残党が活発化しているわ」

「あのレッド・ジオンズムとやらもか？」

「デラース・フリートの使い走りをしているみたい」

「そうか……」

ブルーの言葉にニムバスはどこか遠い目をしている。

「ジオンの理想か……」

「お前さんには無縁だったんだってな」

「皮肉か？」

「いや……」

ニムバスに対してフィリップが肩を竦める。

「少しあんたに興味がわいてきた」

「それはどうも……」

「あんたは騎士道とやらをやりたいのか？」

「どちらかと言うと」

フィリップの問いにニムバスは少し考えながら答える。

「自分が一番強くなりたいのさ」

「傲慢だねえ」

「だから騎士ができる」

「ロマンチックな奴だな」

少し馬鹿にしたように笑うフィリップにニムバスがニヤリと口を歪める。

「戦いは騎士だけではできん」

ニムバスは自機のランプライトを見やりながら微笑む。

「雑兵が必要だ」

「騎士様は言ってくれるねえ……!!」

そう言いながらも別にフィリップはニムバスの言葉に悪い感情は抱かなかったようだ。

「俺たちは仲間か？」

「騎士とその従者であるよ」

「従者にもいい目を見させてくれよ？」

「もちろんだ」

二人の男は笑いあった。

「テイターズへの誘いを受けたんだって？」

「ええ」

ユウの問いにサマナは少し複雑な顔をして答える。

「どうしようか迷っている所です」

「フーン……」

困惑している顔のサマナにフィリップが少しつまらなそうに呟く。

「何か、最初は単なる環境保護団体だと思っていたがねえ」

「ほとんど軍隊と変わらないそうよ」

「必要なのかね……」

フィリップのぼやきにブルーは肩を竦める。

「私の所属しているオーガスタの研究所も」

ニムバスがランプライトを触りながら会話に入る。

「テイターンズが成立したら協力するらしい」

「なんだかなあ……」

フィリップが不機嫌そうにタバコを揉み消す。

「大丈夫なのかね……」

「気持ちに分かる」

ユウがフィリップに同意する。

「だが、世の中が本当に荒れてきた」

「観艦式がメチャクチャになったんだって？」

「ジオンの残党の強襲を受けたらしいな」

「いやだねえ……」

「全くだ」

ユウとフィリップがそろって溜め息をつく。

「休憩が終わったら」

ブルーがサイコ・ジムの指差す。

「もう一度模擬戦をやる？」

「このサイコ・ジムのデータも充分取れた」

「では……」

「あついや……」

ブルーに対してユウは慌てて首を振る。

「近い内にお別れになるかもしれないという意味だよ」

「乗り納めか？」

「そうしたいなあ……!!」

ニムバスにユウが軽い口調で答えた。

「はつきり言わない男達ねえ……」

ブルーは呆れたように言う、短い髪に手を突っ込みながら、サイ

コ・ジムのコクピットへと乗り込んだ。

「何だ!？」

「あれ!？」

コクピット内のユウとブルーが同時に声を上げる。

「どうした?」

フィリップがユウのサイコ・ジムに近づく。

「まて、フィリップ!!」

ニムバスが険しい顔で何か周囲を見渡している。

「まさか、こんなところへ敵か!？」

「いや、違う……!!」

ニムバスが何やら冷や汗をかいている。

「ブルーマリオン!!」

ユウ機から母艦へと通信が入る。

「何かあったのか!？」

「何だ!？」

通信士のアフラーがユウに返答する。

「何も起こっちゃいないぜ!？」

「そんなはずは!!」

ブルーもアフラーに食って掛かる。

「もう少し調べて!!」

「調べるって何を……」

アフラーが文句を言う。

「どうしたんですか? 三人とも……」

サマナが怪訝そうな顔をした。

「上だ!!」

ニムバスが叫ぶ。

「何!!」

フィリップとサマナがよく晴れた青空を見上げる。

「何も見えねえぞ……!!」

「こちらブルーマリオン!!」

ヘンケン艦長が怒鳴る。

「ユウ達!! 早く艦内に避難しろ!!」

ヘンケン艦長が言う前にすでにユウとブルーはサイコ・ジムのコク

ピットから飛び降りていた。

「何が起こった!!」

フィリップが苛立たしげに怒鳴る。

「空が……!!」

ユウが見上げている空が裂かれていく。

「スペースコロニー……!!」

宇宙から雲を切り裂いて落ちてくるスペースコロニーをモルモツト隊の者達は呆然としか表情で見つめていた。

「早く!! ブルーマリオンに退避を!!」

ミリーが必死の形相で叫ぶ。

「ニムバス!!」

片足のニムバスをフィリップが支える。

「早く!!」

サマナが担架をブルーマリオンから持つてくる。その担架にニムバスを乱暴に乗せ、フィリップとサマナが急いでそれをブルーマリオンの中へと運び込む。

「すまない……!!」

「気にすんなよ……」

顔を歪めるニムバスにフィリップが答える。担架についてくる形でユウとブルーが走る。

「全員入った!!」

「ドアを閉める!!」

ヘンケンの言葉と同時にハッチが閉じられていった。

「全員身体を伏せて踏ん張れ!!」

ヘンケン艦長が艦内放送で伝達する。

「モビルスーツがな……!!」

「こんなときに何を言ってるの!! バカ!!」

置き去りにしたサイコ・ジムやランプライトを気にしているユウに對してブルーが怒鳴る。

ズウウウウウウ……!!

大地が震えると同時に衝撃波がブルーマリオンを襲う。

「くそっ!!」

ユウは飛んできた小物にぶつかりながら、隣のブルーを庇う。艦が横転しかかる。

「ええい!!」

操舵手のサエグサが危険を省みずにコントロールバーに飛びかかる。

「何をやっている!?!」

「逆噴射ですよ!!」

サエグサはどうかしてブルーマリオンの姿勢を直そうとした。艦の左舷から制御スラスタが噴出される。

「ちい!!」

ヘンケン艦長がサエグサに向かって飛んできた椅子を身体を張って止める。

「もう大丈夫です」

スラスタを固定させたサエグサは計器類に目をやる。

「誰か余裕のあるものは外に目をやるなりモニターを見るなりしてくれ!!」

身体の痛みに耐えながら、ヘンケン艦長は艦内に通達をする。

「コロニー落とし……!!」

ミーリが震えながら遙か遠くの大地に突き刺さったコロニーを指差す。

「通信が復活しました」

通信士のアフラーが連邦司令部からの通信回線の内容を艦内に流しはじめた。

「これがコロニー落としを受ける側の気持ちか……」

「そうだよ、元ジオンの騎士様」

艦内に流れる通信を聞きながら、フィリップがニムバスを軽く睨む。

「デラーズ・フリート……!!」

サマナが通信で流れてきたコロニー落としを実行した組織の名前を呟く。

「これがジオンの残党のやり方か……」

サマナの言葉にフィリップもニムバスも無言でいる。

「すまん……」

ニムバスがどういう心境か、誰に向けたかも解らずにその言葉を呟いた。

フィリップもサマナもその言葉に何も答えない。

「各員、無事な者はブリッジに集合せよ」

ヘンケンからの通達が響く。

「お前はここで……」

「いや、私も行く」

止めようとしたフィリップをニムバスは遮った。

「戦争の始まりか……?」

ブリッジへ向かう最中にフィリップは一人呟く。救護班が艦内を駆け廻っている足音が聞こえた。

第11話 新たなる動乱

漆黒の宇宙を戦いの閃光が舞う。

「またしても機体が重い!!」

「文句が多いぞ!!」

「うるさい!!」

ニムバスに悪態をついたユウは蒼いネテイクスブルーを必死で操縦する。

慣れない機体では敵の火線をかわずだけで精一杯である。

「俺はニュータイプでも強化人間でもない!!」

「EXAMの騎士であつた男であろう!?!」

「昔の話を!!」

試作型ギャプランを駆るニムバスが次々へとジオン残党であるレッド・ジオニズムの旧式の機体を屠っていく。

「サイコ・ジムやブルーディスティニーの方がまだましだよ!!」

「サイコミュを使え!!」

「だから俺は!!」

ユウは旧式のジオンの機体にビームライフルを撃ちつける。

「オールドタイプだよ!!」

「弱腰な!!」

ニムバスの嘲笑う声を聞きながら、有線サイコミュをどうにか起動させるユウ機。

「下手くそなヨーヨーだな!!」

笑う女の声が響き、赤く塗装されたゲルググが有線サイコミュを掻い潜ってユウ機に接近する。

「今日はあの蒼い女はいないのか!?!」

「ブルーの事か!?!」

ネテイクスブルーに肉薄するゲルググのビームサーベルをどうにか手持ちのサーベルで防ぐ。

「あの女には借りがある!!」

「知ったことか!!」

ガッ!!

赤いゲルググがユウ機を蹴りつける。

「装甲は厚いようだな!!」

ゲルググは驚異的な機動力でネティクスブルーの周りを旋回する。

「ゲルググではないな!?!」

「支援者からの貰い物だよ!!」

両肩にスラストターを仕込んでいるゲルググの改修型とおもしき機体はネティクスブルーをなぶるようにビームライフルを放つ。

「お前が生きて帰れたら伝えろ!!」

ゲルググからのビームがユウ機をかする。

「紅のローベリアがお前の首を取るとな!!」

「余裕を見せつけるとはな!!」

カラララツ……!!

「何だ!?!」

ネティクスブルーの機動性が上がっていく。

「サイコミュが起動したか!?!」

ネティクスブルーからのグレネードがゲルググを襲う。ガウ!!

「狙いが正確に!?!」

ローベリアは驚愕するとともに、激しい頭痛を感じた。

「サイコミュ搭載機なのか!?!」

シユパア!!

有線サイコミュが機敏な動きでゲルググを狙撃する。

「リゲルグについてくるとは!!」

「ジオンの残党共のどこに!!」

被弾したローベリアのリゲルグにネティクスブルーがその機体重量を感じさせない動きで接近する。

「そんな高性能な機体が!?!」

「スポンサーがいると言ったであろうに!!」

リゲルグの両肩のスラストターが炎を上げる。

「頭痛をさせる小癩な奴め!!」

ローベリアが忌々しそうに叫ぶ。

「お前はニュータイプなのか!？」

「そうらしいな!？」

ユウの言葉にローベリアが叫び返す。

ギユン……!!

恐ろしい程のリゲルグの機動性にネテイクスブルーがついていけない。

ビームライフルのスピードすら遅く感じるほどだ。

「おのれ!!」

ニムバスのギャプランも苦戦をしているようだ。

ニムバス機と同じく可変機とおもしきモビルスーツが集団で襲ってくる。

「雑兵の戦い方の癖に!!」

常に集団で攻めてくるそのジオンのモビルスーツにニムバスは追いやられている。

「今までのジオンの旧式とは違うな!!」

ニムバスはギャプランの接近のタイミング、そして可変機能を活かす戦いが出来ないことに苛ついている。

「よそ見をしている余裕があるのか!？」

リゲルグからのビームがユウ機に飛ぶ。

ユウはあえてそのビームをシールドで受け、有線サイコミュをリゲルグに突撃させる。

「うあっ!!」

有線サイコミュがリゲルグに絡み付く。

「蒼い機体が!!」

「気に入らないか!？」

「宇宙の色ではない!!」

有線サイコミュをサーベルで切り落とし、リゲルグはユウ機から距離をとる。

「お前にも宇宙の色が分かるのか!？」

「その機体の色ではない!!」

「ならば!？」

「紅い宇宙だよ!!」

リゲルグからのグレネードが飛ぶ。

バシユウ!!

撃ち落とし損ねた一発のグレネードがネテイクスブルーの腕に直撃する。

「まずい!!」

ジオンの可変モビルスーツ隊を振り切ったニムバス機がユウの支援に入る。

「もう少し耐えろ!!」

「好転するのか!？」

「テイターズズの援軍が来る!!」

「そうか!!」

ニムバスの言葉に勇気づけられたユウは相手をギャプランとバトンタッチする。

「お前も確かあたしに頭痛を起こさせた奴だな!？」

「私も同じだ!!」

リゲルグのスピードにギャプランは追い付く。

「今だ!!」

リゲルグが振り向いたその隙をニムバスは見逃さない。ギャプランが瞬時に変形をし、サーベルでリゲルグの片手を切り落とす。

「くうっ!!」

呻くローベリアのリゲルグから発射されるグレネードをニムバスは再び可変してかわす。

「単調な動きの癖に!!」

「騎士の戦い方だろうに!!」

推力が強すぎるギャプランが大きな弧を描いて、再びリゲルグに接近する。

ギイーン……!!

ジオンの可変モビルスーツから支援射撃がニムバス機に飛ぶ。

「ジオンの援軍!？」

ユウがネテイクスブルーで敵機を落としながら呻く。ユウ機に

ビーム砲が直撃する。

「終わりだな!!」

リゲルグのローベリアが勝利を確信したかのように叫ぶ。ライフルをニムバス機に向ける。

ドウドウ!!

遠方から火線がレッド・ジオニズムの部隊を襲う。

「ティターンズか!」

ユウが叫びながら有線サイコミュを敵機に向ける。

それに呼応するかのようにティターンズの黒い塗装をしたスナイバータイプのジム達がジオンの機体を狙撃する。

「ちい!!」

ジムに撃破される僚機の姿を見てローベリアは撤退の合図を送った。

リゲルグに連なるようにジオンのモビルスーツが漆黒の宇宙へと溶け込む。

「ユウさん!」

ティターンズのパイロットが驚いたような声を上げる。

「サマナか?」

「おひさしぶりです」

サマナは黒いジム隊に周囲に警戒するように言いながら、ネテイクスブルーの近くに近づく。

「ブルーデイスティニー再びですか?」

「俺には合わない機体だよ……」

ニムバスのギャプランもサマナ機の近くに寄ってくる。

「久しぶりである」

「また両肩が返り血のように赤い……」

「気にするな……」

ニムバスは苦笑しながらサマナに礼を言う。

「サマナ」

黒いガンダムタイプの機体がユウ達に近づいてくる。
「俺の出番は無かったようだな」

「すまん、ジェリド」

「実戦テストにちょうど良いと思ったんだがな……」

黒いパイロットスーツに身を包んだジェリドは軽く笑う。

「ジェリドか」

「これはこれは……」

ジェリドは軽く口笛を吹く。

「懐かしい顔を見たな」

「元氣そうだな」

「あんた達ならば」

ジェリドは自分のパイロットスーツに刻まれているティターンズのシンボルを触りながら言い放つ。

「ティターンズの俺にタメ口を叩くのも許せるな……」

「全く……」

ユウが苦笑する。

「傲慢な男に俺は縁がある」

「フフ……」

ニムバスが皮肉げに笑った。

「では行くぞ、サマナ」

「グリーン・ノアへ？」

「今の俺たちの仕事だろう」

ジェリドの新型のガンダムに続いてサマナのジムも戦線を離脱していく。

「お元気で、ユウ」

「がんばれよ」

サマナのジムにユウはネティクスブルーの手を振った。

「ブルーの奴の行方はまだわからないか？」

「ああ」

ニムバスのギャプランの収集データを眺めながらアルフが呟く。

「もしかしたら」

今度はユウのネティクスブルーのデータを眺めながらアルフがぼそりと言う。

「エウーゴに入ったのかもしれない」

「ヘンケン艦長達のように？」

「今のティターンズに反感を持つものは」

アルフはネティクスブルーのデータを紙媒体に写しながら、タバコに火をつける。

「とても多い」

「だろうな……」

ユウはティターンズに入ったサマナの顔を思い浮かべる。

「特権階級だよ、ティターンズは」

アルフが軽く溜め息をついた。

「ジャミトフはどういう考えなんだろうか……？」

「わからない」

自分達の部隊の形式上の責任者である人物の名前を出したユウにアルフはタバコをくゆらせながらそう吐き捨てる。

「俺達もジャミトフ閣下の私兵と見られているのかな」

「どうかな……」

アルフはタバコを灰皿へポンと置く。

「モルモット隊は形式上は連邦軍だ」

「しかし責任者が……」

「全てティターンズ寄りだ」

アルフは軽く自嘲する。

「俺のオーガスタ研究所もティターンズに媚びを売っているよ」

「この部隊の新入りも」

ユウは年若い新人パイロット達の名前を言う。

「全てニュータイプ研究所とやらの出身だ」

「クルスト博士の呪いかもな」

「言うなよ……」

ユウは苦笑しながらも、その言葉にどこか納得できる自分に驚いていた。

「EXAMの呪いか……」

蒼い塗装をされたデミ・ニュータイプ専用機とも言えるネテイクスブルーを見詰めながらユウは顔をしかめて呻いた。

第12話 グリーン・ノアの少年

「ブライト艦長が来てるんだってさ!!」

「待ってよ、カミーユ!!」

グリーン・ノアの住人らしい少年と少女が空港の中を走っていく。

「サインを貰えるかもな」

「貰ってどうするのよ……」

「一年戦争の英雄だぜ……!!」

「知らないわよ……」

はしゃぐ少年に少女は不満げに言い返す。

「あれだ!!」

旅客船であるテンプレーションのあるステーションへ走っていく

二人。

「元気が良い子供だな……」

「何かあったのかねえ、カクリコン?」

テイターンズのパイロットとおもしき男女達はその走っている二人を面白そうに眺める。

「テイターンズかよ……」

少年がその黒いパイロットスーツに身を包んだ集団を見て、嫌な物を見たといったような顔をする。

「止めなさい、カミーユ」

「フン……」

二人はテイターンズのパイロットから目を反らす。

ガタツ!!

少女が転んで膝をつく。

「なにやってんだよ……」

少年が少女に手を貸す。

「カミーユが早いから……!!」

少女が文句を言いながら立ち上がる。

その様子を少し呆れたようにジェリド達が見つめる。

「カミーユ?」

ジェリドがぼそりと呟く。

「女の名前なのに男か……」

「何だと!？」

カミーユと呼ばれた少年がいきなりジェリドに殴りかかった。

「うお!？」

ジェリドは思わぬ事に驚き、その拳をもろに食らう。

「カミーユ!!」

少年の友人である少女が悲鳴を上げる。

「小僧!！」

怒りに顔を歪ませたジェリドはその少年を蹴りあげようとする。

ガツ!!

「サマナ!？」

ジェリドの蹴りを食らったサマナが顔を痛みでひきつらせる。

「なぜ邪魔をする!？」

「相手は子供だろう!？」

「先にそつちから!!」

「許してやれ!!」

少年とジェリドの間に入ったサマナがジェリドを説得する。

「ちっ!!」

忌々しそうに少年を睨むジェリド。

「命拾いしたな、小僧」

ジェリドはそう吐き捨てる、他のティターンズのメンバーと共に

立ち去っていった。

「大丈夫か？」

サマナが少年を気遣う。

「あんただってティターンズのくせに……!!」

サマナを鋭く睨みつける少年。

パンツ!!

少女が少年の頬を張った。

「フア!？」

「この人に謝りなさい!! カミーユ!!」

少年はしばし無言でファと呼ばれた少女とサマナを睨んでいたが、しぶしぶ無言でサマナに頭を下げる。

「ありがとうございます……!!」

少女が申し訳なさそうにサマナへ礼を言う。

「僕たちは嫌われ者だからね……」

サマナは二人にそう微笑むとジェリドたちの後を追っていった。

「クワトロ大尉」

「ん？」

クワトロと呼ばれたサンングラスの男が後方のリック・ディアスに振り返る。

「赤い色が好みなんですか？」

四機で編隊を組むリック・ディアス隊で唯一赤い塗装が施されている先頭のリック・ディアスを眺めながら、その女性パイロットは少し顔を綻ばせながら訊ねる。

「必ずしもそうではない……」

クワトロは苦笑しながら、前方のグリーン・ノアに視線を向ける。

「どちらかと言うと」

クワトロが肩を竦めながら女性パイロットの機体の方へ再び顔を向ける。

「君の髪の色の方が好みだよ……」

「お上手な……!!」

蒼い髪をした女性パイロットが大きな声で笑う。

「ハハッ……!!」

それにつられて他のリック・ディアスからも笑い声が響く。

「大尉のシンボルマークなのさ」

「へえ……」

僚機からそう言われた女性パイロットは不思議そうに首を傾げた。

「マークIIは最低でも一機は確保したい」

「了解……」

「多少はコロニーの被害もやむを得ない」

「任せて下さいよ……」

クワトロとリック・ディアス隊の男達のやりとりが女の耳に届く。

「赤い彗星か……」

女性パイロットは変な物を眺めるように、その赤いリック・ディアスに視線を向けた。

「ジャミトフ父さん……」

女は自分の父の顔を頭に思い浮かべながら、自分のリック・ディアスを駆った。

第13話 オールドタイプとニュータイプ

「だからなあ……」

「俺のせいじゃあない」

「わかっているよ……」

ブツブツ言いながらフィリップのアッシマーがユウのネティクスブルーを運ぶ。

「スーパーマグネットで落ちるとは思えないが」

「ネティクスの重さでアッシマーがヒイヒイ言っているぜ……」

フィリップの愚痴にユウは苦笑する。

「隊長は大変ですなあ」

ユウ達の後方を飛ぶジムⅡから皮肉げな声が響く。

「私は体重が軽いから……」

「それでもないよ、サラ」

サラと呼ばれたパイロットの機体を乗せたアッシマーからも苦情がくる。

「アッシマーの出力が落ちている」

「なんとかしなさい、シドレ」

「こればかりは……」

後方のアッシマーはそう言いながらも少しスピードを上げる。

「生意気な小娘だぜ」

「サラが？」

「そうだろうに……」

フィリップが全天視界モニターの後方に目をやりながらぼやく。

「よくこんな若いのがパイロットになれたな」

「ニュータイプらしいからな」

「ニュータイプ、ニュータイプと……」

「ブームだからなあ」

「俺たちオールドタイプの立つ瀬がないっての」

「そうだな……」

ユウも若い新人パイロット達の姿を見ながらどこか他人事のように

に眩く。

「時代の流れか……」

「ついていけねえな……」

ユウとフィリップ、二人のベテランはそろって溜め息をつく。

「このアツシマーと言い、ネテイクスとやらと言い……」

「昔のブルーデイスティニーとかの比ではないな……」

「一年戦争時のジムで戦ったら、一瞬でスクラップだぜ」

フィリップのぼやきは止まらない。

「隊長達は古い人間ですね」

「サラ……」

はつきりと言い放つサラをシドレがたしなめる。

「確かに生意気だな」

「だろ？」

ユウ達が笑う。

「ふん……」

サラはへそを曲げてしまったようだ。

「ん？」

ギーン……!!

「狙撃だど？」

ネテイクスブルーの横を通りすぎたビームを尻目にユウが眼下の雲に目をやる。

「だめだ、見えない」

「降下するか？」

再びビームが飛ぶ。

「おっと!？」

シドレが巧みにアツシマーを動かしてよける。

「もう少し丁寧!!」

「うるさい!!」

サラに怒鳴りながら、シドレはユウに指示をあおぐ。

「敵は少ないと思います」

サラが強く口調でユウに告げる。

「ニュータイプの勘か？」

「そう受け取ってもらっても構いません」

「ふむ……」

ユウは少し考え込む。

「カラバかな」

「エウーゴの地上組織か」

フィリップが呟く。

「仕方がない」

ユウはシドレに少し降下して様子を見ると告げた。

「テスト飛行だからな」

「本格的な交戦は避けろと？」

「ああ」

シドレにユウはそう言いながら、雲の中へ降下を始めた。

「降りてきたか？」

ハイザックのスナイパーライフルを少し下ろしながらカラバのパイロットは呟く。

「どうするかな……」

いたずら半分で手を出してしまった事を少し後悔しながら、そのパイロットは首を傾げた。

「まあ、いいか」

再びライフルを構え始めた。

周囲の狙撃用モビルスーツ達も武器を構え始める。

「カラバのようだなあ」

ユウは首を傾げながら米粒のように見える眼下のモビルスーツ部隊に目をやる。

「スルーパスするか？」

「うむ……」

ユウとフィリップが相談する。

「頼りない」

「だからね、サラ……」

不満げなサラを気遣うシドレ。飛んできた一条のビームを軽やかにかわす。

「不明機の姿だけは見よう」

「偵察か」

ユウの言葉にフィリップが頷く。

「フン……」

「何だよ、小娘」

「べつに……」

全く反りが合わないサラにフィリップは鼻を鳴らした。

「どうする、オグス？」

カラバの狙撃部隊のモビルスーツが隊長に声をかける。

「相手の数は少ない」

「うん……」

オグスは少し考えてから答える。

「やっぱり、止めとこう」

オグスがそうきっぱりと言った。

「上を取られてはまずい」

「だな……」

オグスは部下に地下の通路へ避難するように伝える。

「俺も収容所暮らして働がにぶったかな？」

苦笑しながらオグスのハイザックは地下通路へ走っていった。

「逃げていったようだな」

地表が見える辺りまで下降したユウ達の前で敵と思わしきモビルスーツ達が地下へ逃げていった。

「どうする?」

「何が?」

「ティターンズにでも伝えるか?」

「ほおっておけ」

ユウが事も無げに言い放つ。

「俺たちは連邦軍だ」

ユウはフィリップ達に再び上昇するように言う。

「ティターンズにもエウーゴにも肩入れはしたくない」

「日和見な事で」

サラが小馬鹿にしたように言う。

「サラ!!」

シドレが頭を抱えながらサラを叱る。

「すみません、隊長……!!」

「シドレちゃんの良い子だねえ」

フィリップが感心したように口笛を吹く。

「それにしても全く……」

「ティターンズにエウーゴ」

「それにニュータイプとやらかよ……」

ユウとフィリップは再び深い溜め息をつく。

「連邦軍のオールドタイプはつらいなあ、フィリップ……」

「情けない人達……!!」

「三十過ぎのロートルの愚痴ぐらい言わせてくれよ……」

とかく生意気なサラに昨日で三十の誕生日を迎えたユウが苦笑しながらそう答えた。

「俺たちがニュータイプ?」

アルフにユウが怪訝そうな顔で聞き返す。

「脳波データから」

アルフは資料を見せる。

「微弱ながら、ニュータイプが発する脳波が検出されている」

「実感はないねえ……」

フィリップが首を傾げる。

「ブルーの毒の後遺症かもしれないな」

アルフがニヤリと笑って言う。

「まさに呪いだな……」

ユウが顔をしかめながらそう呟いた。

「ニムバスの旦那はどうなんだ？」

「アイツは特別だ」

アルフが真面目な顔で答える。

「かなりの強化人間処置をうけているにも関わらず」

アルフが眼鏡を少し持ち上げる。

「強化人間の被験者によく出てくる精神面での不安定さが全くない」

「あいつはEXAMにも完全に適応出来ていたからな……」

「あいつからもニュータイプの脳波が検出されている」

「強化人間とは別の？」

「ああ」

ユウの問いにアルフは黙って頷く。

「本当になあ……」

フィリップが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「ブルーの毒、EXAMの毒とやらに冒されているのかいな……」

「真面目に俺はそう思い始めている」

「やれやれ……」

アルフの顔を見ながらフィリップは深く息を吐く。

「マリオンか……」

ユウは全ての因縁の元となった少女の名前を呟いた。

「早いところ、除隊してパン屋を開きてえな……」

「サイン入りの契約書があるぞ」

「忌々しいぜ……」

フィリップは本当に嫌そうな顔をする。

「それだけが楽しみでこんな仕事してんのによ……」

「あれ……?」

「どうした、ユウ?」

おかしな声を上げたユウをフィリップがじっと見る。

「あ、いやなんでもない」

「ふうん……」

フィリップはしばらくユウの顔を見ていたが、食事をしてくると言って部屋を出ていった。

「ユウ?」

アルフが首を傾げているユウに声をかける。

「俺は何のために連邦軍に入ったんだっけ……?」

「はあ?」

アルフが呆れたような声を出す。

「何で俺は今も連邦軍にいるんだ……?」

「大丈夫か? ユウ?」

心配そうなアルフに答えずにユウはしばらく黙って考えこんでいた。

第14話 大気圏激突

「パプテマス・シロッコ?」

ユウはティターーンズの指導者であるジャミトフ・ハイマンに聞き返す。

「木星船団の船長だよ」

「ジャミトフ閣下……」

「閣下、は止めたほうが良いかな?」

少し白髪が増えたように思えるジャミトフはそう言い微笑む。

「君はティターーンズではないからな」

「では大将……」

「やりづらいな……」

ジャミトフは少し肩を竦める。

「君に使者を頼みたい」

「なぜ自分に?」

「一応、君のモルモット隊は私の配下だろうか?」

「ティターーンズからの方が……」

「いないんだよ」

ジャミトフはそう言い、溜め息をつく。

「上手くあの男と話せる人間が」

「気難しい者なので?」

「傲慢なニュータイプらしいからな……」

ジャミトフが机の上の地球儀を指でつつきながら呟いた。

「何でいつも傲慢な男と……」

「縁があるんだろう」

ジャミトフがニヤリと笑う。

「傲慢なタイプの男と」

「命令でありますか?」

「もちろん」

その言葉にユウは少し苦笑いしながら承諾する。

「どのように会いに行けば……」

「もうじき、この地球圏に来るらしい」

「宇宙へ……?」

「君の部隊の小型ペガサス級で行けば良い」

「ブルーマリオンですか……」

「ああ……」

ブルーという名前を聞いて、ジャミトフは少し顔を曇らせた。

「ジャミトフ閣下」

「なんだ？」

ユウは結局「閣下」という名称でジャミトフを呼んだ。

「自分の部隊に居たブルー少尉の事です……」

「どうやら君は」

ジャミトフが席から立ち上がり、窓の外の夕陽を眺める。

「彼女が私の娘だということを知っているようだな」

「彼女からは内緒だとは言われましたがね」

「フン……」

ジャミトフは夕陽から目を離さない。

「あの馬鹿娘はエウーゴに在るとの情報がある」

「やはり……」

「知っていたか？」

「いえ、直接見た訳ではないので……」

ユウは少し顔をうつむかせる。

「仕方ないやっだ」

ジャミトフは軽くため息をつく。

「閣下も」

「何だ？」

ユウは無礼かなと思いつつもジャミトフに訊く。

「ひそかにご自身の娘様の事は調べておられるのですね」

「不祥事を起こされてはたまらんからな」

「もう起こしてしまわずに……」

「確かに」

苦笑しながらジャミトフは窓から離れて、椅子へ座る。

「まあ……」

机の上で手を組ながらジャミトフが微笑む。

「家庭の事情だからな……」

「さすがにそこまでは立ち入りはしませんよ……」

「ありがとう」

ジャミトフはそう言いながら、ユウに命令書の束を渡した。

「では、艦長」

ブルーマリオンの艦長であるミリコーゼフはそのシワだらけの顔を頷かせる。

「任せる」

「はっ!!」

ブルーマリオンが大気圏を離脱していく。

艦長は再び眠るように顔を伏せる。

「全く……」

操舵手のフェイブが半自動でブルーマリオンを動かしながら、艦長を呆れたようにみる。

「置物のような方だよ……」

「いいじゃない」

パイロットのシドレがフェイブの小声での愚痴に笑って答える。

「勝手にやらせてくれる」

「いざというときに大丈夫かな?」

「ユウ少佐がいるだろう」

シドレが傍らのサラにウインクをする。

「あの中年の方がよほど頼りない」

「まだ三十になったばかりでしょ?」

「充分オヤジよ……」

「フフ……」

相変わらずのサラの態度にシドレとフェイブは肩を竦める。

「ユウ少佐の事を信頼しておられるのよ」

通信士のミーリが口を挟む。

「だから艦長は置物をやつていける」

「何もしない事に価値があるのか」

「そうよ」

ブリッジからモビルスーツハンガーへの直通通路のドアが音を立てて開く。

ドアから出てきたニムバスが無駄話をしている三人へ近づく。

「あまり、変な内緒話はするんじゃない」

「ハッ!!」

金と銀で縁取られたパイロットスーツに身を包んだニムバスに三人は敬礼をする。

「大気圏の上空がなにやら荒れているようだ」

「エウーゴやティターンズですか？」

「少し機体の様子を見ておけ」

「はい」

サラとシドレが頷く。

「うむ……」

派手な服装のニムバスは慣れない義足を動かしながらハンガーへと向かっていった。

「成金みたいなパイロットスーツねえ……」

ミーリが呆れたようにニムバスの後ろ姿を見つめる。

「騎士だからねえ……」

フェイブがニヤニヤと笑う。

「目立ちたいんだろうさ」

「時代錯誤な」

そう言うフェイブにサラが吐き捨てるように言い放つ。

「お前達、少し身を引き締めろ」

もう一人の通信士のアフラが注意する。

「なにやら戦闘が起きておるな……」

ミリコーゼフ艦長の眩きにブリッジのクルーは少し顔を引き締め、持ち場へ戻った。

「エウーゴとティターンズか？」

「連邦の部隊も少し混ざっているようだな」

大気圏上空の宙域で練り広げられている大規模な戦闘を見ながら、ブルーマリオンは指定されたポイントへ艦を動かす。

「エウーゴが大気圏へ突入するつもりなのか？」

ユウがその大気圏上の戦いの戦線がブルーマリオンの方向へと接近してきたのに嫌な予感を感じながら、ニムバスに訊ねる。

「それよりも」

ニムバスが目視ですら確認できる戦闘中のモビルスーツの姿を見ながら呟く。

「戦闘に巻き込まれた時の事を考えた方が良いな……」

ニムバスが少し不器用に義足を鳴らしながらハンガーへと入っていく。

「だな……」

ミリコーゼフ艦長に後を頼み、ユウもニムバスの後をついていった。

ニムバスのギャプランがブルーマリオン周囲の空域を旋回して敵を威嚇する。ビームは放たない。

「ギャプランのこのスピードだけで威圧できるかな……？」

ニムバスは呟きながら白旗を持って浮上し、ユウのネティクスブルーへ声をかける。

「そのまま白旗を持ってブルーマリオンの上にいる」

「無茶なやり方だ……」

ユウのネティクスブルーはブルーマリオンのブリッジ上方で巨大な白旗を持ちつつ、艦と速度を合わせる。

ギイン……!!

エウーゴのジムの発展型とおもしき機体からのビームがネティク

スブルーの近くを通りすぎる。

「言わんこつちやない……」

「何とか護衛はしてやるよ」

「その機体ではなあ……」

フィリップのジムⅡがシールドを構えながらネテイクスブルーの近くを旋回する。

「昔のボールで宇宙へ出たときの事を思い出すぜ……」

「俺はジムⅡを見るとサイコ・ジムを思い出す」

「どちらにしろ旧式か」

ユウとフィリップは声を上げて笑う。

「呑気ですねえ」

艦からサラの呆れた声が聞こえる。

「あのな、サラちゃん」

サラに答えようとしたフィリップが近くをスルーパスしていったエウーゴの物とおもしき金色の機体を呆れたように見る。

「何だ、ありやあ……」

「もしもーし?」

「成金がエウーゴのパイロットにいるのかな?」

「おーい?」

サラがフィリップに声をかけ続ける。

「ああ、そうだった」

「女の子を無視するなんて」

サラがむくれたようだ。

「ええと、そうだ、サラちゃん」

「何です?」

「いざとなったらサラちゃんとシドレちゃんにも出てもらわなくてはいけないんだから」

「おとなしくしてろって事ですか?」

「ユウとニムバスが苦勞してんだよ……」

「はいはい……」

サラの言葉を尻目にフィリップは軽いため息をつく。

「最近の若い者は……」

「うわっ!!」

フィリップの愚痴をよそにネティクスブルーの近くを再びビームが飛ぶ。

ユウ機に僅かにビームがかする。

「その青い艦!!」

連邦の艦とおもしきサラミス級に所属している機体からユウに通信が入る。

「何をやっているか!？」

「巻き込まれたんだよ!!」

ユウがその女性パイロットに怒鳴りかえす。

「我々の援軍ではない?」

「使節だよ、単に」

「悠長な奴等だ……」

その旧式の改修機とおもしき赤いモビルスーツが率いる部隊はブルーマリオンに接近するエウーゴの機体に威嚇射撃を行う。

「テイターズにいいように使われる同軍のよしみだよ……」

「助かるよ……」

その連邦軍の部隊による威嚇攻撃でエウーゴの攻撃目標がブルーマリオンからそのサラミス級の部隊へとそれていったようだ。

「ふう……」

女性パイロットとの通信を切ったユウは軽く一息をついた。

ドウウ!!

エウーゴの物とおもしき白いガンダムタイプの機体がブルーマリオンへ衝突する。

「ダメージコントロール!!」

ブルーマリオンでミリコーゼフ艦長が指示を出す。

「非戦闘艦にぶつかった!?!」

少年ともとれるガンダムタイプのパイロットからの苛立つような声がかかる。

「よそ見をするとはな、カミーユ君!!」

ティターンズカラーである紺色に塗装された大きなヘルメット形の頭部が特徴的なティターンズの機体のパイロットが叫ぶ。

「あんたは話が解るティターンズだと思っていたけどな!! サマナ!!」

「君みたいな子供がエウーゴで戦うんじゃない!!」

「子供だと!!」

ガンダムのパイロットが激昂する。

「童顔の大人がよく言う!!」

「礼儀のない子供だ!!」

言い返すサマナ機に、ブルーマリオンを蹴りながら白いガンダムはビームライフルを放つ。

「マラサイは高性能であるよ!!」

マラサイと言う名前らしいティターンズの機体は身軽にビームを回避したあと、ふとガンダムがぶつかった艦を見て驚きの声を上げた。

「ブルーマリオン!?!」

「久しぶりだねえ、サマナちゃん」

フィリップのジムⅡが呑気に手を振る。

「フィリップさん!?! 何遊んでいるんですか!?!」

「仕事だよ…… サマナ……」

ユウから何か疲れたような声がサマナ機へ飛ぶ。

ギーン!!

サマナ機へエウーゴのリック・ディアスからビームが連射される。

「ああん!?!」

そのビームを放ったリック・ディアスの女性パイロットから驚愕の声が響く。

「ブルーのマリオン!?!」

「ブルー!?!」

「ブルーちゃん!?!」

「ブルーさん!?!」

旧モルモット隊のメンバーの声が一斉に重なった。

「え？ だって、ユウ達は連邦のはずでしょ？」

「なにやっつてんだよ!! ブルーさん!!」

エウーゴの白いガンダムからサマナ機へ再びビームが疾る。

「よそ見している場合ではないでしょうに!!」

「だって、カミーユ君!!」

ブルーは白いガンダムのパイロットに叫びながら、そのリック・ディアスをブルー・マリオンから僅かずつに後退させようとする。

「そっだよ!!」

ティターンズの別のマラサイがビームサーベルを構えながらガンダムへ突進する。

「よそ見をするな!! サマナ!!」

「すまない!! ジェリド!!」

ジェリドのマラサイが白いガンダムと切り結ぶ。

「ぶん殴られた借りを返すぜ!! カミーユ!!」

「いつまでも昔の事を!!」

「一方的に殴られてむかつ腹の立たない奴がいるか!!」

「執念深い奴!!」

ジェリド機のキックをカミーユは軽く受け止める。

「手伝え!! サマナ!!」

「少しは先輩に敬語を使え!! ジェリド!!」

「こんな状況で昔話に花を咲かせている人間に何で敬語を!!」

ジェリドの言葉にグツと言葉が詰まるサマナ。

「どうにも頼りない先輩だ……!!」

「わかったよ!!」

ジェリドに愚痴を言われたサマナは、律儀にマラサイの頭部をユウ機へ頭をたれるように傾けてから、エウーゴとの戦いの戦列に戻る。

「ユウ!! もしかしてあなたはティターンズに!？」

少し離れた宙域からブルーのリック・ディアスの少し怒ったような声がユウにかけられる。

「違う!! ニアミスだ!!」

「遊びに来た!？」

「そんなわけがあるか!!」

頭痛がしてきたユウは白旗をバツバツサと振り回しながらブルーへ答える。

「隊長の昔の女か?」

「ロミオとジュリエットかな?」

艦内から無責任なサラとシドレの声がした。

「うるせえ!!」

謎のストレスで胃まで痛くなったユウが艦内待機のパイロットに怒鳴る。

「何をやっているか!!」

呆れた声のニムバス機がそのスピードと体躯でブルー機を威圧する。

「とにかく下がれ!! ブルー!!」

ニムバス機から威嚇射撃がブルー機へ飛ぶ。

「ごめんなさい!!」

ニムバスの声にブルー機が艦から離れていく。

「全く……!!」

騒ぎを起こしたため、周囲にやってきたエウーゴとティターンズの部隊を苦々しげに見つめるフィリップ。

「シロッコさんとやらのいる艦はどこにいるんだ?」

「向こうからコンタクトがあると……」

フィリップにユウは答えながらも、周囲に密度を増してきた弾幕を憂鬱そうに見やる。

バアフォ!!

ブルーマリオンの近くのエウーゴ機が吹き飛んだ。

「またティターンズか!?!」

ユウの目前にギャプランとは違う可変モバイルアーマーが接近する。その機体は巨体に似合わぬ素早い動きで可変し、エウーゴの機体を切り裂く。

「ん……!?!」

ユウはそのモバイルアーマーの高性能さに目を奪われたが、次の一

瞬、そのモビルアーマーの周囲が虹色の空に包まれたのを見た。

「何だ……!?!」

そして次の瞬間、その機体の周囲の空域が漆黒に包まれた。

「宇宙よりも暗い闇……!?!」

ユウはそのモビルアーマーの性能よりもその「宇宙の色」に目を奪われる。

「ブルーマリオンだな?」

その可変モビルアーマーのパイロットから若い男の声がした。

「もしかして……」

「パプテマス・シロッコだ」

そのモビルアーマーがブルーマリオンの先頭につく。

「先導する。付いてきてくれ」

「ああ……」

ユウはミリコーゼフ艦長に伝えながらも、先ほど見た宇宙の色を思い浮かべる。

「万色にして、漆黒の宇宙の色か……」

ユウは前方のモビルアーマーに目を向ける。

「しかし……」

ユウは何か別の物をそのモビルアーマーのパイロットから感じた。

「懐かしい……?」

ひとりでユウの口からその言葉が走った。

「簡易型サイコミュの故障かな?」

ネテイクスブルーのサイコミュが故障したかと思いつながら、ユウは自機をパプテマス・シロッコの機体へと追従させていった。

第15話 ジュピトリスのニュータイプ

「ジャミトフ閣下からの親書は受け取ったよ」

「はい」

「御苦労であった。ユウ・カジマ君」

シロッコとユウは並んで立ちながら、地球圏と木星圏を往復する巨大輸送艦「ジュピトリス」から宇宙の景色を眺めていた。

「地球というものは美しいものであるな」

シロッコはそう言い、小さく見える地球に視線を向ける。

「私はその地球を守る為にティターンズへの協力は惜しまないよ……」

「なるほど……」

二人はしばし無言で地球を眺めている。

「シロッコ殿はニュータイプで？」

「そう言われている」

「ニュータイプがティターンズ思想に共感した……？」

「穿った見方だな……」

シロッコは少し肩を疎める。

「すみません……」

シロッコという人間から感じる妙なプレッシャーを少し疎ましく思いながら、ユウは言葉を続ける。

「ジャミトフ閣下が気にしていたもので」

「だろうな……」

ユウは少しだけ自分よりも背が高いシロッコを見ながら、頭を掻く。

「ティターンズはニュータイプには否定的ですのでね」

「ニュータイプはスペースノイドの哲学だからな」

「それでもティターンズへ協力を？」

「地球を愛する気持ちはニュータイプもオールドタイプも変わらんですよ」

含み笑いをしながらシロッコはユウにそう言い、ジュピトリスから

の宇宙の風景を眺める。

「ところでユウ・カジマ君」

「はい」

「君には家族はいるのかね？」

「ぶしつけですね……」

ユウは苦笑しながらシロッコの問いに答える。

「私は孤児でしたので」

「そうか……」

「なぜ、そんな事を聞くのです」

「いや……」

シロッコは少し微笑みながら答える。

「私も孤児であつたからな」

「ふむ……」

ユウもシロッコと並んでジュピトリスの窓から見える宇宙を眺める。

「ニュータイプの直感といつ奴ですか？」

「そうかもしれない」

少し首を傾げながらシロッコが頷いた。

ピリリッ……!!

シロッコの腕時計が鳴った。

「食事の時間だな」

シロッコはユウの顔を身やる。

「君は昼食は？」

「遅くに朝食を取りましたので……」

「そうか」

シロッコは懐からカロリードリンクを取り出す。

「ここで食事を取っていいかな？ ユウ・カジマ君」

「それが昼食ですか？」

ユウが少しからかうような視線を向ける。

「今日はこれから忙しいのでね……」

シロッコがカロリードリンクを少し微笑みながら振って、ユウの顔

を見る。

「食事に時間をかけられない」

「どうぞ……」

「うむ……」

シロッコはカロリードリンクを口につけながらユウに唐突に聞く。

「君は世慣れをしているのか？」

「なぜ、そう見えます？」

「世の中の人間は」

シロッコが微かに口を綻ばせながら話し続ける。

「私と顔を合わすと、なぜか皆が謎のプレッシャーを感じるみたいであるからな」

「俺も感じてますよ」

「の、わりには」

シロッコは空になったドリンクを手にユウを顔を眺める。

「君は平常心を保っている」

「慣れているんですよ」

「私のような人間にか？」

シロッコの勘のよさに呆れながら、ユウは頷く。

「あなたのようなエリート意識のある人間と縁があるんですよ」

「エリート意識か……」

シロッコは苦笑する。

「ただ、私には他人に見えない物が見えているだけだよ、ユウ・カジマ君」

「そうですか……」

ユウは笑いながら肩を竦める。

「大変だよ……」

シロッコが薄く笑った。

「ジャミトフ閣下によろしくな、ユウ・カジマ君」

「はい」

ユウはシロッコと軽く握手を交わした。

「気になる人間だな……」

去っていくユウの後ろ姿を眺めながら、シロッコは一人呟く。

「オールドタイプであり、俗人でもある男なのにな」

シロッコは少し首を傾げたあと、ジュピトリスの会議室へ向かって行った。

破壊され漂流しているエウーゴの小型輸送船を調査しながら、ユウは小声で呟く。

「シロッコ殿にニムバスに合わせてやりたかったな」

「あん？」

「何でもないよ……」

隣にいたフィリップにノーマルスーツ内で首を振るユウ。

「生存者はいないようだな」

「どうやら、モビルスーツを輸送していたらしいな」

ユウはフィリップと話しながら、艦内のハンガーへ入っていく。

「エウーゴの新型かな……？」

ジム系機体の特徴であるバイザー状の頭部をしたその機体を見上げながら、ユウは呟いた。

「ユウ隊長」

船外活動をしているサラから通信が入る。

「こちらにも生存者はいません」

「了解」

「それと」

サラが話を続ける。

「いくつかモビルスーツの残骸があります」

「原形は止めているか？」

「ええ、かなり」

ユウはその言葉を聞きながら、少し考える。

「艦長にモビルスーツを回収すると伝えてくれ」

「はい」

サラからの通信を終え、目の前のモバイルスーツを再び見上げる。

「持って帰るのか？」

「一応な……」

「シャープそうな機体だな」

モバイルスーツの外見の感想を言いながら、フィリップがハンガーの他の場所を調べ始める。

「おい、ユウ」

フィリップが全く破損していないコンピュータを発見した。

「お宝かもな……」

ユウが技術士官のアルフの顔を思い浮かべながら呟く。

「こつちにも」

紙媒体の書類が詰まったケースをフィリップが指差す。

「思わぬ収穫かな？」

「アルフの奴が喜びようだぜ」

「ああ」

ユウはミリコーゼフ艦長へ通信を入れた。

第16話 マス・メデイア

ピッ……!!

「二時になりました!! 今日もあなたに最新の話題をプレゼントする番組、ザ・ニュータイプの時間です!!」

明るい音楽とともに司会者と出演者が映し出される。

「今日は特別ゲストにおいて頂きました!!」

ワイドショーの司会者がゲストを紹介する。

「今日はフリージャーナリストのカイ・シデンさん」

司会者の隣のやや軽薄そうな顔立ちをした男が頭を下げる。

「地球環境保全団体テイターンズの対テロ部門の責任者であるバスク・オムさんにお越しに頂いております」

カイ・シデンというジャーナリストの反対側の席に座る背広を着たかなり大柄な男が続いて頭を下げる。

目が悪いのか、小型のゴーグルを掛けている。

「では、まずはカイ・シデンさん」

カイと呼ばれた男はバスクに質問をする。

「最近のテイターンズの軍備増強についてはいかにお考えですか？
バスクさん？」

「今の地球圏を守る為には必要であると思います」

「核兵器の準備もですか？」

その言葉にバスクは少し顔を歪めた。

「はて……」

「あなたはテイターンズの軍備面での最高責任者でしょう？」

カイが鋭い口調で言う。

「地球連邦軍本部であるジャブローの噂は聞いておりますよ」
「……」

バスクは無言でカイを見つめる。バスクの顔から少し汗が吹き出る。
「失礼、ライトが眩しくてね」

バスクはそう言いながら、ゴーグルを拭く。

「ジャブローにはエウーゴを撃退するために核兵器が配備されていたと聞きますが？」

カイからの質問にバスクは冷静に答える。

「あくまでもエウーゴがジャブロー連邦本部の人間に対して非人道的な扱いをした場合の交渉用としてです」

ジャブローに核が配備されていた事を認めるバスクの発言にスタジオがどよめく。

「しかし、結局は使われなかった……」

女性リポーターがそう呟くように質問をする。

「エウーゴの者たちは通常の部隊だけで制圧が出来ましたからね」

「しかし、核を使用する可能性はあったのでは……」

「我々ティターンズはそのような暴挙はいたしません」

バスクが微笑みながら、テーブルの上へと両手を組む。

「30バンチ事件でも我々が毒ガスを使用する準備があるとかないとか、根も葉もない噂が飛びましたがね……」

「30バンチ事件では」

カイが質問をする。

「鎮圧には非人道兵器は使用しなかったとはいえ、かなり強引な手法であったと聞きますが？」

「相手は武装した暴徒ですよ？」

バスクがその巨体の肩を竦める。

「作戦にあたるティターンズの兵達にも自衛する権利があります」

「平和的解決はできなかったと？」

「化学兵器の使用案を断固として認めなかっただけでも、我々ティターンズの高潔な志は理解していただけたと思っただけですがね……」

「では、毒ガス使用のプランはやはりあったと？」

カイが食い下がる。

「機密に関わる事なのでノーコメントとさせて頂きます」

微笑みながらバスクがテーブルのお茶に手をやる。

「今後のティターンズの方針は？」

女性リポーターがバスクに質問を投げかける。

「それについては」

テレビの司会者がスタジオの脇にあるテイターンズ指導者「ジャミトフ・ハイマン」の等身大POPを見ながら、話を続ける。

「ジャミトフさんと中継が繋がっております」

「ザザッ……」

やや音声が入る。

「こんにちは、皆様」

スタジオのスピーカーから初老と思わしき男の音がする。

「私は地球環境保全団体であるテイターンズの責任者を務めさせて頂いておりますジャミトフ・ハイマンと言う者であります」

スピーカーの音は鮮明である。

「さつそくですが、ジャミトフさん」

撮影カメラがジャミトフのPOPを中心に映し、司会者がジャミトフのPOPの隣へ寄りながら、POPの口の部分にマイクを当てる。

「今後のテイターンズの方針とは？」

「従来と変わりません」

ジャミトフもこのテレビを観ているのだろう。反応にタイムラグがない。

「地球の環境保全のために全力を尽くすのみです」

「エウーゴやジオン残党との戦闘行動も継続すると？」

「悲しいことです」

ジャミトフの声のトーンが下がる。

「我々人類は地球を守るために手を取り合わなくてはならないというのに」

「テイターンズの強権的な対応に問題があるのでは？」

女性リポーターが厳しく追及する。

「それは全くの誤解であります」

ジャミトフがキツパリと言う。

「テロリズムには断固とした対応を心掛けておりますが……」

「テイターンズは融和を望んでいると？」

「その通りであります」

ジャミトフの言葉がスタジオに響く。

「本来ならば、エウーゴの方々にも我々に対する誤解を解いてもらいたいのですよ」

「エウーゴとも和睦の用意があるത്?」

「もちろんであります」

「スペースノイドに対する心配りもあるത്?」

「同じ人類ではありませんか」

ジャミトフの声に少し笑みが入る。

「エウーゴの方々とは多少の御縁がある……」

僅かにその口調にからかいの色が含まれた気がした。

「人権保護団体クラブ様が運営していらつしやる、この当番組に出演させていただけるのも、我々ティターンズにとつては光栄な事なのであります」

そうジャミトフが自信ありげに言い放つ。

「と、言うことは」

カイが少しその言葉に食いつく。

「エウーゴはティターンズを誤解していると思ってもよろしいのですね?」

「はい」

「エウーゴは単にアンチ・ティターンズを主張している組織であると?」

「エウーゴの方々には」

ジャミトフが少し早口になる。

「テロリズムまがいの行為を一刻も早く止めて頂き、平和的に我々ティターンズと意見を交換して頂きたいとおもいます」

ジャミトフの言葉が終わる前に、スタジオに軽快な音楽が流れた。

「では、ここでCMに入りたいと思います」

司会者の言葉と同時にテレビの画面が切り替わる。

「よく言うよ……」

クワトロは苦笑しながら、ポップコーンを口にほおりこむ。

「いいじゃないか……」

「面白いか？」

「今は気分的にフリーだからな……」

クワトロの隣の男がピザを食べ始める。

「少しくれ、アムロ」

「そっちも……」

クワトロとアムロと呼ばれた男が食べ物を交換しあう。大音量で

CMが流れる。

「これがあれば貴方もニュータイプ!! ムラサメ研究所の協力を得て

開発した新感覚のスーパードリンク!! 君もアムロ・レイに!!」

「買わないか? アムロ?」

「何でだよ……」

クワトロにアムロは笑いながらテレビのチャンネルを変える。

「地球の未来を考えるティターンズ。今日のティターンズの活動は絶滅保護種であるマツコウクジラの生体の調査です……」

アムロは再びチャンネルを変える。

「悪のジオン帝国め!! この正義のガンダムでやっつけてやる!!」

「ガハハ!! このギレン様のスーパーMパワーに勝てるものか!! 行け!! ビグザムよ!!」

結局アムロは再び先程のワイドショー番組を見ることにした。

「全く……!!」

アムロは少し気だるげにテレビのリモコンをテーブルへ放る。

「いつも、ティターンズの宣伝ばかりだよ」

「地球圏のテレビだからな……」

「偏りすぎだよ」

「見慣れてるか?」

「ああ……」

二人の男達は笑いながら、巨大飛行艇「アウドムラ」の艦内ではばしの休息を楽しんでいた。

第17話 EXAMの墓標

「緩衝地帯か」

大きな夕陽が地面を赤く照らす中、ユウが荒れた荒野の中にポツンと立つ基地を見渡しながら呟く。

「交渉用の場所だな……」

フィリップがそう言ったあと、少し離れた場所にいるアルフに呼ばれてそこから離れていく。

「因縁の場所でもあるがな……」

濃い橙色の光の中、ユウは一年戦争時に作られた古い作りの小さな基地を少し懐かしそうに眺めた。

「連邦とカラバは必ずしも完全な敵対はしてはいない」

ユウの目の前に立つ地上のエウーゴとの同盟組織「カラバ」の男がそう言いながらユウと握手をする。二人の手を夕陽が赤く染める。

「俺たちは形式的にはジャミトフの揮下の部隊だ」

ユウが握手をしたまま呟く。

「形式的にはエウーゴも連邦の派閥の一つだろうに」

そのカラバの男も手を握ったまま話す。

「その理屈ならカラバと連邦の軍は敵対していないかな？」

「テイターズとエウーゴも形式上は単なる連邦軍内部の派閥抗争だよ」

「そう、形式的、にはね……」

そう言いながら、ユウとその男は笑い合う。

「まさか、一年戦争の英雄と会うことになるとはね……」

「連邦の宣伝に使われただけさ」

「ホワイトベースの阿姆ロ・レイか……」

ユウは目前に立つ男の顔を見ながら微笑む。

「あのアルフとか言う技術屋から聞いた」

阿姆ロ・レイが夕陽で赤く染まる、眼前の廃墟とも見間違える位に古い連邦軍基地を眺めながらユウへ口を開く。

「何を？」

「シミュレーションで俺に勝ったんだって？」

「一年戦争の時の話だよ……」

アムロが自分よりも年下と分かかって、ユウはあえて敬語を使わない。かえって失礼だと思ったからだろう。

「EXAMシステムか……」

「アルフから？」

「俺を仮想敵として開発されたシステムらしいな」

アムロが夕陽に目をやりながら軽く苦笑する。

「結局、全部おじやんだよ」

「良いんだか、悪いんだか……」

ユウの言葉にアムロは指で顔をなぞる。

「俺が一年戦争で戦っていた時は……」

アムロは今見える夕陽が気に入ったらしい。ずっと眺めながら話を続ける。

「ホワイトベースだけで戦争をやっていると思っていたんだがな」

「実際には英雄アムロ・レイの影に多くの兵士がいたってことさ」

「だな……」

ユウもその美しい夕陽を眩しそうに眺める。

「後の世になればなるほど、一年戦争の時の戦いの歴史が解ってくる」

「まるで、話が増えていくみたいにな……」

「ああ……」

二人は薄く笑みを浮かべながら夕陽に目を向けている。

「Zプラスはありがたく受け取っておく」

「まさに裏取引だな……」

「カラバの捕虜はすぐに釈放されるだろう」

ユウとアムロはあらかじめ渡された割り符を交換しあう。

「俺も今日はこちらにお泊まりだな」

「護衛は任せておけ」

「裏取引ゆえにかえって安全とはね」

ユウに対してアムロは肩を竦めた。

「では……」

ユウは少し離れた場所にいる男に目を移した。

「懐かしいだろう?」

ユウがその基地を見回して呟く。

「ああ……」

ニムバスがどこか複雑な顔で頷く。

「私がブルーデイスティニーの二号機を奪い去った場所だ」
「……」

「そして、クルスト博士を殺した場所でもあるな」

無表情のニムバスからユウは少し目をそらす。

「あの辺りで博士を殺したな……」

ニムバスが今は更地になっている場所へ目を向ける。

「お前は基地や俺達の部隊の人間も殺したな」

「ああ」

二人の男は目を合わせないまま、話を続ける。

「私が死者を吊っても」

ニムバス達を夕陽が強く照らす。

「彼らは喜ばないだろうな」

「まあな……」

ユウ達に夕陽で照らし出された人影が近づく。ユウがその近寄ってくる人影に気がついた。

「ブルー……」

エウーゴのパイロットであり、元モルモット隊のメンバーでもあったブルーが二人の男の元へ近寄ってくる。

「ジャミトフ閣下が心配しておられた」

「縁は切つてあるわ」

「心の縁は切っていない」

「詩人ね……」

ブルーが微笑み、近くにある瓦礫へ腰をかける。

「なぜ、エウゴに」

背後に人の気配を感じながらも、ユウが単刀直入にブルーに訊ねる。

「父の真意を確かめたいが為にね」

「なら、テイターズの方が？」

「あえて、テイターズと逆の勢力に入った方が」

ブルーがポケットからタバコを取り出す。

「より父の真意が解るような気がして」

「ふうむ……」

ユウは溜め息をつきながら、ブルーの話に頷く。

「バラバラになっちまったな……」

「モルモット隊がか？ ユウ？」

夕陽にフィリップとサマナの影も映る。

「一本くれないか」

「どうぞ……」

ブルーがフィリップにタバコを手渡す。

「僕はブルーさんとは戦いたくありません」

サマナがブルーの隣に座り、はつきりと言う。

「テイターズのくせに甘いわね、サマナ」

ブルーの口から煙が漂う。

「次に会うときは戦場かな……」

ユウの言葉に皆、無言でいる。

「では、ブルーさん」

サマナがブルーの顔を見る。

「ジャミトフ閣下へは特に言う事はないと？」

「わざわざそれを聞く為にやってきたの？」

「閣下の私情からきた命令ですね」

呆れたように言うブルーにサマナは軽く顔をしかめる。

「恐ろしい我らがテイターズのトップも人の親という事でしょうね」

「変わらないわね……」

ブルーの言葉はサマナの事を言ったのか、ジャミトフの事を言ったのかはその場にいる者達には判断できない。

「少し疲れたな……」

フィリップがボツリと呟く。

「俺もだ」

ユウが暗くなってきた空を見上げながら答える。

「俺は最近、何の為に戦っているのか解らなくなってきている」

「最近なあ」

フィリップがユウを見上げながら笑う。

「新兵がよくかかる病気になっちまってるんだよ、ユウは」

「軟弱だな」

ニムバスが少し鼻で笑うように言い放つ。

「お前達は何か戦う理由があるのか？」

ユウが旧モルモット隊の皆を見渡して尋ねる。

「俺はパン屋を開く為の退職金目当てだな」

「僕は地球圏の平和のため」

「私はニュータイプを越える騎士になるためだ」

「あたしは父の真意を確かめるため」

皆がハッキリと言い放つのに、ユウは苦笑する。

「俺だけが甘いのか……」

その言葉に旧モルモット隊の皆が笑う。

「では……」

サマナが立ち去っていく。

「もともと、軍務の合間をみて来ただけです……」

「あなたと戦わない事を祈ってるわ、サマナ」

ブルーのその言葉にサマナは苦笑いしながら立ち去る。沈んできた夕陽がサマナの影を長く伸ばす。

「では、あたしも」

「元気で……」

ブルーの影も夕陽は長く照らす。

「俺はアルフに報告をしなくちゃならねえ」

フィリップが落ちてきた夕陽に背を向ける。

「フウ……」

ユウはその場で腕を組みながら考える。

「人間はその道が別れるものなのかな……」

「最初から人間の生きる道は違うものだ」

ニムバスがユウと共に兵舎へと歩いていく。

「解り合えないものなのか？」

「解り合える」

ニムバスが強く言い放つ。

「私がお前とここにいる事が証明している」

「そうだな……」

「だがな」

ユウは兵舎の灯りを見ながら、ニムバスの言葉を聞く。

「解り合うからこそ、人は道を分かつ物だとも思う」

「ニムバス……」

ユウがニムバスの顔をまじまじと見る。

「何だ？ ユウ？」

「お前はもうすでにニュータイプを越えているのでは？」

「なんの……」

ニムバスは笑いながら兵舎のドアを開ける。

「まだまだ、マリオンの呪縛が続いている」

「呪縛するブルーか……」

「私の脳裏からマリオンが消え去った時に」

ニムバスは食堂へと足を運ぶ。

「私はニュータイプを越えるのであろうな」

「他者を越えるか……」

ニムバスと別れて自室へ戻るユウはニムバスの言葉を反芻している。

「ニュータイプへ近づこうとしているオールドタイプは何と言うタイプなのだろうな……」

自分でも何を言っているのかはつきりとは分からないユウは少し

自室で休もうと思った。変な疲れを感じたのだ。

第18話 紅き宇宙の心

「量産化が早いもんだな」

ジェリドはティターンズの新型ガンダム「ガンダムMk-II」の量産機を駆りながら、エウーゴの機体を撃退していく。

「バーザムの試運転にはちょうど良いな」

「油断するなよ、ジェリド」

「わかってるよ、マウアー」

マウアーと呼ばれた女性パイロットのバーザムもエウーゴの部隊を押ししていく。

「輸送艦にしては警備が嚴重だな……」

幾多のモビルスーツに囲まれているエウーゴの輸送艦を眺めながら、ジェリドは部下のバーザムの働きを眺める。

「増援は必要かな？」

「先程、近くの連邦軍の部隊に要請しておいた」

「おいおい……」

ジェリドのバーザムが少し後方へ下がって、ティターンズの部隊全体の様子を観察しながら呟く。

「ティターンズの下請け連中には頼りたくないっての……」

「近くに他の部隊がいなかったんだ」

マウアーが肩を軽く竦める。

「まっ……」

ジェリドがバーザムのハイ・ビームライフルを構えながら、再び戦線へ突入しようとする。

「増援が来る前に片付ければ良い話かな？」

「ん……」

マウアーが辺りの宙域を見渡している。

「どうした、マウアー？」

「あれを……」

マウアー機が遠くに光っている物を指差す。

「連邦の部隊か？」

「いや違う」

マウアーが険しい顔で答える。

「それにしても早すぎる」

「ではエウーゴの増援？」

「と、考えた方がいい」

マウアーの言葉にジェリドは軽く腕を組みながら唸る。

「撤退するか……」

エウーゴの警備部隊とその増援らしいモビルスーツの光を互に見やりながら、ジェリドは同僚のマウアーに訪ねる。

「輸送艦の中身が気になる……」

「あれほどモビルスーツを張りつかせているもんな」

「もう少し踏ん張ろう、ジェリド」

「おう……」

ジェリドは警備のエウーゴ部隊に対して優勢なティターンズのバーザム隊を少し後退するように指示を出す。

「どうした、ジェリド？」

攻撃部隊のバーザムから怪訝な声が返ってきた。

「エウーゴの増援だよ」

「全く……」

バーザム隊のパイロットは愚痴を言いつつも、ライフルでエウーゴ部隊を牽制しながら輸送艦から徐々に後退していく。

「あれは……」

マウアーが増援部隊を見ながら、少し身を引き締める。

「ジオンのモビルスーツだな」

ジェリドが目視できる距離まで近づいた増援部隊を見ながら答える。

「旧式を引っ張りだしたか？」

「でもないようだな……」

コンソールに表示される、増援部隊の先頭に立つ赤いモビルスーツの機動力分析データを眺めながら、マウアーが少し溜め息をつく。

「かなりの性能だと思う」

「俺達も運が悪いぜ……」

ジェリドはそう言いながらも、バーザムのビームライフルを赤いモビルスーツへ放つ。

「何よ、そのビームはき……!!」

赤いモビルスーツのパイロットから馬鹿にするような声がした。

「ちっ……!!」

ジェリドは突進してきたそのモビルスーツのビームサーベルを寸前でかわす。

「返しでな!!」

切り返してきたサーベルを今度はバーザムのサーベルで防ぐ。

「バーザムがパワー負けをしている!」

「アクシズのリゲルグをなめない事だな!!」

リゲルグというらしい機体からキックがジェリド機を襲う。

「ふっんっ!!」

そのキックを振動をスラスタを噴かせて機体に吸収させる。そのままリゲルグは凄まじいスピードで一旦ジェリド機から離れる。

「本当にエウーゴか!」

ジェリドのバーザムを赤いモビルスーツが遠距離から射撃する。

「アクシズ・ジオンの機体であるよ!!」

「アクシズ・ジオンの機体!」

ジェリドはその言葉に驚きながらもバーザムのライフルを連射する。

「ヘンテコなモビルスーツが!!」

ジェリド機の射撃を軽々とかわし、そのジオン製モビルスーツはグレネードを放つ。

「くそっ!!」

ジェリド機が間一髪でそのグレネードを回避する。近接信管でグレネードがバーザムの近くで爆発する。

「大した事はない!!」

ジェリドはそう自分を鼓舞すると、バーザムの出力を上げる。

ババッ!!

全身をミサイルで爆装した敵の増援部隊の機体がバーザム隊に対してそのミサイルを放つ。一機のバーザムが直撃を食らい、撃破される。

「ハリネズミが!!」

罵りながらもマウアーがその重武装モバイルスーツを狙撃する。

「まずい!!」

敵の増援部隊に呼応して、輸送艦のエウーゴの警備部隊が挟み撃ちをしかけようとしている事をジェリドの目の端が捉えた。

「アースノイドが!!」

リゲルグがジェリド機へ再び接近する。

バルカンで牽制しながら、リゲルグのサーベルを防ぐ。

「判断を見誤ったな!! ティターンズ!!」

「くっ!!」

リゲルグから勝ち誇ったようなパイロットの声がした。

ガアーン……!!

虚空からビームがエウーゴとアクシズ・ジオンの部隊へ飛ぶ。

「ティターンズの増援か!」

リゲルグのパイロットが苛立ったような声を響かせる。

青を基調とした塗装を施された、やや小型の艦から艦載砲が放たれ、艦の周囲からモバイルスーツ部隊が展開する。

「あの艦は……!!」

ジェリドが何度か見た事のある艦に目を向け、苦々しげに呟く。

「よりによってあいつらか……」

ジェリドは苦笑しながらも、敵の重モバイルスーツからのミサイルをバルカンで打ち落とす。

その脇を一機のモバイルアーマーが高速ですり抜けた。

「ちっ!!」

リゲルグは急接近してきた可変モバイルアーマーからのビームを間髪でかわす。

「どこかであったか、あの敵は……?」

可変モバイルアーマーであるギャプランを駆るニムバスは頭に軽い

違和感と微かな頭痛を感じながらも、そのままギャプランをリゲルグからスルーパスさせる。

「フリリッブ!!」

「リーダーはお前さんがやるってことか!？」

「他のは任せる!!」

ユウのネティクスブルーとフリリッブが率いるモビルスーツ隊が二手に別れる。

「あいつは!!」

ユウがフリリッブ達のマラサイを尻目に敵のリーダー機とおもしき機体へと牽制射撃をかける。

「ローベリアとか言うパイロットかよ!？」

ユウが見覚えのある機体を見て、軽く顔をしかめる。

「蒼い奴か!？」

リゲルグから怒気のこもった声が発せられた。

「無事か!？」

腕部のサブ・ビーム砲をリゲルグへ払うように撃ちながら、ジェリドのバーザムへユウ機が接近する。

「やはり、あんた達か……」

ジェリドが苦笑しながらバーザムのビームライフルを構え直す。

「ティターンズが連邦軍に助けられては沽券にかかわるな」

「だったら、少しはしっかりしろ。ティターンズ」

「言ってくる……」

ユウの母艦であるブルーマリオンからの支援射撃を受けながら、ニムバスのギャプラン。そしてフリリッブの率いるモビルスーツ隊がエウーゴとその謎の援軍と交戦状態へと入る。

「連邦の奴らにでかい顔をさせるなよ!!」

ティターンズのパイロットの掛け声と共に、バーザム隊も態勢を整え直し、隊列を組みながらニムバス達と連携をとろうとする。

「いろんな意味で厄日かな……」

苦笑いをするジェリド機ヘジオン残党の部隊が攻撃をかけた。ジェリドは身軽にその射撃をかわす。

「お前達」

ユウの静かな声と共にネティクスブルーから牽制の射撃がリゲルグへ飛ぶ。

「もはや、レッド・ジオニズムではないな？ ローベリアとやら」

「古い名前だな」

リゲルグのパイロット、ローベリアがからかうように笑う。

「エウーゴについた訳でもなさそうだな」

「どうかな……？」

ローベリアは肩を竦めたようだ。

ズウ!!

リゲルグが急加速してネティクスブルーへ接近する。

「その機体の弱点は解っているさ!!」

「スピードの事だな!」

「よくわかっていないじゃないか!!」

リゲルグのスピードにネティクスブルーは全くついていけない。ネティクスブルーの有線サイコミュがリゲルグへ飛ぶ。

「そんなサイコミュの出来損ないで!!」

しかし、その有線サイコミュはかなりのスピードでリゲルグを捉える。

ズオ!!

「少しはやるな!!」

有線サイコミュの射撃をかわした所へ、ユウの機体本体からのビームライフルがリゲルグの肩へ被弾する。

「サイコミュがキツイ……!!」

ユウはネティクスブルーの準サイコミュ兵器を使うたびに頭痛に見舞われる。

「ニュータイプでもないのにサイコミュなんてな!!」

「好きで使っているわけじゃない!!」

「連邦のモルモットか!」

「あらゆる意味で正解だよ!!」

リゲルグのビームサーベルと切り結びながら、ユウが変な感心をす

る。

「お前は何者だ!？」

「紅のローベリア!!」

一旦両機が離れ、ビームとグレネードが応酬する。

「何の為に戦う!？」

「戦闘の最中に哲学か!？」

「何年も戦いが出来る理由だよ!!」

ネテイクスブルーの有線サイコミュの内の一基が切り落とされる。同時にネテイクスブルーからのバルカンがリゲルグを叩く。

「野心であるよ……!!」

「何年も雌伏し戦える理由がそれだけか!？」

「悪いか!？」

簡易サイコミュシステムが起動し、ネテイクスブルーの機体速度が上がる。

「気まぐれなシステムだよ!!」

ユウが今頃になって動き始めたネテイクスブルーのシステムに悪態をつく。

「ジオンから掠め取った技術であろうに!!」

ローベリアが笑いながらサーベルでネテイクスブルーの左腕を薙ぎ払った。

「理念や人の心ではなく、野心のみで戦えるものなのか!？」

「それこそが人の心であろう!!」

リゲルグにネテイクスブルーが押されているのを見かねて、ジェリド機が加勢する。

「ユウ!!」

ジェリド機のサーベルがリゲルグを捉える。

「小癩な!!」

リゲルグが二機を同時に相手どろうとする。

カーアン……!!

「なに!!」

ユウとローベリア、そしてジェリドの周囲を紅い宇宙が覆った。

「これは……!!」

ジェリドが驚いた顔でその紅い空を見渡す。

「宇宙の色じゃないか……」

ローベリアが僅かな感動をにじませた声で唸る。

「紅い宇宙だと……?」

ユウとジェリドも呆けた顔で、そのどこか暖かさを感じさせる薄い紅色に包まれた宇宙を眺める。

「もうひとつの人の心……?」

ユウは唐突にマリオンの顔を思い出す。

「現実の宇宙を見ろ!! ジェリド!!」

ズア!!

ローベリア機をマウアーのバーザムが突き刺した。

「うわっ!」

瞬時に宇宙が漆黒の闇へと戻り、ユウ達は我にかえる。

「しまった……!!」

ローベリアがリゲルグから脱出しようとする。

「危ない!!」

ユウは咄嗟にノーマルスーツに身を包んだ小さなローベリアの身体をネテイクスブルーで覆う。

ズガア!!

直後にローベリアのリゲルグが爆発四散する。

「ちっ……!!」

ローベリアが憎々しげにユウ機を見上げる。

「若いな……」

ユウは自分よりも五つは歳が下と見えるローベリアに語りかける。

「南極条約は守るよ……」

「フン……」

捕虜に対する人道的な扱いが記載されている条約の事を持ちだし、ユウはローベリアをおとなしくさせようとする。

「ブルーマリオン」

ユウはブルーマリオンから内火艇を出すようにミリコーゼフ艦長

へ無線を入れて頼んだ。

「マウアー」

ジェリドが僅かに被弾しているマウアー機へ近づく。

「大丈夫か？」

「私は大丈夫であるが……」

マウアーのバーザムの指がエウーゴとアクシズ・ジオンのモビルスーツに固められた輸送艦を指す。

「もう襲うのは無理だな……」

「味方の損害も大きい」

「してやられたか……」

マウアーの言葉に対して、ジェリドが帰投するブルーマリオン部隊を見やりながら呟く。

「あの連中にも苦勞をかけた」

「少し挨拶をするか？」

「だな……」

ジェリドは連邦軍の公式無線回線を開いて、ブルーマリオンへ着艦の許可を得ようとした。

第19話 連邦の兵とテイターンズの兵

「なあんで……」

「ん？」

ブルーマリオンの食堂で遅い夕食を取っているテイターンズのパイロットが愚痴をこぼす。

「連邦の奴等の方が俺たちよりも良いメシを食べているんだ？」

「知らないね……」

反対側の席のパイロットはハンバーグを口にほおりこみながら粒く。

「なあ、あんた？」

「はい？」

近くで食事を取っているシドレへそのパイロットが話しかける。

「テイターンズのメンバーは地位が高いから食事に節制しろと言う意味かな？」

「さ、さあ……」

シドレは困った顔で辺りを見渡す。

「テイターンズだろうと、お客さんでしょ？」

遠くからサラがパイロットへ食ってかかる。

「勇ましい嬢ちゃんだな……!!」

そのパイロットが小馬鹿にしたように言う。

「俺と付き合わないかい？」

「バカにして……」

「いつまでも連邦の軍なんかいたら、嫁の貰い手がなくなるぜえ……っ？」

「ちよつと……!!」

サラの顔が怒りでひきつる。

「おい、やめろ」

食堂へ入ってきたジェリドがパイロットを止める。

「あまり、若い奴を苛めるな」

「俺たちはテイターンズだぜ？ ジェリドっ？」

「タダ飯を食わせてもらっている立場だろうに……」

ジェリドの声と同時に食堂のドアが開いた。

「どうしたんだ？」

「隊長!!」

サラが食事を取っているティターンスのメンバーを指差す。

「こいつらは礼儀を知りません!!」

「おいおい……!!」

サラをからかっていたパイロットが彼女の尻を撫でる。

「あんたは……!!」

サラが鬼の形相になってその男を睨む。

「いいから、止めてくれ……」

ユウが疲れた顔でその二人を止める。

「何かあったのか？」

「あつたんだよ……」

ジェリドの問いにユウは椅子にもたれかかりながら答える。

「あの捕虜のエウーゴだかジオンだかのパイロット」

「あいつが？」

「脱走しようとした」

ユウの言葉にティターンスのパイロットから口笛が吹かれる。

「さすがは連邦軍の甘さ」

「ティターンスがそんなに偉いの!？」

パイロットの皮肉に対して怒鳴るサラをシドレが止める。

「その捕虜がハンガーへ出て、あんたらティターンスのバーザムを盗もうとしたんだよ」

「おい……」

ジェリドが呆れた声を出す。

「そのバーザムにティターンスの女パイロットが入っているな」

「マウアーかな？」

ジェリドが首を傾げる。

「取っ組みあいになった」

ユウはコップの水に口をつけた。

「そのマウアーがコクピットから落とされて」

「大丈夫だったか？」

ジェリドが少し真剣な顔になった。

「下にフィリップがいて下敷きになった」

「物理的にも連邦はテイターズの下か？」

テイターズのメンバーから笑いが起こった。

「何て奴ら……!!」

「だから、サラ……」

サラを再び止めるシドレを尻目にユウは話を続ける。

「さいわいと言うか何と言うか……」

言いながらユウは胃に手をやる。

「そのバーザムは訓練飛行から帰ってきたニムバスの奴の機体にぶつかって取り押さえられたが」

「俺達の最新鋭機だぞ？ バーザムは？」

ジェリドの言葉を無視してユウは話を続ける。

「その時のショックでニムバスの奴の義足が壊れてね」

「いや、だから俺達のバーザムは……」

「激怒したニムバスがその捕虜に掴みかかった」

ジェリドを再び無視するユウ。

「おかげでハンガーがめっちゃくちゃだ」

「俺達のバーザム……」

ジェリドの声が少し悲しそうな色をおびはじめた。

「と思つたら、マウアーという女がブリッジへ殴り込んできた」

「なぜ？」

「フィリップの奴の上に乗ったときにセクハラをされたとか何とか言っていた」

「ああん？」

「ミリコーゼフ艦長へ抗議しにいったのさ」

ジェリドに答えながら、ユウがポケットから胃薬を取り出す。

「それで？」

ジェリドが胃薬を飲むユウを見つめる。

「艦長がどうにも曖昧な話し方でマウアーとやらを相手にしたせい
か、彼女の怒りの火に油を注いでね」

「アイツは怒ると怖いからなあ……」

ジェリドがどこか他人事のように呟く。

「ウチのミーリの奴がそのマウアーにな……」

ユウが再び胃を押さえ始める。

「私達に言いがかりをつけてお金が欲しいんだろ!？」

通信士であるミーリの口調をユウは真似をした。

「と、言いだしたもんで」

「良い度胸だ……!!」

ティターンズのパイロット達が笑う。

「キャットファイトの始まりさ」

「元気だねえ……」

ジェリドがフライドポテトを食べながらどこか呑気そうに言う。

「うちは艦長が置物だから」

ユウが溜め息をつく。

「俺に全責任が来るんだよ……!!」

「確か、あんたは少佐だっけ?」

ジェリドがユウへおかわりの水を差し出す。

「パイロットでは良い身分じゃないか?」

「プレッシャーが酷いんだよ……」

ユウが疲れた笑い声を出す。

「俺たちがもつと酷くしてやろうか?」

「おい、キッチマン……」

ジェリドにキッチマンと呼ばれたティターンズのパイロットはチキンバーガーを口へ運ぶ。

「ぶっ!!」

キッチマンが口に含んだバーガーを嘔き出す。

「何をする!! キッチマン!!」

目の前にいたティターンズの女性パイロットがその嘔き出された
食べ物をもろに顔に浴びた。

「バーガーがあ!!」

キッチンマンが厨房を覗む。

「フフ……」

厨房からサラが意地悪く嗤う。

「マスターアド!! 辛さがあ!!」

どうやらサラがバーガーにマスタードをたっぷり入れたらしい。

「ほら、水だ……」

「あの小娘……!!」

ジェリドに差し出された水をキッチンマンは一気に飲み干す。

「洗面台はどこ? 少佐さん?」

「その脇だよ……」

疲れきった顔のユウが指差す方向に、食べ物を顔に浴びた女性パイロットがブツブツ言いながら顔を洗いに行く。

「いてて……」

ユウの胃がまた痛くなってきた。

「隊長……」

シドレが胃薬を渡してくれる。

「大変だなあ、少佐殿?」

「お前も出世したら、じきにこうなるさ……」

「怖い怖い……!!」

笑うジェリドにユウは恨めしそうな視線を向けた。

第20話 アクシズ・ジオン

「嚴重だな……」

普段着に着替えさせられた明るい栗色の髪をした女ジオン兵の捕虜が周囲を囲む人間を見て、口を歪める。

「一人に対して四人か？」

「当たり前でしょ？」

サラが呆れた声を出す。

「脱走しようとしたしたんだから」

「隙がありすぎたからなあ……」

「生意気な女」

サラの視線にも捕虜の女は動じない。

懲罰室を臨時の尋問室としたユウ達はジオン残党の兵「ローベリ

ア・パゾム」を尋問している。

「アクシズ・ジオン？」

「復活したジオンさ」

ローベリアはユウ達に見張られながら食事を取っている。

「良いものを食っているな、連邦は」

「どうも……」

ユウは敵の艦で捕虜となっても全く臆する様子のないローベリアに少し感心した。

「気もきいている」

尋問にユウとニムバスの他にも女性のサラや通信士のミーリを同席させている事をローベリアは気にいったようだ。彼女は自らのセミロングの髪に軽く手を触れる。

「騎士道、とやらもあるみたいだからな」

ニムバスが皮肉げに口を歪める。

「あれだけ怒り狂って、今さら騎士道かい？」

「あのまま宇宙へほおり出したいくらいだった」

ニムバスの言葉にローベリアは鼻を鳴らす。

「私のジェントルマン精神に感謝するんだな……」

「フン……」

「笑ったな？」

「騎士だから、そんな派手なパイロットスーツか」

ニムバスに対してローベリアは不敵な笑みを浮かべる。

「しかしまあ……」

ローベリアが首を回す。

「よくも、今まで頭痛を起こさせてくれたもんだな、連邦の騎士様？」

「こつちも同じだよ」

「お前はニュータイプなのか？」

「人工的なニュータイプと言える」

ニムバスはそう笑いながら、本題に入る。

「アクシズ・ジオンとは結局は一体？」

「さつき言った通りだよ」

食事を終えたローベリアは首を傾げながら話す。

「ジオン公国の指導者であったミネバ・ザビを旗印にした正統なるジオンだよ」

「テロリストとは違うな？」

「国家と言えるほどの規模と体制だ」

その言葉にニムバスがローベリアの顔をじっとみつめる。

「なぜ、そこまでペラペラと喋るの？」

ニムバスが変わってサラが質問をする。

「口をつぐんでいても」

ローベリアは少し嘲笑うような顔をする。

「テイターンスズへ引き渡されたら、拷問で嫌でも口を割る羽目になるからな」

「見極めがいいわね」

サラがミーリと顔を見合せて笑う。

「俺は少しジェリド達と話してくる」

「任せて」

ミーリがウインクをして答える。

「エウーゴとの関係はどういう……」

ニムバスの声を尻目に、ユウはブリッジへと登っていった。

ジェリド達はブルーマリオンのクルー達とやや少し距離をとった場所へ立っていた。

「何かあったか？」

操舵手のフェイブへ小声で訊ねる。

「テイターズに決まっているでしょう……」

その言葉に通信士のアフラも小さな声で呟く。

「艦長へは一応敬語を使っていますがね……」

二人の不満げな声にユウは苦笑する。

「早く追っ払ってくださいや……」

「わかっているよ」

「もう、あんな騒動はご免ですぜ……」

フェイブの言葉に肩を竦めながら、ジェリド達の側へ近寄る。

「よう……」

ジェリドがフランクな感じにユウを呼びかける。

「あんたらは恋人同士か？」

ユウが親密そうに寄り添うジェリドとマウアーを見てからかう。

「あんたにはいないのか？」

ジェリドは肩を竦めながら、ユウに訊ね返す。

「はぐらかしたな……」

「フフ……」

ジェリドの隣のマウアーが軽く笑う。

「気になる女はいたんだがな……」

「連邦軍にか？」

「エウーゴに行っちゃったよ……」

「おやおや……」

ジェリドが少し意地の悪い顔をして笑う。

「気の毒だな」

「進む道が違ったのさ」

「道か……」

ジェリドが少し感慨深そうに頷く。

「テイターンズも最近、その進む道とやらで揉めている」

「ジェリド……」

マウアーがジェリドの袖を引っ張り、注意する。

「部外者にあまり内実は……」

「こいつらは連邦とテイターンズの間のようなもんさ」

「そうなのか？」

マウアーが訝しげに首を傾げた。

「サマナの奴の先輩でもあるしな……」

「元気か？ あいつは？」

「真面目にやっているさ」

ジェリドがブリッツジを見渡しながら答える。

「モビルスーツの腕はすでに俺やマウアーとかの方が上なんだが」

「そうになってしまったか……」

「だが、サマナには戦い方に隙がない」

「ベテランの凄さかな？」

「マニュアル通りを最大限に忠実であるっていうのは馬鹿にできないな」

ジェリドはそう言い、軽く笑う。

「では……」

ジェリド達は一応ミリコーゼフ艦長へ一礼をして、ハンガーへ降りようとする。

「ああ、そうだ……」

ジェリドはハンガーへの通路で立ち止まり、ユウに訊ねる。

「あのエウーゴだかジオンだかのパイロットと戦ったときのあの現象……」

「あの紅い宇宙か」

「あれはなんだ？」

ジェリドの問いにユウも答えられない。

「お前さんの機体の特殊機能か？」

「俺は昔……」

ユウはジェリドの直接の問いに答えずに昔の話をする。

「あの紅い宇宙とは少し違う、蒼い宇宙を見たことがあるんだ」
「もしかして」

マウアーが口を挟む。

「ニュータイプの世界というやつではないのか？」

「おいしい、マウアー……」

「あの時、あたしも一瞬見たんだよ……」

ジェリドが呆れたようにマウアーへ顔を向ける。

「ニュータイプはスペースノイド共のたわ言だぜ？」

「どうかな……」

ユウが口ごもる。

「ユウ、あんたは」

ジェリドが少し怒ったようにユウに詰め寄る。

「俺達がニュータイプだと？」

「わからんよ……」

「全く……」

ジェリドはため息をつく。

「しかしなあ」

ジェリドが紅い宇宙の事を思い出す。

「悪い体験ではなかったな」

「何か感じる物があったと？」

「なんというか、こう……」

ジェリドは自分のパイロットスーツのテイターンズのシンボルを
指で叩く。

「俺を肯定してくれる感じがした」

「ジェリドの肯定か……」

「俺のな……」

ジェリドがマウアーの顔を見ながら笑う。

「テイターンズの中でのし上がるという目標のな」

「全く、ジェリドは……!!」

マウアーが艶然と笑った。

「野心の肯定か……」

「野心は夢とも願いともし言い換える事も出来るわ」
「なるほどな」

マウアーの言葉にユウはあの現象の何かを掴んだような気がした。

「おい、ジェリド」

ティターズズのパイロットがジェリドへ近寄る。

「いつまで連邦軍なんかの艦にいらなくてはいけないんだよ？」

「もう終わったさ、カクリコン」

「早く帰ろうぜ……」

そのパイロットはぶつぶつ言いながら、ハンガーへ戻っていく。

「ではな、ユウ」

「サマナよろしくな」

「おう……」

ジェリドと軽く握手をするユウ。

「あの破廉恥な男に言っておいて」

マウアーが微笑みながらユウの顔を見る。

「フィリップか？」

「早くエウーゴに入れって」

「うん？」

「そうすれば、撃ち落とせるから」

マウアーの言葉にユウは乾いた笑みを浮かべる。

「世話になったな」

ジェリド達はハンガー内にある自分のモバイルスーツへと向かっていった。

—宇宙には心が満ちているの—

ユウの脳裏にマリオン・ウエルチの言葉が甦る。

「マリオンの言葉が全ての真実ではないのかもな……」

ユウはEXAMシステムの精霊であった少女の言葉を思い出しながら呟いた。

「あの子は今はどうしてるかな……？」

ハンガーから何やら、いさかいの声が出た。

「またウチの艦の奴とテイターンズの連中が喧嘩しているのかよ……」

溜め息をつきながら、ユウは最近持病となりつつある胃の痛みを堪えつつ、ハンガーへと降りて行った。

第21話 別れる道

「お前さんがこの前、漂流していたエウーゴの艦の残骸から手に入れたモバイルスーツだよ」

アルフがタバコをふかしながら、紙に書かれたデータをユウの手に渡す。

「解析した結果では」

アルフがパソコンのモニターにそのモバイルスーツのデータを映し出す。

「なんでも、エウーゴにZ計画という高性能モバイルスーツの開発計画があったらしい」

「あのモバイルスーツはその計画で作られたと？」

「というよりも」

アルフはパソコンを少しいじる。

「その高性能モバイルスーツの量産タイプ、その試作機らしいな」

「高性能機のマスプロ、その試作機か……」

「面白い機能が搭載されていた」

アルフが再びパソコンをいじりながら、ニヤリと笑う。

「エウーゴのサイコミュシステムだ」

「へえ……」

「バイオセンサーと言うらしい」

「バイオセンサー……」

ユウはハンガーに置かれているジム系統の頭部をしたその量産機を見上げる。

「俺にとって、いい刺激になった」

「新しいシステムでも開発しているのか？」

「今度見せてやる」

アルフはそう言いながら、もう一枚の書類をユウへ見せる。

「Zプラス？」

ユウがその配備予定表を見て眩く。

「カラバとの取引で手に入れたあいつだよ」

「ああ……」

ユウはその時に会った「アムロ・レイ」の顔を思い出す。

「一機をモルモット隊にくれるそうだな」

「フーン」

「嬉しくないか？」

「何と言うか……」

ユウがアルフの顔をニヤニヤと眺めながら口を開く。

「お前がそれに余計な手を加えそうな気がする」

「あたりだ」

アルフが椅子から立ち上がり、Z計画とやらの量産機を見上げる。

「ガンダムタイプの胴体とジムの頭を合体させると、どうなると思う？」

「やめてくれよ……」

ユウが顔をひきつらせる。

「ブルーの毒をブルーの毒でえぐるつもりかよ？」

「毒をもって毒を制すだよ」

「はあ……」

またしてもユウの胃が痛くなる。

「少し外へ出てくる」

「疲れているようだな？」

「お前が原因だろうか!？」

「フフ……」

嫌みのこもった笑みを浮かべるアルフにユウはげんなりしながら、基地の外へ出ていった。

「悪くはねえんだがよ……」

「その程度のリミッターでよく飛べるな」

ニムバスがギャプランのパイロットに通信機を使い会話をする。

「強化人間ではないだろうに……」

「確かにGはかなりのものだな」

宇宙空間をテスト飛行しているパイロットからの感想を聞きながらニムバスが訊ねる。

「他に気になる点は？ ヤザン？」

「山ほどある」

ヤザンと呼ばれたパイロットが不満げに答えた。

「動きが固く、戦いかたが単調になっちまう」

「だな……」

「だいたいな……」

ギャプランが小惑星に建設された基地へと帰投しようとする。

「モニターに死角があるぞ」

「リミッターの調整装置が場所をとっているんだな」

「どう使うかなコイツは……」

ギャプランが基地のハンガーへと入ってくる。

「お疲れ様です、隊長」

ヤザンの部下である二人のパイロットが声を上げる。

「おう、ご苦労」

二人へ声を返ししながら、コクピットからヤザンがニムバスの姿をジ

ロジロと眺める。

「良いパイロットスーツだな？」

コクピットから飛び降りながら、ヤザンがニムバスの派手なパイ

ロットスーツを笑う。

「騎士のスーツであるよ」

「俺も新調しようかね……」

ヤザンがニムバスを小突きながら笑った。

「充分派手なパイロットスーツでしょうに……」

飲み物を持ってきたサラがヤザンを見ながら顔をしかめた。

「ファッションだよ、ファッション」

ヤザンがサラからジュースを受けとる。

「嬢ちゃんも少しは身だしなみに気を使ったらどうだ？」

「別に……」

サラは無関心そうに答える。

「コスプレでもして乗ったらどうだ？」

ヤザンの部下の一人がサラを茶化す。

「メイド服なんかはどうだい？」

「猫耳とかな？」

二人の部下が顔を合わせて笑いあう。

「バカな男ばかり……!!」

不機嫌な顔をしたまま、サラはハンガーから去っていく。

「おい、ダンケルとラムサス」

ヤザンがギャプランの胴体を叩きながら部下の名前を呼ぶ。

「少し、模擬戦を手伝ってくれ」

「その機体にはやはり問題か？」

「生兵法だと危険な機体だ」

「了解」

ヤザンの部下が自分のモバイルスーツへ走っていく。

「せっかく貰った高性能機だからな……」

「任せたぞ」

コクピットが閉まるのを見ながらニムバスがヤザンに答える。

ギャプランのエンジンが動き始める。

「ニムバス」

ヤザン機とその部下のモバイルスーツが発進するのを見やりながら、

ユウがハンガーへ入ってくる。

「オーガスタ研究所へ帰る準備は出来たか？」

「改良したギャプランは予定通り引き渡したよ」

ニムバスはギャプランの軌跡を眺めながらユウに答える。

「本当ならあのローベリアという女の護送艦と一緒にいきたくったんだかな」

「おい、まさか……」

ユウの顔が綻んだのを見て、ニムバスの眉がひそめられる。

「そんなわけはないだろうが、馬鹿者」

ニムバスが呆れたように言い放った。

「まだ俺は何も言っていないぞ……」

「今の私は女にうつつをぬかしている時間などない」
「全く……」

ユウは肩を竦める。
「勘がよくなったな？」

「自分でもよくわからないさ……」

ニムバスがハンガーから自分の私室へ向かおうとする。ユウもそれを追いかける。

「オーガスタの奴らは良いサンプルだと喜んでいるよ」

「大変だな……」

「その事だが」

通路を歩きながらユウとニムバスは話を続ける。

「もしかするとな」

「うん？」

「私はブルーマリオンから立ち去るかもしれない」

「何故？」

ちようど自動販売機の前で二人は立ち止まった。

「オーガスタはな……」

ニムバスが販売機からジュースを買い、一つをユウへ手渡す。

「すまん……」

「オーガスタはあちこちに顔を売ろうとしているんだよ」

ユウの礼には答えず、ニムバスは自分の話を続ける。

「エウーゴにもか？」

「それだけではなく」

ニムバスはジュースの味に顔をしかめながら口を開く。

「何だ、この味は？」

「ムラサメ・ニュータイプドリンクだよ」

「こりゃ売れんな……」

ニムバスが缶ジュースの説明を見ながら、話を戻す。

「アクシズ・ジオン」

「ローベリアの言っていた組織だな？」

「その組織とも接触を持つようとしている」

「ジオンの残党に？」

「残党どころか」

ニムバスが険しい顔で話す。

「ジオンの再興と言っても良いくらいの規模らしいな」

「やっかいだな……」

ユウは以前にエウーゴに味方していたアクシズ・ジオンの部隊の事を思い出していた。

「そいつらとエウーゴは手を組んだか？」

「エウーゴの一部の派閥とな」

「エウーゴも分裂している？」

「あり得る話だ」

ニムバスが不味そうな顔でジュースを飲み終えた。

「エウーゴには元ジオンの者も多い」

「なるほど……」

そう言ったユウはふと、あることが頭に浮かんだ。

「まさかお前はそのアクシズ・ジオンへ？」

「お前も勘がよくなってるんじゃないかい？」

ニムバスが少し寂しそうに笑う。

「ごまかすなよ……」

「その可能性はあるんだ」

ニムバスが真剣な顔で頷く。

「私は強化人間だ」

「……」

「身体を維持するには何らかのニュータイプ研究所の支援が必要だ」

「オーガスタ研究所のモルモットか……」

「まあな」

二人はしばし無言でいる。

「もしも、本当にブルーマリオンから離れるなら連絡はするさ」

「ああ……」

ユウは自室へ向かっていくニムバスの背中をじっと見つめる。

「人は別れるものなのか……」

ユウは立ち止まったまま、以前にニムバスが言っていた言葉を脳裏に思い浮かべていた。

第22話 ブルーデイスティニー4号機

「ブルーデイスティニー再びかよ……」

「リメイクだよ」

「やると思ったよ……」

ハンガーにいるユウとアルフの目の前に蒼いモバイルスーツが立っていた。

「頭がZ計画の量産型」

ジムタイプのバイザー型の顔をした頭部をアルフが指差す。

「それより下がカラバから頂いたZプラスだよ」

「聞きたくないが」

ユウが昔のブルーデイスティニー1号機を彷彿とさせる機体を見ながら訊ねる。

「この機体の名前は？」

「ブルーデイスティニー4号機」

「却下だよ」

アルフがその言葉に悲しそうにうなだれる。

「やはりだめか？」

「また連邦の上の人間に目をつけられるような真似をしてどうするんだよ……」

「フフ……」

「俺の胃をこれ以上苦しめないでくれよ、まったく」

ユウの言葉にアルフが苦笑しながら、数枚の書類を取り出す。

「LION—Mシステム」

「リオン・エム？」

「あの頭の中に入っていたバイオセンサーは改良のしがいがあったよ」

「意味は？」

アルフが眼鏡を少し指で上げる。

L o n g i n g

Implement
Oldtype and
Newtype
Medium

(オールドタイプとニュータイプの願望実現媒体)

「大層な名前だな？」

「それをひっくり返して、M—LION」

「エムリオン・システムか」

「もつと良い呼び名があるだろうか？」

アルフが首を振りながらニヤリと笑った。

「何だ……？」

その言葉にユウはしばらく考えていたが、あることに気づき、顔をしかめる。

「マリオン……」

「良い名前だろうか？」

「どこがだよ……」

ユウはため息をつきながら、ブルーデイスティニー4号機を見上げる。

「モビルスーツの名前もシステム名も気に入らないな……」

「変えるか？」

「とりあえずはモビルスーツの名前だけでもな」

蒼いモビルスーツを見やりながら、ユウが呟く。

「よお、蒼い稲妻」

フィリップがハンガーへ入ってきた。

「よく覚えていたな、そんな呼び名」

「俺もついさつき思い出したばかりだよ」

「昔の、それも誰も呼ばなかった呼び名だったな」

「モーリンちゃんが考えてくれたんだったな」

フィリップが一年戦争時代のオペレーターだった女の子の名前を懐かしそうに言う。

「元気かな、あの子は……」

「さあなあ……」

「七年か、もうあの頃から」

「お互いに老けたもんだな」

「ああ……」

ユウとフィリップがお互いの顔を見合わせて、少し寂しそうに笑う。

「量産型Z計画機にZプラス……」

「ブループラウス」

「ほう？」

ユウの呟いた名前にアルフが反応した。

「悪くないな」

「ブルーデイスティニー4号機だけはまずい」

「ブループラウス、ブループラウスか」

アルフもその名前が気に入ったようだ。

「これで俺の地位も安泰だな」

「おやおや、これはこれはユウ中佐殿」

フィリップがニヤニヤとユウを見つめる。

「一応、俺は佐官だぜ？」

「ア・バオア・クーの戦いの後、二階級特進したんだったな」

「やはり来たか、と思ったよ」

ユウが苦笑いをする。

「機密に触れた人間を監視するための昇進だな？」

「佐官になった連邦軍人は監視をされる……」

ユウが昔聞いた規則を口にする。

「義務、が生じる」

「プライベートでも自由にはなれなかったな」

「何度か、監視員と目が合った事があったよ」

「大変だねえ」

フィリップとアルフが顔を見合わせて笑う。

「俺の上司の一人が」

ユウが自分達の艦であるブルーマリオンの方向へ顔を向けながら

話を続ける。

「ミリコーゼフ艦長になってから、少しは監視を緩めてくれた」

「やっぱりな……」

「知ってたか？」

「あの置物艦長が諜報部出身だという話を聞いた時から、なんとなく想像はしていた」

フィリップが艦長の顔真似をする。

「このオークリー基地のコウ副司令とやらも」

「何か厄介事に首を突っ込むハメになって、無理に佐官へ昇進させられたようだな」

「人の良さそうな方だったけどな」

ユウが一度モビルスーツの訓練に付き合ってくれたコウ副司令の顔を思い出す。

「ユウと互角ぐらいの腕だったな、コウ副司令とやらは」

「良い訓練になったよ」

ユウがブループラウスを見上げながら微笑んだ。

「テイターンスの分裂がいよいよ始まった」

フィリップが唐突に言い出す。

「ジャミトフ閣下も大変だな」

「アクシズ・ジオンのことは？」

「聞いている」

ユウが険しい顔をして頷く。

「ジオン公国の復活だ」

「テイターンスにとっても、連邦にとっても宿敵だよ」

「ゆえに、どこもかしこも意見が別れている」

フィリップが少し頭を押さえるような仕草をする。

「テイターンス内部でさえ、エウーゴと一旦手を結び、復活したジオンへ事を当たるべきという意見さえある」

アルフが二人に缶コーヒートを渡しながら話に加わる。

「ユウ」

「ん？」

「ニムバスとオーガスタ研究所の事は？」

「あいつから聞いた」

ユウがコーヒーを飲みながら答えた。

「もはや、テイターンズ、エウーゴ、連邦の三竦みだけで済む話ではない」

「泥沼化しているな……」

フィリップが大きくため息をついた。

「少し、空気を変えようか」

アルフの言葉に三人は表へ出ようとする。

「だから、俺はブループラウスとマリオン・システムを作った」

「泥沼を泳ぎ切るためにか……」

「あまり、考えすぎない方が良いかもしれんな、ユウ達」

「俺達がどうこう出来る問題ではないからな」

ユウとフィリップがアルフの言葉に同意する。

「目先の事をやるだけだよ」

「だな……」

表へ出た三人は夜更けの空を見上げる。

「マリオンか……」

ユウはブルーデイスティニーの精霊であった少女の名前を呟く。

「宇宙には心が満ちているの――」

「違うな」

ユウが脳裏に浮かんだマリオンの言葉に独り言で答える。

「心が錯綜しているんだよ……」

星空を見上げながらそう言ったユウは、ふと以前に出会ったパプテマス・シロッコの事を思い出した。

「何だ……？」

ユウはなぜ自分が木星往復艦ジュピトリスの艦長であり、ニュータイプであるシロッコの事を思い出したのか自分でもよく解らなかつた。

第23話 Z対Z

「やめろ!! カツ!!」

「彼女が!!」

新兵の少年がサラへつかみかかる。

「生意気なガキ!!」

サラも負けてはいない。シドレが例によって、どうにか仲裁しようとしている。

「わざと負けてやっただ?!」

「あんたに花を持たせようとしてやったんじゃないのよ!!」

「そんなに僕が弱いか!!」

「話にならないほどにねえ!!」

カツと呼ばれた少年とサラとの騒ぎを聞きつけたフィリップがハングーへ入ってくる。

「やめろ!! 二人とも!!」

フィリップが強引に二人の間に入る。

「僕はアムロさんにも勝ったことがあるんだよ!!」

「偶然でしょ!?!」

二人をどうにか引き剥がすフィリップ。

「仲良くしてやろうや……」

フィリップが苦笑しながら、やや威圧的に二人を眺める。

「はい……」

カツが不承不承といった感じでフィリップに頭を下げる。

「ろくでもない後輩だわ……」

サラはカツに軽蔑のまなざしを送りながら、自分のポリノーク・サマーンのコクピットへ入っていく。

「カツ、お前も自分のモビルスーツのチェックをしろ」

「実戦が近いと言うのは本当ですか?」

「そうではある」

その言葉を聞いたカツは嬉々としながら、自分の機体へ向かってい

く。

「僕の実力を証明させますよ」

「小僧が……!!」

その言葉を聞いたサラが嘲笑う。

「少し分不相応なんじゃないかねえ……」

カツのメツサーラを眺めながら、フィリップは一人呟く。

「シロッコさんとやらは、ユウのどこをそんなに気に入ったんだろうな……」

フィリップは首を傾げながら、ハンガーから立ち去っていった。

「なんで、あんな小僧がうちの部隊へ？」

「アムロ・レイの手引きだよ……」

ブリッジから見渡せる漆黒の宇宙をユウは眺めながら、胃薬を口にほおりこむ。

「最初はエウーゴに入ろうとしたらしいが」

「英雄であるアムロ・レイがうちを勧めたって本当か？」

「何でも、俺が信用できそうだって、アムロ・レイが勝手にジャッジしてしまったらしい」

「だから、ブルーマリオンにか」

「ストウラートだろうに？」

ユウのその言葉にフィリップが自分の頭を軽く叩く。

「改名したんだったな、艦を」

「大改修もされたからな」

「テイターンズが実験艦だったロンバルディア級を売ってくれたんだったなあ」

「もはや、ブルーマリオンの原型を留めていない」

ユウが新造艦と言っても良いストウラートの艦内を眺めながら呟く。

「ストウラート、成層圏ね……」

フィリップが新しい艦の名を怪訝そうな顔をして口に出す。

「地球と宇宙の間だ」

「オールドタイプとニュータイプの間という事か？」

「そういう意味合いだろうな……」

「生意気な嬢ちゃんにしてはハイセンスな名前だな」

フィリップが皮肉ともなんとも取れないような事を言う。

「一応、アイツはニュータイプらしいからな」

「ペーパーテストのニュータイプ判定だろ？」

「人に対して、ニュータイプだかオールドタイプなんて判断は誰もできやしないさ……」

艦名を決める時に艦内全員の人間で行われた「艦名命名コンテスト」で一位を取ったサラの顔を思い浮かべながら、ユウはハンバーガーを口に入れる。

「まあ、今はそれよりも……」

ユウがテリヤキバーガーの手がべとつく感じに顔をしかめながら、話を続ける。

「エウーゴと一戦構える羽目になるかもしれん」

「アーガマだな？」

フィリップがブリッジからわずかに目視できる、エウーゴの精鋭部隊と名高い艦の姿を眺めながら頷く。

「俺達の後ろにティターンズの基地がある」

「アーガマをほおっておくと、後でティターンズがうるさいか……」

フィリップの言葉にユウは軽く頷いた。

「ブループラウスの初実戦が、よりによってあの部隊か……」

「新兵もいるのにな」

ユウの愚痴にフィリップが肩を竦めてみせる。

「さて……」

ユウはバーガーを食べ終えると、艦長へ話しかける。

「会議を、艦長」

「うむ……」

大きくあくびをしたミリコーゼフ艦長が席から立ち上がった。

「俺は留守番か」

「頼む、フィリップ」

ユウはブループライウスの開いたコクピットからフィリップへ答える。

「シドレも頼むぞ」

「はっ!!」

律儀に答えるシドレをユウは頼もしそうに見る。

「カツとサラで大丈夫かねえ……」

「シロツコにテスト結果も出さないといけないんだよ」

ユウは数日前に会ったシロツコの顔を脳裏に浮かべる。

「それに……」

ユウはストウラートからすでに発進しているメツサーラとボリノーク・サマーンの姿を遠目に見やりながら、溜め息をつく。

「あのカツには一度、痛い目を見せたい」

「素質はあるみたいだがな、あの坊や」

「偶然と自分の実力の判断が全く出来ていない」

ユウの言葉にフィリップがニヤニヤと笑う。

「ちゃんと守ってやれよ……」

「俺は自分の胃を守りたい」

「ハハッ……」

フィリップの少しからかうような声にムツとしながらも、ユウはブループライウスを発進させた。

「敵機接近!!」

サラから通信が入る。

「アーガマの部隊は二機です」

「少ないな……」

ユウはブルーブラウスの様子を見ながら、サラへ答える。

「自信があるのかもしれないね、エウーゴは」

「ニュータイプの勘か？」

「それと、この強行偵察機の性能です」

サラが少し自慢げに言う。

「さすがはシロッコ様」

「一目惚れって奴だったかな？」

「ブルーマリオン、じゃなくてストウラートには居ない良い男の人だったから」

「シロッコもお前を気に入っていたな」

ウツトリしているような感じのサラにユウは苦笑する。

「素敵なお顔に溢れんばかりの才能、その上ニュータイプ」

「女たらしのニュータイプね……」

ユウはジュピトリスでサラを口説いていたシロッコの顔を思い出す。

「僕だってニュータイプです」

「何言っているんだよ、小僧」

負けじと言い放ったカツにサラは冷たく答える。

「メツサーラの大きさに似合わないチビの癖に」

「少し先輩でも、歳は同じ位でしよう!？」

「素人が生意気いうんじゃないわよ!!」

カツとサラの口喧嘩を聞きながら、ユウはまたしても自分の胃が痛くなるのを感じた。

「アムロもシロッコも……」

ユウは連邦軍としての自分の中途半端な立場を嘆きながら、ブルーブラウスを二人の機体の先頭へつく。

「俺を何だと思っているんだよ……」

ユウは自分達の部隊名「モルモット」の意味を、嫌というほど実感した。

「同型機!？」

ユウはアーガマから発進してきた一機を驚いた目でみる。

「出力は向こうの方が上です!!」

サラからの戦力分析の結果が報告される。

「Z計画の完成機かもな!!」

ユウは自分の身を引き締める。

ギーン……!!

戦闘機を思わせる形態へ可変したアーガマの機体がすれ違いざまにブループラウスへ射撃をくわえる。

「青いZガンダム!？」

その機体のパイロットとおもしき少年の声が響いた。

「やはりZ計画とやらの完成機のようなだ!! エウーゴ!!」

ユウはそう言いながらも、アーガマから出撃してきた、もう一機の機体へ目を向ける。

「サラ!!」

サラのポリノーク・サマーンからモビルスーツの分析結果が届く。

「重武装機です!!」

「見ればわかる!!」

緑色をしたその機体を見ながらユウは答え返す。

「火力が高そうだな……」

背中に大型ミサイルを搭載したその機体を目の端に捉えながら、ユウはどう戦うか考える。

「ユウ隊長!!」

緑色のモビルスーツから放たれたビームをかわしながら、カツが叫ぶ。

「隊長の同型機に背中をつかれました!!」

「よし!!」

ユウは戦法を二人へ伝える。

「可変機は俺が、緑色の重モビルスーツはお前達の二機であたれ!!」
「了解!!」

ユウはその返事を聞きながら、戦闘機を彷彿とさせるウェイブライ

ダーモードへ可変する。

「今回、マリオン・システムはまだ控えるか……」

ユウは古めかしい木材のカバーをされたシステムのスイッチを見やりながら眩き敵の可変機の後を追う。

牽制としてブループラウスはビームカノンをその機体へ放った。

「狙いが良い奴!!」

寸前でそのビームをかわした可変機はユウ機の背後へつこうとした。

「甘いぞ!!」

ユウは機体を急旋回させながら、モビルスーツ形態へ変形する。そのまま敵機へビームライフルを撃ち放つ。

「ジム頭のZガンダムが!!」

パイロットの少年も機体を変形させ、頭部のバルカンを放った。

「子供に負けるものか!!」

「カミーユと言うれっきとした名前がある!!」

「男のくせに女の名前か!!」

ユウはどこかで聞いた記憶があるエウーゴのパイロットの名前に少し気を取られながらも叫び返す。

「言ったな!!」

激昂した少年の叫びと共に、敵機はそのままユウのブループラウスへ肉薄する。

「Zガンダムの出来損ないが!!」

カミーユと言う名前の少年が乗る機体がユウ機へビームサーベルを振るう。

「さすがにZ計画とやらの完成機!!」

ユウも機体からサーベルを取りだし切り結ぶ。敵機の高い出力にユウ機は機体を押される。

「だが、パイロットが子供では!!」

ユウは熟練パイロットの技でZ計画の完成機、Zガンダムと言うらしい敵機のビームサーベルによる斬撃、刺突を上手くさばく。

「狡猾な大人め!!」

「ベテランと言ってほしい!!」

「地球へ寄生するオールドタイプが!!」

ガイン!!

Zガンダムofサーベルの出力が上がった。

「所詮は小細工だけで生きている大人!!」

「苦労はしている!!」

「賄賂と媚びで生きているんだろう!？」

「何だとお!!」

カミーユの嘲笑いにユウは頭へ血が昇る。

「上と下から突き上げられ!!」

ブループラウスとZガンダムのビームサーベルが交差する。ガア

!!

「右と左からはティターンズとエウーゴに挟まれて!!」

二機のビームライフルが応酬した。

「概念的にはニュータイプとオールドタイプに挟まれている!!」

ブループラウスがZに肉薄した。二機のサーベルが再び交差する。

「その苦悩がわかるかあ!! 小僧!!」

ブループラウスの出力が上がり始めた。Zがやや押され始める。

「なんてプレッシャーだ!!」

「俺が常に感じてるプレッシャーの方が強いわ!!」

驚くカミーユにユウが怒鳴り散らす。

「こうなったら!!」

ブループラウスが一旦Zから離れる。

「お前もろとも、そのアーガマを胃薬のビンにしてやる!!」

「器だけで中身の無いものが何を!？」

「中身は連邦が支給してくれる!!」

「連邦に頼らないと中身が得られない、情けない大人!!」

Zガンダムから強力なビームライフルがブループラウスへ飛ぶ。

「そんな大人!! 修正してやる!!」

「お前に俺の胃が修正出来るものか!!」

Zが可変して、ブループラウスの周囲を旋回し始める。

「こちらとて!!」

ユウのブループライウスも可変し、Zガンダムを追尾する。

「ユウ中佐!!」

通信士のアフラーがモニターへ浮かぶ。

「停戦命令です!!」

「こんな時にだど!!」

ユウはZガンダムから目を離さずにアフラーの通信を聞く。

「どこから!?!」

「ティターンズからです!!」

「のほほんと見てた癖に!!」

ユウははるか後方のティターンズ基地へ目を向ける。

「カミーユ!!」

「レコアさん!?!」

「艦へ帰還しなさい!!」

どうやら、エウーゴの方へも命令があったようだ。

「もう少しでオバサンを仕留められたものを!!」

サラが敵の重武装機を睨み付けた。

「小娘にこのパラス・アテネが倒せると思ってた!!」

「パラス・アテネ!?!」

サラが驚いた声を上げる。

「シロッコ様から貰ったのか、オバサン!?!」

「シロッコを知っているの!?!」

「あたしの未来の旦那様!!」

「ああん!?!」

敵の重武装機からミサイルがサラへ放たれた。

「ヒステリーな!!」

サラは嗤ってそのミサイルを撃ち落とす。

「ちよつと!!」

カミーユのZがミサイルを放った機体へ接近する。

「停戦命令でしょう!! レコアさん!!」

「あの小娘が!!」

何か逆上しているらしいパイロットが乗るパラス・アテネとか言う名前らしい機体をカミーユは無理矢理引っ張る。

「何をやっているんですか、もう……」

アーガマから二機のモビルスーツが暴れるパラス・アテネを引っ張る為に飛び出てくる。

「おや……?」

ユウはその出てきた内の一機のモビルスーツに見覚えがあった。

「量産型Zガンダムか」

自分のブループラウスの原型機を興味深そうにユウは見つめる。

「む……?」

その量産型Zがユウの方へ向いた。

「もしかして、ユウかしら?」

「ブルーか」

ユウは少し懐かしそうに顔を緩める。

「新型のブルーデイスティニーかしらね、その蒼い機体?」

「その名で呼ぶな……」

笑いを含んだブルーの問いにユウは眉をひそめた。

「お互い、停戦命令が出て良かったわね」

「ああ」

アーガマに引きずられるパラス・アテネを見やりながら、二人は通信をし合う。

「停戦命令とは……?」

「あれよ……」

ブルー機がある方向を指差す。

「赤い艦隊……」

ユウは遠くに微かに見える、何隻もの艦が連なる大艦隊をじつと見つめる。

「アクシズ・ジオンの艦隊よ」

「なるほどね……」

ユウはブルーに別れを告げて、部下の二機へ帰還するように声をかけた。

「もう一歩だったのに」

カツが悔しそうに呟いた。

「メツサーラの推力に引きずられてただけでしょ」

「何だって!?!」

再び始まったサラとカツの喧嘩を無視して、ユウは赤い艦隊へ目をやり続ける。

「ユウ」

通信士のミリーリから連絡が入る。

「ネオ・ジオンから使者が来ているわ」

「ネオ・ジオン?」

「アクシズ・ジオンの正式名称みたい」

「ネオ・ジオン……」

見ると、その赤い大艦隊へ後方のティターンズ基地からも複数の艦がやってくる。

「新しいジオンか……」

ユウは溜め息をつきながら、ストウラートへ帰還しようとした。

第24話 ネオ・ジオンの艦

「事前通達ぐらいしてほしかったな……」

「私達に目が行かなかったんでしようね」

隣の席同士のユウとブルーが肩を竦め合う。

「お互いに小さい部隊の小さい小競り合いだったから」

「所詮はお偉方だな」

「皮肉が上手くなつたもんねえ」

呆れたようにブルーがユウを見る。

「ブルー」

「何？」

「久しぶりに父に会った感想はどうだ？」

「だから、縁は切つていると言っているでしょう……」

ネオ・ジオンの超弩級戦艦「グワダン」の謁見の間にある客席の最後尾にいるユウとブルーは、最前列にいると思われるティターンズ指導者「ジャミトフ・ハイマン」の姿をどうにかして見ようとする。

「しかし、広いな……」

「アーガマどころか、ティターンズのドゴス・ギア級すら凌ぐわね……」

グワダンの謁見の間はあまりにも広く、その上に人で埋まってもいするため、玉座へ座るネオ・ジオンの総帥「ミネバ・ラオ・ザビ」の姿は見えない。

「俺たちは場違いだな……」

「一応、お情けで参加させてもらったようなもんだから……」

「サマナの奴は出世したなあ……」

ジャミトフの近衛の一人を務めているサマナの姿を見たユウは軽い溜め息をついた。

「ティターンズは得だねえ」

「情けない事言わないでよ、ユウ」

少し前の方が騒がしくなる。どうやらネオ・ジオンの「謁見」とやらが始まったようだ。

「拡声器ぐらい使えよ……」

静まり返った謁見の間にミネバの側近らしい女の声があるが、ユウ達には届かない。

「本当になんのためにここに居るのか、分からないな……」

「ユウ、うるさい」

「はいはい……」

ブルーに睨まれて、ユウは口を閉ざす。しばらく前方でやりとりがあったらしいが、もちろんユウ達にはわからない。

「ん……う？」

何やら騒ぎが起こったようだ。

「クワトロ大尉……？」

「エウーゴの代表の一人だな？」

「ええ」

ブルーがどうにか最前列のその声を聞いたようだ。何か怒鳴りあっている様子だ。

「喧嘩か？」

ユウはどうかして、その声を聞こうとする。しばらく騒ぎがあったあと、最前列のエウーゴ代表達が謁見の間の中央通路を早足で立ち去っていく。

「クワトロ大尉よ」

ブルーがそう呟く。

「どうする、ブルー？」

見ると、エウーゴ側の人間がクワトロと続いて立ち去っていくのが見える。

「あたしも帰るわね」

「ああ……」

ブルーは足早にクワトロ達の後を追っていく。

「交渉が決裂でもしたか？」

ユウは人波が少し無くなってきたため、見やすくなった謁見の間を眺め回す。

「ジャミトフ閣下とシロツコか」

ティターンズ側の二人の男がネオ・ジオンの代表格の人間と話し合っているのをユウは見る。

「一応、連邦の人間もいるな」

太った感じの連邦の高官の姿をユウは目の端で捉えた。しばらくすると、ネオ・ジオンの人間がユウ達後方の席の者へ近寄ってくる。

「貴官たちはもう退出するように」

ネオ・ジオンの男はやや高圧的に言う。

「これから、上層部同士のみ話し合いがある」

その言葉を受けて、後方の席の人間が謁見の間から出ていく。

「俺も帰るか……」

ユウも足早に謁見の間を出ていこうとした。

「ネオ・ジオンの連中は何を考えているんだか……」

ユウはグワダンの中で何故か食堂だけ連邦やティターンズ、エウーゴの人間に開放されていることに苦笑いをする。

「まあ、良いか……」

ユウはせっつかくなので、グワダンの食堂で食事を取ることにした。

「俺と同じことを考えている奴は多いんだなあ……」

ちらほらと連邦だかティターンズ、エウーゴの人の姿が見える食堂を見渡しながら、ユウは蕎麦をすすする。

「自白剤でも入っていないだろうか？」

意外と美味しい蕎麦をすすりながら、ユウは妙な独り言を言う。

「入ってないぞ」

「うん？」

目の前のジオンの人間と思わしき男が答える。

「それは失礼……」

「久しぶりだな」

「何？」

ユウは蕎麦をすすする手を止め、男の顔を見つめる。

「悪い、誰だ？」

「無理もない」

男はラーメンを食べる手を止めて微笑む。

「直接、顔を会わせたのは初めてだからな」

「うむ……？」

ユウは首を傾げながら考える。

「ブレニフ・オグスという名に聞き覚えは？」

「ああ……」

ユウは軽く微笑む。

「久しぶりだな」

「まあ……」

初めて実際に顔を見るジオンのエースはユウと同じか少し上の歳に見えた。

「一年戦争のア・バオア・クーから、どういう生き方をしていた？」

「ええと……」

オグスはラーメンをすすりながら答える。

「レッド・ジオニズムでお前に捕虜にされた事は覚えているな」

「ああ」

ユウも再び蕎麦をすする。

「そのあと、捕虜収容所を脱走して」

「ふむ……」

「しばらくはカラバにいた」

「なるほど」

ユウはコップの水を飲む。

「言うまでもないが、俺は元ジオンの人間だな」

「わかっているよ」

「カラバへは充分に礼を返した」

「それで、宇宙へ上がってきたか」

「ジオンが恋しくなったのさ」

ラーメンを食べ終えたオグスはそう言いながら席を立つ。

「戦場で会わない事を祈っているよ……」

「こつちこそな」

オグスは食堂のカウンターへどんぶりを返しに行った。

「ジオンの再興か……」

ユウは伸びた蕎麦をすすする。蕎麦を食べながら、ユウの脳裏にふとニムバスの顔が浮かんだ。

「何でゲームセンターまで開かれているんだ？」

ユウは苦笑しながら、ゲームセンターの中へ入っていく。明るい店内に入ったユウはそこで信じられない顔を見た。

「ジャミトフ閣下……」

「ユウ中佐ではないか」

数人の護衛に囲まれたジャミトフがゲーム機の前に立っている。

「何をしておられるので……」

「視察だよ」

ジャミトフは含み笑いをしながら、並んでいるゲーム機を眺める。見ると、サマナがゲーム機の前に座っていた。

「こういう肌で感じる空気が大事なのだよ」

よく見ると、ジャミトフの目は笑っていない。周囲の環境を観ているようだ。

「失礼……」

ユウはジャミトフに一礼をして、サマナの近くへ来る。

「調子はどうだ？」

「冗談じゃありませんよ……」

ゲームをやりながら、サマナが顔を歪める。

「後ろに自分の組織のトップがいて、ゲームをやる以上の拷問がありますか？」

「ジャミトフ閣下がやれと？」

「一言、ゲーム機の名前を呟いたのが運の尽きでしたよ……」

コソコソ話し合う二人をジャミトフとその護衛が面白そうに眺めている。

「ジャミトフ閣下」

奥からシロッコがやってくる。

「やはり、艦全体が盗聴器の塊のような感じですか……」

「全ての話は筒抜けか」

「今の我々の会話もですよ……」

シロッコがユウに気づいたようだ。

「ユウではないか？」

「あなたまで来ていたとはな……」

「フン……」

シロッコは鼻を鳴らしながら、ジャミトフの方へ顔を向ける。

「少し彼と話をしてもよろしいですか？」

「あまり時間はないがな」

ジャミトフが自分の懐中時計を眺める。

「少し来てくれ」

そう言いながらゲームセンターから出ていくシロッコにユウはついていった。

「いるか？」

シロッコがチョコレートバーを差し出す。

「何ですか、これは？」

一応、ユウよりもシロッコの方が上官にあたる。ユウは敬語で答えた。

「クレインゲームで手にいれた」

「呑気ですか……」

「クレインゲームとは難しいものだな」

少し不満げなシロッコをユウは面白そうに見つめる。

「メツサーラとポリノーク・サマーンの様子はどうか？」

「役にたっていますよ」

ユウはシロッコがくれたチョコレートバーを食べながら、部下のサラが言っていた事を思い出した。

「シロッコはエウーゴへも機体を？」

「まあな……」

シロッコは窓の外の宇宙を見ながら、悪びれる様子もなく答える。

「エウーゴの中に、なかなか気になる女がいたのですね」

「大丈夫なのですか？」

「単なる裏取引だよ」

シロッコが軽く微笑む。

「エウーゴからも見返りは頂いた」

「なるほど……」

ピリリッ……

シロッコの時計が鳴る。

「もう食事の時間か」

シロッコが懐からカロリードリンクを取り出す。

「好きなのですか？ それは」

以前にもシロッコがそのドリンクを飲んでいた事をユウは思い出
す。

「食事に手間や時間をかけるのは好きではないのだ」

シロッコがユウと並んで、カロリードリンクを飲み始める。

「お互い不作法ですな……」

チョコレートバーを手にユウが呟く。

「構うもんか」

シロッコは不敵に笑い、ドリンクを飲み干す。

「どうせ、艦内の全ての会話や行動はハマーンに筒抜けなのだよ」

「ハマーン？」

「ネオ・ジオンの実質的な指導者の女だよ」

「ふむ……」

ユウはシロッコの言葉を耳に入れながら、辺りを見渡す。

「全て監視されているのか」

「今の地球圏の人間の事を知りたいのだろうか」

ゲームセンターや食堂を指差しながら、シロッコが呟く。

「なにしろ、七年も地球から離れていたからな……」

「なるほど……」

ユウとシロッコはドリンクなどのゴミを屑籠へ捨てながら艦内を歩く。

「先ほど、ジャミトフ閣下達とエウーゴのブレックス代表の一行がすれ違ってな」

「大丈夫だったか？」

「お互いに、見てみぬふりをしていたよ」

「ハハ……」

「見物だった」

シロッコはユウに面白そうに笑いかけた。

「ところで、ユウ」

「はい」

「そのエウーゴの一行の中にいた女兵士に、ジャミトフがあえて目を合わせないようにしていてな」

「ん……」

ユウはその言葉に軽く唸る。

「彼女はジャミトフ閣下の娘らしいな」

「知っていたのですか？」

ユウの驚いた顔をシロッコは意外そうに見つめる。

「そうだったのか、ユウ？」

その言葉でユウはシロッコの意図に気づいた。

「俺を嵌めましたな……」

「カマもかけてみるもんだな……」

シロッコが薄く笑った。

「閣下の娘がエウーゴにね」

「言わないでくださいよ……」

「フフ……」

シロッコの思わしげな笑いにユウは肩を竦める。

「映画館か……」

シロッコが開放されている映画館を眺める。

「一緒に見ないか、ユウ？」

「嫌ですよ……」

「さっきの貸しがあるぞ？」

「本気ですか……？」

「冗談だよ」

シロツコは笑いながら、時計に目を向ける。

「ジャミトフ達の所へ戻る」

「元気で、シロツコ」

「サラによろしくな」

「女好きですな……」

「可愛い奴だったからな」

苦笑するユウを尻目にシロツコが足早に去っていった。

「全く……」

ふとユウが映画館を覗きこむと、暗い灯りの中にラブロマンス映画
を見ているブルーの姿があった。

「なんだかなあ……」

ユウは呆れたような声を出す。

「図太いよ、皆……」

ユウは映画館の中へ入っていった。

第25話 マリオン・システム

「インコムねえ……」

フィリップが改良されたネティクスのコクピットから呟く。

「単なるオモチャじゃねえの？」

「オールドタイプでもニュータイプの戦術が使える品物、らしい」

「あのくそ重いサイコミュが取り外されたはいいがね……」

フィリップが有線式サイコミュの変わりに取り付けられたインコム・ユニットを僅かに動かす。

「機体の性能も上がっているぞ？ フィリップ？」

「単に余計な重量が減っただけじゃねえかいな……」

苦笑しながらフィリップはユウのブルーブラウスにネティクスIIを随伴される。

「オーガスタ研究所の新型ガンダムとやらのデータフィードバックがそいつにされている」

「ありがたいねえ」

ユウの言葉にフィリップがやや皮肉気に答えた。

「確かに一年戦争の時の機体がベースでは、今どきの戦いでは持たないだろうよ……」

新調されたコンソールを眺めながらフィリップがそう呟く。

「ニュータイプ専用ガンダム、だったかな？ 元の機体は？」

ユウの問いにフィリップが肩を竦めたようだ。

「すまんね、ユウ。よくわからん」

「ああ、気にしないでくれ、フィリップ」

原型機よりも洗練されたネティクスIIの姿を眺めながらユウは笑いかける。

「性能面で問題は無いと言いたかったただだよ、フィリップ」

「旧式の機体構造でも、やればなんとかなるもんだねえ」

「ムーバブル・フレームではなく、昔のジムやガンダムとかのモノコック構造だな」

「懐かしい言葉だぜ……」

ユウの言うモビルスーツの名前をどこか懐かしげにフィリップは口の中で反芻する。

「たとえば、一年戦争時のニュータイプ用ガンダムと言っても」

「今では単なる旧式に過ぎねえな……」

「俺達と同じだ、フィリップ」

そう言いながら、ユウとフィリップが笑い合う。

「ロートルでも頑張れるってことでいいかい？ ユウ？」

「まあ……」

今度はユウが肩を竦めた。

「予算が下りないだけかもしれないがな」

「世知辛い話だぜ……」

フィリップが口の端を歪めながら、話を本題へ戻す。

「で、その敵さんとやらは何だよ？」

「主流派のネオ・ジオンに反抗的な立場を取っている」

そこでユウは一呼吸を置いてから口を開く。

「ネオ・ジオンの部隊らしい」

「ややこしいな……」

ユウはフィリップのその言葉に笑いながら、前方へ目をやる。

「そのやつこさん達に問題が？」

「武装した連中がコロニーの回りをうろついているだけでも充分な問

題だろ？ フィリップ？」

「違くない」

そう言いながらフィリップは高い声を出して笑ったあと、少し声を

真面目な語調へ戻してユウへ疑問を投げかけた。

「ネオ・ジオンも一枚板ではないかのな……？」

「どこもかしこも、その内実は同じだろうな」

ユウがそのフィリップの疑問へ首を竦めながら答える。

「嫌々、小惑星アクシズへ行った奴もいるだろうしな」

「ジオンの兵には他に行く所がないからなあ……」

「それか、潜伏してゲリラやテロリストになるかだ」

ユウはため息をつきながら吐き捨てるように言い放った。

「エウーゴには元ジオンの人間が多いらしいけどな、ユウ？」

「ティターンズ嫌いの連邦軍人だけでは頭数がしれているからな」

「来るものは拒まずかいなあ？」

「それもあるかも知れないが……」

ユウはブループラウスの様子を確かめながらフィリップへ話を続ける。

「ジオン残党の良い再就職口という事もあるかもしれない」

「その分、テロに走る元ジオンの奴等が減るって寸法か」

「その意味では」

少し皮肉げにユウが言う。

「ティターンズの建前上の思想にエウーゴは協力していると言える」

「やはり、歳を取ると」

ニヤリとフィリップが笑う。

「皮肉が上手くなるな、ユウ中佐殿」

「フン……」

軽く笑うユウとフィリップの視界に旧式の戦艦の姿が見え始める。

「あれかな……？？」

ユウは少し後ろの部下達へ注意するように通信を入れた。

「隊長」

「ん？」

「マリオンとやらを使うので？」

サラの言葉にユウは少し強ばった声で答える。

「アルフの奴が太鼓判を押ししていたからな」

「EXAMのようにはならなきや良いがな……」

「俺もその点はアルフにしつこく確かめたさ」

ユウがブループラウスのマリオンシステムのスイッチを眺める。

「何かを視覚化させる機能らしい」

「全く……」

フィリップがぼやく。

「EXAMと同じくらい曖昧だな……」

「アルフの奴を信じてみるよ」

答えながらも、ユウは前方に見えはじめた敵機に視線を集中させた。

「旧式と新型の混成部隊か……」

ジオンの旧式であるリック・ドムの放ったバズーカ砲をブループラウスは軽々とかわす。

「良い機会だ」

ユウはカバーで覆われたマリオンシステムのスイッチを押そうとする。

「これからマリオンを起動させる」

「へいへい……」

フィリップが心なしに緊張した声で答える。

「EXAMのようにはならないさ……」

ユウは半ば自分を納得させるように呟きながら、スイッチを押した。

「うん……?」

特に何も変わった用に見えない感じにユウは少し戸惑う。

「大丈夫か?」

「問題はないが……」

フィリップにユウは首を傾げながら答える。

「顔は赤くなっているな」

「ジム顔のバイザーがか?」

「EXAMと同じだ……」

昔の事を思い出したのか、不機嫌そうにフィリップが呟く。

「敵の分析ができました」

サラの強行偵察モビルスーツから通信が入る。

「旧式が十機、新型も十機です」

「数ではこちらの四倍もあるがな……」

「シドレのマラサイですら、敵の新型と同じ位の性能はありますよ、隊長」

「性能差では俺達が勝っているかな? サラ」

「パイロットの能力を考慮しなければ、メツサーラー一機で旧式全てを相手にできます」

メツサーラーを見つめながら、サラは少し馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「パイロットを考慮しなければだつて？ サラ先輩？」

カツがサラへ食ってかかる。

「あんたの腕では不安って事だよ」

「そんなに僕が嫌いか!？」

「憎たらしい小僧だよ!!」

サラとカツの下らない喧嘩の声を無視しながら、ユウは考え込んだ。

「戦力は互角と見てもいいかな……」

「向こうもそう思ってるかもしれないんぜ、ユウ」

フィリップのネティクスⅡが敵部隊の方向へ指を指す。

「相手も警戒しているな」

敵のリック・ドムが一発だけバズーカを放ってからというものの、全く攻撃する気配のない敵部隊を観察しながら、ユウは小声で呟く。

「ん……?」

どうするか考えていたとき、ユウは全天視界モニターから見える敵味方のモビルスーツの異変に気づいた。

「淡い光……?」

両軍のモビルスーツから微かな光が発光しているようにユウに見えた。

「あれは……」

光を見ている内に、ユウは敵部隊のモビルスーツ、そののののから見える「影」に気がつく。

「揺らぐ影……?」

ジオンの各機体から揺らぐ「影」が見えるのだ。

「連中は迷っている……?」

ユウはふと、後ろのフィリップ達の姿を見渡す。

(堅固な影だ)

フィリップ達からはユウへ向けて強い意思の影が見える。

(信頼の気持ちか?)

その影からは善意の心が感じられた。

「フィリップ達は俺を信頼してくれているのか……」

ユウはどう表現していいか解らない、不思議な気分でボソリと呟く。

「隊長?」

カツの機体が先程からじっとしているユウ機を不審げに見つめる。

「いや、なんでもない、カツ」

ユウは軽く頭を振ると、敵の隊長とおもしき機体へ通信を入れようとする。

「連邦の隊長機」

ユウが通信を入れる直前に、向こうの隊長機から通信が入ったきた。

「交渉したい」

敵のリーダーのモバイルスーツからユウへそう提案される。

(違う)

ユウはそのリーダー機から見える不気味な形に揺らぐ影を見ながら心の中で呟いた。

見ると、ジオンの部隊から見える影が堅い形を作っている。

(信頼の心の影だ)

もちろん、その信頼の対象はユウではなく、その敵の隊長に向けられている。ユウは敵の影達からその意思を感じられた。

(不意打ちの作戦をするつもりだ)

隊長の奇妙に揺らぐ影とその部下達の影からユウはそう判断した。

「投降しろ」

「交渉は認められないと?」

「不意打ちを考える人間とは安心して話し合いは出来ない」

「……」

その隊長が唾を飲み込む音が聞こえた。彼のその影が大きく揺らいだ。

「あんたはニュータイプなのか？」

隊長の男が言う。

その時、ジオンの隊長とその部下、そしてユウの部隊。その全員の影響が揺らいだ気がした。

「ユウ……？」

フィリップが不安そうにユウの機体を見つめる。ユウはブループラウスの手のひらをフィリップ機へ抑えるような仕草をしながら向ける。

「一戦もせずに降伏したら、沽券にかかわるな……」

敵の隊長が呻くように呟く。

「それが答えと受け取っていいか？」

「ただではやられんよ……」

その言葉にゆっくりと両軍の部隊が陣形を取り始めた。

フオブ……!!

突如、虚空からビームがジオンの部隊へと飛ぶ。そのビームの一撃で敵のリーダー機が撃破される。

「気を付けろ!!」

突然の攻撃に混乱する敵部隊を尻目に見ながら、ユウは味方機へ叫ぶ。

「どこから!?!」

シドレの声を遮るように、ビームによる射撃がジオンの部隊を狙い撃つ。

「あそこだ!!」

フィリップが宙域の一点を指差す。ユウはその方向へ目を凝らす。

「ガンダムタイプか?」

かなり大型のガンダムタイプの機体とジオン製と思われるモビルスーツ達が、同じジオンのモビルスーツ部隊を次々と破壊していく。

「攻撃を中止しろ!!」

聞こえるかどうかは解らないが、ユウはその新手の部隊へ通信を入れた。

「……」

その言葉が聞こえたかどうか、新車のモビルスーツ隊は攻撃を中止する。

「何だ……?」

ユウはそのモビルスーツ隊のリーダーと思われるガンダムから、自分への強い信頼の影を感じた。

「俺の知り合いか……?」

その影が何かを頷いたような気がした。謎のモビルスーツ隊はそのまま立ち去っていく。

「見ず知らずのパイロットを信頼する奴はいないだろうしな……」

ユウは首を傾げながらコクピット内で呟いている。

「ユウ隊長」

「ああ、すまない」

シドレの声でユウは現実に引き戻された。

「ジオンの部隊は?」

「そうだったな」

半壊しているジオンの部隊へユウを目を向けた。

「降伏勧告や救助の手筈をしてくれ」

「了解」

シドレが後方のユウ達の母艦「ストウラート」へ通信を入れる。サラとカツが周囲を宙域を舞い、破壊されたモビルスーツから脱出できた生存者がいるかどうか確かめている。

「連中、降伏は受け入れてくれたぜ」

「わかった」

そう答えたユウにフィリップが少し声を落として訊ねる。

「体は大丈夫か? ユウ?」

「どうにかな……」

ユウの様子を心配そうにフィリップが見つめる。

「マリオンとやらは?」

「何となく効果が解った」

「どんなやつだ?」

心配しながらも、フィリップが興味津々といった感じで訊ねる。

「なんと言うか……」

ユウが先程まで見えていた「影」の事をフィリップへ話す。

「嘘発見器かよ……」

薄気味悪そうにフィリップが呻き声を上げる。

「別の言い方をすれば」

ユウは率直な感想を言う。

「ニュータイプが見ている世界かも知れない」

「やっぱり、気味が悪いな」

「俺もそう思う」

「戦いで有効ではあるがな……」

そう不機嫌そうにフィリップは言い捨てながら、投降したジオン兵を運ぶために母艦からやって来た内火艇を自機で先導する。

「こんな物が宇宙の心の色、ニュータイプが見ているものだ……？」

ユウはマリオンシステムで見えていた「影」に突如として激しい嫌悪感を覚えた。

「人の心を何だと思っているんだよ……」

そう吐き捨てながら、ユウはニュータイプに対してなにか反感を持ち始めてきた自分の心を強く感じていた。

第26話 おでん

「暮らしやすいな」

「日本がか？」

「心地が良い」

炬燵に入りながら、ユウがアムロへこの国の感想を言う。

「親父の実家の家なんだよ、ここは」

「サンインとか言う地域らしいな」

「珍しい名前だろう、ユウ」

「日本だからなあ」

ユウは蜜柑の皮を剥きながらアムロに答える。

「ユウは日本人か？」

「いや……」

ユウは軽く首を振る。

「孤児なんだよ」

「そうか……」

アムロが指で軽く自分の顔を搔く。

「すまないな」

「何がだ？ アムロ」

「デリカシーの無い事を言ってしまった」

「構わないさ」

「カジマという姓が気になってしまっただね……」

「日本語らしいからな」

そう言いながらユウはアムロへ笑いかけた。

「ニュータイプってのは……」

フィリップが少し酒を飲みながら話に加わる。

「もつと人の心を思いやる人間だと思っていたがね……」

「おい、フィリップ……」

少し気分を害したらしいフィリップをなだめようとしたユウへアムロは手を振った。

「俺は退化したニュータイプだからな」

「退化したニュータイプかい……」

その言葉にフィリップが苦笑する。

「ニュータイプはもともと宇宙で生きる人間だ」

「いつまでも地球にいと、ニュータイプでは無くなる?」

「そうかもな……」

アムロは曖昧な笑みをユウへ向けた。そのアムロ達を見ながらフィリップがユウへ訊ねる。

「ついでに聞いてもいいか?」

「何だ? フィリップ?」

「どこで育った?」

ユウは少し天井を眺めながら、その質問に答える。

「サイド2、その孤児院」

「そうだったのか……」

フィリップが軽く頷いた。

「俺には弟がいたらしい」

「へえ?」

「俺が七、八歳の時に、弟は誰かに引き取られた」

「ふうん……」

話を聞きながら、フィリップはバツの悪い顔をしてユウに口を開く。

「俺もデリカシーの無い人間だな……」

酒に酔って変な事を聞いてしまったフィリップは、少し後悔したような顔をしながらユウへ軽く頭を下げる。

「別になんともないよ」

フィリップへそう言いながら、ユウは帰りが遅いブルーとサマナの事を気にする。

「喧嘩でもしているかな?」

アムロが煎餅を食べながら、首を傾げる。

「一応、テイターズとエウーゴの人間だ」

「まさかだな、アムロ」

ユウは二つ目の蜜柑に取りかかりながら、アムロの心配そうな言葉を笑って否定する。

「サマナもブルーも良いやつだよ」

「そうかもな」

「それを言ったら」

ユウはテレビのチャンネルを変えながら話続ける。

「アムロも反連邦のカラバにいる人間だ」

「上の連中には許可を取っているさ」

「連邦の情報を得る為と言って」

「理由はどうにでもなるもんだ」

アムロがそう言いながら肩を竦める。その時、二階からアルフが降りてきた。

「コンピュータ、ありがとうな。アムロ・レイ」

「俺の家のコンピュータは多分、連邦だかカラバだかに監視されているぞ?」

アムロはタバコを吸い始めたアルフを心配そうに見る。

「見られても、どおってことのない奴だけを送ったさ」

「杜撰だな、オーガスタ研究所の規則は」

「どのみち、どこかの残留ミノスフキー粒子でバクが出る」

アルフはタバコを旨そうに吸いながら、アムロへ答えた。

「仕事をしたって証しだけを送るようなもんだ」

「不真面目だな……」

「真面目過ぎるとバカを見るよ」

アルフがユウへニヤツと笑う。

「サマナ達かな……?」

玄関の方からの物音にユウは耳を立てる。

「だから、コンビニで買うのは高いって……」

サマナの声と同時にアムロの家の玄関が開く。

「ティターンズは金銭感覚までもオールドタイプねえ……」

「スーパで買わないとだめなんだよ」

呆れた声を出しているブルーへサマナがグチグチと何かを言って

いる。

「帰ってきたか」

ユウは台所へいるローベリアへ声をかけた。

クシユン!!

ローベリアが可愛いくしゃみをした。

「寒いよ、この時季の地球は」

「ほらよ」

くしゃみをしたローベリアへユウがドテラを渡す。

ガアン!!

「ちい!!」

サマナとブルーの箸が交差した。

「止めろよ、二人とも……」

ユウは情けない声を出しながら、二人が取り合っていた餅巾着を口へ運ぶ。

「人を戦わせておいて、脇から見ているだけの汚い男」

ローベリアがはんぺんを自分の方へ引き寄せながら、ユウを少し軽蔑の目で見る。

「戦いつてなんだよ……」

アムロが苦笑しながら、隣のアルフへ酌をしてやる。

「裏取引の内容はこんなもんで良いかな?」

アルフが一枚の紙をアムロへ見せる。

「連邦もエウーゴも、そしてティターンズにネオ・ジオンのメンバーがいるなかで、裏取引も何もないだろう……」

ユウが二人のやり取りを皮肉げに見ている。

「こういう時に」

アルフが自分の胸の録音機を指で叩きながらユウへ答える。

「何も重要な事を言わないと、かえって俺が疑惑の目で見られるんだ」
「ツボを心得ているな」

アルフの自嘲げな言葉にローベリアが賛同する。

「僕もそうではありませんよ」

がんとどきを食べながら、サマナが呟く。

「ジャミトフに何か言われたか？」

「肌で感じる雰囲気を感じとってこいとね……」

サマナがちらりとおでんの汁を飲んでいるブルーを見る。

「エウーゴと平気で付き合えるティターンズの人間は少ないですから」

「良いように使われているわねえ」

ブルーがサマナへ呆れた声を出す。

「閣下にブルーさんと会う機会があると言ったら、即座に行けと言われませんでしたよ」

「血というのは、なかなか断ち切れないものね……」

少し酒を飲みながら、ブルーがため息をつく。

「あたしと父の事はいい話の種になっているからね……」

「ジャミトフとお前の事は、すでにエウーゴにも知れ渡っている？」

軽く顔をうつむかせているブルーへユウが口に食べ物を含んだまま訊ねる。

「ティターンズのスパイではないかと疑われてさえているわ」

「だったらさあ……」

蜜柑で箸休めをしているローベリアが口を挟んだ。

「こんなところにいたら、まずいんじゃないのかい？」

「あたしは」

ブルーはローベリアに顔を向ける。

「エウーゴにも失望を感じはじめているの」

「やはり、うちのネオ・ジオンと同じような内部分裂に？」

「どこもかしこも同じらしいけどね……」

ローベリアへため息混じりで答えながら、ブルーはおでんの鍋に箸を入れる。

「ニムバスがネオ・ジオンにねえ……」

唐突に炬燵から少し離れた場所で横になってテレビを見ているファイリップが呟いた。

「オーガスタ研究所からの差し出しものだよ」

「ネオ・ジオンへの賄賂としてのモビルスーツのおまけか」

アルフの言葉に、大根を食べながらアムロが答える。

「あたしが捕虜となっていたのが、仇となったのかもしれないな」

身に纏っているドテラを気に入ったらしいローベリアが少し声を低くしてアルフへ言う。

「あんたの繋ぎがなくても、オーガスタはネオ・ジオンへ繋がりを持つとうとしてたさ」

「時間の問題だったってだけか」

「そうだとよ」

ローベリアに答えながら、アルフはおちよこで日本酒を飲み干す。

キーン!!

「オールドタイプが!!」

サマナの箸をブルーが振り落とす。

「いい大人が何を……」

そう言いながらも、その隙にユウは二人が取り合うちくわを口に入れる。

「汚い大人だな……」

アムロがユウに笑いかけながらアルフに再び酌をしてやる。

「量産型サイコ・ガンダムの様子はどうだ?」

「量産型サイコ・ガンダム?」

ローベリアがたくあんを噛みしめながら首をひねる。

「サイコ・ウルフの事だよ」

「ああ、あれなら」

ローベリアが窓の外へ顔を向けながら、アルフへ答える。

「ニムバスが上手く使っている」

ローベリアはそう言いつつも、窓の外から目を離さない。

「雪か……」

「宇宙には無いものだな?」

アムロへローベリアは頷く。

「地球にしかない色の物だよ」

少し窓を開け、降り注ぐ雪を眺めながらローベリアが穏やかに微笑む。

カッアツ!!

「スペースノイドめ!!」

「やらせないつもりか!?!」

サマナの箸がブルーの箸を押し始めた。

「よつと……!!」

ユウが再び餅巾着を二人から奪う。

「人を道具にする奴……!!」

ユウに苦笑いしながら、アムロもおでんを食べ始めた。

「親父さんは元気か? アムロ・レイ?」

「俺の親父?」

「テム・レイだ」

「ああ、それなら」

アムロは家の外のガレージを指差す。

「悠々自適の生活を送っている」

「隠居か」

「建前上はな」

「ふうん……」

アムロの言葉にアルフが唇を歪める。

「元祖ガンダムの開発者何だってな、テム・レイとやらは」

フィリップが首だけをアムロ達に向けて口を挟む。ちょうど、アニメとして制作された「ガンダム・ヒーローズ」がテレビ放送されていた。

「俺達のようなモビルスーツ関係の技術者にとっては、テム・レイは一種のカリスマだよ」

燃え上がれと連呼される勇壮なオープニングテーマを聞きながら、アルフがフィリップへ呟いた。

ガラツ……

「ただいま」

スーツに身を包んだニムバスが帰ってきた。

「お帰り、ニムバス」

ユウとローベリアが玄関まで迎えに行く。

「参ったよ……」

「ムラサメはだめか？」

ユウが日本にあるニュータイプ研究所の名前を言う。

「オーガスタも大概なグレーではあるが」

ニムバスがネクタイを緩めながら愚痴を言う。

「ムラサメは待遇も研究内容もブラックだ」

「大変だったな」

「身体が持たん……」

ムラサメ研究所で強化人間のデータ採取に付き合わされたニムバスは深いため息をついた。

「食事と風呂、どちらが良い？」

ローベリアがニムバスに訊ねる。

「風呂」

ニムバスはぼそりと言うと、居間へ入る。

「土産だ」

ニムバスが寿司折を炬燵へ置く。

「ありがとう、パパ」

「だれがパパだ……」

ブルーの冗談に不機嫌そうに答ながら、ニムバスは風呂へと向かう。

「ムラサメはサイコ・ガンダムなんて言うバカな物を作るような所だからなあ……」

アルフがポツリと呟いた。

「俺の親父も関わっているんだよ……」

アムロが少し暗い顔で言う。

「やはりな」

「何が？」

我が意を得たりと言うようなアルフの顔をユウがじっと見つめる。

「テム・レイ」

少し真面目な顔をしてアルフが低く言う。

「今でも連邦で研究をしているんだな？」

「そうだよ……」

黙々とおでんを食べながら、アムロが答える。

「親父は一度、死んだ人間なんだ」

「行方不明になったんだってな？」

「サイド6で生きてたよ」

ニムバスが持ってきた寿司を食べ始めたサマナとブルー。その二人の食欲を呆れたように見つめながらアムロがフィリップへ答える。

「一度死んだ人間は使いやすくないだ」

「ニムバスと同じだな」

「そうなるな」

ユウに答えながら、アムロはちらりと風呂の方へ目をやる。

「親父はまた新しいモビルスーツを作っているみたいだ」

「なるほどな」

アルフは頷きながら、録音機をコンと叩く。

「良い情報だ」

「フン……」

アムロは鼻を鳴らしながら、酒に手を伸ばした。

「ニムバス」

「ん？」

その言葉に、暗い寝室の中で布団を被ったニムバスがユウへ振り返る。

「ありがとうな」

「何がだ？」

「この前のジオンとの戦いの時」

オレンジ色の豆電球を眺めながら、ユウは以前にジオンの部隊と戦った時に支援してくれたガンダムの事を言う。

「あの大型のガンダムはお前だろうか？」

「よくわかったな」

「マリオン・システムのおかげだよ」

ニムバスはその言葉に無言でいる。

「あのな、ユウ」

ニムバスが何かを言いかける。

「マリオン・システムの事だが……」

「解ってるさ、ニムバス」

ユウは少し布団から顔を出しながら、ニムバスへ答える。

「お前のサイコ・ウルフとやらのガンダムにも」

「……」

「あるんだろう？」

ニムバスは再び無言でいる。

「マリオン・システムはオーガスタ全体の産物だからな」

「うん……」

ユウは納得したように呟く。

「お前も」

「使ったさ」

ユウが話の内容を言う前にニムバスが答える。

「勘がするどいな……」

「騎士だからな」

そう言いながら、ニムバスがあくびをする。

「マリオンの感想は？」

「おそらく、お前と同意見だよ、ユウ」

「そうか」

「大した悪女だよ、マリオンは」

ニムバスのその言葉にユウは軽く笑う。

「人の心を覗き見るとは……」

「ニュータイプの見ている世界かもしれない」

「だとしたらな、ユウ」

ニムバスが真剣な声になる。

「私達はマリオンを勘違いしているのかもしれないな」

「勘違い…………？」

ニムバスの言葉にユウは疑問の声を出す。

「マリオンがどういう少女だったか、お前は覚えているか？」

「どうって…………」

ユウにはニムバスの言っている意味が解らない。

「私は」

ニムバスが固い口調で言う。

「マリオンが私達をもてあそんでいるのではないかと思う事がある」

「ララア…………」

「何？」

ニムバスがユウへ訊ね返す。

「アムロが言っていた」

ユウがアムロから聞いたニュータイプ少女の話をする。

「アムロとそのライバル、ジオンのエースパイロットであったシヤア・アズナブル」

ユウは一旦言葉を切る。ニムバスは黙ってその話を聞いている。

「その二人にもマリオンと同じような、ララアという少女がいたと」

「そのララアが？」

「アムロもな」

ユウが低く呟く。

「そのララアという少女が忘れられないらしい」

「ふむ…………」

「だが、時おりアムロは」

眠くなってきたが、ユウは話を続ける。

「ララアが自分をもてあそんでいるのではないかと思う時があるらしい」

「なるほどな…………」

ニムバスはそう言ったあと、その目を閉じる。

「悪女マリオンか…………」

ユウも目を閉じながら口の中でその名を呟く。

「あの宇宙の心は見えてはいけない物だったのかもしれない…………」

隣のニムバスの寝息を聞きながら、ユウは一年戦争時にブルーデイステイニーを駆った時に見た「蒼い光」を脳裏に思い浮かべつつ眠りについた。

第27話 相容れぬ者

「本当なら、アムロも同席したかったらしいが」

ユウは隣に立つ男と共に窓の外の雪を眺める。

「どうしても手が離せなかつたらしいです」

「カラバは寄せ集めの部分があるからな……」

ユウの隣に立つ、黒いサングラスをかけた金色の髪をした男がそうボソリと呟いた。

「忙しかったのだろうか、アムロの奴は」

「あなたも忙しいでしょうに、クワトロ大尉」

「茶飲み話をする位の時間はある」

クワトロと呼ばれた男はそう言いながら、窓から離れる。

「君の名前はブルー君から聞いている、ユウ・カジマ君」

「どのような？」

「ニュータイプに理解があるオールドタイプと」

「少しバカにされているような……」

「気のせいだろうか？」

男の笑顔に対して少し不満げな顔をしながらも、ユウも窓から目を離す。

「今度、ダカールでの連邦の総会があつてな」

クワトロは軽く肩を竦めながら、ユウへ話しかける。

「そこでのエウーゴの発言力を増すために、キリマンジャロのテイターンス基地を攻める」

「連邦の俺には関係のない話ですね」

ユウの苦笑にクワトロは声をあげて笑う。

「ダカールでどうなるかまではわからんよ」

「議会で武力行使でもするつもりだと？ クワトロ大尉？」

「今後のエウーゴとテイターンスの行く先を決める天王山にもなりかねないからな」

「そうならない事を願ってますよ、クワトロ大尉」

ユウはそう言いながら、客室の椅子へと座る。

「エウーゴで二番目に強いと言われているあなたとは戦いたくない」
「私は二番目か？ ユウ・カジマ君」

「一番目はあのカミーユとか言うガキでしょう？」
「ガキ？」

クワトロはその言葉に堪えきれないといった感じで笑いだす。
「何かあったのか？」

「大人の事情を知らない小僧だと言う事ですよ、大尉」
「そうかもな、アイツは……」

クワトロも肩を竦めながら椅子へ座った。
「では、ユウ・カジマ君」

「ユウで良いですよ」
「馴れ馴れしくないか？ それでは？」

クワトロが苦笑いをしながら、コーヒーに手を伸ばす。
「私よりも、ユウ・カジマ君の方が少し歳が上だろうか？」

「アムロが俺をあなたに会わせたのは」
「そう言いながらユウもテーブルの上のコーヒーカップに手を触れる。」

「穿った意見を交換しろという事だと思えますが？」
「名前の尻にこだわっては、余計な気を使うかな……」

「またしてもクワトロは肩を竦める。」
「では、ユウ君」

「はい」
「君は今の地球圏での争いをどう見るか？」

「簡単な答えですよ」
ぬるくなったコーヒーを気にしながら、ユウははっきりとクワトロへ告げる。

「予測などつきようがない」
「そうかな？」
「違うと？」

クワトロは頷きながら、コーヒーを飲み干した。
「地球が戦いを引き込んでいると思わないか？」

「意味が解りませんが……」

軽く首を振ってからクワトロは椅子から立ち上がり、窓の外の雪景色を眺める。

「美しいものだな」

「まあ、確かに……」

ユウは曖昧に答えながら、ポットからコーヒーを入れ直す。

「だが、この美しさが」

クワトロが少し窓を開ける。凍えるような風が部屋へ入り込む。

「寒いですよ、クワトロ大尉……」

「フフ……」

笑いながらも、クワトロはその冷たい風を身体に受ける。

「ティターンズもエウーゴも」

話しながらクワトロはパタンと窓を閉めた。

「そして、ネオ・ジオンと連邦も」

何を思い立ったか、クワトロはラジオをかける。

「この地球の美しさゆえに争うのだ」

「……」

ユウは無言でクワトロの話の話を聞いている。

「今日の絵画の時間はバスク・オムさんの絵を紹介しようと思います……」

ラジオから教養番組の音声が流れる。

「ティターンズの対テロ対策の責任者であるバスク・オムさんは一年戦争前に画家としても名を馳せ……」

ラジオを聞き流しながら、クワトロは話を続ける。

「美しさとは罪だな……」

「美女の自慢みたいな事を……」

クワトロの言い方にユウは軽く笑う。

「争いの元凶は絶たねばならないと思わないか……」

「それは……」

ユウは難しい顔をしてクワトロの言葉の意味を考えている。

「バスク・オムさんは一年戦争時に目を負傷して以来、筆を置きました

が……」

ユウはラジオを聞きながら、壁に飾られている絵を眺める。

「あの絵がバスク司令が描いた絵らしいですよ、クワトロ大尉」

「あの強面の男が描いたとは思えないな……」

二人は壁に飾られている美しい山脈の絵を眺める。

「美しさのゆえに、地球はその罪が深いのだよ」

感心したように絵を眺めながら、クワトロは一人頷く。

「クワトロ大尉……？」

ユウは妙なフラストレーションを感じながら、二杯のコーヒーを飲み干す。

「私にとってはな」

クワトロが椅子へ座り直し、ユウの顔を見つめる。

「エウーゴもティターンズと同じ穴のムジナだと、最近になって気づいたよ」

「同じとは？」

「ともに地球に魂を引かれた者達だ」

クワトロの深い意味に聞こえる言葉にユウは首を傾げる。

「エウーゴから離れるとでも言うのですか？」

「ああ」

ユウがその反応に困るほど、クワトロはハッキリと言い放つ。

「ネオ・ジオンにでも戻るのですか？」

「なぜ？」

「赤い彗星であったから……」

「知っていたか」

「公然の秘密でしように……」

ユウの呆れたような声にクワトロは微笑んだ。

「争いの根は完全に絶ちたいからな」

「フム……」

ユウはクワトロの真意が解らない自分に少し苛立つ。

「飲み過ぎは胃をおかしくするぞ？」

「どうにおかしくなっている」

ポットから三杯目のコーヒーを入れようとしたユウをクワトロは
やんわりと止めた。

「あなたがハッキリと言わないからですよ、クワトロ大尉」

「ハッキリと言ったら、君は私を狂人だと思うだろうからね、ユウ君」

その言葉にユウは深いため息をついた。

「俺はオールドタイプですから」

「そうかな？」

「オールドのタイプですよ」

ユウがややなげやりに言う。

「アムロは君がニュータイプの目を持ったオールドタイプと評してい
た」

「買いかぶりですよ……」

「私はアムロの評価を信じたいがね」

ユウの近くにやってきて微笑むクワトロに少しユウはうんざりし
たように話す。

「しかし、俺にはあなたが理解できない」

ユウは少し疲れたように言う。

「何か、あなたの存在に恐怖を感じる」

「私が嫌いかな？」

「どこかが解り合えない」

「そうか……」

クワトロは少し失望したようにユウを見やった。

「邪魔をしたな」

クワトロはそう言いつつ、部屋を出ていこうとした。

「クワトロ大尉」

「ん？」

部屋を出ていこうとしたクワトロが足を止める。

「俺はあなたと同じくらい傲慢な男と解り合えた」

「私も君に嫌われたもんだな……」

苦笑するクワトロをユウは無視する。

「だが、その彼をしてもお互いの道が別れてしまいましたかね……」

「人は所詮、道を違えるものだとても?」

「さすがはニュータイプ」

ユウは皮肉をこめてクワトロに言う。

「クワトロ、あなたは人と解り合う気持ちがありますか?」

「アムロのような事を言うな、ユウ……」

「あるかと聞いている」

詰問するような口調になったユウの言葉を背中に受けつつ、クワトロは口を開く。

「アムロにでも聞くんだな、ユウ」

不機嫌そうな声でクワトロはそう言い放つと、そのまま部屋を出てドアを閉める。強く閉められたドアが大きな音を立てる。

「ふう……」

ユウは自分の身体が妙な疲れに包まれている感じに深く肺から息をついた。

「昔のニムバスだ……」

クワトロが立ち去ったあとのドアを見ながら、ユウは吐き捨てるように呟く。

「あそこまで人は自分が一番偉いと思えるものなのか?」

何かむしゃくしゃしてきたユウは酒を飲みたいと思った。

「ちっ……」

部屋の冷蔵庫に酒がなかった事に舌打ちをしながら、ユウは売店へと足を向けた。

第28話 黄金の彗星

「キリマンジャロは陥落するな……」

ユウのブループラウスはティターンスのキリマンジャロ基地を覆う厚い雲の下のぎりぎりの所を飛行しながら、眼下の基地の様子を眺めている。

「俺の戦況偵察の任務も終わりかな？」

コクピットの中で呟くユウはやや前方を飛行している巨大なガンダムを眺めながら、少しため息をつく。

「アルフがああサイコ・ガンダムをけなしていた理由がわかるよ……」
その巨大なガンダムから、ギラついた黒い怨念のような影がマリオン・システムを通じてユウの視界へ入る。

「おや？」

サイコ・ガンダムが地上へ降下する。その機体の前にはエウーゴのZガンダムの姿があった。

「カミーユの奴だな」

ユウはその二機を注意深く見つめる。サイコ・ガンダムのコクピットからパイロットがそのZのコクピットへ飛び移ったように見えた。

「ティターンス兵の寝返りかな？」

ユウは疑問に思いながらも、ブループラウスを上昇させ、雲の中へ突入させる。

「大気圏内では機体が扱いづらいな……」

ユウはそう呟きながら、ブループラウスを厚く重なった雲の上へ押し上げる。地上へ大雪を降らしている雲の上には燦々と太陽が輝いていた。

「さて、帰還するか……」

ユウはウエイブライダー形態へ可変させているブループラウスの機首を旋回させる。

「むっ!!」

その時、ユウは空中を飛行する一機のモビルスーツの姿をその視界へと入れた。

「Zプラス……」

ブループラスの原型機であるそのモビルスーツもユウに気がついたようだ。

「俺の知り合いか？」

カラバの機体であろうか、所々に赤色の塗装をされたZプラス。それを包んでいる光がマリオンを通して目の中へと飛び込む感覚にユウは眩く。

「ユウか？」

そのZプラスから通信が入った。

「アムロか……」

ユウは複雑な顔をしながら、深呼吸してをして少し自分の気持ちを落ち着かせる。

「どうする？ ユウ？」

「単刀直入だな、アムロ」

「意味はわかるだろう？」

「俺は単なる偵察の任務だよ……」

「命乞いか？」

アムロが少し皮肉げな言い方をする。その言葉にユウは軽く口を歪める。

「行きな、ユウ」

「ありがとう、アムロ」

ユウは礼を言って、そのまま帰投しようとする。

「甘いな!! アムロ!!」

「シヤア!？」

アムロが突如として上空へ上がってきた金色のモビルスーツを見て、驚いた声をあげる。

「アムロ!! ユウは私に仕留めさせろ!!」

アムロにシヤアと呼ばれた男の機体は、金色に輝くサブ・フライト・システムに跨がっている。

「百式では無理だ!!」

「このベルクートがある!!」

「だいたい、相手は!!」

「単なる連邦の人間、オールドタイプだ!!」

ベルクートというらしいサブ・フライト・システムに跨がったまま、百式はユウのブループラウスへビームライフルを放つ。

「クワトロ・バシーナ!？」

ユウは操縦桿を思いつき引き上げた。

「地球上ではブループラウスは不利か!？」

宇宙空間用の機体をベースに作られたブループラウスは、それでも何とかそのビームをかわす。

「下がれ!! アムロ!!」

「ユウが嫌いなのか!? シャア!？」

「危険な相手だ!!」

百式の乗るベルクートがブループラウスへ急接近する。

「ちい!!」

すれ違い様に放った百式のビームサーベルを間一髪で直撃を防ぐ。ブループラウスの尾翼にサーベルがかする。

「嫌われたもんだな!!」

そう叫びながらユウはブループラウスをどうにか地球の空中戦に適応させようと機体の出力を上げる。

「だが、俺もあんたが嫌いだよ!! シャア!!」

「今の私はクワトロだ!!」

「そうかい!!」

百式が雲の中に突入し、姿が見えなくなる。

「隊長!!」

モルモット隊のメンバーが異変を察知して、間借りしている連邦の輸送機から駆けつけてきた。

「敵は何機だ、ユウ」

「一機だよ……」

上にシドレのネティクスⅡを乗せたアツシマーからフィリップの声がかけられる。

「手強いのですか?」

同じくアツシマーに乗ったサラがユウへ訊ねる。

「赤い彗星が相手だ」

「ああ…… エウーゴのクワトロ……」

サラのポリノーク・サマーンを乗せているカツが少し小さな声で答えた。

「怖い、カツ？」

「誰が……」

カツへサラがからかいの声をかけながら、再びユウへ訊ねる。

「もう一機いるみたいですが？」

サラのポリノーク・サマーンのセンサーに映ったらしい。

「アムロ・レイの機体だ」

「おいおい……」

フィリップが呆れた声を出す。

「この大空が俺達の墓場か？」

「機体数ではこちらが上ですが……」

「相手は化物だつての……」

シドレの言葉にフィリップは首を振る。

「アムロだけでも引いてくれれば良いがな……」

はるか上空でユウ達の様子を眺めるように滞空しているアムロ機を見上げながら、ユウは軽く息を吐く。

「アムロさんと戦ったら、勝ち目なんか……」

「やっぱり怖いんだ？」

「サラ!! それ以上言ったら落とすよ!?!」

再びサラにからかわれたカツはそう怒鳴り返す。

「だがな……」

軽くユウは口ごもる。

「少なくとも、クワトロだけは俺達と一戦をする気みたいだな」
苦々しげにユウはそう呟く。

「一機で五倍を相手にか?」

「無茶をやる相手だと思うか?」

「いんや……」

フィリップはユウの言葉に苦笑したようだ。

「赤い彗星だからな……」

「そういう事だ」

キーン……!!

鋭い飛行音を立てながら、クワトロの百式が再び雲の中から飛び出す。ユウはその機体から発せられる光をマリオンを通じてその両目で捉える。

「どこまでも昔のニムバスに似ている奴!!」

クワトロの機体から発せられる深い蒼色の光を忌々しげに睨みながら、ユウは機体下部のビームカノンを放った。

バアジュア!!

「バリアー!?!」

ユウと同時に放たれたアツシマーからのビームをも弾いたのに驚きながら、ユウは百式が乗っている運搬機からのビーム射撃をかわす。

「くそっ!!」

ユウは失速を覚悟しながら、ブループラウスを可変させ、接近してきた百式へビームサーベルを振るう。

「無害そうな顔をした乙の出来損ないの分際が!!」

軽々とユウのサーベルをかわしたクワトロ機にポリノーク・サマーからのグレネードが放たれる。

ボウア!!

そのグレネードは直撃こそしなかったようだが、百式に損害は与えたようだ。

「よくやった!! サラ!!」

「カツの奴が上手く動いてくれたんです!!」

珍しくカツを誉めたサラが得意そうにそう言い放った。

「ハマーンめ!!」

クワトロは金色をしたベルクートを旋回させながら悪態をつく。

「ネオ・ジオンへ戻る際の落とし前を付けさせようと、こんな試作機の実験を私に!!」

百式の姿が雲に隠れる。

「思った程ではない!! 赤い彗星は!!」

ユウはなかば自分を鼓舞するようにコクピット内で叫ぶ。

「隊長!!」

「どうした!! シドレ!?!」

「何か来ます!!」

シドレの言葉と同時に何処からかビームが放たれた。

「新手!?!」

ユウはブループライウスを旋回させながら、周囲を見渡した。

「何だ!?!」

ユウは驚愕の声を上げる。突如として厚い雲の中に数個の小さな

「影」が見えたのだ。

「小型機!?!」

雲の中のその影達から複数のビームがブループライウスへ放たれた。

「くそ!!」

一発のビームがユウ機へ直撃する。ブループライウスのコクピットにアラートが鳴った。

「隊長!!」

サラが叫ぶ。

「ビット・システムです!!」

「ビットだと!?!」

「ニュータイプ研究所で習いました!!」

雲の隙間からクワトロの機体が見える。

「無線サイコミュです!!」

「ニュータイプにしか扱えないと言うあれか!!」

ユウはコクピット内で響くアラート音を切りながら、見える影の正体をサラから聞いて強く唇を噛んだ。

ボフウ!!

百式とその運搬機が雲の中から表れる。

「ファンネル!!」

クワトロの声が響いたと同時に、ベルクートからビット・システム

とやらが凄まじいスピードで射出される。

「そつちがサイコミュなら!!」

シドレがネテイクスⅡのインコムを起動させる。インコムのケーブルが複雑な動きをしながら、先端のビーム砲をクワトロ機へと導く。

「情けないファンネルの真似事で!!」

ファンネルと言う名称らしいビット・システムがシドレ機へ攻撃を集中させる。

「フィリップさん!!」

インコムの内の一基が百式の乗っているベルクートへビームを命中させたのに喝采を上げながらも、シドレはフィリップへ言う。

「スピードが急過ぎます!!」

「止まったらやられるよ!! シドレちゃん!!」

「インコムが絡まる!!」

「こつちが先に落とされるぜ!!」

ファンネルを回避しながら、フィリップがシドレへ怒鳴りつける。

ガア!!

「しまった!!」

一瞬の隙を突き、ファンネルがフィリップ達の前方へ出てビームを放った。

「フィリップ!!」

ネテイクスⅡを乗せたフィリップのアツシマーが煙をあげて落下していく。ファンネル達がシドレの機体を破壊するのをユウは見た。

「よくも!!」

シドレの「影」が消えていない事に安堵しながらも、ユウは百式へ肉薄する。

「良い根性だ……!!」

撃破される寸前に百式へ火線を集めたフィリップ機とシドレ機に感心したような声を出しながら、クワトロはユウを迎えようとする。乗っているベルクートの機首の上部がシドレ達の攻撃によって破損し、煙を上げている。

ガアン!!

ブループラウスと百式のビームサーベルが交差した。

「俺はあんたが嫌いだ!! クワトロ!!」

「嫌いで結構だよ!! ユウ!!」

「あんたからは、人に対する諦観の匂いしかない!!」

「君は本当にオールドタイプなのか!?!」

バアル……!!

一瞬、二人の機体が離れる。ファンネルがユウへ接近する。

「甘い!!」

ユウはマリオンから見える影を頼りに、ビームライフルでファンネルを撃ち落とす。

ドフウ!!

鋭い騒音を立てながら、モビルスーツ運搬機ベルクートを駆る百式がユウのブループラウスへ急接近する。

「ファンネルが見えるとは!!」

再び百式のサーベルがユウ機へ振るわれた。

「目だけがニュータイプなのか!? ユウ!?!」

「そうかもな!!」

ブースターを最大に噴かしながら、どうにかユウはブループラウスの姿勢を安定させようとする。

「隊長!!」

サラ達から支援射撃が飛ぶ。

「ちい!!」

先程のファイリツプ達の攻撃で出力が下がったバリアーを突き破り、ポリノーク・サマーンとアツシマーのビームが百式の左腕を吹き飛ばす。

「ベルクートのIフィールドが!?!」

クワトロは顔をしかめながら、運搬機のスピードを上げ、ユウ達を突き飛ばすように雲の中へ隠れる。

「逃がすか!?!」

「ユウ!?!」

成り行きを見ていた高々度で滞空していたアムロがユウの前へビームを放った。

「アムロ……」

「君達の勝ちだ」

アムロの落ち着いた言葉にユウは少し苛立ったような声を上げる。

「これ以上戦うと言ったら？」

「俺が相手になろう」

「フン……」

不機嫌そうな顔をしたままユウは軽く舌打ちをすると、ブループラウスを飛行形態へ可変させた。

「ファイリッパ達を回収するぞ、サラ、カツ」

「はい……」

サラ達はアムロ機にちらりと視線を送ったが、そのままユウへついていく。

「ユウとシャアを会わせたのはまずかったようだな……」

暗い顔をしながらアムロは一つため息をつく。キリマンジャロを包む厚い雲に目をやりながら、アムロはクワトロ機の後を追うようにZプラスをその場から飛び立たせた。

第29話 ダカールの日

「これにて、災害被害国への援助資金の配分は決定されたものとしませす」

ダカール議会の進行役の男が木槌を台へ降り下ろす。乾いた音が議会場へ響く。

「次の議案は……」

「いよいよ、エウーゴへバトンタッチだな」

ダカール議会の警備をしているユウがモバイルスーツの中から議会のラジオ放送を聞いている。

「もうすぐ交代だぜ、ユウさんよ」

豪華な装飾をされたガンダムから、ヤザンが声をかける。

「そうか」

ユウはラジオのチャンネルを切る。

「せっかく、良いところだったのに」

「良いも悪いもあるか……」

ヤザンが不満そうに愚痴を言う。

「つまんねえ仕事だぜ……」

ヤザンが大きいため息をつく。

「カッコいいガンダムに乗れるじゃないか？」

「お前さんはこんな飾り物に乗って嬉しいか？」

「実はあんまり……」

「だろう？」

ユウのゴージャスなジムを指差しながら、ヤザンが軽く笑う。

「暇な仕事の次は暇な休憩だぜ……」

「議会のラジオでも聞いたらどうだ？」

「興味がないな」

ヤザンは無関心そうに言い放つと、ジャズの番組にラジオのチャン

ネルを合わせた。

「モビルスーツから出て、面白い事はねえしなあ……」

「各組織のエースにでも会いに行けばどうだ？」

「へっ……」

軽く肩を竦めるヤザン。

「こんな呑気な場所で会っても、嬉しくも何ともないね」

「全く……」

ユウは自分のジムをヤザンの機体とすれ違わせながら、警備の担当場所へと歩いて行くとする。

「テイターンズで一番のパイロットと認められたんだぞ？」

「ありがたいねえ……」

皮肉げにヤザンがそう吐き捨てた。

「議会の護衛用に特別に作られた……」

ユウが金銀、そして人工ダイヤで飾り立てられたガンダムを眩しそうに眺めながら言葉を続ける。

「オンリーワンのガンダムに乗れたということは最高の栄誉の証しではないかな？」

「栄誉だかなんだか知らねえが……」

ヤザンは目を閉じながらジャズを聞いている。

「俺は戦いの空気を吸わないと、酸欠になっちまうんだよ」

「酸素欠乏症になるってことか？」

「もう、なっているかもな……」

そのヤザンの言葉に苦笑しながらも、ユウは警備場所へジムを向かわせた。

「私はエウーゴのクワトロ・バシーナと言うものだ」

発言台へ手をつきながら、クワトロがそう切り出した。

「しかし、本当の名前はシャア・アズナブルと言う」

「誰だっけ知っているさ……」

オープン回線で勝手に聴こえてくるクワトロの演説にジェリドがジムのコクピットから皮肉混じりに呟いた。

「そうでしょうね」

隣のエウーゴカラーのジムに乗るブルーがそう答えた。

「エウーゴの分際がティターンスに口を聞くんじゃねえよ……」

「みつともないわよ、ジェリド」

少し怒ったようにブルーへ言い返したジェリドへ、少し後ろにいるマウアーの機体から涼やかな声が飛ぶ。

「ごめんなさいね、エウーゴ」

「何ともないわよ、ティターンス」

マウアーの言葉にブルーは微かに笑う。それを受けてマウアーも口元を綻ばせる。

「女は仲良くなるのが早いねえ……」

ジェリドが呆れた声で言った。

「だから、シロツコさんとやらは女が世界を統治すべきだとか、よくわからん事を考えたのかな？ マウアー？」

「違うわよ、あの男は」

マウアーが吐き捨てるように呟く。

「それは単なるパフォーマンスよ、ジェリド」

「そうか？」

「あの男が好きなのは、人々が自分の足元に這う姿を見る事だけ」

「言うねえ、マウアー……」

ジェリドが辛辣なマウアーの言い方に苦笑する。

「あなたは自分の上に立つ、そのための急な階段を必死で駆け上がるのが何よりも楽しい」

「そ、そうなのか？」

「男の器の違いよ」

うろたえるジェリドをマウアーが微笑みながら見つめた。

「見せつけないでよ、ティターンスのカップル」

ブルーが少しやつかんだ感じの声を上げた。

「うらやましくて？ エウーゴの方？」

「誰が……」

拗ねたブルーを見ながら、マウアーが軽く笑い声を上げた。

「あんたら二人を見ていると……」

ジェリドが二人に聴こえないようなくらの小声で呟く。

「女が世界を統治すべきだという考えを少しは理解できるな……」

「何か？ テイターンズ？」

「何でもねえよ、エウーゴ」

ブルーの耳の良さに呆れながら、ジェリドはぶっきらぼうに言い放った。

「そもそも、本来地球は地球で生まれ育ったもの全ての聖地とすべき物であった。しかし、地球に魂を引かれたもの達がいつまでも地球に座り込み、ついにはテイターンズという組織まで生み出してしまった」

「悪かったな、スペースノイド」

スパゲツティーを食べながら、テイターンズの軍事面の責任者「バスク・オム」は不機嫌そうに顔のゴーグルを拭いた。

「粉チーズが足りんぞ、おい!!」

バスクは近くの兵へスパゲツティーの味について文句を言った。

「我々エウーゴはその地球に魂を引かれた者達の象徴とも言えるテイターンズを無くす為に宇宙に生まれた物であったが」

「雄弁だねえ、クワトロ大尉は」

カミーユはポテトチップスを口へ運びながら、テレビを見ている。

「少しちようだい、カミーユ」

「台所へ取りに行けよ、ファ」

「ケチ!!」

ファと呼ばれた少女はエウーゴの強襲艦アーガマの食堂へと去っていった。

「そのエウーゴも地球に魅了され、第二のティターンズとも言うべき物へと変質しつつある」

「何か、議会の雲行きが怪しいぞ」

「仕事中にラジオを聞いているのか？」

「何か、回線がオープンになっているんだよ、ニムバス」

装飾をされたザクに乗りながら、オグスが隣のニムバスへそう声をかける。

「私は議会の内容よりも、この居心地の悪さを何とかしたい」

ジム達に囲まれて、二機だけ警備用のザクがいるという状況にニムバスが嫌な顔をする。

「所詮、我々ネオ・ジオンは仮想敵だからな」

「お情けで出席させてもらっているだけか」

そう言いながら、ニムバスがため息をついた。

「私は少し前までは連邦の人間だったのにな」

「何はともあれ、ジオンへ出戻ったのだ」

オグスが笑いながらニムバスへ答える。

「頑張って馴染んでほしい」

「わかっているよ……」

ニムバスは眉をひそめながらも、再び警備に集中した。

「私、シヤア・アズナブルはここにエウーゴから離脱することを表明し、宇宙、そして地球の摂理に従おうと思う」
その言葉に議会場がざわめいた。

海辺でラジオから放送されているダカールの演説を無言で聞いている女がいる。

「キャスバル兄さん……」

女はシヤアの演説を聞きながら哀しげに呟き、海を眺めながら一口紅茶を飲んだ。

「ブレックス代表、今までありがとうございます」

クワトロが発言台から降りていき、初老の男へ頭を下げる。

「うむ……」

エウーゴ代表であるブレックス・フォーラはそう言ったきり、何も答えない。

「……」

その二人の様子をテイターズズの代表であるジャミトフとシロツコが黙って見つめている。

「シヤア・アズナブル」

唐突にシロツコが席から立ち上がった。その無遠慮な行動にダカールの議会に参加している者達から非難の声が上がる。

「あなたはこれからどこへ行くのだ？」

「のんびりと宇宙旅行にでも……」

「フフ……」

シロツコはそう言い、ニヤリと笑う。

「私も行きたいものだ、シヤア・アズナブル」

「ついて来るかい？」

「遠慮をしますよ……」

シロツコはシヤアへそう答え、周囲へ一礼をしてから再び席へとついた。

「では……」

シヤアは丁寧な仕草で礼をし、足早にダカールの議会場を立ち去っていく。

「コホン……」

議会の進行役の議員が一つ咳をしてから、議会を再開させる。

「……ブレックス代表」

進行役に呼ばれたブレックスは軽く頭を振って、低い声で言葉を放つ。

「私の発言権はクワトロ・バシーナに一任している」

その言葉に議員達が微かに騒いだ。

「クワトロ代表はエウーゴの事について、何一つ語っていませんぞ？」

「構いません」

ブレックスはそうハッキリと言った。その言葉に進行役の男が頷いた。

「では、次に」

彼は議会を進行させる。

「テイターズ代表、ジャミトフ・ハイマン」

ジャミトフが軽く頷いてから、席を立ち上がる。そのまま、中央の発言台へと歩いて行く。

「ブレックス」

ジャミトフが途中の席にいるブレックスへ顔を向けずに話しかけた。

「飼い犬に手を噛まれたな？」

「いずれはこうなると思ってはいた」

「そうだろうか」

「エウーゴの内部分裂は私の目から見ても面白いものだよ、ジャミト

フ」

「そうか……」

ジャミトフは軽いため息をついたようだ。

「まあ、もつとも……」

「何だ？ ジャミトフ？」

「テイターンスも同じだがな」

ジャミトフはやや哀しげに呟き、発言台へと歩いていった。

「シャア……」

アムロはジュースを飲みながら、暗い部屋で黙ってラジオを聴いている。

「何を考えている……」

その言葉に答えるものは誰もいなかった。

「始まりだな……」

ネオ・ジオンの旗艦「グワダン」のブリッジから一人の女が宇宙をその鋭い目で見つめながら呟いた。

「シャアが帰って来ることに、ミネバ様はお喜びになるかな……」

ネオ・ジオンの形式上の少女の顔を思い浮かべながら、女はその顔に少し笑みを浮かべた。

第30話 ニュータイプの残の念

「ティターンズ製のZガンダム？」

「性能はエウーゴのZと互角という意味だ」

ジェリドの言葉にシロッコが軽く頷く。

「昆虫みたいな外見のくせにな……」

ジェリドが最新型のモビルスーツ「ガブスレイ」の装甲を手の甲で叩く。

「こいつならば、赤い彗星でも何でも落とせる」

「太鼓判かい、シロッコさん？」

「後はパイロットの腕しただよ」

「フン……」

シロッコの言葉に不機嫌そうな声を出しながら、ジェリドはガブスレイのデータが記入された資料を眺める。

「バイオセンサー？」

ジェリドが特殊と銘が打たれたページに書かれている単語を読み上げた。

「ニュータイプのサポートシステムだよ」

「俺達はニュータイプじゃないって……」

「Zガンダムにもバイオセンサーは搭載されている」

シロッコが肩を竦めながらニヤリと笑う。

「つけなければアンフェアだろう？」

「どちらにしろ、後はパイロット次第か」

ジェリドはそう言いつつ、ハンガーへ入ってきたマウアーへ手を振った。

「金ぴか狩り？」

「最近、ティターンズと連邦の部隊を襲っているモビルスーツの事だ」

シロッコの言葉にジェリドはガブスレイのコクピットの中で腕を組みながら首を捻る。

「エウーゴのクワトロの奴かな？」

「元エウーゴだろう？」

「だったな……」

ジェリドは以前のダカールでの演説内容を思い出した。

「ネオ・ジオンにでも行ったかと思っただがな……」

「詳しくはわからんがな」

シロッコも首を傾げながら、話を続ける。

「何でも、無差別に襲っているからな」

「見過ごす訳にはいかないってことかしら？」

「そうなるな」

ガブスレイの二号機に乗っているマウアーへシロッコはそう答える。

「なあシロッコさん」

「ん？」

「あんたは」

ジェリドがシロッコの旧式の試作可変機を呆れたような目で見つめながら言葉を続ける。

「そんな機体で大丈夫なのか？」

「エウーゴからの貰い物だからな、このメタスは」

シロッコがメタスをジェリド達のガブスレイの後ろにつける。

「女からのプレゼントだ。有効に使わなくてはな」

「エウーゴに女が？」

「いるんだよ、ジェリド」

「手の早い人だ……」

ジェリドはため息をついてから、ガブスレイをシロッコの前につかせた。シロッコ機にマウアーのガブスレイが近づく。

「そんな機体で足手まといにならないでくださいね、シロッコ？」

「天才は筆を選ばずだよ、マウアー」

「ブン……」

シロッコとどうしても波長が合わないマウアーは一つ鼻を鳴らし、ジェリド機の隣へついた。

「あれだな」

ジェリドが漆黒の宇宙の中、遠目に見える金色のモバイルスーツの姿を確認した。

「あれのサブ・フライト・システムが強力らしい」

「そいつも金色とはな」

シロツコの言葉にジェリドは金に輝くモバイルスーツを眺めながら苦笑する。

「ビーム・バリアーがあるらしい」

「厄介だな……」

「心配するな」

シロツコのメタスの機首がガブスレイの長大なビームライフルを指すように動く。

「フェダーイン・ビームライフルならば、何発か撃てば貫通できる」

「信じられないスペックだったな、そのビームライフルは」

ジェリドは出撃前に再確認した機体データの数値を思い出した。

「まあ、いい」

ジェリドは自信ありげに呟く。

「十秒で片をつけてやる」

「十秒は無理よ、ジェリド」

「うるさい、マウアー」

ジェリドは自分の独り言に口を挟んだらマウアーが乗る機体を軽く睨んだ。

「ティターンズか？」

クワトロはその宙域で新たな獲物を物色している最中に、接近してくる三機の高機動機に気がつく。

「悪く思うなよ」

クワトロの乗る百式を支えているサブ・フライト・システム「ベルコート」の機首をその機体の方向へ向けた。

「いくぞ、マウアー!!」

ジェリドは掛け声と同時にガブスレイを百式へと突進させる。

「沈め!! 金ぴか!!」

ジェリドのガブスレイから高出力ビームライフル「フェダーイン」が放たれる。

「甘いな!! ティターンズ!!」

軽々とジェリド機からのビームを避けたクワトロはティターンズの機体から距離を取ろうとした。

「もう、あと二十機ぐらいは連邦とティターンズの機体を落とさなければ!!」

クワトロの百式を乗せたベルコートが大きな弧を描いて旋回する。

「ハマーンの機嫌が直らんのだよ!!」

「あんたの痴話喧嘩の為に俺たちを落とすのか!」

「どのみち、敵同士だろう!」

「ふざけるな!!」

叫ぶジェリド機へベルコートからの二条のビームが放たれる。その内の一つがジェリド機にかすった。

「痛くも痒くもねえ!!」

「痛いわよ!!」

どうやら、ビームが流れ弾となり、マウアーの機体へ命中したようだ。

「マウアー!?!」

「平気よ!!」

マウアーのガブスレイからフェダーインが轟音を立ててクワトロへ向かう。

「高出力ビームか!! そいつは!?!」

その一撃でベルクートのIフィールドバリアーの出力が落ちたようだ。だが、そのフェダーインは百式へ損害は与えていない。

「ジェリド!!」

「何だ!! シロツコさん!」

「ネオ・ジオンの増援だ!!」

クワトロの百式の後方から、ネオ・ジオンの部隊が接近してくる事をシロツコの脳裏が感じた。

「何も無いぞ!」

「私はニュータイプだよ!! マウアー!!」

「嫌味な!!」

マウアーの悪態を聞き流しながら、シロツコがジェリド達から離れていく。

「シロツコ!」

「増援は私に任せろ!!」

「助けてやれねえぞ!」

「大丈夫だろう!! 多分!!」

「多分ってなんだよ!」

「勘だよ!!」

「勘で戦いが出来るか!!」

「何か救援が来るような感覚があるのだよ!!」

「あてになるものかよ、シロツコ……」

ジェリドの呆れた声を尻目にシロツコのメタスが戦列を離れていった。

「これだから、ニュータイプは……」

「よそ見を!!」

クワトロのベルクートから何筋かの光が放たれた。

「何だ!」

その光を怪訝な顔で見つめているジェリドへ虚空からビームが疾る。

「まさか、サイコミュとやらか!」

寸前でそのビームをかわしたジェリドの額へ汗が流れる。

「ファンネルで攻撃すれば、いくら高性能機でもな!!」

小型サイコミコム端末であるファンネルと連動して、クワトロの百式からビームライフルが放たれる。

「くそ!!」

ジェリドはブースターを噴かせながらそのビームをかわし、肩のビーム砲でファンネルを狙撃する。

「何!? ファンネルが!?!」

クワトロが驚いた声を上げた。

「金ぴかのサイコミコムが見えた!?!」

ジェリドはなぜ自分がファンネルという名前のサイコミコム端末を撃ち落とせたのか、自分でも理解できない。

「ニュータイプだともいえるのか!?!」

叫ぶクワトロから再びファンネルが放たれる。

「ジェリド!!」

マウアーのガブスレイがジェリドを突き飛ばす。そのマウアー機の脇をファンネルのビームが通りすぎた。

「そこ!!」

マウアーのフェダーインが自機を攻撃してきたファンネルを撃ち落とす。

「地球に魂を引かれた者がニュータイプに成るなど!!」

「やれちゃ悪いか!?! クワトロさんよ!!」

一瞬間が出来たクワトロ機へガブスレイのフェダーインが命中する。

「Iフィールドがバーストしたか!!」

バリアーを貫通したフェダーインのビームが百式の肩をかすめた。

「いける!!」

ジェリドはマウアーと連携をとりながら、百式と宙域を飛び回るファンネルを攻撃していく。

「おのれ!!」

シロッコのメタスが苛立つ声をあげながら、数十機のネオ・ジオン製の可変モビルスーツに追われてジェリド達の宙域へ接近してくる。

「何をやっているんですか!!」

「カトンボの数が多すぎるのだ!!」

マウアーへそう言いながらも、シロッコは反転し一機のネオ・ジオンの機体をビーム砲で撃破する。

「シロッコ!! 前!!」

「わかっている!!」

シロッコ機の前から数機のモビルスーツが接近してくる。

「あれはエウーゴの連中だ!!」

ファンネルの攻撃を左脚に受けながら、ジェリドが忌々しげに叫んだ。

「シロッコ!!」

そのエウーゴの機体の内の一機、緑色の重モビルスーツがシロッコへ声を上げる。

「レコアか!!」

シロッコのメタスが可変し、ネオ・ジオンの機体へビームを放つ。同時に放たれたジオンの機体からのビームを寸前でシロッコはかわした。

「まずい!!」

フル稼働させたメタスの駆動部から火花が散る。

「レコア!! 恵みをくれ!!」

「何言っているの!?! シロッコ!?!」

「私は私の上に立つのは女性だと思っている!!」

「素直に助けてくれと言いなさい!!」

レコアと呼ばれた重モビルスーツのパイロットが呆れた声を出しながら、機体背部のミサイルを放つ。

ボオ!!

ネオ・ジオンの機体の目前で分裂した多弾頭ミサイルがシロッコを追っていたモビルスーツを破壊する。

「パラス・アテネのミサイルを改造したか?」

「悪くって?」

「いや……」

レコアの言葉にシロッコは苦笑いをしながら首を振る。そのシロッコへネオ・ジオンの機体から再びビームが放たれた。

「おうのれ!!」

シロッコが呻きながらそのビームをかわす。メタスのブースターの内の一つが負荷に耐えきれず爆発する。

「助けるわよ!! カミーユ!!」

「何で!？」

追い付いたZガンダムから、カミーユの驚いた声が響いた。

「ティターンズの連中をなぜ!？」

「裏切ったクワトロが憎くなくって!？」

「それはあなたがフラれたからでしょう!？」

「女の名前のくせに女の気持ち解らない下衆な坊主!!」

「なんだって!!」

レコアの罵り声にカミーユが怒りの声を上げた。

ギユア!!

カミーユ達の近くをファンネルから放たれたビームが流れ弾としてすり抜けた。

「ほらほら!! クワトロは私達を殺すつもりよ!!」

どこか嬉しそうな声を出しながら、レコアのプラス・アテネがクワトロの百式へ立ち向かっていく。

「何をやっているのだ!! シロッコ!？」

被弾が激しく、一時後退したマウアー機からシロッコ機へ大声が飛ぶ。

「メタスが動かん!!」

「情けない!!」

マウアーはカミーユのZへ一瞥をすると、そのまま後方へと大きな弧を描く。

ガガツ!!

ネオ・ジオンの部隊からシロッコとカミーユへ火線が疾った。

「ええい!!」

カミーユは叫ぶと、クワトロと戦っているレコアへ加勢しようとする

る。

「まてい!! 小僧!!」

置いてきぼりをくらったシロッコがカミーユへ叫ぶ。

「俺達の後ろから来る連中に助けてもらえ!!」

「人非人め!!」

「助けてやるだけでもありがたいと思えよ!! シロッコとやら!!」

カミーユはシロッコへそう吐き捨てながら、接近してきたクワトロ機へビームライフルを連射する。

「カミーユ!？」

クワトロのベルクートへビームが直撃した。

「よくやったわ!! カミーユ!!」

喝采を上げたレコアがプラス・アテネの残りのミサイルを全弾発射する。

「袖にされた女の恨み!! 思い知れ!!」

「そんなに私が憎いか!! レコア!？」

「ニューな男の為には、オールドな男は抹殺する!!」

「ハマーンと言い、女と言うものは!!」

クワトロはそのミサイルの束を次々と撃ち落とすが、ついにサブ・フライト・システムであるベルクートの左半分が破壊された。

「今だ!!」

ジェリドのガブスレイからフェダーインが放たれた。

バアーン……!!

「邪魔をするな!! カミーユ!!」

偶然にカミーユ機のライフルからのビームにフェダーインのビームが当たり、二条のビームが干渉しスパークする。

「邪魔はそっちだ!! ジェリド!!」

「お前に助けてもらうほど、俺は落ちぶれてはいない!!」

「ジェリドのくせに生意気だぞ!!」

「なんだと!! このタコ!!」

叫び返すジェリドを尻目に、カミーユはグレネードとライフルを同時に放ち、クワトロのベルクートを破壊した。

「ざまを見たか!! クワトロの野郎!!」

コクピット内でレコアが歓声をあげ、拳を振り上げる。

「怖い女だ……」

レコアの声に少し顔をひきつらせながらも、どうにかメタスをシロッコは動かし、ネオ・ジオンの部隊からの攻撃を回避し続ける。

「レコアさんは女の私から見ても恐いから……」

「そうねえ、ファ」

シロッコを援護する形になったエウーゴ部隊の女性パイロット達が、その言葉を掛け合いながらネオ・ジオンのモビルスーツの迎撃に向かう。

「ん!？」

シロッコとカミーユが同じタイミングで謎の感覚が身体を包んだ。

「シャ……!!」

「新手のファンネル!？」

カミーユは叫びながら、ファンネルからのビームをシールドで防ぐ。一基から放たれたビームがジェリド機のフェダーインを破壊する。

「ニュータイプを増援か!!」

可変機能が故障したガブスレイを少し後退させながらジェリドが叫ぶ。

「誠意は見せてもらったよ、シャア」

純白のモビルスーツがベルクートを失った百式へ接近してくる。

「ハマーンだど?」

シロッコは脳裏に響いた感覚に顔をしかめた。

「ネオ・ジオンの指導者が出陣ですって?」

シロッコのメタスを支えながら、量産型Zに乗るブルーが訊ねる。

「危険な相手だろう……」

そう言いながらシロッコは唇を噛んだ。

「少し、あやつらにネオ・ジオンの力を見せてやろうか」

白いネオ・ジオンのモビルスーツが百式の近くに立つ。

「キュベレイを持ち出してきたか、ハマーン」

「お前が不甲斐ないからだよ、シヤア」

軽く百式の機体からかうような視線を向けながら、そのキュベレイと言う白い機体はカミーユ達の方へ向いた。

「シヤアが私の元へ戻ってきた手向けだよ」

キュベレイは背部のコンテナからファンネルを放出させる。

「そのクワトロのどこにそんな魅力があつて？ ハマーン・カーン？」

レコアが怒った声を出しながら、キュベレイを睨み付ける。

「む……」

ハマーンが少し答えに困ったようだ。

「女に責任がとれない上に、その相手には母性とかなにやらを求めたいなあとほざいてんのよ、そいつは」

「ちよつと、レコアさん……」

「おい、エウーゴの女……」

語りだしたレコアにカミーユとジェリドが何か心配そうに声をかける。

「ハマーンに母性などあるものか……」

クワトロがぼそりと呟いた。

「ガア!!」

ファンネルからのビームが百式の下半身を吹き飛ばした。

「口の聞き方に気を付けてもらおうか、シヤア」

「くっ……」

「私についてくるか、それとも……」

ハマーンがキュベレイのコクピットで酷薄そうに笑う。

「朽ち果てるかを選べ、シヤア」

「そんな決定権がお前にあるのか!? ハマーン!？」

「あるだろうに?」

ハマーンが呆れたようにクワトロへ向かって笑いかけた。暫しの沈黙がその宙域を支配する。

誰かが唾を飲み込む音がした瞬間、クワトロがその沈黙を破った。

「頼む、私を導いてくれ。ハマーン……」

その命乞いとも取れるクワトロの言葉に、その場にいる全員がげん

なりとした。

「クワトロ大尉……」

カミーユがため息と同時に言い放つ。

「もう俺はあなたをクワトロ大尉と呼びませんよ……」

カミーユがちらりと近くのパラス・アテネを見る。何かコクピットの中にいるレコアの目の付近の筋肉がピクピクと痙攣しているのをカミーユは感じた。

「レコアさん……」

「ちよつと黙っていて、カミーユ君」

レコアがその顔に不気味な笑みを浮かべる。

「今、私は何をするかわからないからね、カミーユ君、カミーユ君」

「は、はい……」

脳裏に恐怖を感じたカミーユは少し機体を下げさせた。

「俺はあんな男に煮え湯を飲まされてきたというのか？ マウアー

……？」

「実力と器量は一致しないわ、ジェリド」

戦線へ復帰したマウアーがジェリドにそう言つて慰める。

「全軍、撤退せよ」

ハマーンはため息をついた後、クワトロの百式を引きずりながらネオ・ジオンの部隊へ撤退命令を出す。

「命拾いしたな、地球の人間たちよ」

ハマーンが傲慢な口調でそう言い放つ。

「地球圏を頼んだぞ、若者たちよ」

キュベレイにぐいぐいと引きずられている百式からクワトロの声が響く。その情けない姿をカミーユ達は何とも言えない表情で見つめていた。

「ジェリド」

「あん？」

お互いにうんざりした顔をしているカミーユとジェリドが通信を交わす。

「このまま俺達と戦うか？ ジェリド？」

「今回は仕切り直しといこうじゃないか、カミーユ」

「そう言ってくれたか、ありがたい」

「口惜しいがな……」

不満足に呻くジェリド機からカミーユとレコアの機体が離れていく。

「おい」

半壊したメタスからシロツコの声がした。

「恵みをくれ」

「だから、素直に助けてくれと……」

シロツコへぶつぶつ言いながら、レコアのパラス・アテネがシロツコの機体を引っ張っていく。

「どうして私はこんな感じの男ばかりを好きになるのかしら……」

「私は世界の統治するのは女性だと……」

「うるさい!! シロツコ!!」

怒鳴りながらシロツコを引っ張るレコアのパラス・アテネの後ろを気の抜けた顔をしたカミーユ。そしてクスクスと笑い会うファとブルーがついていく。

「俺達も帰ろうか、マウアー……」

「そうね……」

二人のガブスレイはテイターズズの基地へと帰投する。しばらく宙域を飛行したあと、ジェリドが唐突に叫んだ。

「ああ!?!」

「どうした!! ジェリド!?!」

「捕虜だよ!!」

「何!?!」

顔を蒼白にしたジェリドがマウアーの方へ向いて叫ぶ。

「シロツコの旦那がカミーユ達の捕虜に取られた!!」

「ああ!!」

マウアーもその事に気づき、大声を上げる。

「ど、どうしよう!?! マウアー!?!」

「落ち着いて!! ジェリド!!」

ひとしきり騒いだあと、二人はそろって深いため息をつく。

「とりあえず、報告だ……」

「ええ……」

二人は肩を落としながら、ガブスレイを帰路へとつかせる。

「俺達、軍法会議ものか……?」

「今さら、考えても仕方がない……」

「だな……」

二人は再びコクピット内で深くため息をついた。

第31話 ミツシング・リンク

「ネオ・ジオンの総本山、アクシズか……」

ユウはティターンズの宇宙での最大拠点「ゼダンの門」から遠目に見える巨大な要塞化されたアクシズの姿を眺める。

「しかし、あの光は……」

ブループラウスのマリオンを通じて見える、アクシズ全体を包んでいるおぼろげな光をユウは険しい目で見つめている。

「深蒼の諦観の光」

アクシズの光が深い青色に輝く。

「そして、紅い願望の光」

光の色が青から紅い輝きへと変わる。

「しかし、あの時の碧蒼の光はないな……」

そう呟きながら、ユウは一年戦争時にマリオン——EXAMの精霊としてのマリオンだ——が見せた「蒼い光」を脳裏に思い浮かべた。

「ネオ・ジオンの行動原理が連邦への復讐や望郷の想いから来ているせいかな？」

ブループラウスをゼダンの門周辺の宙域で巡回させているユウへフィリップの機体が近付いてきた。

「アクシズの覗き見か？ ユウ？」

「まあな……」

「マリオンちゃんはお顔を染めなくても、お会話が出来るようになったんだってな、ユウ？」

「慣れたせいもあるだろうな」

そう言いながら、ユウはブループラウスのバイザー状の頭部をフィリップ機の方へ向けた。

「それでも、やはり」

木のカバーで覆われたマリオン・システムのスイッチをユウはカバー越しに軽く触れた。

「スイッチを入れた方が感度が高い」

「生本番というわけか」

「おいおい……」

ユウは肩を竦めながら、ニヤニヤ笑っているフィリップが乗る機体の隣へつく。

「ネオ・ジオンと戦いになっちまったら」

フィリップが軽くため息をついた。

「二ムバスやローベリアと言う姉ちゃんともやり合う羽目になるのかねえ……」

「それよりも先に」

ユウが小さく見える地球へ目をやった。

「エウーゴとティターンズのケリが先かもしれない」

「そうかな……?」

「エウーゴの一部が連邦とティターンズに吸収されたのは知っているな?」

「ああ」

ユウの言葉にフィリップがやれやれと言った風に頭を振る。

「エウーゴはもうおしまいかな?」

「さすがに最期の一戦くらいはあるかもだよ、フィリップ」

「かえって、今残っているエウーゴの連中の結束は高いかもしれないねえな……」

「それである程度エウーゴが消耗したら、連邦内部の内輪揉めだけは終わりになるかもしれない」

「嬉しいんだか、嬉しくないんだか……」

フィリップがそう呟いたあと、再びユウに訊ねる。

「連邦はどうなるのかねえ……?」

「わかるもんか、フィリップ」

なげやりに言い放ったユウへフィリップが慌てて言い直す。

「そうじゃない、ユウ」

「じゃあ、どういう意味だ?」

「俺達の部隊の処遇という意味だよ」

「なんだ、それが……」

ユウは深く息を吐きながら、軽く笑う。

「俺達はティターンズ派の連邦軍だからな」

「上司がジャミトフの旦那だから仕方がねえか……」

「今まで、世話になりすぎている」

「ツテもあるしなあ……」

フィリップがサマナ達ティターンズのメンバーの名前を一から口にし始める。

「ジェリドやシロツコ……」

「馴れ合えちまうもんだな、ユウ」

「ああ……」

ユウはその言葉に対して、少し顔に笑みを浮かべた。

「そしてな……」

ユウは遠くに見えるアクシズを眺めながら、フィリップへ話しかける。

「その後のネオ・ジオンの今後の動向に対応すれば、この一連の戦争は終わるさ」

「そうかな……」

「そうさ……」

二人の機体の正面にスペースデブリ(宇宙のゴミ)が広がっている。「未来の歴史の教科書に……」

ユウとフィリップの機体が離れる、その間に広がるデブリを眺めながら、フィリップが呟く。

「この戦争は何て名前がつけられるのかねえ……」

「エウーゴとティターンズだけの戦いで終わったならば」

「通り過ぎたデブリ帯を見ながら、ユウは話を続ける。
「単なる大規模な内紛と言うことで片がつけられたかもしれないが
な」

「そのわりには地球全体を巻き込んだ戦争だったじゃないかい？ ユウ?」

「そうだな……」

フィリップへ気のない返事を送りながら、ユウはブループラウスを母艦ストウラートの方向へと向ける。

「エウーゴとティターズは今後はどう動くかな？ フィリップ？」
「どちらも単純に今戦っている相手だけを、どうにかして終わる話じゃないからな……」

ユウの言葉にフィリップがコクピットで腕を組みながら答える。
「エウーゴとティターズが潰しあつたら、ネオ・ジオンの完全勝利だな」

フィリップのその言葉にユウが頷く。フィリップが続けて喋る。
「それをジャミトフさんや、エウーゴのブレックスとやらも解っているはずだがね……」

「どの勢力が先手を取るのかな？ フィリップ？」
「そうかもしんねえな……」

そう言いながら、フィリップは機体の中からゼダンの門へと顔を向けた。

「ま、俺達は」

フィリップがユウへ笑いかける。

「給料分の働きをするだけだよな？ ユウ」

「そうだな……」

フィリップのストレートな言い方にユウは苦笑した。

「ユウ、お前さんは」

「ん？」

「何で連邦軍に入ったんだ？」

「何でって……」

ユウは首を捻りながら過去を思い出そうとする。

「孤児院から出て……」

ユウはそう言った瞬間、凄まじい寒気に襲われた。

「フィリップ……」

ユウは震える声で隣のフィリップ機へ話しかける。

「どうした？」

「お前は……」

「おい大丈夫か？ ユウ？」

ユウは口の中の唾をグツと飲み込む。

「お前は、何のために連邦の軍に入ったんだ？」

「なんだよ……」

フィリップが変な物を見るような目でユウの機体を眺めた。

「驚かすなよ、ユウ……」

「あ、ああ」

ユウは胸の動悸を抑えながら言葉を絞り出す。

「すまん、フィリップ」

「まあ、俺は……」

フィリップはゼダンの門を眺めながら話をしだす。

「サイド6に産まれて、まあ普通の生活だな、パン屋の親父達を手伝ったりして……」

「そうか……」

「親父の知り合いに軍の人間がいてな、そのツテだよ」

そうやってフィリップは肩を竦める。

「このままパン屋を継いでも、味気ないとも思ってたしな」

「何となく連邦にか」

「まあねえ……」

「確か、親父さん達は一年戦争が始まる前に……」

「ああ、事故であの世にな……」

フィリップが微かに寂しそうな顔をした。

「葬式の為の休暇を取った後、昔のモルモット隊への転属命令さ」

「ジオンとの戦時中に休暇を取った事への当て付けかな？」

「そうかもな」

そう言いながら、フィリップがちらりと遠くのアクシズに目を向けた。

「何となくで入った軍だから、除隊して親父達のパン屋を立て直すとも思ってたがねえ……」

「EXAMに関わってしまったからな」

「へっ……」

ユウの言葉にフィリップは軽く口の端を上げながら皮肉気に笑う。

「まあ、それだけじゃないがね」

「他に理由が？」

その言葉にフィリップが呆れた顔でユウを見つめる。

「同じ釜のメシを食った仲間がいるじゃねえかよ……」

少し照れたようにフィリップは呟いた。

「仲間か……」

「違うのか？ ユウ？」

「あ、ああ」

ユウが慌てて返事をする。

「仲間だな、俺達は」

「本当に大丈夫か？ ユウ？」

フィリップの声が少し真剣な口調になる。

「なんでもない」

「そうか……」

そう呟いたきり、フィリップは黙って自分が乗る機体のスピードを落とす。

「ゼダンの門の医者にも、身体の様子を見てもらえばどうだ？ ユウ？」

「気を使ってくれてありがとうな、フィリップ」

「なに……」

フィリップの機体がモビルスーツ運用重視型巡洋艦「ストウラー」の発着カタパルトへ接近する。

「おい、ユウ……」

ユウのブループラウスがついてこない事に気がついたフィリップは後ろを振り返る。

「もう少しだけ飛んでくる、フィリップ」

「全く……」

ゼダンの門から離れていくユウのブループラウスをフィリップが呆れた顔で見つめる。

「俺は……」

ユウは先程の寒気の原因について考えていた。

「どうやって連邦軍に入ったんだ？」

コクピット内にユウの震えた声が響いた。再び口の中の唾を喉に通す。その喉から出た掠れた声が自分のパイロットスーツの頭部バイザーを撫でた。

「記憶がない……………」

「焼けたぞ」

シロッコが食堂へパンケーキを持ってくる。

「旨いな」

カミーユがパンケーキをがつつきながら感想を言う。食堂の他のアーガマのクルーもその美味に舌鼓を打つ。

「カミーユ、もう少し上品に食べなさいよ」

「お袋かよ、ファ」

ファと呼ばれた少女が少し怒った口調でカミーユへ注意をする。厨房からシロッコが顔を出した。

「少し、手伝ってくれ」

「あつ、はい」

シロッコの声にファとレコアが椅子から立ち上がり、厨房へ入っていく。

「シロッコのシロップね……………」

「指を突っ込むな、レコア」

レコアが鍋のシロップを舐めたのを、シロッコが軽く睨んだ。

「全く……………」

シロッコがぶつぶつ言いながら、トッピングの果物を切り刻む。

「乾燥フルーツでよくこここまで出来るわね」

「捕虜をこきつかうなど……………」

「無駄飯は許さなくてよ？」

「私を誰だと……………」

シロッコは不機嫌そうに呟きながら、鍋のシロップの味を確かめた。

「あなたにこんな才能があったなんて、驚きだわ、シロッコ」

「私は天才だ」

「そうだったわね」

そのシロッコの常套句にレコアが苦笑する。

「食事に時間をかけるのは嫌いなものではなかったの？」

「その考えが、料理を作る事が出来ない理由にはイコールにならないだろう、レコア？」

「確かに……」

レコアが笑いながら、鍋のシロップを再び舐めた。

「うーん、美味しい」

「何しに来たのだ、お前は……」

レコアの様子に呆れた顔を見せながら、シロッコはパンケーキを皿に乗せた。

「持っていけ、小娘」

ぶつきらぼうにシロッコはファという少女へ言い放つ。

「捕虜の立場をわきまえた方が良いわよ、シロッコさん？」

「早く持っていけ」

「はいはい……」

ファがテーブルへ追加のパンケーキを持っていく。すれ違いざまにカミーユが厨房へ入ってきた。

「シロッコ、食べ終えたぞ」

「自分で洗え」

「俺は男だぞ？」

「私だって男だ」

冷たくそう言いながら、シロッコが粉を溶き始めた。

「あなたの負けよ、カミーユ」

「ふん……」

レコアの言葉に軽く鼻を鳴らしたカミーユは、自分の使い終えた皿を洗い始めた。

「おい、シロッコ」

「何だ？ 小僧？」

「どこでこんな料理を覚えた？」

その言葉にしばしシロツコが無言になる。

「私は孤児院の出身でな」

しばらくしてからシロツコが話を始める。

「そこで習ったのだ」

「なるほど……」

皿を洗い終えたカミューユが頷く。

「私はそこの孤児院に、少し歳が上の兄がいたらしくてな」

「大変!! シロツコ!!」

鍋のシロツプが煮詰まり始めたのを見て、レコアがシロツコへ助けを求める。

「少しは自分で何とかしろ!! レコア!!」

「料理なんてしたことないわよ!!」

見かねたファアが鍋を掴む。

「冷えたらパンケーキにかけるわね」

「よく冷やせよ、小娘」

「ファと言う名前があるわ」

「どうせ、敵同士だ」

「嫌みな人」

ファアがテーブルに向かう。自分のパンケーキを食べるつもりのように。その姿を尻目に皿洗いを終えたシロツコは椅子に厨房の小椅子に座って一息つく。

「兄は私のこのパンケーキを喜んで食べていたようだ」

「兄か……」

カミューユが複雑な表情をする。

「会いたいか? シロツコ?」

「別に」

無関心そうにシロツコは呟く。

「大した興味はない」

「冷たいな……」

「お前も肉親に対しては冷たそうだな?」

シロッコのその言葉にカミーユはムツとした顔をする。

「俺の家庭環境の事を知っているのか？」

「私が孤児であると言ったとき」

シロッコが水を飲みながら、口の端を歪める。

「どこか、お前は羨ましそうな顔をした」

「ふん……」

「常人ではあり得ん反応であったな」

そう言っつて、シロッコは椅子から立ち上がる。

「まあ、お前の家の事などどうでもいい事だ」

「やっぱり、嫌な奴だよ……」

カミーユはそう言いながら、厨房から出ていこうとした。

「おっと!!」

「ごめんなさい!! カミーユ!!」

すれ違いざまに厨房へ入ってきたブルーにカミーユがぶつかりそうになった。

「シロッコ!!」

「何だ!？」

「ラーディツシュの艦から追加の注文よ!!」

「あれだけあつたのにか!？」

「ヘンケン艦長とエマさんが沢山食べちゃって!!」

「天才の足を引っ張るだけの俗人が!!」

シロッコはそう悪態をつくくと、コンロへ向かう。

「粉が足りなくなるかもしれない……」

「ラーディツシュから持ってきたわ」

「嫌な気の使い方だな……」

シロッコがブルーへ苦虫を噛み潰したような顔をする。

「その気の使い方ジャミトフにでもしたらどうだ?」

「私の事をしっつていて?」

「シャアとクワトロの事ぐらいには有名だな」

シロッコが洗ったフライパンを拭きながら言葉を返す。

「ジャミトフはティターンズの総帥などと言う器ではないな」

「なぜ？」

「離縁した娘の事を切り捨てられない男が大義などを為せるものか」

「父は私を？」

「希に、ジャミトフの頭の内が読める場合がある」

「父がニュータイプとでも？」

「そこまでは言わんよ」

ブルーへそう話をしながら、シロツコが粉の様子を見る。

「小麦ではなく、大麦ではないか？」

「それでは出来なくて？」

「私ならば問題はない」

残った小麦とブルーが持ってきた大麦を計りを使いながらシロツコは混ぜ始める。

「ジャミトフにでも会いにいつてやれ、女」

「あなたに忠告される筋合いはなくてよ？」

「お前達の間係を見てみると、私の感性が苛立つのだよ」

「大きなお世話よ!!」

ブルーは怒りながら、厨房を出ていった。

「これだから、俗人は……」

「シロツコ」

レコアが走り去って行ったブルーを変な目で見ながら、シロツコに訊ねる。

「手伝いたいんだけど？」

「お前では太刀打ちできない、レコア」

「皿洗いは出来るわ」

「それは頼む」

皿洗いを始めたレコアにファが大量の皿を持ってきた。

「手伝うわ、レコアさん」

「お願い、ファ」

二人の女の横で、シロツコが何か物思いにふけりながら、パンケーキを焼いている。

「はて……っ？」

シロツコの脳裏にふとユウ・カジマの顔が浮かんだ。

「何者なのだ、あやつは？」

「パンケーキ!! 美味しいパンケーキ!!」

厨房からアーガマのクルーが追加を催促する。その声にシロツコはため息をつく。

「隠し腕、じゃない。隠し味でもいれるかな？」

シロツコは催促する声に顔をしかめながら、パンケーキをひっくり返した。

「口直しが欲しいなあ……」

カミーユの声に何人かのクルーが賛同する。

「仕方がない、汁物でも作るか」

シロツコが冷蔵庫から玉ねぎを取り出す。

「私も何か作ります」

「頼む、小娘」

「フアですよ……」

フアは口を尖らせながらも、最期のパンケーキを焼き上げた。

「戦うしか出来ないニュータイプが出来損ないよりも」

シロツコはエプロンで手を拭いてから、チラリとカミーユへ目をやる。

「お前の方がよほど役に立つ、小娘」

「そうやってレコアさんを口説いたんですか？ 天才さん？」

「どうか……」

フアへ気のない返事をしたあと、シロツコはまな板へ野菜を乗せる。

「ふう……」

手に取った玉ねぎを見つめながら、シロツコは息を一つ吐く。

「私の製作したジ・オを誰か勝手に使っていないだろうな……?」

そう呟いてから、シロツコが包丁を玉ねぎへ差し込んだ。

第32話 YOU

「ネオ・ジオンは何と云っていますか?」

ユウが目前に広がるネオ・ジオンの大部隊を眺めながら、ティターンズの大宇宙基地「ゼタンの門」にいるジャミトフへ通信を入れる。

「一部の部隊の独断だと言っておるよ、ハマーンは」

「独断でこんな大部隊がねえ……」

ユウが皮肉げに呟いた。

「ハマーンと言う女はこういう手をよく使いますか?」

「好んで使うだろうよ……」

ジャミトフがゼタンの門の司令室で苦笑する。

「エウーゴとティターンズのパワーバランスを取りたいのであろうな」

「今はティターンズが優勢であるからですか?」

「うむ」

不機嫌な顔をしたジャミトフが自分が座る椅子の肘掛けをコツコツと叩く。

「エウーゴと我らティターンズの戦闘力が拮抗するばするほど」

「その二つが激突したときお互いが受けるダメージが大きくなりま
すか……」

「そして、ネオ・ジオンが全てをかつさらって終わりだよ、この戦争は」

ジャミトフは部下から手渡された報告書を受け取り、ぎっとその文
書を眺めた。

「ニムバス君と量産型サイコ・ガンダムの部隊がいるそうだな」

「サイコ・ウルフとニムバスか……」

ユウが昔の仲間の名前とそのモビルスーツの愛称を呟く。

「良い手はないかな? ユウ中佐?」

「ティターンズの損害を押さえる手ですか?」

「それもあるが」

ニヤリとジャミトフが笑う。

「戦いになったら、ティターンズ派の連邦軍を盾として前に押し出さ

ざるを得なくなる」

「テイターズを守る為に、自分達を含む連邦の部隊をですか……」

「出来れば、避けたい」

ユウはその言葉に軽く笑みを浮かべた。

「お気遣いありがとうございます、ジャミトフ閣下」

「皮肉が入った世辞を言っている場合ではないぞ、ユウ」

苦々しげに答えるジャミトフに、ユウはコクピット内で肩を竦めた。

「ニムバスの奴がどう思っているか……」

「そのマリオン・システムとやらでコンタクトが取れないか？」

「そうそう便利なものでは……」

ユウはそう答えながらも、何か脳裏に浮かぶ物があった。

「失礼、ジャミトフ閣下」

「何か策があるのか？」

ユウはそう言うジャミトフからの通信を一方的に切って。マリオン・システムを起動させる。

「やはりと言うか、ネオ・ジオンの連中は敵意に満ちているな……」

ネオ・ジオンの部隊から血潮のように流れる敵意の影をユウはマリオンで捉える。

「だが、ニムバスは……」

一つだけ、不安げに揺らいでいる影を放っている部隊のリーダー格と思わしき機体をユウは見逃さない。

「あれがニムバスだとしたら」

従来の一回りから二回りは大きいそのモビルスーツから放たれる光を、ユウはマリオンを通じてその目で見つめる。

「そいつだけでもどうにかなるかな……？」

ネオ・ジオンの部隊がゼダンの門を包むように展開する。

「中心にはニムバスか」

ニムバスが乗っていると思われる大型のガンダムの姿を確認した

後、その宙域の周囲に視線を向ける。

「なんだかんだ言つて、テイターンズの奴等も出てはいるな」

ネオ・ジオンの数の多さにジャミトフ、または他のテイターンズの指揮官の誰かが不安になったのであろう。ネオ・ジオンと相対する連邦の軍勢の後方にテイターンズのモビルスーツの姿が見える。

「ユウ中佐とやら」

連邦軍の左翼部隊の指揮官から通信が入った。

「何か、立てれる策でもないか？」

最新型の高級量産機であるガンダムMK―IIIからの女性パイロットの声にユウは投げやりに答える。

「おそらく、主軸となつているサイコ・ウルフの部隊は俺達を狙つてくるはずだ」

「変な確信があるんだな」

右翼の連邦部隊のリーダーが皮肉混じりに通信へ割り込んだ。

「それだけだよ、敵の動きで解るのは」

「歴戦のパイロットである君が言う台詞かね？」

その右翼部隊のリーダー機、重武装タイプのモビルスールであるガンダムMK―Vからは呆れた声が放たれる。

「基本的には総掛かりで当たるしかないが」

ユウはそう言いながら、ブループラスのマリオンを起動させる。

「相手が少しでも突出すれば、それを叩ける」

「お前さんがそのタイミングを計れるとも？」

ユウが配属された連邦の中核部隊からのリーダーから疑問の声が投げかけられた。

「俺の機体にそういう装置がある」

「お前さんは後方で高見の見物かな？」

ユウの中央部隊のリーダーがそう言つて軽く笑う。

「こっちは慣れない機体だということにな……」

その中央部隊のリーダーが愚痴をこぼしながら、ユウへ話しを続ける。

「アッシマーとは感覚が違うんだな、このギャプランの改良タイプは

……」

「俺たちの後詰めは多いんだ、ブラン隊長」

ユウが後ろのティターンズ部隊を振り返って見つめる。

「防衛側の強みは生かせる」

「だどいいがね……」

不満げに中央部隊のブラン隊長が通信を切る。

「聞いていたな、モルモット隊」

「了解だよ、ユウ」

フィリップが代表して答える。

「間違いなく、ニムバスは俺達を察知してくるはずだ」

「そのニムバスにネオ・ジオンの部隊全体の流れが引きずられるか

……」

「昔の縁を利用する、嫌なやり方だがね」

ユウはそう言って少しため息をつく。

「ニムバスさんもこっちの思惑には気づくと思いますが？ 隊長？」

「気づこうと、気づくまいと」

ユウはサラの機体に振り返る。

「俺達のやることには大した違いはない」

「所詮、五個の機体しかいない部隊ですからね」

カツがそう言いながらメツサーラのアイドリングを行なう。

「遊軍として動くしかないですね……」

ヘビィバーザムの調整を行いながら、シドレが呟いた。

「来たぞ、隊長」

母艦ストウラートの通信士アフラ通信が入る。

「さて、と」

ユウはマリオンの目で敵軍の影を眺める。

「行きますかね……」

「やはり来たな、ニムバス」

ユウは連邦軍のヘビィバーザム隊をなぎ払いながらユウ達の母艦

ストウラートを目掛けて接近してくるサイコ・ウルフの部隊に注目する。

「ニムバスは迷いを捨てたか……」

サイコ・ウルフ隊の先頭の機体の影は、微妙に揺らぎながらも、確固とした形を作っている。

「やはり、ネオ・ジオンはニムバスの流れに引きずられたな」

ニムバス達に追従してくるように、ネオ・ジオンの軍の編隊が中央へ突出する。その中核部隊を包むように連邦の軍勢が動き出した。

「思ったよりも練度が低いのもかもしれないな、ネオ・ジオンは」

連邦の後詰めを務めるティターンズの軍勢も同じ事を感じたらしい。あえて当初の防衛陣形を崩して、積極的に攻める態勢に入っている。

「とはいえ、油断は出来ない」

そうユウが呟いている内に、ニムバスの部隊がユウ達の間近まで迫ってきた。その部隊からビームの火線がモルモット隊を目掛けて疾った。

「答えてやるか、ニムバス!!」

ユウはブループラウスのビームライフルを構える。ニムバスに追従してきたサイコ・ウルフからインコムによる射撃がユウへ飛んだ。

「ファンネルほどの意思はないが、その分動きが遅い!!」

叫びながら、ユウはライフルで容易くそのインコムを撃ち落とす。

「さすがだな、ユウ!!」

ユウの耳へしばらく聞いていなかったニムバスの声が入ってきた。

「元気でやっているか!? ニムバス!?!」

「見ての通りだ!!」

ユウからのビームライフルによる射撃をニムバスはインコムに衝突させる。

「ビーム反射器か!?!」

そのインコムから反射されたビームを慌ててユウの機体はかわす。

「サイコ・エグザムは芸達者でね!!」

「エグザムの名前を入れたか!!」

「復活のジオンの騎士には相応しいであろう!!」

そう言いながら、ニムバスの半サイコム制御のガンダムはビームライフルを連射する。

「EXAMの味が懐かしくなったのか!? ニムバス!?」

「入っているシステムはマリオンだがな!!」

ニムバスからのビームライフルをかわしながら、ユウはモルモット隊の様子を見る。フィリップのヘビーバーザムからのインコムと連携して、サラがサイコ・ウルフを落とす姿を確認した。

「お前の部隊は練度が低いのでは!?」

「実戦から遠ざかっていたパイロットが多いのだ!! ネオ・ジオンは!!」

ユウの言葉にそう答えながら、ニムバスはカツのメツサーラからのビームをその機体に受ける。

「そんな鏡で!!」

メツサーラの高出力のメガ粒子砲は反射器付きのインコムを吹き飛ばしながら、サイコ・エグザムの機体を叩く。

「リフレクターインコムが!!」

ニムバスが叫んだ瞬間、サイコ・エグザムを謎の光が包む。

「バリアーまであるのかよ!?!」

その光でビームを弾いたサイコ・エグザムを見て、カツが驚いた声を発する。

「なかなかの腕だな、モルモット隊の新入り……」

バリアーが消滅する。その光が消滅したあとサイコ・エグザムの機体の動きが不安定になり、動作がぎこちなくなる。

「やはり、サイコフィールドは負担が大きいな……!!」

ニムバスは機体の制御に苦心しているようだ。その隙をユウは見逃さない。

「ニムバス!!」

急接近したユウのビームサーベルをどうにかニムバスは機体を動かしてかわす。

「今からでも、連邦へ戻る気はないか!?!」

「なんだかんだ言っても、私は強化人間だ!!」

サイコ・エグザムから高出力のビームサーベルが形成される。

「一人では生きてはいけない男だよ!! 物理的に!!」

「仕方がない!!」

ユウはビームサーベルを二刀流にして、ニムバスへ振るう。

「俺はお前が友であると、今でも思っている!!」

「私もお前が好きではあるよ!! ユウ!!」

ニムバスのサイコ・エグザムの胸部から拡散ビームが放たれる。

「腕が落ちたか!? ニムバス!」

ユウが機体を可変させて、ビームの放射をかわした。

「手加減をしている!!」

「そうかい!!」

ブループラウスが高速でニムバス機の周囲を旋回する。

「だが、私は気づいてしまったのだ!!」

「何を!」

「お前には何も無い!!」

「何だと!」

再びユウ機のビームサーベルとサイコ・エグザムの高出力サーベルが交差する。激しい光が舞う。

「心から人を憎む事も、愛する事も!!」

「お前からそんな台詞が聞けるとはな!! ニムバス!!」

「信念も欲望も無い!!」

「言葉で俺をたぶらかす気か!」

「まるで作り物だ!! ユウ!!」

「どういう意味だ!? 言え!! ニムバス!!」

「ならば!!」

ガァーン!!

二機のサーベルが重く重なり合う。

「お前の生涯を語ってみろ!!」

「俺は孤児院で育ち!!」

キーン!!

甲高い音を立てて、二機のビームサーベルが離れた。

「連邦に……!!」

その言葉を最後まで言わずに、ユウは口を閉ざして沈黙する。
「連邦だけがお前の人生か？」

一旦、ニムバスが攻撃を中止する。静かにユウへ訊ねかける。

「今も、このサイコ・エグザムのマリオンを通じて私には解る」
「……」

「お前には、何か欠けているのだ」

ニムバスの言葉に、ユウは身体が硬直して動けない。

「ニムバス」

フィリップ機が二人の近くへやって来た。

「それ以上、言つてやるな」

「フィリップ……」

その言葉にニムバスが顔をしかめながら、フィリップの機体へサイコ・エグザムを向ける。

「俺達だって、馬鹿ではない」

「……」

ユウが顔だけをフィリップ機へ向けた。

「どこか、ユウの俺達への優しさが作り物めいている事は気づいていた」
「なるほどな……」

その言葉にニムバスが目を細める。

「人を褒めるときも怒るときも、どこか教科書通りの事を言っているなど思つてはいた」

「そうだ」

軽くニムバスが頷く。

「昔、私とEXAM機の因縁で戦いあつた時も、何かユウの怒りに違和感があつた」

「俺はあの時はマリオンを道具にするお前に怒りを覚えてはいたぞ？」

「その怒りの元となる感情や信念などが感じられなかったのだ」

「教科書通りの怒りだったとでも?」

「単純な作り話の人物のようにな」

淡々としたニムバスの言葉にユウは乗っているブループラウスの向きを変え、フィリップ達モルモット隊のメンバーを眺める。

「そうだったのか、みんな……」

ユウはマリオンの目で仲間を見渡した。サラやシドレ、そしてカツ達から見える影にニムバスやフィリップの言葉に同意する意思が感じられた。

「だがな、ニムバスさん」

ユウ達の機体の間にフィリップが入り込む。

「ユウが本来、どういう人間かは知らないが」

そう言つてフィリップの機体がユウを指差す。

「その作り物の優しさが本心から出ているのは確かなんだ」

「フィリップさん……」

サラ達がフィリップの言葉をじつと聞いている。

「ニムバス、あんたはユウの何がそんなに気に入らなくなったんだ」

「決まっている」

ニムバスがハイ・ビームサーベルのスイッチを入れ直す。

「その人形のような者に力がありすぎる事だ」

「あんたも腕はユウと互角だろう? ニムバスさんよ?」

そのフィリップの言葉にニムバスは軽く首を振った。

「意思の無い人間が力を持つことは危険なのだよ」

ニムバスがビームサーベルを大きく構える。

「かつての、ニュータイプとマリオンに固執した私のような」

「あくまでも、ユウと戦うつもりか……」

フィリップ達モルモット隊のメンバーがユウ機の前面へ機体を押し出した。ニムバス機の周囲にも他のサイコ・ウルフ達が集まり、陣形を作る。

「ならば」

フィリップのヘビィバーザムが大型ビームサーベルを取り出す。

「俺達が相手になる」

「そうか……」

ニムバスが少し哀しげに呟く。

「戦いのならないと言うことか」

「そうでしようね……」

サラがそう答えながら、シドレ共にフィリップの両脇についた。カツのメツサーラがその三人の上に滞宙する。

「下がっていてください、ユウ隊長」

「……」

カツの言葉に身体が勝手に従い、ブループラウスはニムバスとフィリップ達から離れていく。

「俺は何だ……」

静かに始まったニムバス達の戦いをユウは呆けた顔で見つめている。

——あなたはYOU（ユウ）よ——

「マリオン……?」

その時、ユウは微かに、しかしはつきりとマリオンの声を聴いた。

「YOU……」

ユウは自分の名前を口の中で反芻するように呟く。

そのゼダンの戦線はどうにか連邦とテイターンズに傾きつつあるようであった。

第33話 海の底の記憶

「経歴としては」

そう言いながら、アルフは資料室のコンピュータから顔を上げる。

「サイド2、アイランド・イフィッシュ産まれの間人だ」

「問題はその後だよ、アルフ」

「わかっているって、ユウ」

背後に立つユウに急かされながら、コンピュータ上のユウ・カジマの経歴をアルフは読み上げる。

「モーゼス孤児院から12歳の歳に、連邦政府の支援を受けている全寮制の学校へ入り籍を得る。そして18歳の時に連邦軍に志願した」
「それだけか？」

ユウの言葉にアルフが頭を軽く振る。

「確かに、お前の経歴は呆気ないな」

「ふむ……」

一言唸ったきり、沈黙しているユウへ今度はアルフが訊ね返す。

「軍にいた頃の記憶はあるのだろうか？」

「ああ」

「一番最初の記憶は？」

その言葉にユウは少し首を傾げる。

「軍での日課のランニング……」

「基地の名前は？」

「分かん」

その言葉に隣のフィリップがため息をついた。

「こりゃ、本当に病院へ行くべきだとは思うね……」

「ふうむ……」

フィリップのぼやきを無視して、アルフは考え込む。

「とりあえず、判明していることは」

アルフがキーボードを軽く触れる。ゼダンの門に設置されてある連邦軍、およびティターンスのデータアーカイブスへアクセスを始め

る。

「故郷が地球の海の底であるということ」

「ジオンが行った最初のコロニー落としだな」

ユウの言葉にアルフが頷く。

「それと」

キーボードから手を放して、アルフがタバコを一本取り出す。

「この経歴自体がシークレットって訳では無いことだよ」

「うん？」

タバコを吸いだしたアルフにユウが疑問の声をかける。

「俺がアクセスしても、見れなかったぞ？」

「それは当然」

「もつとはつきりと言ってくれ、アルフ」

そう言うユウにアルフが呆れた顔を見せる。

「EXAMの件で見れなかったに決まっているだろうが」

「ああ……」

ユウの代わりにフィリップがそう納得の声を出した。

「俺のパスでは簡単に見れたからな」

アルフがタバコを灰皿へポンと叩く。

「しかしなあ……」

フィリップがアルフからタバコを一本頂戴する。

「まさか、モーゼスってのは偶然なのかい？」

フィリップは口から煙をくゆらせながら呟く。

「クルスト・モーゼス博士……」

ユウがEXAMシステムの製作者の名前を口に出しつつ、その顔を

思い出そうとする。

「偶然とは思えないな」

アルフがそうキツパリと言う。

「なぜ？」

ユウの問いにアルフは答えない。しばらくの沈黙の後、アルフが口を開く。

「昔、ニムバスの奴からも相談を受けたんだ」

「どういう相談だ？」

「自分の出身の事だつてよ」

「ニムバスがか？」

「ああ」

アルフの言葉にユウはため息をついた。

「あいつも同じ境遇だったのか？」

「何から何までな」

「どういう意味だ？ アルフ？」

ユウの声が険しくなる。そのユウの顔に目をやりながら、アルフは絞り出すように言葉を言い放った。

「あいつもモーゼス孤児院の出身だ」

「何だつて!？」

「そして、例のマリオンもその出身だった」

「ふざけるな!!」

激昂したユウがアルフの胸ぐらを掴む。

「やめろ…… ユ、ユウ……」

「やめろ!! ユウ!!」

フィリップがアルフからユウを引きはがした。アルフが喉を押しさえて咳き込む。

「す、すまない、アルフ……」

「俺に怒っても仕方がないだろう……」

謝るユウをアルフは軽く睨み付けた。

「それを聞いたとき、ニムバスはお前よりも遥かに冷静だったよ」

「すまなかったよ……」

「その後の対応もな」

アルフがそう言いながら、コキコキと少し首を鳴らした。

「ニムバスは大してその事には悩まなかったみたいだったな」

「そうか……」

「あいつは過去よりも、未来に生きるタイプの人間なのかもしれないぜ、ユウ」

肩を落としているユウへアルフが缶コーヒーを渡してやる。

「ニムバスにはこの事は内緒にしてくれとは言われたがね……」

アルフは苦笑混じりに笑いながら、自分の缶コーヒーを開ける。

「他に情報はなかったのかい？」

「無い」

コーヒーをグビリと飲みながらアルフが簡潔に答える。

「クルスト・モーゼスの残した記憶にもその孤児院の事は載ってなかったし……」

「その孤児院があつたコロニーは海の底か……」

ユウもコーヒーを飲みながら、暗い顔で呟いた。

「考えすぎない方が良くもな……」

「ニムバスの奴を見習えって事か？」

そのユウの言葉にフィリップはニヤリと笑う。

「確かにそうかもな」

そう言いながら、ユウはコーヒーを飲み干した。

「今はそれどころではないかもな」

「そうだぜ？ 隊長さん？」

フィリップがユウの肩を軽く叩いた。

「一年戦争以来の大戦争の最中だ」

「そうだな……」

そう言つて、ユウは少し無理をして明るい顔をフィリップ達に見せる。

「ところで、アルフ」

「ん？」

アルフはコーヒーを飲み終えた後、別の仕事の為に部屋から離れようとしていたようだ。椅子から立ち上がりかけたまま、ユウへ顔を向ける。

「これから俺は用事があるんだが？」

「大した事じゃないんだがな……」

そう切り出したユウにアルフは顔をしかめながら椅子へ座り直した。

「言ってみろ、ユウ」

「ニムバスには……」

ユウは囁くような声でアルフへ訊ねる。

「俺やマリオンが同郷の出身だって事は伝えたのか？」

「ああ」

アルフは「何だ、その事か」と言うような顔をしながらユウへ頷いた。

「もつとも」

「もつとも？」

ユウがおうむ返しに問い返す。

「マリオンが自分の孤児院の後輩だということは、前から知っていたようだ」

「なるほどね……」

「もう話はいいか？」

アルフが自分の腕時計に目をやりながらユウへ訊ねる。

「ああ、悪かったな」

「また今度、時間があつたら話そう」

アルフは少し早足に資料室から出ていった。

「ユウ」

「ん……」

ユウ達も部屋から出ていこうとして、資料室の自動ドアの前に立つ。

「お前さんはお前さんだろ？」

「YOUはYOUか……」

「はあ？」

その呟きを聞いて、フィリップが怪訝な顔をする。

「どこかの芸人の真似か？ それは？」

「さあねえ……」

ユウは口笛を吹きながら、宇宙基地ゼダンの重力制御をされた廊下を歩きます。

「ま、いいか……」

右手で少し頭を掻きながら、フィリップがユウとは反対側の通路へ

足を向けた。

「モルモット・プロジェクトか……」

パソコンのモニターだけが光る暗い部屋の中、一人アルフはコンピュータのモニターを眺めながら呟く。

「クルスト博士のEXAM思想の原型だな……」

アルフはクルスト・モーゼスのプロフィールをぼんやりと見つめている。

「そして、今の連邦やティターンズの強化人間技術の雛型でもある」

モニターへ映し出されるクルスト博士の本名の意味に、アルフは深く肺の奥底から息を吐いた。

「さすがに、ティターンズの拠点だけあって、情報システムは高度ではあるんだがね……」

アルフは頭の中でゼダンの門の内部データリンクの規模を想像しようとする。

「地球のジャブローへ行けば、もっと詳しく載っているかもしれないけどな」

そう呟きながら、アルフはゼダンの門周辺に滞留しているミノスフキー粒子の濃度測定図をモニターへ映しだす。

「まず通信は無理、とっ……」

ミノスフキー粒子が僅かでも無線の発信経路上にあった場合、無線データ通信の回線維持は極めて不安定になる。

「どちらにしろ、ハッキングなんか俺の専門外だがね……」

アルフはそう口ごもりつつ、暗闇の中のキーボードへ手を触れる。

「まあ、それよりも
アルフはモニターのページを切り換える。そこにはある人物の詳細な情報が載っていた。

「こっちの情報の方が驚きでもあるがな、俺にとっては
「そうかもしれないですね」

その言葉と共に、暗闇の中からアルフの後頭部へ銃口が突きつけられる。

「やはり、来たか」

発光するモニターの前で、銃口を突きつけられたアルフが静かに両手を上げる。

「いつかは気づくとは思いましたが」

拳銃を持った人影は静かな声でアルフへ言葉を放つ。

「俺をどうするつもりだ？」

「どうもしませんよ」

口ではそう言いながらも、人影は銃口を離さない。

「口外しない限りは」

「へいへい……」

軽口を叩いたアルフの頭へ拳銃が押しつけられる。鉄の冷たい感覚にアルフは顔をしかめる。

「モルモット・プロジェクトの件については？」

「所詮、過去の遺物ですよ」

アルフの言葉に人影は淡々とした口調で答えた。

「EXAMと共にね」

「全てはアイランド・イフィッシュと共に海の底か」

「その通り」

拳銃がアルフから離れる。

「どうしても言うのであれば、ユウ中佐達に話してもいい」

「それはやらんよ……」

苦笑しながら、アルフは人影へ囁く。

「この大事な時期に、ユウ達を戸惑わせて戦死させたくはない」

その言葉に人影は微かに笑みを浮かべたようだ。

「ただ」

少し人影からの口調が固くなる。

「私を含めた、全ての人物の個人情報だけはただちに消去するように」

その言葉にアルフは黙って頷いた。

「では、またお会いしましょう」

人影が部屋から立ち去っていく足音が聞こえた。人影が立ち去ってしばらくしたあと、明かりが灯つてないその部屋の中でアルフは深くため息をつく。

「全く……」

アルフは手探りでタバコを探しだす。モニターの明かりを頼りにタバコへ火を点けようとする。

「やれやれだぜ……」

タバコを口にくわえながら、アルフはコンピュータのキーボードを叩き始めた。

第34話 前夜

「やはり、エウーゴとの決戦にはティターンズの主力であたると……」
「当然でしょう?」

ユウの言葉にサマナが軽く首を捻った。

「つまりは、俺達の部隊のこの配置は」

「ネオ・ジオンに対する備えですよ」

「そうだろうな……」

ユウはサマナへ答えながら、付近の宙域のティターンズと連邦の艦隊を眺めまわした。

「ティターンズはやっぱりエウーゴを完全に壊滅させるつもりなのだろうかねえ?」

「ジャミトフ閣下は言っておられましたよ」

フィリップのぼやきにサマナは少し顔を上に向けながら話す。

「筋書きではエウーゴを押し込んだ時点で停戦条約を結ぶ」

「かつて、連邦がジオン公国へしたようにか」

「その後、ティターンズが主導とした体制下でネオ・ジオンにあたる」

サマナの淡々とした言葉に、遠くのメツサーラからカツが口を挟んだ。

「連邦はもちろん、降伏したエウーゴ、それにカラバも戦力として使いますか……」

「地球圏の覇者はティターンズになるね」

難しそうな顔をするカツヘシドレがそう深く頷きながら答える。

「ですが」

サマナは少し口調を低くして話す。

「閣下は筋書き通りにはいかないだろうな、とも言っていました」

「自信がないと?」

ユウは自分の乗る新鋭機のコンソールを眺めながら、サマナへ聞き返した。

「と、いうよりもですね」

サマナはユウへ話をしながら、自機のマラサイ・フェダーインをユ

ウが乗るジ・オの近くへ寄せてくる。

「流石に相手が自分の思い通りに動いてくれるはずはないという……」

そこまで言って、サマナは自分の両肩を軽く上げる。

「まあ、ジャミトフ閣下の一種の人生経験からでしょうね」
「なるほどなあ」

そのサマナの言葉を聞いて、ユウから借りたブループラウスのシステムチェックを行っているフィリップが納得したような声を上げる。

「ネオ・ジオンは動くかなあ?」

ぼんやりとユウはモルモット隊の隊員達で模擬戦でもしようかと思いつながら、そう口ごもるように呟く。

「シヤアとハマーンですからねえ……」

「油断などもってのほか」

ユウが母艦であるストウラートのカタパルトからジ・オをゆつくりと出しながら、そのサマナの言葉に深くおもてを領かせる。

「ところで」

「はい、ユウさん」

「シロッコがエウーゴの捕虜になったって噂は本当か?」

「僕の口からは言いませんね」

そう言って、サマナは軽い口調で言葉を続ける。

「箝口令がひかれてますから」

「そうか……」

ユウはため息をついてから、ジ・オを軽く揺らすような動きをさせる。

「このジ・オはシロッコが作ったのだろうか?」

「勝手に使うのに引け目でも?」

「シロッコはこういうのに神経質そうだからな」

そう言って笑うユウにサマナが笑い返した。

「大事な局面ですよ、ユウさん?」

「高性能機を眠らせて置くことは出来ないってことか?」

「そうですよ」

「シロツコが許してくれば良いがね……」

サマナがモルモット隊の先頭を行くジ・オの隣へついて行けるようにマラサイ・フェダーインのスピードを上げる。

「扱いづらいですか？ その機体は？」

「やはり、このジ・オは」

ユウがジ・オのスタスターを機体のあちこちから噴かした。

「ニュータイプ、いやシロツコが乗ることを前提とした機体だ」

「パプテマス様の専用機である？」

サラがジ・オに乗るユウを少し羨ましそうに見ながら声をかける。

「シンプルな機体ではあるが」

ユウがジ・オの専用ビームライフルを持つ腕を少し上へあげた。

「機体の制御処理にとんでもない労力が必要だと思う」

「なにしろ、パプテマス様ですからねえ……」

サラがそう言って軽く笑みを浮かべる。

「だいたい……」

ユウが小出力でビームライフルを虚空へ放った。

「出力や速度が可変するシステムのビームライフルっていうのは何だ

よ……」

「そんな性能が……」

カツがジ・オのライフルを興味深そうに見つめる。

「サーベルだってそうだ」

ユウはジ・オのビームサーベルを取り出し、その形状や出力を変化

させてみせる。

「ニュータイプの戦場への適応能力がないと扱いきれない……」

百変化のように変化するジ・オのサーベルの光を見ながらカツがボ

ソリと呟く。

「だらうな、カツ」

サーベルの基部をしまいながら、ユウはカツへため息混じりの声を

出した。

「そんな瞬時の判断がそうそう出来るものか……」

「僕なら出来るかも……」

そんな言い出したカツへサラが乗機のコクピットから睨み付ける。

「あんたがシロツコ様の専用機へ乗るなんて、一万年は早いわよ」

「僕だって、腕は上がっているさ!!」

「メツサーラでもあたしにもてあそばれているくせにさ!! 坊主!!」

「坊主!?! 坊主だと!?! 坊主と呼んだな!?! 坊主と言っちゃまったな

!?!」

「小僧、坊主、半人前、どれで呼んでほしい!?! 小僧!?!」

「隊長!?!」

カツがユウへ叫ぶ。

「サラの奴と模擬戦をやりますよ!!」

「勝手にしてくれよ、カツ……」

「あいつに坊主を刻み込んでやる!!」

「俺をハゲさせるという意味かよ? カツ……?」

「何訳の分からない事を言っているんですか!?! 隊長!?! ねえ隊長

!?!」

「いいから、早く俺の前から消えてくれ……」

ユウは怒気に身を包んだカツへそう投げやりに言い放つ。

「チビの恐ろしさを思い知らせてやる!!」

「チビとは言っていないでしょ!?!」

「ニュータイプの勘でチビと言った事に僕は気づいている!!」

「生えてないと言うこともお!?!」

「そんなことを思っていたか!?! サラ!?!」

喧嘩をし合うその二人を眺めながら、ユウは最近また胃の痛みが再発してきた事に嘆いていた。

「ユウ」

「なんだよ、フィリップ……」

バイザーを上げて胃薬の錠剤を噛み砕きながら、ユウが気だるそうに呻く。

「何だかんだ言っつて、みんなお前を信頼しているんだ」

「……」

ユウは胃薬の苦味を口中へ感じながら、フィリップの言葉を耳へ入

れている。

「ジャミトフの旦那も、そしておそらくはシロッコさんもな、ユウ」

「ん……」

「お前さんの過去なんぞ、興味はないだろうよ」

いつになくフィリップから真面目な口調で言われているその言葉に、ユウは無言で耳を傾ける。

「今、この場にいるユウ・カジマを信じているんだよ」

フィリップの言葉に対してユウは黙り続ける。旧モルモット隊の三人の間にはばしの無言の時間が流れた。

「ユウさん」

しばらく静かにフィリップの言葉を聴いていたサマナがユウへ囁く。

「模擬戦、僕達もやりましょうか」

「ああ……!!」

そのサマナの言葉にユウは明るい声で答えた。

「シドレ、手伝ってくれ」

「はい、隊長!!」

シドレのヘヴィバーザムがユウ達の側へ近づいてくる。

「俺とシドレちゃんがペアになるかね……」

フィリップがそう言いながら、ブループラウスをウェイブライダー形態へ可変させる。

「では、ユウさん」

「おう」

サマナの声に答えながら、ユウはジ・オのコンソールで装備武装を演習モードへと変更させた。

「世話になったな」

エウーゴのモビルスール運用艦「アーガマ」のハンガーデッキで、シロッコは簡単な修理をされたメタスの前に立つ。

「やはり、エウーゴの料理人にはならないようだな、シロッコ」

アーガマの艦長であるブライト・ノアが少し名残惜しげにシロッコへ手を差し出した。

「ふざけるな、馬鹿者」

そう言いながらも、シロッコは少し躊躇いつつではあるがブライトのその手を握り返す。

「バスク・オムが交渉に応じてくれたよ」

ブライトはすぐに手を放したシロッコに微笑みながら、テイターンのズナンバー2の名前を口に出す。

「あの品性の無い男に借りが出来てしまったか……」

「見返りに、あんたやあの条件だけではなくこちらのモビルスーツも要求されたがね」

カミーユのその言葉にシロッコは苦笑する。

「まるで、トロッコだな……」

そう呟きながらシロッコは、モビルスーツ用自走機動大型メガ粒子砲システム「メガ・バズーカランチャー」に掴まっている自分のメタスの姿をやや自嘲げに見つめている。

「こいつに引っ張られてテイターンズへ帰るの、シロッコ？」

二基のメガ・バズーカランチャーに引っ張られているメタスを面白そうにレコアがみつめる。

「トロッコに乗ったシロッコね……」

「うるさい、レコア」

シロッコはそう言いながら、メタスの後ろに繋がれているコンテナをその手で触る。

「大盤振る舞いだな……」

「必ずブレックス准将の親書はジャミトフに渡せよ？」

「解っているさ、ブライト艦長」

シロッコが胸のポケットを軽く叩く。

「だから、私を解放してくれた上にこんなオマケを付けてくれたのだらうっ。」

「まあ、そうだな」

ブライトはそう言って肩を竦めた。

「その親書をあんたが確実にジャミトフへ渡すことを前提に、そのあんたの身柄とエウーゴの技術を渡すんだ」

「この紙切れには、それだけの価値があるということだな？ ブライト艦長？」

「テイターズズの気鋭であるあんたがアーガマへ流れ着いたのは」

タバコを片手にブライトはニヤリと笑った。

「天から切り札が舞い降りたようなもんだよ」

「フン……」

シロッコはその言葉に不愉快そうに一つ鼻を鳴らしてから、メタスのコクピットへ片手をかける。

「私が戦場へ出たとき、お前達には手加減はしてやるよ」

「ありがたいねえ……!!」

ピユウ……!!

シロッコのその言葉にカミーユは口笛を吹いて茶化した。

「どこまでも生意気な小僧だな、カミーユ……」

「あんたは大人げない大人だよ、シロッコ」

カミーユがそう言いながら、シロッコに手を差し出した。

「旨いメシ、ありがとうな。シロッコ」

「フム……」

シユ……

シロッコはそのカミーユの手を握らずに、手の甲を軽く撫でた。

「素直じゃない人……!!」

そのシロッコの手の振り方にレコアが高い声を出して笑う。そのレコアの笑い声につられて、その場にいるアーガマのクルー達が笑みを浮かべた。

「さらばであるよ……」

複雑な表情を浮かべながら、シロッコはメタスのコクピットへ飛び乗る。増設燃料タンクを搭載したメガ・バズーカランチャーのエンジンが入り、シロッコはアーガマから飛び去っていった。

第35話 バトル・オブ・ゼダンゲート

「数自体は少なく見えるんだが……」

ユウはゼダンの門へ攻めてきたネオ・ジオンの部隊を見ながら、眉をひそめる。

「ハマーンの機体だな」

ネオ・ジオンの部隊の中央には純白の凛々しい印象を受ける、優美なモビルスーツが鎮座している。

「ネオ・ジオンのサイコミュ兵器付きね……」

そう呟きながら、ユウは軽くジ・オのエンジンを入れる。

「ハマーンの心は紅い光……」

キュベレイという名前らしいニュータイプ専用機から放たれる光を見ながら、ユウは軽い感嘆の声を出す。

「思っているよりも情熱的な女なのかな？ ハマーンは？」

陰謀家としての先入観がハマーンにあるユウはそう呟きながら一人苦笑した。

「あれ……」

あることに気がついて、ユウは首を傾げる。

「俺はブループラウスに乗ってないのに、何でマリオンの光が見えるんだ……？」

疑問に思いながらも、ユウは接近してくるネオ・ジオンの軍勢に対して、迎撃体制をとるようにモルモット隊のメンバーへ通信を入れる。

「今頃はティターンズとエウーゴの最終決戦が地球の裏側で始まっている頃かな……？」

ユウは遙か遠くに小さな豆粒のように見える地球の姿をじっと見つめる。グリップス・ラインと名付けられた宙域で行われているであろうエウーゴとティターンズの大戦争の様子はゼダンの門からは見えるものではなかった。

ギョア!!

「俗物のようではあるがな!!」

ユウのジ・オのビームの一撃を身軽にかわしたハマーンはキュベレイのкокピットの途中で笑いを込めた声を上げながら、その両の手から輝くビームの条線をユウの機体へ投げかける。

「ファンネルだけが取り柄ではないと言うことか!! ハマーンのキュベレイは!!」

キュベレイの腕から放たれた高速のビームをユウはジ・オの機体各部に過剰に設置されているスラスタ、およびアポジモーターを駆使してかわす。機体の脇を通りすぎるビームの光に視線を向けながらも、ユウはジ・オの出力可変機能を搭載された「ヴァリアブル・スピード・ビームライフル」を再度キュベレイへ機体を向き直しながら放った。

「高出力な!!」

ハマーンは自機の脇を通りすぎたそのビーム粒子の太い集束を見つめ、微かに戦慄の声をあげる。

ドツ……!! トオ……!!

その重粒子ビームに続き、ジ・オのライフルからビームの速射がキュベレイへ向けて放たれた。

「基本性能はキュベレイの上か!? あのダルマは!？」

ハマーンは苦々しげに言い放ちながらも、そのビームの速度差に惑わされない。連射されたジ・オのビームはキュベレイの残像へ空しく撃ち込まれる。

「速度差をつけてみても、ニュータイプには通用しないか!!」

悪態をつきながら、ユウはビームライフルのモードをノーマルに設定しなおす。

ガオ!!

「次!!」

キュベレイの随伴機を撃破したカツのメツサーラがサラと共に

キュベレイへビーム砲を放つ。ドオウウ!!

「数であたるか!？」

再びユウ機からも放たれたビームを含め、三機の集中ビーム攻撃をハマーンは神業じみた機体の動きで回避し続ける。

「何で当たらない!？」

苛立つカツのメツサーラがキュベレイの側を通りすぎる。そのカツ機へ向けてネオ・ジオンの重ミサイル爆装機の編隊から火線が疾る。

「スローなんだよ!! ネオ・ジオン!!」

シドレのヘヴィバーザムとフィリップのブループラウスがそのミサイル群を次々と撃ち落とす。シドレ機のインコムが隙を突いてその爆装機を一機撃墜させる。

「精鋭の部隊だな!! こやつらは!!」

ハマーンはユウ達へ牽制射撃を行いながら、微かに機体を後退させた。

「もはや、ズザなどでは太刀打ち出来ないな……」

爆装機の部隊を見つめながら、ハマーンは通信機へ怒鳴る。

「キュベレイ隊はまだか!？」

「まもなくです!!」

ズザ隊のリーダーからハマーンへそう返答される。

「どうにか凌ぐか……!!」

ハマーンのキュベレイは数基のファンネルを放出させながら、ユウのジ・オへ急加速して接近する。

「そうきたか、ハマーン……」

ユウはビームサーベルを一つ振るい、ハマーン機を向かえうつ態勢を取ろうとした。

ギユイ!!

「何!？」

キュベレイはユウ機へ接敵する直前に、急激に機体の進行方向を転換させる。

「陽動!？」

その直後にハマーンのファンネルから放たれたビームをかわしながら、ユウはジ・オをパスしていったハマーン機に視線を向け続ける。「ユウ!!」

フィリップの叫び声に、ユウは反射的にジ・オのスラスターを噴射された。

シユア……!!

先程までユウがいた空間を、赤いキュベレイのサーベルが風ぎ払った。

「もう一機のキュベレイ?!」

深紅に塗装されたキュベレイが急旋回し、ユウのジ・オへ再度接近する。

ガギイ!!

「黄色いダルマのモビルスーツめ!!」

二機のビームサーベルが交差する。

「ローベリアか!!」

「おでんは旨かったよ!! ユウ・カジマ!!」

キイユイ!!

「小細工を!!」

背後へまわった赤いキュベレイのファンネルのビーム攻撃をユウは軽々とかわす。

シユシユ……!!

勘に触る音と共に、多数のファンネルがモルモット隊へ襲いかかる。

「まさか!? ファンネル搭載機が複数!」

網の目の様に降り注ぐビームの嵐に、ジ・オは翻弄される。僅かにユウのジ・オの装甲をファンネルのビームが削る。

「頑丈な装甲はありがたいな!!」

行方不明のジ・オの設計者であるシロツコに少し感謝しながら、ユウは連邦とティターンズの部隊に救援要請を発信した。

バフオ!!

ゼダンの門側から放射された幾筋もの強力なビーム砲がネオ・ジオ

ンの機体を複数機爆散させる。

「救援要請が遅すぎます!!」

ユウの通信が来る前に援護に駆けつけたサマナが率いるマラサイ・フェダーインの部隊がバインダーに内蔵されたビームキャノンを放ちながら、ユウ達を助ける。

「助かった!! サマナ!!」

「よそ見をしないで!!」

ネオ・ジオンからのファンネルの群集による攻撃は止む気配がない。

「敵機分析報告!!」

頭上のレドームをファンネルで破壊されつつも、サラが回線をフルオープンにして味方の全軍へ収集したデータを流す。

「キュベレイの量産タイプです!!」

そう言い放ったサラのポリノーク・サマーンへ灰色の未塗装のキュベレイが切りかかる。とっさにシドレのヘヴィバーザムがインコムを機体に固定したまま、ビームバルカンとして敵機へ放った。

「猛火のごときで攻めろ!!」

サマナが揮下のマラサイ・フェダーイン隊へ大声で叫ぶ。

「僕たちではサイコミュをいつまでも回避することは出来ない!!」

サマナがそう叫ぶ中、そのサマナ機のバインダーキャノンの内の一基がファンネルのビームで吹き飛ばされる。その隣の機体がビームの集中攻撃を受けて爆発四散した。

「やられる前にやるんだ!!」

視認出来るようになってきた量産型キュベレイへサマナ隊は猛烈な火線を放ち続ける。サマナも叫びながら肩に一基だけ残っているフェダーイン・バインダーキャノンの照準をどうにか敵機へ定めようとする。

「うわっ!?!」

ファンネルに気を取られたシドレのヘヴィバーザムの片腕がズザのミサイルで吹き飛ばされた。

「援護を!!」

叫ぶシドレ機へ続けて攻撃をしかけようとする数基のファンネルをファイリップのブループラウスが間一髪で撃ち落とす。

「ありがとうございます!! ファイリップさん!!」

「礼は後だ!! シドレちゃんよ!!」

微かにマリオンから発光して見えるファンネルをファイリップはビーム火器をフルに使い叩き潰していく。

「ファイリップにも見えるか!?!」

「マリオンちゃんを通じてね!!」

そう叫び合うユウとファイリップの二人は、ネオ・ジオンの軍勢の中央宙域に群生しているファンネルの群れを発見する。

「まとめたファンネルで俺たちを打尽するつもりか!?!」

ユウはビームを撃ちながら、味方へ警告を発する。

「あれを撃ち落とせばいいか!?!」

マリオンから見えるファンネル群の影を見ながら、ファイリップがユウへ怒鳴る。

「出来るか!?! ファイリップ!?!」

「どうにかな!!」

ジ・オとブループラウスが群生ファンネルへ照準を向ける。

「させるものか!!」

ハマーン機からファンネルが発射される。

「ハマーンさんとやらのファンネルは別物のようだな!!」

明らかに他のキュベレイ達と動きが違うハマーン機のファンネルの動きを目で追いながらファイリップが強く舌打ちをした。

「ファイリップ!!」

「ハマーンのファンネルが先だな!?!」

「ああ!! 頼む!!」

「任せておけてよ!!」

ファイリップが拡散したハマーンのファンネルへビームを放つ。ユウが乗っている時ほどの精度こそないが、それでも何基かのファンネルがファイリップに狙撃され爆発する。

「俗物がファンネルに対抗出来るとはな!!」

ハマーンはそう叫びながら、ファンネルの速度を上げる。

「そう上手くはいかないかよ!!」

高速度のハマーン機のファンネルにフィリップのビームが追い付かなくなってきた。ブループラウスのビームカノンが空しく空を切る。

「なんて兵器だよ!!」

カッツはメツサーラの推力を最大限に活かしながらも、数基のファンネルから被弾する。

「センサーがめちゃくつちゃあ!!」

ボリノーク・サマーンの予備レーダーが無尽蔵のファンネルを追うことで動作不良を起こし始めたようだ。

「だが、無敵ではないんだ!!」

その言葉と共に、半壊したシドレのヘヴィバーザムから放たれたハイ・ビームライフルがキュベレイの量産機を粉砕する。

「そうとも!!」

ユウのジ・オは量産型キュベレイ達の群れにあえて突っ込み、そのマスプロ機体を圧倒するスピードで宙域を駆けめぐりながらファンネルを狙撃していく。

「俺にはファンネルが分かるか!!」

ユウは先程からファンネルの「影」が見える自分の目に不気味さを感じながらも感謝していた。

「好きにはさせんよお!!」

ローベリアの深紅の量産キュベレイがジ・オへ追い付く。再びユウ機へサーベルを叩きつけるローベリア機。

「構っている暇は無いんだよ!!」

ジ・オの腰からサブ・マニユピレーターが飛び出し、その手に握られたビームサーベルがローベリアのキュベレイを薙ぎ払う。

「うわっ!?!」

不意をつかれたローベリア機にサーベルが食い込む。機体を破損させながらも、ローベリアはファンネルを射出される。

「まるであたしのファンネルが的屋のマトではないか!?!」

最大数のファンネルでジ・オを取り囲もうとしたローベリアは、ユウにあっさりと落とされていくファンネル達の姿に驚愕する。

「なるほど、これは!!」

ジ・オからシャープなビームの線が最後のローベリアのファンネルを貫く。

「やはりマリオンの毒が俺に回ったか!？」

ジ・オには搭載されているはずのないマリオン・システム。しかしユウはジ・オでマリオン搭載機と同等の動きが出来る自分の能力に手応えらしき物を感じていた。

「オールドタイプにファンネルが見えるなんて!？」

ローベリアは自機のファンネルがジ・オに全滅させられた事に怒りの声を上げる。そのローベリアのキュベレイへユウ機が体当たりを仕掛ける。

「うわお!？」

タツクルを受けたその一瞬の隙がローベリアの命取りであった。

「やられた……!!」

ローベリアのキュベレイが機能停止をする。

「命は取らないでやるよ、ローベリア」

体当たりで姿勢が崩れた瞬間のキュベレイに対して、即座に両手と片足をビームサーベルで切り落としたユウはそのままハマーン機へ機体を急接近させる。

「ファンネルのアドバンテージが無いと、キュベレイはこうも脆い……!!」

接近してくるユウ機を迎撃させるつもりで放った残弾が少ないファンネルを撃ち落とされている事にハマーンは歯噛みしながらも、キュベレイのビームサーベルで肉迫してくるジ・オのサーベルと切り結ぼうとする。

「ジジイ……!!」

「もしま、ハマーンを生け捕れるのでは?」

ビームサーベルの出力でキュベレイを押しているユウにふとその考えが脳裏に浮かんだ。

「俗物ごときに!!」

ハマーンはジ・オのサーベルを受け流して、その脇へ入り込もうとする。ユウはそのハマーンの動きを見逃さない。

「だめだ……!!」

ジ・オの腰のスカートから隠し腕が飛び出て来たのを見て、あわててハマーンはジ・オからキュベレイを引き離す。

「降伏しないか? ハマーン・カーン」

静かにユウはそうハマーンへ語りかけた。

「フフ…… 俗物が……」

そのユウの提案をハマーンは笑って一蹴する。

「ではこのまま、オールドタイプに潰されるか?」

「潰されるのはそつちだよ、連邦のエース、ユウ・カジマ君さ……」

「何……?」

そう訝しげな声を上げるユウへハマーンはキュベレイのビームサーベルを構え直した。

「これは!？」

カツのメツサーラはバルカンなどの内蔵火器を駆使してファンネルを叩き落とす。

「やはり、僕はニュータイプなのか!？」

メツサーラはファンネル群を突破して量産型キュベレイへ機体両肩のメガ粒子砲を撃ちつける。

「ファンネルが効かない!？」

撃破された機体の隣にいるマスプロ・キュベレイのパイロットが驚愕の声を上げる。慌ててキュベレイの背部のビームカノン砲でメツサーラを迎え撃とうとする。

「見える!!」

カツはそのビームをかわしながら、メツサーラを急旋回させようとする。

「ん……？」

カツはその時、ティターンズの部隊の異変に気がついた。

「勝ったな」

ユウ達によつてファンネルが封じられたネオ・ジオンの部隊を次々へとマラサイ・フェダーインの重火器が撃破していく姿を見て、サマナは軽く微笑む。

「ネオ・ジオンのハマーンも大した事はない……」

「はたしてそうですかね？」

その言葉と共に、サマナ隊の後方から火線が疾った。

「何イ!？」

あわてて振り返つたサマナが見た物は、ティターンズ、そして連邦の友軍が自分へ銃口を向けている姿である。

「全員反転!!」

サマナはヘヴィバーザムからのビーム射撃をかわしながらそう喉の奥から振り絞るように叫んだ。

「何だ!？」

ユウがゼダンの門の第二警備隊の陣営へ振り返る。

「同士討ちだど!？」

後方の警備部隊が互いに戦闘を行つている姿を見て、ユウは驚愕の声を上げる。

「ハマーンはティターンズと連邦の一部を懐柔していたか……!!」

ちようどサマナの部隊の後方の部隊が丸々寝返つたのをユウはその目で確認した。

「どうする!! ユウ!？」

フィリップからの焦つた声がユウへ投げつけられる。

「どうもこうもない!!」

コクピットの中で冷笑を浮かべているであろうハマーンからのビームをかわしながら、ユウはフィリップへ言葉を返した。

「裏切つた奴らを叩こうにも、ハマーンはそれをさせてはくれるもの

か!!」

「わかっているじゃないか、ユウ・カジマ君さ……」

ハマーンがもてあそぶかのように、キュベレイのその腕からビームをユウ機へ連射する。

「前方へ血路を開くしかないか……」

一旦、ハマーンから距離をとったユウがそう叫びた。

「ネオ・ジオンの数は決して多くはない」

「そのようだな、ユウ」

フィリップがユウへ答えながら、ブループライウスのマリオンを通して敵の数を確認している。

「踏ん張ってみるか!! ユウ!!」

「おう!!」

寝返った部隊との乱戦の中にいるサマナ機の姿をチラリと目の端で捉えながら、ユウはモルモット隊のメンバーへ号令をかける。

「突破するぞ!! みんな!!」

「了解!!」

「ゼダンの後方部隊からも味方が来る!!」

ユウは半ば自分を鼓舞するかのようにそう叫ぶ。その時、その宙域に何か風が疾った感覚をユウは感じた。

「何……?」

ネオ・ジオンの部隊の後方から、何かが強く押し寄せてくる。

「なんだ!?! あれは!?!」

ゼダンの宙域へ急速接近してくる深紅のモビルアーマーの姿にユウは驚いた声を上げる。

「巨大モビルアーマー!!」

シドレが悲鳴のような絶叫を上げた。

「ふざけるな!!」

ゼダンの後方部隊から増援としてやってきたティターンズパイロットの内の一人が反逆部隊と交戦しながらそう怒声を放った。

「あれはノイエ・ジールじゃねえかよ!!」

「デンドロビウムがないと勝てませんよ……!!」

どうやら、テイターズズのメンバーの中に接敵してくるネオ・ジオン軍の巨大モビルアーマーと戦った事がある者がいたようだ。

「ユウさん……!!」

サマナは乱戦で装甲が破損したマラサイ・フェダーインのコクピットの中で低いうめき声を上げた。

「過信をし過ぎだ、ハマーン」

ジオンのシンボルを彷彿とさせるその機体から、低い男の声が響く。

「ノイエ・ローテをこの短時間で使いこなすようになるとはな……」

ハマーンのキュベレイがそのモビルアーマーの中央へゆつくりと接近する。

「さすがだな、シャア……」

「お前が乗りやすくしてくれたお陰だろうな、ハマーン」

ノイエ・ローテと言うらしき深紅の機体はそのまま静かにハマーンのキュベレイ達の前方へつく。

「アクシズは予定通り、ゼダンへの衝突ルートに入った」

シャアのその言葉にハマーンは微かに頷いたように見える。

「長居は無用だな」

赤い彗星、シャア・アズナブルはそう呟くと、ノイエ・ローテから静かにファンネルを投下する。

「少し、あの例の部隊を黙らせてやるか」

大型のファンネル達がユウ達へ突撃するように宇宙を疾る。それと同時にノイエ・ローテと共に来たネオ・ジオンの増援がモルモット隊を包むように動き始めた。

「ちっ……!!」

ユウはジ・オのビームライフルをファンネルに向けて放射する。

バアファオ!!

「ファンネルにバリアーが!？」

苦々しげに呻いたユウ機へファンネルからのメガ粒子砲が閃光を

逆らせながら放たれた。

「キュベレイとは威力が段違いか!!」

二発目のファンネルからのビームをかわした直後のジ・オヘノイエ・ローテ本体からの精密射撃が飛ぶ。

「しまった……!!」

ジ・オの頭部がその一撃で吹き飛ぶ。機体のコクピットにレッドアラートが鳴り響く。

「さすがだな、オグス」

「慣れているもんですからね、狙撃は……」

ノイエ・ローテのコ・パイロットを務めているオグスがシャアへそう答えつつ、肩を軽く竦めた。

「ユウさん……」

ネオ・ジオンの増援部隊に囲まれたモルモット隊を見つめながら、サマナは唇を噛む。

「逃げろ、サマナ」

「しかしユウさん」

「逃げていい、サマナ」

サマナはしばらく無言でモルモット隊とネオ・ジオンの巨大モビルアーマーを交互に目を向けていたが、意を決してマラサイ・フェダーイン隊へ撤退の合図を送る。

「運が尽きたようだな、ユウ……」

フィリップはそう言いながらブループラウスをユウの機体に近づける。見るとカツのメツサーラがシャアの攻撃によって大破していた。

「ありがとうよ、サラ……」

「マヌケなんだから、カツ……」

パイロットスーツ姿のカツをその両の手で守っているサラの機体も損傷が激しい。その近くにボロボロのシドレ機が寄り添うように浮かんでいた。

「投降しろ、ユウ・カジマ」

ノイエ・ローテからシャアの宥めるような声がユウの耳へ入る。

「……」

「了解と受けとるよ、その沈黙は」

ノイエ・ローテがジ・オに覆い被さるようにその機体をゆらりと動かした。

「ついでにい」

背後をネオ・ジオンの部隊に塞がれたモルモット隊はそのままシヤアのノイエ・ローテへ諾々と従うような動きでついていった。

第36話 宇宙を駆ける（前編）

スペースコロニー「グリプスⅡ」の付近の宙域にエウーゴとティターンズの大艦隊が対峙する。

「こりゃあ……」

ティターンズのモビルスーツ隊の最前列に配置されているジェリドのガブスレイから呆れたような声が響く。

「エウーゴに兵無しってのは、大嘘だな……」

「バスク司令の悪口はまずいわよ、ジェリド」

隣のガブスレイに乗っているマウアーからそう注意が飛んだ。

「辞世の句でも書いとこうかな？ マウアー？」

「情けない……」

ため息をつきながらも、エウーゴの大部隊を見つめるマウアーの顔も緊張で強ばっている。

「まあ、気持ちは分かるけどね」

そう言いながらマウアーは雲霞のごとく広がっているエウーゴの量産機の姿をじっと見つめる。

「カラバの増援もいるみたいね」

「だろうな……」

その時、ジェリド機のコクピット内でコンソールの片隅のランプが点滅した。

「データが届いたよ、マウアー」

情報収集用インコムを放っていた複数の偵察用バーザムからエウーゴの戦力データが送られる。

「固有名詞を並べられても、解らないっての……」

ジェリドがサブモニターへ羅列させられるエウーゴ機の名前を見やりながら、うんざりした声を出す。

「リック・ディアスⅡ、ネモZ型、マスプロZ、ZⅡ、Zプラス……」

マウアーが少しからかいの色を込めて、エウーゴのモビルスーツの名前を読み上げる。

「Zの般若心境とか言う名前のお経か？ マウアー？」

「Z念仏よりはましでしょう?」

「縁起でもねえ……」

そうジェリドは苦笑しながらも、敵の編隊の中にZガンダムの姿を見てニヤリと笑う。

「カミーユがいるな……」

「見ただけでわかるの? ジェリド?」

「鼻が利いてきたかな?」

そう言いながら、ジェリドはガブスレイの機体の最終調整を行おうとする。

「バスク司令お気に入りソラー・システムⅢの展開は間に合わないようね」

「んだな……」

マウアーへ上の空で返事をしながら、ジェリドは機体の調整へ没頭している。そのジェリド機の隣にガンダムMK-Ⅲの部隊が配置についた。

エウーゴとティターンズの猛烈な艦砲射撃の応酬がグリプス宙域の地ならしをしたあとに、両軍のモビルスーツの波が潮騒とともにその漆黒の空間へ押し寄せる。

「いたな!! カミーユ!!」

打撃用可変重モビルアーマー「バウンド・ドッグ」にまたがっているマラサイ・フェダーインの部隊がエウーゴの部隊と交戦状態に入つたのを目の端に捉えながら、モビルアーマー形態へ可変しているジェリドのガブスレイがZガンダムへ突撃する。

「ジェリド・メサ!!」

大型のビーム砲を構えたZガンダムがジェリド機の接近に気がつき、迎え撃とうとする。

「今日こそお前のZを沈める!!」

その言葉と共にガブスレイから重ビームランチャー「フェダーイン」の光がカミーユ機へ押し寄せる。

「何の為に俺を!？」

ジェリドのビーム射撃をかわしながら、カミーユ機からも高出力のビームが疾った。

「お前に何十回俺は煮え湯を飲まされたものか!! 分かるか!？」

昆虫のような形態のガブスレイはそのビームをひらりと回避する。そのままカミーユ機へ特攻でもするように機体を迫らせる。

「それだけで俺を!!」

「お前は俺の乗り越えなくてはならない壁なんだよ!! カミーユ!!」

カミーユが乗るZのメガランチャーからビームバヨネットが形成され、ガブスレイを切り伏せようとビームの刃が大振りに構えられた。

「させるか!!」

その刃が迫る直前にジェリドは瞬時にガブスレイを可変させ、カミーユ機と同様にフェダーインライフルからバヨネットサーベルを形成する。

「その壁とやらだけがお前の戦いか!？」

二機のビームランチャーのサーベルが凄まじい閃光を放ちながら重なりあう。

「悪いかよ!？」

「目的の無い戦いなど!!」

「目的はある!!」

ジェリドは一端Zから身を離し、肩のビーム砲を放った。そのビームはZの耐ビームコートに弾かれる。そのビーム攻撃の反動を利用してカミーユはZを一回転させつつ、懐から小型の銃器を取り出しその手に掴む。

「テイターズでのしあがるという欲からの戦いか!？ ジェリド!？」

「言い方に気を付けろよ!! カミーユ!!」

カミーユ機の左手に握られたサブ・ビームマシンガンの連射から目を離さずに、ジェリドは怒鳴る。

「失言して俺に殴られたお前が言うなよ!! ジェリド!!」

「どうやってもカミーユは女の名前だろう!？ ああ!？」

「そんな言葉でもう腹を立てるもんか!!」

「流石にもうそのヘッドには血はシットアップ無しかだな!! カミーユ小僧!!」

サブマシンガンを撃ち尽くしたカミーユはその小型銃を投げ捨て、ランチャーのサーベルをガブスレイへ突き立てようとする。

「俺がモビルスーツを駆る理由!! それは!!」

ジェリド機のバイオセンサーが音を立ててガブスレイの性能を上げ始めた。

「信念だ!! 生きる目的だ!!」

ジェリドは片手でフェダーインを保持しつつ、サーベルを取り出してそのZの刺突をさばく。

「お前にはあるか!? カミーユ!?」

「ある!!」

メガランチャーを大振りで振り回すカミーユ。その隙を突こうとするジェリド機をバルカンで牽制する。微かにガブスレイの装甲をバルカンがかすった。

「アーガマの皆の為に!!」

その言葉とともにZが謎の光を放ち始めた。カミーユがビームランチャーの銃口をガブスレイの正の面へ突きつける。

「俺も同じだ!!」

ジェリド機からもフェダーインの照準がカミーユのZへ向けられた。

「マウアー達の為に!!」

その二機のバイオセンサー搭載機の周囲の宙域に紅い光が煌めき始める。その輝きの中、ビームランチャーの波動が二人の戦士達の機体から噴出した。

「ヤザン隊長!!」

「分かっている!! アドル!!」

ヤザンはモビルスーツ運搬機を駆りながら攻めてくる量産型Zの部隊と交戦しながら、自分の部隊へ配属された新人パイロットへ叫び返す。

「新型のガンダムタイプか!？」

量産型Zの部隊の支援に駆けつけたと思しき二機のモビルスーツにヤザンは目を凝らす。部分部分に赤い塗装が施されたZガンダムの可変型量産タイプ、その上にやや小型のガンダムが乗っているのを見て、ヤザンは眉間に皺をよせる。

「腕に覚えがありそうな奴の近づき方だな……」

コクピット内でヤザンは軽く呻く。

「あれはアムロ・レイの機体かもしれません!!」

「知っているのか!? ラムサス!？」

「カラバのアムロ・レイが赤いZに乗っていると!!」

「そいつぁ面白え!!」

大型のサブ・フライト・システムに乗せてあるその重厚な機体、ガンダムMK―Vを駆るヤザンは背後に付き従う隊へ号令をかける。

「行くぞ!! ラムサス!! ダンケル!!」

「了解!!」

「アドル!!」

ヤザンは新米パイロットの機体へ顔を向けた。

「死ぬなよ!!」

「りよ、了解!!」

ガンダムMK―Vを先頭に可変型モビルスーツ「ハンブラビ」の編隊が続く。

「どっちがアムロ・レイだ!？」

「寝ぼけた事を言うな!! ダンケル!!」

ヤザンはそう叫びながら、ガンダムMK―Vからミサイルを斉射する。

ギユアア……!!

Zガンダムの量産機、赤い塗装の空間戦闘用Zプラスがミサイルを避けようと急旋回をかける。

「撃ち落とせい!!」

そのヤザンのかけ声と共にハンブラビ隊からビームの集中砲火が新型のガンダムを乗せたZプラスへ襲いかかる。

「流石に速い!!」

ビームの斉射を猛スピードで避けたZプラスをダンケルが憎々しげに睨み付ける。

「どっちがアムロ・レイだ!?!」

「おめえまで寝ぼけたか!? アドル!!」

「し、しかし隊長!!」

「決まっている!!」

ヤザンのガンダムがインコム・ユニットをそのカラバ機へ投げつける。

「ビアア……!!」

上に乗っているガンダムの手からビームが放たれる。そのビーム砲はインコムの内一基を破壊する。

「おらよお!!」

ヤザンは自らの機体をそのカラバ機達へ突進させる。

「大胆な!?!」

無謀とも言えるヤザンの特攻にその二機が離れた。

「撃てい!!」

ハンブラビ隊から再度ビーム砲が放射された。

「ちい!!」

小柄なガンダムはそのビームを全て回避できたが、Zプラスの方は主翼部分へビームがかする。その機体が僅かに失速する。

「こういう事だよ!!」

そう叫びながらヤザンが小型のガンダムにビームライフルを撃ち放った。

「強い方がアムロ・レイとやらだ!!」

「良い勘だな!! テイターズ!!」

その小型機からアムロ・レイの声が響く。

「諸手が出てくるということとは!!」

ヤザンはそのガンダムの両手に何も火器が無いことを目の端で捉えた。

「全て武器は内蔵式だな!! ガンダム!!」

そのヤザンのガンダムへアムロ機の両手の腕部からビームが飛んだ。

「良い狙いだ!! チビのガンダム!!」

ヤザン機の肩へビームがかかる。その損傷を気にした様子もなく、ヤザン機のライフルからもビームが放たれる。

「Gペガサスをなめるな!!」

アムロの乗る小型ガンダムは背部ブースターを噴かせてヤザン機へ急接近を試みる。

ギア!!

ヤザンとアムロが乗る二機のガンダム達がお互いのビームサーベルを交差させた。

「小さいナリの癖に何て出力だ!!」

Gペガサスというらしいアムロの乗機の腕部下部から成形されているビームのブレードにヤザン機のサーベルが押される。

「それえい!!」

ヤザンは自機のガンダムを支えているサブ・フライト・システム「タケテカルウェイバー」をアムロ機へ向けるように機体を上へ回転させる。

「シヨックワイヤー!?!」

そのモビルスーツ運搬機の下部から放射された複数のワイヤー状の兵器をアムロはとっさにかわす。一状のワイヤーのみかわせずGペガサスの脚部へ絡みつく。

バツバア……!!

ワイヤーから電流が流される。

「電磁兵器か!!」

アムロは腕に固定されているビームサーベル・ユニットからビーム刃を形成し、そのワイヤーを切り払う。

「そんな武器を使うってことは!!」

アムロのGペガサスがその脚からビームの刃を形成して、ヤザンのガンダムを蹴りつける。

「お前はエースだな!？」

「武器だけでわかるのかよ!! ああん!？」

「この手の電氣的なバリバリ音を鳴らす武器を使うパイロットは!!」

頭部バルカンがヤザンを牽制しながら、アムロはひたすらヤザン機へ攻撃を仕掛けていく。

「強いと相場が決まっている!!」

「誰が決めた!？」

「俺の経験が決めている!!」

「あてになるもんかよ!!」

「ならお前は弱いのか!？」

「強えに決まっているだろ!!」

「そういう道理だよ!!」

「そうかもな!!」

そのアムロの言葉に対して高笑いをするヤザンは肩のウエポックから海へビと呼ばれるショックワイヤー兵器を取り出す。

「そら!!」

シュシイ!!

海へビがGペガサスの胴体に絡みつく。

「落ちなあ!!」

「甘い!! ティターンズ!!」

「何イ!!」

アムロ機の手ひらが光を放ち、その海へビのワイヤーを掴む。

ジュア!!

ワイヤーが蒸発するような音を立てて、Gペガサスの手ひらの中で焼き切られる。

「手のひらに何か仕込んでおるな!!」

「そうとも!!」

アムロはそのまま手のひらをヤザン機へ向け、拡散ビームを放出した。

「おつとう!!」

「またもヤザンは運搬機タクテカルウェイバーをひっくり返してそのビームを受け止める。」

「頑丈な盾だな!!」

「本当に強いな!! アムロ・レイ!!」

「そう叫びながらヤザンは運搬機のスラスターを噴かし、いったんアムロ機から距離を取ろうと機体を後退させた。」

ドウドウ……!! ドウドウ……!!

「モビルスーツの魚群かい!？」

「ヤザンとアムロの間をZプラスとメタスの改良タイプが群れが通りすがった。それを追ってテイターンズのバウンド・ドッグなどの高機動の機体はその宙域を覆い隠した。」

「どこだ!? アムロ・レイ!？」

「そのモビルスーツの大波でアムロ機を見失ったヤザンはコクピット内で自身の目と計器類を駆使して、宙域の中にそのアムロのガンダムを探り回そうとする。」

「いたか!!」

「ヤザンは自機の上から接近してくるアムロのGペガサスをその目で確認した。」

「試しにつるんで攻めてみるか!？」

「Gペガサスの手から放たれた拡散ビームを機体下部の「盾」で防いだヤザンはやや離れた場所で戦闘を行っているハンブラビ隊を呼び寄せようと通信機へ怒鳴る。」

「聞こえるか!？」

「もちろんです!! 隊長!!」

「ヤザンの片耳へダンケルの明るい声が響く。」

「オトリ作戦ツォーをやってみるぞ!!」

「了解!!」

「ダンケル、ラムサス、そしてアドルの三名から力強い返答がヤザン機へ返ってきた。」

「ギィーア!!」

ヤザン揮下のハンブラビ隊がアムロ機へ急速接近をする。

「そんなイカだか何だかで!!」

ハンブラビ隊がアムロに最接近をする。だが、ハンブラビの部隊はそのまま何もせずにフライ・パスをする。

「何のつもりだ?」

そう言いながらも、アムロは機体を機敏に動かし、背後へビームブレードを振るった。

ズギイア……!!

「と、でも言うと思ったか!! ティターンズ!!」

「ハッキリ言ってるじゃねえか!! アムロ・レイさんよ!」

アムロ機の背後から襲いかかろうとしたヤザンのガンダムMKⅠVのサーベルがGペガサスのブレードに防がれた。

「お前の空耳だ!! ティターンズのエース!!」

「ヤザン・そしてゲールと言う名前があるさ!!」

「なら、空耳の空耳と気のせいをプラスしてお前の耳に成した事だ!!

ヤザンを足してゲール!!」

「そうかい!! アムロとそのレイ!!」

ヤザン機のサーベルを無理に打ち払ったアムロは瞬間移動のようにヤザンから距離をとってGペガサスの腰からグレネードを射出する。

「盾があるって言ってんだろ!!」

笑いながらヤザンはウェイバーを旋回させる。

ズジャ……!!

「なんとお!! トリモチか!!」

そのトリモチで武装モビルスーツ運搬機タクテカルウェイバーの兵装用センサーが塞がれる。

「楽しいぜえ!! 凄いやアムロ・レイ!!」

ヤザンは笑い、狂喜しながら機体をアムロ機へ突撃させる。

「バーサーカーなタイプのパイロットめ!!」

そのヤザン機をアムロは思いっきり蹴り上げてその軌道を変えた。

「ケンカ殺法すらお手の物か!!」

背後をアムロに取られながらも、ヤザンは残り一基のインコムを自機の背後へ発射させる。わずかに不意をつかれたアムロ機へインコムのビームが命中した。

「ニュータイプでもそうそう出来ない事を!!」

アムロは小型機の燃料の残りを計算しながら、ヤザン機へ甲高い音のエンジン音を響かせながらGペガサスを接近させようとする。

「ダテにニュータイプなどおだてられてはいないさ!!」

二機のガンダムは再び向かい合い格闘戦を始める。その周囲にはティターンズとエウーゴ・カラバの可変機達が激しい戦闘を繰り広げていた。

「雑魚がピラニアみたいに!!」

運搬機「セッター」に乗ったリック・ディアスⅡと同じく運搬機「ゲター」に乗ったヘヴィバーザムとの交戦がZガンダムとガブスレイに割り込むように始まったことで、ジェリドはカミーユ機を見失った。

ギユアーン!!

「カミーユ!?!」

背後から放たれたビームを勘に頼って回避したジェリドはその機体を観察する。

「Zじゃない!!」

ジェリドは周囲の宙域に細心の注意を払いながら、そのウェイブライダー形態の可変機を睨み付ける。

「Zモドキだ!!」

そのZタイプの機体はウェイブライダー形態のまま急旋回をし、再びジェリド機へビームを放つ。

「出力だけならカミーユのZよりも上か!?!」

かろうじて避けた、強く輝くビームの帯に目をやりながらジェリドは軽く唇を噛む。

「ZのⅡですからね!!」

女の声がそのZタイプの機体から響いた。

「ジェリドの坊や!! 落とさせてもらう!!」

「俺を坊やと呼ぶ!？」

そう言いながら、一撃離脱を繰り返すそのZタイプにジェリドは胴体の拡散ビームを目眩ましを兼ねて発射する。

「なかなかの戦い巧者に!!」

ガブスレイの拡散砲はZⅡという名前らしいその機体のモニターへ損害を与えたように見える。パイロットの女がコクピット内で軽く舌打ちをした。

「そうか!!」

叫びながらジェリドはガブスレイを高機動形態へ可変させた。

「サマナの先輩のお仲間である女だったな!!」

叫びながらジェリドはそのZⅡを追尾する。

「確か名前はブルー!!」

「ダカールでは生意気に彼女までつれていたわね!! 昔のガンダムの坊や!!」

「サマナやユウへはちゃんと詫びはしといてやる!!」

ジェリドはガブスレイのスラスターにかなりの負荷をかけながら急激な旋回をする。ジェリドの身体にかなりのG（慣性による圧力）がかかった。

「安心して落ちろ!!」

「昔に世話をした女を撃てて!？」

モニターを復旧させようとしているブルー機の隙をつき、その機体の真後ろにつくことにジェリドは成功する。

「恩を仇で返すってのも悪くはねえ!!」

ガブスレイのフェダーインがZⅡをロックオン。ジェリドが発射スイッチを押そうとした寸前!!

ブオフ!!

宙域を強烈な光を放ちながら一条の高压ビームが突き抜けた。

「今までのジェリドではない!？」

必殺の念を込めて放った最大出力のビームランチャーをジェリド

にかわされたカミーユはその驚きを顔の面に出す。

「寿命も玉も神経も縮まったかもな!! 俺は縮まったんだよ!! カア
! ミーユウー!!」

間一髪で背後から放たれたカミーユ機のハイパー・メガランチャーの直撃をかわしたジェリドの背中からブワツと汗が吹き出す。ガブスレイの肩部ビーム砲が二基ともその高出力ビームの余波で吹き飛んだ。

「ジェリド!!」

モビルアーマー形態のジェリド機がその機体の前方へ相当な損傷を受けた事を知ったマウアーが自分のガブスレイをジェリド機の支援へ向かわせる。

「そのZⅡは私に任せて!!」

そう叫びながらマウアー機はブルーのZⅡへ向けてビームガンを乱射する。

「手強いぞそいつは!! マウアー!!」

「カミーユの方が手強いでしょうに!!」

「違うない!!」

叫びながらジェリドはガブスレイをカミーユ機の後ろへ突かせようとおがく。

「捕まるかよ!! ジェイリドオ!!」

カミーユの凄まじい気合いの声かモビルスーツの花火が舞う宇宙へ疾る。四機の可変機がその宙域に入り乱れる。

グリップスの宙域の周辺にはおびただしい数のモビルスーツの群れが舞い、動きまわり、そして爆散していった。

第37話 ミネバの目

「居心地はどうだ？ ユウ？」

「悪くはない」

ネオ・ジオンの弩級戦艦「グワダン」の一室に監禁されているユウは、読んでいた本にしおりを挟んでからきちんと畳み、ニムバスから食事を受け取る。

「シヤアは俺を嫌っていたはずだがね……」

「私が知るもんかよ、ユウ」

ニムバスは雑風景なその部屋をぐるりと見渡してから、フィリップとカツへもランチプレートを渡していく。

「サラちゃんとシドレちゃんは大丈夫か？」

ニムバスから食事を受け取りながら、フィリップがそう訊ねる。

「隣の部屋へほおりこんであるよ」

「食事は？」

「ローベリアの奴が世話をしている」

そう言いながら、ニムバスはユウが先程まで読んでいた本へ目を向ける。

「興味があるか？ ユウ？」

「別に……」

ベッドの上へ無造作に放り投げられた本へちらりと目を向けた後、ユウは受け取った食事を食べ始める。

「宇宙世紀の騎士道、ねえ……」

ユウが読んでいたその本のタイトルを見て、フィリップが少し呆れたように呟いた。

「私が読んだ後の古本だよ」

「退屈しのぎに本を用意してくれるのは、気が利いているんだかいな
んいだか……」

カツも質素な食事をしながら、読みかけの文庫本へ軽く目をやる。

「テレビとかを用意するわけには、さすがにいかないよ……」

「そりやそうだな……」

肩を竦めるニムバスへフィリップが気の無い返事をする。ニムバスは先程から時間を気にしているようだ。しきりに自分の腕時計を見ている。

「ユウ」

ニムバスが腕時計から映し出される時間を確かめたあと、ユウへ口を開く。

「何だ？」

「食事が終わってしばらくしたら、ローベリアがお前を迎えにくる」

「あの女が？」

ニムバスのその言葉にユウは少し首を傾げた。

「シヤアが会いたいそうだ」

「もう夜中になるぞ？」

ユウは部屋の中の時計に目をやりながら少し不満げに言った。

「シヤアが捕虜の都合を気にする男か？」

「俺がシヤアの細かい性格を知るわけがないだろうに、ニムバス」

そのユウの言葉にニムバスがニヤツと笑う。

「忙しいんだろうな、シヤアは」

「だから夜更けにか？」

その言葉に対してもニムバスは笑って答えるだけである。

「そうかいそうかい……」

投げやりにユウはため息混じりの口調で言い放った。

「一応、粗相の無いようにな」

微かに皮肉の色をその笑みに浮かべながら、ニムバスは最後に首を回してユウ達を一瞥してから部屋を出ていく。

「シヤアもローベリアも……」

癖のある人工甘味料で甘味をつけられたプリンを少し顔をしかめながらユウは喉へ流し込む。

「俺の事を恨んではいるはずだな……」

「大丈夫ですかね……」

カツが不安そうな顔をする。

「かとかいってもなあ……」

手早く食事を口へかきこんだフィリップが、読みかけの雑誌へ手を伸ばしながらカツの方へ顔を向ける。

「俺達は所詮捕虜だよ、カツ」

フィリップが何かをいう前に、ユウがそう吐き捨てるように呟いた。

「んだな……」

ユウの言葉に気だるげにフィリップはそう答えたあと、雑誌の紙面から顔を上げユウへ目をやる。

「神様へ無事を祈っておくよ、ユウ」

「そうしてくれ」

そう言いながら、ユウはあてがわれたベッドへ横たわりながら軽く目を閉じた。時間まで少し休んでおくつもりなのだろう。

「ユウ」

「何だ？」

「あのシドレとやらは」

自分と同じ位の背丈はある、女性にしては背が高いローベリアの後ろをユウは歩調を合わせてついていく。

「男なのか？ 女なのか？」

「分からん」

「呆れた話だ……」

その言葉通りに呆れた表情を見せるローベリア。

「サラとは昔馴染みらしいがな……」

「だから間違いはないと？」

「と、思っではいるよ」

「無責任な連邦の士官だな」

そう言って少し笑みを浮かべるローベリア。自分の少し長めの栗色の髪に軽く手を撫でつけながら二人の男女は早足でグワダンの通路を歩く。

「ローベリア」

「何？」

グワダンの長い通路を歩くローベリアの横へユウが脚を前に出す。

「あんたがジオンの為に戦う理由はなんだ？」

「フフ……」

ユウよりも5つあたり歳が下、25歳前後という歳の割には若く見えるローベリアはその言葉に軽く笑う。

「出世だよ」

「一応、理由にはなっているな……」

「あたしはジオンのサイド3、そこで名だけはあつた良い家の出身でね」

グワダンの窓から見える漆黒の宇宙へ目をやりながら、ローベリアは話を始めた。

「戦いで名をあげて、家の再興を目指そうとしたんだが……」

「お家の再興とやらか……」

「ジオンの軍に入ったと同時に、一年戦争が終わりに向かってきてしまったんだ」

少し笑いながらローベリアはそう言ったあと、その足を止めて通路のサイドバーへ身体を寄りかからせた。腕を軽くバーへ乗せる。

「おい、シヤアと会う時間は……？」

「少し早すぎたわ」

「ふうん……」

そう頷きながら、ユウもローベリアの横でグワダンから宇宙を眺め直す。

「その後、レッド・ジオニズムなどの旧ジオンの組織を転々としてはいたんだけど」

そう言つて、ローベリアは少しため息をついた。

「上手くいかないわ」

「今のネオ・ジオンでは？」

「なかなか運が向いてこないんだ」

そう言つてローベリアは皮肉げにユウへ微笑んだ。

「この前、お前にキュベレイを潰された為に、再興の夢がより遠ざかつ

たよ」

「悪かったな……」

肩を竦めるユウに鼻を鳴らしながら、ローベリアは自分の髪に手をやり撫で付けつける。その仕草は彼女の癖なのかもしれない。

「まあ、どちらかと言うと」

「何だ？」

「家の再興ってのは、あたしの成り上がりとする野心の大義名分の部分が強いけどね」

「どっちにしろ、立身出世が目的か」

「そうだな」

ローベリアは腕時計に目をやってから、グワダンの通路のサイドバーから身体を起ここした。

「もうそろそろ、行ってもいいだろうな」

「分かったよ」

二人は再び通路を歩き出した。

「ただなあ……」

再びユウの少し前を歩くローベリアが微かに呟く。

「ジオンの名を引きずる組織では、そういった立身出世は難しいのかもしれないな」

「なぜだ？」

ユウの言葉にローベリアは答ええない。無言で夜更けの通路を歩く二人。

「ジオンはな」

しばらくしてから、ローベリアがポソリと言う。

「所詮、ジオンへの懐古主義、そして宙へ浮いた主義主張の集まりなんだ……」

「……」

「私やニムバスとは相容れない」

「ニムバスも？」

そのニムバスの名前が出たローベリアの言葉にユウは眉をひそめる。

「ついたぞ」

ユウのその言葉にローベリアは答えずに、食堂の前で立ち止まる。

「食堂だぞ?」

「ここでいいんだ」

そう言つてローベリアは一つあくびをしながら立ち去つていった。

「ニムバスね……」

そう口ごもりながら、ユウは食堂の中へ入つていった。

「良い顔ではないか、ユウ・カジマ」

「シヤア?」

ユウは最近よく戦場で自分の耳へ入る事の多かつた、その低い男の声に反応する。

「少しやつれたか? シヤア・アズナブル?」

「気のせいだろう? ユウ・カジマ」

薄暗い食堂の明かりに照らされるシヤアの顔は確かに少し骨が浮き出て細くなつたようにユウには見えた。

「それと……」

ユウが食堂の中央テーブルへ座っている残りの人影に目を向けた。

「こちらの方々は……?」

ユウは常夜灯に照らされながら、シヤアと共にカップラーメンを口へかきこんでいる女と少女の姿をその目で見る。

「挨拶の前に……」

二人の人影のうち、大人の女からユウへ声がかかる。

「まあ座れ。ユウ・カジマ」

二十前後の歳と思われるその女が穏やかな声でユウへそう言った。

「その声はハマーン・カーンか?」

「捕虜の分際でネオ・ジオンのトップ格の人間達を呼び捨てとは良い度胸だな……」

ユウはハマーンの言葉にどうしたものか分からないような表情を

しながらも、とりあえずシャアの横一つに椅子を置いた距離でテーブルへつく。

「たしか、こちらの方は……」

「口調に神経をつかっているな？ ユウ」

シャアがそう言いながら面白そうにユウへ笑いかける。見ればシャアはサングラスを外し素顔を見せていた。

「ネオ・ジオンの指導者、ミネバ・ラオ・ザビ様だ」

そのシャアの言葉にユウは少し姿勢を整え、ミネバと呼ばれた少女へ一礼をする。

「地球連邦軍中佐、独立部隊隊長ユウ・カジマであります」

「ネオ・ジオン代表、ミネバ・ラオ・ザビである」

ミネバはカップラーメンを食べる手を止めて、ユウへ微笑みかける。

「よしなに、ニュータイプとオールドタイプを繋ぐ使命の者よ」

「そ、そのような……」

全くどういう反応をして良いかわからないユウへミネバが近くのポットからジュースを差し出す。

「ありがとうございます、ミネバ、様……」

「ミネバ様に気に入られたかな？ ユウ」

困惑しきったユウをからかいの色を含んだハマーンが笑いながら見つめる。

「我々は今日は忙がしくてな」

シャアがラーメンのカップを箸でポンと叩いた。

「何も食っていない、失礼をするよ」

「ミネバ様はこの様な食事でいい……」

そう言いかけてから、ユウは一つ咳をして言葉を正す。

「いや、食事でよろしいのか？」

「ハマーンの影響だよ」

そのシャアの言葉にハマーンが渋い顔をする。

「お前が出ていったせいで、全責務が私に降りかかったのだぞ？」

ハマーンがカップラーメンのスープを飲み干そうとする。

「ストレスが溜まる、ついこれに手が伸びてしまう」

「ハマーン、インスタント物のスープを飲むのはまずいぞ？」

「塩分が全く足りぬのです、ミネバ様」

そのハマーンの言い分にミネバは苦笑する。

「ミネバ様はこのようなハマーンを見習ってははいけませんぞ？」

「カップラーメンのスープは美味であるぞ？ シャア？」

「だからいけないのですな、カップラーメンは」

「たまには良い物だろう？ シャア？」

「毎日はいけません」

「さすがにハマーンが許さない」

「それはなりより」

そう言いながらシャアはラーメンを食べ終えて箸を置く。スープを飲まないシャアを見習ったのか、ミネバはちゃんとスープを残した。

「ユウ・カジマ」

スープを飲み終えたハマーンがユウへ訊ねる。

「お前の戦う理由は何だ？」

「その質問ですか……」

「お前は強すぎる」

ハマーンがコップの水に口をつけながら、静かにユウへ語りかける。

「あそこまでオールドタイプに押されたのは久しぶりだったよ……」

「機体性能のお陰ですよ」

ネオ・ジオンの指導者が目の前にいる影響からか、自然とユウの言葉が礼儀正しくなる。

「ハマーンやシャアに対抗出来る程のモビルスーツの腕をその身に付けたのは」

ジュースを飲みながらミネバがハマーンの代わりにユウへその質問を続けた。

「何か信念や理念があつての事であるか？ ユウ・カジマ？」

「二ムバスにも聞かれましたね」

ハマーンとミネバの顔をユウは交互に見やりながら、静かにその質問へ答えようとする。

「自分の職務に忠実であるだけの人間ですよ、わたくしユウ・カジマは」

「理念がない人間か？ ラプラスよ？」

「ラプラス？」

ミネバの言葉に首を捻るユウ。

「可能性という意味でその言葉を使った」

「先程からあなたの言葉は自分の頭では完全には理解が出来ていません……」

「嫌がらせを兼ねて、あえて煙にまくように言っている」

「わたくしユウ・カジマが嫌いど？」

「我らがネオ・ジオンのパイロットを何人も落としておる」
「確かに」

そのミネバの言葉にユウは顔をしかめながら、ジュースへ口をつけた。

「私やマリオン・システムの事はニムバスから？」

ユウは水を飲んでいるハマーンへ顔を向ける。

「全て聞いておるよ」

「ニムバスはネオ・ジオンの人間になりましたからね」

「そうでもない」

「と、言うど？」

ハマーンのその言葉にユウが疑問の声を上げた。

「もはや、あのニムバスめの心はとづくにネオ・ジオンにはない」

「再び連邦やティターンズに戻るつもりでありますど？」

「違うな、そちらにも眼中にない」

ハマーンがぼんやりした声でユウへ答える。

「既存のジオンや連邦にも、そしてニュータイプやその概念にもな」

「ニムバスが、ですか？」

不思議そうな顔をして、ユウは目を細めた。

「ニュータイプを越える事に執着しているあいつが……」

「もうすでに、完全にニュータイプを越えているよ」

黙って聞いていたシャアが二人の話に口を挟んだ。

「私やハマーンと互角か、それ以上だ」

「まさか……」

ユウは最初、その言葉を冗談だと思い笑おうとしたが、ハマーンやシャアの真剣な顔を見て、一つわざとらしく咳をして身動きする。

「ハマーン達……」

ミネバが苦笑しながらハマーンとシャアの顔を見渡す。

「捕虜とは言え、あまり誠実な者を困らすではない」

「ハッ……」

含み笑いをしながら、ハマーンが微かにミネバへ頭を下げた。

「強すぎるんだ、ニムバス君はね……」

ハマーンとミネバの顔を困惑しながら見つめているユウへシャアがそうポソリと呟く。

「強化人間の力でしよう？ ニムバスは？」

「彼にはいつの間にか、強化人間の調整設備が必要なくなっちゃったんだよ、ユウ」

「そんなバカな……!!」

そのシャアの言葉にユウは絶句する。

「俺の知り合いの技術者が言うには、強化人間とはそんな易しいものではないと……」

「事実を覆せない」

「……」

「一種のミュータントだ」

沈黙しているユウへシャアがそう断言する。

「ニュータイプでもオールドタイプでも」

シャアが水を飲み干しながら、独り言のように呟く。

「ましてや強化人間でもない新しい人種だと思うよ、私はね」

「すぐには信じられませんね……」

「すぐに解る事になるよ、ユウ」

「どういう意味ですか？ シャア？」

シヤアはすぐには答えずに菓子の袋へ手を伸ばし、その中身をテールの上へばらまく。

「シヤアは私の嗜好を覚えていてくれたか」

ミネバが嬉しそうに、包装紙に包まれたゼリーへ手を伸ばした。

「君に勝ちたいそうだ、ニムバス君は」

「今更……」

「一度、君はニムバスを負かせたようだね」

「一年戦争時の話ですよ？ シヤア？」

ユウが苦笑いをしながらシヤアへ答える。

「昔の話だ」

「必ずや再燃する事だよ」

何か感慨深そうにシヤアがゼリーを口へほおりこみながら微笑んだ。

「私はニムバス君の気持ちが解るよ、とても、とってもね」

「……」

ユウはそのシヤアの言葉にある男の顔が脳裏に浮かんだ。

「一年戦争時のアムロ・レイとシヤア・アズナブルの因縁……」

ユウは連邦軍内でよく噂話として持ち出されるその二人の男の名を口に出す。

「見事に正解だ」

ユウのその言葉に笑いながら、シヤアがゼリーをユウへ渡す。

「ぐ褒美だ」

「ふざけないで下さいよ……」

ユウはそう言いながらも、ゼリーを口へ入れる。

「逆襲のニムバス君だ」

からかうようなそのシヤアの言葉に、少しユウはムツと顔をしかめる。

「あなたもアムロ・レイに対して考えている事でしょうに？」

ジュースを飲み干したユウへミネバがおかわりを渡してくれる。

「果報者め、ユウ・カジマ」

ミネバにジュースを入れてもらったユウに、目を細めながら口の端

を歪ませるハマーン。

「勝てるか？ ニムバス君に？」

「あなたやハマーンよりも強い……」

「面白そうな戦いだ」

そう言つて笑うシヤアにユウは再び不愉快そうな顔をする。

「映画にでもすれば、良い収入になる」

「それはあなたとアムロ・レイの方が良いでしょうね」

「逆襲のシヤア・アズナブル？」

その言葉にミネバが口を開く。

「見てみたいものだ、ハマーン」

「どうせシヤアが負けるに決まっています」

そのハマーンの皮肉混じりの言葉に苦笑するシヤア。

「やはり、男というものはみんなこのような勝った負けたの考え方を
するものなのか？ ハマーン？」

「そうでありましょうね、ミネバ様」

二人の女の会話にシヤアは肩を竦めた。ユウの方は少し憂鬱そう
な顔をしている。

「最近、ニムバス君はある思想に興味があるみたいだがね」

ユウのその顔色を見て気を使ったのか、シヤアが少し話題を変えて
きた。

「ある思想？」

「ブツホ何とかという会社が主張しているらしい物だ」

「はあ……」

曖昧にシヤアに答えるユウ。

「確か、貴人主義だか貴族主義だか何だか……」

「貴族主義？」

「世の中は高貴な者が統治すべきだとかいう思想らしいな」

「聞いた事もない……」

そう言いながら、ユウはジュースで唇を濡らす。

「ジオンの選民思想のマイナーチェンジでは？」

「それとは少し違うらしい」

「ふむ……」

考え込むユウにシヤアは話を続ける。

「ニムバス君にとっては、新たな目的なのかもしれないな」
「ラプラス」

唐突にミネバが強く宣言するように言う。

「可能性を求める男だ」

その言葉が四人の間に不思議な沈黙を作った。

「目的を常に作る男、ニムバスか……」

「君とは違うな、ユウ」

シヤアはユウの呟きに対してそう言い放つ。

「その言葉では、もう俺は腹を立てませんよ……」

ユウの疲れたような声に、シヤアが腕時計の時刻を見ながらハマーンへ問いかける。

「ミネバ様はそろそろ御就寝に？」

「そうだな……」

ミネバがハマーンの顔をちらりと見ながらシヤアへ答えた。ハマーンが微かに頷く。

「過去の清算をしたいのだろうか、シヤアもニムバスも」

ハマーンが食べた夜食の片付けをしながら、誰へ言うともなくそう呟いた。

「私達のは男の意地だよ、ハマーン」

「理解が出来んよ」

シヤアへそう吐き捨てながら、片付けが終わったハマーンはミネバへ顔を向ける。

「話はお楽しみになりましたか？ ミネバ様？」

「面白い話であったよ」

そう言ってミネバは席を立った。

「面白い話を感謝する。捕虜ユウ・カジマ」

「ああ、なるほど……」

ユウは何か合点がいったようだ。

「ミネバ様への単なる楽しみの為に俺を呼びましたな？」

「明日は良い食事を支給してやる」

「ハハ……」

ハマーンのその言葉にユウは軽く笑った。

「では、さらばである」

そうユウへ言い残して、ミネバはハマーンに連れ添われながら食堂を出ていった。

「ユウ」

席から立ったシャアがユウへ口調を正して言葉を放つ。

「ニムバスは強敵だよ」

「俺には彼と戦う理由がない」

「ハッーツ、ハッハッ……!!」

「何がおかしい……!!」

突然、大声で笑いだしたシャアをユウは睨みつける。

「理由などは作ればいいのだよ、ユウ・カジマ……」

「何だつて……?」

「土俵へ引きずりだすのさ、相手をな……」

「何だよ……?」

何か決意を込めたようなシャアの言葉にユウは困惑する。

「うう……!!」

突然シャアが片手で自分の頭を押さえ始める。

「どうした、シャア?」

「いや、なんでもないさ……」

シャアは荒い息でユウへ返事をする。その顔から軽く汗をにじませながらシャアはユウへ口を歪ませて微笑んだ。

「ニムバス君はよくこんなレベルの強化人間処置を受けて平気でいられるな……」

「何……!!」

単なる偶然か、ユウは瞬時にその言葉の意味を理解出来てしまったようだ。

「シャア、あなたは強化人間に?」

「さあてな……」

シヤアの呼吸が徐々に整ってきた。

「部屋へ戻れ、ユウ」

いつも通りの端整な面持ちへ戻り、ユウへそう言い放つシヤア。

「しかし……」

困惑するユウを残したまま、シヤアは静かに食堂から立ち去っていった。

「シヤアはいったい何をやろうとしているのだ……?」

薄暗い食堂の中、ユウはシヤアの言葉や行動の数々に何か不気味な物を感じていた。

「ユウ」

食堂のスピーカーからニムバスの声が聞こえてきた。

「お前は捕虜なんだぞ? ユウ」

「早く部屋へ戻れというんだろ?」

スピーカーの奥でニムバスの笑い声が聞こえる。

「10分以内に戻れ」

一方的にそう言つて、ニムバスは笑いながら放送を切つた。

「こんな悪趣味をするニムバスが貴族であるもんかよ……」

そう呟きながらユウは薄暗い通路の中、急いで部屋へ戻っていった。

第38話 宇宙を駆ける（後編）

「まずい!!」

アムロのGペガサスのコンソールの燃料計が警告のランプを点滅させる。

「エネルギーが!!」

GペガサスはガンダムMKⅤへ大振りでビームブレードを振るうと、アムロはその勢いを生かして機体を前方へ押し出すように加速させる。

「逃げる気か!? アムロ・レイ!!」

ヤザン機の後方へ猛スピードで飛び去るアムロのガンダムをヤザンは機体を反転させて追いかけてようとする。

「推力を全開にしてどうにか追いつくか!!」

ヤザンはサブ・フライト・システムの推力を全開にしてアムロ機を追撃しようとする。強烈なGがヤザンの身体に襲いかかる。

「しとめられる!!」

強引な加速でGペガサスへ追いついたヤザンはライフルの照準を定めようと機体の腕を動かしたその時。

「これは!?!」

ヤザンは勘ともいうべき物で機体をアムロのガンダムから遠ざけようとする。そのヤザンの動きと同じ瞬間にアムロのGペガサスが反転し、その両手からビームを放つ。

「しまった!!」

そのアムロの攻撃に対して、ヤザンは防御装置でもある運搬機「タクテカルウェイバー」を使用するのが一瞬遅れてしまう。Gペガサスからのビームがヤザン機を運搬するタクテカルウェイバーの後部ブースターへ直撃した。

「俺が小細工にはめられるとはな!!」

高出力で噴かしすぎた運搬機のブースターがビームの直撃により制御が出来なくなる。その乗っているヤザンの機体があらぬ方向への大推力に振り回される。

「逃げようとしたのはトリックだったか!？」

「半分は本音だったよ!! ヤザン!!」

ビームの反動で体勢を崩したヤザン機を尻目にアムロは自機の背をガンダムMKⅠVへ向ける。今度こそGペガサスが戦線を離脱しようとするようだ。

「本気が混じっていたから、だからこの俺が騙されたか……!!」

歯噛みをしながら、ヤザンは離れていくしていくアムロ・レイの機体を悔しそうに睨み付けていた。

「テイターズスのヤザンが伝説のアムロ・レイを退けたぞ!!」

ラムサスが通信回線は無差別にしてそう怒鳴る。そのラムサスのその声に敵味方から歓声とも悲鳴ともつかないどよめきの声が上がった。

「どうです、隊長?」

得意気な口調のラムサスの声が通信機を通してヤザンの耳へ入る。

「いつからそんなパフォーマンスの腕を身に付けたんだよ? ラムサス……」

ヤザンはそのラムサスの言い放った台詞に、自機の状態を確認しながらコクピット内で苦笑する。

「駄目でしたかい?」

「俺がアムロ・レイを退けたって言うより」

どうにか戦闘行動が続行できそうなコンディションのガンダムMKⅠVの様子に安心しながら、ヤザンはラムサスへ言葉を返す。

「むこうさんに引いていただいたっていうのは言うんじゃないぞ、な?」

「分かっていますよって!!」

「ハッハ……!!」

そのラムサスの答えにヤザンは満足げな笑い声をコクピット内に響かせた。

「アドルは?」

ヤザンは今度はハンブラビ隊の新人の事をダンケルへ訊ねる。

「帰艦させましたよ」

「疲れてたか？ アイツは？」

「初陣であそこまで出来れば上出来でしょう」

ダンケルはハンブラビの機体の中で軽く肩を上げたようだ。

「いいんじゃないかねえかい……」

ヤザンは軽くそう呟いたあと、ラムサス達へ再度口を開く。

「ケツに火の付いた奴らの所へ加勢してくる」

「俺達も続きます」

「無理はするなよ」

「隊長こそ」

ヤザンのガンダムの後方へ二機のハンブラビがモビルアーマー形態のまま追従する。そのままヤザン達は近くの宙域でエウーゴのZⅡ部隊に苦戦を強いられている量産型ガブスレイの部隊の支援に向かった。

ギイアアア……!!

マウアー機からのフェダーインをとつさにZⅡを可変させ、その勢いでそのビームの射線から機体をそらすブルー。そのZⅡのすぐそばを高出力のビームが疾り抜けていく。

「やるじゃない!!」

ブルーのZⅡが急旋回をした直後に可変し、マウアーのガブスレイへビームライフルを向ける。

「あの坊やへ良いところを見せるつもり!?」

「ジェリドにつりあわなくてはね!!」

ZⅡからのビームをかわしたマウアーは機体を可変させ、ガブスレイの格納ポケットからビームサーベルを取り出す。

「あの坊やのどこにそんな魅力が!？」

マウアーからのサーベルによる斬撃をかわしつつ、ブルーも自機からビームサーベルをガブスレイへ抜き打つ。

「ティターンズを真の平和維持の組織へ導ける男!!」

「あなたは恋する女か!!」

二機のビームサーベルが交差して、ビームの火花を散らす。

「いいじゃないさ!! エウーゴ!!」

マウアーが一旦ZⅡから離れ、腰だめにサーベルを構え直す。

「あんたには気になる男はいないの!?!」

「いるにはいる!!」

ガブスレイをサーベルをブルーは寸前でかわす。かすかに機体へそのサーベルのビームがかすった。

「もしかして、あのユウ・カジマ!?!」

「ティターンズのあなたが彼を知っていたか!?!」

「悪い男ではないだろうな、ユウ・カジマは!!」

ガアン!!

再び二人のサーベルが重なる。ビームサーベルの出力が増大されていく。

「だが、あのユウ・カジマでは!!」

「あなたはあの誠実な男に不満が!?!」

「広大な目で世の中を見ていない!!」

「ティターンズのあなたにあの彼の何が解って!?!」

「あの男には世の中を変えられないのよ!!」

ZⅡとガブスレイのバイオセンサーが熱を帯始めた。その二つの機体が白く発光し始める。

「私たちニュータイプとは違う!!」

「自信を持って言えるものね!! ティターンズのクセに!!」

「女は自身がニュータイプであると実感ができる生き物よ!!」

その機体達が顔を向け合う。両方の頭部からバルカンがお互いのその顔へ発射される。

「効くわけないでしょ!!」

「お互いにバリアーか!!」

離れながら、二人は叫び合う。

「ユウ・カジマは過去に生きる男!!」

「あなたに彼を評価する資格があつて!？」

「ジェリドがいなければ気にはなる男ではあつたわ!!」

ZⅡからのビームライフルをマウアーは肩からのビーム砲で相殺する。

「あのユウ・カジマは良くも悪くも連邦の軍を象徴しすぎている!!」

「人の気になる男を評論する!! 生意気な女!!」

「小さな善意しか心に抱けない男よ!!」

ブルーが距離を詰めながら格納してあるサブマシンガンを取り出す。そのマシンガンのビームの連射がガブスレイに向けられる。

「くっ!!」

放たれるマシンガンのビームをマウアーはガブスレイの機動性を駆使して何とかかわし続ける。

「何!？」

突如としてマウアーの脳裏にジェリドの苦痛に歪む顔が浮かんだ。

「ジェリド!？」

そのマウアーのわずかな隙にガブスレイがビームの連射に捉えられる。装甲が抉られる音がマウアー機のコクピットへ響いた。

「ジェリドが死ぬ!？」

サブ・ビームマシンガンがガブスレイの装甲を撃ち抜いていくのも気にせずにマウアーは機体を可変させ、ZⅡから距離を取った。

「ジェリド!!」

「逃げるか!! ティターンズ!!」

離れていくマウアー機を追いかけようと、ブルーも自機を可変させ背部のブースターの出力を上げながら、限界までスピードを上げるガブスレイを追尾した。

「順調だな……」

シロツコは自手製のガンダムタイプ of モビルスーツを宙へ浮かせ

たまま、主戦場からやや離れた場所でグリプスの宙域全体の様子を見渡している。

「まもなく、例の親書通りにエウーゴから停戦の合図が来る頃合いであるな」

若干ながらもティターンズが優勢と見えるそのグリプス宙域の戦鬪を黙ってシロッコは眺め続ける。

「まあ、この戦いに勝っても……」

シロッコはその顔をティターンズの宇宙での最大拠点「ゼタンの門」の方向へと向けながら、コクピット内で一人呟く。

「ネオ・ジオンが楽をさせてくれんだろうな」

そう口ごもるように呟きながら、シロッコは自分がティターンズへ加わった理由について思いを巡らせていた。

「地球の重力へ引かれた……」

シロッコはその視線をゼタンの方向から、青く輝く地球を見下ろすように向ける。

「はたしてその理由だけで地球圏へやって来た事に、自分も他者も納得が出来るもののかな……？」

シロッコ機の近くをティターンズのモビルスーツの編隊が帰還していく。補給へ戻るようだ。そのモビルスーツ達の姿にちらりと視線を向けた後、シロッコは薄く目を閉じながら思索を続ける。

「自分の能力の限界とやらを模索してみたかったか、なるほど……」

その両眼を地球を覆う海へ向けながら、シロッコは自分の最新鋭機の運用データの収集具合をコンソールに映す。手際よくその作業をこなしながらも脳内では思索は続ける。

「その理由ならば、私自信は納得が出来るのかもしれないな」

シロッコは下唇を軽く指で押さえながら、自分のその言葉に納得がいったように微かに頷く。眺め続けていた地球の輝きに眩しさを感じ、再びグリプスの主戦場へとその視線を移す。

「地球か……」

シロッコは眩しく輝く人類の故郷の名を口に乗せた。

——宇宙には心が満ちているの——

「何……!!」

シロッコはその声に驚き、コクピット内を見渡す。

「女、いや……」

シロッコの額から一筋の汗が流れ落ちる。

「複数の女の声の幻聴……!?!」

シロッコは勢いよく再度地球へ目を向けた。その視界に入るのは地球上のオーストラリア大陸。その大陸には人類初、ジオンのコロニー落として出来た巨大なクレーターの姿がある。

「あそこから聞こえた……?」

海水が入り込んで青く輝くクレーターをシロッコは実と見つめて
いる。

——宇宙にはユウが満ちているのよ——

「ユウだと……?」

知り合いの男の顔を脳裏に浮かべながらも、ガンダムのコクピット内でシロッコは何回か深呼吸をする。

「久々の戦場であるゆえ、気が立っているのかもな、私は……」

深呼吸を終えたシロッコは視線を地球から離す。もう謎の女の声は聴こえない。

「む……!!」

気を取り直してグリップス宙域へ視線を向けたシロッコは、その宙域のはるか遠方に推進機能が破壊されたと思しき重武装モビルスーツの姿を目に捉えた。

「パラス・アテネ、レコアか……?」

シロッコは新型の推進機を搭載したガンダムをその漂流している機体へ接近させようとした。涼やかな音と共に光の粒子がシロッコ機から放出される。

「今度はこっちが助ける番か、レコア……」

その廻り合わせにシロッコはコクピット内で微かに苦笑する。先程聴こえた女の声はすでに彼はその頭の中から振り払っていた。

可変機能が故障してモビルスーツ形態が取れなくなったジェリドのガブスレイがカミーユのZガンダムへしつこく追いつがる。

「ジェリドめ!! 素早い!!」

モビルアーマー形態の高機動を生かしてガブスレイはZへ一撃離脱の戦法を繰り返す。ジェリド機からのビームガンが脚へ被弾したことにカミーユは忌々しげに呻く。

「しかし……!!」

ジェリド機から「何か」を狙っているような気配を感じているカミーユはZのウェイブライダーへの変形をためらっている。

ゴウーアア!!

ガブスレイのフェダーインがカミーユ機のハイパー・メガランチャーに直撃した。ランチャーが火花を上げながら真つ二つに折れ曲がる。

「お前の得物を取ったぞ!!」

カミーユは喝采を上げるジェリドの声が自分の耳を打つ感覚に顔を歪ませながらも、その自分の頭を必死に働かせる。

「肉は斬る羽目になるとは思うがな……!!」

コクピットの中で腹を括りながらカミーユはZをウェイブライダーへと可変させた。

「今だ!!」

その時を待っていたジェリドは残りの燃料の事を無視してカミーユ機の上部へ取りつこうとZガンダムへ機体を突撃させる。

「やはり!!」

だが、カミーユのウェイブライダーはガブスレイの下部クローアームをかわしきれない。Zのスラスタに異常が発生していたようだ。

「取ったぞ!! カミーユ!!」

ジェリド機がウェイブライダーの上に取り付く。そのまま機体下部のクローをZガンダムの機体へ食い込ませる。

「捻り潰す!!」

ジェリド機のクローアームに力が入り始める。カミーユの耳へZの機体がきしむ音が響いた。

「させるか!!」

カミーユはウェイブライダーのビームサーベル格納部分からそのサーベルを強制排出させる。サーベルが回転しながら光の粒子を撒き散らし、ガブスレイへ向けて射出される。

「何だとお!？」

そのサーベルはZの装甲もいくらかは切り刻みながらもジェリド機のエダイン・ライフルを両断し、そのままコクピットの付近へ突き刺さった。

「モニターが!!」

ジェリド機のメインモニター、およびサブ・モニターが大きく損傷する。ガブスレイの全天視界モニターシステムの半数以上が死滅した。

「どこだ!! カミーユ!!」

全身から汗を流しながらジェリドは残ったモニターからZの姿を確認しようとする。

「後ろだ……!!」

背部モニターは全滅している。ジェリドは脳裏を疾ったその感覚に慌てて機体を旋回させようとする。

「終わりだ!!」

ガブスレイの背部についたカミーユがモビルスーツ形態へ可変しながらサーベルを取り出す。ビームサーベルの出力を増大させてジェリド機を突き刺そうとする。

「かわせない……!!」

ジェリドは恐怖を感じながらも必死にカミーユの攻撃をかわそうと足掻く。その唇が震えるジェリドの脳裏にマウアーを始めとする戦友達の顔が浮かんだ。

「ジェリド!!」

ブルーのZⅡの追尾を無視しながら、マウアーのガブスレイがジェリド機とカミーユ機の間を割って入った。

「マウアー!!」

「邪魔を!!」

Ζガンダム最大の出力のビームサーベルがマウアー機のコクピットを貫通した。

「マウアー!!」

ジェリドが絶叫する。その刹那。

フアサ……

羽が飛ばたくような音と共に紅い宇宙がその宙域を覆った。

「……っ!!」

その紅い光を見た瞬間、咄嗟にカミーユはマウアー機を貫いたビームサーベルの光が消滅するように「命じる」

「お前を守るって言ったろ、ジェリド……」

力の無いマウアーの声がジェリドの耳へ入る。コクピット内のマウアーは肩から血を流しながらも、命に別状は無いようである。

「マウアー……」

ジェリドはモニターが死んだガブスレイから、いや、全てのモバイルスーツの姿がその視界から消えさった紅い宙域でマウアーとカミーユの生身の姿をその両目で見る。

「無事か？ ジェリド？」

カミーユからもジェリドのそのままの姿が見えるようだ。

「何故？ 手加減を？」

そのジェリドの問いにカミーユは軽く首を振った。

「お前達を殺してはいけない気がした」

「お前に情けをかけられる筋合いはないんだよ、カミーユ……」

「誰かが俺にそう言ったんだ、ジェリド」

「誰だよ、それは……」

「女達が……」

「女だと……？」

徐々に紅い宇宙の光が消えていく。

「停戦信号……」

元の漆黒の宇宙へ戻ったグリップスの宙域に幾多もの信号弾が上げ

られているのを、カミーユ達はその目で見る。

「カミーユ!!」

ブルーのZⅡがカミーユ機の近くへ寄ってきた。

「通信機が壊れていたの? カミーユ?」

「俺の? Zガンダムの通信機が?」

「停戦の呼び掛けが聞こえなかった?」

「そうだったのか……」

カミーユは機体を翻して、ジェリド達の機体に目をやる。

「ジェリド!!」

「カクリコン!! あの停戦信号の合図は!?!」

「さっきから通信が来ていただろう!?!」

「そうだったのか……?」

「全く……!!」

呆れたようにジェリド達の同僚は停戦命令を再度伝えた。破壊されたモビルスーツのパイロット達を救助するために派遣された両軍の内火艇がその宙域を通り過ぎて行った。

「終わったか……」

エウーゴのモビルスーツ運用艦「アーガマ」のブリッジでその艦の艦長であるブライト・ノアが椅子に座ったまま軽く息をつく。

「アーガマのモビルスーツ隊の被害は?」

「レコアのparas・アテネが相当な損害を受けています」

「あの重いモビルスーツさんには動作に難があるからな……」

ぼやくように呟きながらも、アーガマの通信士であるトーレス達からの報告にその両耳を立て続けるブライト。

「何でも、レコア機をティターンズ側のモビルスーツが助けてくれたという目撃情報が……」

「ティターンズが?」

「まさかとは思いますが、レコアさんは……」

「今さら……」

そのトーレスの言葉に苦笑するブライト。

「この期に及んで、エウーゴとティターンスの戦争が終わった時にスパイなど働く人間がいるか？」

「確かに」

「仲間を疑うんじゃないよ……」

ブライトのその言葉に近くにいたクルー達が肩を竦めながら笑う。

「一人、いるじゃあないかよ、みんな」

「何ですか？」

「ティターンスでレコアの奴を助けてくれそうな奴が」

「ああ……」

その言葉にトーレスが笑った。

「うちのアーガマにいた、コックのバイトをしていた生意気なニュータイプ……」

「アイツのメシがまた食べたい」

そのクルーの言葉に再度アーガマのブリッジで皆の笑いが起こった。

「ま……」

僚艦への通信を入れながら、ブライトは首を軽く回す。

「帰還したレコアに訊けばいいことだ」

「ですね……」

他のエウーゴの艦と通信を始めたブライトを尻目にアーガマのクルー達も仕事を再開し始める。アーガマのモビルスーツデッキへ出撃していった機体達が帰還をし始めたようだ。

「マウアー……」

マウアーのガブスレイに牽引されながら、ジェリドはコクピット内で自嘲げに呟く。

「結局、最期までカミーユの奴には勝てなかったよ……」

「そう……」

「……」

黙っているジェリド達のガブスレイの横をギャプランの編隊が追
い越していく。

「命があれば次があるわ」

ジェリドを慰めるマウアーの声は優しい。

「フフツ……」

唇を歪ませるジェリドのその両目から涙が流れる。

「今のあなたの姿は見ないであげるわ、ジェリド」

「すまないな……」

「存分に涙を……」

マウアーの声が耳へ触れるのを心地よく感じながらも、ジェリドは
コクピット内で嗚咽し続けた。

帰投する両軍のモビルスーツ達の間を縫うように、エウーゴの高級
使節を乗せた艦隊がティターンズのグリプスⅡへ入港した。

「アムロ」

「何だい？ ララア？」

アムロは自分の前に存在を感じている女性に声をかける。

「戦争は終わった？」

その女性の言葉にアムロ・レイは黙って首を振る。

「シヤアに終わらせる気がない」

「馬鹿な人達」

鈴の音と共にララアと呼ばれた女性が笑う。

「シヤアを止めてくれないか？ ララア？」

「無理よ」

「何故？」

「あの人には私が見えない」

「俺にも今の君が見えていない」

女性が再び笑う。鈴が唱和するように鳴り響く。

「あなた達のせいじゃないわ……」

鈴の音色と共にアムロの前から何者かが立ち去る音が流れる。

「ごめんよ、ララア……」

そう言いながら、アムロは静かに目を閉じた。

第39話 未来を見る騎士と過去を見る兵士

「連邦側が解放する捕虜はこれで全て」

「そうだな……」

ネオ・ジオンの軽巡洋艦「ムサカ」のハンガーデッキでユウ達の身元を引き取りにきたサマナとネオ・ジオンの士官が書類に目を落とし、たまたま話を続ける。

「ユウ・カジマ中佐たちは？」

「あそこにいるよ」

ネオ・ジオンの士官は無重力状態のハンガーデッキに備えつけられている身体の固定用マグネットへから身を離して、デッキの上部へ張り出ているブロックを指差す。

「あそこのモニターから私達を見ているかもしれないな」

「呑気なものだ……」

サマナは軽く愚痴めいた口調でそう言いながら、連邦側の宇宙艦「ストウラート」から運ばれてくる貨物に目を移す。

「彼らは形式上はまだこちらの捕虜だ」

その女性士官はそう言いながら、皮肉めいた笑みをサマナへ向ける。

「我々を手伝う義務はない」

「忙しいのにな」

「知り合いならば、後で文句でも言ってやるといい」

「そうしましょうかね……」

不満げにそう呟きながらサマナは、物資搬入の手続きのために担当者元へ宙を泳いで行った。

「よくあったな、このジュース」

ユウがムラサメ・ニュータイプドリンクを飲みながら、傍らで椅子に座りながら大判の本を読んでいるニムバスへ語りかける。

「鹵獲した物資に入っていたらしいんだが」

本から目を離さずにニムバスがユウへ答える。

「最近よく飲んでいたんだよ、俺は」

「よく飲めるな、ユウ……」

「嫌いか？ このジューズ？」

「味の調整が無いバリウムの方が旨いとすら感じるな、私は」

「損をしているよ、お前は……」

「損で結構だ」

にべもなく言うニムバスへ肩を竦めながら、ユウはハンガーデッキへと目を移す。

「ブループラウスも返してくれるのか？」

ユウはハンガーで忙しそうに働いているサマナ達を眺めながらニムバスへそう語りかける。モニタールームの四方を囲む壁に備えつけられたモニターがハンガー内の映像をガラス張りの窓のように映し出す。

「持っけていても仕方がないとハマーンが言っていたよ」

ニムバスは集中して本を読んでいたせいか、少し疲れたような声でユウへそう答える。

「マリオン・システムはな……」

「うん？」

ニムバスはユウへ話しかけながら読んでいた本を畳む。少し伸びびをしてから、静かに椅子から立ち上がる。

「所詮はニュータイプに成りかけている人間の補助装置に過ぎないんだ」

ニムバスが新しく使い始めたらしい、外見からは全く普通の脚と見分けがつかない義足でムサカのハンガーの床を軽く叩くように踏みながら話を続ける。

「どうもマリオンはパイロットがある程度のニュータイプ能力とやらに近づいてしまおうとかえって邪魔になるんだ」

「へえ……」

ユウはハンガーに立っているストウライトへ格納される予定のマ

リオン・システム搭載機「ブループライウス」の姿を眺めながらニムバスへ返事を返した。

「強力なニュータイプだと、その機能を発揮しない……?」

「何回かマリオン搭載のサイコ・ウルフをハマーンが使ってくれて実証してくれたよ」

ストウラートから連結レーンを伝わってコンテナがムサカのハンガー内無重力ブロックへ流れてくる。その光景を見ながらニムバスが苦笑混じりの声でユウへそう言った。

「かとか言つて、全くニュータイプの素質が無い人間にも作動しないんだよ、ユウ」

ムサカの艦内へ連邦からの取引として譲られた物資のコンテナがハンガーへ接地する。振動が艦を伝ってユウ達が立っている辺りまで響く。

「ニュータイプ用のバイオセンサーが元のシステムらしいからな、マリオンは」

「つてえ、ことは……」

ハンバーガーを食べながら艦外部のモニターを通して自分達の母艦であるストウラートの外観を眺めていたフィリップが話に入ってくる。

「マリオン・システムはニュータイプの試験紙に出来るつて事か?」

そのフィリップの言葉にニムバスが少し驚いたような顔を見せる。

「そういう考えも出来るか……」

「個人差もあるかもしれないねえがねえ、ニムバスちゃん?」

「かもな」

フィリップの「ちゃん」付にニムバスは怒った様子は無い。ニムバスはそのままぼんやりとハンガーデッキの様子を見る。ハンガーを見た限りでは、艦同士の荷運びはまだまだ終りそうに無いように見えた。

「私は未だにマリオンを使っているよ」

「シヤアとかに並ぶ強化人間なのか?」

「不思議と私とは相性が良いらしい」

「特別な強化人間らしいからな、お前は」

「だれがそんな事を？」

「シヤアとハマーンが言っていたよ」

そのユウの言葉にニムバスは軽く笑い声を上げる。

「過大評価だよ、過大評価……」

その言葉と共に、もうすぐ三十の半ばを過ぎようとしている歳にもなろうとするニムバスはその年に似合わない無邪気そうな笑みをその顔に浮かべた。

「ところでさ……」

ハンバーガーにかぶりついたままのフィリップが、その口をもごもごさせながらニムバスへ訊ねる。

「貴族な主義、そうその貴族主義とやらは一体全体何なんだい？ ニムバスさんよ？」

フィリップがそのバーガーの残りを頬張りながら、にやにやとした笑いをニムバスへ向けた。

「そうだな……」

そう言いながらニムバスはその顔を少し上げる。どう言うべきかを考えているようだ。

「王道と騎士道を主軸にした統治方法を説く思想だよ……」

「まるで時代劇じゃねえか……」

フィリップが呆れたような顔をしながら、ユウの方へ顔を向けた。

「そう思わねえか、ユウ？」

「ジオンの騎士、だからな」

ユウもフィリップに調子を合わせるように苦笑する。その二人の笑いに対して肩を竦めてみせるニムバス。

「騎士たるものはな……」

ニムバスが片腕に抱えている本を重たそうにもう片方の手で自分の頭の辺りまで持ち上げる。

「教養も必要だ」

「本気と言えば本気なんだな」

ユウがその本の「君主機関説」という題名を読み上げながら微笑ん

だ。

「お前のその入れ込みようを見る限りは」

難解そうな題名の本をしげしげと見つめながら、少し感心したように呟くユウ。

「EXAMもマリオンも、そしてあるいはニュータイプの概念も過去の物になりつつある私にとってはな」

ニムバスがそう言いながら本を下ろす。下ろした分厚い本の表紙をニムバスは軽く手で叩いた。

「騎士ニムバスとして生きるのも悪くはないと思っている」

「ロマンチストになっちまったなあ……」

脇のコラに口を付けながら、フィリップが不思議な物を見るような目でニムバスを眺めた。

「でもな、ニムバス」

「何だ？」

「ジオンの騎士、というのはどういう意味合いで名乗り始めたんだ？」

そのユウの言葉に少し考えながら、ニムバスは口を開く。

「自分を鼓舞するためだろうな……」

「奮い立たせる為……」

ユウが呟いたその言葉にニムバスが軽く頷く。

「孤児であった私は、自分の力でモビルスーツの腕を磨いてきたからな」

「向上心の維持か……」

「何事にも、常に壁を設定していた」

「ニュータイプもそうかな？」

「まあな」

その言葉にニムバスは少し遠い目をした。

「だからここまで強くなったのかもな、お前は」

そのユウの言葉にニムバスは少し照れたような顔をした。

「だがな、ユウ」

ニムバスは真剣な顔でユウの顔をじつと見つめる。

「私はもっと上を目指したい」

「だから、ブツホなんとかと言う会社の貴族主義か？」

「騎士になる、ということを新しい目標にするならば」

パラパラとニムバスが自分の抱えている本のページをめくる。

「やはり、教養も必要なのだろうと思う」

再びニムバスは先程の言葉を繰り返した。

「今の自分に満足が出来ないか？ ニムバス？」

「私は目標を立てないといけない」

そう言って、ニムバスはユウの顔から目を離し、ハンガーデッキにちらりと目をやった。

「でない」と

「でないと、何だ？」

「何も中身が無い……」

ニムバスが少し寂しそうに笑う。

「脆弱な自我の人間だからだよ、私はね」

「へえ……」

その少し自嘲げなニムバスの言葉にユウが意外そうな顔をする。

「俺と同じか？」

「以前に私に言われた事を根に持っているな？ ユウ？」

「当たり前だ」

そのユウの言葉にニムバスではなく、フィリップの方が笑い声を上げた。ユウもつられるように笑みを顔に浮かべる。

「努力で修めた力だな、ニムバス」

「そうともさ」

悪びれる風もなく堂々とした口調でユウへ答えるニムバス。

「しかしな、ユウ」

「しかし、何だ？」

「私の場合は……」

ハンガーデッキに鎮座させられている、最後に貨物として運ばれる予定のモビルスーツ達の姿を眺めながら、ニムバスが苦笑いを浮かべながら言葉を続ける。

「生まれつきの才能と言う面もあるだろうな」

「言ってくれるねえ、騎士様……」

手に付いたハンバーガーのソースを舐めながら、フィリップが少し皮肉げに口笛を吹く。

「才能。ね……」

「ああ、そうだ」

「……」

ユウは軽く自分の頬を人差し指で掻きながら、ニムバスの顔をじつと見つめる。

「どうした、ユウ？」

怪訝そうにユウの顔を見やるニムバス。

「今後、お前と会う機会はあるだろうか？」

「戦場以外でか？」

「ああ」

その言葉の真意を確かめるようにユウの顔の額の辺りを実として見つめるニムバス。

「ないだろうな」

「言い切ったな、ニムバス」

「だから」

ユウはニムバスのその声に少し力が入ったように感じた。

「聞きたい事があつたら、今の内に私に聞いておけ、ユウ・カジマ」

「そうか……」

そのニムバスの言葉にユウは気になっていたことを訊ねようと、思い切つてその口を開く。

「俺と同じ孤児院の出身だつてな？ ニムバス？」

そのユウの言葉にニムバスは表情を変えない。フィリップも無言のまま二人を眺める。しばしの間、沈黙の間がモニタールームに訪れた。

「知っていたか」

「アルフから聞いたよ」

「クルストの孤児院の事は？」

「それもアルフから聞いた」

「そうか……」

そう呟いたきりニムバスはしばらくの間無言でいる。ニムバスの目はモニタールームに飾られた地球の風景画に注がれている。

「まあ、私達ラプラスタイプと言えども、完全な超人とまでは言い切れないからな」

「ん？」

「だから、自分で出来る事をやるしか……」

「ちよつと待て、ニムバス」

ユウが慌ててニムバスの言葉を遮る。

「ラプラスタイプ？」

そのユウの言葉にニムバスは怪訝そうな顔をした。

「アルフから聞いただろうか？」

「何の事だ、それは？」

ユウのその返事にニムバスの眉が軽くしかめられる。

「モルモット・プロジェクトの事は？」

「初耳だよ」

ユウの声が心なしか不安そうな調子を帯びる。

「そんな名前のプロジェクトは」

「アルフめ……」

ニムバスが腕を組んで、唸るような声を上げた。そのニムバスの様子を見て、ユウはある程度の事の察しがついた。

「アルフが俺達に話して無いことがあるのだな？」

「そのようだな……」

その言葉を吐き捨てるように言った後、苦々しげな口調でニムバスは話を続ける。

「特にユウ、お前の事はな……」

そのニムバスの言葉にユウの片方の眉が軽く上げられる。

「俺がそのラプラスタイプとやらと何とかプロジェクトに関係が？」

「大いにある」

強くその言葉を言い放つニムバス。

「後でアルフに聞いてみるがいい」

「ああ……」

ユウは首を傾げながらニムバスへ頷いてみせた。

「もつとも……」

ニムバスが微かにため息をつきながら、絞り出すように言葉を発する。

「アルフが全てを知っているという事は、まずないだろう」

その言葉にユウ、そしてフィリップも眉をひそめた。

「なぜそう言い切れる？」

「内容に矛盾があるからだよ」

「矛盾？」

「主にお前の事だ、ユウ」

「……」

ドウ……

ハンガーから大きな振動が響いて来た。何かトラブルがあったようだ。サマナ達が何か怒鳴りあっている声が聞こえた。

「アルフに聞いてみるよ、ニムバス」

「それが良い」

「ニムバス」

モニター室から立ち去ろうとしたニムバスをユウが呼び止める。

「何だ？ ユウ？」

「やはり、俺達は雌雄とやらを決しないとイケないか？」

ニムバスはユウ達に背を向けたまま、しばらく無言でいる。ユウが続けて何かを言おうとしたとき、ニムバスが口を開いた。

「人生のけじめだよ、一種のな」

「お前は俺が憎いか？ ニムバス？」

「憎くはない」

ニムバスはユウへ振り向かない。

「信頼をしている」

「……」

ユウはニムバスの言葉を耳へ入れながら、その背中に隠れて見えな
いニムバスの表情を読み取ろうとするように彼の背へ視線を注ぎ続

ける。

「アムロ・レイとクワトロ……」

ハンガーデッキでモビルスーツの運搬が始まったようだ。振動がモニター室まで伝わる。

「もとい、シャア・アズナブルとの関係くらいにはな、お前を信じている」

どこか自分を納得させるように発せられたニムバスのその言葉にユウは軽いため息をつく。

「俺は出来れば、お前とは戦う事を避けたい」

「何故？」

素っ気なくニムバスはそう返事を返した。

「戦う理由など……」

「アムロ・レイもシャアに対してそう言うだろうな」

ニムバスが軽く肩を竦める。

「だが、それはな……」

「……」

「勝った側の人間が持つ理屈と気持ちなんだよ、ユウ」

「執念や憎しみとかではない感情の次元か……」

ユウはニムバスの後頭部がその自分の言葉に対して、あたかも返事をするように前へかがんだように見えた。

「ケリ、そう言うのが一番しつくり来るだろう」

最後にニムバスはユウに対してそう言い放った。ニムバスはそのままユウ達を振り返らずにハンガーを見渡すモニタールームから足音高く出ていく。

「騎士様、ニムバスか……」

フィリップがガムを口へほおりこみながら、少し険しい声で呟く。

「ニムバスの旦那が騎士とやらの道を進むには……」

「俺を越えなくてはならない……」

そう言いながら、憂鬱そうな顔でいるユウへフィリップがニカッと笑った。

「大変だな、色男……」

「胃痛のタネがまた増えた……」

「ハハッ……」

ユウは無責任に笑うフィリップを恨めしそうな顔で睨み付ける。
「夢か……」

フィリップが少し羨ましそうに呟く。

「俺も早くパン屋を開きてえな……」

「みんな、夢があるんだな」

フィリップのその言葉を耳へ流し入れながら、ユウはフィリップに聴こえないような小声でひそかに呟く。

「俺には過去も未来も……」

ユウの視線が漆黒の宇宙へ注がれる。

「そう、夢も持っていない……」

ユウのその呻きにも似た呟きは、捕虜交換の手続きが終了したとスピーカーから響いてきた巡洋艦ムサカノ士官の声でかき消された。

第40話 ラプラスタイプ

「クルスト・ズム・ダイクン」

アルフがクルスト・モーゼス博士の本名を言うかたわらで、テレビからエウーゴとティターンスの停戦に関する特番ニュースが流れてくる。

「ジオン・ズム・ダイクンの兄だ」

「偉い人だったんだねえ……」

フィリップがぼんやりとニュースを見ながら、菓子をつまんでいる。

「表舞台には出たがらない人だったのですかね……?」

サマナがそう言いながら、首を捻る。

「ガチガチの技術者だったからな、クルスト博士は」

そのサマナの言葉に対してアルフはニヤリと笑った。

「俺と同じだ」

「弟のジオン・ズム・ダイクンのサポート役ってわけか」

ユウが最近巷で局地的なブームになっている「ムラサメ・ニューターイブドリンク」を飲みながら、その事に関する感想を口にする。

「弟、ダイクンの思想、それに対するフィジカル面でのサポート役だったようだな」

アルフは時計に目をやりながら、少し自分の腹の辺りを押さえるような仕草をした。

「先に夕食を食べてから話さないか?」

「話が気になる」

「メシを食いながら話しても?」

「かまわないよ……」

苦笑混じりにそう言ったユウの言葉に頷いて、アルフはストウラートの厨房へ通信をかける。

「さて、と……」

夕飯の注文を終えたアルフがテレビの有識者による討論のやかましさに眉をひそめる。

「うるさいな、テレビ……」

「早く話を続けろ、アルフ」

少し苛立ったようなユウの声に肩を竦めながら、アルフは一つ咳払いをする。

「ちよつと前に俺はヤボ用で地球へ降りていたんだが」

「俺達がネオ・ジオンの捕虜になっていた最中だねえ？」

その少し嫌味のようなフィリップの言葉にアルフは少しバツの悪そうな顔をした。

「外せない用事でね……」

「気にするな、アルフ」

わずかに申し訳なさそうな顔をしたアルフへユウがそう言いながら笑いかける。

「気が向いてクルスト博士、そしてEXAMのデータベースやら何やらをオーガスタ研究所で漁ってみたんだ」

「何かあったか？」

ユウの言葉にアルフは無言で自分の上着のポケットへ手を突っ込む。

「残っていた」

アルフがそのポケットから相当古い、所々黄ばんでいる小さな手記らしきものを取り出した。

「クルスト博士のメモだ」

「へえ……」

サマナがポテトチップスを食べながら、しげしげとそのメモ帳を眺める。

「サマナ、少しくれないか？」

そのポテトチップスを物欲しそうにアルフが見つめる。

「そこまで腹が減っているんですか？」

「今日は忙がしくてな」

再び自分の腹の辺りに手をやるアルフ。

「朝から何も食っていない」

それを聞いたサマナはポテトチップスをその袋ごとアルフへ渡す。

「すまん、サマナ」

「あのな、アルフ……」

「分かっているよ、ユウ」

アルフが乱暴に何枚かのチップスを口へ放り込みながら、メモをペラペラとめくってみせる。

「断片的ながら、モルモット・プロジェクトの事が記録されていたよ」

「そいつだ、アルフさんよ」

フィリップが真剣な面持ちでアルフを見やる。ユウとサマナも少し顔に緊張の色を見せた。

「話してくれ」

強い口調で話を促すユウへアルフはすぐには答えない、無言でいる。

「モルモット・プロジェクト、そしてラプラスタイプのことをな」

無言のアルフをあえて無視してユウは話を続ける。しばらくアルフは黙っていたが、一つ顔を頷かせた後にその口を開く。

「せっかく、一年戦争時の旧モルモット隊のメンバーがそろっていることだしな」

(ん?)

ユウはそのアルフの言葉の中で「旧モルモット隊」という部分の所に妙な力が入っていたような気がした。

「どうした、ユウ?」

「いや、何でもない」

そう言いながら、ユウは菓子を口にほおりこむ。

「続けてくれ、アルフ」

「ダイクンとクルストはジオンの独立運動のかたわらで、ある孤児院の形式上の責任者でもあったらしいんだが……」

アルフが話をしている最中にフィリップが立ち上がり、冷凍庫へ手を伸ばす。

「話を聞けよ、フィリップ……」

「せっかくだ」

話の腰を折るフィリップに呆れたような声を出すのを尻目に、その

ファイリップは冷凍庫から食べ物を取り出す。

「晩飯を取りながら話そうじゃねえか？」

「あー……」

ムシャムシャとチップスを食べているアルフがユウ達を見渡しながらから軽く声を上げた。

「すまない、アルフ」

「話を続けるぞ……」

一口コップの水を飲んでから、アルフが再び話を再開する。

「その孤児院にミュータントがいたんだよ」

「化け物ね……」

ファイリップが取り出した大きな冷凍ピザをレンジに入れながそう
呟く。

「ちよつと、ファイリップさん……」

サマナがちらりとユウに視線を向けながら、咎めるような声をファイ
リップにかけた。

「そうだった……」

ファイリップはピザを温めながら、ユウへ軽く頭を下げる。

「お前もクルスト博士の孤児院にいたらしいんだったな……」

「大丈夫だよ、ファイリップ」

ユウの苦笑いのような笑顔に対して、ファイリップがバツの悪そうな
表情を浮かべた。

「クルストからその事を聞いたダイクンは彼らをラプラスタイプ、と
名付けた」

「ラプラスタイプ……」

ユウはあたかも自分の脳裏に刻みつけるかのように、何度かそのラ
プラスタイプという単語を口の中で反芻をするように呟いた。

「最初のラプラスタイプはあのニムバスだった」

「あの騎士様か……」

ファイリップが温まったピザをレンジから取り出しながらそう口ご
もる。

「あいつはいわゆるニュータイプの能力とやらは無かったが」

「ニュータイプ殲滅用OSであるEXAM搭載機に乗れたからな……」

ユウの言葉に対して頷きながら、アルフがメモの1ページを開いてユウ達へ見せた。

「人間の限界を超えた、驚異的な外部からの刺激に対する耐性能力」

テーブルへ置かれたメモのその開かれたページをアルフは指でなぞる。

「それがファースト・ラプラスであるニムバスの特徴だ」

「スーパーマンか」

「内臓や代謝面、そのスーパーマンなんだろうな」

湯気を立てているピザを眺めながら呟いたフィリップへ、アルフが自分の身体の心臓を指差したり皮膚を引っ張ったりしながらそう答えた。

「幼いとき、ニムバスは誤って致死量の毒物を飲んでしまった事があつたらしい」

ユウ達は黙ってアルフの言葉を聞いている。一際大きな音声がテレビから流れた。そのニュースでは今後のエウーゴの方針の予測について著名な有識者が得意気に語っていた。

「だが、ニムバスは数日入院しただけで快方へ向かった」

ニュースを無視してアルフが淡々とした口調でユウ達へ説明を続ける。

「普通の人間ならばどうなってた？」

「半身不随ですめば良い方だ」

そのアルフの言葉に、ユウ達はため息とも感嘆とも取れない声をそれぞれの口から漏らす。

「タフすぎてそんはないな……」

サマナのこぼした呟きにユウ達が肩を竦めながら同意をする。

「EXAMに対する適応能力や強化人間処置につきものの副作用の克服も、その生まれつきの能力に依るところが大きいかもしれんな」

「なるほどね……」

ユウが呻くように呟きながら、飲んでいたドリンクを飲み干す。も

う片方の手で二本目のニュータイプドリンクに手を伸ばす。

「ハマッているのか？ そのジューズ？」

「クセになる味だ」

「あのムラサメ研が作った奴だぞ……？」

渋い顔をするアルフへユウはニヤリと笑う。

「次に見つかったラプラスタイプはユウだが……」

ドリンクを旨そうに飲んでいるユウへアルフが視線を向ける。

「その話しは最後にしよう」

「何でだよ……？」

先程からピザを眺めて続けているフィリップが不満げな声を上げる。

「先にこっちの話をした方が収まりが良い」

そう言いながら、アルフがピザへ目を向ける。

「食べないのか？」

「お前さんのメシが来てからにする」

「冷めるぞ？」

「冷めたピザも旨いもんだ」

「変な奴だな……」

そのフィリップに唇の端を持ち上げるような笑みを浮かべながら、アルフはモルモット・プロジェクトの話へ戻る。

「ユウの次、三番目のラプラスタイプの名前は記録されていない」

「博士が書いていない？」

「と、言うよりもな、サマナ……」

首を傾げながら、アルフが自分の顎の辺りを軽く指でこすった。

「そのラプラスタイプの名前だけがメモからすっぽり抜けている」

「へえ……」

そう言いながら、ユウはクルストのメモへ目を向ける。クルスト博士独自の暗号も含まれているのだろう、メモには一目見ただけでは判別出来ない文字を使っている箇所もある。

「そいつの名前の部分のページが破られているみたいだな、アルフ」
「文の前後の繋がりが不自然だろう？」

「電子のデータの方も？」

そう訊ねるユウへアルフが軽く頷いた。

「何者かが名前から経歴まで、相当に改ざんをしてくれた形跡があるよ」

「ハッキングかい……」

フィリップの呟きにアルフは再び頷いてみせる。

「解っていることは」

テレビのニュースでは一見難解そうに見えるが、あまり実の無さそうな討論をやっている。サマナが気を利かせてテレビのポリウムを下げた。

「頭脳面での超人であった事だ」

視線でサマナへ礼を言いながら、アルフはメモのページをめくる。

「3、4歳の頃に、好んで難解な聖書等の神学に関する本を好んで読んでいたらしいからな」

「天才児か……」

「洞察力や直感力も優れていた」

そう言って、アルフがニヤリと笑った。

「今風で言うと、いわゆるニュータイプの勘と言う奴だ」

「ふうん……」

ユウは何か頭にひっかかる物を感じながらも、アルフへ話を促そうとする。

「その他には何かないか？」

「主だった情報は無い、な……」

アルフがそのラプラスタイプの事が書いてあるらしいメモの文字の最後の部分まで指を走らせてから小さく呟いた。

「今、どこで何をしているかとかは？」

「さつき、俺は言っただろうに？」

「そうだったな……」

「記録が何者かに消された」と

個室のドアのベルが鳴った。

「食事よ」

通信士であるミーリが小さいワゴンを押しながら部屋へ入ってくる。彼女がアルフの食事を作る手伝いをしていたようだ。

「夕飯がパンか……」

「悪い？ アルフさん？」

「全然」

アルフは惣菜パンとともにテーブルへ並べられるスープなどを見ながら首を振る。

「多いな……」

「ユウ隊長達の分もあるから」

「気が利くな？」

「隊長たちはこういう事にルーズだからね」

「適当に食っている事が多いから……」

そのユウのぼやきに微かに笑うミーリ。彼女はアルフの方へ心持ちに多めや食事を置いたあと、ユウ達の前へ食事のトレイを置きはじめる。

「すみません、気を使わせて」

サマナが律儀にミーリへ頭を下げた。

「食べてないんでしよう？」

「戦争が終わったというのに、テイターズは全然時間に余裕を持たせてくれない……」

サマナが疲れたような顔をミーリへ見せる。

「うちの食べ物久しぶりでしよう？ サマナさん？」

「よく味わっていただきますよ、ミーリ通信士」

目の前に置かれたパンにサマナが嬉しそうな表情を見せる。

「俺の作るパンよりも旨いからな、ミーリちゃんの作る奴は」

「この年でちゃん付けはないでしようにね……」

「何歳だっけな？ ミーリちゃんの歳は？」

「うるさい、バカ」

ミーリはむっとした顔をフィリップへ見せながらも、丁寧に食事を並べ終えた。

「物足りなくなっても、食堂が空いているのはあと一時間位よ」

「時間に厳しくなったな？ ストウラートは？」

「今は連邦のどこの部隊もティターンズと一緒にピリピリしている時だから」

「ネオ・ジオンの小惑星アクシズが変な動きを見せているからな」

「そういうこと」

ユウへ微笑みながら、ミーリは空のワゴンを押して部屋から出ていこうとする。

「ああ、それと……」

閉まるドアを軽く手で押さえて、ミーリはドアから顔を覗かせる。

「明日の早朝に艦長達と会議があるわ」

「大丈夫、わかっているよ」

「夜更かししないように」

軽くウイंकをしてから、ミーリはドアから顔を引いた。

「良い子だな」

「30過ぎの女で良い子はないだろうに……」

フィリップがパンへ手を伸ばしながら、アルフに顔をしかめてみせる。

「嫁さんにどうだ？ フィリップ？」

「顔が好みのタイプではないんだよ……」

「モーリンの方が良かったか？」

「いつの頃の話だよ、アルフ」

そう言いながらパンの味を噛み締めているフィリップ。パンの歯ごたえや焼き上がり具合を確かめているようだ。食べながらトレイの上の残りのパンへじつと観察するように眺めている。

「パンの技を盗もうとしているのですか？」

「こういう時くらいしか、パンの腕を上げる機会がない」

「食べただけで上げるもんじゃないでしょうに……」

からかうようなサマナの言葉に笑っているのだから怒っているのだからわからない顔をフィリップは向ける。

「戦争には飽きたな……」

「もうすぐ本当に終わるさ、フィリップ」

「ああ……」

「ミリーを嫁さんにもらって、パン屋を開いたら俺に割り引きをしてくれよ」

「だから、彼女は顔がまずいって……」

ユウ達は話を中断して、軽い夕食を取り始めた。

「いよいよ、ユウの事だ」

食べ納めに冷えたピザを口へ運びながら、アルフは顔を引き締めながら言う。

「これまた、記録がほとんど残っていない」

「ここまでもったいつけて、それはないだろう……」

その言葉を聞いたユウはムラサメドリンクを飲みながら不愉快げに眉をひそめる。そのユウへ対して口を拭いながら真剣な視線を向けるアルフ。

「俺の見た限りな……」

片手に缶コーヒーをもてあそびながら、アルフが冷静な口調で話す。

「最初からクルスト博士が詳しく書いていない可能性が高いように見えた」

「何でそうと言える？」

「書くのが畏れ多いと思ったからかもしれん」

「……」

その言葉にユウ達は無言でいる。フィリップが唾を飲み込む音が聞こえた。

「解っていることは」

アルフの眼鏡が鋭く光る。

「肉体的、頭腦的、そして精神的にも」

テレビの番組はニュースからアニメへと変わったようだ。陽気なテーマソングが聴こえてくる。

「ニムバスや二番目に言った名称不明なラプラスタイプをはるかに超えた、まさしく人知を超えた人間、存在であったということだ」

「神……？」

サマナがうめくように呟く。

「地球を守る正義のニュータイプヒーロー!! 彼こそが……」

音量を下げたテレビからアニメ「ガンダム・ヒーローズ」の再放送が流れている。

「彼を見て、ジオン・ズム・ダイクンはニュータイプの存在を確信したらしいな」

「ニュータイプ?」

ユウがアルフの言葉に口を挟む。

「ラプラスではなくニュー?」

「ある時、弟のダイクン、ジオン・ズム・ダイクンがクルスト博士に言ったららしいんだ」

缶コーヒーの蓋をあげながら、アルフがクルストのメモをめくる。

「改名した方が良さだろうと」

「何故?」

「ラプラスだと、連邦の奴らの注目を集め過ぎるとか何とか……」

「ふむ……」

今一つよく解らない理由にユウはムラサメドリンクを飲む手を止めて、ため息のような声を出した。

「まあ、言いにくい名前なのは確かだがねえ……」

フィリップがそうぼんやりとした口調で呟く。

「その特殊な能力を持った子供達の観察、それがクルスト博士のモルモット・プロジェクトだよ」

締めくくるような感じの声でアルフはそう静かに言い放った。

「子供をモルモットにか……」

フィリップが最後に残っているピザの切れ端を指でつつきながら言う。微かにその顔に不快感が表れている。

「博士の孤児院経営が慈善の心からではないのは確かだろうな」

「クルストさんは科学バカの面があったみてえだからねえ……」

「子供達に酷い扱いこそしなかったものの、愛情は無かったようだ」

そのアルフの言葉にユウの脳裏にエグザム・システムを巡っていた時の戦いの記憶が浮かび上がってきた。

「だから、ニムバスはクルスト博士を殺すことが出来た？」

ユウのその言葉にアルフは意表をつかれたような顔をする。何かを納得したようにアルフは何回か強く頷く。

「あいつは博士を嫌っていたのかもしれない」

アルフも当時の事を思い出しているようだ。コーヒーをちびちびと飲みながら微かに遠い目をしている。

「ただ」

「何だ？ アルフ？」

「ユウだけは可愛かったようだな」

複雑な表情をしながらも、ユウは視線で話の続きを促そうとアルフを見つめた。

「その超人っぷりを愛したのかもな」

「そのスーパーマン・ユウの弟へは？」

「どうもな……」

「冷たかったか？」

「そいつには性格に難があつたらしい」

アルフがメモをパラパラとめくり戻しながら、あるページをユウ達の前へ置く。

「幼い頃から、他人を見下す癖か……」

クルスト博士のぼやきともとれる一文がそのページには書きなぐられていた。

「当てはまるんだよなあ……」

ユウがある男の顔を思い浮かべながら、誰にも聞こえないように口の中で小さく呟く。

「誰かさんみたいですね、ユウ」

「うあう!？」

突然話しかけてきたサマナへユウがうわずった声を出した。

「そ、そうだな、サマナ」

「はあ?」

サマナがユウのその変な反応に怪訝そうな声を出す。

「僕は誰だとは言ってませんよ?」

「あ、ああ、すまない」

自分を落ち着かせるようにユウはムラサメドリンクを口にする。

「考え事をしていたんだよ、サマナ」

「アルフさんが真面目な話をしているんですよ？ ユウさん？」

「わかってる、わかってるよ……」

慌てた素振りを見せるユウへサマナとアルフが少し冷たい目を向ける。フィリップだけはユウの方へ目を向けない。何か考え事をしているようだ。

「あのよ、アルフ……」

ユウの顔へちらりと目をやってからおずおずとフィリップが口を開く。

「そのラプラスのユウ、そして今俺達の目の前にいるユウ、その事についてなんだがね……」

頬杖をついたまま、ユウの顔へ視線を向け続けるフィリップ。

「……」

落ち着きを取り戻したユウは黙ってフィリップへ頷いてみせた。何を言おうとしているか、大体の察しがついたからだ。

「確かにユウはエース、そして今ではベテランの歴戦のパイロットだ」

そのフィリップの言葉にアルフは無言でいる。

「そして、隊長としての責務もよく果たしている」

そこでフィリップは一旦、息をつく。

「ただ……」

「分かっているさ」

アルフはフィリップに対して、手を突きだしてその話を制する。

「この話だと、このユウ・カジマはあのアムロ・レイやシャア・アズナブルなんか目じゃないニュータイプって事になってしまう」

「そうですね」

サマナがアルフの言葉に深く頷く。ユウは黙ってフィリップ達の話の話を聞いている。

「ニムバスも言っていたよ」

しばしの無言の時ののち、ユウが口を開く。

「矛盾があると」

その言葉にフィリップ達は何も答えない。テレビのアニメから流れてくる陽気な音楽だけがその部屋に響いていた。

「一応、最後に聞きたい事もあるな」

別のアニメに番組が変わったテレビを眺めながら、ユウがアルフへ顔を向ける。

「だいたい分かるよ」

アルフが眼鏡を手をかけながら、ユウに対して軽く笑った。

「マリオン・ウエルチだな？」

「彼女にも何か特殊な能力が？」

「いや……」

アルフが頭を振った。

「一般的なニュータイプだったと思う」

「変に矛盾のある言い方だな、おい……？」

そのアルフの言葉に食堂へ食べ物片付けに行っていたフィリップが、椅子へ腰を下ろしながら笑う。

「ノーマルなニュータイプだって意味だ、フィリップ」

フィリップのそのニヤけながらの言葉にアルフが顔をしかめながら苦笑をする。ユウから分けてもらったムラサメドリンクの蓋を開けながらアルフが口を開く。

「実の所、彼女にあまりラプラスタイプは関係がないと思うな……」

アルフが缶のドリンクを飲みながらポツリと呟くようにそう言い放った。

「普通の味だな、このジュースは」

「珍しい感想だ」

アルフが持っているドリンクを見つめながらユウがニヤリと笑った。

「今まで旨いか不味いかのどちらかの感想しか聞かないからな」

「旨いとは言っていないぞ……」

そう言いながらアルフはその缶ジュースを一気に飲み干した。

「んで、マリオンちゃんは？」

少し苛立ったようにフィリップがテーブルを指で叩きながら二人を軽く睨む。

「言った通りだよ」

空の缶をテーブルへ置きながらアルフが気のないような口調で言う。

「多分、関係はない」

「そうかな？」

ユウの言葉にアルフは黙ってタバコをポケットから取り出しながら答える。

「ユウ達とは10年近いタイムラグがあるからな」

「ではあるがね……」

そのアルフの言葉に、ユウの脳裏に死んだクルスト博士の顔が浮かんだ。

（はたして、クルスト博士はという目でマリオンを見ていたんだろうな？）

以前にアルフから聞いたことがある、クルスト博士がマリオンを大事に思っていたという話を思い出しながら、生きていれば20歳は越えていると思わしき少女、いや女性の事にユウは思いを巡らせる。

「弟のダイクンも亡くなったし、それに……」

思索にふけるユウに気づかず、アルフはその白髪が混じり始めたボサボサの頭髮へ手を差し込みながら話を続けた。

「クルスト博士のニュータイプへの考え方も変化した」

「EXAMだな？」

そのフィリップの言葉にアルフがタバコへ火を付けながら頷く。

「クルスト博士にとっては、ラプラスタイプやニュータイプが人類の進化ではなく、人類を滅ぼすペイルライダーとしての認識になったの
だろうな」

「ペイルライダー？」

マリオンについて考えるのをやめ、再びアルフの言葉に耳を傾け始めたユウはその聞きなれない言葉に微かに首を傾げた。

「昔の宗教に伝わる破滅の使者ですよ」

新放送のアニメを見ていたサマナがユウへこそつと耳打つように言う。

「博識だねえ、サマナちゃん？」

「歳を取った男にちゃんはないでしょうに……」

肩を竦めるサマナへフィリップがニカツと笑いかける。

「その他にはラプラスタイプはいなかったのか？」

「少なくとも、俺の知っている限りでは無い……」

口から煙を漂わせながらアルフが自分の記憶を探り出すように空いた手の指を頭へコツコツと触れさせた。

「もちろん、絶対にいないとは言いつれないがね」

「どこかにモルモット・プロジェクトとやらの資料が転がってないかねえ……」

「わからんな……」

フィリップのぼやき声にアルフが軽くため息をつく。

「その後のモルモット・プロジェクトの記録は、全てジオンのニュータイプ研究所へ行ったらしいんだよ」

「元のモーゼス孤児院とやらは…… とつ」

そう言いかけて、フィリップは以前にアルフが断片的ながらもこのユウ達の出身について語ってくれた時の事を思い出した。

「最初のコロニー落としの弾頭であるアイランド・イフィシユの中」

「オーストラリアの海の底だったな、アルフ」

こめかみの辺りを指で掻きながら、フィリップは微かに眉間にしわをよせる。

「でもな、アルフ……」

その場を取り持つような感じの声色でユウが口を開く。

「クルスト博士はなんで連邦にその三人の記録だけを持ってきたんだ？」

「それについては俺もよくはわからんが……」

あえて他人事のように「三人」と強調したユウのその言葉にアルフは触れない。さりげなくユウへ無言の優しさを見せるアルフは二本目のタバコに火を付け始めた。

「ただ、その三人がラプラスタイプの中でずば抜けていたのは確かだと思う」

「ずば抜けたニュータイプね……」

サマナがぼんやりとアニメを眺めながら答える。

「生きていたか!! ギレン・ザビ!!」

「この私の新組織、暗黒ディザスターエウーゴはジオン帝国の何百倍もの強さなのだ!! アムロ・レイ!!」

アニメにテイターンズカラーの主人公の新型ガンダムが登場する。

「いつアムロ・レイがテイターンズに入ったんだよ……」

額からMの形をした謎の怪光線を放つギレン・ザビを見ながらユウが苦笑をする。

「一年戦争の英雄が敵になったらマズイでしょ……」

ユウへ笑いながら、サマナは結構に真剣な目で新アニメを見ている。

「モビルスーツ考察は意外とよく出来ているな……」

乙ガンダムがモチーフと思われる、全身漆黒の塗装をしていて鬼のような顔をした敵の幹部をアムロ・レイが改心の説得をしているシーンがテレビから流される。

「それにしても……」

横目でテレビを見ながら、ユウがぼそりと呟いた。

「ザビ家はクルスト博士をよく使ったな……」

「側近のデギン・ゾド・ザビがダイクンを暗殺したって噂もあったくらいだけだなあ」

ユウの呟いた言葉にフィリップも同意をする。

「ザビ家によるダイクン派の弾圧があったのは有名ですよね……」

サマナもアニメを見ながらその二人の言葉に頷いてみせる。

「利用価値があったんだろうな、ニュータイプ兵士を作り上げる研究者としての」

疑問に思っている旧モルモット隊の三人へ、アルフはタバコを灰皿へ叩きながらそう答えた。

「元々、ダイクンとは違ってニュータイプの実在意義うんぬんよりも、その特性のみに興味があった研究者だ」

「技術者気質だったってえのは、はた目から見ても分かる人だったからねえ……」

フィリップがクルスト博士の印象を思い出そうと頭を傾げながらそう呟く。

「結局、クルスト博士の作った」

再びタバコがアルフの唇へ吸い付いた。

「オールドタイプが装着するように設計された対ニュータイプ用強化外骨格であるEXAM機能付きモビルスーツはな」

冗談のつもりか、珍妙な言い方をしたアルフにユウ達が苦笑いをする。

「連邦やティターンズの強化人間の雛形になっちゃったからな、全く……」

「クルスト博士の意思は地球の人間に引き継がれたとね……」

ため息混じりに呟いたアルフにフィリップが皮肉げに口の端を歪めながらそう言った。

「ユウ!!」

突然サマナが大声を出した。

「何だ!?!」

「ユウとブループラウスがこのアニメに出てますよ!!」

「何だと!?!」

急いでユウがテレビへ顔を向けた。

「俺がハンサムに描かれているな!! 何という事だ!!」

「どこでどうモルモット隊の事が伝わったんでしょね……!!」

テレビへ釘付けになった良い大人の男二人をフィリップ達が呆れたように見やる。

「なあ、アルフ」

「言うなよ、フィリップ」

指にタバコを挟みながらアルフが軽く首を振った。

「これのどこが神のようなニュータイプなんだ？ だろ？」

「普通の大人以下、だぞ？」

「フフ……」

そう言いながらも、アルフとフィリップはお互いの顔を見合せてどこか安心したような笑みを浮かべた。

「ああ、最後に」

「何だ？ アルフ？」

「一つ思い出した」

ストウラートの通路を歩きながら、アルフが隣のユウへ語りかけた。

「マリオン・ウエルチだかな……」

「何か思い出したか？」

「クルスト博士が言っていたことがあった」

艦内の消灯時間を気にしながら、アルフが少し早口にユウへ喋る。

「マリオンがね」

「ん……」

「自分の消えた娘に似ていたと」

「だから、マリオンを可愛がった？」

「かもな……」

その言葉にユウは微かに眉間にしわを寄せる。

「消えたって事はなんだ？」

「博士が確かにそういう言い方をしたんだ」

「家出とか行方不明とか……」

「知らん」

艦内の灯りが消え始める。消灯時間のようだ。

「博士がポツリと言った事を思い出しただけだよ」

「かえって余計に話が複雑になっただけだな……」

「悪いな、ユウ」

その言葉に静かに首を振るユウ。通路の分かれ道に差し掛かった。

「おやすみ、アルフ……」

「俺にはもう一仕事が残っているんだがね……」

「気の毒に」

「給料は良いんだが……」

ブツブツ言いながら去っていくアルフを見送りながら、ユウは常夜灯に切り替わった通路を早足で歩く。静かな音が艦内に響いた。

第41話 新たな蒼を受け継ぐ者

「ブループライウスは大丈夫そうだな」

「本当に？」

アルフがブループライウスのあちこちからコードが接続されているコンピュータから目を離してユウへ顔を向ける。

「保証できるよ」

そう言いながら、アルフは首をグルリと回して超大型輸送艦「ジュピトリス」の広大な艦内工房を見渡した。

「システムにウイルスもバックドアも特に無い」

「信じてみるか」

「もつとも……」

アルフはコンピュータのモニターをちらりと見やりながら皮肉げな口調をして言い放つ。

「どちらにしろ、もう乗らないと決まったからには絶対に実害が発生しない」

「だよな」

力強く断言するアルフにユウがそう答えた。ブループライウスの隣に置かれているティターンズカラーに塗られたアナハイム製の最新鋭ジム・タイプモビルスーツ「ジェダ」の姿を見つめながらユウが軽く顎を浮かせる。

「新型のマリオン搭載機だな」

「そう、対ファンネル用兵器マリオン……」

そう言いながら、少し哀しげな自嘲の笑みを浮かべるアルフ。

「天下のアナハイム社もティターンズに下ったか？」

「二股作戦だろうな」

再びモニターへ目を向け、ジェダの新型マリオン・システムの動作チェックを行いながらアルフがユウにそう答えた。

「アナハイムはネオ・ジオンへも顔を売っているさ」

「エウーゴとティターンズの抗争初期のようにか」

「月のグラナダ方面から、ネオ・ジオンの艦が出航していったという

目撃情報もある」

「アナハイムは商売熱心だな……」

苦笑しながらユウはジュピトリスの超巨大モビルスーツ工房を眺めまわす。近くにはジェリド達の姿が、少し遠くにはシロツコと彼が作り上げたモビルスーツの姿が、そして顔が見えない位の距離にサマナと搬入された複数のジエダの姿が見受けられる。

「別にウィルス等の細かいチェックをする必要は無かったんだがね」

コンピュータからアルフは少し顔を離して、ブループラウスの頭部を見上げた。ブループラウスの頭部はジュピトリスの天井へ届かない。この空間の天井はゆうにモビルスーツの2機から3機分の高さがある。ユウ達が見上げれば、大プロジェクターが設置されているその天井が霞んで見えるほどだ。

「廃棄すれば、そういう心配は全く必要ないからな」

そう言いながら、ユウとアルフは共に名残り惜しげな顔をしながらブループラウスの姿を見続けている。

「上の命令だったんだ」

乱暴に包装紙をちぎって、中身の菓子パンに噛みつきながらアルフはキーボードに手を這わせた。

「ネオ・ジオン側の戦術担当者の心理分析の為にね」

「やり口で心理が解るか」

「そういう事だ」

シャアやハマーンの顔を思い出しながら、ユウが再びブループラウスに淋しげな視線を向ける。

「全部廃棄するのか？」

「一度、敵の手に渡っちまったからなあ……」

器用にパンを飲み下しながらコンピュータを動かし続けるアルフ。ユウがそのアルフの姿を眺めながら自分の上着のポケットから紙パックのコーヒーを取り出す。

「再利用出来る目処がいたら知らせるさ」

「頼む、アルフ」

マリオン・システムが納められているブループラウスの頭部、ジム

タイプの特徴であるバイザー型の無表情なその顔を見つめながらユウがアルフへ取り出したパックのコーヒーを渡してやる。

「俺の作った中でも、傑作のモバイルスーツだったからな」

「俺もなんだかんだ言ってる気に入ってたさ、アルフ」

よほど忙しいのだろう、礼も言わずにアルフはコーヒーを受け取りストローをパックに手荒に差し込む。ユウはアルフの仕事の邪魔をしないようにその場を静かに離れる。ジュピトリスの工房のあちこちから騒音や怒鳴り声その広い空間へこだまをしながらユウの耳へ届いた。

「くれないか？ そのジャンパー？」

「嫌だよ……」

「君と俺との仲じゃないか？ ジェリド君？」

「やめろ!! 気味が悪い……!!」

量産型ガブスレイのパーツを流用しながら修理を行っている、ジェリドの乗機であるガブスレイの近くでユウがジェリドのジャンパーを引っ張っている。

「俺は何回も応募したんだよ？ ジェリド……」

「しらねえよ、そんなの……」

ジェリドは懸賞で当たったらしい「ろくでもないムラサメに」というロゴが入ったジャンパーをユウの手から引き離すように身動きする。

「同じムラサメドリンクの愛好家だろ？」

「だからなおさらやらねえんだよ、ユウさんよ……」

そう言いながらジェリドはムラサメドリンクの蓋を開ける。気持ちの良い音が缶から鳴る。

「俺がそのジャンパーを手に入れる為に何個シールを集めたか……!!」

「だから知らねえって言ってんだろ!! 離せ!! オッサン!!」

貴重な休憩時間中にユウに泣きつかれ続けられていたジェリドがついに切れた。

「上官筋にオッサンとはなんだ!? ジェリド!?」

「テイターズは皆が二階級上の扱いだ!!」

「それでも俺はお前よりは階級が上だぞ!」

「人の物を取り上げようとする、腐敗した連邦に相応しい上官殿だよ!!」

「譲ってくれよう!!」

「絶対にいやだ!!」

「もうすぐ、俺は誕生日なんだよ!」

「だから何だよ!? ユウ!」

怒鳴り合う二人の男達を眺めながら、マウアーがコロコロと可笑しげにその形の良い唇から笑い声を上げ続けている。

「おい、ユウ」

書類をヒラヒラと振りながらシロツコが騒いでいるユウ達へ近づいてきた。

「少し来てくれ」

「まだ話が終わってない……!!」

しつこくムラサメジャンパーを引っ張っているユウが首を激しく振る。

「話はもう終わっているぜ」

疲れた声を出しながら、ジェリドが力を入れてようやくユウを自分の身体から引き剥がした。

「早くこの人を連れていってくれよ、シロツコさんよ……」

「一体何を遊んでいるんだ、お前は……」

呆れた声を出しながら、シロツコがユウの首根っこを掴んで引きずっていく。

「着るのに飽きたら、お下がりでもいいぞ……!!」

「百年たったら考えてやるよ、ユウ中佐殿」

ジェリドが嘲笑うような笑い声をシロツコに引きずられていくユウ

ウへかけた。

「変わったわねえ……」

マウアーが去っていくユウとシロツコを見つめながらポツリと呟く。

「誰が？」

「シロツコもユウ・カジマも」

「そうかな？」

「特にシロツコがね……」

「まあ、な……」

ジェリドはユウの駄々で伸びてしまったジャンパーを気にしながらも、ムラサメドリンクを口につけながらマウアーのその美貌へ視線を向ける。

「以前の毒々しい雰囲気が無くなっているわ……」

「確かにそうかもな」

広大なジュピトリスの工房の奥に鎮座されているシロツコが製作したガンダムタイプのモビルスーツを遠目に眺めながら、ジェリドは手で口を拭いてから頷いてみせた。

「性格が丸くはなったな」

「フラストレーションが解消されたからかしら？」

「フラストレーション？」

「自分の才能を大勢の人間に認めてもらいたい」

マウアーはジェリドのガブスレイにその手を触れさせながら、顔に微笑みを浮かべている。

「多分、シロツコが木星から地球圏へ出てきた理由はそれよ」

「辺境で一生を終えたくないからじゃないかな？」

「それもあつたと思うけどね」

呟きながらマウアーはポケットからタバコを取り出す。自分が吸う前に先に一本をジェリドへ渡してやる。

「最大の理由は承認欲求だと思うわ」

「承認欲求？ シロツコが？」

「元々、才能がある男なのは確かだから……」

「天才のフラストレーションか……」

ジェリドが口に加えたタバコにマウアーが火を付けてくれる。マウアーもタバコを自分の口にくわえる。

「けどな、マウアー」

マウアーのタバコに火を付けてやりながら、ジェリドが疑問を口にする。

「何でシロツコのそれが解消されたのかわからねえ……」

「鈍いわねえ」

「何だよ？ マウアー？」

「承認してくれる人が出てきたからじゃない、まったくもう」

「ああ……」

ジェリドの口から感嘆したような声が上がった。タバコの煙が微かに揺らぐ。

「ユウ・カジマか」

「そして、あの彼に引かれるように」

「シロツコの理解者が増えている、か……」

その目にどこか優しげな色を浮かべながら、ジェリドがそう呟く。

「ユウがシロツコを信頼した、そのためシロツコの棘が無くなった、そして棘が取れたシロツコをさらに理解する人間が増えてくる……」

連想の言葉を口にしたあとに、ジェリドは軽いため息のような物をつく。

「好循環だな」

「シロツコには理解者が必要だったんだわ」

「なるほど……」

しばらく無言でタバコをふかし続ける二人。携帯灰皿を懐から出しながらジェリドがおもむろに口を開いた。

「理解者がいないシロツコはどうなっていたと思う、マウアー？」

「おそらく自分の殻にこもり、その反動でますます人を見下す事になったと思う」

「そして最後はこの世から消えるか……」

「物理的にか概念的にかは解らないけど」

新型のガンダムの元で何かを話し合っているシロッコやユウ、そしてユウの仲間の技術者達の姿をジェリド達は遠くからじつと見つめている。

「人は環境で変わるものよ」

「お前は頭がいいなあ、マウアー……」

「あなたと釣り合わなくちゃね」

「おいおい……」

そう言いながらマウアーがジェリドの頬に軽くキスをした。

「変わっていくあなたに」

ジェリド機と同じく修理中のマウアーのガブスレイの機体の方からメカニックが彼女を呼ぶ声がした。そのメカニックの急いでいるような声に慌ててマウアーが自機の方へ早足で向かっていった。

「好循環……」

立ち去っていくマウアーの後ろ姿を眺めながら、ジェリドが小さく呟く。

「環境が人を変えるか……」

そう呟いたジェリドの脳裏にふと、自分がついに乗り越えられなかった壁であるエウーゴのエースパイロット「カミーユ・ビダン」の顔が浮かびあがる。

「はたして俺はアイツを憎んでいるのかな……?」

首を傾げながらそう一人で言葉を口に乗せるジェリド。灰皿へタバコを押し込みながらジェリドは自分のガブスレイのメカニックに手を貸そうと、奥の方にある半ば分解されている量産タイプのガブスレイの方へ歩いていった。

「ジオ・メシア」

両肩に巨大な推進器を付けているガンダムタイプのモビルスーツをシロッコがユウへ見せる。

「シロツコの作ったガンダムか……」

「本当は私はガンダムタイプが好きではないのだ」

「何故だ？ シロツコ？」

「人間を模した顔が気に入らん」

ガンダムタイプの頭部としては相当に歪な印象を受けるジオ・メシアのその顔を見上げながら、シロツコはユウへそうハッキリと言いつつ。

「人間の神像仏像、それらの情けない投影だと思う」

「ならば、なぜこの機体は？」

「グレイス・コンバーターの相性がな」

巨大推進器を指差しながら、シロツコが軽いため息をついた。

「ガンダムタイプと一番上手くいくんだ」

「グレイス、恩寵ね……」

ユウがジオ・メシアの両肩の推進器を眺めながら、その言葉に相づちのようなものを打つ。

「残存ミノスフキー粒子変換器だよ」

「自信作のようだな……」

「まだまだ不完全な部分も多いがな」

そう言いながらシロツコは紙の書類へ目を落とす。

「機能の特徴は？」

「戦場の残存ミノスフキー粒子を吸引し、それを自機のエネルギーなどに充てる」

「粒子泥棒かよ……」

「大海の水をコップ一杯すくって腹を立てる人間がいるか？」

「言い様だな、シロツコ」

「リサイクル精神だよ……」

そう言つて薄く笑うシロツコ。ユウは肩を竦めながらも、少し離れた場所でキーボードを叩いているアルフへ視線を向けた。

「シロツコ」

「どうした？ アルフ技師？」

「あなたのお手製のサイコミュ関係器機とグレイス・コンバーター、そ

の二つに変な干渉があるぞ」

シロツコ機の調整を手伝っているアルフがコンピュータのデータを見上げながら大声で叫ぶ。

「半分は仕様、もう半分は先に言った不完全な部分だよ」

「アイデアも性能も桁外れなんだがな……」

「データを全て記録しておいてくれ」

シロツコの言葉にアルフはタバコをくわえながら頷く。

「ユウのガンダムにもグレイスを付けたい」

「面白そうだな……」

アルフがグレイスのデータを見つめながら、その言葉通りの表情を顔に出した。

「ジム・タイプのジエダがガンダム？」

「あいつはGタイプのジエダだよ、ユウ中佐」

首を傾げながら疑問を口にしていたユウへ、シロツコの手伝いをしているテイターズズの技術者が答えてくれる。

「GタイプのGはガンダムタイプのGさ」

「高性能量産型か？」

「可変機能こそないが、性能はあのZガンダムより上かもしれない」

「凄いもんだな……」

少し離れた場所にブループライウスと共に置かれているジエダの姿を興味深げにユウが眺める。

「だったら、妙なグレイス・コンバーターとやらはいらないんじゃないかな……？」

「絶対にお前の機体にも付けさせてもらおうぞ、ユウ」

ユウのこぼした言葉を聞きつけたシロツコが釘をさすような厳しい口調で言い放つ。

「勝手に決めるなよ、シロツコ……」

文句を言うユウの顔をシロツコはその細い両目をさらに細くして睨みつけた。

「メツサーラ、ポリノーク・サマーン、そしてジ・オ」

シロツコが閉じている右手から指を3本突きだし、その指をユウの

目の前にかざしてみせる。

「意味は解るな?」

「それらを持ち出すのかよ、おい?」

そのシロッコの手製のモビルスーツ達の名前を言われて、ユウが渋い顔をした。

「身体で払ってもらうぞ、ユウ」

「モビルスーツなんぞ、所詮は戦いで破壊される物だろう?」

「プレゼントを全てゴミ箱へ捨てられたり、オシヤカにされていい気がする人間はいない」

ハンガー内で遠目に見える、頭部を失って修理中のジ・オやボリノーク・サマーンを見やりながらシロッコはユウへ叩きつけるように言葉を言い放つ。

「お前は私のモルモットにもなってもらおう」

「わかった、わかったよシロッコ博士殿」

シロッコから手渡されたミノスフキー粒子変換器「グレイス」のデータを眺めながらユウが投げやりになんぞ答えた。

「アルフ」

「何だ、ユウ?」

「マリオン・システムとこのグレイス・コンバーターとの干渉はあり得ると思うか?」

「無くては困るよ、ユウ……」

シロッコが口を挟んだ。

「お前は私のモルモットなのだからな」

「根に持つタイプだな、結構」

「ネニモツタイプではなくニュータイプだよ、私は」

「ああ、はいはい……」

いい加減な感じの声でシロッコへ返事をしながらユウは工房内で遠く離れたサマナ達の方へ視線を向ける。

「サマナ達との打ち合わせの時間になった」

「今日はもうお前は俺達への用事はないかな?」

「今スケジュールを入れられても対応が出来ないさ、アルフ……」

最後は早口でそう言いながら、ユウは工房のちょうど反対側のサマナ達の所へ急いで向かった。

「ユウ中佐」

ユウの部下であるシドレを含んだ連邦のパイロット達が急ぐユウを呼び止める。

「シロッコ大佐はどこにいるか分かりますか？」

「向こうでご自慢のモビルスーツと格闘をしているよ」

「ありがとうございます」

そのパイロットの一行はユウへ一礼をしてからシロッコの所へやや早足で向かっていく。

「隊長」

シドレがパイロット達のリーダーへ一言声をかけてからユウの近くまで寄ってきた。

「急いでいるんだよ、シドレ」

「後でモンシア大尉達が話をしたいようです」

「彼らはテイターズだろう？」

「話自体は連邦の機密に関わる物だそうです」

「だから、なぜテイターズを通してくるんだって言っているんだ」

少しネチツこく問い詰めるユウへ嫌な顔をしながらも、シドレは律儀に命令を伝えようとする。

「旧式のガンダム開発計画、その機密の解凍に関わる話をユウ隊長へ通しておきたいみたいです」

「機密の解凍？ それを俺に話を通しておく？」

「そうです、そう言っていました」

「こういう話が来るとロクな目に遭わない……」

そのユウのため息にシドレが苦笑いを浮かべてみせた。

「以前にその計画とモンシア大尉達が少し関わりを持っていたということ、ユウ中佐達が同じ機密保持の義務が発生したEXAMと関係がある連邦の軍人であるということ、あと……」

「EXAMは以外と多くの人間が知っているみたいだぞ？」

ユウがその話を遮り、先程まで自分がいたシロッコ達の仕事を振り返りながらシドレへ言葉返す。

「何故かシロッコも知っていた」

「私が知った事ですか……」

「まあ、でもシドレ君」

口に皮肉げな笑みを浮かべながら、ユウが冗談めかした口調で肩を竦めながら低い声で言い放った。

「俺達のせいでさえなけりやあ、オールオツケーさ……」

「で、ですよねえ……!!」

そうやってシドレが一目で作り返いと見える笑みで相槌を打つ。

「自己保身も生きていく上で必要だ」

「ハハッ……」

「さいごまでたっていたものの勝ちだよ」

「あ、あとその機密の話を連邦からユウ中佐へ伝える最後の理由は」

疲れているせいか、ズル賢そうな顔をしてそう言ってぬけるユウへ変な気の使い方をしているシドレが話を本筋に戻そうとする。

「隊長がアムロ・レイとお互いの顔を知っている間柄だからだそうです」

「アムロに関係があるか？」

「じゃ、ないんじゃないでしょうかね？」

「ハア……」

軽く胃を押さええながら、ユウが再びため息を深く吐いた。

「エウーゴやカラバにテイターンスそしてネオ・ジオン、全てに顔が利く連邦の軍人に仕立て上げられた俺は何なんだ……?」

「今時、苦勞しているのは隊長だけでは無いと思いますから……」

「わかった、わかったよ……」

手を振りながら疲れきった声でそう言い放つユウ、シドレが懐から

ムラサメドリンクと栄養ドリンクを取り出しそのユウの手へ握らせてくれる。

「だが、俺は部下に恵まれているかな？」

シドレから好物を手渡されたユウは軽く微笑みながら礼の言葉を言う。その言葉に対してシドレは手短かに敬礼をし、先程のパイロット達の一行を急いで追いかけて行った。

「シロツコ様がドレスを作ってくれるのよ……」

「手伝え!! サラ!!」

「私はシンデレラ……」

何かうつとりしているらしいサラへサブ・フライト・システムの改造を手伝っているらしい、油まみれになっているカツが怒鳴っている。

「そうでもないか……」

ユウは苦笑しながらその二人の部下の側を駆け抜けていった。

「マリオン・システムはさ……」

ジュピトリスのモビルスーツ工房天井に設置されている大型プロジェクターへ映し出されている夕陽を眺めながら、アルフがユウへ寂しげな顔を見せる。

「俺なりのクルスト思想、EXAM思想への回答だったんだよ」

「オールドタイプとニュータイプを繋ぐシステム、マリオンか……」

「所詮は戦争の道具、人型兵器であるモビルスーツに搭載したのが間違いないんだな」

「平和の理想がお前にあつたのか、アルフ……」

「駄目だったか？ 人殺しの兵器、モビルスーツしか作れない俺には？」

「全然」

そのユウの言葉にアルフが微かに笑みを浮かべてみせた。

「でも、俺には他に能が無いんだ」

「悪いもんじゃないよ、マリオンは……」

「ニュータイプがオールドタイプの視線を旧いと言ってバカにするのであれば、逆にオールドタイプがニュータイプの視線に並び立てればいいと思っていた」

「その理想ならマリオンは別に的外れな装置ではない、上手く出来ている」

「しかし、オーガスタ研究所では完全に対ファンネル用、そして相手の行動予測用の特殊装置としてカテゴリーされているよ」

「そうなるか……」

「マリオンを利用した強力な対ファンネル兵器が鋭利製作中だよ、研究所ではね」

どこか懺悔をするような口調で呟き続けているアルフ、彼への慰めの言葉をユウは頭に思い浮かべる事が出来ない。ジュピトリスの大プロジェクトに映し出される夕陽は作り物とはいえ美しく輝いている。

「新人類とか何とか言われているニュータイプそのものだって、戦争の道具になっている」時世だ」

ユウはかろうじてその台詞だけは口から出すことが出来た。

「強化人間に携わった罪の償いの気持ちもあつたんだよ、俺はな……」
「……」

強化人間の人体実験の噂を聞いた事があるユウは、そのアルフの言葉には答えない。

「この戦争を終わらせてくれないか？ ユウ・カジマ？」

「一人の人間にすぎない俺に何をしろと？ バカを……」

そう言いながら笑いかけたユウだが、その言葉を絞り出すようにして吐いたアルフの顔から投げつけられる真剣な眼差しを見て、ユウは口に浮かんだ笑みを閉ざす。アルフの顔から目をそらし、しばしの間ユウは言葉を発しない。

「新しいマリオンでか？」

沈黙の空間をユウはその言葉で破る。

「ダイクンとクルストが唱えた亡霊達を成仏させてやってくれ、頼む……」

「アルフ……」

アルフが口にした「ダイクンとクルストが唱えた亡霊達」という言葉、何かユウはその言葉に対して今起こっている戦争の物理的、概念的、主義思想、それらの全ての要素が詰まっているような気がした。「もしかして俺の目標となるべき事なのかもしれないな、それは……」
「ユウ……?」

どこか強い口調でそう呟くユウを今度はアルフが不思議そうに見つめる。

「再び蒼を受け継いでみようかな……」

「……」

「もちろん、お前やフィリップ達と一緒にだよ」

そのユウの言葉にアルフの目に輝くものが浮かぶ。

「俺はラプラスのユウをやってみるよ」

「オールドタイプのお前がジオン・ズム・ダイクンの思想を受け継ぐか……」

「何のニュータイプの力も無いけどな」

その言葉に対して、アルフが夕陽を見上げながら呟く。

「オールドタイプでもニュータイプと同じ主義や思考、そして行動をすればそれはニュータイプと同じことだ」

「何だい？ それは？」

「ジャミトフが一年戦争の少し後に出版した、持説のニュータイプ論が書かれた本からの引用だよ」

「へえ……」

「もつとも」

夕陽のプロジェクターが暗くなり始める。夜の光景でも映すのだろうか。

「ティターンズの理念とは相反するため、引っ込めちまったらしいがね」

「ジャミトフ閣下か……」

夜空に変わり始めたプロジェクターをユウも見上げてみる。映し出される月を見つめながらユウはジャミトフ・ハイマンの娘の事を思い出す。

「ブルーは元気かな……?」

「エウーゴとは休戦したんだ」

「会えるかもな、いつか」

「蒼を受け継ぐなら」

アルフがそう言ってニヤリと笑う。

「生身のブルーも受け継いだらどうだ?」

「マリオンで手一杯だよ、俺は」

「マリオン・システムの事を言っているなら、アイツは二次元の者だぞ

? ユウ?」

「二次元とやらも結構良い物だぜ」

「オイオイ……」

アルフの呆れた顔にユウは穏やかに笑って見せる。工房の天井へ浮かびあがる月が新たなブルー・ディステイニーを優しく照らしていた。

第42話 彼岸の島

「いけませんぜ、シーマ様」

シーマ艦隊のパイロットが豚丼のレトルトパックをすすりながら感想を言う。

「思わぬ拾いものだったねえ……」

シーマも豚汁のパックからその中身をすすする。

「生存者はやっぱりいないのかい？」

「仏さんならいますけどね」

「そうかい……」

宙域に漂っていた、遭難した貨物船を眺めながらシーマは少し同情するような声を出す。

「まっ……」

空のレトルトをゴミ入れ用のシュートダストへ差し込みながら、シーマが噛みタバコを取り出した。

「死人には必要が無いもんだからね」

「死人に口なしってね……」

そのシーマ艦隊の旗艦のクルーの冗談に皆が声を上げて笑う。

「たまには荒事なしでも良いっていうのも、良いもんですな、シーマ様」

「そうさね」

シーマが食後の紅茶を嗜みながら、クルー達へ笑みを見せる。

「あたし達は貴族様になったんだよ？ コツセル？」

「キャプテン・ドレイクですな」

「詳しいじゃないかい？」

「旧世紀の歴史には興味があつたもんで」

「人は見かけによらないもんだね、コツセル」

「へへっ……」

照れた笑いを浮かべながら、副官の男もコーヒーをその口へ含む。

「シーマ様」

「エウーゴと思わしき連中が接近してきますぜ」

シーマはその報告にすぐには答えない。紅茶が入っていたチューブを投げ捨ててから、ポツリとシーマが凜とした声で言い放った。

「一応、臨戦態勢を」

「へい、シーマ女男爵様」

その場にいた数名のパイロット達が軽く肩を回すなどの食後の運動をしながら、ハンガーへ降りていく。

「どうでるさね……」

様々な残骸が浮かんでいる暗礁空域に視線を向けながら、シーマは自分のストレートの髪にポケットに忍ばせてある櫛をあててゆっくりとした手付きで撫で付けた。

「コーストガード、沿岸警備ね……」

「大事なお仕事よ」

「へいへい……」

退屈そうにぼやくカミーユをファが軽くたしなめる。

「しかし……」

自機であるリック・ディアスⅡの両手に握られた巨大な鉄球をため息をつきながら見つめるカミーユ。

「こんな装備はないだろうに」

「質量兵器よ」

同じくリック・ディアスⅡに乗っているレコアがカミーユ機が持つ物と同じ鉄球を軽く持ち上げてみせた。

「モビルスーツの性能に左右はされないわ」

「先月から、アナハイムのエウーゴへの提供資金が極端に減ったんだって?」

「エウーゴはテイターンズに負けたようなもんだからね……」

「公式には引き分けとなつてはいますよ? レコアさん?」

「本当にそう思つて? カミーユ?」

「一応、俺にだって現実はあるってはいますよ……」

コクピット内でムラサメドリックのチューブを口に運びながら、カミーユが少し苛立ったようにその唇を尖らす。

「一時的な物ではあると思うけどね、全く……」

「だからって、こんな武装の節約術はないでしょうに」

カミーユとレコアがハンマー状の武器を見つめながら、二人揃ってブツブツと不満を口にする。

「リック・ディアスⅡでは、ネオ・ジオンの最新鋭機には少し厳しいぞ？」

「こんな所にジオンの人達がいるとは思えないけどねえ」

フアはそう言いながら、自分やカミーユ機の後に続くリック・ディアスⅡの部隊の姿をぐるりと見渡す。

「Zやパラス・アテネとかがまるごとオーバーホール中とはいえない……」

「このリック・ディアスの後期型も悪くはないわよ？」

「俺はZガンダムに馴れきっちゃまってるからな……」

そう呟きながら、カミーユはコクピットの中で微かに苦笑をした。

「カミーユ、あれを」

フアのリック・ディアスⅡが前方の暗礁空域を指差す。暗礁空域にはダークブラウンで塗装をされたネオ・ジオンの所属と思わしき数隻の宇宙艦が見られる。

「難破船を漁っているみたいだな」

目を凝らしてその艦達を見つめていたカミーユが首を傾げながら、コクピット内のコンソールに手を置き、その上を神経質そうに指でコツコツと叩く。

「最近流行りの戦場漁りの海賊かしら？」

「艦自体はネオ・ジオンの艦隊らしいがな……」

数隻のネオ・ジオン所属と思わしき艦、そしてその艦の周囲に展開しているモビルスーツを姿が見えるか見えないかという距離の宙域にカミーユ達は留まる。

所属不明の艦隊の背後には巨大な突起があちこちから突き出でて

いる小惑星の姿が見える。

「旧ソロモン基地、コンペイトウか……」

そう眩くカミーユ機の周囲には艦の破片や木材などが散らばっている。フワリと接近してきたそれらの残骸をカミーユはリック・ディアスIIの手を振って避けようとした。

「昔、ジオンの残党に核攻撃を受けた所ね」

「多くの連邦軍の人達の命が失われたらしいな」

レコアの言葉にカミーユが軽いため息をつく。

「彼岸の島ね……」

フアがそう言いながら、少し薄気味悪そうに宙域中に散らばる残骸を見つめ続けている。

「とりあえず、あの艦に退去勧告は出してみるか」

周囲のスペースステブリの多さにカミーユは軽く眉をしかめながらも、指向性の通信機の周波をその艦隊の旗艦と思しき船へと向けて放った。

「ガキがあたし達に口出しをだつて？」

シーマがムサカのブリッジに設置されている豪華な椅子に座ったまま、怪訝そうな顔をした。

「気に入りませんか……」

シーマ艦隊の旗艦「マロウネ・ディートリヒ」の副官を勤めるコツセルが遠目に見えるエウーゴのモビルスーツ部隊に目をやりながら不満げな声を漏らす。

「あたしもだよ」

苛立たしげにシーマは両の脚を大股に開いたまま、床へ敷いてある虎皮の敷物を強く踏み締めた。

「見たところ、油断出来ない数ではありません」

「わずかに型落ちの連中が群れているか……」

コツセルの言葉を耳に入れながら、眉をしかめたままシーマが椅子から立ち上がる。

「やりますか？ シーマ様？」

「腹ごなしをしてみるかねえ？」

コツセルに不敵な笑みを浮かべたまま、シーマがムサカノハンガーデッキへ優雅な足取りで向かう。

「了解、シーマ様」

自艦のパイロット達へコツセルが通信機から命令を告げた。

「勧告は無視されたな」

ダークブラウン系統の色をした艦達から発進をしてきたモビルスーツの部隊の姿を目に止めながら、カミーユが自機の武装の様子を確認をする。

「みんな!! ガンダムハンマーは持ったな!？」

「おう!!」

カミーユの掛け声にリック・ディアス隊から力強い声が帰ってきた。

「行くぞ!!」

叫びながらカミーユはガンダムハンマーの伸縮式チェーンのストップパーを解放する。ネオ・ジオンと思われる敵部隊の展開は早い。長大な槍のような武器を小脇に携えているモビルスーツの姿をカミーユは視認をする。

「この距離でも敵の射撃がこない？」

ファが敵機からの攻撃が無いことを訝しんでいる。敵艦隊からの砲撃もない。

「敵は接近戦に自信があるという事か？」

「あるいは、私達と同じくとうつても貧乏なだけかも」

「ならいいんだけどな……」

レコアのストレートな言い方に苦笑いをしながら、カミーユはハンマーをリック・ディアスⅡの頭上で回転をさせる。

「捻り潰す!!」

カミーユ機を始め、数機のエウーゴ機からハンマーが放たれる。チエーンを伸ばしながら鉄球がネオ・ジオンの機体へと襲いかかろうと空間を切った。

ガゴオ!!

数機のネオ・ジオンの機体が鉄球の群れの直撃を受けて軽くよろめく。

「当たるもんだな!!」

「偶然が多いと思うわよ、カミーユ」

ガンダムハンマーの低い命令率のレートを知っているレコアがカミーユを嗜めるような声を出した。

「俺はいい気にはなっていないぞ?」

「男はこういう武器が好きだから、どうかしらねえ?」

「何だと?」

「カミーユ!! 前!!」

ファの警告の声を聞くと同時にカミーユ機が素早く身を翻す。

シユア……!!

「相手も同じ感じの武器か!」

鋭い先端を持った槍がカミーユ機の脇をすり抜ける。かわされた槍が近くの艦の残骸へ深く突き刺さった。その槍の威力に微かに恐怖を感じながらも、カミーユは接近してくる敵機を迎え撃とうとする。

「槍付きのモビルスーツめ!!」

旧世紀の騎兵を思わせる敵機から突き出される槍をカミーユは引き戻したガンダムハンマーで防ごうと試みる。槍の先端が鉄球の中心にぶつかり、その穂先がリック・ディアスⅡの外側へ押し流された。

「ちっ!!」

敵パイロットが舌打ちをしながら、機体の空いた手にナイフの用な

物を握りしめた。そのナイフが赤熱をし始める。

バツバ……

それを見たカミーユはリック・ディアスⅡの頭部に内蔵されている機関砲をそのヒート式のナイフに向けて放つ。ナイフが敵機の手から弾かれた。

「何をやっている!! クルト!!」

女の叫び声と共に、虚空からカミーユ機へビームが飛んだ。

「シーマ様!!」

「おどけ!! クルト!!」

敵のリーダー機らしき褐色の機体がモビルスーツの背丈ほどもある例の長大な槍を抱えながらカミーユの機体へ突進をかけようとする。

「ちい!!」

恐れを知らないようなそのモビルスーツの突撃をカミーユは間一髪でかわした。その敵機が急速に旋回をし、再度カミーユ機へ接近戦を挑もうと巨大な槍を大上段に構えなおす。もう片手には大型のビームライフルを抱えている。

「騎兵隊気取りかよ!? ネオ・ジオン!」

カミーユは呻きながらも、頭部のバルカン砲でその機体を牽制する。両手がハンマーでふさがっているのでリック・ディアスⅡの射撃武器がそれしか使用ができない。

ギアア!!

上方から力任せに降り下ろされた敵機の槍をカミーユは両手のガンダムハンマーをボクサーのグローブの様にして受け止める。

「海賊か!!」

カミーユは頭部のバルカン砲の残数へ目をやりながら、相手の槍を押し返そうとハンマーへ力を込めた。

「一応、ネオ・ジオンの軍属ではあるよ!!」

「ネオ・ジオンの騎士気取りか!」

「海賊騎士シーマ・ガラハウ様が駆るR・ジャジャのお通りだ!!」

そう叫びながら、シーマと言う女の機体はスラスタを噴出させて

カミーユ機から距離を取る。機体を離らかす間際にそのR・ジャジャと言うらしき機体からビームライフルが放たれる。

ブゴウ!!

ビームライフルが放たれると同時にカミーユのハンマーがシューマ機へ射出される。ライフルの弾がカミーユ機の肩を僅かに削り取った。

「海賊でも使わないような野蛮なトゲ付き鉄球を得物にとは!!」

宙を駆け抜けたガンダムハンマーがシューマ機を吹き飛ばす。悪態をつきながら、シューマがまたしても長槍をカミーユへ向ける。

「突進か!？」

その向けられた槍を見ながら、カミーユがリック・ディアスIIの挙動へ集中をしようとする。シューマ機が僅かに身動きをした。その機体の機動に何かカミーユの脳裏に走る。歴戦の勘であろう。

シューアア……!!

「けったいな武器をネオ・ジオンは考える!!」

R・ジャジャの手から低い爆発音を発しながら射出された大槍が宙域を疾る。ハンマーでは受け止める事は出来ない大きさの槍をカミーユは機体を翻して回避をする。

「だが、このデカブツの槍は所詮は単なる!!」

ギユア……!!

「場慣れをしてるじゃないか!! 小僧!!」

「伊達にモビルスーツに乗ってはいない!!」

射出された大槍にいつまでもエウーゴの若いエースは目を奪われない。カミーユは飛ばされた槍を隠れ蓑としたR・ジャジャの奇襲の一撃に機敏に反応をした。

シューマ機のライフル下部に装着されているヒートサーベルをカミーユはハンマーで強引に受け止める。ガンダムハンマーが音を立ててバターののように切断をされ始めた。

「さすがネオ・ジオン!! やることがあざとい!! やはりあざとい!!」

「あたしはもう心はジオンになんぞは無いさね!!」

「どういう意味だ!？」

シーマが機体の背中から予備の槍を取り出す隙をつき、カミーユはリック・ディアスⅡの脚でR・ジャジャのライフルを蹴り飛ばす。

「海賊貴族様になったんだよ!! あたし達はね!!」

「私掠船のつもりか!？」

「難しい言葉を知っているじゃない!! 小僧!!」

R・ジャジャの予備の武器らしき小型の槍がカミーユ機の頭部を狙う。寸前でカミーユは槍の穂先から機体の頭を低くしてかわす。

シーマは器用に穂先をコントロールし、リック・ディアスⅡの頭部に二門あるバルカンの内の一つを削り取った。

「貴族主義だよ!! エウーゴの少年エース!!」

「最近アンダーで噂になっているブツホ社とやらのお遊び主義か!!」

「遊びならば、呑気に海賊貴族様をやれるってもんだよ!!」

「私欲の為に戦う兵隊め!!」

「悪いかい!？」

「悪いに決まっている!!」

叫びながらカミーユはヒートサーベルで溶解されたハンマーのチェーンを伸ばして振り回す。僅かに回転するその鉄球の威圧感にシーマが機体を再度引かせる。

「盗賊もとい、海賊騎士め!!」

「女騎士シーマ・ガラハウだよ!!」

「お前のような姫騎士は!!」

回転をしていたハンマーがR・ジャジャへ向かう。シーマは相当なスピードで迫る鉄球のチェーンを槍に巻きつかせて防いだ。

「この世にいてはいけない存在なんだ!!」

「姫とまでは言っていないだろ!？」

少し呆れた声を出しながら、シーマは槍に力を込めてハンマーをカミーユ機から引きずり取ろうとする。

「姫騎士って何……!!」

ガンダムハンマーを上手く使えない事に苛立ちながら、ファアが額に汗を浮かべながら呟く。

「男のエゴが成した属性の事よ!!」

ファの疑問に答えるレコアは、意外にもガンダムハンマーを上手く使いこなしてある。両手のハンマーを同時に二機へ当てるといった離れ技まで見せている。

「シユツルムランサーが折れたか!!」

カミーユからガンダムハンマーを奪い取りながらも、勢いがあまりシーマ機の手握られていた小振りの槍が砕け散った。

「どこかにランサーはないか!？」

「ランサー!!」

「ランサー……!!」

近くのシーマの部下達が辺りを見渡している。

「ありました!! シーマ様!!」

「でかした!! クルト!!」

偶然宙域に漂っていたランサーを部下から受け取ったシーマはその槍とライフルをカミーユ機へ向けて放った。

「やらせるか!!」

その同時攻撃に片脚を撃ち抜かれながらも、カミーユは残りのガンダムハンマーをR・ジャジャへ向けて勢いよく投射した。偶然にもスペースデブリがシーマの視界をふさぎR・ジャジャの反応が遅れる。

ハンマーが側面からシーマ機へ接近をし、伸縮チェーンが褐色に塗られたR・ジャジャへ絡み付く。

「くっ!! 殺せ!!」

「その台詞はお前のような歳の姫騎士が言っっては!! とてもしけない事なんだ!!」

「捕虜になつてもあたし達はろくな扱いは受けられない!!」

「お前のような年増の姫騎士はクズだ!!」

「人の存在を否定するか!？」

「姫騎士を語るのには老人ではない!!」

カミーユは怒りの声叫びと共にシーマ機へ絡み付いたチェーンを締め上げた。

「人を家畜のように扱う小僧が!!」

「屈伏しろ!! エセ姫騎士!!」

身動きが取れないシーマへカミーユはそのガンダムハンマーのチェーンをさらに食い込ませる。

「くっ!! 殺せ!! って何……!!」

ハンマーを操り損ねて、自分の機体へ誤って当ててしまったフアが、そのカミーユの叫びに戸惑いの声を上げた。

「男が女を辱しめる事しかしない薄い本が成す言葉よ!!」

レコアがガンダムハンマーのチェーンで器用に二機の敵機を同時に縛りながら、吐き捨てるようにフアへ答える。

「カミーユはそのおぞましい非道に怒りの叫びを上げているのね!!」

「人を家畜にする事よ!!」

「その事に怒りを覚えるなんて!! カミーユは男なんだわ!!」

「カミーユは男でありすぎたのよ!!」

顔に汗をながしながら、必死にシーマは機体へ絡み付いたチェーンを振りほどこうとする。

「シーマ様!!」

見かねたシーマの部下がR・ジャジャへ駆け寄り、ハンマーのチェーンをヒートナイフで叩き切った。

「ガンダムハンマーがちぎれた!!」

両手の得物を失ったカミーユが周囲を見渡す。

「どこかにハンマーはないか!?!」

「ハンマー!!」

「ハンマー……!!」

僚機が宙域へ視線を巡らせる。

「だめだ、無い!! カミーユ!!」

「くそ!!」

カミーユのリック・ディアスIIには、あと一門のバルカン砲しかない。

「何だ……?」

難破船の貨物にあったのだろう、カミーユ機の近くに1本の長大な材木が流れてついでにきた。

「これならば!!」

丸太を両の手に抱えたカミーユ機がシーマ機を助けた敵機へ接近をする。

「うおう!？」

振り回された丸太に敵機が吹き飛ばされる。丸太には特殊なコーティングがされているのだろう、モビルスーツの装甲へぶつけても丸太には傷一つ付かない。

「これは良い材木だな!!」

「くそ!!」

丸太を振り回すカミーユ機にシーマが接近を出来ないでいる。チエーンに絡み付かれたときに変な力が加わってしまったのだろう、R・ジャジャのビームライフルの銃身が歪んでしまい火花を上げている。

「接近戦用の機体であるガスが簡単に吹き飛ばされるとは!!」

放ったシュトルムランサーがカミーユ機の丸太に弾き飛ばされたのを見て、シーマはコクピットの中で歯噛みをした。

「丸太には丸太だ!!」

シーマも故障をした銃剣付きのライフルを投げ捨て、暗礁宙域に漂っていた材木を手にする。

「ふうん!!」

両手に抱えた丸太を勢いよくカミーユ機へ降り下ろすR・ジャジャ。

ヴオゴオ!!

「やるな!! 海賊年増姫騎士!!」

「姫ではない!! 年増かどうかは微妙なラインだが!!」

つばぜり合いをする二機の丸太が火花をあげる。

「こんなハンマーなんて!!」

言う事を聞かないガンダムハンマーへの苛立ちが頂点へきたファも丸太を振り回し始める。

「ハンマーを捨てたらもったいないでしょ!? ファ!？」

「じゃあどう戦えって言うんですか!? レコアさん!？」

ファのリック・ディアスIIが抱えた丸太がネオ・ジオンの白兵戦用

モビルスーツ「ガズ」を殴り飛ばす。

「背中のビームピストルもバルカンも節約しろっつてうるさくうるさくうるさい!!」

「後で必ず絶対にハンマーは回収しなさいよ!!」

そう言いながらもレコアもその両手に丸太を抱え、敵機に槍の様に突きだして攻撃をしている。

「最強の質量兵器なのか!? この丸太は!?!」

丸太の有効性には気がついたのだろう、エウーゴもシーマ艦隊の面々も漂っている丸太を手にし始めた。エウーゴとネオ・ジオンのモビルスーツ達が丸太同士が殴打をしあう。

「シーマ様!!」

シーマ艦隊の旗艦から通信がR・ジャジャへ飛ぶ。

「貨物船の牽引準備が完了しました!!」

「よっし!!」

シーマが通信士へ応答しながら、丸太を大きく振りかぶった。僅かにカミーユの機体が後退する。

「引き際だ!!」

「逃がすか!!」

カミーユ機へ丸太で牽制をし、後ろを向いたシーマの機体へリック・ディアスIIから丸太が投げ飛ばされた。

「ガキの癖にさつきからやる!!」

丸太の直撃により、R・ジャジャのブースターが破損する。スピードが落ちたシーマ機へ向かってカミーユが機体を加速させる。

「シーマ男爵様!!」

一機のガズから材木がシーマへ差し出された。

「この丸太に捕まって下さい!!」

「助かる!!」

シーマはその丸太に掴まりながらカミーユ機へ向き直る。去り際に手に持っていた丸太をリック・ディアスIIへ勢いよく放り投げる。

「くそ!!」

回転しながら接近をしてくる丸太を避けようと、カミーユはサブ・

スラストターを使い機体をスライドさせる。回転丸太を完全には避けきれず、リック・ディアスⅡの腕が音を立てて破壊された。

「追うのはまずいか!」

片方の腕と片脚から火花を上げ続けている自機の状態を確認しながら、カミーユは撤退していく敵モビルスーツ隊を睨みつけている。

「機体性能は向こうが上でしよう!」

「深追いは出来ないな……」

そう言いながらカミーユ機はレコアが持つ丸太に掴まる。推進剤の残りに少し不安があつたのだ。

「クワトロ大尉も同じ事を言うはず」

「里帰りした大尉、シャア・アブナブルね……」

丸太に掴まりながら、撤退の為に艦首の向きを百八十度に変えているネオ・ジオンの艦隊に向かって口ごもるように呟く。

「あの人と戦う羽目になるかな……?」

「それをやれる男よ、あのバカ男は」

吐き捨てるようにレコアが言い放つ。その言葉に耳へ入れながら、カミーユ機は無言でリック・ディアスⅡの腕を丸太にしがみつかせていた。

「豚丼やら何やらが散らばっていたよな……」

「もう一回戻って、拾っていきましよう」

「やってることは同じじゃないですか……」

キツパリとそう言い放つレコアへカミーユが辟易したような声を出す。

「エウーゴは冷飯喰らいになっちゃったから」

シーマ艦隊が取りこぼしたと思われる食料がコンペイトウ周辺の宙域へ散らばっている事を記憶していたレコアが母艦アーガマへ内火艇を数隻出してくれるように通信を入れる。

「出来れば、漂流している遺体も少しは埋葬してあげたい」

「レコアさんがそんな心遣いが出来るとは」

周囲の宙域の様子をうかがっていたファアが驚いたような声を出した。

「なんだと？ 小娘？」

「いや、別に……」

「薄い本に登場させて、酷い目に遭わせるわよ？」

「薄い本って何ですか？ レコアさん？」

「今度、見せてあげるわ……」

ファアへ含み笑いを出しながら、レコアは遠くに見える内火艇が放つ信号の光にリック・ディアスⅡの胴体から投射光を放って答える。

「カミーユ、薄い本って何？」

「男が男である為に読む本さ」

「なるほど……」

ファアへ本の説明をしながら、破損が激しいカミーユの機体は一足先にアーガマへ帰艦をしようとした。

「格闘雑誌みたいな物かしら？」

「そんなもんだ」

「ブルーさん」

「何、カミーユ？」

豚井と豚カレーと豚麻婆と豚ミートソースのレトルトを積んだ内火艇をアーガマへ引き寄せているブルーへカミーユが声をかける。

「親父さんには会いたくありませんか？」

「その質問か……」

予備機であるネモを使って内火艇を引っ張りながら、ブルーが少し顔を曇らせた。

「父の真意を逆の視線で知るためにあえてエウーゴに入ったけど」

同じく予備機へ乗るカミーユから資材として回収した丸太を受け取りながら、ブルーが淡々と言葉をこぼす。

「結局、意味はなかったわ」

「そうですか……」

コクピット内でカミーユは自分の額を撫でながら、アーガマの通信士であるトーレスが操縦する内火艇をブルーと一緒に誘導する。

「どうも、エウーゴは近い内に自然分解する可能性が高いと思いますよ、俺は」

「そうね……」

「ブレックスさん自体が、エウーゴ構成員に対して元の鞘へ収まる事を推奨しているくらいです」

「アポリーやロベルトもネオ・ジオンに行っちゃったしね」

「はい……」

内火艇がアーガマのハンガーへ着地をした。振動が微かにアーガマのハンガーデッキを揺らす。

「でもね、カミーユ」

「はい」

「義理というものがあるわ」

「それについては……」

くすねておいたレトルトパックの賞味期限を確認しながら、カミーユはブルーへ苦笑しながら言葉を返した。

「僕ですよ」

「負けた側の人間は……」

丸太を集めていたリック・ディアス達がアーガマへ帰投をし始める。艦長のブライトが近くのエウーゴ艦隊へ支援を要請している。どうもコンペイトウ付近の資材を全部かき集めるつもりらしい。

「流れに従って生きれば良いと思う」

「流れに従えば、自然に道が開けるか……」

ファから丸太を受け取りながら、カミーユが深いため息をつく。

「ティターンズだって、私達と内実は同じだわ」

「エウーゴと同じく、寄せ集めであることが知れ渡っている……」

「少し前のゼダンの戦いで、ティターンズの一部がネオ・ジオンについての事は知っているわね？」

「はい」

数機のネモがアーガマから発進をした。資材回収の手伝いをしに行くようだ。

「テイターンズの思想からすれば、完全な敵であるネオ・ジオンに与したわ」

「単純な利益でテイターンズに入った人間が多かったって事よ」

両手に丸太を抱えているファが二人の会話に割って入る。

「エウーゴもテイターンズ、そしてネオ・ジオンも所詮は寄せ集めよ、カミーユ」

「理想だけでは人は簡単に離れていく？ ブルーさん？」

「父ジャミトフの掲げたテイターンズの理想は」

ブルーがネモの燃料計へ目を向けながら話を続ける。資材の回収の手伝いに行きたいようだ。

「すでに壊滅しているわ」

「テイターンズも長くはないと……？」

「結局、最後の勝者は」

豚井のレトルトを眺めながら、空腹の腹を押さえているカミーユへブルーが軽く笑みを浮かべながらゆっくりと口を開く。

「ユウ・カジマのような人間」

「あちこちに振り回されて苦労しながらも、最後まで一つの所に居続けた、サラリーマンたちか……」

「真面目が一番よ」

「俺達が真面目じゃないと？」

「ムードに酔ってエウーゴに入ったのでしょうか？ カミーユ君は？」

微かに皮肉が入ったそのブルーの言葉にカミーユは苦笑いを浮かべるしかなかった。

第43話 鉄仮面

「虹色の粒子、そしてそれらが合わさって虹の尾が漆黒の色を放つか……」

前方の宙域を疾るシロツコのジオ・メシア、その機体両肩のコンバーターから発せられる光の粒子の色をユウはしげしげと眺めている。

「間違いなくサイココミュと連動をしているな、このグレイス・コンバーターは」

ユウの蒼い機体の肩にもそのコンバーターは設置されている。そこから発せられる粒子はかすかに蒼碧の色を放つ。

「マリオンもシロツコの心の色を表してくれている」

グレイス・コンバーターから放たれる虹と黒の帯、それと同色の輝きが新型のマリオン・システムを通してユウの目に入る。

「なあ、シロツコ」

「何だ？ ユウ」

「お前は結局の所、他人をどう見ている？」

「突然、何を言い出す……」

「コンバーターからの色がな」

「この粒子の色か」

笑い声と共にシロツコの機体の指がユウの新鋭機「Gマリオン」、その機体の背部から放たれてる光の粒子を指差す。

「俺の作ったグレイス・コンバーターの副産物、その一つだな」

「お前のガンダムからの輝きの方が豪勢だな」

「虹色に漆黒とはな……」

自機から微かに輝く光を見つめながら、シロツコは微かに苦笑をした。

「俺の性格を現しているのかな？ こいつは？」

「シロツコ……」

「今度は何だ？ ユウ？」

「本当に変わったな」

そのユウの言葉にシロッコは答えない。無言でジオ・メシアのテスト飛行をしている。

「シロッコ」

「矢継ぎ早に人の名前を連呼して質問とは、くどいな……」

「結局の所、お前は」

ユウのGマリオンの頭部、ジムタイプのバイザーがシロッコ機のガンダムタイプの顔を覗き込む。

(顔以外は確かにガンダムタイプの機体だな)

Zガンダムを見てアイデアが浮かんだとシロッコが言っているジオ・メシア。確かにそれはカミーユ・ビダン、そしてユウが乗っていたZガンダムの派生機をベースに作られたブループラウスに似ているように見えた。

「他人の事をどう思っている？」

「お前達が俺という人間の心理、それを想像している通りの見方だよ」シロッコの機体が僅かにユウ機の前に出る。二人の遠目には徐々にジオンの本拠点、小惑星「アクシズ」の姿が見える。

「様々な個性を放つ、有象無象だよ」

「個性を全てまとめたら、どうなると思う？」

「私を試しているのか？ ユウ？」

「マリオンがお前の心を俺に見せつけてしまうんだ」

「オールドタイプにニュータイプの視点を与えるというサイココミュニケーションだ？」

その言葉にコクピット内でユウが軽く頷く。サブモニターへ映るシロッコの顔へ向けて返事をしたつもりであったが、やけにこの宙域に残っている残留ミノスフキー粒子の影響でモニターがノイズまみれになっている。

ユウはそのモニターの様子を見て、苦笑しながら口からの言葉で返事を返した。

「始めてお前と出会った時、シロッコがメツサーラに乗っていた頃もお前はその光を放っていたよ」

「その頃はマリオンとやらは無かったはずではないのか？」

「簡易的なサイコミュ搭載機には乗っていたがな……」

「ならば、答えは一つであろう？」

「それはない、シロツコ」

「私の言葉に対する勘の良さも証明の一つだぞ、ユウ？」

からかうようなシロツコの言葉に、ユウはため息を一つ吐いてから口を開く。

「俺はニュータイプではないはずなんだ」

「あたかもニュータイプになるのを拒んでいるような感じの台詞に聞こえるな、その言葉は」

「そういう気持ちを持っているのかもしれない、俺はな」

「フム……」

シロツコはユウのその言葉に軽く唸る。十三個のスリット状のセンサーアイ、それが十字型に並んでいるジオ・メシアの目が軽く光ったように見えた。

「それで……」

「ああ」

「今も昔もマリオン・システムはどう見せつけているんだ？ 私の心を？」

「虹のような様々な色、そしてそれを覆うような漆黒だ」

「ホウ……」

シロツコはユウへ向かって妙に感心したかのような声を出しながら頷く。

「おもしろいな」

「嫌な気分になることもあるさ」

「人の心をイヤでも覗き見る事になるからな」

「そうだよ、シロツコ」

「ククツ……」

ユウへ話をしている最中に、シロツコは忍び笑いをその唇から漏らし続けている。

「何がおかしい？ シロツコ？」

「そのマリオン・システムとやらな……」

「何だよ？」

「おそらくは、その対象の心とやらを映し出しているのではない」

「何か分かるのか？ お前に？」

「推測だが……」

前方に迫ったスペースステブリを回避するため、ジオ・メシアの機体が軽く跳ねた。

「そのシステムは、その人物が見ている世界を色として表しているのではないか？」

「心の中ではなく、人の視線の方を？」

「実質的には同じではあると思うが」

「どういう意味だ？」

少し暗礁宙域に紛れ込んでしまったようだ。二機のモビルスーツのスピードが落とされる。

「世界は人の見る視点によって、異なる姿を見せる」

「人によって、世の中は天国とも地獄とも見えるという事か？」

「極端な言い方だが、そうだな」

宇宙艦の残骸と思われる、巨大な金属板の前でシロツコの機体が立ち止まった。ジオ・メシアのコンバーターから光が消えた。

「私が人を有象無象と見ている事がすなわち虹と黒で象徴しているのだろうか」

「意味がわからん……」

「ならば、ハッキリと言おう」

シロツコの機体から少し離れた場所にいるユウへ答えるかのようにジオ・メシアの拳が金属板を軽く叩く。再びシロツコはジオ・メシアのメインエンジンを入れる。虹と漆黒の粒子がグレイスから放出される。

「全ての色を無造作に混ぜれば、黒になる」

「ああ……!!」

「解ったか？ 凡人？」

そう笑いながらシロツコは自分の機体をUターンをさせて来た

ルートを低速飛行で戻る。ユウのGマリオンもシロッコへ続く。

「あらゆる人をまとめていつしよくたに見下せば、色など関係なく全て同じ色になる」

「カンに障る言い方だが、そうなのではないか？」

「人を尊重しない見方をすれば、そうなるか……」

「そうなのかもな」

ジオ・メシアのコンバーターから放たれる虹色と黒の輝き。宇宙空間の色と同色でありながらもハッキリと輪郭が見える黒の粒子をユウはじつと見つめる。

「便利な物なのかもな、そのマリオンは」

「俺の言葉に嫌な気にならなかつたか？ シロッコ？」

「少しは腹は立ったさ……」

暗礁空域を抜け出した二機は僅かにスピードを上げた。グレイス・コンバーターからの光が増す。

「だが、参考になる」

「さすがはラプラスタイプ」

「ラプラスタイプ？」

「知っているだろう？」

「何だ？ それは……？」

そのシロッコの言葉にユウは「おや？」という顔をする。してみせる。

「勘違いか……」

「今度、時間があつたらそのラプラスとやらを教えてくれ」

「ああ……」

マリオンの目から観えるシロッコの心の影は全く動かない。

「さすがは天才のラプラスタイプ……」

シロッコに聴こえない位の声でユウは笑いを噛み締めながら呟く。「完璧というのが弱点になる事もある、そういう事だな……」

自分の知らない言葉を言われて全く心を動かさない人間はいない。完全に動揺を抑えてしまい、自分の心を制御しきってしまったシロッコが発する影、それがユウの言葉へ対する答えとなってしまうとい

た。

「とつとつ、このドレスを運びなさい、カツ」

「とんだ貧乏くじだ……」

ブツブツ言いながら、重モビルスーツ「タイタニア」を乗せたカツのサブ・フライト・システム兼用のモビルアーマーが母艦ストウラートから発進をしようとする。

「シロツコ様からのドレスよ、丁寧に操縦しなさい」

「モビルスーツ設計の天才ではあると思うが……」

カツのモビルアーマーが勢いよくハンガーから飛び出す。そのカツとサラへ運搬機へ乗ったフィリップとシドレの機体が寄りそうように接近をしてきた。

「シロツコさんは女を見る目がない……」

「文字通り、尻に敷かれているねえ？ カツくん？」

ジエダに乗るフィリップがタイタニアに乗られているカツにかいかいの声をかける。

「ハツキリ言つて、このメルキャリバーだけで充分ですよ」

「凄いモビルアーマーだよ、こいつは……」

臨時のコ・パイロットとしてカツの後部座席にいるアルフが感嘆の声を上げた。

「こいつをジュピトリス製全てのモビルスーツのサポートマシンとする考えだったみてえだな、シロツコさんは」

「神の意思を運ぶ、神の戦車か……」

「その大層な名前のジ・オはウィルスチェック中だけだな」

フィリップはそう言いながら、サブ・フライト・システムに乗っているジエダの調子を確かめている。

「シロツコも、やはりあれらのモビルスーツは捨てるに惜しいようだ」
「しかし、ジ・オとポリノーク・サマーンの発展型はすでに出来ている

わ

メルキヤリバーの上に鎮座しているジ・オの発展型であるタイタニア、ビームライフルをメルキヤリバーの武装ラックに置きながら、その機体の両腕をサラは誇らしげに組んだり天へ突き上げたりした。

「ただねえ……」

サラの視線がタイタニアの股間部に注がれる。

「このブースター兼用のファンネルポットはどうかならなかったのかしら、シロッコ様は」

「知らないよ、そんなの……」

少し赤面をしながら、カツがブスツとした顔でサラへ答えた。

「単にシロッコさんの美的センスが悪いだけだろ？」

「フン……」

自分の足元の機体を軽く睨みながら、サラが小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「自分より大きい男に嫉妬する小さい奴」

「小さい!? 小さいって何!?!」

「背も中身もって意味よ!!」

「中身!?! 僕のはその機体の股間人には負けてないぞ!!」

「他人に見せられる程のもんじゃない癖に!!」

「見てみるか!?! 見てみるかあ!?!」

「望む所!! 望む所よ!!」

わめきあっている二人を「また始まったか」と言わんばかりの表情を浮かべながら、フィリップがポツリと呟いた。

「シドレちゃん?」

「はい?」

「サラちゃんのあの言葉は、カツとの生本番オーケーと言うことかなあ?」

「さ、さあ……」

フィリップのジェダと同じく運搬機に乗せられている新型の偵察機の中でシドレが額に汗をかきながら曖昧な返事をする。

「どうよ、アルフ?」

「頭が痛くなってきた……」

メルキヤリバーの後部ではアルフが頭に手を当てていた。

「データ収集の為とは言え、この機体に乗らせてもらったのは失敗だったかもしれん」

「あんたはどうなんだ？ そっちの方は？」

「なんだよ、いきなり……」

「コマアーニケーションって奴だ」

「コミュニケーションだろ？ 馬鹿者」

「あっちの方のコミュニケーションの方の話だ」

ストレートなフィリップの言葉にアルフが苦笑した。前の席の力ははまだサラと馬鹿げた口喧嘩を続けている。

「以前、ムラサメ研からやってきたナミカーって女と少しな」

「完全なモバイルスーツフェチではなかったか……」

「モバイルスーツは女の機能は付いてないぞ」

「そっち専用のモバイルスーツでも作ったらどうだい？ アルフ」

「モバイルスーツは全長が二十メートルはある」

「背の高い女になりそうだな」

「あれの機能を造っても、ガバガバになる」

「マニアには売れそうだ」

「いろんな意味で高い夜のオモチヤだ」

フィリップがニヤニヤ笑いながら、隣の機体へ顔を向けた。

「なあ？ シドレちゃん？」

「ハハ……」

勝手に耳へ入ってくる二人の大人のバカ話を聞きながら、シドレがコクピット内でひきつったような愛想笑いをその顔へ貼りつかせている。

「ユウ達はどこまで行っているんだ？ フィリップ？」

「相当、ネオ・ジオンの支配宙域へ接近しているみたいだなあ……」

「やはり、一戦構えるつもりかな？ シロツコは」

「アクシズそのものがゼダンへ接近をしているみてえだ……」

「ユウ達ならば大丈夫だとは思うがね……」

そのアルフの言葉に心持ちにか、モルモット隊の各機体の速度が上がり始めた。

「イニシアチブをネオ・ジオンに握られたくないだよ、ティターンズも連邦も」

「相当な権限をジャミトフから渡されているか、シロツコさんはさ……」

「機先攻撃、それをシロツコ達はやるかもしれない」

「いよいよ戦争を始まっちまうか……」

二機のモビルスーツ、そして一機の重モビルスーツを乗せた大型の運搬機が宇宙の闇を切りながら疾った。

「ネオ・ジオンはアクシズをゼダンへ接近をさせて、どうするつもりなんだ？」

「さあ……」

ジオンと連邦のシンボルが宙へ投影させている。そのスクリーンが取り付けられた小惑星のすぐ近くまでユウは機体を接近させながら、後ろにいるサマナ機へ声をかける。

「おおかた、アクシズをゼダンへぶつけて、盛大な開戦の合図にでもするつもりなんだろうさ……」

シロツコが乗るジオ・メシアからどこか投げやりな声がユウ達へ届く。

「ティターンズの拠点破壊が目的ではない？」

「この亀の用なアクシズのスピード、そしてティターンズと連邦の要請に応じてこいつを止めたり動かしたりする」

「駆け引きに使っているか？ アクシズを？」

「単なる示威行為だろう」

虹の光をグレイスから放ちながら、シロツコがネオ・ジオンとの境界線の中へ領域侵犯をした。

「テイターンズはゼダンからはいつでも退避できるように準備はしてあるようだが？」

「カラのアクシズと同じくカラのゼダンがぶつかり、それからネオ・ジオンとの最後の戦いが始まる、それだけに過ぎない」

「そうだろうなどはユウも思う。しかし……」

「シヤアか……」

「シヤアのやることだよな……」

ユウのGマリオン、それとサマナが駆るアナハイム社から提供された紺色の塗装を施されているZZ(ダブルゼータ)、二つの機体は何気なく呟きあい、その頭部を見合わせる。

「考え過ぎると、とっさの時に身動きが取れなくなるぞ。二人とも」

「ああ……」

シロツコの柄にもない、気遣いとも取れるその言葉にユウはコクピット内で密かに苦笑いをした。

(まあ、そのくらいは出来ないよ、木星船団の団長等は出来ないよな)

「使えるか、Gマリオンとやらは？」

心の内でそう呟いていたユウへシロツコが唐突に声をかける。少し慌てながら声を返すユウ。

「機体の動き自体は良い」

その言葉と共に、ユウは微かにコンバーターから光を放ってみせる。蒼く塗装されたブルーデイスティニー五号機、最新鋭量産機であるジェダをベースに製作されたGマリオンが太陽から宇宙空間を通して放たれる冷たく鋭い陽光に映える。

「あんたの作ったグレイス・コンバーターとやらもな」

「アルフ技師のサイコムシステム、マリオンとやらとの相性はどうか？」

「この機体のマリオン・システムはまだ訓練でも全開にした事が無い」
「何故だ？ ユウ？」

そのシロツコの疑問にユウは顔を険しくしながら呻いた。

「どこか怖い……」

「グレイスとの干渉が強すぎるとアルフ技師から聞いたが？」

蒼い機体のコクピット、その脇に設置されている新型のマリオン・システムをフル稼働させる為のスイッチに被せられているプラスチックカバーを指でなぞりながら、ユウは憂鬱そうな声でシロッコへ答える。

「一度、シミュレーターで作動させてみたが、計器類がありえない数字を示した」

「なるほど」

その弱腰とも言えるユウの言葉にシロッコは納得をしてくれたようだ。

「だが、いつかは試しておいてくれ」

「今、俺はやっておいた方がよかったと思っているよ、シロッコ」

「そうだろうともさ……」

軽く笑い合いながら二人はその顔を強ばらせて小惑星アクシズの方へ目を向けた。二機のモビルスーツが少し距離を取りつつ手持ちの武器を構える。サマナのガンダムも二人の後ろの方へ機体を動かす。

「注意を、御二人とも」

「ああ……」

ユウ達へそう言いながら、サマナ機は火器のロックを解除している。追加兵装を収められた装甲板へもティターンズカラーで塗装をされている大火力機ZZ。その重々しいガンダムタイプの機体を頼もしそうに眺めながらユウも自身の手に持つビームランチャーの様子を確かめた。

「お出ましたな……」

シロッコのジオ・メシアの頭部の複合センサーのスリットが鈍く光る。ネオ・ジオンの領宙域、その方面から一機のモビルアーマーがゆっくりと接近をしてくる。

「俺達モルモット隊を蹴散らした深紅のモビルアーマーか？」

「シヤアの物、だな……」

「ああ、シロッコ」

モビルアーマーがユウ達の機体の射程範囲へ収まる。Gマリオン
の手にある専用ランチャーを僅かに持ち上げながら、ユウはネオ・ジ
オンのシンボルを彷彿とさせるその機体へじっとその目を凝らす。

「ん……う？」

目の良いシロッコがその深紅のモビルアーマー、その中央にある物
を見つめる。

「人……う？」

ユウ達もその機体の中央へ目を向けた。そこには一人の人影があ
る。

「生身だと？」

人影は宇宙用のノーマルスーツ（モビルスーツに乗り込む時に身に
付けるパイロットスーツ）を着用していない。酸素ボンベらしき物も
見当たらない。

「久しぶりだな、ユウ・カジマ」

人影、そこからネオ・ジオンの指導者格の人物であるシャア・アズ
ナブルの声がユウ達へ響く。

「それにその十字の顔のガンダムに乗っているのはパプテマス・シ
ロッコだな？」

「どういう趣向だ？ シャア・アズナブル？」

シャアは鉄製の仮面をその顔に覆い被せるように身に付けている。
その鉄の仮面に通信器が備わっているようだ。宇宙では生身の声な
ど発せられない。

「仮面は私のトレードマークであろう？」

「ただの仮面ではあるまい」

険しい顔をしてシロッコがシャアへ問う。

「その鉄仮面から、サイコミュの反応がある」

「ニュータイプの勘か？ それとも、その機体の機能か？」

「両方だよ」

シロッコの声はひどく緊張をしている。宇宙空間を生身で浮遊を
しているシャアの姿を見れば解る話であるとユウも思った。

「ニムバス君が受けた強化人間の技術は大いに参考になったよ」

「ニュータイプを強化人間で上乘せしたか」

「だから、宇宙で泳ぐなどの芸当も出来る」

そう言いながら、モビルアーマーの前でシャアがユウ達をからかうように宙域の中で舞ってみせた。姿勢を正して一礼を試みせるシャア。

礼と同時にフルフェイスの仮面、その所々に刻まれている血管のような赤いラインが微かに発光をする。

「私こそがダイクンが標榜した、あらゆる意味での真のニュータイプだよ」

「サイボーグになった人間が何を言うか、シャア……」

シロツコの唸るような低い声を尻目に、嗤いながらシャアは赤いモビルアーマーの中央に埋め込まれるように接続されている小型モビルスーツへ乗り込む。管制ユニットを兼ねた機体であるようだ。

「前哨戦としては良いタイミングだ」

コクピットからシャアが静かに声を放つ。

「君達に歴然とした力の差と言う物を見せてやろう」

巨大なノイエ・ローテの上部センサーアイ、そして管制ユニットのジオン系モビルスーツの特徴であるモノアイから鈍い光が放たれた。

「散開だ……」

そのシロツコの眩きと同じにユウとサマナが臨戦態勢をとる。

「なんて宇宙の色だ……」

モビルアーマーからマリオンを通じて見える、ドロツとした毒々しい光にユウが顔をしかめながら呻いた。

「このノイエ・ローテの気配が気になるか？」

「血の色をした宇宙の光、いや流血と言うべきか……」

「赤い彗星だからな」

嗤ったシャアの仮面に刻まれた血管が浮き出る。

「小手調べといこうか、シロツコ」

「ああ……」

先手必勝とばかりに、ユウとシロツコの機体の手に握られている銃器からビームがノイエ・ローテへ疾った。

バア……!!

「やはりバリアー、Iフィールドがあるな」

眩きながら、ユウはGマリオンのビームランチャーの出力を上げ始める。

「ならこれで」

サマナのZZから小型のミサイルが多数発射された。ミサイル群が尾を引いてノイエ・ローテに迫っていく。

バツファ!!

そのミサイルに対して、ノイエ・ローテから幾筋もの迎撃機銃、そしてレーザーが立ち向かう。深紅の機体の周囲に幾多もの爆発が起こる。

「赤いハリネズミめ……!!」

「前戯は終わりかねえ……」

呻くサマナをからかうような声を上げながら、シヤアは血の波動を放つノイエ・ローテから幾多もの大型ファンネルを宙へ投下させた。

「ならば、こちらの手番だな!!」

ギユニア!!

シヤアの掛け声と共にファンネルがユウ達へ蝗の群れのように飛びかかる。

「バリアー付きのファンネルだな!？」

ファンネルから照射されるビームをGマリオンは機体を軽く動かしてかわす。二照射、まだユウの顔には余裕が見える。新型マリオンの感度は良好、ファンネルが放つサイコミュの波動がハッキリとユウの視界に入りこんだ。

シュ……

「ん……?」

何かが宙域を疾る。

ドウ!!

「何!？」

Gマリオンの左肩へ衝撃が走る。どこからかビームの直撃を受けたようだ。

「もう一種のファンネル!？」

機体の全天視界モニターにファンネルの姿が映る。ユウはマリオン・システムに依らない、生身のじかの目でその小型のファンネルを確認した。

「マリオンに映らなかつたぞ!？」

ユウ機の至近で再びビームが放たれる。寸前でそのビームをGMマリオンは機体を捻ってかわす。

「忍び寄って来たか……!？」

シロツコの機体にも謎のファンネルが攻撃を仕掛けてきたようだ。ジオ・メシアの大腿部の僅かな損傷をユウはその目で見た。

「どちらにしろ僕にはファンネルが見えないが!!」

サマナの乗る重装タイプガンダム「ZZ」へ向けられたファンネルのビームがその機体に備わった対ビームコートの膜を蒸発させる。

「御二人に見えないのなら答えは一つでしょう!!」

「どういう事だ!? サマナ!？」

「ステルス性のあるファンネルでしょうに!？」

「ああ……!!」

サマナに対して苦々しげに呟くユウ。対ビーム用の防御装置があるとはいえ、サマナの機体には幾筋もの破損が見受けられる。

シユギオ!!

再びサマナ機へファンネルからのビームが飛ぶ。超重装型の機体であるZZ、そしてニュータイプではないサマナではファンネルを避けるのは至難だ。大型ファンネルからのビーム照射による被害も受けているように見えた。

「ちっ!!」

シロツコは機体のすぐ真下から放たれたファンネルの光線を間一髪でジオ・メシアの小型シールドで防ぐ。その機体の腕から弾かれたビームの粒子が飛び散る。

「オールドタイプの気分が味わえるな……!!」

「味わえるだろう? パプテマス・シロツコ?」

ニュータイプであるシロツコをしても、低視認性ファンネルの気配

を認識することが出来ない。シヤアは笑いながら、いたぶるようにステルス・ファンネルをジオ・メシアへ集中させた。

「メイプークがあればな!!」

ジオ・メシアの十字複合センサーのお陰でシロッコはどうか至近へ接近をしたファンネルだけは感知できるようであった。発射されたビームの光に鋭く反応し、直撃だけは避けている。

「フィリップさん達は何をグズグズしているのやら!!」

重装であり、機敏な動きが出来ないサマナのZZが傷だらけになっている。強力な対ビームコートの効果で大型ファンネルからのビーム照射浴びてもを一撃では致命傷にはならないらしいが、それだけに傷だらけの機体が痛ましい。

「やってみるか」

「何をですか？ ユウさん？」

「マリオンを完全にスタンバイさせる」

そのユウの声を聴きつけたシロッコが深くため息をついた。

「テストもしていないのにな……」

「ジリ貧になっていいるからな」

「仕方があるまい」

嫌そうなシロッコの声を聞き流しながら、ユウは木製のカバーに覆われた赤いスイッチに手を触れる。

「M—L I O N・S Y S T E M、S T A N D B Y」

コクピット内のユウの周囲に機械的な合成音が響く。同時にGMマリオンの頭部、ジム系モビルスーツ特有のバイザー型センサーアイが赤く輝く。

「何……!?!」

その瞬間、コクピットのユウは自身の生身の目で不可思議な物を見た。

「蒼い髪をした女の天使だと……!?!」

微かに、しかし確かにユウの目の前にその女の幻影が現れる。

「くっ……!!」

次の瞬間にはその女の姿はユウの視界には無い。

「久しぶりの実戦で気が立っているだけだ」

ユウは頭を振り払い、何回か自分の歯をかち合わせて目のノイエ・ローテへ気持ちを集中させようとする。

「見える……!!」

ステルス・ファンネルが描く軌道の線を、微かに紅く光るGマリオンのバイザーが捉えた。

シユア……!!

「やはり君は危険だ、ユウ・カジマ」

ステルス・ファンネルをランチャーで撃ち落としたGマリオンを見て、シヤアが鉄仮面の中の唇を歪める。

「ニムバス君には悪いが、ここで討たせてもらう」

「前も同じ事を言いながらも、出来なかつたではないか　シヤア?」

「過信し過ぎてはいないかい?　ユウ・カジマ君?」

ノイエ・ローテの大型、小型のファンネル群の動きが鈍くなる。

「来るな……」

そう呟いたシロツコの機体にノイエ・ローテからビームの柱が放たれる。ジオ・メシアはその超高出力ビームをふわりとかわすと、そのまま機体をモビルアーマー形態へ可変させた。

「だが、こちらから攻める手段がない……!!」

手をこまねいている三機へノイエ・ローテ本体からのビームとミサイルが押し出される。巨大な機体の腕部がノイエ・ローテの機体から飛翔する。有線式のサイコミユ兵器のようだ。

ギーン……!!

「やつと来たか!!」

メルキヤリバーから発射された大型ビーム砲の光を見ながらユウが微かに咎めるような声を出した。

「すまねえな、ユウ!!」

フリリップのジエダのシールドからもミサイルがノイエ・ローテへ飛ぶ。

「どんなに群れても、このノイエ・ローテは倒せんよ!!」

支援に駆けつけたモルモット隊の攻撃は全てノイエ・ローテの「ハ

リネズミ」で叩き落とされた。フィリップか？ カツか？ 誰かが呻いた。

「厄介な奴と戦っていたもんだな!? ユウ!?」

「俺がシャアの都合なんぞ知るものか!! フィリップ!!」

有線式のクローアームがユウ機へビームを放つ。ユウにはそれが牽制であるとは判る。続けて来たファンネルからのビーム照射をスラストを駆使してGマリオンはかわした。その手荒な操縦に機体が軽い悲鳴を上げる。

「懐に入り込む、ユウ」

「やるか、シロッコ」

ユウとシロッコの機体がノイエ・ローテの両サイドから回り込むような姿勢をみせる。その二機の動きを見て、阿吽の呼吸でモルモット隊メンバーがユウ達のその考えを理解する。サマナのZZから牽制の射撃がノイエ・ローテへ奔った。

「マリオン!!」

ユウが気合の声と同時にマリオン・システムの出力を上げた。その時。

シユ…… シャルア……

「むう!?!」

シャアが驚愕の声をコクピット内に響かせる。迫ってくるGマリオンの姿を鋭く睨み付けた。

「何だ!?! ありやあ!?!」

「綺麗……!!」

Gマリオンのグレイス・コンバーター、そこから噴き出す光の羽根。蒼く、そして白く輝く翼にフィリップ達も驚きと感嘆の混じった声を出す。

「グレイス・コンバーターにこんな機能なぞ無いはずだ!!」

Gマリオンの変異に慌てた声をだしながらも、シロッコは高機動形態へ可変させたジオ・メシアをノイエ・ローテへ接近させようと試みている。

「戦いに美麗さを求めたとは!! ナンセンスな奴だ!!」

シャアの怒りの声と共に数器のファンネルがユウの機体、光の翼を生やしたGマリオンへ突撃を仕掛けた。

フオファ……!!

「何だと!？」

ノイエ・ローテのファンネルからのビームがGマリオンから舞い乱れる光の羽根にかき消される。そのままGマリオンはノイエ・ローテへ接近戦を挑もうとした。

そのGマリオンのバイザーから放つ輝きは赤い光から蒼い光へと変わっている。

「やらせん!!」

ノイエ・ローテの近接防衛システムが弾幕を張り巡らせる。過密な弾幕にユウもシロッコも一旦機体を引かせた。弾幕に対してもGマリオンの羽根は機体の前方へと展開をして防壁と化した。

「あの翼、バリアーか?」

呻くシロッコの機体の前にノイエ・ローテのビームにより舞い散った光の羽根が流れてきた。その羽根はジオ・メシアの目前で燃え尽きる。

「サイコフィールドだ」

アルフがメルキャリバーの後部座席で異変の起こったGマリオンのデータを分析しながら低い声で呟く。

「ジオンや連邦系の機体を問わず、一部のサイコミュ搭載機に実験的に使われていると聴きましたが?」

「原理はミノスフキークラフト、浮力発生器であるあの機能と同じだ」
疑問を口にするカツへ返事を返しながらも、アルフはデータの収集の手を止めない。

「サイコフィールドの場合はミノスフキークラフトの維持、格子化、そして力場化をするのに電力ではなくサイコミュ脳波を利用する」

「以前、サイコ・ウルフの改良機に乗っていたニムバスさんが使いましたね」

さすがにカツももはや新兵パイロットではない。アルフと話しながらもその目はノイエ・ローテ、そして味方機達からは離す事は無い。

「一人で発生させるサイコフィールドは消耗が激しく、酷く不安定だ」
「実戦ではこんな物には頼れないと、もっぱら評判でした」

「だが、こいつは……」

ユウの機体は翼を羽ばたかせてメルキャリバー、そしてタイタニアの前を舞った。機体から落ちた数枚の羽根がアルフ達の機体の前に光の壁を打ち立てる。

「ラプラスタイプのユウ……」

その羽根のバリアがモルモット隊をノイエ・ローテからの攻撃から守る。紅い機体から発射されたミサイルやビームがまたも蒼い羽根によって防がれた。

「こしやくな真似をしてくれる!!」

赤い血管を仮面に浮かばせながら、シャアは僅かにノイエ・ローテを後退させた。ファンネル達がノイエ・ローテの周囲に集まり、機体の周囲で旋回を始める。

「来ます!!」

シドレが乗る新鋭の偵察機「メイブーク・サマーン」のサイコミクスセンサーに多数の反応が表示された。

「少しはマシになったが……」

メイブーク・サマーンからのサイコミクスデータリンクによって、どうにかシロツコの脳裏にステルス・ファンネルの接近が感知出来るようになった。小型のファンネルを迎撃しながら、シロツコは攻める手段を模索している。

「しかし、接近をしなければどうにも出来んな……」

ノイエ・ローテの周囲を旋回しながらシロツコは軽く唇を噛む。

「くそ!!」

ジェネレーターの異常を知らせる警告音が鳴り響くコクピット内でユウが顔を歪めた。翼を生やしたユウの機体へファンネル群が密集して迫ってくる。ユウはファンネルからのビームの乱打に翻弄され、機体に滅茶苦茶な回避運動を強いさせている。同時に他の機体へもノイエ・ローテからの火線が迸った。

ジャ……!!

「所詮は単なる飾りの羽根のようだな!!」

大出力のファンネルからのビームがGマリオンの羽根を溶解させた。推力が低下したGマリオンはノイエ・ローテから一旦距離をおく。

「どうシヤアを打ち倒すか、シロツコは解るか?」

ユウの機体には余力が無い。マリオン最大稼働時に起きたコンバーターからの謎の現象が機体に大きな負荷をかけてしまっているようだ。

「もはや、弾幕をやってみるしかない」

メイブーク・サマーンからのサイコミュ・データリンクで送られたノイエ・ローテの機体分析データに一瞬だけ目をやってから、シロツコはコントロールバーを強く握る。

「相手はハリネズミの守りだぞ?」

「そのハリ以上の攻撃をぶつける」

「数で押すか……」

ユウは眉間にシワを寄せながらも、モルモット隊へ作戦を伝えた。各機体が静かに身構える。メルキャリバーの中央部にあるメガビームランチャーから光が漏れだす。

「フル・オーブン!!」

サマナのZZから凄まじい火器の嵐がノイエ・ローテへ飛ぶ。フィリップとシドレの機体を乗せている運搬機タクテカルウェイバーからもミサイルランチャーの砲門が開く。

「サラ!!」

タイタニアを乗せた運搬機から放たれた強力なビームが宇宙空間を裂く、同時にカッツはミサイルランチャーを放ちながらサラへ攻撃を促す。

「ファンネル!!」

メルキャリバーの機体下部から発射されたミサイルを追うようにタイタニアの背中からファンネルが漆黒の宙域を貫いた。

「やると思ったよ、飽和攻撃は!!」

ノイエ・ローテからシヤアの笑い声と防衛システムが、そして紅き

血の光が放射される。ZZの猛火線が次々と防がれてゆく。メルキヤリバーの高出力ビームでもノイエ・ローテのフィールドが破れない。

「よくも対応が出来る、仮面の道化の癖に!!」

「対応ではない!!」

タクテカルウェイバー、そしてフリリップ機のミサイルを迎撃したシャアがユウへ怒鳴った。

「脊髄反射だよ!!」

「強化人間で手に入れた物か!!」

「脊髄を接続させれば、頭で考えるまでもなく無意識で機体が動かせる!!」

「オジギソウのような機能を!!」

ユウはシャアへ怒鳴り返しながらも接近する機会を伺っている。カツのミサイル、そしてサラのファンネルは全くノイエ・ローテへ接近が出来ない。恐るべき精度でシャアはモルモット隊の火器を撃ち落とす。

「犠牲を覚悟で撤退を考えるか……!?!」

「シャアがそこまで甘い男であるはずが無かろう!!」

脂汗を流しながら呻くユウへシロツコが苛立たしげに答える。

「射精を試してみる!!」

「品を良くして言え、サラ!!」

「言葉の尻にこだわっている場合!?!」

カツへ怒鳴り返しながら、サラが乗るタイタニアの股間からファンネル・ブースターが発射された。

「堅いな!! その去勢の物は!!」

ファンネル・ブースターを覆う装甲はノイエ・ローテの火線でデコボコになりながらも、その機体が展開するビーム・バリアーの内側へ入り込む。

「バグア!!」

「何だ?!?!」

ノイエ・ローテのフィールドの内側へ入り込んだファンネル・

ブースターから多数のファンネルが放出される。ファンネルを出し尽くしたブースターポットが爆発をすると同時に強力なサイコミクのウェーブが広がる。

高い鈴の音のような音がユウやシロッコ達の耳を打った。

「脳波が乱れる!!」

シヤアが鉄の仮面に覆われた頭部を両の手で抑える。仮面に刻まれた赤いラインが脈打つように激しく点滅をする。

「試作型のサイコジャマーが上手くいったか!!」

シヤアのファンネルがでたらめな動きをし出したのを見ながら、シロッコが喝采を上げた。

「よくやった! サラ!!」

「恥じらいを捨てた甲斐がありました!! シロッコ様!!」

サラを褒めながらも、シロッコはジオ・メシアの力を振り絞り、ノイエ・ローテへ急接近をする。シヤアの機体は内側へ入り込まれたファンネルによって装甲が蝕まれている。

「今しかない!!」

ユウのコンバーターから再び光の羽根が舞い散る。Gマリオンの背中からビームサーベルが取り出され、その機体の手に強く握られた。

「マリオン!!」

凄まじい速度でノイエ・ローテに接近をするGマリオン。ブースターからのファンネルで幾つかの火器が破損したせいか、例の「ハリネズミ」は襲ってこない。サイコジャマーから発生したウェーブの効果もあるのだろう。

舞う羽根の輝きと同調するかのようにはサーベル基部からの長大なビームの刃が白く光る。

「私も負けてはられん!!」

ユウのサーベルがノイエ・ローテの右肩へ深く食い込み、腕を切断したのをその目で確かめながら、シロッコもジオ・メシアのビームサーベルをノイエ・ローテの背部ファンネル・コンテナへ突き刺す。

「忌々しい地球の寄生虫どもが!! 俺に!!」

シヤアの頭を疾る頭痛はまだ治まらない。ポケットからチューブに入った液状薬品を仮面の口の部分へ当てつけながら、残っている左の有線クローアームでユウとシロツコの機体を振り払おうとする。

「ちっ!!」

ノイエ・ローテの防衛システムが再起動を始めた。慌ててユウ達はノイエ・ローテから機体を離れさせた。

「まあいい……」

援護としてサラの機体から再度放たれたファンネルをレーザーで撃ち落としながらシヤアは自身の呼吸を落ち着かせる。

「サブのパイロットがいない半分の性能であるとは言え、このノイエ・ローテを傷を負わせた事は褒めてやる」

ノイエ・ローテのブースター、及びサブ・ブースターに光が宿り始めた。

「また逃げるのか!? シヤア!?!」

「追うな、ユウ!!」

「だが、今のシヤアは危険過ぎる!!」

「現状の我々で勝てる相手ではない!!」

「クッ!!」

シロツコの言葉にユウはGマリオンをノイエ・ローテから距離をおかせる。コンバーターから残り火のような羽根がこぼれ落ちる。

「良い開戦の狼煙ではあっただろうな……」

そう言いながら、シヤアはノイエ・ローテの背中を悠々として見せつけた。

「今度はこの機体の量産機を引き連れて来てやる」

「ハツタリだよ……!!」

「どうかな? 少年よ……」

震える声で言い放ったカツにシヤアが仮面の下で薄笑いを浮かべる。冷笑を含んだシヤアの言葉にカツは押し黙る。

「では、な……」

ブースターから閃光を放ちながら飛び去っていく紅いモビルアーマーをユウ達は黙ったま見つめていた。誰かが深くため息をつく

声が聴こえた。

「ネオ・ジオンの力か……」

機体コンソールの上を指でコツコツと叩きながらアルフが呻くように呟く。

「あの機体だけで、ティターンズの一師団は相手に出来るな」

「勝算を見つけなければ」

アルフの言葉にシロツコが同調するように頷きながら低く声を出す。

「一つある」

「それは何だ？ ユウ？」

Gマリオンからはすでに光は失われている。サブブースターを使いながらユウは機体をジオ・メシアの近くに寄せる。

「アムロ・レイ」

「あの男でも、現行のガンダムタイプではノイエ・ローテには勝てない」

「過去のガンダムならばどうだ？」

「意味はわからんが……」

シロツコは首を傾げながらジオ・メシアを後退させる。その機体のグレイス・コンバーターからも光は出ていない。

ユウ機とシロツコ機、二人のグレイス搭載機が周囲のミノスフキー粒子を吸いきってしまったようだ。ミノスフキー濃度を測る計器の針が下がりにきっている。

「何か策があるようだな」

「シヤア」

女の声が鈴の音色と共にシヤアの耳を打つ。

「何だい？ ララア？」

「私はあなたの所有物であって？」

「そうさ」

シヤアのその声に鈴の音が哀しげに鳴った。

「私が君を生涯をかけて守るさ」

仮面の奥底でそう呟いたシヤアは母艦であるネオ・ジオンの旗艦「グワダン」へ赤いモビルアーマーを接近させた。

「ハマーン」

「はい、ミネバ様」

「シヤアを亡き者にする計画は進んでおるか？」

「どうにも踏み切れません」

「そうだ、そうだな……」

ミネバはそう言いながら、隣の女に頷いてみせる。

「説得を続けてくれ」

「私には自信がありません」

「フム……」

グワダンのメインブリッジに立つ三人の女達は表情を押し殺したままブリッジの窓、その外に広がる漆黒の宇宙へ浮かぶ深紅の切り花、シヤア・アズナブルの専用機であるジオンの妖花「ノイエ・ローテ」の姿を眺め続けていた。

第44話 未来を創る老人達（前編）

タバコの煙が立ちのぼる豪華な迎賓用の居室で四人の男が麻雀卓を囲んでいる。

「近づいてくるアクシズを眺めながらやる麻雀というのもオツなものだな」

ティターンズの宇宙拠点「ゼダンの門」。その迎賓室から遠目に映るアクシズを眺めながら、エウーゴ代表であるブレックス・フォーラは笑いながら麻雀の役を上げた。

「戯けたことを抜かすな、ブレックス……」

ティターンズの代表であるジャミトフ・ハイマンが苦虫を噛み潰したような顔をして、ブレックス准将へ点棒を投げて渡す。

「我々がゼダンへ来るのも、これが最後になるかもしれないな、メラニー会長」

「全くですよ、ゴップ大將殿……」

地球連邦軍の最高責任者であるゴップ大將と地球圏の経済を握る複合大企業「アナハイム」の会長であるメラニーの二人がその太鼓腹を揺さぶりながら笑い合う。

「戦線は？ ジャミトフ君……？」

「ティターンズと借り受けた連邦の軍、それだけでは勝つのは難しいですな」

ジャミトフが絶賛人気中である健康飲料「ムラサメ・ゼロ」を飲みながらゴップへ呻くように呟く。

「押されているのか？」

コーヒーを口につけたブレックスが牌を混ぜながらジャミトフに視線を向けた。

「シロッコとユウ君が率いる奴等とシヤアの小競り合い、それから数回の戦闘があったが、戦線のラインがゼダンへ迫ってきている」

「連敗と言うことか？ ジャミトフ殿？」

「ネオ・ジオンの士気が高い」

「そうか……」

ジャミトフの淡々とした言葉に対してメラニー会長はそう呟きながら、サイドテーブルに置いてあるサンドイッチを口に運ぶ。

「どうも、シャアが乱心をしたらしい」

「乱心だと？ ジャミトフ君……？」

そのジャミトフの言葉にゴツプの眉が軽く持ち上がった。

「ネオ・ジオンから、内密に手紙が来ましたよ」

ジャミトフが牌から手を離して、ゴツプへ窓から見えるアクシズに指を振ってみせる。

「ハマーンも苦勞をしているようだな」

独り言のようにそう呟きながら、メラニーは牌を揃え始めた。

「その乱心が、シャアの新しい一種のカリスマともなってもいますな……」

「シャアに妙な心酔をする者も多いか」

「乱心をした相手とも商売商売を致す事は」

ノン・アルコールだが軽く酔いが回るといふ得体の知れない成分で出来ている人体強化ドリンク「ムラサメ・ゼロ」がジャミトフの喉を焼く。

「リスクが高いでありましょうな？ メラニー殿？」

「はてはて……」

ジャミトフの皮肉にメラニーはとぼけた声を出しながらサンドイッチをコーヒード喉へ流し通した。

「正面衝突では疲弊をするばかりか……」

一旦麻雀牌から手を離して、ブレックスが唸りながら両の腕を組む。

「それだ、ブレックス」

「うん？」

そのジャミトフの言葉にブレックスがあごへ手をやりながら首を傾げる。

「エウーゴに遊軍的な役目をして欲しい」

牌を摘まみながらジャミトフが単刀直入にブレックスへと言葉を告げた。

「私は最初からその案を伝えるためにゼダンへ来たよ、ジャミトフ」
「なら、話はやいな」

ニヤリと笑いながら、ジャミトフが牌を投げ出す。

「ジャミトフ、それはロン」

静かに宣言をしながら、ブレックスが役を公開する。

「さつきから全くアガツてないぞ、ジャミトフ？」

点棒を卓の皆から受け取りながら、ブレックスがジャミトフをチラリと見た。

「接待だからな、接待……」

「お主の才覚は一点集中型であるからなあ」

饅頭を手に取りながら、ゴツプが薄く笑う。

「不器用な面がある」

「悪うございましたね、ゴツプ殿……」

その言葉にジャミトフが渋い顔をしながら、タバコを取り出そうとする。

「新たな組織、そうテイターズのような立ち上げる事、それ以外にはお前には才能がない」

「俺のテイターズに負けた分際でもよくも言ってくれたな、ブレックス……」

タバコに火を付けながら、ジャミトフが少しムツとした顔でブレックスを睨みつけた。

「エウーゴとテイターズは引き分けだろう？」

「いや、俺の勝ちだよ、ブレックス」

「ハイスクールの時の柔道の試合でも、お前はそう言い張るのが得意だったなあ」

「負け惜しみか!? ブレックス!?」

「事実だよ!! ジャミトフ!!」

「万年補欠であったお前には言われたくないわ!!」

「何だ?!」

ガタツ!!

ジャミトフとブレックスがお互いを指を突きつけながら、椅子を蹴

飛ばすように立ち上がる。卓の牌が床へ転がり落ちる。

「まあまあ、二人とも大人げない……」

笑いながらゴツプが両手を下へ振りながら二人を宥める。不承不承といった面持ちで二人の武装組織のトップは席に座りなおす。

「しかしまあ……」

ゴツプの脇に山積みになっっている饅頭を物欲しそうに眺めながら、メラニーが首を一捻りしながら呟く。

「エウーゴこそ、これからどうするかだな……」

ぼんやりと漆黒の宇宙へ浮かぶアクシズを眺めながらのメラニーのそのポツリとした呟きにその場にいる全員が押し黙る。

「反テイターンズ、反地球連邦という旗印が無くなりかけてますからな」

ブレックスがジャミトフからタバコを一本貰い、口へくわえながらメラニーのその言葉に深く頷いた。

「テイターンズこそ、今はその名が必要だ」

軽く目を瞑りながら、ジャミトフが少し大きな声を出してその他の三人へ言い放つ。

「ジオン残党から地球を守るであるな、ジャミトフ君」

「まさに理念の通りに行動をしてはいる」

ムシヤムシヤと饅頭を口へほおりこんでいるゴツプの言葉に対して、ジャミトフが張りのある声を出した。

「名前を変えてみてはどうかね？ ブレックス君？」

「名前？」

山積みの饅頭を切り崩しているゴツプの言葉にブレックスが怪訝そうな声を出す。

「組織の名称を変えれば、内実も以外と変わるもんだよ」

「うちのアナハイムはそれで運が向いてきた事がある」

メラニーもゴツプの言葉に同調をした。

「名前か……」

牌を手でクルクルと回しながらブレックスが低く唸る。

「何かお前の所にエースパイロットでもないなかったか？ ブレックス

？」

「人名にあやかるか？ ジャミトフよ？」

「軍艦などのように、偉人の名を拝借してはと思ったが……」

「設立して数年もない組織だ」

軽く息を吐きながら、ブレックスが牌を指で叩く。

「歴史なんぞ無い」

「アムロ・レイの再来と言われた少年がいたそうだがね？」

「人格面で未熟過ぎる少年ですよ、ゴツプ殿」

「だめか？ だめであるか？」

「まだ、アムロ・レイにあやかった方が良い」

そう言ったブレックスが何かを思い付いたように自分の膝を打つ。

「アムロ・レイか」

「アイディアが浮かんだか？ ブレックス殿？」

メラニーの言葉にブレックスが深く頷いた。

「うちに同人とやらの世界で名を馳せている女パイロットがいてな」

「私の娘が読んでおるみたいだよ、全く……」

ゴツプのその言葉に卓を囲んでいる男達が苦笑う。

「彼女の描く、例のアムロ・レイとベルトーチカとかいう女を取り扱った下劣で品性の無い本が一部でブームになっているんだ」

「女の名前を繋げるかよ……？」

「ゲン担ぎになると思わんか？」

少しうろんげに声を出すジャミトフにブレックスがニカツと笑った。

「レコア・ロンド、ベルトーチカ、ベルトーチカね……」

ゴツプはどうやら同人誌を書いているエウーゴの女パイロットとやらの名前を知っているらしい。

「レコア・ロンドとベル……」

メラニーが唇を舐めながらブツブツと呟く。

「ロンド・ベル」

そうやって、ブレックスは手に持つタバコを灰皿へポンと叩きつけた。

「良いね、良いね」

腹と椅子を揺すりながらゴツプが大きく頷く。

「悪くない」

メラニーも口の端を歪めながら、ブレックスの前に意味もなく麻雀の点棒をばらまいてやる。

「ハア……」

浮かれる三人の男達とは対照的にジャミトフが深いため息をその口から吐く。

「少しは俺のテイターズ、地球を支える巨人というネーミングセンスを見習えよ……」

「クール・フェデレイション、連邦の魅力だよ、ジャミトフ君」

「意味が解りませんよ……」

頭を抱えるジャミトフにゴツプが饅頭山脈からその一つを渡してくれる。

「お主は頭が固すぎるよ、ジャミトフ君……」

「すみませんね、ゴツプ殿……」

ふて腐れた顔で饅頭を頬張りながら、ジャミトフがブスツとした顔でゴツプへそう答えた。

「お前は昔からそうだ、ジャミトフ」

二本目のタバコを吸いながら、ブレックスがからかうようにジャミトフの顔を見る。

「またイチャモンか？ ブレックス？」

「頭が固いので機転がきかん」

「ズル賢いお前よりは、まともだと思っておるぞ」

「だから、テストの文章問題に弱かったのだ」

「カンニングの常習であるお前には言われたく無いわ!!」

「戦いは奇道だろう!？」

「その奇道に溺れてエウーゴは俺のテイターズに負けたのでないか!？」

「策を思いつかずに物資と資金でテイターズを維持していたお前がエウーゴのトップになったら、三日で崩壊だ!!」

「このムツツリスケベが!!」

「何だど!?!」

ガタツ!!

再び二人が椅子から跳ね上がる。

「まあまあ……」

口に餡をつけたままのゴツプ、そしてメラニーが揃って手を振り二人を宥め始めた。

第45話 未来を創る老人達（後編）

「戦後の事、考えたくはないな」

麻雀卓を下げさせたテーブルに手を付きながら、ゴツプが脇の台座から最中を口へ運ぶ。

「政治が出来そうな若い者がいない」

「テイターンズもエウーゴも所詮は武力組織ですからな」

ムラサメ・コーヒーを飲みながらジャミトフも微かに顔を暗くする。

「うちのナンバーツのバスクは政治が出来る男ではない」

自分の額を叩きながら深くため息をつくジャミトフ。

「私怨が走りすぎるとはいえ、熱心に仕事をしてくれる男ではありませんが」

「その穴を補う為に、あのパプテマス・シロッコという若造を呼び出したのではなかったのか？ ジャミトフよ？」

「だめだ、だめだよ、あやつは」

ライターを取り出しつつ、二人の会話に口を挟みこんできたブレックスに対して、ジャミトフは思い切り眉間に皺をよせる。

「器が小さすぎる」

「万能の天才であるという触れ込みだろうか？」

「他人を見下している」と広言するに等しい立ち振舞いをする男なんぞ、使える物かよ」

「まあ、確かに……」

年季の入ったブランド・ライターの蓋ををカチカチと弄びながら、ジャミトフの言葉に対してブレックスは口の端を歪めるような笑みを浮かべながら同意をした。

「木星からババを引いてしまったよ」

「最近、少しは他人の意見に耳を貸すようになったとは聞くけどねえ、ジャミトフ君」

ゴツプが口の周りの餛を拭きながら、心持ちにジャミトフを思いやるような口調で囁く。

「性の根が変わっていませんよ」

「残念だな」

「期待をしていただけに、ですよ」

そうゴツプへ胸の息を吐くように言ったせいか、ジャミトフの眉間の皺が微かに緩んだ。

「全く、レビルめ」

ゴツプは最中の大山脈からポイポイと口へ最中を流し込みながら愚痴を言う。

「とつとと隠居なんぞしおって」

「ソーラ・レイ、コロニーレーザー砲の光で目が効かなくなっちゃいましたので、仕方がないのでは？」

「バスク君も条件は同じだ」

「フフ……」

その言葉にはジャミトフも苦笑をするしかない。

「クワトロ、シャア・アズナブルには相当に期待をしていたのだが」

タバコをくゆらせているブレックスもまたため息についてアクシズの方を眺める。

「ご覧の有り様だよ」

カステラを上品に切り分けているメラニーが少し皮肉げにブレックスの顔を見やる。そのメラニーへブレックスが肩を竦めてみせた。

「アムロ・レイを持ち上げるのには、タイミングを完全に失ってしまいましたな」

「危険すぎるよ……」

口へカステラを運ぶメラニーの言葉に顔をしかめながらゴツプはコップの水に口をつける。

「一年戦争時に、戦後計画は立てたはずであつたんだがなあ」

「ユウ・カジマ君ですな？」

ゴツプのぼやきにジャミトフの顔に真剣味が走った。

「せっかく、あのアムロ・レイにシミュレーションで勝たせてやったのにだよ、ジャミトフ君」

「名家であるカジマの姓まで高値で買い取り、あてがってやりました

とな？」

「どこの馬の骨ともしれないミュータントであるアムロ・レイ、彼にとって代わる連邦のスーパーヒーロー、ユウ・カジマ」

テレビの宣伝のようなイントネーションでその言葉を吐くゴツプへ迎客室の男達の目に笑いの色が浮かぶ。

「看板風情が、自己主張をね……」

「君が呼び寄せたシロツコ君と同じように、あやつも役に立たなくなった、あてが外れた」

ジャミトフへそうぼやきながら、ゴツプは脇の最中を食い荒らしている。

「そのまま、アムロ・レイに勝ったという評判だけをぶら下げた凡庸なパイロットであれば良いお飾りに出来た物を」

「妙な物に巻き込まれてしまいましたから……」

苦笑いをしながら、ジャミトフはムラサメ研究所から発売をされたコーヒーが入ったカップへ手を回す。

「そして、彼自身が異常なスピードでパイロットの腕を上げたのがマズイようでしたな、ゴツプ殿」

「今では、アムロ・レイと同じ位の危険性があるよ……」

最中を食べる手を止め、ゴツプはジャミトフに笑いかける。

「部隊長としても優れた、良い軍人ではありませんがね」

「エウーゴ、そしてアナハイムにも噂が伝わっている」

「ならば、コマージュシャルキャラとして彼をアナハイムへ売っても良いですぞ？　メラニー殿？」

ユウ大佐を褒めたジャミトフの言葉にカステラヘフオークを突き立てながらメラニー会長が話へ口を挟む。

「いや、私は絶対に使わんよ」

「理由は？　メラニー殿？」

「無自覚に自己主張をしてしまう、自分の事がまるつきり解っていない男なぞ」

「お嫌いですかね？」

「天然で埒を越えてしまう、危なすぎて社員にもしたくないよ、ジャミ

トフ殿」

「優秀で誠実な男です、彼は」

「従順でありながらも、生まれもった自身の気質で勝手にしてしまう男、歯車としては不要だ」

そのいかにもな企業のトップとしてのメラニーの台詞に他の三人は苦笑を禁じ得ない。

「若手の政治家としてなら、うちのブライト・ノア君なんかはどうだ？
皆方？」

「小粒過ぎるのではないかよ、ブレックス……」
眉を潜めながら、ジャミトフがブレックスを軽く睨み付ける。

「なら、他に代案はあるか？ ジャミトフ？」

「うちのテイターンズの若い者にそれとなく政治学を植え付ければ、
あるいは……」

「皮算用だ、お前は昔からそうだ」

「人が苛立っているときに、さらに油を注ぐのが得意だったな、ブレックス」

「テイターンズは皮算用ではなかったのか？」

「エウーゴもそうだろう!？」

「計算はしている!!」

「シヤアにネオ・ジオンへ逃げられただろうに!？」

「お前も子飼いのニムバスとか言う優秀な強化人間をネオ・ジオンへ
差し出す羽目になったな!!」

ガタツ!!

「いい加減にしませんか!! 御二人とも!!」

バフツ!!

メラニーがカステラの切れ端を二人に投げつける。

「フン……」

エウーゴとテイターンズの代表は不機嫌そうに投げつけられたカステラを口の中へ入れた。

「娘さんがブレックス君の元で世話になっているのだ……」

「娘とは縁を切っておりますよ」

二人を取り成すようにそう言ったゴツプへジャミトフがコーヒーを口へ運びながら軽く呻く。

「縁は大事にした方が良い」

「ゴツプ大長老がそう言われると」

少しバツが悪くなつたのか、タバコを一本ジャミトフへ渡してやりながらブレックスが口を歪めて言う。

「蘊蓄がありますな」

「あやつの様子はどうか？ ブレックス？」

タバコに火を付けながら、ジャミトフが微かに真剣な目でブレックスの顔を見る。

「お前の娘、ブルーだな？」

「他に何がある」

「良いパイロットだ」

「そうか」

「良い尻をしている」

「おい……」

そのブレックスの言葉にジャミトフの顔が険しくなった。

「セクハラのしがいがある」

「やってみろ、ブレックス」

「良いのか？」

「お前が宇宙を漂う無縁陀仏になる」

「フフ……」

笑いながらブレックスは缶コーヒーの蓋を開ける。

「なぜ、家族との縁など切つたのだ？ ジャミトフ君」

「テイターンズが世界を支配したときに、私一人に全ての富を集める為ですよ」

「不器用な君の嘘はつまらんな、んん？」

「すみませんねえ、ゴツプ殿」

一つ鼻を鳴らしながらゴツプへ軽く眉をしかめてみせたジャミトフはカップに残っていたコーヒーを飲み干す。

「テイターンズがコケた時に血族へ余波が及ばない為でだろうな

……」

「さすがはメラニー会長」

わざとらしくジャミトフが肩を竦めながら、感心をしたような声を出してみせる。

「だてに二股の達人ではない」

「だがなあ、ジャミトフ殿」

ジャミトフの嫌みを無視して、メラニーが言葉を続けた。

「縁とはそうそう一刀両断に切れるもんでは無い」

「娘には娘の人生があります」

チラリとブレックスへ目を向けながら、ジャミトフが指の腹で唇を擦りながら言う。

「私が関与すべき事でない」

「なら、私が手を出して愛人にしても良いか？ ジャミトフ？」

「だから、お前は どうしていつも人の神経を……」

「だとしたら、娘に見合いの世話くらいしてやれよ、ジャミトフ……」

「どうでも良い話だ」

「三十路なのだろう？ 売れ残るかもしれんぞ？」

「さすがにお前の苛立たせにも耐性が出来てきたぞ、俺は」

眉間に皺を寄せながら、ジャミトフがふて腐れた声をブレックスへ向けて出す。

「ユウ・カジマ君は相手にどうかね……？」

「私と娘に気を使ってきているので？ ゴツプ殿？」

「プライベートでも付き合があると聞く」

「一時期、一緒の部隊にいただけの関係でしょうに。彼と娘は」

「どうかねえ……？」

「若者を苛めるのは止めてもらいたいよ、ゴツプ殿……」

その二人の会話をニヤニヤとした笑みを浮かべながら、ブレックスとメラニーが聞き入っていた。

「若者か……」

ブレックスのその呟きにジャミトフとメラニーがゴツプへ何気なく視線を向けた。

「何歳になったかな、あなたは？」

「はて……」

メラニーの問いへ答えながら、ゴツプが一応健康に気を使っているつもりなのかダイエツト茶を口へ運び入れる。

「もうすぐ百六十歳にはなろうか」

「元年のラプラス事件、その時の傷は癒えましたか？」

「皮肉を言う……」

最中のチョコモランマを踏破しつつ、茶を口へ流し入れるゴツプはメラニーに対してウインクを試みさせた。

「最原初のラプラスタイプ、とでも言いましうかね？」

「ろくでもないネーミングだと思ったよ、ブレックス君」

「格好の良い言葉ではありませんか？」

「その言葉をダイクンめが世界に流すと忍ばせたスパイから聞いた時、開いた口が塞がらなかったよ、私は……」

少し禿げ上がった頭部を撫でながら、ゴツプが感心とも苦笑いともとれない笑みをその顔へ出す。

「ラプラスもニュータイプも、旧世代にもよくあった、突然変異で発生する単なるミュータントだよ」

「単なる自然現象ですか」

「私を含めたミュータントが人類社会に有用であるならば持ち上げ、そうでないのであれば抹殺すればよい」

「手厳しい……」

ゴツプの言葉にブレックスがタバコを灰皿へ置きながら苦笑をした。

「で、なければ腐った大木、地球連邦を維持できん」

「シヤアだかネオ・ジオンはその腐った大木を切り倒そうとしていますが？」

「腐っても大木、人類の品性社会を支える基盤だ」
「フム……」

ブレックスの手元に置かれた灰皿から立ち上っていたタバコの煙が消える。

「切り倒したら、この地球圏は覇権争いに終止する獣達の社会に墜ちる」

「大黒柱、ですなあ……」

「腐ってはいるが」

最中を半分に割りながら、ゴツプがニコリと笑みを浮かべた。

「支え甲斐がある物だ」

「だからと言って、地球の中に居座って土台を食い潰す必要はないでしょう?」

「先程言ったはずだ」

真剣な表情を面に出し、鋭い口調でゴツプへその言葉を突きつけるジャミトフに対して、ゴツプは半分にした最中を渡してやる。

「まともに地球を制御できる人材がない」

「だから、ジャミトフ殿は強行策に出たのであろうなあ……」

そのゴツプとメラニーの言葉を耳へ入れながら、ジャミトフはあたかも口の中にある最中を言葉の代わりのようにゆっくりと噛み締めた。

「昔から理想主義。それが行きすぎて強行をやりすぎるのだよ、お前は……」

火の消えたタバコをトントンと灰皿へ叩きながら、ブレックスは皮肉げな目でジャミトフを見つめる。

「文句を言うなら代案を出さないか、ブレックス」

「何も考えずに武装組織を立ち上げるから……」

「お前の方が何も考えて……!!」

ニコ……!!

メラニーがカステラ手裏剣を構え始めたのを見て、二人はわざわざらしく咳払いをして口を閉ざす。

「もう一人の最原初のラプラスタイプは元気ですか?」

「元気、元気だよ」

メラニーの言葉にゴツプが喉の辺りをさすりながら微笑む。

「なあ、ジャミトフ君？」

「ええ……」

少し緩んだ感じの笑みを浮かべながら、ジャミトフはポケットからタバコを取り出した。

「彼はどうやら、ダイクンめが発掘したラプラスタイプの連中と縁があるようでしてね」

「良いポジションにいるか」

「もともと、あなた方はお二人とも長生きという以外に取り柄がないラプラスタイプとやらですからな」

「悪い、悪いな……」

ジャミトフが少し嫌みな口調でそう言ったのに対しても、ゴツプは別に気を悪くした様子は見せずにその太鼓腹をゆすりながら笑う。

「あやつの場合、百六十歳でも百七十歳でも、どれほどに老いぼれても若い青年の姿のままというのは羨ましい」

「それならば中の身が老獺をやれるスパイとしてうってつけですな、ゴツプ殿？」

「現場の内部査察の役目に最適任だよ」

「いつでも現役でいられるというのは、私からしてみれば少し羨ましいぞ」

まんざら冗談ではない気持ちがかもったメラニーの感想に男達が苦笑いをした。

「まっ……」

ゴツプが最中を手に取り、口への運搬を再開し始める。

「どうとでもなるさ」

「ですな……」

「今までも、そうした危機は何度も何度も訪れてきた」

そのゴツプの真意がかもった言葉に、四人の男達が真剣な顔で頷く。

「しかし、それを乗り越えたいと思うのであれば」

甘い物を飲み物とするゴツプの手をメラニーが軽く押さえる。

「ご摂生しなされ」

「イヤだ、食べたい」

「その腹の膨れは危険なレベルにまで達してますぞ」

「私は糖尿病では死なんよ」

「長生きなだけで、病気に対するバリアーがあるわけではないでしょう?」

「メラニー殿こそ、そのアゴと腹の肉は危険ですありませんまいか?」

「仕事のストレスで食べ過ぎるのです、のんびり屋のあなたとは違います!!」

「私とてストレスはある!!」

「人任せの政務でしように!!」

「何ですと!?! 年長者に対して!?!」

「老害、宇宙世紀が始まる前からの大老害ですな!!」

ガブヨオン!!

椅子から二人の肉が弾け跳ぶ。

「まあまあ、大人げない……」

ジャミトフとブレックスの二人がゴツプとメラニーの巨体を両手を振って宥めようとした。

第46話 空の休暇

「ミノスフキークラフト、万々歳だな」

改修されたモビルスーツ運用型巡洋艦「ストウラートII」、その下方銃座ブロックの窓から広がるモンゴルの大平原を見渡しながら、ユウが感嘆の声を上げる。

「ユウの大佐昇任のご褒美かもな」

「ミリコーゼフ艦長の手回しがよかつたんだろ？」

「底が知れない人だよ」

隣でハンバーガーを口に入れていているフィリップが顔をしかめながら、脇のタラップから覗けるストウラートIIの艦内へ視線を向けた。

「隠居したレビル將軍の手足となっているって噂があるぜ、あのミリコーゼフの御仁は」

「まさか、俺達がレビル將軍、いや元か？」

「どっちでもいいじゃねえかよ」

「まあ、そうだ」

一つ咳払いをしてから、ユウは再び眼下に広がる大平原へ視線を向ける。

「二年戦争の真の英雄に会う事になるなんてな」

「そのレビル將軍に会うように、ゴツプってお偉方に頼まれたんだつたよなあ？」

「報告書の束を俺達へ預けた將軍様だよ、フィリップ」

「それをレビルさんへ渡すという任務もあつたがね」

モンゴルの平原には遊牧民の物と思わしきゲル（テント式住居）の姿もユウ達の視線に入る。

「良い生活をしてやがったな、レビル將軍さんはよ……」

「若い女を囲いすぎだ」

「でっも、まあ……」

大平原がユウ達から離れていく。ストウラートIIの高度が上がり始めているようだ。

「アルプスの別荘で隠居生活を楽しんでいながらも、目は宇宙へ光らせているみたいだねえ」

「渡した書類、ジャミトフの連名もしてあったよ」

「現役引退とは名ばかりかな、ユウ？」

「かもな」

前方へ雨雲が広がっている。艦の高度を上げたのはその雲の上にとストウラートIIを移動させるつもりなのだろう。

地球の気圏内では艦への気づかいがある。宇宙空間での艦の保守とは少し違う、大切ないたわりの技術である。

「レビル將軍はスパイの扱いに慣れているという噂は昔から随分あったぜ」

「そうか？ フィリップ？」

「昔の一年戦争、その時の拠点奪回の大作戦だったオデッサの時にもな」

厚い雨雲の中に稲妻だと思われる光がユウ達の目の先に見えた。

「宇宙から降りたジオンの増援到達の情報がすぐに將軍の耳へ入ったそうだが」

「じゃあやはり、裏方でスパイの元締めをやっているか？」

下部銃座の付近に黒い雲がまとわりつく。艦が雲の内側へ入り込んだようである。

「スパイはどこにでもいますよ、フィリップさん」

「言うねえ、サマナちゃん？」

ガン・ルームのタラップの上からサマナが声をかけてきた。休憩時間なのだろう。

「ちゃん付けはよして下さいと……」

「へいへい……」

フィリップがそうサマナへ笑いかけながら、下部銃座からタラップを登る。

「ちよつとトイレ」

「おう」

艦へ登るフィリップと入れ違いにサマナが降りて来た。

「モルモット隊、復活か？」

「ブルーさんがいませんけどね」

「一年戦争時、その頃の旧モルモット隊は復活だ」

「ティターンズからの出戻りになります」

そう言いながら、サマナが軽く頭を搔く。

「エリート組織からの格下げに悔しくないか？ サマナ？」

「全然」

「事実上の二階級降格だ」

「古い話ですよ」

ストウラートⅡの周囲にまとわりついている黒い雨雲の中、微かに稲妻が疾る。

「ティターンズが特権階級だというのは」

「そうか？」

「ティターンズ内部が良い方に変革をしていますよ」

「そう、かねえ？」

「見えませんか？」

「俺たち連邦の兵が気安く話しても、嫌な顔をしなくなったとは思わが……」

「でしよう？ それが証明です」

「そういうもんか……」

ボウ……!!

ストウラートⅡが雨雲を突き抜ける、一気に清冽な青空がユウ達の目の前に広がった。

「降格ならば」

「うん？」

「ユウさんも同じでしょう？」

「大佐昇任はしたぞ？」

「艦内での立場ですよ」

天から降り注ぐ太陽の眩しさに目を細めながら、サマナが対空機銃のコンソールを軽く叩く。

「サラさんがモビルスーツ隊長、フィリップさんが副艦長兼モビル

スーツ隊の副長」

「良い配置転換だよ、サマナ」

そう言いながら、ユウはどこまでも広がる、光輝く青い大気の海を見つめる。

「俺を宙ぶらりんにして、れっきとした遊軍にしてくれた」

「艦長の案配ですか」

「部隊が俺に頼り過ぎている、そうミリコーゼフ艦長は言ってくれたよ」

「よく見ている艦長だ……」

「んうん？」

ユウが首を傾げるを二乗したかのように思いっきり自分の肩スレスレへ顔を密着させた。

「どうしました、ユウさん？」

「あ、いや」

ストウラートIIが雷雲の上を渡り、再び高度を下降させていく。遙か遠くにはチャイナ地方、その地方の古びた家屋と畑の姿がユウ達の視界に映る。

「首のもげたゾンビのような姿勢で人の顔をジロジロと見て」

「いや、なに……」

広大な中国、チャイナ地方の農村を乗り越えた先に見える高層ビルの姿に目をやりながら、ユウが首をもげさせたまま軽く口を歪めた。

「さすがにもう一年戦争の時のサマナじゃないなあ、と思つてな」

「ユウさんの少し下くらの歳の男に何を……」

「若いってのは良いねえ、うん」

そう言いながらグキツと頭を正位置へ戻したユウはサマナの顔から太陽の恩恵が満ちている蒼天へ再び視線を向ける。

「今の俺はこの前の健康診断の結果が気になる、の年齢身分だよ」

「体調が悪いのです？」

「胃の痛みが無くなったのが、かえって気になつてなあ」

「いいじゃないですか？」

「最愛の胃痛の友がいなくなり、寂しいもんだよ……」

「ハア……？」

不可解な友との別れを寂しがるように何度も頷くユウを、サマナは口を半開きにしながら怪訝そうな目で見つめていた。

消灯時間が過ぎたストウライトⅡのメインブリッジ、そこにいる複数の人影を淡い常夜灯が照らす。

「最後のバカンスになるか？」

「ネオ・ジオンとの戦いが終わるまでは、おそらく……」

薄暗いブリッジから広がる夜の空を眺めながら、ユウが顔を向けずにフィリップへ返事を返す。

「もう、地球へはこれないかもしれないかもな」

「それは困るぜ……」

「何が起こるか分からんって意味だよ、フィリップ」

「フン……」

鼻を鳴らしたフィリップは無言でユウの隣に立った。広がる漆黒の夜空、その空のはるか下にはニホンと呼ばれる島々、そしてそれを囲む海原が広がる。

「昨日のニホンのフジヤマ、良い所だったよな、フィリップ」

「ああ」

ニホンの誇る山はすでに暗闇に隠れて、その美しい姿は見えない。

「久しぶりにアムロ・レイの旦那とも会えたしな、ユウ」

「あのアムロ、そして彼の親父さんのテム博士、二人とも居心地の良いニホン島でのんびりと過ごせたら幸せだろうに」

「時代が許さねえよ……」

ストウライトⅡのメインブリッジにはまだ数人のクルーが働いている。

「ミーンにアフラー、それにフェイブ」

「仕事中ですよ、俺たちは」

通信士のアフラーがクルー達へ呼び掛けたユウへ返事をする。

「少しは休め」

「遊び半分でやってますよ、ユウ大佐」

「そうか？」

「キヤルフォルニアにいたら、存分に女を楽しみますって」

「さすがに色男」

そう言いながら、端整な顔の片目をつむってみせたアフラーへ近く
のミリーリが嫌な顔をした。

「身を固めなさいよ、アフラー」

「こつちの台詞だ、ミリーリ」

アフラーは同僚のミリーリへ顔を向けずに、艦内の通信設備の点検を
行っている。

「もうとつくにオールドミスちゃん」

「セクハラよ、それは」

「だったら、艦長にでも言うんだな」

「あの人に言っても、どうにもならないでしょうに……」

ブツブツ言いながら、ミリーリは空の艦長席に目を向ける。とつくに
ミリコーゼフ艦長は就寝をしてみましたようだ。

「二ホンを通り過ぎたか」

少し名残惜しげにユウは街の明かりで輝く島を見送る。艦の進行
方向には光の無い空と海がどこまでも続く。

光と音の無いストウライトIIを囲む暗闇。ブリッジを照らすぼん
やりとした常夜灯。

「通夜じゃねえんだからよ……」

フィリップのぼやきにも誰も答えない。艦の動力音、そしてたまに
鳴る機器の電子音だけがブリッジを廻る。

「しみりとしちまって、もう……」

操舵士フェイブが妙に静かなブリッジを見渡しながら呟く。とう
の本人の言葉にもどこか力が無い。

「パンを焼いてくる」

「シロッコから教えてもらったらしいな、あの旨いパンケーキの作り
方」

「見込まれた、らしい」

軽く笑いながら、フィリップがブリッジ前方の窓から離れる。

「あとで私にも教えて、フィリップ」

「わかったよ、ミーリ」

そう言いながら、フィリップがブリッジから立ち去ろうとアクセスドアの前に立つ。

「俺にもその旨いパンケーキとやらをくませえよ、フィリップ副艦長殿」

「特上のを作ってやる」

操縦士のフェイブの声にフィリップが親指を立てながら、軽く音を立てて開いた自動ドアから出ていった。

「そのクソアニメ、そんなに面白いの？」

「癖になるよ、サラ」

そうニヤリとサラへ笑いかけながら、カツは局地的な人気のアニメ「ジオテクニック」を眺めていた。

「ジオニック社ー!!」

主人公のつだ子と言う女の子がデフォルメされたライバル社のビルを殴り潰している。

「どうせなら、海でも眺めてなさいよ……」

「さつき、充分に目に焼き付けたさ」

「もうこれないかもしれないのよ？」

「僕は死なないよ、サラ」

ジュースを飲みながら、飽きずにテレビに視線をやるカツ。

「親が悲しむからね」

「フーン……」

「サラの親父さんとかはどんな人だ？」

「知らない」

チョコレートを食べながら、サラがぶつきらばうにカツへ言い放

っ。

「私もシドレも親はいない」

その言葉にカツはすぐには答ええない。アニメへ視線を向けたまま
でいる。

「ごめん」

しばらく時間が経ってから、カツがそうポツリと言う。

「気にしてない」

テレビを見つめたまま、後ろで菓子を食べている二人へそう言った
カツに対してサラが笑ってみせた。

「カツさんは優しいからね」

「あいつは甘いだけだろ？ シドレ？」

「そうかな、サラ……」

意味深に笑みを浮かべるシドレへサラは不機嫌そうな顔をする。

「サラ、君たちが死んでも」

「だれも哀しまない？」

「モルモット隊の人間はおろか」

アニメがコマースヤルへ切り替わった。最近、清涼飲料水業界へ手
を伸ばし始めたムラサメ研究所のドリンクが派手な演出と共に画面
へデカデカと浮かぶ。

「テイターンズや連邦、そしてあのシロッコさんも哀しむ」

「そうかな？」

「ユウ隊長、そしてシロッコさん自体が孤児だ」

「……」

ジオテクニックが再度同じ内容で放送をされる。どういう趣向な
のか。

「死にたくないし、死んじやいけない」

「敵は撃ち殺してもいいの？ カツ？」

「それも実はもうやりたくなくなってきた」

「カツ、死ぬわよ」

少しサラが怒ったような声を出す。

「その考え」

「死なない、適当にやって生き延びる」

「給料はもらってるでしょ？」

「戦争が終わったら、親父達の元へ帰るよ」

その言葉にサラとシドレが無言でいる。少し気まずい空気がその部屋に漂う。

「気楽にやるさ、サラ」

再びジオニック社のビルを破壊する女の子の声が違う人間の声で響く。

「少し」

「ん？」

「シロッコ様に似てきた気がする、カツ」

「まさか」

サラがポツリと言った台詞にカツが肩を竦める。

「違うよ、サラ」

シドレが二人の会話に口を挟む。

「違う？」

「シロッコさんがユウ隊長に似てきているんだ」

「そうかなあ？」

「私には解る」

「シドレの考えは昔からあたしにはわからないよ……」

「フフ……」

サラのぼやきにシドレは微笑をしてみせる。

アニメを映すテレビからは主人公の女の子がジオニック社の看板に「指定テロ支援会社」とラクガキをするシーンが流れていた。

「ネオ・ジオンの艦……？」

「旧ジオンの頃にあった艦みたいだが？」

「そのジオン艦」

ベテランの通信士、アフラーが黒い塗装をされた未確認の艦へ通信を入れる。

「所属を告げよ」

「こちら、ネオ・ジオン所属の艦です？」

「ん？」

ユウはそのネオ・ジオンからの男の声に聞き覚えがある。

「私はこの艦のモビルスーツ援護隊の隊長であるユウ・カジマ」

一応として付けられた艦内の役職を名乗りながら、ユウは男へ返事を返す。

「ユウ・カジマ、久しい名だ」

その言葉と共に、ネオ・ジオンの艦からの通信に笑い声が混じった。

「ブレニフ・オグス、私を覚えているか？」

「懐かしいな」

そう通信相手へ言葉をこぼしながら、ユウが軽く手を頭へそえる。

「どうにか覚えているよ、旧ジオンからのエース」

「今ではすっかり使い走りだよ」

「そうかな？」

「私も歳だし、一年戦争時の戦いと今の戦争のやり方は全く違う」

「確かにな」

ユウは軽く通信機へ向かって笑いかけた後、口調を正して再び先程の言葉を繰り返す。

「そちらの艦の目的は？」

「極秘、ではある」

「針路だけでも聞く義務がある、俺たち連邦の軍人には」

「単なるオーガスタとの取り引きだよ」

「フム……」

オグスの返事にユウは自分の首をメトロノームのように何回か振る。

「極秘の割りにはあっさりと言ってくれたな……」

「連邦には話を通してあるからな」

「それを先に言えばいいだろ、オグス殿」

「フフ……」

そのオグスの笑い声を聞きながら、ユウはそのネオ・ジオン艦の目的地に少し引っ掛かる物を感じた。

「その艦にはもしかしてニムバスと言う男がいないか？ オグス殿？」

「この艦にニムバス君と言う男がいるよ、ユウ殿」

同時に元オーガスタ研究所所属の強化人間の名前を言ってしまった二人の男達が微かに笑い合う。

「用事が終わったら、君と会いたいそうだな」

「今、ニムバスと話せないか？」

「後にして欲しいそうだな」

「何故？」

「果たし合いの状を書いているみたいだな……」

オグスのその言葉にユウは黙りこんだ。

「それを受けとる相手は分かるか？」

「ユウ・カジマ殿に御中」

「ウオンチューは間違いだぞ？」

「彼、ニムバスの時代錯誤自体が間違いだと思わんか？」

「フン……」

その言葉にユウは一つ鼻を鳴らす。

「わかった」

「悪いな、勝手なミスターキシドーで」

「そのキシドーと会う場所は？」

「蒼の墓標があつた基地とやらを言っている」

「なるほど……」

「詩的な隠語らしいねえ」

オグスの含み笑いにユウは答えない。

「オーガスタに比較的には近い、キャルフオルニア基地の近くにある基地だよ、オグス殿」

「そこにしばらく居てくれるか？」

「休暇中だ、適当にそこから遊んでる」

「悪いな」

「本当に悪いよ、ネオ・ジオン」

「ではな、連邦のエース君」

そう言つて、オグスは通信を切った。

「その基地、場所を言つてくれ」

ミリコーゼフ艦長が薄目を開けながら、ユウの顔を見る。

「申し訳ありません、艦長……」

「面白い物が見れそうだ……」

そう言つたきり、ストウラートの置物と呼ばれているミリコーゼフ艦長は再び目をつむつて居眠りを始めた。

「Gマリオン、あれは宇宙専用ではありませんか？」

「無理矢理ならグレイス・コンバーターは噴かせられるみたいだがな」

「ニムバスさんか……」

そう言つたきり、サマナが押し黙る。

「ついに来るべき時がきましたね」

「クルスト博士、マリオン・ウエルチと同じEXAMに取り憑いた精霊、いや怨霊……」

ユウのため息混じりのその言葉に、サマナは何も答えない。

「あの世とやらで、博士があれまで嫌っていたニュータイプ、それに自分になつちまつたみたいだな」

「たまに噂で聴く、ニュータイプが見るらしい心霊世界現象」

「そう、マリオンと同じニュータイプの靈魂をやっているよ、クルスト博士はね」

「十年近くもEXAMを成仏できないとは……」

「もつと長いかもしれない」

「ジオン・ズム・ダイクンがニュータイプを唱えた時から？」

「かもな」

そう言い残して、ユウはGマリオンの総合チェックをしようとハンガーへ降りていく。

「イテテ……」

ユウの胃に再び友が戻ってきた。

「夕暁のユウ」機体解説その1

ORX-ML-04/ブループラウス

所属/地球連邦軍

製造/オーガスタ・ニュータイプ研究所

機体種別/特殊機能付き汎用型ワンオフ機

武装

ビームサーベル×2

ビームライフル

大腿部大型メガビーム砲×2

頭部バルカン砲×2 (オプション)

特殊機能

対ニュータイプ兵器視覚感知強化システム「MILLION (マリオン)」

機体解説

地球連邦軍の実験型MS。

対ニュータイプ兵器の一種である「マリオン・システム」が搭載されている。

偶然に入手したエウーゴ製のMSとエウーゴの地上協力組織「カラバ」から裏取引で手に入れた可変型MS「Zプラスチック宇宙型」を元に作製をされた。

特殊機能である「マリオン」はニュータイプないしそれに属する人間、またはサイコミュ兵器から放たれる一種の「気」の視覚化を搭乗

パイロットに対して可能とさせるアンチ・サイコミュ兵器である（そのニュータイプ・パイロットやサイコミュ兵器の感知は同じニュータイプでありさえすれば、個人差こそあるが可能である）

武装面では、当時の新鋭機であったガンダムMK-IIIのビームライフルを流用した他、火力強化の為に大腿部のビームカノンの大口径化が上げられる。

この改良されたメガビーム砲はハンド・グリップも追加されており、射撃時の安定性が高められている（そのままマニュアルで握らずに使用する事も可能）

ビーム砲のハンド・グリップは取り外しができ、予備ビームサーベルとして使う事も可能である為、最接近された時の奇襲戦法として有用であると思われる。

また、Zプラス系の機体の手持ち式の武装も使用することが出来る。

この偶然に入手した機体群はZガンダムを製作した際に性能基準が要求された性能値を満たさなかったパーツを使用して補助戦力として製作された機体であつたらしく、その性能は宇宙空間戦闘のみで使用可能な事を除き、本家であるZガンダムと大差はなかったと言われる。

いわば「宇宙戦用Zガンダム」と言われるべき物であつた。

また、完成品であるZガンダムに先駆けて簡易サイコミュシステム「バイオセンサー」も搭載をされていた。

本機の製作責任者である技師「アルフ・カムラ」がこのエウーゴ製の機体の事をさして「Zガンダムの量産タイプ」と呼んだのは、単に頭部のメインセンサー部がジム系統のバイザー式であつた事から勝手に想像したに過ぎない。

NGM-82/サイコ・ジム

所属/地球連邦軍

製造/オーガスタ・ニュータイプ研究所

機体種別/試験型汎用機

武装

ビームサーベル×2

ジム・ライフル×1

ビーム・ガン×2

ハイパー・バズーカ×1 (オプション)

頭部バルカン砲×2

特殊機能

疑似サイコミュ・システム

換装式ホバー走行システム

機体解説

地球連邦軍の実験型モビルスーツ。

一年戦争の戦後に製作された高性能ジム・シリーズである「パウロ・ジム」をベースに作り上げられており、連邦軍としては(OS的には初の)サイコミュ搭載機である。

疑似サイコミュシステムと言われるこのシステムは、搭乗しているパイロットの運動中枢、反射神経系等の脳神経に電磁波を送り、その機能を高めるといった機能である。

モビルスーツ誕生以前からある、連邦軍の軍医学や生理学などと一年戦争後にジオン公国軍のニュータイプ研究所から接收した技術を融合させたシステムであり、厳密にはジオン系のサイコミュ・システムとは関係がない。

疑似的とはいえサイコミュシステムをモビルスーツに搭載可能なレベルにダウンサイジングしたことは特筆に値するが、機能的には相

当に疑問符がつく。

一応、ジオンからの技術とこの機体の製作技師「アルフ・カムラ」が手掛けていた対ニュータイプ用モビルスーツのOSから、敵性ニュータイプか放たれるニュータイプ脳波に対するバッシブ機能は備わっているが、それに対しても単に受信したと同時に脳神経へ働きかける電磁波の強度を増して、搭乗パイロットへ備えさせるといふ程度のレベルの機能である。

機体の基本設計自体は優れているが、これは元となったパワー・ジムの性能による所が大きい。

武装としては当時のジム系のモビルスーツに使用されていた武装を流用している為、火力と信頼性は高い。

独自の機能としては換装式のホバー走行システムにより、地上ではかなりのスピードが発揮できる（これには疑似サイコミュシステム、それ自体がかなりの重量であることに対する対抗処置といった面もある、当然ながら宇宙空間では使用不可）

疑似サイコミュシステムはパイロットに相当な負担を与えるため、戦闘時には事前に与えられた薬品の定期的な服薬が必須であった。

その為、この機体を運用していた部隊のパイロットからの本機へ対する評価は極めて不評であり、この疑似サイコミュシステムはその後は改良される事もなく、搭載された機体も存在しない。

しかし「このような負荷に耐えられるパイロットを育成出来れば、連邦軍全体の兵士の質が向上する」といった考えから、この機体とシステムの運用データが地球連邦軍のニュータイプ研究所が推し進めていた「強化人間」の技術に貢献したのは確かである。

また、機体自体のデータは当時のジム系列モビルスーツの統合プロジェクト「セカンド・ジム・プロジェクト（通称ジムII開発計画）」に生かされている。

FF-X77／ランプライト

所属／地球連邦軍

製造／オーガスタ・ニュータイプ研究所

機体種別／汎用型対モビルスーツ用大型戦闘機

武装

バンダー内蔵式メガ粒子砲×2

機首バルカン砲×2

レーザー誘導式爆弾コンテナ×2（オプション）

機体解説

正式名称「AMF05ーランサーフィッシュ」

地球連邦軍は一年戦争の経験を経て

「ミノスフキー粒子散布下での地上では戦車を含む電子器機による広域サポートを前提として設計された戦闘車両では、システムのモビルスーツに立ち向かうのは難しいが、航空機であれば有視界戦闘でもモビルスーツに対抗可能」

という結論を出した。

また、宇宙空間でもジオン公国が開発した巨大宇宙戦闘機とも言うべきモビルアーマー「ビグロ」などがかなりの戦果を上げている事が判明していた。

その二点を踏まえて開発されたのが次世代戦闘機「ランサーフィッシュ」である。

この機体に要求されたのは

「モビルスーツの装甲を貫通出来るだけの火力」

「有視界戦闘への適応（つまり、旧世代のプロペラ機などへの索敵システムの退化）」

「大気圏内、宇宙空間ともに運用が可能な事」

などであった。

機体作製に関しては、連邦軍製の高性能戦闘機「コア・ブースター」をベースとし、従来までの「セイバー・フィッシュ」「トリアーエズ」などの運用データがふんだんに盛り込まれている。

特徴ともいえる機体両サイドの可動型メガ粒子砲「フレキブル・ビームキャノン」は極めて高火力であり、計算上では0080年から0085年までのいかなるモビルスーツの装甲も撃ち抜ける。

また、このバインダーは後部に姿勢制御を兼ねたスラスタを内蔵しており、ジオン公国軍が使用した戦闘機「ドップ」を遥かに越える軽快な機動を可能とした。

その他の武装等としては、爆撃用のレーザー誘導式爆弾やバルカン砲、機体各部に備え付けられた索敵用のセンサーアイ等が上げられる。

機体はモビルスーツのサイズを超える相当な大型機となり、機能的にはほとんど戦闘機型のモビルアーマーと変わりはない。運用現場でも従来の戦闘機としては扱われなかった。

戦後の連邦軍の戦術に大きな影響を与えると想定をされ、製作にはある程度の秘匿性が必要と判断、機密クラスはAとされた（RXタイプ・モビルスーツの機密クラスが最高のAAA、トリプル・エーである）

その為に製作ナンバーも隠匿され、「ランプライト」というコードネームで呼ばれた。

この機体はパイロットにかける強烈なG等の負荷や生産コストなどで大きな問題を抱えてこそはいたが、当初の目的であった「モビルスーツに対抗できる汎用戦闘機」という要望は完全に叶えており、連邦軍はこの機体の運用データから新たな戦闘機を開発しようと考えていた。

しかし、その矢先に全く新しい概念の兵器が誕生した。

モビルスーツと戦闘機（モビルアーマー）の特性を併せ持った可変型モビルスーツ（または可変型モビルアーマー）という概念である。軍の関心は完全にそちらへと移り、この機体の後継機、および対モビルスーツ用戦闘機の製作という計画は停止した。

しかし、ランプライトの運用データやコンセプトは後の可変型モビルアーマー「ギャプラン」に多大な影響を与える事となった。

また、さらに後には正統後継機とも言える高高度戦闘用モビルアーマー「ギャプラン改」等も製作された。

おまけ「ブルー（左）とローベリア（右）」

最初はこの二人をユウとニムバスのヒロインにしようと思いましたが、影と個性が薄く、目論みは完全に失敗しました……

でも、ローベリアの方はまだニムバスとの絡みが出来そうです（笑）

第47話 絆の人形

「よお、アムロ」

ニホン地区の小さな連邦軍の軍事研究所、その所長を務めるテム・レイはモビルスーツ格納庫へ入ってきた息子へ手を振って答える。

「Gペガサスの様子はどうか？」

「悪くないよ、親父」

暗い格納庫の中で一年戦争時の英雄、最強のニュータイプ兵士であるアムロ・レイは報告書の入ったスーツケースを父へ渡す。

「何回かテイターンズやネオ・ジオンと戦ったけどな」

「よし、よし」

「だが、まあ強いて言えば」

「戦闘時間、燃料だろ？」

その父の言葉にアムロは無言で頷く。

「相手を追いこめない」

「だろう？ だろう？」

そう言いながら、テムはタバコを取りだし、自身の口へ差し込む。タバコに火を付けながらテムは格納庫の照明のスイッチを入れる。

「こいつをガンダムに取り付けろ、アムロ」

一気に格納庫に光が満ちた。地下に造られた広大なモビルスーツの格納庫の天井は二人の目には見えないほどに高い。

その奥に巨大、そう巨大と言う言葉すら人の背丈との比較では当てはまらないコンテナが格納庫に鎮座している。

「性能が数倍にアップするぞ……!!」

「数倍どころか……」

アムロはその巨大火器アームド・ベース・ユニット、その管制用機として作られたモビルスーツ「Gペガサス」の資料の紙束をバサバサと揺すりながらため息をついた。

「モビルスーツのレベルではないだろうに、これはさ……」

「分類上はモビルスーツのオプション、外部取り付け式のフルアーマー・パーツだよ」

「詐欺の手口をやる人間のだよ、その理屈は」

「悪い詐欺を働く父親か？」

「必ずしもそうではないよ」

そのアムロの言葉には何か別の意味合いがこもっているようにテムには感じてしまう。僅かにアムロの顔からテムが視線をそらす。

「昔のガンダム、その開発計画のリニューアルだったな？」

「ああ」

ガンダムの別の性能表をポケットから出しながらテムが掠れた声で呟いた。

「俺も加わりたかったがな……」

「酸素欠乏症、その治療中だっただろ？」

「俺がいれば、もっと良いガンダムガンダムが創れたよ」

「ハハ……」

新たなスペック表をテムから手渡されながら、アムロが父のその言葉に軽く笑う。

「こんな古い物、使えるのか？」

「使えるようにしたから、新型って言うんだ」

「まあな……」

そう言いながら、アムロが指をパチパチと鳴らしつつ、再び巨大な武装コンテナユニットを見上げた。

「大火力、それが今の戦争に求められる物だよ」

「わかっているさ、親父」

「イワシではクジラに勝てない」

「昔からそうさ」

何かつまらなそうにそう口ごもりながら、アムロの目が新鋭機「GP」のスペック表を見比べる。

「昔のガンダムだった」

アムロは少し懐かしむような視線で父の顔を見つめながら、低い声で呟き始めた。

「ザクのマシンガン弾を弾きとばし、その上で一撃のビームで相手を落とせたから、俺は生き延びる事ができた」

「性能、それが全てかな？ アムロ……」

「パイロットの腕でカバーというのは、口で言うほど簡単ではない」
「ん……」

テムが息子の言葉に低く唸りながら、懐から小型のパーツらしき物を取り出す。

「これは？」

その「トツ」の姿をしている金属片をしげしげと見つめながら、アムロがテムの目を見やる。

「ジオン、ネオ・ジオンのモビルスーツから私が分析した新型装置だ」

「ネオ・ジオンね……」

「そして、こつちが」

もう片方のポケットから茶封筒をテムが取り出した。

「お前への手紙だよ」

差し出された封筒のホチキス針をアムロは指で軽くほじくりだす。
中身の手紙がアムロの手に滑り転がる。

「手書き、マメな奴だ……」

アムロにとつて、その書面から差出人の名前は簡単に推測ができる。そのまま彼はサツと流麗な字で書かれた文に目を通す。

「シヤア、彼からこの装置を？」

「ほう？」

アムロの言葉にテムが手紙を覗きこもうとした。

「そう手紙に書いてあったのか、アムロ……」

「良いお習字で物騒な内容を書いてくれる」

「怖いもんだ……」

再度、手紙を見返しながらアムロがその口を開く。

「その新装置があったモビルスーツとは？」

「トットリの砂漠、砂丘に突き刺さっていた」

「突き刺さる？ モビルスーツが？」

「上半身が斜めに傾いてね」

「どこかのテレビで見たような観光名所の話だな」

「ムラサメ、大喜びだ」

「ムラサメ、あの研究所の奴らがそのモビルスーツを見つけたのか？」
「バカンスに来ていたらしいな」

「ダブルで観光が出来たか」

「ご褒美だ」

「うん、ご褒美……」

どちらともなく、二人の顔に何とも言えない笑みが浮かぶ。

「怪しい、と言うよりも危ないと思わなかったか？　ムラサメの奴らは？」

「思うに決まっているだろう……」

テムがガンダム用の新型パーツを握りながら、親指で軽く撫でる。

「そのモビルスーツ近くにあったコンテナ、そこからこのパーツの原型と設計図をムラサメ研の奴らが見つけた」

「不審物、だな」

「さすがに秘密と秘密がお友達のムラサメ研の奴らも連邦へ知らせたさ」

「危ないからね、ウン」

「そう、危ない……」

そう言い合った後、二人が再び妙な表情をその顔に作りながら、大声で笑い合う。その声がハンガー内に微かにエコーをした。

「親父はムラサメとも関係が出来ていたからな」

「サイコ・ガンダムなどと言う、ろくでもない品物を造る手伝いの経験が、今に生きるとはね」

「そんなもんさ」

「もともと、サイコ・ガンダムのパイロット候補にはお前の名前が挙がっていた」

「やめてくれよ……」

その父の言葉にアムロが顔を歪めながら、天井を見上げる。

「あれは機動戦士ではない」

「広範囲殲滅機、核弾頭と同じコンセプトだな」

テムは少し自嘲気に呟いたあと、息子の肩を叩いてやった。

「まあ、こいつも似たようなもんだ」

「仕方がない、その言葉を解決に使えと言うことだな？」

「フフ……」

手紙をまたしても、何度も読み返すアムロへテムが微笑む。

「そもそも、その砂に突き刺さったモバイルスーツのコクピットの中にな」

テムがシャアからの手紙を少し強引にアムロの手から取り上げる。

「シートにアムロ・レイ殿宛てのコイツが置いてあったんだ」

「殿、ね」

舌で上唇を舐めながら、アムロが両肩を竦めてみせた。

「様、とはさすがにも呼んでくれないか」

「呼び捨てやウオンチューよりはマシだろうに」

「御中は間違いだって、御中は……」

何かをブツブツと言いながら、アムロがテムの手にあるパーツをしげしげとその目で見つめる。

「サイコミュ端末を織り込んだ加工金属らしい」

「金属にサイコミュを？」

「砂丘のモバイルスーツにも使用されている新素材らしいな」

「サイコミュの金属フレームか……」

そのアムロの言葉にテムがニヤリと口を歪めた。

「ニュータイプとはこういう物か？」

「何だよ、親父……」

「感が良い」

「どうも……」

「気にいらない」

不機嫌そうにそう吐き捨てるテムに対して、アムロが眉を潜める。

「息子がニュータイプというのは嫌か？」

「ニュータイプ自体が気にいらないんだ」

「何故？」

「私の息子の人生を狂わせて、様々なストレスをあたえてくれる」

「フム……」

「だから、私はニュータイプ否定論者だよ」

短くなったタバコを携帯式の灰皿へ突きつけながら、テムが上着のポケットに手をつ突っ込んだ。

「私の息子をタレントまがいには仕立てやがって」

「喜ばないのか？　息子が有名になってる」

イライラした声を出しながら再び上着

からタバコを取り出したテムに対して、アムロが微笑んでみせる。

「俺はニュータイプ能力とやらのお陰で、金には困らない」

「フン……」

「むしろ、有り余っている」

「私に息子を食い物にする親になれとでも言うのか？」

そう言いながらアムロを睨み付けるテムの目は鋭い。

「ニュータイプだろうがなんだろうが」

テムが格納庫の高い天井を見上げながら、独り言のように言葉をその唇から流し出す。

「バカ息子はバカ息子だよ」

「親父……」

少し目を潤ませたように見えるアムロが父テムの老け込んだ顔から視線を離れた。

「有名ニュータイプ人になったお陰で、彼女もできたよ」

「どうせ、金と名前目当てだろう？」

「違うな」

「オタク気質のお前に女の良し悪しが見抜けるのか？」

「今度、親父に紹介をするよ」

「親に紹介ということは」

テムが顔を息子に向け、フツとタバコの煙を吹きかける。

「結婚を前提か」

「彼女を見れば、親父も納得はしてくれるさ」

そう言いながら、アムロが手のひらに乗っているサイコミュ端末でもある金属片をクルクルと回した。

「勘の強い女でもあるがな、ベルトーチカは」

「会えばわかるさ」

「そうかい……」

ピピッ……

「時間だ、アムロ」

テムの腕時計のアラームが鳴る。

「オーガスタ研、そここのアルフ技師の奴が近くに立ち寄るらしいんだよ、アムロ」

「アルフ・カムラ、ユウの奴のサポーターだな？」

「連邦でも五本の指に入る、良い技術屋だよ」

そう言いながらテムがハンガーの照明灯のスイッチへ手を伸ばそうとする。慌ててアムロが格納庫の入り口の近くへ駆けた。

「マリオン・システム、私も納得することが出来る、堅実で優れた造りの対ニュータイプ用の補助装置だ」

「ユウ・カジマがひいきに使っているらしいな」

「そのユウ・カジマとやらもニホンの近くまで来るらしい」

「何の為に？」

灯りが消えて漆黒の闇に閉ざされたハンガーを後に、二人は階段をゆっくりと上がる。

「あいつらの部隊もろとも休暇らしい」

「呑気、かな？」

「まもなく、超宇宙大戦争が始まる前の最後の呑気かもしれんな」

「お空で何かを企むシャアの奴め」

不満げに頬を膨らみますアムロの目に太陽の光が飛び込んだ。

「しかし、ちょうど良いかもしれん」

「何がだ？ アムロ？」

「シャアは俺と一度、じかに会いたがっている」

「手紙にそうあったか？」

「むしろ、来いという命令の文体だった」

目前のニホン・カイに陽光が強く降り注ぐ。

「シャアの奴も地球に降りているらしいからな」

「急かされてるな？ お前？」

「ユウのバカンス艦、とても凄いい好都合かもしれないな……」

「あと、2、3日後にニホンへ来る」

「分かった」

簡潔にそう答えながら、アムロは海の向こうにあるアジア大陸の方へその目を向けた。

「お袋、ね」

ニホン地区の海岸から見える海、その地平線に沈む夕日を眺めながら、アムロがテムへ話を切り出す。

「いや元、母さんだな」

「ん……」

「再婚したんだって？」

「ああ」

タバコをくゆらせながら、テムが簡潔に言葉を吐く。

「仕方がないか……」

「私も悪かったさ、アムロ」

「俺もガキの頃は親父が悪いと思っていた」

「無理もない」

そう言いながら、アムロが夕日の上、紅く染め上がった空を見上げる。

そのアムロの視線は空、それを突き抜けた更に奥のもう一つのソラに向けられている。

「お袋と俺よりも、仕事の方が大事だつてね」

「そうさ、そうだよ……」

「俺がジオンに襲われたサイド7から逃げ出す時も、親父は俺たち避難民よりも、機密のガンダムを優先した」

テムは無言でタバコを口から離す。

「今ならばあの時の親父の気持ち、そして責務の重さが解るよ」

「アムロ」

「ん？」

「悪かったな、サイド7の避難の時は」

「昔の話だよ」

そう言いながら、アムロは三十近い歳の割には、どこか幼さが残る顔を綻ばせる。

「それに……」

アムロは父親テムにジャンバーのポケットから缶コーヒーを手渡す。

「親父は立派だった」

自分のコーヒー缶を振るアムロをテムはじっと見つめる。

「父親と仕事、両方の役目を果たした」

「アムロ……」

テムはコーヒーを受け取りながら、息子の言葉を耳へ入れつつ海へ顔を向ける。しばらくの間、親子は言葉を発しない。

「すまない、アムロ」

「ン……」

「私には至らぬ所が多すぎた」

「違う」

強く光を放つ夕日に向かって、アムロは宣言をするように言い放つ。

「親父は立派に父親を名乗れる人間だ」

そのアムロの言葉にテムは答えない。

「乗るぜ、俺はこのガンダムに」

「……」

「親父からの二度目のプレゼント、大きい人形だな」

「話すのを止めてくれ、アムロ」

「いんや、いやだね……」

そう言いながら、アムロは意地の悪い顔をして、父へ笑いかける。

「さつきからの親父の泣き顔、いい見物だ」

先程からテムには夕日が自身の涙で紅い光の塊にしか見えていない。

「今日の俺の誕生日、覚えていてくれたんだな」

「違う、違う……」

首を振りながら、テムが嗚咽を始める。

「俺はな、俺は息子への誕生日プレゼントですら、人殺しの物しかあげられない父親なんだ」

「俺を助けてくれる、お守りの人形だよ、親父手製のね」

ついにテムが号泣を始めた。

「この戦争はな、すぐに終わるさ」

「帰ってこいよ、アムロ……!!」

「俺は宣伝に使われるほどのニュータイプだ、死なない」

「ニュータイプだろうがなんだろうが、俺には息子でしかない」

「安心してくれ」

暗くなり始めた海岸から、二人の男が立ち去っていく。

「昔も親父のガンダムで生き残れた、親父が守ってくれた」

「だから、言わないでくれと……」

「泣き顔を見たいんだ、親父のね」

「嫌な息子に育っちゃまった……!!」

テムが涙でクシャクシャになったその顔で息子へ微笑んだ。

第48話 マリオンの血

「いいよな、ニムバス君は」

「なんだ？ オグス」

旧ジオン軍の汎用巡洋艦であるザンジバル級、その古めかしいブリッジで軽食をとっている一年戦争時代からの古参のエースである「ブレニフ・オグス」がぼんやりとニムバスへ語りかけた。

「名と顔が同時に売れてな」

「必ずしも、私は有名ではなかったぞ」

コーヒーを飲む手を止め、ニムバスがオグスを軽く睨み付ける。

「むしろ、一年戦争時にはお前の方が有名ではなかったか？」

「名前だけは連邦の教本にも載っていた」

ため息をつきながらも、オグスはサンドイッチをつまむ手を止めない。

「だが、画像データがどこにも回らなかった」

「しかたあるまい」

強い雨が降る、艦の外の海を眺めながら、ニムバスが微かに声を上げて笑う。

「ジオン消滅時にデータが失われたのであろう」

「一応、赤い彗星などと並ぶワン・ショット・キラーという異名もあったんだがな」

「天の運、その神が味方をしなかったのだな」

「天の運命神？」

オグスが少しキョトンとした顔をする。サンドイッチのマヨネーズが彼の手に滴り落ちた。

「いるらしい、どこかに」

「いるとしたら……」

手に付いたマヨネーズを舐めながら、オグスはニヤリと笑う。

「残酷な神様だな」

「あんた達はまだいいわよ」

仕事を終えたネオ・ジオンの女性パイロット、ローベリアが二人の

近くに寄ってくる。

「あたしの名、ローベリア・シャル・パゾムの名前なんで、その神様とやらも知らない」

「まあな……」

目を細めながら、その言葉に頷くニムバス。

「運命の神すらも知らないであろう」

「腹の立つ言い方だ……」

ローベリアが髪をかき上げながら、二人の隣でムラサメ・コーヒーの缶の蓋を開けた。

「蒼い海、地球の心の色かな……」

「地球にも心があるかな、ローベリア？」

「あるさ」

キツパリとニムバスへそう言い放つローベリア。

「怒っている」

「かも、しれん」

オグスも椅子から立ち上がり、ブリッジの外の豪雨へ視線を向けた。

「シャアの言い分、少しは解るかもしれない」

「母、その怒りと悲しみの涙か」

「どうした、ニムバス」

冷たく感じられる雨に対して、詩的な感想を口に乗せたニムバスへオグスが珍しい物を見るように目を細める。

「その母を苦しめる原因への肅正、それがシャアの望みかな？」

「どうしたんだよ、ニムバス……」

妙に感傷的になっていくニムバスに対して、面倒見が良いと言われているオグスでも気の利いた答えが出せない。

「クルスト博士の事を思い出したのかしらね、ニムバス？」

「何度も私達を裏切った、研究馬鹿の父だったからな」

ある程度の事をローベリアには伝えてあるニムバスは、そう言ったきりブリッジから立ち去っていく。

「母、か」

「あなたに家族は？ オグス
「いるさ」

肩を竦めながら、オグスが数年前にネオ・ジオンに吸収されたジオン派テロリズム組織「レット・ジオニズム」時代からの仲であるローベリアに微笑みかけた。

「サイド3でのんびりしている」
「帰る場所があるのなら」

ローベリアは少し不満げにその唇を尖らせながら、オグスの胸を小突く。

「何故、今も馴染みきれていない新しいジオン、ネオ・ジオンにいるの？」

「昔の教え子が何人もいるからさ」

「その教え子達にロートルの小姑だと馬鹿にされてても？」

「それも人殺しを教えた大人の責任の一部かもな、一応には」

「人殺しか……」

そう言ったとき、ローベリアは口を閉ざした。オグスも特にはその話を進めようとしなない。

「EXAMの味を教えた女は、殺人教唆なのかしらね……」

自嘲げに唇を歪めるローベリアの呟きは黒く厚い雲から放たれた光にざわめくクルー達の声にかき消される。

「あれは雷と言うものだよ」

「連邦のビーム兵器ではないと？」

少年とも見える若い兵がうわずった声を上げながら、中年の女性艦長の顔を見つめた。

「私も初めて見るがね」

「これが地球というものですか……」

作業の手を適度に止めて、ザンジバルのクルー達は窓の外の光を盗み見ている。

夜明けの朝日が全く届かない暗闇の雲の元、低いエンジン音を立てながらザンジバルは雷雨を纏い海の上を飛行していた。

「サイコ・エグサム、いつもの機体でユウ・カジマと？」

「ああ」

髪を神経質そうにかきあげるローベリアに対して、ニムバスは簡潔に答えを返す。

「しつくりとはくる」

「ユウ・カジマのGマリオンとやらは最新鋭機だ」

ザンジバルのハンガーの片隅で、「土星エンジン」と言う名の携帯ゲーム機をやりながら、オグスが言葉を放った。

「奴自身の腕も良い」

「勝てるさ、私は」

「何故、断言を？」

「私の策略、大局的な罠にかかった」

「ホウ……」

気の無い返事をしながら、再びオグスはゲームに没頭する。

「結構なことって……」

「最近、お前は評判が悪いぞ、オグス？」

「私がやさぐれてる、だろう？」

マヨネーズを保存容器に入ったタラコにかけながら、オグスはゲーム機をリセットした。

「何が気に入らないんだ？ オグス？」

「何もかもだ」

マヨネーズたっぷりタラコを口へ運びながら、オグスは再度ゲーム機のスイッチを入れる。

「時代は変わり、ワン・ショット、一撃で相手を仕留めると言う戦法は時代遅れだ」

「私の責任では、なんにもないぞ？」

「あまつさえ、かつての目下の相手の言うことを聞き、砂丘へモビル

スーツを飾らせる羽目になるとは」

オグスの手に握られているゲーム機から軽快な音楽が流れてくる。

「あたし達も砂遊びは手伝っただろう？ オグス？」

「つくづく、鉄仮面と言う男は度しがたいな」

グチグチと言うオグスはローベリアの言葉を耳へ入れない。

「止めなつて、陰口は……」

「陰口ではない、ローベリア」

ムツとした顔でローベリアを睨み返すと、オグスはマヨネーズタラコを口へほおりこむ。

「本人が目の前にいるんだから」

そうハツキリと言い放つオグス。その言葉に対しては、強化人間の調整用の鉄仮面を外してゴロゴロとハンガーの固い床に寝転がっているシヤアは苦笑いをするしかない。

「ゲームならば、まだ私にもワン・ショットが出来るさ……」

「程々にしろよ、オグス大佐？」

「うるさいでござる、鉄仮面のシヤア・アズナブル総帥」

ニヤツと笑い合う男二人を呆れたように見つめながら、ニムバスとローベリアはサイコ・エグザムの調整に戻ろうとする。

「ローベリア」

「何？ ニムバス？」

「マリオンの奴は元気か？」

「どういう心境でその言葉を？」

「昔のEXAMを巡る戦いの決着の地、そこへもうすぐ着くからな」
「なるほど……」

合点がいった顔をしながら、ローベリアはその微かに少女の面影がある顔を明るく微笑ませた。

「元気だよ」

サイコ・エグザムの足元へ置いてある特注武器である実体剣「クルタナ」、その兵装を手入れするニムバスの手伝いに入りながら、そっけなくローベリアが答える。

「今、あなたの機体調整の手伝い出来る位には」

「ウム……」

ニムバスの返答に少し複雑な色が帯びた。

「髪の色とわずかの整形、それでユウ・カジマなどは結構誤魔化せるものだな」

「それこそが、彼が真のニュータイプではない証しよ」

「かもしれないな」

「もつとも……」

昔、EXAMを巡る争いで二人の男を手玉に取った妖女はあどけなさが残る顔に妖艶な笑みを浮かべる。

「どうだっていいわ、あんなつまらない男」

「お前に騎乗位をした男の内の人だろう?」

「主導権は私にあつたさ」

「かも、しれんが」

「あんだ達二人ともにね」

そう言いながら含み笑いをするローベリア。その彼女へ顔も向けずに無愛想にニムバスはその薄い唇から冷たく言葉を放つ。

「ロリコンの烙印を押さなかっただけ、私に感謝をしてほしいなあ?、

ニムバス?」

「先に関係を誘って来たのはお前から、だぞ?」

「悪い幼き女に引つかかったねえ……」

「一時の欲に流されたのが間違いだったよ」

ため息をつきながら、ニムバスは自機の最終調整を行う為にサイコ・エグザムのメインコンピュータへ有線式で直結している小型端末のモニターへその手を疾らせた。

「ユウへ少しの責任も感じないか? ローベリア?」

「何のかしら?」

「あいつはお前を神聖視している所がある」

「だから、それがなんだっていうの?」

手早く機体の最終チェックを終えたニムバスへ、ローベリアがコーヒーを渡してやる。

「それはユウ・カジマの勝手な妄想でしょ?」

「たまらんな、全く……」

首を振りながら、ニムバスはコーヒーを受け取った。

「やはり、最初の男であるあなたにフィーリングが合う……」

「やれやれだ……」

オグスのプレイをしているゲーム機から「ニムバス・シユターゼン」の怒鳴る声が聴こえる。

「何故、あの同人ゲームとやらを作った時、ユウ・カジマの声は復元しようとしなかったのだ？」

「記憶に無いんだ」

「薄情な女だ」

「実な事に、全く興味が失せた」

本当にそっけなく、そう言葉を吐き捨てるローベリア。

「ユウ・カジマの奴も哀れだなあ？」

「フン……」

茶化すようにニムバスへそう言いながら、ハンガーの冷たい床の上をシヤアは子供のように転がっている。ヒヤリとする感覚が気に入っているのだろうか。

「このゲーム、どうしてもラスト・ボスのニムバス君に勝てないんだが？　ローベリア？」

「難易度は高く作ってある仕様よ」

「連邦のボール二つをオトリにするか……」

顎に手を当てながら考え込むオグスに転がり続けるシヤアが激突した。

「プルプルプル……!!」

「何をやっているんだ!? あんたは!？」

謎の奇声を上げているシヤアにぶつかった拍子にタラコにかけたマヨネーズへ頭を突っ込ませたオグスが怒鳴った。貴重な天然タラコはきちんとその口へ啜えている。

「鉄仮面を着けていた時の緊張、その反動が来るんだよ!!　オグス!!」

「ハンガーは遊び場では無い!!」

「君も遊んでいるだろう!？」

「ワン・ショットの訓練だ!!」

「そうは見えないぞ!？」

「本当のシミュレートとはそういうものだ!!」

低レベルな喧嘩を始めた、旧ジオン兵の中では最高クラスの腕前を持つている二人のエースの男達。その彼らへ呆れが半分、面白さが半分といった表情を向けているニムバスとローベリア。

「養子に入ったシャル家、再興の目処はあるか？ ローベリア?」

「なかなか、無い」

つまらなそうにそう答える彼女の顔に真剣見が帯び始めてきた。

「良い義理の両親だった」

「消えた娘とやらをお前に当てはめていたクルスト・モーゼスとは違ったか」

何気なく呟いたニムバスへ対して、ローベリアが真意な目を向ける。

「人を代用品とするなどと」

「嫌、だったか」

「可愛いブリツ子をやってはいたけどね」

「クルストへも、その気持ちは伝わっていたさ」

「で、しようね」

懐のムラサメ・チョコレートバーの包装を切りながら、ニュータイプの女はイタズラっぽい笑みを浮かべた。

「あの人、確実にニュータイプの人だったから」

「だろうな」

その言葉にニムバスが深く頷く。

「ニュータイプであるお前との共感能力が発揮される事もあり、宇宙の色という詩的を通り越してキラキラな言葉に理解を示したからな」
「純粋な研究者の人」

ローベリアのその言葉、それには皮肉の色が無い。

「だから、自分や人の愛情を見せるのも見せつけられるのも嫌で、ふさぎ込むように研究へ専念した」

ローベリアはそう言つて哀しげに笑いながら、チョコバー本当に少しだけニムバスに分けてやる。

「少ないな……」

「クルスト博士がやっていた事」

「そして、残りは他の奴にやり、自分が食つたと悪ぶれる、か」

「優しいニュータイプだったわ」

その昔を懐かしむ風のローベリアの横顔をニムバスはじつと見つめながらコーヒーを飲み干し、チョコレートを口へ放りこんだ。

「だから、人の優しさが可愛さ余つて憎さ百倍になつたときの恐しさを理解していた」

「ニュータイプの共感が人類にとって、致命的な事になるかもしれないと想像していたんだろうな……」

「共感とやらに囚われても、美味しい物は食べれないわ」

その言いながら、チョコレートを旨そうに食べるローベリアを微笑ましそうにニムバスは見つめる。

「私の両親の墓前に、シャル家の家紋が入つた金貨でも供える日は来るかしら？」

「俺に気を遣つて話題を変えたか？」

「答えなさい、ロリコン」

口の中のチョコレートに含まれている科学合成料タップリの甘さに辟易をしながらも、ニムバスは少し白い物が混じつてきた自分の金色の髪をつまむ。

「ブツホの私設軍は、何だかんだ言つて実力主義だろう、ローベリア」
「うん」

二本目のチョコレートバーを取り出すローベリア。

「もともと、ジオンや連邦で浮かび上がれない連中をメイン・ターゲットに勢力を強めているからね」

「カビの生えたジオニズムに幻滅した者にとっては、この上なく魅力的だ」

そう吐き捨てるように言つたニムバスの足元へ、シャアが転がつてくる。

「カビの結晶かい？ 私は？」

寝転がったシヤアが首だけを突き上げて、ニムバス達の顔を交互に見比べた。

「滅相もない」

「うむ」

そのニムバスの答えにニタツと微笑みながら、シヤアは身軽にハンガーの床から立ち上がる。

「その位の腹を上に向けた服従と媚を示してはくれんと、二股に限りなく近いお前達を大目には見れんよ、私は」

「感謝をしていますよ、シヤア」

「地球が無くなった後のリクルート、上手くやれよ、二人とも」

「は？」

そのシヤアの言葉の意味を問いただそうとニムバスがしたときには、シヤアは再び奇声を上げて床を転がり始めた。

「空耳、か？」

「じゃあ、ないの」

無関心そうに言うローベリアに対しても、ニムバスは複雑な表情を表に出す。

「ニュータイプの共感とやらで、シヤアの言葉の意味を汲み取れなかったか？」

「今の私は甘い甘いチョコレートに共感しているの……」

「味覚が腐っているのか？」

甘過ぎるだけで、健康に良いはずがなさそうなムラサメ・チョコレートをバクバクと唇へ頬りこむローベリアを見ながら、ニムバスは呆れた声を出した。

「唇だけは、マリオンの小娘なままであるな……」

「私が一番、自分の身体で好きな部分」

口の回りについたチョコレートを舌で舐めとりながら、彼女は妖艶に笑みを浮かべた。

「美しい紅い唇」

「ユウヘキスの一つでもしてやれば、お前の事に気がついていたかも

しんぞど？」

「カビの生えたマリオンの名にしがみつくユウ・カジマの頬は私の好みではない」

三本目のチョコ・バーへ取りかかるローベリア。

「ゆえに、カビ臭く期限切れのニュータイプ駆除薬であったEXAMの思い出を切り捨てた私の今の心が示す色」

「ブルー、EXAMとは別の毒が身体を蝕んだ女が口から滴らせる血液の赤、紅のローベリアだな」

「そう、ギラリと照りつける紅の宇宙、命が燃えて迸る生命を意味する美しき血の色」

挑戦的に虚空を睨み付けながら、女豹のごとき笑みを古のマリオンは浮かべた。

「ユウや私に見せた、蒼い宇宙の色はとうに無くしたか……」

「十年だぞ、十年」

蠱惑的な笑みを浮かべながら、ローベリアは自分の胸へ微かにその細い両手を食い込ませてみせる。

「小娘の胸と同じく、全てが変わる」

「変わらない、いや変われない男達も沢山いる」

少し目のやり場に困るニムバスを面白そうに両の瞳で見つめながら、ローベリアの可憐な唇が歪む。

「下らない事」

「言ってやるなよ……」

「同じ赤を尊ぶ人間でありながら、シヤアとその一党は進歩が無い」

「私はユウ・カジマの事を言っている」

「誰かしらあ、それ？」

激烈に甘いチョコレートを飲みこんだローベリアは、わざとらしく甘い声を出した後、未だにゲームに苦戦をしているオグスの元へ尻を振りながら歩み寄る。ゲームがクリア出来ないオグスをからかうつもりなのだろうか。

「全く……」

ローベリアの茶々とシヤアのパワフルな激突に翻弄をされながら、

「ニムバス」が乗るブルーデイスティニー2号機を撃破しようとオグスは必死だ。彼を見つめながらニムバスは瘦けてきた頬を人差し指で軽く搔いた。

「ユウとの戦いの時、こいつのツラを出して真実を言えば、確実に動揺を誘えるがねえ……」

そう言いながら、ニムバスはぼんやりと自分の機体の脇に置いてある実体剣へとその端正な顔を向ける。

「いや」

その金色とも何ともつかないクルタナの剣の輝き、それを見つめるニムバスの視線が鋭く光を放つ。

「私は騎士道、エグザム・マリオンの戦いをするのだ」

剣と同じ輝きの髪を持つ壮年の騎士、彼の唇から、軽く「ヒサツ」と言う言葉が疾った。

「ぶえつくしよん!!」

「ノーマルスーツ内で、くしやみなんぞしないで下さいよ……」

くしやみに同時に僅かに光りが灯ったユウが乗る機体のミノスフキー粒子変換器「グレイス」の感度に呆れた目を向けてから、サマナはマシントラブルを起こし、警告を発する自分の機体のコンソールへ再び目を這わす。

「ちくしよめ」

「風邪、ですか?」

「いや、俺のニュータイプ的要素を駆使して想像するに、ニムバスの奴が噂をしている」

「便利なニュータイプ能力ですねえ……」

「これは、何人かで悪口を言っているな、俺には解る」

「偏執と言う成人病を患いましたか、ユウさん」

「そのデカブツの残り少ない燃料を抜くぞ、童顔三十路の間際」

「そりゃ、たまらん……!!」

その昔からの上官の言葉に、超重武装のガンダムタイプであるZZ（ダブルゼータ）、その機体に乗ってユウとフィリップ機の模擬戦を記録していたサマナがわざとらしく慌てた声を出す。

「ストウラートの戦力、不安があるな……」

サマナが警告音が止まない機体の点検の為にZZを帰艦させる姿を眺めながら、ユウはボソリと呟く。

「シロッコさんのプレゼントを中心に、試作機、実験機のかき集めだからな」

「だから、お前の乗ったジム・タイプを集大成であるジェダが有り難く思えるんだよ、フィリップ」

「量産機のスピリットだな」

手練の技で常にカタログスペック以上の性能を弾き出すと連邦で大きな評価を受けているベテランパイロット「フィリップ・ヒューズ」の機体がユウ機の側へ寄ってきた。

「腕をあげたな、フィリップ」

漆黒の宇宙空間で、Gマリオンを駆るユウ画力はそう言いながら、その機体の手でフィリップのジェダを小突く。

「まあな……」

フィリップは少しユウの感想に対して、気の無い返事を返す。

「俺の動きに簡単についてこれている」

「そうではあるんだがな……」

最新鋭ジム・シリーズであるジェダのシャープな外見を太陽の光に照らしながら放たれるフィリップの言葉にはどこか力が無い。

「なあ、ユウ」

「何だ？」

「ニムバスの旦那との決闘、反故にしたらどうだ？」

「何を今さら」

苦笑いをしながら、ユウはGマリオンのメイン推進器「グレイス」を軽く噴かす。

「こっちのGマリオンに合わせて、舞台を宇宙に移してくれたんだぞ

？」

「もともと、向こうの勝手から始まった私闘だろうか？」

「いつかはこうなると、どこかで思っていた」

「止めときな、ユウ」

「いや」

いつになく強い口調でそう言い放つフィリップの事を少し疑問に思いながらも、ユウはコクピットの中で静かに頭を振った。青みがかった彼の黒髪にはちらほらと白い物が混じっている。

「クルスト博士の昔のEXAM研究所付近の宙域、サイド6の近く」

十年近く前のニムバスとの死闘を思い出しながら、ユウが懐かしげにその頬の瘦けた顔を綻ばせた。

「良い舞台だ」

「……」

「一年戦争時のEXAM、その真の墓標に相応しい」

「まあな……」

ユウの言葉をため息をつきながらも、フィリップは彼に一応の相槌を打つ。

「マリオンの声、再び聴こえるかもしれない」

「二年戦争の後の戦場でも、時々聴こえてくるって言ってなかったか？」

「ウンム……」

そのフィリップの言葉に対して、ユウが軽く腕を組んで考える。

「あれらの声は本当にマリオンなのかな……？」

「じゃあ、誰なんだよ、ユウ？」

「さあ……」

首を傾げながらも、ユウは軽快に自機を動かしながら、武装のチェックを行う。頭部のバルカン砲の試射がスペースデブリを打ち砕く。

「ユウ中佐」

母艦ストウラートから、サラ達のモビルスーツが宇宙を駆けてきた。

「決闘前のトレーニング、手伝います」

「おう」

蒼いブルーデイスティニー5号機、ジエダの改良型であるGマリオンのバイザー型センサー、それがユウの声に答えるかのように鈍く光る。

「お前達も相当に腕を上げたからな」

「はい……」

ユウがもう少し、ニムバスとの戦いの事から思考を離していれば、そのカツの返事の違和感を感じていただろう。

「そうです、よね……」

「良い勝負になるよ、サラ」

力強く飛翔するGマリオンに乗るユウは結局に、彼の言葉を聞いた時のカツやサラの簡潔な返事に込められた気持ちを理解する事は出来なかった。

「アムロさんよ……」

「言ってくれるなよ、フィリップさん」

ストウラートのブリッジで腕を伸ばしながら、アムロは帰艦してくつろいでいるフィリップに微笑みかける。

「彼にもプライドがある」

模擬戦を行うユウ達の機体が放つ光の軌跡を眩しそうに眺めながら、アムロは軽く目を細めた。

「誰にだってプライドがあるんだ」

「あんたもそのプライドを大きく持った赤い彗星に会いにいくんだったんだよな？」

「俺をついでに乗せてくれて、ありがとうな」

「大した事じゃないやい……」

軽く頭を掻いたフィリップは、コーヒーを飲みながら無言でユウ達の機体の姿を眺める。

「なあ、アムロさん」

「ん……？」

「人を上手く説得できる方法、ないだろうか？」

「論より証拠だ」

アムロが傍らに立つ女へもコーヒーを渡してやりながら、自分の微かに赤みかかった髪へ手を置いた。

「ニムバスとの戦いに生き残れば、ユウも自分の真実に解ってくれるかもしれない」

「危険な賭け、かな？」

「話を聞く限り、ニムバスはユウに死んでほしくはないんだろ？」

「それでも、決闘は決闘、死闘にして私の闘だ」

大きなため息を吐き出しながら、ファイリップがうんざりしたようにそう吐き捨てる。

「まあ、ユウが乗り気だから仕方がないけどな」

「運を信じろよ、ファイリップ……」

「へいへい……」

そうぼやきながら、ファイリップは今現在の連邦派勢力とネオ・ジオンの戦局を訊ねようと、ミリコーゼフ艦長の私室へと歩いて行った。

第49話 エグザム・マリオン（前編）

「クルタナ、やはりこれを持つか？」

刃の付いていない、一見をすると棒のように見えるモバイルスーツ用の実体剣を見つめながら、オグスがその眉を軽く潜める。

「必要なんだ」

凜々しくパイロットスーツに身を包んだニムバスが試作型の質量兵器「クルタナ」をしげしげと見つめている周囲の者達へ薄く笑った。

「奥義を使うには」

「奥義つて、あんた……」

ローベリアの声には呆れた色がある。

「これに描いてあった」

「どこでこんなものを見つけたんだか……」

ニムバスが小型端末から映し出す、旧世紀の物と思しきマンガをローベリアが情けない物を見るような目で眺めた。

「結局に、クルタナの真の機能の付加は間に合わなかったね」

「かまわんよ」

軽い口調でそう呟きながら、ニムバスが自機のコクピットへ潜り込む。

「ユウ・カジマごときにはちょうど良いかもしれん」

「傲慢だな、騎士ニムバス」

「あなたが常に睨み付けている、あの男程ではないだろう？」

「まあな……」

ザンジバルへお邪魔をさせてもらった連邦のスーパー・ニュータイプエース、彼がその傲慢という言葉に向けた相手はニムバスの他にも、もう一人いるのであろう。隣でその相手が古臭い歌謡曲を口ずさんでいる。

「ゆえに、騎士道の慈悲が出来るのですよ、ニュータイプ」

「騎士、ね……」

アムロは先程言った皮肉を無視し、歌謡曲を口ずさみ続けるシャア

へチラリと視線を向けてから、アイドリングを始めたニムバス機、サイコ・エグザムを複雑な表情で見つめていた。

「機体のチェック、オールグリーン」

「ユウ中佐」

「何だ、シドレ」

「細工のし過ぎではないのですか？」

Gマリオンの調整の手伝いをしていたシドレは、その過剰な隠蔽型の装備に瞳を丸くして驚いた。

「こんなにゴテゴテと付けては、勝てる物も勝てない……!!」

「相手はニムバスだよ、シドレ」

冷静にコクピットから微調整をしているユウは、ポケットから小さなムラサメ・チョコレートを取りだし、口へ放り込む。

「どんなにあいつが大層な騎士道などと主張しても、油断は出来ない」
「策に溺れやしないかって言っているんです!!」

「シィ……」

シドレの怒鳴り声など聞いた事もないストウラートの面々は、一緒にその怒声に驚き、お互いの顔を見合わせて黙りこんだ。

「中佐らしくもない……!!」

「怒るなよ……」

珍しく、非常に珍しく感情を荒げるシドレへ、そうゆっくりと声をかけてやるユウ。

「俺の軍人生活の集大成であるベテランの戦い方、見ていてくれ」

「ユウ……!!」

薄くその瞳に涙を浮かべるシドレをよそに、Gマリオンのグレイス・コンバーターへ光が灯る。

「シドレちゃん……」

「わかっていますよ、フィリップさん……」

「ハンガーの隔壁が閉じるぜ」

「わかってますすって……!!」

激しく首を振るシドレをなだめ、支えながらフィリップはハンガ―の出入り口へ向かう。

「ユウ」

フィリップは後ろ姿のまま、Gマリオンのユウへ声をかけた。

「何だ、フィリップ?」

「頑張れよ」

「ああ……」

背中を向けたまま、親指だけを自分へ向けて立ててくれたフィリップの後ろ姿へ微笑み返しながら、ユウはコクピットのハッチを閉じる。

「さ、シドレちゃん……」

「はい」

「足元に気を付けな」

「すみません、フィリップさん」

その二人を気づかうような視線を向けながら、他のモルモット隊の面々やメカニック達も真空状態、無重力となるハンガーから早足で出ていく。

「皆、少しさ……」

計器ランプの光だけが灯る暗いコクピット内で、ユウはノーマルスーツのベルトを固定しながら、一人その口から何かを吐き出すように呟いた。

「焦燥を感じている俺に、優しすぎやしないかい……?」

「フィリップさん」

「シドレちゃん……」

ハンガーの上方デッキからモルモット隊の皆とメカニック達は薄い蛍光に照らされるユウの機体を黙って見下ろしている。光を纏いながら静かにストウライトから発進をしようとするGマリオン。

「不安なんです」

言うな、とシドレへフィリップが言おうとした矢先に、傍らまでやってきたサマナが口を開く。

「仕方ありませんよ、フィリップさん」

「サマナちゃん？」

「あんな姑息な手段を選び、なおかつシロッコさんの忠告を無視した今の彼には相応しい末路だ」

冷然とそう言葉を吐き捨てるサマナに、モルモット隊の面々の視線が集まる。

「冷たいですね、サマナさん……」

その言葉を吐いたサマナへ、シドレが少し非難じみた視線を向けた。

「基本を守らずに、奇策で勝てると思っただけだ」

シドレの視線を正面から浮けとめ、それでもサマナは冷たく言葉を続ける。

「シロッコ様の、あくまで隠し武器の類いには過大な期待はするなという御の言葉」

チラリとサマナの顔を覗き込みながらサラがそう言い、その唇から軽くため息を吐いた。

「ありましたね、サマナさん？」

「そうですよ、サラさん」

じつとユウ機を見つめるサラへ、サマナは深く頷く。

「ジ・オという、基本に最大限に忠実な設計思想、その機体だからこそ、隠し腕という小細工は有効だったんだ」

「しかしですね、サマナさん」

真剣な顔をしたカツが、歴戦のパイロットであるサマナへ問いたです。

「Gマリオンとて、汎用型のモビルスーツですよ？」

「違う」

デッキへ上がってきたモビルスーツの技師であるアルフがモルモット隊の会話に割り込む。

「強襲型、いびつなバランスに仕上がってしまった」

「そうなのですか、アルフさん？」

「グレイス・コンバーターの出力が異常なんだ」

少し目を腫らしているシドレを極力刺激しないように、アルフが落ち着いた声でゆっくりとそう話した。

「天才様、の作った推進器だからですか？」

「それも違う」

サラがシドレの変わりに発した問いへ、アルフは首を振ってみせる。

「謎の言葉が疾るんだ」

「いわゆる、ニュータイプ的な通信って奴でしようか？」

「違うよ、運用データの解析時、そのプログラムの文字列にだよ」

アルフの話す理解が困難な言葉、それを完全に理解出来る人間はこの場所にいない。

「シロツコさんには？」

「無論、伝えている」

「けったいな……」

「全くだな」

カツの言葉にそう頷いたきり、アルフは押し黙る。

シユアア……

光を発しながら、Gマリオンが艦から射出された。

「しかし、な」

そのユウ機の放つ光の軌跡を眺めながら、ボソリとフィリップが呟く。

「ユウも無意識に自分の身体の事に気がついているのかもしれないぜ……」

「同感です」

基本に最大限に忠実ゆえ、付け入る隙がない。そのようにティターンズを始め、連邦勢力の各部隊から高い評価を受けているパイロット「サマナ・フィリス」が即座にフィリップの言葉に同意した。

「それが、真っ向勝負を恐れる兵装をユウさん選ばせてしまった」

「歳、そのせいかな……」

サマナの言葉にどこか哀しそうにその顔を曇らせながら、フィリップが軽く息を吐く。

「あらゆる面でユウがな、フィリップよ……」

「ウン？」

眼鏡に手をあてながら、冷たい眼光を放つアルフが数枚の書類をフィリップの目の前に突き出した。

「そうかい……」

その書類に書かれていたユウの身体の診断結果、その内容へ目を通したフィリップの顔色が青くなる。

「一応、ミリコーゼフ艦長に経過を含め、色々と報告をしてくるよ」

「はい……」

サラの言葉を力無く落とされた両肩へ受けながら、ストウライトのブリッジへ向かい上がっていくフィリップ、突如に老いを匂わせ始めた彼の背中を上方デッキの面々が複雑な面持ちで見つめていた。

「アルフさん、それは……」

「だめだ、見せられない」

書類へ手を延ばしたカツから、アルフは慌ててその紙束を背中に隠す。

「察しなよ、カツ……」

善意とは言え、サラのその声こそ無遠慮の極みだったのかもしれない。

「ユウ中佐……」

シドレの目から再び涙がこぼれた。

「遅いな……」

「時間はとうに過ぎてている」

あらかじめ決められていた空域には、ユウのGマリオンが放つ光だけが輝く。

「遅い……!!」

相当に過ぎた時間を見ながら、ユウは苛立ちに満ちた声を上げる。

「まさか、あのニムバスが怖じ気づいたか?」

「それこそ、まさかだよ」

「そうだな」

明瞭な声を発した通信器へ一つ鼻を鳴らしてから、再度ユウはその口を開く。

「そうだろうな」

そう言った後、ユウは軽く唇を上げながら、Gマリオンの頭部を太陽の方向へ向け、そのバイザー状のメインカメラを光らせる。

「待ちわびたぞ、ニムバス」

太陽を背に受けて、漆黒の重モバイルスーツが静かにユウの機体へ近づく。

「肩が片方だけ赤い……」

「最後の返り血だよ」

「俺の血か?」

「さあてね……」

ユウ機の蒼いビームサーベルと、ニムバス機の金色をした実体剣が太陽の光に呼応した。

「娯楽番組として放送されるとはな……」

ミリコーゼフ艦長の薄く開いた目が、テレビに映されている二つの黒と蒼のモバイルスーツに注がれる。

「その収益からの利益の一部が、な」

「はい」

通信士のミリーリがミリコーゼフ艦長へ涼やかな声で答えた。

「連邦とネオ・ジオン両方へ配分されるから、どちらもこんなプロレスをやることにオーケーを出した、ですね?」

「だな……」

ミリーリの言葉に、フェイブ操縦士がパンを食み砕きながら軽く頷く。
「7、3でニムバスさんの優勢ねえ……」

フェイブはあらかじめ買っておいたトトカルチョのチケットを眺めながら、テレビへと視線を戻す。

「生中継はサイド6周辺だけですけどね」

ミリーリがそう言いながら、僅かにその顔をフィリップの方へ向けた。

「生中継、つまりに生本番、ね」

二つの機体がストウラートに近づき、フィリップ達の肉眼でも見えるようになる。

「改めてユウの腕前を見ると、さ」

「何よ、フィリップ?」

「俺はあいつ、ユウの奴を過小評価しているんじゃないかって、錯覚を感じるんだよ、ミリーリ」

「では、錯覚なんじゃないの?」

「インヤ」

ミリーリの言葉にフィリップは軽く首を振ってみせた。

「そんなに世の中甘くない……」

サイコ・エグザムの膝からのビーム砲からの光を軽くユウのGマリアンはかわしながら、お返しとばかりに彼の機体の左手に握られているランチャーからビームが疾る。

「スポンサーになってくれたらしいですよ」

統括通信士のアフラーがそう言うと同時に、ユウ機とニムバス機は高速でストウラートから離れた。テレビの中の二機が肉薄をし、実体剣と蒼い光を放つビームサーベルが交差し、火花を散らす。

「誰がだ……?」

「アムロ・レイの昔からの女、らしいです」

「フム……」

そのアフラーの言葉にミリコーゼフ艦長は軽く唸る。ユウの乱射したビームランチャーがことごとくサイコ・エグザムのリフレクター・インコムにより乱反射された。

「新興宗教の教祖らしいですけど」

「誰だい、そいつは」

「さあ……」

アフラーがフィリップの言葉に軽く肩を竦めて見せた。

「あのシャア・アズナブルとも知り合いらしいですけどね」

「棒のような剣で、俺のGマリオンが倒せるとでも!?!」

「騎士の慈悲を現すには、相応しい剣だよ!!」

「なめるな!!」

大振りに振るわれたユウ機のビームサーベル、その猛攻をニムバスの機体は後ろに退きながら凌ぎ続ける。

「チツ……!!」

軽く目の前が暗くなった事へ悪態をつきながらも、どうにかユウはサイコ・エグザムの動きに目を這わせ続けようと、その神経を集中させた。

「光、あれだな」

ウェイブライダー形態へ可変をしているジオ・メシアを駆りながら、シロッコは前方の決闘にその視線を注ぐ。

「Gマリオンのグレイス・コンバーター、出力が弱いな」

シロッコ機のコクピットへもユウ達の戦いの様子が機体内ラジオで伝わってくる。

「電波中継の為に、ミノスフキー粒子濃度が低くされているせいだな……」

不愉快だな、そう呟きながらシロッコはジオ・メシアの双頭の機首をサイド6周辺へ向けた。

「加減をする剣か、その棒は?！」

「当たれば痛いぞ!!」

「そうだろうに!!」

実体剣「クルタナ」によりビームサーベルを弾き飛ばされたユウは、牽制の為に指先に仕込まれたフィンガー・マシンガンを放ちながら、微かに後退をする。

「非っ殺!!」

サイコ・エグザムの剣が今度はGマリオンのビームランチャーをはね飛ばす。

「バカにするな!!」

ユウは叫ばながら、機体の股間部からトリモチを射出させる。同時に予備のビームサーベルの基部を腰から取り出した。

「ジァ!!」

「甘い!! ユウ!!」

実体剣に取りついたトリモチが即座に蒸発し、かき消される。

「甘いのはそっちだろう!!」

自分の放った攻撃が失敗したからといって、いちいち驚かないのがユウのベテランたる由縁である。

「隙の一つもわぎと作って欲しいものだ……!!」

サイコ・エグザムから放たれるビームを身軽にかわしながら、ユウは額に流れる汗を感じつつ反撃の機会を狙っていた。

「やるのか、ニムバスは?」

「奥義、とやらか、ローベリア?」

オグスの言葉に無言で頷きながらも、ローベリアはテレビからその目を離さない。

「ユウ・カジマは焦っている」

「ニムバスの動揺作戦が成功したか」

テレビから視線を離さずに、再び頷くローベリア。

「昔の、一年戦争時の因縁の場所を決闘場に仕立てて、悪い意味で彼を緊張させる」

「そして、その緊張をさらに増す為に遅れて登場をした」

「昔、ニホンという国であった騎士の決闘、その故事に習ったそう
だ」

「キシドーとブシドーを完全に混同しているな、ニムバス君は」

苦く笑ながらも、オグスの視線もテレビから離れない。

「人は、変わるものだな……」

ローベリアはオグスに聴こえない位小さな声を、その口の中で動かす。

「ユウも、ニムバスも」

EXAM、いやクルスト・ズム・ダイクン博士。ミュータントにしてニュータイプ、その自らの同族を滅ぼす決意をした新人類のクルスト博士。

そして、彼のアンチ・ニュータイプ思想に選ばれた二人の蒼の乗り手、ペイル・ライダー。

「そして、マリオンも」

その騎士達が振るう断罪の剣のマテリアルとして選ばれたローベリアは昔に棄てた自らの名を舌に乗せた。

「もはや全くに、違う人間だ」

昔の面影が全く残っていないマリオンは、そう呟きながら軽く短めにカットをされた自分の髪へ手を差し込む。昔の蒼とは違う、栗色の髪が薄く輝く。

「十年、か……」

「ナイン・ドラゴン・ヘッド……」

クルタナの刃の無い切っ先をユラリとニムバスは突き出す。

「チャージ!!」

サイコ・エグザムから蒼い光が迸ったかのようにユウが感じた時、ニムバス機の姿がその視界から消え失せる。

「何い!?!」

しかし、ユウは反射的にGマリオンを動かしている。ユウ機のビームサーベルが何かを強く弾いた。

「剣戟!?!」

ほぼ同時に叩きつけられるサイコ・エグザムの実体剣による刺突の嵐を、ユウはほとんど本能的に機体とサーベルを駆使し、捌く。

「さすがにユウ中佐……」

二人の決闘を流しているテレビが一瞬、ニムバス機の動きを全く捉えられなかったのを見て、カツが呻き声を上げる。

「私では今の攻撃で、勝負がついていました……」

「僕だって、そうですよ」

シドレの呻くような声に、サマナが深くその首を頷かせた。

「あの突撃に、対応が出来るとは」

「確かにな」

サマナが自身の額へ流れた一筋の汗を手の甲で軽く拭き取りながら呟く言葉に、アルフも同意をする。

「なんだかんだ言って、ユウは」

「彼だけではないでしょう、アルフさん?」

「一年戦争時からの二人のベテラン・パイロット、EXAMに選ばれた騎士達という事だな、サマナ?」

アルフが自分の手に持つ端末へ流れてくる、艦の外へ設置されたコンマ単位での撮影が出来る特製の超精密カメラ、それをしてもしもサイコ・エグザムの今の動きに対しては残像が映るほど。

「だが、な」

「はい」

アルフが続けて言う言葉、その内容はサマナには容易に想像が出来る。

「ユウは押されている」

「モビルスーツの決闘ねえ……」

「黒いガンダムと蒼いジム・タイプか」

サイド6の中に立つ小さな家、そこで二組の男女と一人の青年が放送中のテレビをじっと眺めている。

「どちらが勝つかしら？」

「普通に考えれば、ガンダムだけどね」

その顔へ少年の面影を残す、二十歳前後の青年が、二回りほどに歳が上だと思われる男の顔へその視線を向けた。

「量産機のザクでも、小細工でガンダムを追い詰めたパイロットもいるからね」

「昔の話さ……」

青年の言葉に男は顔をしかめながら、コーヒーへ口を付ける。

「どっちが勝つにしろ」

「勝つにしろ？」

「長すぎるよ」

「何が？」

その男の愚痴とも取れる言葉に、女が形の良い眉をしかめながら訊ね返した。

「戦争が」

「そうね……」

その三人はじっと黙ってテレビに視線を向ける。ちょうど蒼いジム・タイプの右肩が剣の連撃により破壊され、内部に隠されていたグレネードが爆発する。

「まずい」

「コーヒー、不味かった？」

「馬鹿……」

軽く女の方へ微笑みながら、男は再びテレビへその目を向けた。

「ジムが負ける」

「ええ……」

「何か、自滅しているように感じる」

「玖!!」

最後のクルタナの刺突がユウ機の左脚を捉える。

「サア……!!」

「さすがに、ユウ・カジマ……!!」

Gマリオンから少し離れた背後へ、瞬間的に自機を飛びかからせたニムバスの息は荒い。

「何発、入った?」

「4発、いや5発だろうか」

Gマリオンの損傷の内、特にアクチュエーターが半壊した右腕がもつとも酷い。火花が断続的に散る。

「フウ……」

ニムバスが再び無刃剣クルタナを正眼に構えた。

「また、今の技を?」

「出来んな」

薄暗いコクピット内で、ニムバスはその頬の瘦けた顔に笑みを浮かべる。

「私自身も、サイコ・エグザムも保たない」

「超人であるお前をして、リミッターを外し初めて使えるモビルスーツの駆動、か?」

「ここまで、この機体のサイコミュと機体制御を強化しても、警告音がうるさく咎めるよ……」

そう言いながら、ニムバスは機体内のアラート音を切り、サイコ・エグザムの出力を増大させようと、スロットルへ力を込めた。

「黒いモバイルスーツが勝つわ……」

「そうか？ ララア？」

テレビの明かりだけが灯る一室の中、自分の肩越しに答えるシャアが見つめる空間には誰もいない。

「シャア」

「何だ？ アムロ？」

「幽霊等の類いは、いると思うか？」

「いるさ」

そう言いながら、シャアは自分の後ろへその指を指す。

「私の後ろに」

「証拠でも？」

「声、甘い薫り、私を撫でる細い手」

シャアは自らが感じている感覚を正直にアムロへ語る。

「そして、唇の厚み」

「見えないのだろうか？」

「それが魂というものだ」

額にある小さな古傷を軽く撫でながら、今度はアムロの方へシャアが向く。

「羨ましいか？ アムロ」

「逆だ」

「負け惜しみかい？」

「五感の数を封鎖された方が、ララアの本当の姿を認識出来るというのは、実に皮肉な事だな」

「摩訶不思議なレトリックを言うようになったじゃないか、アムロ」
シャアはそう言ったきり、再び二人の戦士の戦いに注目をする。

「ララア」

「解っているわ、アムロ」

「シャアを苦しめてやるな」

「しかし、私には」

鈴の音が暗い部屋へ鳴り響く。

「他にシヤア大佐を慰める方法が無い」

「ララアの存在自体がシヤアの心を追い詰める」

「ええ……」

そう言ったとき、像の無い女の声はしなくなった。

「お前にも彼女の声が聞こえるみたいだな、アムロ」

「声、だけだよ」

「それが、お前とララアの関係の限界というものだな」

そのシヤアの軽蔑を帯びた声に、アムロは何も答えなかった。

第50話 エグザム・マリオン（後編）

「ちい!!」

半壊したGマリオンの右腕を破壊しようと振るった実体剣クルタナが謎の爆発を起こした。

「手に何かを仕込んでいたか!？」

「違うな」

右腕の手のひらでクルタナを受け止めたユウが機体コンデイションのチェックを行いながら、やや掠れた声でニムバスに答える。

「モビルスーツの手に流れる電導パルスの電圧を変え、ミノスフキー粒子の影響を受けている武装に干渉させる」

完全に破壊され、骨組みだけとなった右腕をニムバス機へ突き付けながら、ユウが薄く笑みを浮かべる。

「一種の奇策、喧嘩技だ」

「クルタナ、これがIフィールドを纏っている事に気がついたか」

「ビームサーベルと切り結んで、欠片も破損をしないからな」

そのユウの言葉に唇を歪めながら、ニムバスは軽くヒビが入ったクルタナを一旦背中中の大型の剣の鞘に納めた。

「しかし!!」

サイコ・エグザムの両膝に設置されている、ビームキャノン兼用のサーベル発生器をもろ手に持ちながら、ニムバス機から淡い蒼が迸る。

「未だに手があるのだよ!!」

「器用さであれば、俺は負けない!!」

二刀流で切りかかるニムバスへ対して、ユウが残った左腕から鎖のような物を投射した。

「小細工なり!!」

チェーンに絡まれたサイコ・エグザムの左脚が爆発をする。コクピットのニムバスはその衝撃に身体を震わせながらも、機体の勢いは止まらせない。

「まだあるぞ!!」

Gマリオンが急速にサイコ・エグザムから距離を取る、ニムバス機の上方に揚がったユウ機の足の裏から再度チェーンが放たれた。

「まずい!!」

ストウラートのブリッジからフィリップがハンガーへの緊急用通路へと駆け出す。

「フィリップ!？」

「ユウの奴に勝ち目が無い!!」

ミリーリへそう答えながら、フィリップはハンガー直結通路へ飛び込んだ。

「ユウ、敗れたり!!」

「何イ!？」

足から発射されたチェーンがサイコ・エグザムの赤い右肩を破壊すると同時に、ニムバスが勝ち誇った声を上げた。

「サイコ・エグザムの肩の最後の返り血!!」

リクレクター・インコムの有線を切断し、質量兵器としてGマリオンへ跳びかかせながら、サイコ・エグザムがユウ機へ肉薄する。

「EXAM、クルスト博士の呪縛!!」

「それが何だと言うんだ!!」

「この返り血が無くなるという事は!!」

サイコ・エグザムのビームサーベルによる連撃がGマリオンへ覆い被さった。

「私が無血勝利をするということ!!」

「ただ、俺に勝つだけでは飽きたららないと!？」

「殺さず、すなわち非っ殺の!!」

「ジッアア……!!」

二刀流ビームサーベルの出力を無理に受け止めたユウ機のサーベ

ルがバーストし、破壊される。

「騎士道による完全勝利!!」

「どこまでも、傲慢な!!」

「それこそがな、ユウ・カジマ、マリオンの騎士よ!!」

頭部バルカンで牽制をしながらも、ユウはどうか勝機を見出だそうとサイコ・エグザムの周囲をスラスターを駆使し、まとわりつく。

「無刃剣クルタナによる慈悲の勝利!!」

「くっ!!」

機動力ではGマリオンが勝ってはいる。しかし、それだけだ。

「ジエダを出す!!」

「ユウ中佐を信じられないと!?!」

なりふり構わずノーマルスーツへ着替え始めるフィリップへ、シドレがそのまなじりを吊り上げながら怒声を発する。

「私は中佐を信じます!!」

「完全にパワー負けをしている、ユウは!!」

裸になったフィリップなど、サラもシドレも気にも止めない。そのままノーマルスーツを纏ったフィリップはハンガーへ駆ける。

「アルフ!!」

「解っている!!」

空気と真空、重力と無重力を切り換える為の小部屋、通路とハンガーの中継点へ入ったフィリップの怒鳴り声にアルフは急いでシャツター類のスイッチを操作した。

「すでに見切っている!!」

「これなら、ニムバース!!」

フィンガー・マシンガンに続き、ユウの機体の胸部からも隠しビーム砲が疾る。

「無駄だ!!」

「奥の手、切り札である!!」

出力不足のビームの攻撃を受け付けられないサイコ・エグザムの装甲を睨みながら、ユウはGマリオンの腰から伸縮式のヒート・サーベルを飛び出させる。

「ヒート・サーベル!?」

かつてニムバスが搭乗していたEXAM搭載機である「イフリース改良型」、その機体が搭載していた白兵器によく似たGマリオンのサーベルにニムバスが感嘆の声を上げる。

「懐かしい、最高じゃないか!!」

「ただのサーベルではない!!」

禍々しさを放つ形状のヒートサーベルを左手で掴みながら、威嚇をするようにユウはその刀身を振り回す。

「ギザギザのトゲトゲに満ちた刃は当たると痛いぞ、とても痛い!!」

「マシーンが痛みで悲鳴を上げると?」

「さらには!!」

ギャファ!!

乱雑なノコギリの様な刃を備えたサーベルを器用にユウは翻し、素早くサイコ・エグザムの右腕を捉えた。

「切りつけたモビルスーツのマシンオイルや電導パルス、それらを熱量出力に変換出来る!!」

「油と血を吸い取る外道の剣か!!」

偶然にか、ユウの突如の奇襲に対応が遅れた自分に歯噛みをしながら、ニムバスは赤く、焰のように輝くヒート兵器に鋭くその眼差しを向ける。

「しかしな、ユウ!!」

ジオア!!

「そのような物を持ち出す事、それ自体が!!」

「言うな、ニムバス!!」

最新技術を駆使して製作されたヒート・サーベルはサイコ・エグザムのビームの刃を受けても砕けない。

「そして、数々の小細工が!!」

「言うなといっている!!」

赤い焰の剣を嚙猛にサイコ・エグザムへ叩きつけるユウ。何かに怯えたような「ヒヤツクリ」に似た声がユウの唇から漏れる。

「お前の衰えを顕している!!」

疾風のごとく蹴りあげられたサイコ・エグザムの脚をユウは焰の剣で受け止め、刀身から赤い光を散らす。

「黙れ!!」

Gマリオンの頭部バルカンが弾丸を撒き散らした。

「理念なきマリオン、理念なき優しき!!」

「黙れ、黙ってくれ!!」

「それらが行きつく成れの果てだ!!」

「言わないでくれ!!」

バルカン砲が焼きついたGマリオン、悲鳴を上げながらユウは左肩のグレネードを放ち、ニムバス機へ突進をする。

「うわべのマリオンよ!!」

バア!!

サイコ・エグザムの片方のビームサーベルがGマリオンの焰の剣に弾き飛ばされた。グレネードによる被害はほとんど見られない。

「私ごと騎士ニムバスがお前を裁く!!」

再度、無刃剣クルタナをその手に持ち、ニムバスはその剣を正眼へと構える。

「終わりだ!!」

電光のようなGマリオンの頭部を狙った無刃剣の一撃、間一髪でユウはその閃撃をかわす。

「しぶといな、ユウ!!」

「俺のкокピットを無視し、頭部を狙う余裕がまだあるか、ニムバス!!」

「お前の死は私の勝利ではない!!」

「まだ、勝負はついていない!!」

「お前の降参、それこそが私の勝利!!」

「そこまでして、俺の屈服する顔が見たいか!？」

「そんなものはどうでも良い!!」

切り上げられた火焰剣を紙一重でかわしながら、ニムバスが再び剣を構え直す。

「エグザム・マリオンによる騎士ニムバスの証明!!」

「謎の言葉で俺を惑わすか!？」

その答えをまたも頭部への刺突で答えるニムバス。

ザブオ!!

至近まで接近をしたニムバスが駆るサイコ・エグザムの首筋、それをGマリオンの口部分へ隠されたヒート式のブレードが噛みちぎる。

「生き恥をさらす位であれば、俺はどんな手でも!!」

ユウ機の予想外の抵抗である噛みつきに、今度はニムバスの方が機体を引く羽目となった。

「手負いの獣だな……」

ユウの必死の戦いを愉快そうに眺めながら放たれるシヤアの言葉、しかしその口調の中には、どこか自嘲を思わせる乾いた色がある。

「では、な。アムロ・レイ」

「行くのか、シヤア……?」

「ゼダン・ゲートへアクシズがぶつかっただらしい」

「ティターンズへの最後通牒、だけではないな、シヤア?」

「全く、ハマーンとミネバめ」

アムロの咎めるような声を、わざとらしく無視をしてみせるシヤア。

「あの女、いや女達の独断と?」

「破滅のタクトは私が執る、そう言ったはずなのだがな……」

そう言いながらも、シヤアの声にはどこか嬉しげな色が混ざっている。

「さ、行った行った……」

「俺は最後まで、あの二人の戦いを見たかったがな、シヤア」

「私の休暇は終わりだ」

「俺もだよ、シヤア」

暗い部屋の中、二人のニュータイプの男が握手をした。

「結局、その長袖の服、その腕に隠した拳銃を私に向けなかったな？」

「強化人間とは恐ろしいものだな」

「これはニュータイプの方の勘だぞ、アムロ？」

「銃弾がその強化した皮膚で止まりそうだ」

「私を甘く見たようだな……」

「撃つときに肩を外してでもいいから、マグナムの口径以上の銃を持つてくるべきだったよ」

そう言いながら顔をしかめているアムロ、シヤアが声を高くして笑い声を上げる。

「そんなに地球が憎いか、シヤア？」

「檻であり、巣窟だな」

「ゆえに、アクシズを投げつけて破壊しても良いと？」

「そんな大それた事、出来るものか……!!」

そう言いながら、大げなジェスチャーをしてみせるネオ・ジオン総帥シヤア・アズナブルへ、アムロはじつと冷たい視線を投げつけた。

「番組、かえようよ」

「すまない、我慢してくれ」

「嫌だよ、こんなの……」

サイド6の民家、そこで決闘を観戦している三人の男女の内、他の二人くらべて十位は年が下と思しき青年が家の主人へ訴えた。

「見てみたいんだ」

「何を？」

女の声に三十近い男は答えない。テレビの中では蒼いジムがその左腕に剣を持ったまま、黒いガンダム・タイプの機体を殴りつけている。

「何かを守っている男の足搔きを」

「昔のあなたね……」

その年代の女の言葉に男は無言で頷く。

「滅び行く者の戦いか……」

再び、蒼いジムの口が黒い機体を食いちぎる。その牙から血のようなオイルが周囲に散った。

「シドレ」

「嫌だ……!!」

獣の戦いをするユウを見るのに耐えられなくなったシドレが泣きながらその身を崩れさせている。

「忘れたの?」

「何が、サラ……!?!」

「ユウ中佐を信じると」

Gマリオンのコンバーターから紅い光が迸る。背中から血を垂れ流しているユウの機体、Gマリオンのキックがサイコ・エグザムの胴をまともに捉えた。

「僕たちのユウ中佐、オールドタイプでありながら、ニュータイプの世界を見れる、可能性の男」

そのカツの言葉に、その場にいるモルモット隊、そしてメカニック達が深く頷く。

「ラプラスのユウ……」

サマナが見つめるGマリオンの火焰剣が、紅く輝きながらニムバス機の右脚を切断する。

「信じてみようじゃないか、シドレ」

「はい……」

アルフの言葉に、シドレはその両目の涙を拭く。

「ユウとニムバスをな……」

「はい、アルフさん」

シドレの視線の先のモニターで、サイコ・エグザムの至近からの胸部ビーム砲がGマリオンの左脚を粉碎した。

「それでこそ、私の脚を二度も奪った男の気概!!」

右脚を失いながらも全くに動揺せず、ニムバスはユウ機の火焰剣を受け止める。非常に頑健に造られているはずのクルタナに大きな亀裂が走る。

「しかし、ユウ!!」

必殺の念を込めて放った一撃をかわされたGマリオンに出来た大きな隙。

「私の真の勝利!!」

後ろをとられたGマリオン、しかしユウは無刃剣クルタナ、ニムバスが放つ必殺の念を込めた刺突を心眼、神業の如きにさける。

「真の勝利こそが!!」

ユウを再びブラック・アウトが襲う。見ずに振り払われた火焰剣の残撃がサイコ・エグザムの左腕をはね飛ばした。

「全てを優先する!!」

確実な狙いのクルタナの切っ先がGマリオンの頭部に疾る。

「ならばに!!」

ユウ機の最後の右脚部のグレネードが爆発を起こす。

「お前にその真の勝利とやらは渡さない!!」

「何だ?!」

機体内のグレネードの爆発により、クルタナの軌道上へGマリオンの胴部、ユウが搭乗しているコクピットが移った。

「愚か者が!!」

慌ててニムバスは剣の軌道を変えようとする。しかし勢いが止まらない。

「俺にも面子がある、あるんだよ!!」

わずかに軌道を反らせる事が出来たクルタナの剣先へ、またも自分のコクピットをさらそうとユウはスラスターを噴かした。

「ガア!!」

Gマリオンのコクピットと慈悲剣クルタナが交差した瞬間、テレビ

の前のモルモット隊、ストウライトのクルー、そして内火艇に乗り込んだローベリアとオグスが一樣に掠れた息を吐き出す。
シドレとカツ、二人のその両膝が力なく床へ落ちた。

狂ったような激しい雨が、廃墟の街へ叩きつけられている。

「どこだろう……？」

昏い、粘つくような瘴気に満ちた死の街、その街路をボロ布を纏ったユウが歩く。

「俺は、ここを知っている……？」

瓦礫と化した街並み、ユウにはこの街のどこかに見覚えがある。

「人……？」

昏い霧を押し潰す豪雨の中、目の前の、小さな公園で少年が砂遊びをしている。

——君は誰だ——

ユウの呼び掛けに、雨と霧を身に纏った少年が静かに立ち上がる。

——ユウ——

少年のシャベルから、蒼い砂が光輝きながらこぼれ落ちた。

——僕はラプラスのユウ——

——違う——

少年の言葉にユウは軽くその首を振る。

——ユウは、俺の名前だ——

——そうよ——

少年の姿が、少女へと替わる。

——あなたは、ユウ——

蒼い砂の輝きが、ユウの瞳に逆流した。

「あの世、天国……?」

「どうかな、ユウ?」

「では、ないな」

「何故だ?」

「天国とやらに、お前がいるはずが無い、シロッコ」

「そう言えるほど、お前は上等な人間か?」

「そう、だったな」

ふらつきながらもベッドから起き上がろうとするユウへ、シロッコがその手を差し伸べる。

「ウワ……」

「そんなに私の手が嫌か、ユウ?」

「違う」

シロッコの手を掴んだ途端、何か、いつか、どこかの記憶がユウの脳裏に疾った。

「初めてではない……?」

「何を言っているんだ、お前は……」

シロッコの手に引つ張りあげられながら、ユウはゆつくりとその上体を起こす。

「シドレ……」

「せいぜい、感謝してやるんだな」

ベッドの傍らで、寝息を立てているシドレを、ユウが哀しげに見つめる。

「そのオトコオンナは、お前に寝ずの看病をしてからたのだからな」
「……」

ユウの目から一滴の涙が吹き出る。慌ててその涙をユウは手の甲で拭く。

「シロッコ」

「何だ?」

「ムラサメ・コーヒーはあるか？」
「ある」

そう言いながら、シロツコは懐からユウの好物を取り出す。

「置いとくぞ」

「ああ……」

ガア……

看護室のドアが開き、フィリップ達が入ってくる。

「フィリップ……」

「お前さんの負けだよ、ユウ」

そうフィリップは言いながら、後ろのニムバスへその顔を向けた。

「それで良いだろう、ニムバスの旦那」

「もちろんだ」

フィリップの言葉に力強くそう頷くニムバス。二人の男に続いてカツとサラ、そしてニムバスの相棒であるローベリアが入ってくる。

「感謝する、フィリップ」

「意外と難しい事じゃないやい……」

G マリオンヘスペースデブリを投げつけ、寸前でその機体のコクピットへ対する剣の直撃を防いでくれたフィリップ、その恩人である彼へ向けてニムバスが深々と頭を下げた。

「私は勝利を得ると同時に、友を失う事も避けられた」

「なんとも勝手な騎士様だな」

「すまないでござる」

「いんや、最後に馬鹿をやったユウも悪い」

そう言つてユウを睨み付けるフィリップの視線から、ユウはその顔をそらしてしまう。

「ニムバス」

「何だい、ユウ？」

「エグザム・マリオンとは？」

その言葉に、皆の視線がニムバスへ向く。少し考えてから、ニムバスがその口を開いた。

「傲慢なる慈悲、位の意味だな」

「騎士道……」

「そうだ」

頷き、答ながらニムバスは何もない自身の腰の横腹をポンと叩く。

「力ある者が、その者だけが出来る慈悲深き戦い」

「圧倒的な強者のみの特権か、ニムバス」

「それを、私なりに色々錯誤をした結果だよ、この非殺の剣はな」

「なるほど……」

その言葉を聞いて、ユウは深くため息を吐いた。

「私でも、出来るかどうか……」

「出来ますよ、シロツコ様なら」

「ありがとう、サラ」

不満を口にしたシロツコをおだてるサラ。

「ああ……!!」

「フフ……!!」

その可愛いサラの顎へ軽く手をかけてやるシロツコ。嬌声を上げるサラと不敵に笑う木屋帰りの天才。

「何なの、この二人は……?」

呆れた声を出すローベリアを尻目に、看護室にいる他の者達の顔がその二人を見て、何とも表現のしようがない感じに綻ぶ。

「昔の騎士に、そんな奴がいたのか?」

「いたらしい」

ユウの質問へそう答えたニムバスは、ゴソゴソと音を立てながら胸ポケットから携帯式の情報端末を取り出した。

「地球のニホン地区の騎士にな」

「ブシだろう、ニホンのそれならばな……」

「ブシ?」

「ニホンの騎士だ」

「なら、同じ事だ」

平然とそう言い放つニムバスの態度に、質問を続けていたユウは唇を歪めて笑うしかない。回りに見渡すと、他の者も笑みを浮かべている。

「漁っていた旧世紀の文献に載っていたよ」

「なんの文献なんだ、それは……」

「解らん、名が書かれていない」

ニムバスの妙ないい加減さに、訊ねたシロッコがその頬を搔きながら、目を笑いの色を浮かべた。視線が泳いだシロッコの目の先にはフィリップの顔。

「なんだかなあ……」

シロッコのアイコンタクトに答えるように、フィリップがニヤケながらニムバスへの質問を継ぐ。

「怪しい文献だな、ソイツは」

「どうにか、訳はできたがな」

そう言いながら、ニムバスが携帯端末の画像をフィリップへ見せてやる。

「題名は知らんが、騎士の心情と共に剣の奥義も載っていたからな」

「マンガじゃねえかよ……」

その端末に映っている画像を見て、フィリップから呆れた声が出た。

「で、しょうにねえ？」

そのフィリップの態度に、ローベリアが生暖かく顔を綻ばせる。

「私とお前、はたしてどちらがエグザムを振り払うかと同時に」

「お前はすでに、エグザムもマリオンも眼中に無いだろうによ、ニムバス……」

愚痴るように言うユウへ大袈裟に肩を竦め上げながら、ニムバスはその舌に言葉を乗せ続けた。

「この御前の戦いが、少しでも父の成仏の助けにでもなれば良いが、とも思う」

「父、か」

「クルスト博士だよ」

「だろうな……」

ユウはそう呟いたあと、ニムバスの顔をじっと見つめた。

「老けたな、お前も」

「十年だよ、ユウ」

「ああ……」

その言葉に、その場にいた全ての者が何かを噛み締めるように押し黙る。

「母と産まれたばかりの私を捨て」

薄いニムバスのその唇から、言葉が疾り始めた。

「危険な情勢、ダイクン派とその他の対抗勢力との闘争の最中だったからね」

ニムバスの言葉に、相方のローベリアが絶妙なタイミングで相の口を入れる。

「母が事故で死んで、私が使えたと解ったら引き取り」

「常に気にしていたみたいよ、博士は」

「興味が無くなったら、一五、六歳前後の私をほっぽりだした」

「その後も資金面で十分な援助をしていた」

「そして、またしても私が使えたと解ったらイフリート改、EXAMのパイロットに選び」

「博士の最後の罪滅ぼし」

「ジオンから連邦へ移り、呆れた事に三度も私を捨てた」

「二十いくつになって、拾った捨てたもないでしょう？」

「そして、再び私へブルーデイスティニー二号機の話を通し、あまつさえ私がEXAMを使いこなしているとおだてられれば」

「息子への最後のプレゼント」

「クルストをかつさらうだけであつた気持ちも失せ、頭が沸騰しようというものでござるよ」

「誤解と錯覚は怖いわねえ……!!」

話を終えたニムバスが、独白に「相」の手を入れてくれたローベリアへ優雅な礼をしてみせた。

「解説ありがとう、ローベリア」

「どういたしまして」

ニムバスの芝居がかった礼に、艶然とローベリアが形の良い唇をつきだす。

「私達は行くぞ、ユウ」

「ああ」

ニムバスが差し出した手を、ユウは強く握り返した。

「本当に、色々と言葉で責めて悪かったな、ユウ」

「死ぬほど悪いよ、陰湿なる騎士ニムバス」

「フフ……」

ユウへそう薄く笑った後、ニムバスは背を向ける。

「さようなら、ユウ・カジマ」

「元気で、ローベリア」

ニムバスと代わってローベリアが差し出してきた手を、ユウは軽く握った。

「恋人くん？ それとも、さん？」

「さあ……」

「悪いわね、勝手に手を握って」

スヤスヤと寝息を立てているシドレへチラリとその目を向けるローベリア、微かにその唇に笑みを乗せてからユウへと振り返り、からかうような視線を向ける。

「シドレはただの部下だよ……」

「ただの、でここまでしてくれる子はいないわ」

「そうか……」

再び、ユウの目が潤む。

「何か、クルスト博士の事に詳しいみたいだな、お前は」

「まあねあ……」

そのユウの言葉に、ローベリアはニタツと笑う。

「私達も、長い付き合いだわね……」

「昔の、レッド・ジオニズムとの戦い、サイコ・ジムに俺が乗っていた頃からだな」

「へエー、そう!？」

「何だよ……?？」

「別にいい……」

甲高く笑いながら、ローベリアはニムバスの後を追った。

「なんだよ、一体……」

「私の事、話そうかしら、ニムバス？」

「止めとけ、旧マリオン」

ストウラートの通路の遠くで手を振っているオグスへ自分の手を振り返しながら、ニムバスがローベリアを軽く睨む。

「人を古ぼけた幹線街道みたい……」

「中年の甘酸っぱい想い出を壊すんじゃない」

「酷い言われようだ……!!」

昔の蒼い髪の少女のように笑うローベリア、彼女を見るニムバスの目は、限らない愛しさに満ちていた。

「サラちゃん」

「はい」

「シドレちゃんを休ませてやりな」

「わかりました、フィリップさん」

そう言いながら、サラが未だに眠っているシドレの両肩へ手をやる。

「カツ」

「分かっているよ」

サラの声に答えながら、カツがシドレの両足を持ち上げる。

「この艦の艦長は？」

シロッコがフィリップの顔を覗き込みながら、そう訊ねた。

「ブリッジにサマナ達と共にいるはずだ」

「そうか」

「案内が必要かな？」

「不要だよ、凡人パン屋」

その言葉にニツと口を歪めながら肩を竦めるフィリップ、彼をを横目に見ながら、シロッコが早足で看護室から出ていこうとする。

「もともとに、ストウラート艦長に命令書を渡す為に来たんだよ、私
は」

ドアの所で、誰にでもなくシロツコはそう呟く。

「ムラサメ・コーヒー、ありがとうな、シロツコ」

「か、勘違いするなよ、ユウ・カジマ」

最後は何故かうわずつた口調になったシロツコがユウの前から立ち去った。

「ツンデレシロツコ様も素敵……!!」

「サラ、シドレが崩れる!!」

「あんたがしつかり持つんだよ、カツ!!」

心地よい音の寝息を立てているシドレを抱えて、二人のコンビもドアへ向かう。

「ユウ……」

そのシドレの寝言を聴いて光る、三度目のユウの瞳。

「さて、ユウ」

ユウとフィリップだけになった看護室、一つ首を回したフィリップの顔が引き締まる。

「言ってくれ、フィリップ」

「どうやら、解ってはいるみたいだな」

「多分、はね」

先程までシドレが腰掛けていた椅子へ座りながら、フィリップが軽く息を吐いた。

「宇宙世紀、旧世紀問わず、パイロットに必ず来る時が来た」

「パイロットとしての寿命……」

「最初に気が付いたのは、アルフの奴だよ」

「さすがに、技術者」

皮肉混じりにそう言いながら口を歪めるユウへ、フィリップが一枚のデータ表を渡す。

「数字は正直、だとよ」

「今の俺がフィリップやサマナと戦った時の勝率、四割か」

分析データの片隅にそう殴り書きされたアルフの筆跡に、ユウが苦

く笑った。

「解りやすく書きすぎだよ、アルフの野郎は……」

「良いじゃないか」

そう言いながら侘しく笑うユウの顔を、フィリップは勇気を出してじつと見つめる。

「早かったな、俺のお迎えは」

「個人差もあるだろうし、それに……」

そこでフィリップが少し咳をしてから、話を続けた。

「ブルーの毒もあつただろう」

「初期EXAMのブルーディステイニータイプ、あのジャジャ馬が寿命を縮めたか」

昔を懐かしむように薄くその両目を閉じながら、ユウが軽くあくびをする。

「少し、眠りたい」

「本当は、お前の真の意味でのお迎えの話もしたかったがね……」

「物凄く、気にはなるが」

フィリップへニヤリと笑いながらも、ユウは再びベッドへ横たわった。

「今は休ませてくれ」

「ああ」

目を閉じたままのユウへ布団を被せてやったフィリップは、そのままストウラートの看護室から静かに出ていく。その間にフィリップが部屋の灯りを落とす。

「俺は結局の所に……」

室内灯が落とされ、暗くなった部屋の中、一人ユウは呟いた。

「何者で、何をしたかったのだったのだろうか……」

——あなたは、ユウよ——

「俺がユウだとしても、さ」

脳裏に響いた声に、ユウは静かな口調で答える。

「君は誰だ……？」

そう呟いたのを最後に、ユウの意識は暗闇に潜り込んでいった。

第51話 天国はここにある

ザアア……!!

コロニーの円筒中央に設置された、降雨用の散水器が狂ったように水飛沫を放つ。

少年から青年の間、その位の歳であろうと思われる男が必死でその散水器の近くにある足場に掴まっている。

——嫌だ——

地面が霞んで見える眼下の彼方、そこには禍々しい色をした霧が立ち込めている。地獄の悪魔が吐き散らす死の吐息、それに捉えられたらそのまま瞬時に奈落へと引きずり込まれる。彼にもそれが直感に
より理解が出来た。

ズウ……

正気を失ったコロニーの天候管理システム、散水器から伸びる連絡路、その鉄製の通路を満たしている水の暴流に彼の手がズルリと滑る。

——嫌だ!!——

この高さなら、霧が身体を侵す前に地面へと叩きつけられて命を失うのが先であろう。

サア……

「大丈夫か？」

若い、神経質そうな男の声。それとともに差し伸べられる細い手。

彼は必死にその男の腕を掴んだ——

「ん……？」

目が醒めたユウはゆつくりと辺りを見回した。

「何だ……？」

見覚えの無い、雑風景な部屋。目に入る物とえば、鉄パイプで作られた簡易な運搬台だけ。

「ストウラート、ではない……？」

モヤがかかったままの頭で、ヨロヨロとユウは部屋から這い出る。

「うわ……!!」

「邪魔だ、どけ!!」

数人の男女が、通路へ出てふらついているユウを弾き飛ばす。

「ん……？」

その集団の内、ユウを弾き跳ばした男が振り返った。

「ユウ、さんかい？」

「ジェリド……？」

ユウの視点は未だに定まらない。

「ジェリド、何をしている!？」

「先に行け、カミーユ!!」

「分かった!!」

ジェリドは先に進んだ若者へそう叫びながら、ユウへ手を差し伸べる。

「立てるか？」

「ああ……」

声にも、足にも、そしてその顔にも力が無いユウ。

「病人、だな……」

白い上っ張り姿のユウを丁寧に立たせてから、ジェリドは軽く頭を下げた。

「すまない、ユウさん」

「あ、ああ……」

「また、会おうぜ」

「おい……」

か細い声でそう息を吐くユウを振り返らず、ジェリドは通路を疾走していく。

「何だよ……?」

そう呟いたユウの耳へ、再び数人の人間の足音が入る。また弾き飛ばされないように、ユウは通路の片隅の壁へ張りつくようにその身を預ける。

「ピナクル、最前線第一防衛ラインを突破!!」

「FAZZ (ファッツ)、あいつの増援は来たのかしら!？」

「隣の艦に満載だ!!」

互いに怒鳴りながら、連邦とテイターズ、そしてエウーゴ、それらに加えて見慣れない軍服の男女が駆けていく。

「状況が不明の時の、把握方法……」

昔、軍の学校で習った授業をユウはぼやつく頭で思い出そうとする。

「つまりは、何故に俺がストウライトにいないくて、ジェリドの馬鹿に弾き跳ばされた事、ピナクルやら何やらを誰かに訊ねれば良いのか……」

ブツブツと呟いているユウの脳裏へ強い痛みが襲いかかる。その激しい頭痛と共にユウの視界へ暗闇が覆い被さってきた。

「うっ……」

「誰だ!! ユウ・カジマの隔離室のカギをかけ忘れたのは!!」

どこかで聴いたような声をその耳へ入れながらも、ユウは見知らぬ場所の通路で膝を付き、そして倒れ伏す。

「ユウ……?」

通路を走っていた女性パイロットの内の一人がユウの元へと戻り、彼の顔へ軽くその手を添える。

「ブルー、か……?」

目の前の色彩が薄くなり閉ざされていく視界の中、ユウは見覚えのあるその細い手を見つめつつ、その意識を霧散させていった。

「フウ……」

前よりは、目覚めが良い。

「同じ部屋、だな」

ユウは少し自分の頭を叩き、どうにか意識をハッキリとさせようとする。

「どこだろう……?」

片隅に観葉植物が置いてあるだけの、飾り気の無い部屋の中をユウはぐるりと見渡した。

「ムラサメ・コーヒーか」

病院等でよく見かける、パイプで出来た運搬台の上に置かれている缶コーヒーを眺めながら、ユウはニヤリと笑う。

「ん?」

そのムラサメ・コーヒーの脇に二つの御守りが置いてある。

「なん、だろう?」

軽く頭を押さえながら、ユウはその二つの御守りを白いつ張り、恐らくは病院着だと思われる服のポケットの中へ無造作に放りこむ。

「しかし、な」

どうにか、ユウのその両の瞳へ力が宿り始めた。

「どこだ、ここは……?」

缶コーヒーも胸ポケットへ強引に入れ、ユウはベッドから身体を降ろす。

「ちっ……」

脚に力が入らない、ユウは壁を伝いながら部屋を出ようとする。

「軍艦、だな……」

ヨロヨロと、ユウは軍用艦の内部と思しき通路を這い歩く。

「んっ…… しよっ……!!」

どうにか気合いを入れながら、ひたすらユウは壁に手をやりながら通路を歩く。

「人の声……?」

どうやら、前方に広い空間があるようだ。

「食堂、か……？」

その空間の中から、賑やかなテレビの物と思しき音声が聴こえる。荒い息でユウはその広間に滑り込む。

「ハア……!!」

その場所、広間に入った途端、近くにあった椅子へ崩れ落ちるように身体を預けるユウ。

「食堂、だな」

長テーブルの上には調味料の類いが置いてある。誰もいない食堂には、アニメを流しているテレビの音だけが響く。

「ん……？」

息を整えながら眺めていた、再放送のアニメ「ガンダム・ヒーローズ」の画像が強く乱れた。

「最近、多いんですよ」

背後から、落ち着いた感じの男の声がユウへかけられる。病院着に包まれた彼のその身体が僅かに強ばる。

「初めましてです、ユウ・カジマ大佐」

ゆっくりと振り返って見た、自分と同じ位の歳の男、微かに薄く髭を生やしたその顔には見覚えが無い。

「どなた、ですか？」

「ブライト・ノアです」

「ああ……」

名前だけは知っている、一年戦争時からの名キャプテン、英雄アムロ・レイの上官。

「初めまして、ユウ・カジマです」

「あなたの方が上官でしょう、ご丁寧に……」

「そうではありますがね……」

そのやつれた顔に薄く笑みを浮かべているユウを、ブライトは穏やかな目で見つめる。

「では、ここは……？」

「アーガマですよ、ユウ大佐」

「ユウで構いませんよ、ブライト艦長」

「ありがとうございます、助かります」

そう言いながら、ブライト艦長はユウの隣の席へ座った。

「コーヒー、私も飲んで良いですか?」

「あなたの艦でしように」

「私の私物ではないですよ、母なる艦は」

穏やかな顔で淡々と話すブライトに、ユウは何か心が落ち着く物を感じた。部屋から持ち出したムラサメ・コーヒーの蓋を開くユウ。

「私に質問、おありでしょうか?」

「ありませんよ、ブライト艦長……」

自分の缶コーヒーを旨そうに飲んでいながら訊ねるブライトへ、ユウは苦笑う。

「ドクターストップですよ」

「俺、いや私の事ですよね?」

「病気です」

その言葉にユウの両目、ガサガサに周囲が荒れたその瞼が閉じられる。

「フィリップの奴が言いかけた事はそれか……」

「今日、明日には死にはしませんか」

「難病で?」

「タチの悪すぎる、異ガンの変形みたいなものらしいですな」

「あの心の友が、死神だったのか……」

そう呟きながら、ユウはムラサメ・コーヒーの缶へ皮肉げな笑みを浮かべた。

「発見が、極端に遅れてしまったらしいですな」

「隠し武器に頼った本人が、その隠し武器にしてやられたような物だな」

そう口ごもったユウの脳裏に、先日のニムバスとの死闘の記憶が甦る。

コチ…… コチ……

食堂の壁に備え付けられた、骨董品の大きな古時計が静かに時を刻む。

「静かですねえ……」

「地獄の反対側ですから」

「地獄？」

「ここから見た、地球の裏側ですよ」

「地獄がある？」

「大戦争です」

「フム……」

「コチ…… コチ……」

「チキユウバクハツ作戦、らしいです」

「センスがありません」

「もつと哲学的な名前が、あるにはあるらしいですが」

苦笑しながら、ブライトは缶コーヒーを飲み干した。

「本質は変わりません」

「シヤアの奴、ですか？」

「他に誰がいる？」

その目に笑みの色を浮かべながら、ブライトは懐から小さな豆本を取り出す。

「アクシズを始め、とにかくあらゆる物を地球へ叩き落とす作戦らしいですね」

「フーン……」

「ゼダンとか、ピナクルとか」

「ピナクル？」

「ゼダン・ゲート、旧ア・バオア・クーの下部の大きなトゲですよ」

「上の円盤みたいな部分がゼダン？」

「そう呼んでいます」

「なるほど……」

ブライトが読む、何やらコーヒーの作り方の事が書いてあるらしいその豆本の表紙を見ながら、ユウは残った缶コーヒーを飲み干す。

「あれ？」

「どうしました、ユウ」

「アクシズって、あのネオ・ジオンのアクシズですよ？」

「そうですよ、あのアクシズ」

「あんな重たい物を含めて沢山に、もろとも隕石みたいに地球に落ちたら、駄目じゃないですかね？」

「駄目ですね」

そう言いながらも、ブライトの目は本から離れない。

「地球が無くなります」

「へえ……」

生返事をするユウの視線の先のテレビの画像、それが再び乱れた。

「多いんです」

「何の影響ですか？」

「連邦か、ネオ・ジオンのどちらかが放った核ですね」

「核、かあ……」

「ソラの模様が、荒れてましてな」

天候不順の事でも言うように、軽くそう口を開きながらブライトが微笑んだ。

「まあ、ゆつくりしてして下さい」

パタンと本を畳んでから、ブライトが静かに席から立ち上がる。

「このアーガマは、補給ポイント兼見張りの為の艦ですから」

「だから、地獄の反対の天国にですか」

「ええ、天国ですよ、ここは」

「そうみたいです」

軽く笑うユウの顔の先のテレビ、再放送のアニメの画像が復活した。

「最後に」

「はい」

「俺がここへ運ばれてから、どのくらい経ちましたか？」

「病院船に空きがなく、代わりにこの艦へ来てから」

少し眉間に皺をよせながら考えるブライト。

「約、一月です」

「一月、ですか……」

その言葉にユウは軽く唸った。

「病気の影響で、俺は寝っぱなしだったの？」

「だとは、思います」

「ホウ……」

「今までの疲れもあったのかもしれない」

ブライトが椅子を丁寧テーブルの下へ押しながら、背筋を大きく伸ばした。

「パイロットを止めて、御自愛をすることですね」

「はい」

「どちらにせよ、今のアーガマには予備モビルスーツの一つもありませんので」

「そうですか……」

「御、ゆっくり……」

そう言つて、食堂から立ち去ろうとするブライト。

「最後の最後に質問」

その声に振り返ったブライトの顔を見上げながら、ユウは少し自分の息をゆつくりと整える。

「ありましたね、さすがです」

「俺の艦、ストウラートは？」

「地獄に居ます」

「ありがとうございます」

そう言つてから、ユウは深々とブライトへその頭を下げた。

「ユウさん……」

ユウの下げられた頭を見つめるブライトの目には底知れない哀しみがある。

「雑務がありますので……」

「はい」

ブライトの足音が消えると同時に、再び食堂には空虚だけが訪れた。

コチ…… コチ……

「天国、かあ……」

再放送のアニメである「ガンダム・ヒーローズ」はかつての部下で

あるサマナとカツが好きな番組。

「フフ……」

そのアニメを笑いながら見ているユウ、彼はその瞳から一筋の涙を流していることを自分でも気がつかなかった。

第52話 灰色の心

「メモ？」

ラフな服装をしているユウは、アーガマの食堂、そのキッチンの脇に貼り付けられているメモ用紙をじつと眺めた。

「どこかで、この字を見たような……？」

「天才の、字ですよ」

背中にかかる声に、ユウが静かに振り返る。

「おはようございます、ブライト艦長」

「おはよう、ユウ」

お互いに軽く頭を下げて挨拶をする二人の男。

「天才の字？」

ユウの目が再びメモへ。

「パプテマス・シロッコ」

「ああ……!!」

その言葉に、ユウの顔が明るく綻ぶ。

「そういえば、一時期アーガマの捕虜になっていたとの噂が……」

「下働きをしてみました」

「ハアハッ……!!」

シロッコのエプロン姿を想像したユウは、その可笑しさに腹を抱えて笑う。笑う彼の胃の辺りが微かに痛む。

「シロッコ、あいつか」

「お知り合い、らしいですな」

「気の良い男です」

ブライト艦長が微笑みながら、キッチンの冷蔵庫へ手を伸ばした。

「朝食、食べますか」

「はい」

「引退をしたら、カフェでも開こうかと思いましたが
「旨い」

ブライトの作った朝食を本当に旨そうに食べるユウの顔を、アーガ
マの艦長である彼は嬉しそうに見つめる。

「フィリップの奴のパンより旨い」

「家内と一緒にね」

「うらやましい」

二枚目のパンへ取りかかりながら、ユウは軽く息を吐いた。

「俺など、汲々と日々を過ごしている内に、気が付くと嫁さんも貰って
いません」

「プレイボーイが、何をおっしゃる……」

「プレイボーイ？」

その言葉に微かに首を傾げるユウ。この一月で頭髪に白いものが
増し、痩せ細った彼の姿にブライトが目細くに狭める。

「うちのブルー、ジャミトフの娘ともつばらの噂の彼女、とですよ」

「昔の仲間、それだけの関係です」

「ですかねえ……」

そのユウの言葉にニヤリと笑いながら、ブライトは手早く朝食を終
え、愛読書の豆本を取り出した。

「この前のプロレスのビデオ、見ましたよ」

「プロレス？」

「モビルスーツ同士のプロレス」

「ニムバスとの戦いですか……」

食後のコーヒーを口へ含みながら、ユウは苦く口の端を歪める。

「賛否両論でしたね」

「俺の戦いが下手、だったからでしょう？」

「あなたの評判、ガタ落ちでしたよ、ヒールレスラー」

「悪うございました、ハイハイ……」

投げやりによろい放ちながら、ユウは自分とブライトのランチプ
レートをキッチンへ下げに行く。

「その彼女、ブルーとカミーユの奴は拍手喝采を送っていましたが」

「あのZガンダムの小僧か……」

砂を使つて食器を洗い終えた後、最後だけ水を流して仕上げをする。

「真の男の戦いだ」と

「フン……」

直接に顔を会わせた記憶が無い、エウーゴのアムロ・レイの再来と呼ばれた少年。彼の名をユウは軽く呟く。

「終わった話です」

「……」

「終わったのです、俺の戦いは……」

「家内達はね」

「はい」

テレビの再放送を眺めている二人の手元には茶が置かれている。

「地球に居ましてね」

「フム……」

筋肉が落ちた自分の腕を撫でながら、ユウはブライトの言葉にぼんやりと相槌を打つ。

「ブライト艦長」

「はい」

ブライトがユウの呼び掛けに、静かに茶をテーブルへ置いた。

「落ち着いてますね」

「駄目ですか？」

「地球が無くなるかもしれませんが……」

「家族に冷たいと？」

「い、いやそうではなく……」

慌てた声を出したユウが軽く咳き込む。隣に寄ってブライトは背中を擦ってやる。

「私が落ち着いて見えると云うのであれば」

「はい」

「とても上手くに、艦長のあるべき、見せるべき姿を私は果たしている
と云うことです」

「なるほど」

残った茶を飲み干しながら、ユウがその言葉に何度も自分を納得させ
るようにその首を振った。

「そうですか……」

「そう、見える振りをしているんです」

「……」

しばしの無言が、二人の間に訪れる。テレビからは賑やかなバラエ
ティ番組が流されている。

「金持ちだけですよ」

そのブライトがポツリと漏らした言葉に、湯飲みを片付けに行こう
としたユウが再び椅子へと座った。

「地球からスンナリ出ていく事が出来るのは」

「まあ、確かに」

「シヤアはそれで金持ちを釣って、金を出させていたらしいんですよ」

「金？ 何の為の？」

「ネオ・ジオンの活動資金」

そのブライトの吐き捨てるような言葉に、ユウの顎が軽く引く。

「ジオンの敗残の者達だけで、何年も前からここまで続く戦争をやっ
てみせる事は出来ません」

「地球からも、出資者がいたわけですか」

「連邦で主導権を握れなかった金持ち連中にとって、戦後のネオ・ジオ
ンで良い立場に成れるという事は」

「魅力的な賭け、かもしれませぬ」

「彼らを見てみると、二股膏葉のアナハイムが真つ当に見えるのが不
思議なものです」

「確かに」

そう答えながら、大人だけが出来る皮肉気な笑みをユウはその顔へ

浮かべて見せた。

「彼ら金持ちは、宇宙でも上手くやっていける自信があるのかもしれない」

「金こそ、力の象徴ですな」

「そうとも、限りませんよ」

「ですかねえ……」

白い物が眉へも混じってきたユウがブライトの言葉に首を傾げてみせる。

「シヤア、そしてスペースノイドが彼ら地球の者を御大切に扱う理由はありませんから」

「使うだけ使って、ボツ？」

「だと思えます」

ちびちびと茶を飲んでいたブライトが静かにその湯飲みを自分の両手で包む。

「文字通り、物理的に宇宙空間へ」

「そこまで、いわゆる性の根が悪い人間へ対してだと言っても、酷い仕打ちが出来ますかね？」

「スペースコロニーとかアキシズ、自分達の住んでいた家を、ポイト地球へ投げ捨てるのがスペースノイド流です」

「宇宙人の暗黒面、ですな」

「言いますな、ユウ大佐……」

「どうも……」

歳が近いせいか、自分達の波長が妙に合うのを、ユウもブライトも感じている。

「彼らがアースノイド、地球人を悪く思う気持ちは多少は解りますが」

「五十歩、百歩？」

「そうですね、私から見たスペースノイドは」

「エウーゴは宇宙人、スペースノイド寄りの組織だったのでしょう？」

「ええ、ですから」

ブライトも残りの茶を一気に飲み干した。

「多少は気持ちは解ると」

「アースノイド寄り、ですね。ブライト艦長は」

「私ですか？」

「ええ、思っていたよりも遥かに」

「当然じゃあないですか……」

そう、おどけたように言いながらブライトがテレビの方向へチラリと視線を向ける。

「地球に家族が住んでいるんですよ」

「そうでしたね」

「大丈夫ですよ、彼女達は」

「信じておられるので？」

「私よりも、遥かにしっかりとした人間ですから、ね」

カチ…… カチ……

時を古時計の針が刻む。

「家内、ミライと言いますが」

「ミライ・ノア？」

「ええ、旧姓ヤシマ」

ブライトの視線が痩せさばらえたユウの顔をしかと見つめる。その目の中に一瞬に宿る鋭い光、その眼光へユウが軽く目を細めた。

「カジマ家と並ぶ名門です」

「カジマ、家？」

「ええ、ユウ・カジマ大佐」

「……」

その言葉に、ユウの顔が苦渋、困惑の色に染まった。その彼の様子を見て、ブライトの両目が僅かに拡がる。

「ご存じでは無い……？」

「お恥ずかしい話」

ユウは、一目だけ見た限りではもはや青よりも白と言った方が正しい頭髪にその手を差し込みながら、申し訳なさそうに軽く搔いた。

「ちよっとした、記憶喪失なのです、俺は」

「ホウ……」

歴戦の艦長、ブライト・ノアのその細い目がさらに狭まる。

「ミステリーですね」

「俺の時折のヒステリーは、その影響もあるかもしれませんが」

「根が無い人間ですか……」

「そちらこそ」

ブライトのその不躰とも言える質問、しかしユウはなぜか悪い気はしていない。

「よくも言ってくれますな……」

「すみません」

「怒ってはいませんよ、ブライト艦長」

ガツ…… ガガツ……!!

「ん？」

二人が見つめるテレビの画像が一瞬、かき消える。

「失礼、ユウさん」

そう断りながら、ブライトがポケットの携帯情報端末を取り出して、その画面に視線を這わす。

「何が？」

「連邦が戦略核を放ちました、です」

端末から目を離さず、ブライトはユウへ答える。

「ピナクル、ゼダンか、はたまたアクシズへ向けてか……」

「危険な状態だったのでしょうか？」

「おそらくは、ね」

テーブルへ携帯端末をトントンと音を立てて軽く叩きながら、ブライトは一つため息をついた。

「大規模な核は、さすがにそうそう使えません」

「切り札、ですか」

「もう少ししたら、詳しい経過が伝わってくるとは思いますが」

ブライトの声を耳へ入れながら、ユウのテレビに舞う砂嵐へ視線を向ける。その瞳はあまり定まっていはいない。

「ミノスフキー粒子に強い、中継衛星から送られる短距離電波のテレビ放送でも、さすがに影響が出るようですね」

「今の情勢なら」

ユウは「しばらくお待ちください」のテロップが流れるテレビの画面を見ながら、その口の端に軽く笑みを浮かべた。

「贅沢な娯楽ですよ……」

そのユウの侘しい微笑むに、ブライトの瞳が微かに揺らぐ。

「少し、この事についてクルーへ説明をしてきます」

「天国なのに、お忙しい事です」

「地獄があつてこそ、の……」

そう言いかけながら、ブライトが空になった湯飲みをユウへ手渡す。

「これの片付け、お願いしていいですか？」

「もちろん」

ユウはブライトへニコリと微笑かける。

「地獄があつてこそその、ね」

「はい、ブライト艦長」

「天国のアーガマです」

そう言つてから、そのアーガマの艦長であるブライトはやや駆け足で食堂を立ち去っていく。

「あいた!!」

「ブライト艦長さん……」

慌てていたのか椅子の足に引っかかり、つまづくブライト。その様子を見てユウは苦笑した。

「お恥ずかしい……」

「食堂の掃除くらいは、俺がやっておきますよ」

「ありがとうございます、大佐」

「大佐、でありますか……」

「記録では、あなたはそうなっていますよ?」

そのブライトの言葉にユウは曖昧な表情をその顔に浮かべた。

「では、ユウさんは、御ゆっくりと」

「はい」

バタバタと駆けていくブライトの後ろ姿を眺めながら、ユウは一人となった食堂の空間の中で、微かなため息をつく。

「地獄にいる、ストウラートの面々か……」

カチ…… カチ……

ユウの独り言を笑うかのように、時計の針は音を鳴らして、時を刻む。

「覚えてろ、ジオニック社……」

底知れぬ恨みのこもった声に、ユウはギョツとして振り返った。

「なあんだ、アニメか……」

局地的に人気があるアニメ「ジオテクニック」の再放送が復旧したテレビから流れてくる。

「地べたを這い、ドロ水すすってでも ゴースト・ファイターから戻ってきてやる……」

「……」

そのツダ子というアニメのキャラクター、その台詞にユウは自分の心を満たしている灰が微かに動くのを感じた。

「ゴースト・ファイター、生きた亡霊、か」

ユウの灰色の心に宿る、微かな、小さな火種。

「お掃除、お掃除に掃除、と……」

しかし、その火はユウが自ら舞わした灰によりかき消されてしまふ。ユウは軽く腕を伸ばしながら、食堂の片隅の用具入れへ歩いて行った。

第53話 十年の刻

「ほい、これでオーケー」

「ありがとうございます、モーラさん」

そう言いながら、大柄な女性はユウの短く髪を刈ったばかりの頭を軽く叩く。

「これで白髪が目立たなくなる」

「うちのバカ旦那のボサボサ髪で、散髪は慣れているからね」

「果報者の旦那さんだ」

少し羨ましそうにユウはそう呟き、連邦軍の技術士官である女性へ軽く髪を切ってもらったばかりの頭を下げた。

「変わっているねえ……………」

その二人の様子に、やや軽薄そうな面持ちをしたパイロットが軽く首をひねる。

「そうですか、モンシア少佐?」

「良い御身分なのに、威張りの一つもしねえな」

モンシアと呼ばれたティターンズのパイロットは、ユウの口から出た返事に不満そうに鼻を鳴らす。

「人格者の大佐さんは、あんたとは違うんだよ、モンシア」

「へッ…………!!」

「あんたの部下達はさ、あたしの旦那とその相棒の昔、それと同じくにいじられている、だろ?」

「言ってくれるぜ、モーラ…………」

昔の馴染みらしいその二人は、そう言って軽く笑い合う。

「目下の奴をイジツてやるのは、上官の心意気の一つだぜえ?」

「そうなのですか、モンシア少佐殿?」

「ティターンズの二階級上の扱い、ありがてえよ、なあ?」

そう言って、モンシアは口を挟んだもう一人の連邦パイロット、偉丈夫であるその男へ口を歪めて見せた。

「そんなあんたに、嫁さんが出来た事の方が不思議だよ、あたしはね」

「一応、昔からの相手だったからさね、モーラおばさあん？」

モンシアの言葉と共に放たれる下品な笑い声に、モーラはその彫りの深い顔を軽くしかめる。

「実に男を見る目のない女だねえ……」

「俺は自分が誠実な男だとは思っているんだがね？」

「ハイハイ……」

そのモンシアとモーラの会話に、ユウと連邦のパイロット、サンダースという男は顔を見合せて笑う。

「ユウ大佐さんよ」

「なんだい、モンシア少佐」

「病気、らしいな」

「ああ」

ニヤつきながら放たれるモンシア少佐の言葉には、嫌みな意地の悪さがある。

「ちよつと、モンシア」

「良いんだ、モーラさん」

だが、モンシアのその言葉のどこかに真意さの欠片があるように感じたユウは、眉間に眉をよせたモーラへ両手をなだめるように振ってみせた。

「おまけにパイロットの寿命」

「誰に聞いたか？ モンシア少佐」

「盗み聞きは俺の得意技、なんだよ」

少し得意そうにそう言いながら、ユウよりも僅かに歳が上と思われるモンシア少佐が、あまり上手くないウイंकをして見せる。

「このアーガマの奴等からな、耳へ入った」

「盗み撮りだけが得意じゃなかったようだねえ、モンシア」

「目端が効くのは、エース、優秀なパイロットの証しだぜ？」

皮肉げにそう言うモーラへ、モンシアは再び下手に片目を瞑ってみせた。

「安静にな、ユウ大佐さん」

「俺に気を使ってくれてるのですか、モンシア少佐」

「そういうヤバい感じのな、サインを無視すると、さ」

「そう言いながら、モンシアはテーブルへ置いてあったウイスキーボンボンを口へ放り込む。

「死ぬんだよ、ユウ大佐」

「死神の呼び声、ですか」

「俺の昔の上官殿みたいにな」

モンシアのその言葉と共に、彼、そしてモーラの瞳に影がよぎった。

「真面目な奴ほど、死神さんの声が聞こえねえんだよ、解るかい？」

「私には解りますね」

「そう言って話に割り込んだサンダース中尉へ、モンシアが口を歪めながらその彼の頬を人差し指でつつく。

「お前さんには聞いてねえ、って言いたいとこだが」

モンシアの人差し指が下がり、その手を広げてサンダース中尉の頑健そうな肩を強く叩いた。

「許してやる」

「どうも……」

「似てるからよ」

ウイスキーボンボンがまた一つ、モンシアの口へ。

「お前さんの馬鹿丁寧な所が、死んじまった昔からのダチにな」

「申し訳ありません、モンシア少佐」

「宇宙人のバケモノ、ニュータイプとやらが使うファンネルに囲まれちまっつてな……」

「そう言ったきり、モンシアはその目を瞑って何かを噛み締めるかのように口をモゴモゴと動かす。

「良いやつだった」

「良い人ほど、先に死にますか……」

「逆に言えば、俺は生き残る」

「そう言って「ヒヒッ」と品の無い声を出したモンシアへ、瞳に影が射しこんだままのモーラが哀しげに微笑む。

「宇宙人共め、よくもな……」

「スペースノイドは嫌いですかね、モンシア少佐？」

「心の底からな、ユウさんよ」

ユウの問いかけに、モンシアが吐き捨てるようにそう答えた。

「そもそもに、ニュータイプとやらが理解できないんだよ、俺は」

「私もです、少佐」

「そうかい、サンダースさんよ?」

「と、言うよりもですね」

少し咳払いをしてからサンダース中尉は、その偉丈な体軀に相應しい堂々とした口調でモンシアへ告げる。

「話を聞く限りでは、エスパ―は敵にも味方にもいてほしくありません」

「違うない」

そのサンダースの言葉に、モンシアがニヤリと笑った。

「ん……?」

テーブルを挟んで談笑をしている四人へ、二人の兵士が近寄ってくる姿がユウの目の端へ入る。

「面白そうな話、してますね」

「そう思うなら、よ」

モンシア達の顔を覗きこんだ三十前後の歳と思しき金髪のパイロット風の男へ、モンシアは目を細めながら手をヒラヒラとぞんざいに振って答えた。

「茶か、何か摘まめるモンを持ってきてくれれば、お前達も混ぜてやる」

「私を持ってくるわ、アニツシユ」

二人組の内、男と同じ位の歳であると思われる女性兵士がキッチンへ向かう。

「良い女だ」

「ミユの奴がですかね?」

「尻が良い」

そう言って下卑た笑みを浮かべてみせるモンシアに対して、もはやユウ達は笑うしかない。

「あんたの頭には、それしかないのかい、モンシア?」

「それが若さの秘訣だぜ、ユウ大佐殿」

「ハハ……」

モンシアへ軽く笑いながら、自分のクルーカットすれすれとなった頭を撫でつつ、ユウはアニツシユと呼ばれた兵士へ席へ座るように促す。

「ニュータイプ、おかしな話ですからな」

「確かに、理解が出来ない」

「私たちには縁がないのかも知れませんがね」

そう話を切り出したサンダースへ、アニツシユと呼ばれたパイロットらしき男は同意をするように強く頭を頷かせる。

「けどさ、ユウ大佐殿は」

「俺を知っているか、アニツシユ君」

「ええ」

ユウ達が囲むテーブルへ、ミュと呼ばれた女性がランチプレートに山盛りの菓子や飲み物を持ってくる。

「ニュータイプについて、結構に知っておられるみたいですね」

「巡り合わせでな、アニツシユ君」

「珍しい」

菓子の包装をほどこきながら、アニツシユが感嘆の声を出す。

「ユウ大佐のモルモット隊みたいな、そういう独立して活動をする部隊には、ニュータイプが寄り付かないそうです」

「そうなのかい、アニツシユとやらよお？」

「大戦、主戦場にしか、ニュータイプが姿を表さない」

「フウン……」

「ガイッ!!」

「気の強い嬢ちゃんだ……」

「私達の部隊は一年戦争時、敵性のニュータイプ兵器と僅かに遭遇をしましたけどね」

椅子へ座ろうとしたとき、尻を触ろうとしたモンシアの手にゲンコツをぶつけながら、ミュと言う名の女性はそのまま改めて座り直した。

「ユウ大佐、モルモット隊ほどではありません」

「そうなのか……」

ミユへそう生返事をするユウの脳裏に「運命」という単語が浮かぶ。
ピピッ……

「さて」

「行くのですか、モンシア少佐殿？」

「地球の裏側までのナイスなクルージングだよ」

そう皮肉げにサンダースへ答えながら、モンシアは自身の腕時計のアラームを止め、少しだけランチプレート菓子をポケットへ詰め込んだ。
だ。

「保存食がわりに貰っておくぜ」

「ご武運を、モンシア少佐殿」

「任せなつて……」

軽くサンダースの肩を叩きながら、モンシアは自分が纏う黒いティターンズ色のパイロットスーツのチャックを上げる。

「部下に、良い女がいるんだ」

「あんたねえ……」

「良いところを見せて、モノにしてえ……」

モーラの呆れた声を気にした風もなく、モンシアは軽く口笛を吹き鳴らした。

「奥さんを大事にするって発想は無いのかい？」

「そんなことをしても、アイツは喜ばねえよ、モーラ」

「相も変わらず、ロクデナシな奴だ」

そう言つて顔をしかめながらも、どこかモーラはモンシアの顔を名残惜しげに見つめている。

「奥さんから、今に三行半を叩きつけられるね、これは」

「もう叩きつけられたぜ」

「そりゃ、めでたい」

携帯端末に写し出される、自分にあてがわれたモバイルスーツの機能をチェックしながら顔を向けずにモーラへそう答えるモンシア。

「どうせ、あの世で他の男とくっついているさね」

その言葉の意味、それが解らないほど鈍感な人間はこの場に居なかつたようだ。旨そうに菓子をつまんでいたミュの手が止まる。

「すまなかつた、モンシア」

「気にすんなよ、美人なモーラ奥様ちゃん」

軽く頭を下げたモーラへそう言つてから、ユウ達へ向けてモンシアが浮かべる穏やかな笑顔にはいつもの毒がない。

「事故つてのは、誰にでもある」

「不運、でありましたか」

「まあな、サンダース中尉」

いつものやや下卑た顔に戻つたモンシアが、パイロットスーツの胸の辺りから何かを取り出す。

「御守り、良いだろ？」

「御の形見、でありますか？」

「ちゃんと中に毛を入れてくれた本人の方があの世にいつちやあ、世話がねえ……」

「そつちの御守りでありますか、少佐」

苦笑いながらも、サンダースはどういう心境かモンシアへ向かつて軽く礼を試みせる。

「御守り？」

そのモンシアの御守りを見て、ユウはアーガマに來た時に自分のベッドの近くに置かれていた、誰のものか不明な御守りをズボンのポケットから取り出した。

「ビューー!!」

「おや、まあ」

アニツシュとモーラがその二つの御守りを見て、歓声を上げる。

「二人とは、見かけによらずにやるねえ、ユウ大佐殿お？」

「いや、そんなんじゃないと思うが……」

モンシアのにやつきの笑いに、ユウは僅かに汗が吹き出したその首を慌てて振る。ミュとサンダースもニヤニヤと笑いながらユウの顔を見詰めていた。

「開けんなよ、ユウさんよお？」

「やるわけないでしょうに、女性達がいる前で……」

そのユウの言葉に、モーラとミユがその顔を見合わせて忍び笑いを
する。

「運が逃げるからよ……」

「誰がくれたのかすら、解りませんのに……」

「行きずりな女二人か、そりやまいったあ!!」

そう言った後、品のない大笑いをして食堂から出ていくモンシア。

「この俺、ユウ大佐サマによる上官命令で、お前達に笑うなど言ってい
いか?」

「守れませんよ、そんなの……」

情けない声でそう言うユウへ、アニツシユが頬を掻きながら薄く笑
う。ミユは腹を抱えたまま笑いを堪えるのに必死で、顔を伏せたまま
である。

「全く……」

「申し訳ありません、大佐」

「ありがとう、サンダース中尉」

「ハッ……!!」

そう微笑み返すユウの笑顔、その表情にサンダースは自分の記憶に
残っている、昔の上官の顔を重ね合わせてしまう。

「しかし、今日は良い」

誰にも聴こえないその声を、ユウは薄く目を瞑りながら口の中で転
がす。

「俺の灰の海が穏やかだ……」

「非殺、でありますか」

「そうだよ、サンダース中尉」

艦長ブライト・ノアから少しなら酒の席を設けても良いと許可を得たため、四人のテーブルの前には軽いシャンパンが置かれている。

「モーラ技師は運が悪かったですわね、ユウ大佐」

「地球から支援物資が打ち上げられたからな」

「冷蔵庫のお酒、彼女は飲む機会があるかしら？」

「さあなあ……」

モーラは地球から打ち上げられたモバイルスーツの整備隊の監督の為、先程に愚痴りながらハンガーデッキへ降りて行った。

「非殺、パイロットを殺さないという意味ですか？」

「そうだ、アニッシュ」

「気に入らない……」

反対側の席でアニッシュ大尉は、ユウのその言葉に軽く眉をしかめながら、自身の癖のある金色の髪をその手で軽く整える。

「圧倒的な強者のみが出来る、傲慢なる慈悲、だそうだ」

「なるほど……」

夜の時刻となっているアーガマの食堂。照明が制限されて薄暗い灯りが灯る中、ユウの視線には自分の言葉に何かを納得させるように頷くアニッシュの姿が入りこむ。

「強者のみの特権、その言葉は 一理ありますね」

「ほぼ退役が決まったロートル上官である俺の経験の話、為になるか？」

「俺の昔の上官にも、そのニムバスという人の理屈を聞かせてやりた
い」

「ホウ……」

そのアニッシュの言葉に頷きながら、ユウは再度茶を口へ運ぶ。

「非殺とやらを掲げた奴が、昔にもいたのか」

「理想だけ、ですけどね」

「心がけ自体は良いかもしれないな」

「冗談じゃありませんよ、全く」

アニッシュのその悪態に、サンダースも何か同意を示すかのよう
に目を細める。

「最低に近い上官でした」

「俺にはミリ単位のニュータイプ能力とやらがあつてな」

さすがに身体の調子を氣遣つてか、ユウは酒に手をつけず、茶を飲む。

「何となく想像が出来る」

「超人でもないのに、自惚れていた人、かしら」

シャンパンに頬を紅く染めたミュウがそう言つてイタズラっぽく笑う。

「君にもニュータイプ能力とやらが？」

「女の勘と、人生経験」

ミュウのその艶っぽい声に、ユウはなぜかニムバスの恋人であるネオ・ジオン兵であるローベリアの顔を思い出してしまう。

「自惚れる人は、どこにでもありますからねえ」

「自惚れ、かよ」

アルコールに弱いのか、アニツシユの顔はこの程度の度量の酒にも赤く染めらされている。

「理想というものは美しいものですが、それを部下に押し付けるのはタチが悪い上官と言わざるをえませんね」

「解る？ 解るのかい!?! サンダース中尉さんはよ!?!」

「私の一年戦争時の上官も、人道を重んじ過ぎる方でしたからね」

酒が入り饒舌となったアニツシユが、サンダースの肩を叩きながら何度も頷いた。

「悪い人ではありませんでしたし、私のあらゆる意味の恩人でもありませんがね」

「俺だって、あの人、昔の上官を悪い奴だとはおもつてねえよ……」

トツ……

食堂へ誰かが入ってくる足音が聞こえる。

「けどな、ニムバスって人の話を聞くと、何か薄っぺらく感じるんだよ、な」

「最初はむしろ、味方ですら邪魔とあれば始末を躊躇わない男が、確固たる信念を持って非殺に踏み切る」

「そうそう……」

サンダースの言葉に頷きながら、アニツシユはユウの目の前に置かれたシャンパンの横取りをした。

「そういった、何でそうしなきゃいけないんだって事を、俺様のオツムが納得が出来るように説明をして下さればりやなあ……」

コツ…… コツ……

何か悪酔いを始めたアニツシユに笑みを浮かべながら、ユウは近づいてくるその足音に耳をすませる。

「人の命は尊い、その理屈は普通の人であれば誰だって解っているわよねえ」

「その常識の逆の意味が今のシャアのやっている事だ」

ポツリと言ったユウのその言葉に、ミュ達の視線が彼の顔に集まる。ジツと皆に見つめられたユウは僅かにその眉を上げた。

「何か変な事を言ったか、俺は？」

「説明不足ですよ、ユウ・カジマ大佐」

「かも、しれないな」

背中からユウへとかけられる、落ち着いた風の男の声。

「初めまして」

黒髪を丁寧の後頭部へ撫でつけた、黒のスーツをその身に包む男がユウへ向けて片手を差し出す。

「連邦軍の内部監査官を勤めている、レオンと申します」

「ケツ、お巡りかよ……!!」

「はい、お巡りさんです」

酔いが回ったアニツシユの言葉にもレオンと名乗った男は嫌な顔ひとつせず、丁寧にユウ達へ頭を下げる。

「……」

ユウは無言でその男が差し出した手を見つめている。その不躰なユウの視線へ対してもその男の表情は変わらない。

「このアーガマに客人がやって参りました」

「何で、それをあたし達に？」

「連邦軍のトップの方ですので」

「フウン……」

ミュが何か、レオンの慙懃無礼な態度が気に入らないらしく、鼻を一つ鳴らしてから、中身を飲み干したコップにもう一杯シャンパンを注いだ。

「出会った時に、粗相がないようにと」

「そうそうに会う機会もないでしょつに……」

「向こうが会いたがっているのですよ、ユウ・カジマ大佐」

ミュほどではないが、その男に警戒をしながらもオズオズと彼が差し出した手を握っているユウへレオンがニツコリと微笑む。その細く閉じられた彼の双眼からは感情が上手く読み取れない。

「今、かな？」

「出来れば、はい」

その言葉に、一つ息を吐いてからユウは静かに椅子から立ち上がる。

「じゃあ、少し行ってくるよ」

「俺も行きますぜ、大佐殿」

そのアニツシュの赤い顔を見返したユウの頭の中へ「へべれけ」という言葉が何処からか飛び込む。

「嫌だといつても、俺はついて行きますよ」

「何で、そこまで……」

「俺がついて行きたいっていつてんですよ、タアイイサ殿」

茹で上がったアニツシュの口からの呂律の回らない声、それと同時に放たれる酒臭い吐息、それらに対してユウは露骨に眉間へ強くシワを寄せながら、テーブルの他の面々へ助けを求めるような視線を向けた。

「つれていったらあ？」

「彼が不祥事を起こしても、ユウ大佐の責任ではないでしょう」

ミュとサンダースのどうにも無責任な言葉に、深くその口からため息を吐き捨ててからユウはレオン監査官の方へ向き直る。

「いいですかね、彼も連れて？」

「かまいませんよ、ユウ大佐」

レオンは微動だにしない微笑みを浮かべながら頷き、ユウ達をエスコートするようにその左手を食堂の外側へ軽く下手に向けた。「賑やかなのは、あの方も好きですから」

「ロンド・ベル、良い名前をエウーゴの新名称へと拝命をして頂けたものです」

「人命と地球の危機、それに即座に脚に付けた鈴を鳴らし、ステップをきりながら駆けつける」

「ローマンがおありですな、ゴツプ元帥」

「そうだろう、ブライト君」

アーガマのメイン・ブリッジに灯った常夜灯に地球連邦軍総司令「ゴツプ・カジマ」の太った顔が浮かぶ。

「我々が必死の心構えで議論に議論を重ね、付けたのだよ」

「ブレックス准将もお気に入りの様子です」

「めでたい、めでたい……」

アーガマの艦長ブライト・ノアのやや世辞を込めた言葉に、ゴツプ元帥は満足げに頷いてみせる。

「ゴツプ元帥」

数人の漆黒のスーツに身を包んだSP（シークレット・サービス、護衛の意）に囲まれたゴツプの元へ、レオンに先導されたユウ達が近づくと。

「ユウ・カジマ大佐をお連れ致しました」

「御苦労でした、レオン君」

部下を労うゴツプの前で、ユウは正式の礼を掲げる。酔っ払ったアニッシュのそれは敬礼だか万歳だかよく解らない。

「これはこれは、ユウ君……」

「シャリ、シャリ……」

弛んだ手をユウの短く髪を刈った頭に乗せ、軽く撫でるゴツプ。
「良い手触りだ」

そのどこかうサギか何かの小動物の手のひら、それを連想させる
ゴツプの手の感覚はユウにとって必ずしも悪い物ではない。

「ちよつと、あんた……」

「やめろ、アニツシユ君」

頭を撫でてくれるゴツプの手の心地よさに目を細めながら、ユウは
慌てながら真つ赤な顔のアニツシユを睨み付ける。

タップタップウ……

「オヤジさんであるあんたがどのくらい偉いのか知らんけど、ユウさ
んに対して失礼なんじゃないかい、え？」

「ホツホツホツ……」

ゴツプの顎に垂れた肉垂れをアニツシユに叩かれながらも、ゴツプ
はその顔に浮かべた笑みを崩さない。

「彼をどう処分致しますか、元帥？」

SPのリーダーの口から静かに放たれた、小声ながらよく響く声。
その声の冷たさに、当の本人ではなくユウの顔が微かに強ばる。

「許してやりなさい」

「ハッ……」

黒づくめのリーダーの男が発した冷酷な言葉に、ゴツプは軽く手を
振ってみせながらそう答えた。

「寛容な精神で」

その言葉と共に、SP達の中から一人の女性が進み出て、アニツ
シユのその腕へ強引に自身の腕を絡ませる。

「お、おいあんた……」

「いいから、私と良いことしましよ……」

その女は艶然と微笑みながら、女の腕力とは思えない力の強さでア
ニツシユの身体を引きずり、ブリッジから出ていこうとする。

「ユ、ユウ大佐ア……!!」

ようやく己のしでかした事に気がついた、顔色が赤から青に変わっ
たアニツシユ。ユウは彼の姿を見ながら、考えがまとまらないまま

ゴツプ元帥の顔を見つめようとした。

ポン……

SP達の内の一人が軽薄そうな、ニヤリとした薄い笑みを口の端へ浮かべながら、ユウの肩を叩く。

「お化け屋敷みたいなスリルを味わってもらうだけですよ、彼にはね」
「……」

顔にかけているサングラスの為、目の感情までは解らないが、ユウにはどうも彼の言葉が信じられるような気がした。

「大佐、彼女の減速ができません、引きずり込まれます……!!」
「ビツ……!!」

ゴツプの方へ顔を向いたまま、ユウは自分の背中へ回した左手、その親指だけを立ててアニツシユを見送る。

「思っていたよりも」

「はい、元帥」

SPの女にドアから連れ出される、アニツシユの放った最後の悲鳴を聞き流しながら、ユウは姿勢を正してゴツプの顔を実と見つめた。

「君がお元気な様子で、なりより」

「ゴツプ元帥の事は、ジャミトフ閣下から色々と御伺いに……」

「フム……」

「ゴツプ元帥……?」

微かに眉をよせたゴツプの顔に、ユウは怪訝そうな声を出す。

「ユウ君は知らないのかな?」

「何、をでございますか?」

「行方不明なのですよ、ジャミトフ君は」

「なんと……」

初耳であるそのゴツプの言葉に、ユウの面に翳りが差した。

「今、テイターズ、連邦問わず、その手の専門家が搜索中です」

「そう、でしたか」

「まあ、間もなく見つかるとは思いますがよ」

「ハッ……」

「安心なさい」

眉間へ皺を寄せて考え込むユウをいたわるように、ゴツプ元帥は彼の肩へ手をやる。

「君の体調、それにいささか不都合があることは承知しております」

「我ながら情けない限りです」

「くれぐれも、ご自愛をなさいよ、ユウ大佐」

「ありがとうございます、ゴツプ元帥」

「ウム……」

うやうやしく礼をし、その面を上げたユウへ黒服達へ混じったレオンがアイ・コンタクトを向ける。何となくユウは彼の視線が意味することが解った。

「では、自分はこれで」

「パイロットをやるのが苦痛になっても、出来る限りに他に仕事を用意しておきます、安心を」

「度重なる御心遣い、本当に感謝致します、元帥」

「ナンノ、ナンノ……」

もう一度、ユウはゴツプへ敬礼をし、アーガマのメイン・ブリッジを立ち去っていく。

「マスター君」

「ハッ……」

ブリッジのドアから出ていったユウを見送ってから、ゴツプはSP達のリーダーへその顔を向ける。

「ユウ・カジマ君とお話をする機会が出来ましたね」

「私は任務中ですので」

「時差ボケを直す為の休日、前倒しにして与えます」

「よろしいので?」

「ここアーガマなら、私には何も危険な事は訪れないでしょう」

「ユウ大佐」

「はい」

「カラ元気、良い心掛けです」

深夜の常夜灯が灯ったアーガマの食堂、そこで眠たそうな顔をしているユウの顔を覗き込みながら、ブライトが目細めて微笑む。

「出陣を前にした人間へ暗い顔を見せると、まるで葬礼になる気がしましてな」

「なるほど、ね」

黒いコートを纏った男が自身のサングラスを外しながら放つ、ユウへの深く響く声。

「眠たそうだな、ユウ大佐」

「眠いのは確かですが」

少しあくびをしてから、ユウはぼんやりとした目でテーブルのお冷やへ手を伸ばす。

「最近、なかなか眠れないみたいですからね。彼は」

「貴方はどうなのです、ブライト艦長？」

「先程に、仮眠を取りましたので」

「なるほど」

サングラスを外したSPの男、彼のその顔から想像される歳はユウよりもやや上、ニムバスと同じ年位であろうか。

「わたくしも、早く時差ボケを治さなくては、ね」

「ジャブローの時刻とは、完全に逆になってしまっておりませんか」「難儀だなあ……」

不満そうにそう口を尖らせるゴツプ元帥のSP達のリーダー。
(最初に思ったよりも、人間的な人だな)

彼のその仕草を見たユウは、どこか彼と自分が似ているような感覚を覚えつつ、その唇をゴツプの水で濡らす。

「急だったので、地上で身体のタイムを慣らす暇がなかったのが痛い」

「アーガマを含むこの一帯の艦の標準時間、どうにか慣れて下さい。マスター護衛長」

「苦勞をさせてくれますよ、艦長」

「新鋭のクラップ級には、最新の身体時差調整コントロール・ルームがあるらしいですが」

「ここでは、薬物も併用する必要があるな……」

ぶつぶつと呟いてから、カップのコーヒーを一口含んだマスターの顔がユウの方へふと向いた。右手の指で一つ頭を搔いてから、ユウは不眠から来る疲れをなるべく隠して彼へ話しかける。

「俺に興味があったとか、マスター護衛長？」

「変な意味じゃないぞ、ユウ大佐」

「解ってますよ……」

ニヤリと嫌な笑みを見せるマスターへ、不服そうな表情をユウは浮かべた。

「君とは、同郷の出身らしいな」

「アイランド・イフィツシユ生まれ？」

「ゆえに、連邦ではいささか肩身が狭い」

真夜中の食堂では、テレビも放送を制限される。時計の針の音だけが薄暗がりには居る男達の耳へ届く。

「一応は、宇宙生まれのエイリアンだからね」

「故郷は地球の胎内、海の底ですよ、マスター隊長？」

「だから、さ」

ブライト艦長は黙って二人の男、どこか似ている雰囲気があるユウとマスターの話に聞き入っている。

「そのコロニーが落ちたオーストラリアには格別な思いがある」

「故郷の眠る、お墓であるから？」

「それもあるが、ね」

カチ…… カチ……

「一年戦争時、そこが私達の部隊の主戦場だったのさ」

「ホウ……」

時計の針の音が響く中、ユウは目を擦りながら、マスター護衛長の言葉に相槌を打った。

「墓荒らしのジオンへ向ける、銃を握る手に力が入ったよ」

「故郷、か」

その自分の眩きと同時に、以前に夢か何かで見た不可解な少年、または少女の姿がユウの視界に浮かぶ。

——あなたは、YOUよ——

浮かんだ少女の幻影と共に、ユウの脳裏にその言葉が疾る。慌てて首を軽く振るユウ。

(疲れかな……?)

ユウは口の中だけでそう眩く。暗闇のせいか、ユウの不審な挙動には二人とも気がついていないようだ。

「いろいろと互いの境遇や環境が似ている為、君の活躍には関心があつたよ」

「古い話ですよ」

今の幻覚、幻聴まがいの物事はおくびにも出さず、ユウは笑みを浮かべてマスターへ答えを返す。

「そうかな?」

「はい、マスターさん」

そうマスター護衛長へ細い声で答えるユウ。彼に最近付きまとっている暗い翳りは、真夜中の食堂の中でもブライトには見てとれた。

「もう引退の時期ですよ、俺は」

「私も一年戦争直後に、モビルスーツのパイロットから引退をしているんだ」

「そうなのですか?」

「当時の最後の戦いの時に、両膝に弾を受けてしまつてな」

そう言うマスターの声色には、微かに哀しげな響きがある。

「日常生活には支障がないが、モビルスーツのフットペダルが上手く踏みこめなくなつてしまつたんだ」

「そうですか、マスターさん……」

「レオン、彼のツテで新しい仕事につかせてもらつたさ」

「良いじゃないですか」

「今では後悔している」

「そんな……」

「君の姿を見て、そのキチンと封を閉じたはずの感情が蘇ってきたんだよ」

そうつまらなそうに、いきなりに吐き捨てたマスターの強い語調に、ユウとブライトが僅かに鼻白む。

「私のモバイルスーツ乗りとしての生命は、不完全燃焼のままに幕を閉じた」

「自分で選んだ事でしょう?」

「その選択、今の君の不甲斐ない顔を見ていたら、やはり間違いであったのかなと、切に思う」

「何が言いたいのです?」

そのマスターのあからさまに刺のある言葉に、ユウのその面が強ばり始める。今の自分の状態が責められているような気がしたのだ。

「同郷の者としての忠告だ、ユウ大佐」

「マスターさん……!!」

その会話の雲行きの怪しさに慌てたブライトが、ゴツプ元帥のSPリーダーへ宥めるようにその両手を振った。

「私の二の舞になるなよ」

「俺に喧嘩を売っているのです?」

「売っているのは焰だよ、ユウ大佐」

「何イ?」

顔を歪ませるユウへ叩きつけるようにそう言いながら、マスターは席を立つ。

「今、ユウ大佐に燻っている灰の山を燃やし尽くす焰だ」

「あなたには関係がない、ないだろう!」

「どのような事情があろうとも、一時の失速に抵抗する気力を持ってない君を見ている私はね、立腹を防げない!!」

「病人、失意、一月あたりのブランク、それでも意地を見せる喧嘩くらいは出来る!!」

「SPの十八番である喧嘩、そいつでパンチの一発でも私に当てられれば、股潜りでもしてやるさ!!」

ドウ!!

「お止めなさい!!」

強くテーブルへ両手を打ちつけるブライト。まさしく喧嘩腰となっていた二人の視線がその手に向けられ、彼らの口が閉じられる。

「真夜中です」

怒鳴り声を上げていたユウ、そしてマスターを睨みながら、ブライトが静かに二人に向かって威圧を含む声を放つ。

「真夜中です、お二人とも」

そのブライトの抑えた怒り、繰り返し舌に乗せた怒りの声に、ユウとマスターは無言でその背を向け合わせた。

「失礼する、ユウ大佐にブライト艦長」

カツ……カツ……

そのまま二人に背を向けたまま、ブーツの足音を高く鳴らして立ち去るマスターの後ろ姿をユウはじっと睨み付けている。

「不眠症、その影響が出てますな」

「すみません、ブライト艦長……」

深く息を吐いてから、ユウはブライトへ頭を下げた。

「今のあなたに必要なのは、休息です」

「はい」

「私は子供、子供達の相手には慣れていない、つもりであります」

「申し訳ありません、ブライトさん……」

「医務室、今なら当直の者がいるはずですよ」

「相談に行ってください」

「それが良い」

いつもの穏やかな微笑みを浮かべているブライトに強い罪悪感を覚えながら、ユウは力ない足取りで食堂から立ち去っていく。

「あのSPの方、彼の痛い所を突きすぎるよ、全く……」

なかなか気苦労が絶えないブライトは、そう愚痴を言いながらポケットから胃薬を取り出しつつ、暗い足元に注意をしながらキッチンの水道へ向かっていった。

第54話 火種

「脚がついていない機体に、よくよく私は縁があるらしい」

ネオ・ジオンの超弩級戦艦「レウルーラ」の内部ドック、その広大な中空へと係留されている深紅のモビル・アーマー「ノイエ・ローテ」
「アムロの奴を侮っていたかな、俺は？」

深紅の薔薇を思わせる機体へ遠目の視線を送りつつ、そう自嘲げに呟きながらも、その彼、シャア・アズナブルの端正な面には機嫌の良さが伺えた。

「シャア・アズナブル総帥に敬礼!!」

敵機との交戦により中破してしまったその機体の修復過程の確認へと訪れたシャアへ、付近の兵達が敬礼をしてみせる。

「非人型のモビルアーマーには、脚などは本当に飾りであろう？」

脇へ付き添っていたハマーン・カーンがそう笑いながら、少し癖のある自身の髪へその手を軽く撫で付けた。

「だが、その飾りをミイバ・ザムは付けているぞ？」

「ミネバ様、彼女の父上への思いがあのでモビル・シップへ飾りの数々を付けさせたのであろうな」

「遠い昔の話のようだ……」

主君筋にあたる小娘の父、かつてのジオン公国の名だたる猛将、彼の事を特に悪い男であるとはシャアも思っていないが、その彼の顔はもはやその脳裏には記憶されていない。

「しかしに、あやつの顔は覚えているとはな」

自分のかつての復讐の為の踏み台としてしまった、誠実な人柄であった貴公子の顔、それは今のシャアでも思い出せる。

「ホログラフ、それと実物の顔と声の同期、お願い出来ますか？」

「頼む、ロベルト」

ジオン、エウーゴ時代からの股肱の部下へ頷きながら、シャアはハマーンがよこした手鏡で自分の身なりを整え始めた。

「いいぞ、ロベルト」

「カメラ、回します」

軽い回転音と共に、クラシックに見えるロベルトが握るハンドカメラ、そしてマイクが動き始める。

「シャア・アズナブル!! 偉大なるジオン・ズム・ダイクンの宇宙の魂を受け継ぐ者!!」

「ギレン閣下、そしてデギン公王の御遺志をも継ぐ、星を継ぐ御方!!」
レウルーラの大型投射器から浮かぶ、威風堂々としたシャアの姿に、ネオ・ジオン大艦隊の者達から歓声が挙がる。

「道化かな、私は?」

「カメラと付属のマイク、回っていますよ」

「スマン、スマン……」

プロジェクトの大肖像と共にネオ・ジオンの各艦へ流されているテレビには、幸いな事にその彼のカリスマを損なう眩きは流れなかったようだ。

「スペースノイドの時代を我らに!!」

「ありがとう、皆の者」

忠義と信念、慈愛や自由といった名前の美しき欲を心に灯すネオ・ジオンの兵達に見送られながら、鉄の仮面を小脇に抱えたシャアはカメラを通して将兵達へ手を振って見せる。

「スペースノイドの希望の星がシャア、か……」

シャアの後ろへ控えているハマーンが、ため息をこぼしながら小さく呟く。部下の一人にカンニング・ペーパーを見せられながら朗々とした声で演説を行うシャアにはその声は聴こえない。

「赤い彗星も堕ちたものと言えるかな……」

しかし、そのネオ・ジオンの兵や将校の中には、常識や良心を軸とした反意持つ、栄光あるジオンの理想に深い疑問を抱いている裏切り者共、それらが潜在的にかなりの人数として自軍へ内包している事をシャアは知らない。

「私やミネバ様の心を見抜けない程に、ニュータイプとしての目が曇りきってしまった男であるからな」

「耳障りの良い言葉や感情しか、今の彼には聴こえますまい」

ノイエ・ローテのサブ・パイロットである男が、ハマーンの隣へ寄り、書類を渡す傍らに小声で彼女へ話しかけた。

「シャアのサポート、難儀である」

「思っておられる程に、苦勞はありませぬ」

「昔に主が乗っていた機体の後継機であるからな、あの紅い花束は」

そのややに皮肉が混じったハマーンの声に、ノイエ・ローテのサブ・パイロットに選別された男は軽く笑みを浮かべるだけである。

「オールドタイプである私にとっては、人の表面の声だけを受け取れば良いだけです」

「浮わついたニュータイプには共感が出来ぬか」

「一応は武人、物事の表だけを見て生きてきた男であるます、私は」

「そのせいで、そなたはコロニー落としの正当化が出来たのであるかな？」

「数年も経てば、不遜な内省の心も芽生えて来ます」

口からそうこぼしながら再び彼が浮かべる薄い笑みは、ハマーンにとっては苦澁の表情として見てとれてしまう。

「頼むぞ」

「オグス殿や海賊気質の女狐、そしてあの騎士道を掲げる男もジオンの呪縛を振り払っているのです」

男にとっては、自分の肩へ手を置いてねぎらいの心を見せてくれるハマーンの姿、それはどこか昔に心酔をした上官の顔を思い出させてくれる。

「スペースノイド、我らを自分自身で縛っている、ダイクンやザビ家が投げかけた希望という名の縛鎖であるな」

「が、今はまだその鎖を武器と致します」

「鎖を真に握っておられるのは、シャアではなくミネバ様であるからな」

「ギレン閣下やドブル様の、苛烈な性格を受け継いだとなれば」

最近、どうにも感性的に猛将であった父親の血を表へ表してきた、名目上ではネオ・ジオンの最大権力者である少女の名を、男は会話の隙間でその舌へ乗せた。

「あの方の言葉一つで、身が引き締まる」

「支え甲斐があるか」

「ジオン軍人としての意地を見せなくてはいけませんな」

「ミネバ様への面子の事か？」

「それもありませんが」

この壮年の男が浮かべる笑みには、いつも、常にどこかな侘しさが含む。

「幼き女帝に脚で使われている、オグス殿に笑われたくない」

「あれはあれで、良い境遇におるぞ？」

「さすがにあの境遇は、私には耐えられぬかと……」

その言葉に横目で可愛くウインクをしてみせるハマーン。その彼女の顔を見て、男はこの女執政がまだまだ若いと言える歳であることを再認識させられる。常態では余りに大人びている女なのである。

「しかるに、こたびのアクシズを中核とする小惑星群、スペースノイドの怒りの意思を天雷として具現化した怠惰なる者達へのメギドの裁きは、えーと……」

「中継の即座編集で削除をされているとは言え、シャンと発言をしてくださいよ、総帥」

「字が小さいのだ、アポリー……」

色々な意味で微妙な表情をしているハマーン達の前では、シャア専用の赤いマジックで文字を書かれてある長いカンニング・ペーパー、それを引きずっている昔からのシャアの部下の苦勞の姿が目に入った。

「元気そうね、思っていたより」

「立ち替わり入れ替わりが、以外と激しいからな、このアーガマは」

今日のアーガマの食堂には人が少ない。先日に関頭を丸めたユウは、

昔馴染みのエウーゴパイロットである「ハイリーン・ハイマン」通称にはブルーとの名で通っている彼女へ笑みを浮かべている。

「気分的にはリラックスできるさ」

「あなたの前の髪形の方が好みだったのに」

「髪の毛の白い物が目立たないようにするためだよ」

「あなたの今の状態、ブライト艦長から聞いたわ」

「がっかりしたか？」

「がっかりと言うより、心配」

「俺は皆へ迷惑をかける男だな……」

「けど、よかった」

軽くユウの短髪をつまんでから、ブルーは微かに目尻へ皺がうかぶようになった瞳を細めた。

「思っていたより、遥かに元気そう」

ブルーは先程の台詞を繰り返す。久しぶりに会った彼女へ見せるユウの顔色は確かに良い。顔の色艶が悪くない。

「いろんなメンツに会うからな」

「この一帯の宙域は、ジャブローから打ち上げられた増援の、ちょうど中継地点になっているみたいよ」

「さすがに激戦区の宙域へジャブローの表面の密林が顔を出しているときは、ひたすら何も落ちてこないように、と」

「あそこのモグラ・イン・ジャブロー達は祈るしかないわよねえ……」

「それだけで、宇宙から見下ろすネオ・ジオン連中共の溜飲は少しは下がるだろうな」

「クワトロ、シャアの見込みが甘かったからね」

そのブルーの台詞を聞いて、ユウは彼女が一時期の間、クワトロと名乗っていた頃のシャア・アズナブル、彼の部下の一人であったという話を思い出す。

「アースノイドを甘くみるのが、一年戦争から続く、ジオンの人間の悪い癖だ」

「ジャブローを狙ったフィフス・ルナの迎撃に地球勢力が成功したから、ね」

「それにしても」

今は映像が消えている、食堂の大型テレビに指を差しながらユウは自身の丸めた頭へ片手を乗せた。

「よく戦略核の使用をためらわなかったな、迎撃部隊は」

「なりふり構っている暇はないわよ」

そう愚痴るブルーの顔には疲労の色が強い。愛機のZⅡを破壊され、補充モビルスーツの授与の為に地獄の宙域、地球の裏側の激戦区からアーガマへ帰ってきたばかりである。

「シャアはアクシズ群を停止させ、交渉を持ち出したか」

「単なる時間稼ぎよ」

「そうだろうな、全く……」

そう口からこぼし、軽くため息を吐きながら脚を組み直してコーヒーを飲み干すユウの顔を、ブルーは何とも言い表せない表情でじつと見つめていた。

「ネオ・ジオンも連邦派も、態勢を整える時間がほしいんだな」

そのブルーからの不可思議な視線に、ユウは自分の心の何処かが掻き乱れるのを感じたが、そのまま彼女へ向かって口を開く。

「シャアの意思、いや妄執は止まらない、か」

「ノイエ・ローテ、ネオ・ジオンのフラッグ・モビルアーマーのマシンがね」

「忌々しい、シャアの両手に余る紅く巨大な妖花だな、ブルー？」

その真紅のモビルアーマーの名、それはユウにとってはちよつとしたトラウマである。

「アムロ・レイのルー・GPに後退を余儀なくされたのも、彼のメンタルに一刺しを与えたのかも」

「あのバケモノを撃退できるとはな……」

以前、モルモット隊総出、それにエースであるシロッコが加わっても痛み分けに終わってしまった紅いモビルアーマーの姿がユウの脳裏に浮かぶ。

「小休憩状態とは言え」

気分転換にキッチンへ入っていたアーガマの艦長ブライト・ノアが

自作のコーヒーを片手にユウ達の座っているテーブルへ近付いてきた。

「戦線自体が拡大し、今ではここアーガマは必ずしも後方とは言えません」

「だから、ゴツプ元帥達はさらに後方のクラップ戦列艦隊へ？」

「ジャブローのモグラから、風見鶏になったと笑っておられました」

「単に、ジャブローから避難したかっただけでは、ブライト艦長？」

「言わないでやった方が良いでしょうに……」

そのブライトの言葉に、ユウとブルーの口から笑みがこぼれる。

「まあ、それもクルクルと戦列が回れば引越すかもしれないが」

「大規模過ぎる地球をグルグル回るオールレンジ攻撃するのは、厄介

ねえ……」

「永遠の厄介者、だな」

その二人の会話に、ブライト手製のコーヒーを口へ含むユウは再び笑みを。

「ゴツプ元帥を見送った時に」

「ほんの二、三日でしたね、アーガマにいたのは」

「マスター護衛長が、あなたへ言い過ぎたと伝えてくれと」

「気にはしません、よ」

「ホウ？」

ブライトが「味が濃すぎたか」と自身のコーヒーを飲んだ感想を呟きながらも、やや無理をしているとは言え、ユウの明るい表情をじつと見つめる。

「むしろ、彼の挑発で」

一つブライトに礼をしてから、ユウはコーヒーへ水を継ぎ足し、その濃さを整えた。

「何か、パイロット寿命や病、それとは関係がない俺の精神的な問題が浮かび上がりましたから」

「解りきった事じゃない」

コーヒーの苦味に顔をしかめながら、ブルーがどこか投げやりにその言葉を放つ。

「良い機会ではないですか？」

「自己の分析、ですか」

「幸いと言うか何と言うか、今あなたにあてがうモバイルスーツもありませんし、それに……」

しばし、天井を向いた後、ブライトは目頭を軽く押さえながらユウの顔を見やる。

「あなたは私の部下、指揮下ではない」

「命令をする権限が無いと？」

「階級上では、あなたは完全に私よりも上なのですよ」

「そうでしたね」

そのブライトの言葉を聞いて、ユウが以前に耳へ入れた噂話を思い出した。

「今は、どこもかしこも指揮系統が混乱しているようですね」

「はい」

ブライトの返答に、ブルーも同意をするように真剣な顔で頷く。

「今の私、形式上はブライト艦長の指揮の下となっているけど、命令が伝わるルートはティターンスのジェリドから」

「なんだそりゃ？」

「ジャミトフ・ハイマンが何処かへほつき歩いているお陰で」

自分の父の名を言ったときに、ブルーの表情が何も変わらなかったのが、父親の事を心配をしている彼女の心情をかえって顕している。その場にいる二人の男達にもそれが解る。

「連邦本軍の揮下で命令ルートがティターンスとエウーゴ、所属が新組織ロンド・ベルという部隊もあるわ」

「もしかして、そいつは」

「あんだ、ユウ・カジマのモルモット隊」

その自分の古巣を聞いた時のユウの顔、その時の彼の表情は眉の一つも動かない。驚くほどに何の感情も見せないユウへ、ブルーとブライトが何とも言えない視線を交わし合った。

「その指示系統の乱れから」

自作のコーヒーの失敗の理由をその舌へ刻ませながら、ブライトは

あまり手入れが良いとは言えない自身の面の髭を撫でる。

「単にエウーゴの新名称だったはずの Rond・ベル、それが緩衝用の新組織になってしまいましたからね」

ブライトは場を取り持ったためか、あえて他人事のようにそう言い放ったのちに、キッチンへコーヒーマシンをポットを下げに行く。

「あまり、昔の古巣への感傷が無いみたいね」

「すまない」

「あたしに謝ってどうする？」

そのブルーの道理に対して、ユウの眉間へしわが寄った。

「俺は、冷たい人間なのかな？」

「ウーン……」

疲れたようにそう口から言葉をこぼしたユウへ、ブルーが腕を組みながらその首を傾げる。

「それを知るためにも」

ブルー、彼女のニックネームの通りの深く蒼い瞳が、ユウの困惑をした顔を覗き込む。

「心理分析だか、占いをするのが良いのかしら？」

「分析も何も無いだろう、な」

「見当もつかないのかしらね、あなた自身は？」

「何もない、中身の無い人間だからな、俺は」

「自分の心、その部分ではそう自己の判断をしているか……」

そのユウの言葉、その虚ろな響きを伴う内容にブルーがその頭を軽く傾かせ、なお深く考え込んだ。

「ユウ」

ポットを片づけたブライトがキッチンから、何故か空の大鍋を片手に持ち、危なっかしくその底の深い鍋をブンと大きく振ってみせる。

「鍋？」

そのブライトの謎の行動に、ユウ達は訝しげながらもキッチンへ足を運ぶ。

「シロッコがこれでスープを作っていましたよ」

「へえ……」

まじまじと、その深鍋を覗き込むユウ。

「戦争にあいつが生き残ったら、飲ませてもらおうかな」

「あの人、過労死するわよ」

アーガマでシロッコが下働きをしていたとき、彼と少し面識が出来ていたらしいブルーが肩を竦めてユウへそう言い放つ。

「忙がしいのか？」

「テイターズズのトップ代理のバスク司令とやらが、人に命令を上手く伝えるのが下手らしいから」

「シロッコの奴だつて、下手くそだぞ？」

「テイターズズのナンバーツとして、あちらこちらを駆けめぐる羽目になっているわね」

その必死なシロッコの顔を想像して、ユウの頬が僅かに緩んだ。

「彼には、良い社会勉強になりますよ」

「俗人に上手く使われる天才となつてしまったな」

「そのシロッコ、凡人共がと例の常套句を愚痴りながら駆け回る姿と格好、それが彼に皆の信頼を集めさせています」

「やはり、人は行動か……」

「あなたの取ったプロレスと同じようにね」

少し嫌みが入ったブルーの言葉に、今度はユウがその肩を竦める。

「がむしゃらに、何も考えずにやっただけですよ」

「その姿ですよ、ユウ大佐」

「はい？」

そのブライトの言葉の中には、何かしらの強さが混じっていた。

「なりふり構わない姿が、皆の心を動かします」

「見苦しい姿が、信頼を集めると？」

「テレビ受けを狙った言動など、すぐに見抜かれますからね」

「そうかな……」

どこか納得のしきれていないユウの顔を、暖かい視線でブライトが見つめている。

「ああ、この鍋の事なのですが……」

ブライトが再び手に取った深い底の大鍋をユウとブルーが除きこ

む。

「どの部分が一番大事だと思いますか？」

「ウン？」

ユウには質問の意味自体も、答えるべき言葉も解らないが、とりあえず思いついた事を舌に乗せた。

「取っ手？」

「外れ」

「じゃあ、鍋の素材の材質」

「外れ」

そのブライトの簡潔なノーに、ユウはしばし首をひねったあとにポツリと言う。

「ギブ・アップ」

「正解は」

僅かに笑みを浮かべながら、ブライトが鍋へてのひらを差し入れ、その中間でその手をブラブラとさせた。

「鍋の底？」

「その上です」

「え、蓋？」

「その下」

「何を言って……」

口を尖らせたユウは、そう言った後にあることに気がつく。ブライトの手の位置、それが意味する所。

「鍋の中、空洞……」

「そう」

「何もない所です」

ニュータイプ能力とやらがあるのかは定かではないユウとブルーであるが、この二人の勘は鈍くない。

「中間、という意味もあります」

その言葉に、ブライトが自分の連邦内での立ち位置、境遇をある程度は理解しているのだとユウには想像ができる。

「この何も無い部分、カラッポがなければ、美味しいスープはどんな天

「才でも産み出せません」

鍋をコンロへ置いたブライトは、ユウ達を元の食堂のテーブルへ行くように促した。

「戦って、勝てとは言いません」

歩きながら、ポツリとこぼれるブライトの言葉。

「病人ですからね、あなたは」

「一応は、ね」

「しかし、負けて得る物はありません」

「それは違います、ブライト艦長」

キツチンの出口に置いてあった缶ジュースをくすねながら、ユウはハッキリとそうブライトへ告げる。

「俺はこの前のプロレスで負けた後、何かを掴みました」

「それならば」

キツチン脇、その自動販売機にブライトがカードを走らせ、転がってきた飲み物をその両手に取った。

「部分的にあなたは勝っていた、という事ではないでしょうか？」

「部分的に？」

「カミーユの奴の言っていた、あなたとニムバスさんとやらのプロレスの感想」

「男の戦いだったって、言っていましたっけ？」

「あなたに拍手をしながら、男泣きしていた為、皆からさんざんに冷やかされてましたよ」

「実に生意気な小僧だ……」

コチ…… コチ……

「あのモビルスーツのプロレスはね」

時計の針の音に、何か本当の意味での自分の動き始めた「刻」を感じるユウ。

「レコアの奴みたいにな、あなたを無様な奴だと言った人はいましたか」
「シロッコの愛人となる位だから、気取った、キザな男が好きな人なんだろうな」

「彼女を始めにしても、馬鹿にした人間はいなかったようですよ」

「……」

顎に手を当てているユウを先頭に、三人の男女は再びテーブルへ戻っていく。

「超高視聴率だったみたいです」

「そりゃ、よかったね」

「ホロテープの売れ行きも上々」

「めでたい、めでたい……」

未だに投げやりな言葉を放つユウ、彼を睨み付けるブルーの顔へブライトはその細い目から僅かな光を疾らせ、彼女へ抑えろと無言の意思を告げる。

「テイターンズのジェリドも」

「ムラサメ・ジャンパーの一つもくれない男の誉め言葉なんで、どうでもいいですよ……」

しかし、ブルーはブライトの視線をあえて無視をし、ユウへ挑発的にその口を尖らす。

「マウアーという、その彼の恋人さんも」

「単に恋人の機嫌を取っているだけでしょう？」

「そしてあの粗暴なパイロット、たしか名前はヤゾ、ヤジ……」

「もしかして、ヤザン・ゲール？」

「ええ、あの野蛮人が」

そうイタズラっぽく唇を綻ばせながら、ブルーが微かに笑う。

「あそこまで出来る男だとは思わなかった、とね」

ポウン……

食堂の古時計から、時刻を知らせる鳩の鳴き声が響いた。

「終わったのです、全て」

そう力なく口から出るユウの言葉、しかしどこか、彼のその台詞には揺らぎが感じられる。

「嘘ね」

「そうですね」

直後に放たれたその二人の断言に、ユウは鼻白むしかない。一つごまかすように彼はわざとらしく咳払いを放つ。

「あなたは今のガス欠を、大袈裟に捉えすぎているのです」

「断言してくれませぬ、ブライト艦長」

「一年戦争から、休み無しに任務を勤めるといふ恐るべき頑健な組織の歯車、しばしのユウ・カジマ・エンジンの焼き付き」

「おだてても、昔の力は出てきません」

「誰も出てきませぬよ、そんな物は」

ブスツとした顔をブライトはしながら、缶コーヒーの蓋を開ける。その音が何かユウの耳へ障る。

「昔の栄光にすがつても、何も生まれません」

「残り火の人間にも、意味があるか?」

「残り火などありません」

「俺の言葉を否定して、俺の何を肯定しているつもりなので?」

そのふて腐れたユウの言葉に、ブライトとブルーは呆れ半分、面白半分といった、苦い笑いをニヤリと浮かべた。

「火力、出力の差こそあれ、心臓が動いている限り、人の歳を無視した焔がそこから立ち上がります」

「人生にロートルも、寿命も、老害もないか?」

「それに加えて、余生、とやらも無いと思います」

いつにないブライトの言葉に、今度はユウが苦笑いをしてみせる番である。

「生涯現役、ね」

「君の父上と同じように」

「勝手にロマンスに酔ってテイターズを創り、勝手に徘徊老人となつて」

「若い老人だな」

ユウの言葉に、ブルーが笑みを浮かべながら彼の胸を小突く。

「あなたの火の消えた空のコンロ、それに着火の実験をしてみましようか」

「出来ませぬか」

不敵にニヤリとブライトへ笑ってみせる、青白ボウズ頭のユウ。「苦勞人とは言え、知り合つてそれほどでもないブライト艦長が」

「すでにいくつもの」

そう言いながら、ブライトはまるでカードゲームの札を持つようにその片手の先を摘まんで見せた。

「着火材の手数、カードを持っております」

「分かりましたよ」

尊大に、食堂の椅子へふんぞり返りながら、ユウはブライトの顔、いや目を覗き込む。

「俺のやる気の心を動かしてみて下さいよ、名キャプテン」

「その見え見えの子供じみた態度、解らない話ではないけど不愉快ね」

「俺は真面目なんだ、一応ね」

「腹が立つわあ……」

三十過ぎになって、苦労か何かの為に目に陰が出てきたブルー、彼女がそう吐き捨てながら、ユウの隣の席へ座る。

「何だかんだ言って」

ブライトの顔にはいつもの穏やかな笑み。

「すでに為すべき心は決まっていますよね、ユウ大佐」

「はい」

そう答えるユウの笑顔も穏やかである。その彼の顔を見て、ブライトとブルーの瞳にも薄く光が宿る。

「自分で心の火種をどうにか作りましたか」

「一時期は、かなり気落ちもしましたがね」

「ゆえに、休息というものは必要なのです」

「なるほど、ね」

ユウのその両目へ徐々に、静かに真意さの輝きが戻ってくる。首を一つ回しながら彼は両の手を組み直し、その口から大きなため息を出す。

「ですが、あと一押しを誰かに頼みたいのです」

「本当に、情けないほど腹の立つ言い分」

缶コーヒーをその可愛く見える唇へとつけたまま、ブルーがユウを小馬鹿にしたように鼻を一つ鳴らした。

「でも、気持ちちは解るわ」

「まだ、俺には何故今まで戦えたのか、その気力がどこから出てきたのか」

呟きながらもユウのその両の目は、どこか別の場所を覗いている。そのような不思議な感覚をブライト達は感じ取っている。

「そして、今なぜ再び戦おうとしているのか」

「出世じゃ、お嫌？」

「名前も解らない、どこか誰かの足長おじさんの手引きのお陰で出世は出来たが」

「パイロットで大佐の階級、そうそう有ることではありません」

「実感が全く無いですね」

そのユウの言葉には嘘は無い。自分の力だけでパイロットである自分、一部隊の隊長である自分がここまでの高階級を得られるなどとは思わない。いや、思えない。

「名誉、お金や女性への欲望はどお？」

「自分で言うのもなんだが、薄いな」

「地球を守る、ジオンが憎い」

「それも希薄だよ、ブルー」

「仲間、モルモット隊を守る」

「本当に悪いが、薄い」

そう言った時のユウの顔には、言葉通り本当に強い苦渋の色が混じる。その彼を立て続けに質問を重ねたブルーが真剣な顔で見つめている。

「モルモット隊の皆を忘れてきているんだ、俺は」

「いつぞやの、蒼い宇宙の光とやらを信じている」

「多分、そいつも今では違う、違うんだよ、ブルー」

その昔に、確かに自分の心を動かした蒼い、マリオンの宇宙。

「宇宙とは、あの蒼い光だけで語れるようなちっぽけな物ではない」

何かを、何かに導かれるようにそう断言をしたユウ・カジマ。その彼から感じる強い意思にブライトとブルーが小さく息を呑む。

「様々な宇宙の心を見てきたからな、俺は」

「もしかして、その宇宙の心とやらのプリズムがあなたを惑わす一因

となっているのでは？」

「かも、しれない」

その言葉をブライトへ放ったときに、ふとユウの脳裏に万色の宇宙の心を持つシロツコの顔の輪郭が浮かぶ。

「晩節の戦いへ行く前に、迷いがある」

ブライトからおかわりの缶コーヒーを受け取りながら、ユウが自身の舌へ乗せたその言葉は、歴戦の勇士だけが放てる強さに満ちていた。

第55話 小人の焰

「まいったよ、全く」

ブラブラと呑気にブリッジへやってきたアニッシュが、真剣な顔で通信業務を行っているミュへ声をかけた。

「あのSPの女にな」

「後にして、アニッシュ」

「激烈な刑罰を受けたんだよ」

「今、忙しいの」

オペレーターの手数が少なく、まともな睡眠もとれていないミュの言葉にはかなりのトゲがある。

「この写真」

「だから、後に……」

そう言い放つミュの機嫌を逆撫でるように、アニッシュは彼女の目の前に一枚の写真を突き出す。

「何、これ？」

写真には、黒服に身を包んだのSPの女に右肩を踏みつけられながらも、地べたへ這いつくばって書類へサインをしているアニッシュの姿が写っていた。

「どこの大人用のサイトから持ち出して、合成をした写真？」

「事実の証明だよ、ミュちゃん」

ギリイ……!!

「馬鹿なの？ 死ぬの？ あんた？」

あまりの馬鹿馬鹿しい写真に、ミュの形の良い眉が、彼女の齒軋り音と同時に折れた針金のごとくに折れる。

「何だ、この写真は？」

青い髪をした童顔のパイロットが、陽気な口調でその二人に声をかけてきた。

「おそろべき刑罰の写真だよ」

「刑罰？」

お互いに、三十を過ぎているとは思われる二人のパイロットである

が、その言葉はどこか若々しい。

「ミュ曹長」

「はい、大佐」

このクラブ級巡洋艦のモビルスーツ隊長であり、副艦長をも兼任している一年戦争時からのエリートであるミュの上官が、腕組みをしながら彼女へと低い声で訊ねる。

「追加を頼んでおいた、疑似ニュータイプ波発生器は届いているかな？」

「はい、届いています」

アニツシュのたわ言に昔馴染みのパイロットが代わりに付き合ってくれたお陰の為か、モビルスーツ実働部隊の隊長へ受け答えをするミュの言葉にはどこか安堵の色が窺えた。

「ラーク・シャサカジエダ、FAZZへ上手く馴染んでくれればいいかな……」

「それと、アンチ・ファンネル・ミサイルのダース単位セット一式も届いています」

「早いな、助かるよ」

そう感心をしたように言いながら、上官の男は携帯端末をその手に取り、モビルスーツ隊の不足部品、そのチェック表の再確認を始めた。

「わたくし、アニツシュ・ロフマンは罰として彼女の尻を舐めさせられるという処罰を受けました、マル」

「本当にその女の尻を舐めたのか、あんたは？」

「いや、本当には舐めてない」

「んん？」

「恥辱刑の一種だと思っぜ、俺は」

「何をしたんだよ、お前さんは」

その二人の大きな声の会話に、ミュ達二人が露骨に呆れたような表情を浮かべている。

「なんだ、あの阿呆の金髪の男は？」

「無視して下さい、テネス大佐」

脇の小型ファクシミリから、ハンガーデツキの納品表を上官へ手渡しながらも、ミュがそう言い放った言葉は冷たい。

「ゴツプ元帥のな、アゴの旨そうな肉に向かつて肉屋の真似事をしたらしいだよ、俺が」

「いろんな意味で、お前の言っている意味の可解が俺にはできないぞ？」

「少し世話になったユウって人によれば、俺が酔っぱらっちゃった拍子にゴツプ元帥のアゴ肉を太鼓にしたらしって事だ」

「それでよく、お前の首から上が残っているな、おい？」

「だからに、この罰則だよ」

「死ぬほどの恥をかくのがか？」

「インヤ……」

赤い特注のパイロットスーツの男に対して、ニヤリとその頬へ不敵な笑みを刻んでみせるアニツシュ。

「悪く、なかった」

「ハイハイ、よかったなあ……」

その言葉に苦笑っている童顔のパイロットをよそに、アニツシュの口から甲高い馬鹿笑いがブリツジへ響いた。

「ハア……」

近くでその下らない話を聞いていた大佐が、その禿げ上がった自身の頭部へ手を置きながらに、深くその口からため息をつく。

「今時には、馬鹿な奴にもモバイルスーツにもついていくのが、私とさえどもやつとだよ」

「俺は何とか付いていけてますぜ、大佐殿」

用事を思い出してブリツジから去っていったアニツシュを見送りながら、この艦のモバイルスーツ隊のナンバーツである青髪のパイロットが直属の上官へ笑いかけた。

「貴様は歳の割りに、心が若いからな」

皮肉混じりにそう言いはなった上官へ肩を竦めてみせてから、赤いラインの入ったパイロットスーツへ身を包んだ男は、微かにその顔を笑みから固く引き締める。

「ええ、と……」

少し何かを考えた後、彼はミュのオペレーター席の近くに吊り下げられているハンガーへの直結通信器をその手に取った。

「ルース、そこにいるか？」

「声が大きい……」

嫌そうな顔をしているミュへ一つ下手くそなウインクをしてみせたパイロットは、ハンガーデッキからの返答を待つ。

カガツ……

「奴なら、言うことを聞かないガブスレイⅡと格闘をしているぞ」

その通信機のハンガー側の近くにいたらしき男から、ぶっきらぼうな声が返ってきた。

「久しぶりだな、お前とも」

「遠足で、このクラップ艦までノコノコとやって来る羽目になったんだよ」

あまり声の伝達が明瞭ではない通信機から、苛立つような男の音が響く。

「ドサ回りになったか？」

「虎の子のデュープストライカーを壊した責任で、一時的な降格になっちまったよ」

「ざまあないねえ……」

「チツ!!」

その男が放つ強い舌打ちの音は、隣のミュへも聴こえる程に強い。

「ガブスレイの量産機、それとそいつのマークⅡを少し貰っていくぞ」

「そこまで、戦力が乏しくなっちまったか？」

「あと、使わなくなったネモとかバーザムちゃん達も持っていくぞ」

「はあ!？」

青髪の男の声がその言葉に対して、思いつきりに裏返った。

「おいまて、ふっぎげんのか、エイガー!？」

「うるせえな、オイ……」

ミュがこめかみを抑えながら、昔からの戦友のパイロットの横顔をにらみつける。

「中古回品でござあい」

「中古じゃねえ、使うんだ!!」

ネオ・ジオンが再開を始めた隕石攻撃によって複数のレーザー通信衛星が破壊された事により、連絡系統の維持に難儀をしている寝不足のミュの脳天に、隣のパイロットの怒鳴り声が強く響く。

「やたらと壊れやすい新鋭の保険、うちの箱入り娘達なんだよ、それは!!」

「俺達がじっくりと男のモバイルスーツの勲章であるキャノン、追加火器をぶちこんで可愛がつてやんよ!!」

ガアン!!

相手の男が、通信電話を思いっきり壁へと叩きつけたと思われる乱暴な音に

クラップ級「マスターング」の実働部隊で屈指の腕前を持つパイロットが耳を押さえてその場にうずくまる。

「S・H・I・T、クソヤロウ!!」

ドツウ!!

「ウグオ!!」

「うるせえわよ、フォルド!!」

激務のうえ、アニツシユという変質者に職務を妨害され、さらには昔の馴染みが近くで上げた罵声に、オペレーターのみユがついにキレた。

「重火力型に改造するんじゃないか、彼が持つていく旧式達は?」

騒いでいる割りには、話の内容自体はまともであった為、上官のテネスはキチンと聞き耳を立てていたようである。

「泥棒が家へやってきたようなもんだ……」

ミュに股間を思いっきり蹴られたパイロットが自分の股を押さえながら、澄ました顔のミュの隣へ崩れ落ちた。

「仕方があるまいよ」

彼らの話の真偽を確かめるために、テネス大佐は首をコキリと鳴らしてから通信端末でハンガーデッキの主、モバイルスーツ関係の責任者へ連絡を入れた。この大佐は律儀な将官であるらしい。

「デリーストライカーを壊した落とし前を、奴はつけなくてはいけないからな」

「あの野郎には過ぎたオモチャだったんですよ、あの超重火力モビルアーマーは」

「乗りたかったか、小僧？」

「別に……」

股間の痛みがようやく和らいだ赤いパイロットスーツの男は、顔を引き締めて一息をついているミュの前へ立つ。

「ミュくん」

「何よ？」

ムヌユ……!!

「キヤア!!」

青髪のパイロットの右手がミュの左胸を鷲掴む。

「三十過ぎのババアのオツパイは野郎に餓えてるぜえ!!」

ミュが反射的に放ったナツクルをかわしながら、三十過ぎとも思えないセクハラ・エース・パイロットは駆け足でブリッジから飛び出していく。

「テネス上官あん!!」

触られた胸を抑えながら、ミュが困惑の表情を浮かべている上官へ八つ当たりのように怒鳴り付ける。

「セクハラの現場、見たでしょう!？」

「見ざるに言わざる、聞かざるの女の気化爆弾……」

「ちいがうだろ!？」

「君子は危うしに近寄らず……」

「このハゲェ!!」

激怒をするミュへは絶対に関わりたくないテネスは、胃薬を口へ放りこみながらハンガーへとそそくさと降りていった。

「カンフル剤」

「カンフル、発起剤？」

やたらと最近、人の立ち代わりに入れ替わりが激しいモビルスーツ運用重視型巡洋艦「アーガマ」その食堂には三人の男女がスイーツ・タイムを取っていた。

「おそらくは、何かがあなたを奮い立たせるトリガーとなっているのです」

「心の焰……」

「空っぽの炉に宿る焰、それを灯すマッチだか何だか」

「ですかねえ……」

ブライト手製のティラミスを頬張りながら、ぼんやりとした口調でユウがアーガマの艦長へ答え返す。

「やる気を出させるユウ・カジマ大佐というモルモット実験、やってみましようか？」

「そう、一度灰になった男に簡単に火がつくわけがないでしょうに……」

ブツブツと言いながらもユウのフォークはティラミスを疾風のごとく突き立てる。

「美味しい、このていらみすとやら」

「カフェを開いたら、看板メニューにでもしましょうかね？」

「ムラサメ・コーヒーを使えばなおに一層美味しくなるかも」

「ゲテモノを出すカフェを開く気はありませんよ……」

「残念ですな」

自分のティラミスを完食したユウは、意地汚くブライトのそれをねだろうとしたその時。

「覚えているろ、ユウ・カジマ……」

「うわあ!？」

突然に聞こえてきた、ニムバスの声にユウは椅子から転がり落ち、床へ這いつくばる。

「覚えているろ、ジオニック社……」

「毎度にお馴染みのクソアニメよ」

「全く……」

ニムバスの声であったために、空耳として、ユウの耳を打つたらしい。

「サンプリングの合成音声みたいだなあ……」

「この前のプロレスで、誰かのセンスに引つ掛かったのかしら」

「お眼鏡ならぬ、お眼鏡だな」

「良い声だものね、彼」

「テレビ業界だか何だかも、したたかだ」

呑気そうに言うブライトとブルーの声を聞き流しながら、ユウは床に寝そべった姿勢のまま、手から転がった缶コーヒーを掴もうとする。

「何で、ニムバスの奴の声なんだか……」

「その手の復讐、リベンジキャラに適した声なのかもしれません」

「ここまでの驚きは無いよ……」

何か腰が抜けてしまったユウは、ブスツとした表情のまま、顔だけを上げてテレビのアニメを睨み付けた。

「地べたを這いつくばっても……」

「地に這うこの姿勢、何か俺のパイロットとしての戦術経験にピンと来ているな」

よく解らない事を言いながらも、ユウは起き上がろうとはしない。そのブツブツと呟く彼を見ている二人の顔には疑問符が浮かんでいる。

「泥水を啜つても……」

「本当は、こんな泥水よりもムラサメ・コーヒーが欲しい」

人様がくれた缶コーヒーに勝手なジャツジを下しながらも、ユウは器用にもその姿勢のまま缶の蓋を開き、その中身をすすった。

「必ず、戻ってきてやる……」

「そう、ニムバスは」

クビイ……

口一杯に含んだコーヒーを呑み込んでから、ユウはその顎を床へ軽く乗せる。

「戻ってきた」

「あなたへの復讐の為に、かしら？」

「最初は、それもあつたかもしれない」

床へ這うユウは、ブルーのその言葉に頷くようにその顎を左右に床へ擦り付けた。

「だか、いつしかアイツは」

「より、大きく世の中と自分を見るようになった、ですか？」

地べたでブライトへ頷くユウの顎が、今度は床を撫でる。

「あれほど妬んでいたニュータイプ、その表面の力だけではなく、本質的に近づこうとした」

「なるほど……」

「力と心、その二つを求める意思が彼をニュータイプへと近づけさせ」

「騎士の修行、ね」

「心身共に力を、他を寄せ付けないエネルギーを身に付けた」

通りかかったアーガマのクルー達が寝そべっているユウを見て、ヒソヒソと

小声を交わし合う。

「そして、しまいにはニュータイプや俺すらも、ステップの一つとすら見なすようになってしまったよ」

「その力の証明が、この前のロボットプロレスをプレイした理由の一つかしら？」

「では、あるが……」

コロツ……

冷たい床で回転をしたユウの頭と腹が食堂の天井へ向く。パイロットスーツに身を包んだブルーの形の良い下半身、それを下から見上げるような格好になり、彼女が嫌そうに顔をしかめた。

「何か、アイツが俺に挑戦状を叩きつけてきた真の理由を、さ」

その眉をひそめたブルーの顔を見て、ユウは彼女の脚線美から目を離す。

「それを俺は見落としているような気がするんだ」

「あなたとの因縁だかケリだかが理由ではないと？」

「ああ」

ブライトがコーヒーの缶を振り、ユウへ立ち上がるように促すが、何故かユウはその大の字の姿勢のまま動かない。

「俺との決着、そしてエグザムの因縁を葬る以外にも、何か」
「何か？」

「本当に、とても本当に大切な何かを見落としている、そんな気がしてならない……」

「フウン……」

軽くため息を吐きながら、ブルーもさつさと立ち上がれとばかりにその脚をユウへ振るが、全く気に止めないユウ。

「ああ、オホン……」

寝っころびながら考え込んでいるユウを気づかったのか、ブライトがわざとらしく咳きを込む。

「御守り、持ってますか」

「コイツらですね」

天の電灯へ向いているユウは、その眩しさに目を細めながら上着のポケットへその手を差し入れた。

「片方は、シドレちゃんだか、くんだかの物です」

「エエ……？」

そのブライトが言葉と同時に指差した御守りを、尋常ではない表情を浮かべながらユウはその紐をときほどく。

「何をやっているのよ……」

ゴソツ……

ブルーの呆れた声をよそに、ユウが寝っ転がったまま、器用に御守りの袋の中へ二つの指を入れる。

「入っている」

「何がよう……!!」

「ナニがだ」

ブライトとブルーの呆れ半分、軽い軽蔑半分の視線をユウは気にしてない。そのまま静かに彼は御守りの紐を閉じた。

「ありがたいな」

「性別不詳、男のだとしても？」

「男の娘という言葉もある」

そのユウのボソリとした呟きに、今度こそ本当にブルーとブライトが呆れ果てる。

「もう片方は……？」

「彼女のです」

そう言いながら、ティラミスを摘まんでいるブルーを指さすブライト艦長

「入れてないわよ、私は」

「三十路の女が入ってたら、気味が悪い……」

「ホホウ？」

ティラミスの欠片がこびりついたフォークを横たわるユウの顔の方へ突きつけるブルーの顔には満面の、目だけがひきつりながら光っている笑み。

「本当は、父さんからの御守り」

「ジャミトフ閣下の下の毛入りか？」

「ついに脳に虫が湧いたの、青カビハゲ？」

「かも、しれん」

そう言つてやや大きめの声で笑うユウ。近くを通りがかつた二人の女性パイロットが、伏した大の字のまま笑うユウを見てヒソヒソと言葉を交わしあつた。

「先程、あなたはありがたいなと言いましたね」

「ええ」

「本心ですか？」

愛読書であるコーヒーや茶菓子の作り方が書いてある豆本「モーリン・ブルームのカフェタイム」を取り出しながらブライトが小さな声でユウへ訊ねる。

「本心です」

その豆本の題名、著者の名を口の中で一つ呟いてから、ユウは静かにそう口から言葉を出した。

「本当に？」

「はい」

ブライトの愛読書の著者の名前、その名前はもちろんユウの記憶の中にあり、結婚相手の姓も聞いた話と一致している。

「すぐに忘れるかもしれませんが」

ユウの脳裏に、「豆本の著者である一時期の恋人の名、一年戦争時代からの仲間の名、ストウラートの仲間の名、それらが次々へと浮かび上がった。

「しかし、今は」

気の合う木星帰りのニュータイプの名、数々の気の良い男女達の顔と名、そしてなりより、解り合えた宿敵の名。

「本心です」

そう宣言をしたユウの視線の先にはブルーの、必ずしも美人ではないが優しさと意思の強さを秘めた「美しい」顔。そのブルーが愛する父親、ユウにとっては上官筋であり、自分達にとっても良くしてくれた初老の男の姿形が彼女の背後へと写る。

「なるほど……」

ユウ・カジマの宣言に、ブライトは本から目を離さないままに頷いてみせた。

「結局に、あなたは小人なのです」

「はい」

ペラツ……

豆本のページがめくられる。ブライトの視線はユウへと向けられない。

「目先の優しき、感情だけでしか物事を判断できない」

「ですね」

「普通の、オールドニュータイプです」

——世界はYOUに満ちているの——

その言葉と共にユウ・カジマの脳裏に浮かぶ、深い霧に満ちた廃墟を背に、蒼く、白く輝く翼を拡げる性別不詳の幼子。

（マリオンに似た何か、そして……）

その性別不詳という事柄から、ユウは自分を信じてくれ、傷ついた

彼の介抱をしてくれたかけがえのない、一人の部下の顔を目の前へと浮かべる。

「ブライト艦長」

食堂へ入ってきた幼い子供たちが、ユウの寝そべっている姿へ指を指しながら笑う。なぜ子供が軍艦にいるのかは解らないが、ユウはその子達へ笑いかけて見せた。

「何一つに無い自身のネーミングセンス、御自覚めされい」

その言葉に先程から黙ってユウの独白を聴いていたブルーが微妙に笑みを浮かべる。

「旧式の予備機が、デッキへ搬入されたようです」

「旧式ですか、ブライト艦長？」

「ジムⅡ」

「パタ……」

「後方支援くらいは、やってみましょうかね」

本を閉じながらブライトがポツリと言う、旧式極まりない機体の名を聞きながらユウは思わず苦笑い、ようやく床から身体を起こす。

「ポツ、ポツウ……」

食堂の鳩時計が「刻」の訪れを知らせた。

第56話 返り血を継ぐユウ

「頭が痛てえ……」

ティターンズ内で一番の出世頭と言われている、重打撃モバイルスー
ツ部隊の総隊長であるキツチマンが頭を抱えながら、書類へ目を通
す。

「大丈夫？ チキンバーガー食べる？」

「うんせえ!!」

書類へ書かれているモバイルスーツの戦力値の帳尻がどうしても合
わない彼を、別系統の指揮部隊から派遣をされた助手のティターンズ
女性兵がニヤつきながらからかう。

「起こんなよ、大将……」

「てめえの責任でもあるだろう、この総火力の減少はよ!!」

「んなこと言ってもよ……」

キツチマンを宥めるように呟いた、そのどこか雰囲氣的にガラの悪
い青年は、手に持つチキンバーガーを食べる手を止め、豪華な執務室
のモニターへ区画を分割されて写し出されるモバイルスーツ等の姿を
見つめながら、自分の黒の短髪へ手を差し込む。

「あそこで、クイン・マンサ達やミイバ・ザムとやらのデカブツを止め
ておかなかつたら」

「その言い分は、何回も聞いた!!」

「アクシズやらが地球へ落ちる前に、俺達の戦列が滅茶苦茶になって
ましたぜ、キツチマン中佐」

「わかってるよ、全く……」

どこか自分の揮下であるエース「ヤザン・ゲール」に似ている彼、
頭に血が昇りやすいと思われる青年へ限度を越えて怒鳴る事をキツ
チマンは自制している。そうする事の危険性を何か肌で感じている
のだ。

「フウ……」

「大丈夫？ コーヒー飲む？」

「貰う、いただくよ」

コーヒーを淹れてくれる彼女を、気を使ってくれる良い女だとはキツチマンも思うが、青年共々に外部系統の人間だ、配慮をした態度をしてやる必要がある。

「俺にも頂戴、お嬢ちゃん」

「ラ、ジャー」

美女へは調の子がよくなる青年、その声に微かに呆れたながらも、彼の顔を見つめるキツチマンの脳裏には、扱いが極めて難しい部下であるヤザンの顔が再び浮かんできた。

「お前の組、教導団だっかかな、ティターンズの丸パクリは？」

「言ってくれるじゃないですか、キツチマン殿」

とは青年は言うものの、別に彼にとつては給料が良いという理由だけで入った自分のサークルめいた集いをバカにされても、大して腹も立たない。

「一応、おたくのティターンズと同じ主義理想の活動ですよ、俺たちは」

「規模が小さくて後から出来た物なら、そのパクリというイチャモンは必ず言われ続けるぞ、有望株の生意気なパイロットちゃんよ？」

「口がお上手なこつて……」

頭ごなしに命令をしてもよい建前の立場のはずの部下のヤザン・ゲールですら、実際にはバカやウイットをやりながら命令内容を心へ響かせ、納得をさせなければならぬのだ。外部の人間であれば、なおさらの事である。

「おつ、このコーヒーは良いもんだな……」

「オーガスタとかいう軍事関係の研究所が、いきなりこれをもって売り出してな、コーヒーメーカー業界に参入をしたらしんだ」

「畑違いも凄まじくないですか、それは？」

「ライバルのムラサメ研とやらがその業界へ先に手を出して、オーガスタとしては面白くなかったようだ、よ」

そう言いながら、キツチマンはオーガスタ・コーヒーの青つぼく見えるその表面を、同じコーヒーを飲んでいる若い男のパイロットへ見せつけるように揺らがせた。

「嫉妬やらなんたらは、人を動かすな、新サークルのボーヤ君?」

「俺達の教導団への皮肉をコーヒーを味付けですかい?」

「不味いか、両方?」

「いや、どちらもなかなか上手し」

ニヤリと笑う青年を見て、自分が通信講座と独学で学んだ人心の掌握術、それが必ずしも机上の空論ではないことに微かな安堵を覚えるキツチマン。

(若いのを手懐けるには、こういう神経の配りかたが必要なんだよな、ウン)

(見え透いたやり方だぜ、オツサンよ)

(あのお金がかかる通信講座を上手くアレンジしている、この人はただ者じゃないわね)

何はともあれ、テイターンズが全てを高圧的に出るだけで物事が動かした時代はもう終わったのだ。

「それに、してもよ……」

やはり、この数年間のジオンやエウーゴとの抗争は、大企業や地球を牛耳る連邦諸勢力の生産力の大元をジワジワと弱らせてしまっている。

「スペリオールだか、スペシャルなガンダムだか何だか知らねえが、教導団のこいつの機体やディープストライカーとの接続分を含めて、計三機もの喪失が痛い……」

「大丈夫? チキン南蛮食べる?」

「黙りや、オードリー」

コーヒー・ブレイクを入れたせいとか、少しは落ち着きが戻ってきたキツチマンは再びモバイルスーツの配備関連の資料へとその視線を落とす。

「バウンド・ドッグが少し余っている、図体のデカイあいつを重火器のプラットホームに出来るかもしれないねえ……」

「あんな食用ウサギ、無人機爆弾として隕石群にぶつけてしまえばいいのでは?」

「お前がウサギ耳のモバイルスーツが嫌いってなら」

「何です？」

「俺はカブト虫モビルスーツのガブスレイやどこかしらコックローチじみたバイアランの方が腹が立つよ」

「思っているよりも、拡張性がありますわよ、あいつらは」

「拡張性というよりも、一点集中の大火力が欲しいんだよ」

唸るキツチマンの傍らへ、教導団の青年パイロットもブラリと近寄ってくる。

「機動兵器、スピードを削ってでも火力が欲しいんですかい？」

「アクシズだかの破碎も念頭に考えなくてはいけねえ、リョウ中尉……」

「まあ、ね……」

「可変だか何だかの、機動重視思想のモビルスーツ設計から来た、とんだしっぺ返しだ」

そのキツチマン中佐の言葉にはかなりの説得力がある。彼のため息混じりの愚痴に、机を囲んでいる二人の男女も押し黙ってしまう。

「核もソーラ・システムⅢも、最後にはあてに出来る信頼性じゃない」
「確か、核弾頭のオーラとやらを、ニュータイプ連中は読み取れるみたいですね」

「何基かの核弾頭ミサイルが、ファンネルで撃ち落とされたからなあ……」

そう言いながら、キツチマンは大モニターへ浮かぶ敵性のファンネル搭載モビルスーツの姿、その数々へ睨みつけるような視線を向けた。

「今からでは、サイコ・ガンダムクラスの機体の再生産は間に合わねえよな……」

「良い手がありましたせ、中佐殿」

「何だ？」

勢いよく拳手をした青年パイロットを見て、キツチマンもオードリーも怪訝そうな表情を浮かべる。

「気合い、マン・パワーで押し返すってのはいかがでしょうかねえ？」
「ホウ？」

「みんなで輪になり、友情パワーでポーンと」

「隕石群を押し戻すか」

「どうですか？」

「イイネ、イイネ……」

キッチマンが席から立ち上がり、にこやかな微笑みを満面へと出しながら、薄く笑いを浮かべている青年の肩へと軽く手を置く。

「さっそく、君の名において実行したまえ、リョウ・ルーツ君」

「中佐殿が全責任をもってくださいよ、ちゃんと」

「お前が言い出したたわ言だろうが、小僧!!」

クルリと表情を百八十度へと回転されたキッチマンの怒鳴り声が青年の耳の中へ地鳴りを起こす。

「大丈夫？ どろりチキン濃厚飲む？」

「飲むよ!!」

頭痛が再発したキッチマンは、オードリーという名前らしき女性が差し出す謎のドリンクチューブをよく確かめもせずに口へと送り込んだ。

ブウ……!!

キッチマンのその口から、謎のゲルだかゼリー状をした茶色の固形物がドリンクチューブを手渡した女性の顔へ向けて、勢いよく降りかかった。

「どうして、そんな事するかなあ……!!」

顔面へチキン濃厚を浴びせられた女性は、驚きと怒りの混じった表情を浮き立たせ、一応の上官筋への敬語も忘れて大声を張り上げる。

「何だ、これは!?!」

「新式の流動レーションですよ!!」

「ゲル!? チキン!? チキンは飲み物!?!」

「頑張れば、美味しいらしいです!!」

「俺の喉に、チキン霊が見える……!!」

あまりの異様な味に、キッチマンへ宇宙ニワトリの魂達、それらが宇宙（ソラ）の刻の声を震わせながら彼の元へ向かえにと来る。

「ムラサメ系列の新商品には注意をしろというのは常識……!!」

泡を吹いて倒れたキツチマンへ呆れた顔を見せながらも、教導団の部隊員である青年は執務室のドアを蹴破るように飛びだし、医務室へと走る。

「ここから通信をすれば良いのに、単細胞な奴!!」

古めかしいレトロな古電話のダイヤルをジーゴロとかけながら、キツチマンを覚醒させた女性は自分のしでかした事を柵にあげつつ、その綺麗なラインの唇を擦れさせて直情的なりョウ青年をバカにした声を上げた。

「ブライト艦長」

「はい?」

「汚い大人でありましたね、あなたは」

「はて、に……?」

「俺に嘘をついた」

重力制御がされているアーガマのハンガーデッキ、そこにはユウがよく見慣れた機体が置かれていた。

「誰から、ですか?」

「あなたのモルモット隊のシドレさん、でしたっけね?」

「俺に顔を見せてくれればよかったのに……」

「見せたくなかったようです」

両の手に紅いヒートサーベルを構えている、深く吸い込まれる蒼で塗装をされた、ユウ・カジマの愛機であるGマリオン。

「そのまま、あなたと共に後方へ引込込んでしまいそうだからと」

「俺の弱気につられますか」

この一月余りの時間に、おそらくはアルフ技師の手により、随所に改良が施されたらしきブルーデイスティニー五号機。そのモビルスーツの右足首へその自身の手を撫でさせながら、ユウはブライトの

言葉を耳へと入れている。

「好きな人と寄り添って過ごす誘惑に、負けそうだと」

「フフウン……!!」

ブライトの可笑しさを含んだ言葉に、十歩ほど離れた場所でアイドリングをしている宇宙戦闘機を思わせるシルエットを思わせる機体、そのコクピットから鼻を鳴らすような声が響いた。

「愛されているわねえ、ユウ……」

「茶化すなよ、ブルー」

「果報者め、色男」

ブオ……

その宇宙戦闘機のスラスタから耳障りな音が発せられる。その不快な音に微かに眉を潜めながら、ユウは彼女の機体の元へと近寄る。

「出陣か」

「出陣、と言うより」

黄色のパイロットスーツに身を固めたブルーが、開いているサブ・ハッチから見えるコクピット内で通信端末を手に取りながら、ユウへと返事を返した。

「ティターンズのメンバーからオフアアが来たの」

「プライドの高いティターンズの連中が、何故エウーゴのお前を？」

「父さ……」

その言葉を言った時、ヘルメットの調子を確かめるようにその曲面へ這わせていたブルーの片手が一瞬止まる。

「ジャミトフ・ハイマンの救出作戦」

「あの人がネオ・ジオンに囚われているのか？」

「いや」

バツフオ……

半可変機「リ・ガズイ」の調子がベストではないようだ。どうも新鋭のOS連動システムである疑似ニュータイプ波発生器との連結が上手くいかないらしい。

「どうも、落ちていくゼダンの中に居座っているみたい」

「居座る？」

首を傾げるユウの視線の先に、ブルーへ向かって親指を上げている女メカニツクの姿が入る。

「一人で、あの要塞の破片の中に」

「何を考えて……」

「全然に、解らないけど」

シャファア……

オールグリーンと表示されたり・ガズイのコンソールに満足げな視線をブルーは向けて、機体背部のアポジモーターから軽く呼気を吹かせた。

「自発的にゼダンへ留まっているなら、説得が必要」

「だから、娘のお前にテイターンズから言葉が、か」

「変な話でしょ？」

リ・ガズイのメカニツクの元へ他の兵が何か書類を届ける。その書類に目を通しながら彼女はユウへ顔を向けて、機体から離れるようにその目で促す。

「まあ、頑張ってくれ」

「何を頑張れば良いんだか」

「俺にとっても、あの方は恩義があるからな」

「長い、付き合いねえ……」

そのブルーの言葉の最後の方は、閉じられていくコクピットのサブ・ハッチに遮られ、離れたユウの耳へはよく入らない。

「色々な意味で、長いな……」

ジア……

ゆっくりと機体下部のランディング・ギアで射出カタパルトのエリアに続くエレベーターへと移動をするリ・ガズイ。薄い水色をしたブルーの機体が昇降機へと乗り込む姿を眺めながら、ユウは彼女とその父親の無事を祈った。

「新しきGマリオン、か」

ブルーを見送ってしばらくした後、食事を終えたGマリオンの整備担当メカニックがユウへと自己紹介をする。

「Gマリオン改、そう言うらしいですよ」
「なるほど」

蒼い機体に施された改良で特に目立つ部分と言えば、やはり頭部、その後頭部の肥大化であろう。

「伸縮式の武装に、数々の内部隠蔽兵装といった、デッドスペースの有効活用」

くしゃやくしゃの金髪に難があるかもしれないが、顔立ちがよく整っている男のその声に頷きながら、ユウは自機のバイザー式頭部メインセンサー、ジム系統モビルスーツのシンボルとも言えるその「顔」をじっと見やる。

「サナリイとしても興味が深い」

「サナリイ？」

「連邦内部の技術屋達、その集いの会ですよ」

「モビルスーツの技術面、それに関係する新部署と言ったところかな？」

「アナハイム等の企業に独占をされ過ぎですからね、モビルスーツの市場は」

癖のある自身の金髪へ軽く手をあてながら、その男は愚痴るようにそう呟く。

「連邦にしろネオ・ジオンの連中にしろ、ね」

「自前で作りたくなかったか、連邦の技術屋さん達は」

「本当なら、それが普通なんですよ」

その言葉に、ユウは何かしらにつけて自分でモビルスーツを創りたがる二人の男、十年來の仲間であるメカニックと木星帰りのニュータイプ顔の顔を脳裏に思い浮かべた。

「二年戦争のガンダムやジムだって、ここまで外部の企業には依存を

しなかった」

「まあねあ……」

そのジム系の頭部を持つGマリオン、しかしユウはどうしてもこの改良機の頭部後方に末広がる、短めのヴェールのような部分から、騎士道を掲げているあの傲慢な男がはるか昔に搭乗していた機体の連想をさせてくれて仕方がない。

「この機体」

「はい」

「両肩を赤く出来ないか？」

「赤の塗装？ 何かの識別ですか？」

「いや……」

どう彼に説明をしようかと、ユウが考えていた時。

「する必要はありませんよ」

ユウ達のいる空間上方、ハンガーデッキを見渡す監視室、空母としての機能を備えている宇宙艦であればほとんどの物に設置をされている小部屋、そこからブライトの声が金髪の男の腰の横から下がっている携帯端末を通して聴こえてくる。

「どういう意味ですか、ブライト艦長？」

僅かに腰をかがめて、男の端末へその口を近づけるユウ。

「その両肩へ接続された、グレイスやらと言う推進器」

その通信機から聴こえる小さな声に、ユウはGマリオンの正面から、その背部を見透すような視線を向けた。

「それらの稼動が高レベルへ移行した時に、Gマリオンとやらの肩は赤く染まるみたいです」

「アルフよ、おいおい……」

その「あてこすり」を何故アルフが行ったのかは解らない。

「あいつはハード面、というかモビルスーツの塗装も自分でやった事があると言っていたからなあ……」

激戦区での忙しさからくる、彼なりの息抜きなのだろうか。

「放熱だか、何だかの機能面以外の理由でもあるので、ユウ？」

「俺達にとっては、両肩が赤く染まるということは特別な意味がある

のです、そうなのです」

「フウン……」

新技術組織であるサナリイの所属の男が、今さらに気を利かせたかのように携帯端末の音声のポリウムを上げてくれた。

「両肩の色にねえ……」

理解がしがたいといった風情の声を出したきり、端末からブライトの声は聴こえなくなる。

「疑似ニュータイプ波発生器に、お馴染みのマリオン・システムか」

「マリオンとやらは良い装置だとは思いますが」

そう言いながら、男が上着のポケットから取り出した、機体コンピュータ関係の概要図へユウはぎつと目を通す。

「疑似ニュータイプ波が出せれば、もはやオールドタイプがニュータイプに怯える必要は全くありません」

「強化人間も必要無くなるかな？」

「もちろん」

そう彼が言った時、その笑みの表情に僅かな翳りが疾つたのをユウの目は見逃さない。

(彼も強化人間の技術と関わっていたのかもな)

ユウはそう脳裏で想像を浮かべた時に自分の顔色が変わりをしないように、そして、

目の前の彼の微細な表情の変化を無視するようにと自分に暗示をかける。サマナから遊び半分で習った業だ。

「ムラサメだかオーガスタの研究者達が導き出した最終結論、ラスト・リゾートですよ」

「実験動物として犠牲になった強化人間達も浮かばれるか」

「そうですね」

「本当にそう思うか？」

「そう信じてみたいですな」

そのわざとらしい彼の笑みは、強化人間の話題が上がった時に浮かべるアルフの皮肉げな、そして哀しみを帯びた笑いのそれとよく似ている。

「さて、と……」

少し「伸び」をしてから、ユウはGマリオンの機体の裏側へ回り込む。

「ニムバスのエグザムへの入り口が」

機体の足、そのかかと辺りに設置されているコクピット搭乗用のフットロープを出させるスイッチのカバーを開けながら、ユウはぼんやりと友、キシドーニムバスの顔を思い浮かべていた。

「俺のエグザムの出口だったという訳か……」

シヤフウ……

人の息を吐き出すような音と共にGマリオンのコクピットが開き、ゆっくりとワイヤーロープが下ろされてくる。

「オールドタイプが擬似的にだが、ニュータイプの力を手に入れられる装置に」

やはり、そのGマリオンのけつたいな形状の頭部は昔のニムバスの乗機しかユウには連想が出来ない。

「紅く染まる蒼い両肩」

ロープでコクピットへと上がりながら、ユウは稼働状況で紅く染まるらしい自機の両肩をじっと見つめる。

「両方とも、クルスト博士の心から流れ出した血が原材料だ」

よく見ると、そのミノスフキー粒子集束装置「グレイス」が直接的に接続をされた両の肩には幾筋ものスリットが疾っていることが分かる。恐らくは放熱用であろう。

「EXAM搭載機の原初の姿を受け継ぎながらも、恐らくは最後のEXAM系列の予感がする機体、か……」

本当に、クルスト・モーゼス博士の理念、または妄執である真のEXAMが完成してしまったのだ。

彼の死後の十年という時を経て。

「俺の自覚が出来ている範囲の人生、それを縛ってくれているエグザムにマリオン……」

別に必ずしも昔のニムバスのようなプレッシャーこそ感じてはいないが、やはりどこかにその感想を抱いてしまうと、ユウ・カジマの

気持ちには。

「これこそ、真のブルーなデイスチニーってね」

「……」

「答えてくれよ、ねえ……」

「EXAMやブルーデイスチニーとやらは、我々の間では都市伝説の位には伝わってこそいますが」

「ネタが解らなかった、それだけではないでしょ、今の間はさ？」

「距離が遠かったもんで、よく聴こえなかったもんで」

「ウ、ム……」

別にユウにしても、そこまで人を困らせる事は避ける気づかいを持ってはいるし、

自制もできる。

クウ……

ワイヤーロープ昇降器がコクピットの扉、ハッチの上方へ上がりきった。

「ハア……」

無視をしてくれなだけマシだと自分を慰めながら、ユウは一つ首を捻ってからその視線を眼下のメカニックマンからGマリオンのコクピット内へと移す。

「うわっ!？」

「どうしました!？」

薄暗いコクピットへ顔を覗き込ませたユウから突然放たれた大声に、他の作業へ移っていた金髪メカニックがその顔を振り上げる。

「詰まっている!？」

「だから、どうしました!？」

新型のアーム・レイカー操縦器、従来のジョイスティック型操縦器に比べ、パイロットへの負担が少ないとされている機体コントロールシステムへと換装されたコクピットの中には所狭しと、様々な物が詰め込まれていた。

「ブライトめ!？」

ハンガーの上方監視室からユウ達の慌てぶりを、ニヤニヤとした嫌

らしい笑みを浮かべながら覗くブライト。

「計ったな、全く……!!」

無論、そのユウの罵声はブライトへ届くはずもない。

「機動兵器を、菓子だかパンだかジャンパーだかのプレゼントボックスにするなんてね……」

苦く笑いながらユウはコクピットの物品達をぐるりと見渡す。その機体内部への脚の踏み場を探しながら、彼は昇降ワイヤーでその身体を支え続けていた。

「ん、ジャンパー？」

その自分の言葉に、最初に目に入った黒い上着へ再びユウはその視線を向ける。

「ムラサメ・ジャンパーじゃないか、これは!!」

「ジェリドとやらからのロボットプロレスの健闘賞、らしいですよ、それ」

「見世物もやってみるものだな……!!」

「あなたがここアーガマへ来たときに、突き飛ばしてしまった事への詫びもあるとか何とか」

コクピットへ身を屈ませていると、流石に機体の足元から十数メートルの高さがあるユウの位置へは、メカニックの男の声は聴こえづらい。

「味な真似を、ジェリド……」

真正面へ、ちょうどプレゼントへ覆い被さるように置かれているジャンパーをユウは引つ掴み、自らの身体へと引き寄せた。

「なんかこのジャンパー、臭いな……」

——臭いな——

とみに最近、理由は不明であるが、ユウの頭には昔の記憶と思われる情報がふとした拍子に入り込んでくる事がある。

「今、過去の記憶とやらが蘇ってくるのは、俺の士気にかかわるので御免こうむりたいのだけどね……」

少し頭を振ってから、ユウは再びコクピット内を覗きこんだ。

「フィリップのパンにサラとカツが焼いたクッキーか」

「古いディスクタイプの人ゲーム、サマナさんとやらの贈り物みた
いですね」

「ビデオゲームねえ……」

時々、カツやサラ、サマナが遊んでいた携帯ゲーム機「土星エンジン」専用のソフト、その名は「蒼の運命」

「題名的に、物凄く気になるゲームではあるが」

「さすがに今は……」

「分かっている、分かっていますよ……」

そう呟きながら、ユウはコクピット内に積まれたプレゼントの中へ
手を差し込む。

「何を？」

「いや……」

G マリオンの足元から、ゴソゴソとコクピット内をかき回している
ユウをサナリイのスタッフが怪訝そうな表情で見つめている。

「よっしゃ!! やはりあったよムラサメ・コーヒー!!」

「うちの短期間コックアルバイターからみたいですなあ」

「さすがに天才、そんなアイツを愛しちゃう!!」

フィリップ手製の菓子パンに覆われている通信機から聴こえてく
る、ブライトの呑気そうな声を無視して、ユウはその飲料チューブの
束にガッツポーズを構えた。

「このG マリオンの調整、どのような感じだろうか、ジョブ？」

「どう少なく見積もっても、あと三、四時間はかかりますよ、ブライト
艦長」

昔馴染みであると思われる二人の通信が

、モルモット隊からの贈り物を抱えてコクピットから降りてくるユ
ウの耳へと入る。

「この機体を送られていた時、内部の燃料がゼロだったもので」
「手間取りそうかな？」

「OS などのシステムにもキチンと目を通しておきたい」

「頼むよ」

「ホワイトベース時代の何でも屋の意地を見せてやりますわい」

そう不敵に笑うメカニツクのすぐ横へ、両手一杯に荷物を抱えたユウが昇降器へ寄りかかりながら降りてきた。

「よくもまあ、そんなに物を抱えてワイヤー昇降器から落ちませんね」「目をつむつても、こんなのは楽な芸当だ」

「ベテランかよ……」

「悪いって?」

ニカツとユウが笑った拍子に、抱えたプレゼントからクツキーが床へこぼれ落ちる。

「どうしますかね、ユウ大佐殿?」

「何を?」

「機体調整、あなたも手伝ってくださいますか?」

「インヤ……」

そのまま、コソコソとユウはハンガーデッキ片隅の段差、座るのに適した場所へ目掛けて、早足に荷物のバランスを取りながら向かう。

「腹ごしらえ」

「結構な事で……」

少し呆れた声で愚痴る金髪的美壮年を無視し、パイロット用の薄手のグローブを外しながらプレゼントの品定めを行うユウ。

「最後の晩餐になる可能性もあるからな」

「菓子パンとコーヒーストレートが最後の晩餐ですか?」

「悪くないよ、こういうのも」

ビツ……

パンの包装ビニールを引きちぎりながら、もう片方の手でムラサメ・コーヒーが入ったチューブからストローを取り出すといったユウの妙な器用さに、近くにいた女性メカニツクから忍び笑いがこぼれる。

「生き残れそうだな、あの人は……」

ユウと同じく、一年戦争時代からの戦績があるジョブ。気負いが全く見当たらないユウの気楽な態度、それは幸運の女神が微笑んでいる何よりの証であることを彼は知っていた。

第57話 ニュータイプ（前編）

「ほら、さっさとこっちへ来て」

「やめて……!!」

大破をしたファンネル展開戦用モビルスーツ「ゲー・マルク」へと乗っていた女性パイロットが自分の腕を掴むエウーゴ兵へ向けて、脅えた視線を向ける。

「あたしに酷いことをするつもりでしょう、エロ同人誌みたいに……!!」

「しないって……」

「エロ同人誌みたいに!!」

「あんたがどんな同人を読み入っているかは知らないけど、早く入ってよ、全くもう……」

ヒステリックに叫ぶネオ・ジオンの女性兵をスペース・ランチ、小型艇へ無理やり押し込み込むエウーゴ兵。

「歳かしらね、疲れる……」

レコアは中破したまま漆黒の宇宙を漂っている自機を見上げながら、薄く息を吐いた。

「しかし、まさに水際作戦、ね」

いくらやむを得ずとはいえ、愛人から貰った機体「パラス・アテネ」をファンネルからの無人迎撃砲台へとせざるを得なかったレコアの機嫌は良いはずがない。

「エウーゴっぽ、そっちの死に損ない連中の救助は出来たか？」

「思っていたよりも人数は少ない、あとは全部仏さん」

「仏さんは無視して、そのスペースをこっちへよこせ」

「多いの、生き残り？」

「ランチ二隻がエンジン・トラブルを起こして、帰ったと言ったろうに……」

ランチ、内火艇を操縦しているファアへも、ティターンズ兵からの通信は伝わって来ている。

「行っていいかしらね？」

「いいわよ、行って行って……」

「了解、レコアさん」

予想外のネオ・ジオン部隊との遭遇に、損害どころか母艦への帰路を余儀なくされたエウーゴ、ティターンズ混合部隊の隊員達の気は重い。

「何て言ったっけ、朝食妨害？」

「何よ、それ？」

「すぐに言葉をヒラヒラ変える事」

「朝令暮改？」

「そう、それ」

「何の事、ファ？」

「クワトロさんのやっている事よ」

「何だ、それか……」

ランチの通信士がなかなか繋がらない通信回路に向けて悪態をつきながらも、本隊への連絡の為に器機の調整へ挑んでいる姿を横目に、ファの唇から不満が飛び出る。

「クワトロさん、約束を守る姿勢が全く無いじゃないのよ、レコアさんさ……」

「シヤアが不実な男なのは、解りきった事だけと？」

「説得力、あるわねえ……」

上部の人間同士でアクシズやピナクル等の停止の確約をしたにもかかわらず、それら小惑星群があらゆるさまな落下ルートへ入った事をファは怒っているようだ。

「でも、意外にも他の人はその約束を破った事を、淡々と受け入れているみたいね」

「シヤアの事なんか、誰も信じていないって訳よ」

「嫌われたもんね、クワトロさんも」

「一回でも肌を合わせれば、ファもあの男の気持ち悪さは解るわよ？」

「その言葉であたしが顔を紅くでもすると思っっている、レコアさん？」

「まさか」

ノーマルスーツ内でそう艶然と微笑みながらファへと答えるレコア。

「しかし、ね」

宙域のそこらかしこへ浮かぶ、敵味方の破損をしたモビルスーツ達を見渡しながら、レコアのその眉が締められる。

「ネオ・ジオンの奴等が来る前に、全部かつさらって、持っていきたいわね……」

今の戦争、それに参加をしている勢力勢の戦力の枯渇は、地球派の軍もネオ・ジオン軍も身に染みて解っているのだ。

「ほら、とつとと来い、小僧」

ティターンズ所属の老兵が、疲れた声を出しながら、黙りこくつたままの少年兵へ手を差し伸べる。

「別にとつて食ったりはしねえよ、小僧」

「本当に？」

「飯も三食出すしよ……」

「ステーキは？」

「でねーよ」

ヘルメット等を擦り合わせる事でできる宇宙空間ならではの通信術「ふれあい会話」を使い、四、五十歳は年が離れたティターンズとネオ・ジオンの兵は会話をしあう。

「お前、名前は？」

「……」

ボソリとヘルメット越しの振動で彼へと伝わる名前に、その老いたティターンズ兵は深くため息を吐いた。

「宇宙人が、俺の死んだガキと一文字違いの名前を名乗るんじやねえよ……」

そのバイザー越しに見える少年兵の顔、まさしくそれは十年前に失った彼の「宝」が持っていたそれである。

(相手がどんな顔をした小僧でも、ジオンの奴の前で涙なぞ見せるものか……)

だが、男の意思は精神的な生理現象には勝てない。

「地球が泣いている」

「あん？」

極力に流れ出た涙を少年兵へ見せないように顔を上へ上げながら、老兵はあえて高圧的に少年へ向けて声を返す。

「あそこの瞳から……」

「ああ……」

そう言いながら、地球のある一点を指差す少年兵。

「ネオ・ジオンの連中もあの噂を知っているのか」

少年が「瞳」と呼んで指を差した場所、そこには人類史上最大の罪の墓標、落とされたコロニーが眠る、約十年前にオーストラリア大陸に出来た「人工湾」が青々と輝いている。

「何だい、その噂って？」

ランチのドアから、連邦正規軍のパイロット・スーツに身を包んだ兵が顔を覗き出してきた。

「亡霊の話だよ」

「亡霊？」

長らく地球勤務であった、男の昔馴染みの通信兵は少し今の宇宙での世間話には疎いらしい。

「時々、夢に見る奴がいるらしい」

「夢、ねえ……」

「何か、毒ガスらしい霧に包まれた所で、泣きじやくっているガキの話だ」

「毒ガス、もしかしたら……」

「だろうな」

コロニーを質量兵器とするときに、中に居る住人を退避させる代わりに採用された手段の事は、少しでも十年前の戦争の事を知っている

者であれば、誰でも答えられる。

「そして、その夢を見たって奴が出た翌日には、よく電子機器へと変なバクが起きるんだ」

「もしかして、今日がその日なのかい？」

ミノスフキー濃度が特に濃い訳ではないが、何故か電信に妙な文字が混入することに彼女は訝しんでいた。

「昨日に、カクリコンという若造が夢に見たらしいからな」

その男の言葉に、同僚の連邦兵とネオ・ジオンの少年兵は、再びオーストラリア大陸に浮かびあがる「瞳」へその視線を向ける。

「アイランド・イフィッシュの亡霊、か……」

「かもな」

その亡霊達が住まう地は、静かにその蒼い瞳を宇宙の愚民たちへと照らす。

「しかし、地球が泣いているなんてのは、随分と詩的な表現力を持つガキだぜ……」

そういう所も、死んだ息子と似ているといるのが老兵の神経に障っている。

「だがさあ、お前さん……」

「言うなよ」

テイターンズの選抜に漏れたとはいえ、古参の兵である彼女の勘は鋭い。ニュータイプ・パーパーテストとやらを受けたとき、彼女は良い線まで行ったと男は聞いた事があった。

「泣きたくもなるだろうよ、地球もさ……」

戦力の枯渇ぶりに、旧式モビルスーツどころではない宇宙戦闘機、セイバーフィッシュや鹵獲機として倉庫へ放り込んであった旧ジオンのガトルフィッシュ、それすらも核運搬機や対ファンネルミサイル拡散器として使用しなければならぬのが今の現状だ。

「神も仏もあつたもんじゃやない、世の中は……」

そして、それらが帰投していく姿に、何十年間も連邦、そしてテイターンズ兵として勤めあげてきた老いた兵は心から情けない気持ちになる。

「疲れた……」

ジオン公国のコロニー落としで親兄弟、妻と子を無くし、ジオン憎しの一心で一年戦争後もジオンの名を冠する残党を狩り続ける、それだけでテイターズへと入り、寝る間も惜しんで危険な現場を勤めて来た報酬が。

ゾウ…… ズウ……

「ミイバ・ザム、あの化け物が復帰をしてきたか……」

ジオンの驚異を思い知らさせる重モビルアーマーの後継機、遠目に見えるピナクルの側面を這うように進むそのモビル・シップの暴力的な偉容を見せつけられても、男にはもはや何の感情もわかない。

「もう、疲れた……」

再度そう呟いた男の姿へ、ネオ・ジオンの少年兵は静かな視線を向けていた。

「流石に、ある程度の保存料はいれてあるようだな」

何か慌ただしいアーガマのハンガーの脇で、ユウはモソモソとフィリップ手製の菓子パンを口へ運んでいる。

「じやなきや、保存食にはならないからなあ……」

気づかないのつもりか、パンの袋の内側には製作日が書かれた紙辺が、乾燥剤と共に入っていた。

「約、一月前の保存用のパンか」

パンそのものは旨い。昔に一回だけ食べた事のある、シロッコが作ったパンケーキの味を取り入れているようだ。

「こっちは今一つ、かな？」

カツとサラが焼いてくれたクッキーは、やや表面が堅く、僅かにコゲの味がする。

ガア……

ユウが飯を食っているハンガーへ、消耗をしたマラサイの改良型達
がエレベーターの閉鎖ハッチを開きながら、アーガマへと帰還をして
きた。

「しかしに、最後はやはり」

ジィ……

ハンガーで忙しく動き回っているパイロットやメカニックたちが
「のんきに飯を食ってんじゃねえよ、オツサン」と無言の視線を送って
くれるのを無神経にユウは無視をして、お気に入りの飲料を口へ運
ぶ。

「ムラサメ・コーヒーだな、うん」

「お気楽ね」

「うん？」

出来るだけ皆の邪魔にならないように、隅へ身を細めているユウへ
向かい見知らぬ女性パイロットの凜とした声がかかる。ユウよりも
一回り、歳は下であろう。

「皆忙ぎのこの光景を高みの見物の御身分、あなたは恥と言うものが
なくって？」

「最後の晚餐になるかもしれないだろ？」

「みんなそうよ、戦いに出る人達は」

「コーヒーブレイクの邪魔邪魔……」

ぞんざいにそのパイロットへシツと手を振ってみせるユウへ呆れ
たように一瞥をしたあとに、彼女は無造作にユウの方へその手を伸ば
す。

「ウワア!？」

「没収よ」

その女性パイロットは無表情で、ユウの傍らのプレゼントを詰め込
んだズタ袋の引きずり上げる。

「ちよつと待て、女!!」

ユウの罵声を無視して、彼女はそのズタ袋を軽々と持ち上げる。見
た目よりも力が強い女性のようにだ。

「美味しい食べ物が!!」

「我慢することね、解った?」

「俺のムラサメ・ジャンパーが、愛するコーヒーが!!」

その情けないユウの悲鳴に対して、彼女は一つ鼻を鳴らすだけである。

「後で艦長から返して貰いなさい」

「おい、まてこの雌のドロボウ猫!!」

わめくユウをなにか汚らわしい物でも見るように、彼女は再度一瞥をした後に、彼の前からスタスタと立ち去っていった。

「何だあ、あの尻と亀頭を足して二でケツ割ったようなヘアスタイルの女はあ……!!」

「あのですね、ユウ大佐……」

「何だ!?!」

怒りがおさまらないユウに声をかけた彼、ジヨブは別に顔色一つ変えない。この手の人物の扱いに慣れているのかもしれない。

「ああ、オホン……」

「別に怒鳴っていても構いませんよ」

今一つ年齢が解らないメカニツクの美しい面立ち、その顔の上に乗っている、癖のある金髪がハンガーデツキ天井の照明により、髪の毛筋自体が光を放っているかのように見える。

「修羅場の整備の場所なんで、みんなそのようなものですからね」

「Gマリオンの調整が終わったのですか?」

「いえ、まだです」

言葉のトーンが平常へ落ちたユウをじっと見つめながら、怒りが長続きせず、すぐに精神が常温へと戻るのが彼の良いところなのだろうなど、彼ユウ・カジマとの付き合いが短いジヨブでも何となくに理解が出来た。

「難儀を?」

「パイロット側の調整をお願いしたいのですけどね」

「おう、任せて」

「生意気な女だったよな、あのパイロットは」

「エウーゴの優秀なパイロットらしいですよ、あのエマさんは」

「大佐様の食事時間を邪魔するなつての……」

Gマリオンのもろ手に備えられた二本のヒートサーベル、それらの背中への格納機能のチェックを行いながらも、昨日強引にムラサメ・コーヒー、それを始めとする諸々の贈り物をぶん取られていった事へ対するユウの苛立ちは未だ収まらない。

「私がこの前に、あなたを小人と言ったのはね」

「何です、ブライトさん？」

「誉め言葉のつもりですよ」

目を覚ましたばかりのブライト艦長が、眠気醒ましの為の散歩がてらにユウ達の元へとやってくる。

「せっかく誉めたのに、本当の意味での小人の大佐殿にはなつてほしく無かったなあ……」

「すみませんね、未来のカフェのマスターさん」

ユウもジョブにしても、先程に充分な時間の睡眠自体は取れている。

「長引くな、Gマリオン……」

その自機の整備が難航していることもユウのメンタルへ悪影響を及ぼしている。結局、Gマリオンの調整は数時間などで出来る物ではなかったのだ。

「思ったよりも、器の小さい人だったんですねえ……」

「聴こえているよ、ジョブさん」

「その位の声で言いましたんよ、大佐殿」

「どいつもこいつも、全く……」

コクピットを先程から開放している為に、ユウの視点からはアーガマのハンガー内の様子がよく見てとれる。ユウ機のすぐ近くには、Zガンダムの簡易量産機群の集大成として開発をされた「リ・ガズイ」タ

イプが数機、戦闘機態勢のまま整備を受けている。

「俺を誰だと思っているんだよ……」

「本当にそんな事を言っているかね」

昨日よりも閑散としたハンガーへ響くような大あくびがブライトの口から一つ。

「嫌われますよ、みんなから」

「言ってくれますね、ブライト艦長」

「あなたのような階級の高い、他の者から見て上官にあたる可能性の高い人物のひねくれや愚痴は」

「どうせ、引退寸前の邪魔者ですよ、俺は」

「エマから上がって来る規律関係の報告は、口調や内容が辛辣の為にあまり聞きたくないのです」

「チクったか、あの女」

「とにかく規律を誰よりも重んじる性格ですから、彼女は」

そのブライトの言葉に不愉快げに眉を潜めながら、ユウがコクピットからワイヤーロープを使い、Gマリオンの足元へ下がってきた。

「これだから、お高くとまった人間は」

「元テイターズ兵からの転向ですからね、彼女」

「元巣とは関係がない、地の性格でしょう、あのシロツコース・ヘアスタイルのでき損ないの女は」

昨日、何か心へ引つ掛かる嫌な夢を見たせいかな、不機嫌さが増幅をしているユウの愚痴は止まらない。

「Gマリオンのこのデータ、小型機への開発に使えるからな……」

ジョブはそんな機嫌の悪いユウなどとづくに無視をし、淡々と機体データ調整の為の質疑を事務的にユウへと投げつけつつ、その返答内容を電子記入帳へとその指を走らす。

「ジェリドや昔のサマナの爪の垢でも煎じて、口へ流し込んでやりたい」

「ジェリド？ あれだってプライドが高い男ですよ？」

「エリート的なプライドと潔癖性は似て非なる物でしょう？」

ブライトからの朝食とコーヒーの差し入れをされても、ユウの口か

ら吐き出される毒は止まるどころか、ますます加速をする。

「あのニムバスにしても、色んなプライドと潔癖性が入り交じったよ
うな性格だからな」

「ハア、そうですね……」

正直、この男は昔のアムロやカミーユよりも扱いづらいのではないかと、自分よりも僅かに歳が上である青い短髪をしたパイロットを見つめながら、その風の考えが脳裏へとよぎるプライト。

「騎士と自称する時点で、プライドの塊だと表明している上に、非殺の哲学だど？」

ハンガールの床へと座り込む愚痴発散マシンは、その機能を存分に発揮をしながら、周囲の人間達へぼんやりとした視線を向ける。

「うるさいな、この人は……」

「仕事に集中、ナイジェル」

「ハイハイ……」

共同でリ・ガズイの整備チェックを行っている二人の男女が、ユウヘチラリと視線を向けた後、再び作業へとその手を戻す。

「殺サズの哲学をやらを出来る時点で、まさしくプライド、傲慢と潔癖性が合体をした権化だよ」

「元気になった方がいいが、どうにも凶に乗って来ているなあ……」

そう呟きながらも、ブライトは近くにいるパイロット達へ、ユウの不愉快な行いに我慢をしてくれとケアをしに向かう。

「どこか私のセンスを慰める、雄々しい出で立ちのモビルスーツを預かれるということは、腕の立つ人ではあると思いますがね……」

Gマリオンの紅い二刀を構えた姿、それはブライト揮下である彼の好みに合っているらしい。

「彼は良い人だよ、ナイジェル」

「そうですね……?」

ブライトの言葉に首をかしげながらも、そのパイロットは左手へと持つ紙製のマニュアルをじっと睨みながら、半自動化されたり・ガズイタイプの整備の進行を進めた。

「やはりアストナージの奴がいないと、この程度の処置で我慢をする

しかないか、ナイジェル?」

「所詮、俺達は機械の力を借りて整備の真似事をやっているパイロットだからな」

どうも最近のアーガマには整備員が不足をしているらしい。ユウ自体も昨日の後半からジョブの指示の元、何回か本職ではないメカニックの仕事を手伝わされている。

「だいたいなあ」

ブライトは通信機、ジョブは仕事に熱中、その他の中途半端に耳が開いている者だけに、ユウ・カジマが放つ不愉快な言霊が滑り込む。

「腐った愚痴男のセンチメンタリズムが私の勘に触る……」

「ジャブローから上がってきたこの新型、カタログに書いてあるパーツが外されているな」

女の方はブライトの忠告を聞き入れたと言うより、完全にユウを無視をする事にしたようだ。

「ボツクン、にむばすはニュータイプを妬んでます、だから越えたいです、マル」

「この部分、目を通して」

「アイヨ……」

愚痴多き不健康な朝食の最中にしても、ジョブからの機体関係の報告はぞんざいに扱わないのは、ユウの歴戦と言う物からくる習慣みたいな物であろう。

「あの理念や執念は本当に何処へ行ったんだよ、全く……」

「あ、エラー吐いた」

「そいつに負けた男が何を言っても、まさに遠吠えなんだけど、さ」
そのポツリとした言葉に、飲みかけのコーヒーをその場に置いてユウは難儀をしているジョブの元へと足音を響かせる。

「何かあきらめ早いが実の部分執念深い、嫌われそうな人だな」

「だからこそ、無視をしなさい」

「了解だよ、ケーラ……」

一機のリ・ガズィ、そのチェックが終了したことを確認した二人は、次の同型機の元へと向かった。

「ああ、例の亡霊からのメッセージだよ」

「なんですかい、そりゃ？」

「慣れれば実害はない、動物霊みたいなものだ」

ユウは時々GマリオンのOS関係に起こる謎のエラーメッセージ、その対処法だけはアルフやシロツコから頭へ叩き込まれている。あの二人はこういう外部の艦で整備をする状況も想定していたのだろう。

「よくこんな不気味なお化けが出てくる機体を使おうとしますね」

「明らかに人外の力がありそうだからな、コイツは」

「多分、グレイス・コンバーターとやらの制御機能がこの不安定さを出していると思いますけどね……」

「俺は一年戦争の時から、不安定を積んだ機体は馴染みなんだよ」

「だからこそ、愚痴も出てきますか」

「俺も心の中では、回りの人に悪いとは思ってはいるさ」

エラーの修正が完了したあと、ユウは再び先程まで座っていた場所へと戻り、残った朝食を口へと放り込んだ。

「ニムバス、あいつがどこがどうねじくりまがって、非殺の剣で相手を打ちすえる事が、彼の見出だした真理なんだろうな……」

「愚痴内容の出力が低下をしても、聞こえてくる事は聞こえてくるぞ、ジムの中年……」

二機目のリ・ガズイの調整が先の機体よりも遥かに手こずりそうなのに加えて、愚痴ユウ波動がパイロットの男を苛立たせる。

「エグザム・マリオン、傲慢なる慈悲とやらの御大層な名前までつけやがって」

朝食のゴミを片づけたあと、ユウはその背筋を大きく伸ばす。身体内部では進行の遅い潜水艦の様に振る舞う病気など、目に見えない問題はあるらしいが、目下の所は順調。

「あの人、アタシらの元へ来やがったよ、オイ」

「身勝手な男に愛されてはいけない、目を合わせるな、ケーラ……」

腹ごなしの散歩でハンガー内でも回ろうかとブラブラと自分達の近くへやって来たユウを、なるべく彼と目を合わせないように作業へ

熱中をしている振りをする二人の男女のパイロット。

「非殺剣でアイツから躰をさせられた俺が、何かしらに自分の問題点へと直視出来る勇氣、それを持ってたから良かったものを」

ユウの視線の先、すぐ近くのハンガー出入口付近にブライト艦長の姿が見える、仕事へと戻るのだろうか。

「そう、ニムバスからの剣によつて……」

その眩きを終えた刹那。

「……」

ユウ・カジマの顔が蒼白へと染まる。

「そうか……」

彼の震える唇からこぼれる、掠れた声。

——あなたは、YOUよ——

「そう、なのか……!!」

——世界はYOUに満ちているの——

「ブライト艦長……!!」

ユウの声がハンガー先の通路を歩んでいるブライトへと飛ぶ。

「ドウシタ、ドウシタ……」

あまり今のユウとは関わりたくないブライトであったが、その静かながらもどこかに強い、真意な口調を発したユウの元へ、嫌々ながらも通路からわざわざ戻ってきてくれるブライト。

「今、俺は」

「ハイハイ……」

「今、この世界の中で、一番ニュータイプについて理解をしている人間かもしれない」

「はあ?」

ブライトはその妄言紛いの言葉に一瞬「修正」をしてやろうかと自分の拳を握りしめたが。

(私はこの男の目の輝き、どこかで……)

彼、ユウ・カジマの双眸から放たれる勁い(つよい)蒼い光。それに宿る真意な輝きに対してどこか見覚えを感じつつ、ブライトは喉に絡まる唾を静かに飲み込んだ。

第58話 ニュータイプ（後編）

「修正、お解りになりますか?」

「修正?」

一瞬、ブライトはユウに頭の中を読まれたのかと思い、心臓がドキリとしたが、そのまま顔色を変えずにユウの瞳を見る。

「軍隊の鉄拳制裁です」

「ああ、あれですね……」

別にブライト艦長は相手がニュータイプだなんだろうが、神経が研ぎ澄まされている相手には常に鷹揚な態度を取る。昔のホワイトベース時代、そこでの困難から習った教訓だ。

「あの体罰がどうしたんです、ユウさん?」

「あなた、ブライトさんは修正を行った事がありますかね?」

「何回かは、ね」

ユウの言葉に頷きながらも、アーガマの艦長はチラリと自分の腕時計へと視線をやる。僅かだが話している時間はありそうである。

「修正とは、どういう意味の物だと思えます?」

「綺麗な言葉で言えば、愛のムチですな」

「全て、相手の事を思いやって?」

「どうかなあ……」

ブライトの部下である、リ・ガズィを整備していたパイロット二人、そしてジョブも二人の会話に何気なく聞き耳を立てていることに気がつきながらも、彼は特に何も咎めずに静かにその双眸を細めた。

「私心が全く混じってないとは、言い切れない」

「私心、ですか……」

「何だかんだ言っつて」

目を薄く閉じながら、ブライトはユウの質問に出来るだけ誠意に答えようとする。

「修正を行う時に、単にアイツの事が気に入らなかつたからだという理由も、あるかもしれませんね」

「嗜虐的、サディスティクな感情は?」

「自分を客観的に見て、ノーとは言いい切れない」

自身の顎へ手をやりながら、ブライトのその両目が静かに開く。

「その修正が、どうしましたか、ユウ?」

「はい」

ブライトの、やや問い詰めるような言葉や視線にもユウは正の面を向けて、ハッキリとした声をその唇から出した。

「愛のムチである修正を行った時の気持ち、それが相手にいつも伝わると思えますか?」

「解りませんよ、そんなの……」

臨時整備員をやっていたパイロット二人もジョブも、いつの間にか面持ちを真剣味を帯びさせて、ユウ達の言葉に聞き入っている。

「いや、恐らくは瞬時に相手には伝わりませんね」

「しかし、もし修正の拳を振るった時の気持ちが相手に正確に、誤解なく伝わるのであれば」

「伝わるなら、何です?」

「それはニュータイプが成す事でしょう」

そのユウの、勁く(つよく)その舌から出される言葉に、その場にはいた他の全員の頭の上へ特大のクエスチョン・マークが浮かび上がった。

「すまない、全く言っている意味が理解出来ない」

「言葉を介さない、センスによる誤解のないコミュニケーションがニュータイプの本質であるとするならば」

ユウは別に冗談を言っている訳ではないらしい。が、ブライトが顔をしかめながら言った疑問を無視して彼の口が動く。

「この俺、ユウ・カジマはこの前のプロレスの時に」

「いや、ちよつと待ってくれよ……」

「ニムバス・シュターゼンによる、鉄拳、いや鉄剣でのニュータイプ・コミュニケーションを受けたのです」

その断固としたユウ・カジマの言葉に、ブライトも、他の者も開いた口がふさがらない。

「あの非殺の剣の一撃こそが、ニムバスが身に付けたニュータイプ能

力なのです」

「ここまで飛躍した理論は聞いたことがない……」

冗談抜きに、ブライトの脳に軽い痛みが疾った。

「おかしいですか、ブライトさん？」

「アニメだか少年マンガの世界の話じゃないですか、それじゃ」

「そのマンガの世界が、ニュータイプの理想とやらでは？」

「止めて下さいよ、ユウさん……」

その弱った顔をしたブライトを、二人の部下がニヤニヤと笑いながら見つめている。彼はその二人を睨み付けながら、軽く息を吐く。

「オールドタイプである私を苛めないで下さい」

「俺だって、オールドタイプですよ？」

「その極端な発想のエキセントリックさは、ニュータイプであるカミーユの奴の比ではありませんよ、ユウ」

「そう、ですか……」

「そうですよ、全く」

何を思ったかパイロット組の内、女性の方がニヤつきながらブライトとユウへ缶コーヒーを差し出してくれる。

「俺の思い付き、忘れてくれませんかね、ブライトさん？」

「別に決して、全てが分からない話ではありませんがねえ……」

女性へ一つ礼をしてみせてから、コーヒーの蓋を開けるブライトのその顔が引き締まった。

「ミイバ・ザムが迫ってきていますから」

「哲学を語っている暇は無いですね」

「そうですよ、本当に全く……」

そのブライトの困った顔を見つめている他の三人は、意地の悪さを含みながらも、どこか「良い」笑顔を先程から浮かべ続けている。

「ミイバ・ザム、ネオ・ジオン総帥である小娘、ミネバ・ザビの座乗艦ですね」

「あれを落とせば、この戦争が終わる」

「本当に？」

「と、我々連邦派の者達を誘惑しております」

パイロットの片割れ、男の方がユウの目の前へ一枚の写真を差し出した。

「そして、近づいてきた連中を返り討ちにして、我らの戦力を減らす」
「食虫植物、いや食虫ハマグリですね」

写真に写る超重モビルアーマーは、確かに旧ジオンの機体「ビッグ・ザム」によく似ている。

「それでも、向こうから接近をしてくれば、無視は出来ません」

だが、その対比として豆粒のように写るモビルスーツのサイズが正しければ、そのモビルアーマーの大きさは超弩級星間往復用輸送艦、シロツコが寝泊まりをしている「ジユピトリス」以上の大きさがあるようにユウには見えた。

「二機のモビルスーツ、Gマリオンだけでどうにかなる相手では、無論に無い……」

「いや、その事ですがね」

コーヒーの蓋も開けずのため息をつくユウの目をブライトが覗き込む。

「それでも、近くに展開をし始めたティターンズ主導の大部隊が、間もなくあのモビル・シップへ総攻撃をかけます」

「ふむ……」

「この近辺、アーガマを含む艦からも援護を出します」

そのブライトの言葉に、彼の部下のパイロット二人が軽く手で自分の顔を扇ぐ。彼らもその戦列へ加わるようだ。

「ピナクル、あの三基ある巨大隕石の内、そいつを地球落下の一番手として、ネオ・ジオンが出してきました」

「ゼダン下部のトゲか……」

「その盾となっているのが、あのミイバ・ザムを中核とした部隊」

「ミイバ・ザム……」

そう呟いたユウの身体が軽く震えたのは、必ずしも恐さの為だけではない。

「その宙域ルートが、ネオ・ジオンによって封鎖をされているのも同然なのです、ユウ」

「他のルートの模索も何も、ありませんかね？」

「シヤアへ隙を見せてやるだけに終わりますよ、多分」

ユウの背筋に疾る「トリハダ」のような物、その感覚の心地よさに、ユウの表情へ何か不思議な笑みのような物が浮かぶ。

「結局に、ピナクルを避けては通れませんね」

「古巣のストウラート、モルモット隊へと行きたいので？」

「最終的には」

そう言いながら、ユウは自分の機体、人間の十倍以上の大きさを誇るモビルスーツという人形の爪先を軽く撫でた。

「しかし、俺は」

その眩ぎと同時にユウ・カジマの脳裏、それにはこの二月ばかりのアーガマでの生活が蘇ってくる。

「ここまで、長い間アーガマには世話になったのです」

そのユウの言葉で、ブライトが彼が何を今一番したいのか、または何をすべきなのかを考えている、自分で自覚をしているのだと、アーガマ艦長ブライト・ノアは判断を下す。

「私達へ向けての恩返しを」

「はい」

「どうか頑張ってください。ユウ大佐」

「ありがとうございます」

そう言いながら律儀に頭を下げるユウ。その彼の姿に女性パイロットから口笛が吹かれた。

「ブライト艦長」

「どうされました、ユウ？」

「自分という人間は、ですが」

アーガマ右舷のカタパルト・デッキから漆黒の宇宙を静かに見渡す

ユウ。遠くには微かに巨大な「トゲ」であるピナクルの偉容が浮かぶ。

「連邦軍の中で、一番最初にジム」

「ジム、ですか？」

「あの量産機シリーズの基本機体である、のっぺり顔のジムにですわね」
「ジム……」

何か、その言葉に懐かしいものを感じている素振りや、Gマリオンのモニターへと写るブライトの顔は見せている。

「ゴテゴテと形容詞を付けずに一言でジムそのものの機体です、艦長」

「シンプルに、ね」

「その元祖ジムのコクピットへ、一番最初に足を踏み入れた人間らしいですよ、俺は」

「ほほう？」

「二位のパイロットとは、一時間の差だと、うちの技術屋さんであるアルフが言っていましたよ」

機体内にあったシロツコの手書きのメモへ目を通しながら、どこかのんびりと、軽く浮かしたような口調で話しながら、そうブライトへ微笑むユウ。

「もつとも、俺が最初に乗ったジムは動かした途端に脚が折れましたので」

「そりああ、また……」

「モビルスーツ戦の初陣であるオデッサ作戦では、予備のパイロットとしてベンチを暖めていましたが、ね」

「オデッサかあ……」

ブライトにとっては、感慨深い場所の名前である。その作戦の前後で、色々な人間との別れがあった。

「あの頃のガンダムは、驚異的な性能、それこそジムとは比べ物にならないシナモノだったんだよな……」

「今のジエダ等に乗った後では、とうていカビくさいファースト・ガンダムなんぞに乗れたもんじゃないですよ、ブライト艦長」

アーガマのもう片方のカタパルト、そこへブライトの部下であるナ

イジエルの機体が彼の軽口と共にハンガーから上がってくる。

「だが、そのガンダムなんか目じゃない、現在の量産機の群れをもつてしても」

ブライトが見つめるモニターの中で、ナイジエルのリ・ガズイが微かに前進をする。後続のケーラ機の為にスペースを空けるためだ。

「やはりビッグ・ザム、デカブツの如きの前ではアリ同然かもな」

「違いますね」

ビッグ・ザム、その名に対しても苦い思いを浮かべてしまったブライトに対して、ユウが強く力を込めた言葉をかける。

「俺達は必ず勝てます、ブライト艦長」

そう言いながら、その手でユウがもてあそぶシロツコのメモ。それにはやたらと凝った武装名の単語が書き連ねられていた。

「勝算でも?」

「負ける要素がないのです」

モニター内のブライトの顔が、ユウの言葉に何か感銘を受けたように綻ぶ。理由は解らない。

「何故ならば」

Gマリオン、その機体の両肩部の鞘へ納められた熱量剣の名前を妙な物だと思いつながら、ユウはブライトに対して不敵に笑う。

「俺がいるからです」

「ヒュウ……!!」

ブライトの言葉よりも先に、ナイジエルの口から感嘆の声が上がった。

「言い切ったね、大佐殿」

「やってみたくなつたんだよ、ナイジエル君」

「何を?」

ユウと言葉を交わすナイジエルのこの態度はブライトにとって、ビッグ・ザムとの戦いで散ってってしまった昔の仲間の顔を思い出させる。

「やせ我慢、勘違い、それらが混じった傲慢さの欠片を」

「いいんじゃないですか?」

いや、ナイジェルだけではない。ブライトは心の中でそう呟いた。

「増長天を超える存在になるといいうのも」

「俺にはその大言壮語、舌に載せる資格があるはずだよ」

「どのような？」

「もちろん、それは」

そうだ、ユウへと感じていた懐かしい何か、ブライトは今さらながらにその自分の気持ちに気がつく。

「君達ヒヨッコが小さい時から、俺はジムに乗っていた」

「あんたがロートルなだけなんですよ、大佐殿」

「そう、ロートルと君たちに言われる位に前から」

彼、ユウ・カジマは昔の仲間の生まれ変わりなのだ。自分「ブライト・ノア」が彼と初対面の時から感じていたシンパシーか何かは。

「ジムに乗り」

似ているんだ。全ての生きた仲間、死んだ仲間。

「ジムを駆り」

似ているんだ。自分と、そしてあの伝説のニュータイプと。

「ジムと共に生きた、俺の人生」

「そう、おそらくあなたは連邦軍の中でも一番……」

「言うな、ブライトさん!!」

言わないよ、もう一人のアムロ・レイ。

「身体に持病を持つ鬱の患者が、元気になったもんだな……」

「決め台詞、俺が決める!!」

「フフ……」

良いぞ、アムロ。

「俺が一番……」

続ける、言うんだよ、アムロ。

「俺が一番、Gマリオンを、ジムを」

言え、オールドタイプのまま、そのままの存在でいられたアムロのもう一つの可能性（ラプラス）

「上手く」

Gマリオンから、強い呼気がカタパルトへ満ちる。

「そう、上手く……」

ユウの右手が、スロットル・レバーを強く掴む。

「使えるんだ!!」

シユファ……!!

右舷カタパルトのGマリオンの背中から蒼い羽根が、光が羽ばたき、アーガマを包むように強く、大きく舞った。

「システム、オールグリーン!! グレイス・コンバーター、極めて良好!!」

「デカ頭に納められている、二つのサイコミュ装置は?」

「問題なし、ジョブさん!!」

通信機越しのそのユウの返事に、ジョブも同じ位に力強く答える。

「ウロボレス・サーベル、ワン、ツ―付属の簡易グレイス変換器、共に異常なし!!」

「ナイジェル機、発進準備完了!!」

「しかしに、このウロボレスとやら!!」

ナイジェルのリ・ガズイが、アーガマ左舷のカタパルト先端で、アイドリングを始めるのを尻目に、ユウは再びシロッコの書き残したメモへ視線を向けた。

「永遠を司どるだの、揮発性の象徴だのと、あの天才がいちいち講釈を垂れているのが気に食わない!!」

「ケーラ機、最終機体診断終了!!」

「紅く輝く剣であれば、より相応しい名前を俺がつけてやる!!」

ケーラのリ・ガズイがナイジェル機の尻に付くように、カタパルトへ上がる。

「長い間、本当に長い間を御世話になりました、ブライト艦長!!」

「病気持ちのお身体に気を付けて!!」

「俺のどこが病人と!？」

「診断にしても、パイロットとしての寿命にしても!!」

「しかしに、燃え立つ焔を出せる俺の身体に、問題などありませんまい!!」

「気合いとやらで目を逸らしているだけでありませんよう!!」

「イエス、イエスだよ艦長!!」

「ニュータイプの特売特許である精神エネルギーを使えるオールドタイプ、羨ましい!!」

「よくもそう、おだててくれる!!」

「その根性の秘伝、教えてもらいたい!!」

「一言を直入!!」

「短く助かる!!」

「大人!!」

「短すぎる!!」

「単語の続きがある、ブライト!!」

ユウの心の色、宇宙の色と共にGマリオンの両肩が、紅く染まり始めた。

「大人!!」

「聞きました!!」

「そう、大人はみんな!!」

そう言いながら、ユウはスロットル・レバーを強く、強く押し込んだ。

「ニュータイプ!!」

「ジエア……!!」

輝く羽根を撒き散らしながら宇宙（ソラ）へと飛び立つブルーディステイニー五号機。戦士は再び剣を手に取り、アーガマでの休息を終えた。

「あの落ち着きの無さで、俺より歳が上だとは信じられん……」

ナイジェル機を初めとする、他のピナクル攻撃隊の出撃をブリッジから見送りながら、ブライトはその口を軽く歪ませる。

「大人は皆がニュータイプ、か」

「良い言葉ですね、ブライト艦長」

「ああ」

ジョブに向けて頷いてみせるブライトの腰に付けた携帯端末が、彼へ振動を揺らして仕事の催促をする。

「結構、勝手をしてくれる大佐殿でしたが」

「良い人だったよ、やはり彼は」

「はい」

ジョブも端末で自身の今後の予定表を見やる。その多忙さとうんざりをした表情を浮かべながらも、どこか嬉しげな笑み彼はブライトへ見せた。

「ニュータイプの仕事、やるか」

「はい」

歳相応の落ち着きを強く秘めたブライトにしても、仕事自体は山ほどある。

（頑張れよ、もう一人のアムロ）

ブライトの視線の先で、すでに遠く離れたGマリオンの星の鼓動が微かに瞬いた。

第59話 戦慄の紅きブルー

バ、ツア……!!

「どう出る、かな？」

キツチマンの乗るFAZZは軽く火花を放ちつつも、健在ではある。

「もうひと踏ん張りはしてえがね……」

軽い損傷を受けているキツチマン機の隣で呻くヤザンのラーク・シャサも、損害自体は少ない。

「気にいらねえほど、柔軟な考えが出来る奴が乗っているようだな」「まさか、ミイバ・ザムが向こうから強襲をしかけてくるとは……」

「俺達はうかつだったよ、キツチマン中佐」

そのヤザンが絞り出す、心の底から悔しそうな声に同調するかのように、キツチマンの口からも歯が軋む音が掠れた。

「メガ・バズーカランチャーに向けられたファンネル達へ、あと少しでも早く迎撃のミサイルを放てれば……」

「済んだことよりも、これからだよ、これから」

「解っている、ヤザン」

とは言いつつも、虎の子の大出力ランチャーを全滅させた彼らには、他にミイバ・ザムへ有効打を与えられる戦法も、兵器も限られている。

「俺達のモバイルスーツの頭数だけは、悲観すべきではないが、な」

「ミノスフキーク粒子をここまでばら撒かれたら、疑似ニュータイプ波通信すら遮断をされてしまう」

キツチマンのその言葉に、忌々しげにヤザンが攻撃型可変モバイルスーツ「ハンブラビ」の後継機であるラーク・シャサのコクピット内で軽く舌を打つ。

「俺の部下共も、独自の判断が出来る事は出来るんだが……」

モバイルスーツがバラバラに攻めても、このミイバ・ザムに限らず、超巨大機を落とせない。その事は一年戦争時から今までの連邦軍戦術

教本、それには必ずと言って良いほど記載をされている。

「モビルが付いてもシップ、ミノスフキーの常時散布が出来るか、ミイバ・ザム」

モビル・シップ、旧ジオンの急造兵器である「オツゴ」の機動母艦を参考として造られたと言われている超巨大モビルアーマー、その無謀とも言える単機突撃により、戦列が完全に崩壊をってしまった事がキツチマンには悔しくてならないのだ。

「ミイバの二十分戦闘の後のインターバル、よくよく気に障る……」

「良いじゃないですかい、中佐殿？」

「いつそ、昔のビグ・ザムみたいにそのまま止まってくればいいものを」

多数の核融合炉と疑似ニュータイプ波発生器の熱による弊害、それがキツチマン達にミイバ・ザムの単機突撃の想像が出来なかつた理由の一つである。

「馬鹿連中が!!」

「何だ、中佐!?!」

離れた場所へ散っていた攻撃隊の一部が、活動を停止しているミイバ・ザムへ攻撃を仕掛けたのに対し、キツチマンが呆れた声を出した。

ジユフオ……

その高機動機バイアランのビーム砲は全てミイバ・ザムのビームバリアーに防がれ、お返しとばかりにそのモビル・シップに搭載をされた随伴機から光の尾が引く。

「止まっているデカブツ相手だから、気持ちは解るが、よ」

ネオ・ジオン製の疑似ニュータイプ波器を搭載されたゲー・マルクの機体から疾るファンネルの狙いは正確だ。高機動を誇る数機のバイアランがサイコミュ兵器のビームに貫かれる。

「ジリ貧にもなりかねない、解つてはいるさ」

遠く、ピナクル方面から見えるネオ・ジオンの増援隊が放つ機体の噴出光の帯へ視線を向けながら、ヤザンがドリンク・チューブへとその手を伸ばした。

「FAZZのハイパー・メガ・カノンであれば、バリアーであるI

フィールドは遠距離でも撃ち抜けるが」

「減衰をしたカノンのビームでは、今度はミイバ・ザムの装甲を炙るだけに終わるか……」

正直、ドリンクよりも今のヤザンにとってはタバコが吸いたい気分である。自分の口に合わなかったが為に置いてきてしまった噛みタバコの事を彼は悔やむ。

「俺達の増援自体も、まもなくやって来てくれる」

「とは言え、所詮パチンコみたいなビームやバズーカの機体では、アイツを撃ち抜けねえ……」

ギアフ……

不気味なノイズが、その宙域へ存在をする全ての機体の内部無線機から鳴り響く。

「なめやがつて、ミイバ・ザム……」

「なめられても仕方がねえよ、キツチマン中佐殿」

静かに、ミイバ・ザムの巨体が身動きを始めた。

「増援の奴等の戦力に期待をかけたつ、再度接近を行う」

やはり、今の連邦派軍勢の状態ではどう考えても、FAZZの大出力ビーム砲をミイバの至近まで迫らせて放つしか勝機はない。

「時間もなく、ここで引いたらピナクルを止める事は出来ない」

「了解」

「すまない、爺さま……」

「仕事だろ、隊長殿」

若い部隊長が乗るFAZZからの命令に頷きながらも、テイターンのズの老兵は少し前に知り合ったばかりの少年、ネオ・ジオンの少年兵をやっていた捕虜の顔を思い出す。

(小僧、達者でな……)

だが、その達者の祈りが届かなかったのが老兵の家族の死と言う現実だ。

「所詮、この世に神様が」

そう、神様。ネオ・ジオンの総帥であるシャア・アズナブルを現人神として、そのような目で見ているスペースノイド達の心理。それはアースノイドである彼には全く理解が出来ない。

「宇宙人共が言うニュータイプが俺達の神様になってくれないとしても」

ミイバ・ザムへの加勢の為に迫ってくる、遠くのピナクルからのネオ・ジオン増援隊が放つ微かな光をじっと見つめながら、それでも彼は自分の胸に十字を切り、神が思わしき場所、鋭い光を放つ太陽へと視線を向ける。

「どこかに、救世主の騎士様でもないもんかねえ……」

「ここにいるぞ!!」

「何!?!」

太陽から、光一条。

「この世に神を出来るニュータイプはいない!!」

その太陽の光を背に、紅と蒼の輝きに包まれたモビルスーツが漆黒の宇宙を疾った。

「連邦の騎士、ユウ・カジマがそれを成す!!」

ユウのGマリオンを先頭に、ミイバ・ザム攻撃隊の増援が戦線へ凄まじい勢いで突入を仕掛ける。

「なんて速度であるか!?!」

驚く老兵を尻目に、ユウは白機から羽根を撒き散らしながら、一気にミイバ・ザムとの間合いを詰めようとそのモビル・シツプへと鋭く視線を向けた。

ジャア……!!

「両肩がまるで返り血のように!!」

ユウに気がついたネオ・ジオンのファンネル展開戦機「ゲー・マルク」からパイロットの怒声と共に一斉にファンネル群がGマリオンへと飛び掛かる。

「この血に混ざりたくなければ!!」

バツ!! フォ!!

Gマリオンのフェザー・チャフにファンネル群が惑わされ、それらが明後日の方向へと向かう。

「そこを退け、ネオ・ジオン!!」

「ふざけるな!!」

ネオ・ジオンのパイロットの怒りの叫びと共に、他のゲー・マルクからも支援のファンネルがユウ機へと襲いかかる。

「新型のサイコミュ機、なんてファンネルの数だ!!」

その強力なファンネルの弾幕に、ユウが歯噛みをしながら強行突入を諦めようとしたその時。

ドウ……!! ドウ!!

「行ってくれ、蒼い奴!!」

「助かる、ジイサン!!」

チャフでは攪乱をしきれない数のファンネル群、それらをテイターズ兵達がアンチ・ファンネル・ミサイルで迎撃を仕掛けてくれる。

「生意気そうな若造だ!!」

「元氣そうなジイサンだ!!」

老兵の息子がもしも生きていたら、ちょうど今のユウと同じ位の歳となっていたであろうか。

「増援連中の露払い、仕掛けるぞ!!」

「オウ!!」

その瞳に光る物を見せながらも気迫に満ちた老兵の掛け声、その叫びに呼応をして、その一帯の連邦派の部隊から猛烈な火線が宙へと舞い散る。

「二手に別れる、ナイジェル君!!」

「了解だ、大佐殿!!」

支援射撃に気圧され、ユウ達の侵入を許してしまったゲー・マルク隊へ手番を与えず、ユウとナイジェルを先頭に増援隊は枝分かれを行う。

「ミイバからの対空砲火が発動!!」

ユウ機のすぐ後ろに付くケーラのリ・ガズイから警告の音が響いた。

「ジャ、ジャウア!!」

「ハリネズミ、シヤアの紅いモビルアーマーと同じだな!!」

ミイバ・ザムからの対空レーザーや機関砲の火線を追うように、その巨体の二本の脚から鉄塊が外れる。

「マリオンの目に反応!!」

「何が来ますか、大佐!?!」

疑似ニュータイプ波発生器からのパッシブを受けているサイコム・システムによる機体管制、それらの恩恵を受けている連邦のモビルスーツの機動、反応性は従来機の比ではない。対空砲火による部隊の損害は軽微。

「ミイバからのファンネルだ!!」

「ガアオウ!!」

ミイバ・ザムの足先の爪、ユウ達の目前で爆発を起こしたその鉄の塊から、多数の小形の金属片がGマリオンを先頭とした部隊へ尾を引いて迫る。

「質量体当たりのファンネル、良い考えをする!!」

シンプル故に並みのビーム・ファンネルよりも対応が難しく、また強固さを誇ると思わしきファンネルへ、運搬機へ乗った後続のジエダから迎撃のミサイルが放たれた。

「ドゥ!!」

「やはり、固いか!!」

大型の火焰剣「エグザム」で、質量刺突型ファンネルを切り払うユウ機の後方で、迎撃のミサイルに耐えた数個の鉄片が増援隊の後続群へと突き刺さる。

「ドオ……!!」

損害を受けた機体の内、一機のギャプランの改良タイプがその攻撃により爆発四散をした。

「マリオン!!」

ユウの叫びと共に、大量の蒼い羽根がグレイス・コンバーターから

吹き荒れ、濃密なチャフが漆黒の宙へと舞う。

「その無限エネルギーシステム、出力を上げすぎていないか!？」

「断じて無限エネルギーではない、ケーラ君!!」

「そうなのか!？」

「単なる増幅器だ、こいつはね!!」

後列から迸る大型の、特殊型対ファンネル・ビッグミサイル、それと加わるフェザーチャフによって、鉄片ファンネルの幕へ突破口が開かれる。

「しかし、このミノスフキー粒子の濃厚さであれば!!」

ユウ機のグレイスからの蒼い光に、同じくミノスフキー変換器を取りつけてある紅い剣からの輝きが混じり合った。

ガツガガツ!!

「切れる、血をすすれる!!」

火焰剣、Gマリオンがその手に持つ特殊ヒートサーベルの先端により、ミイバ・ザムの装甲が掠め切られる。

「しかし、何て大ききなんだ、コイツは!!」

そのモバイル・シップの巨軀を剣先でかすり傷を付けながら這い進む、ミイバと比較をすると米粒のようなユウの蒼い機体。

「飛んで火に入る蒼いモバイルスーツめ!!」

そのGマリオンへと無数のセンサーアイ、殺意の百眼が防衛管制員の声と共に向く。

ギイ!! ギツア……!!

奇怪な音を鳴らす疑似ニュータイプ波発生器の支援を受けたミイバ・ザムの対空砲が、その巨体へ取り付こうとした小癩なモバイルスーツ群を追い払おうと、無数の火線を疾らせる。

「ビーム・バリアーの懐に入ったはずなのに!!」

リ・ガズイのビームキャノン、それを始めとする攻撃隊の火力では、ミイバの巨体表面へコゲを作らせるだけに終わる事に、ケーラがコクピット内で強く歯噛みをした。

「離脱だ、離脱!!」

そのユウの叫びを聞く前に、すでに他の攻撃隊のメンバーはミイバ

から機体の離脱を行っている。

「中心機体を落とせ!!」

ミイバの司令室へ鎮座をするネオ・ジオンの幼き旗印「ミネバ・ラオ・ザビ」の怒声に、彼女を取り巻く機体管制員の手が忙しなく動く。

シィ!! シャア……!!

「ビームが追いつかない!?!」

その対空砲火に対して、脅威的なスピードを発散させて回避機動を行うGマリオン。その動きを映すミイバのレーダーを見つめる管制員が我が目を疑う。

「ビームは光速まがいであろうな!?!」

「当たり前です!!」

「ならば、何故に外す!?!」

「外れているではありません!!」

司令塔、他の者の席よりも高い場所に居座るミネバは、真正面で火器管制隊のリーダーを務めているオグスのその声に苛立ちを隠さない。

「追いつかないのです!!」

「私の歳だとソータイセイが解らずと思ひ、デタラメを!!」

トウ!!

「細足で蹴らんといて下さいよ、ミネバ様!!」

「嫌なら、蒼いカトンボを撃ち落とせ!!」

「蹴っちゃうないで下さい!!」

後頭部を襲うミネバの生脚の感覚を忌々しく感じながらも、オグスは冷静に蒼い機体の動きを見定めようとした。

「当然、私達の目の錯覚だよな……」

光るオグスの目、それが急速離脱を行うGマリオンの機動の本質を見切ろうと、瞼が細く下がる。

ジィ!!

「良い腕のスナイパーめ!!」

三放射されたレーザービームの内、一発がGマリオンの右脚を捉える。その低出力レーザーからの軽い衝撃により、ユウの手が一瞬ア―

ムレイカー操縦システムから離れてしまう。

「しまった!!」

「化け物でも何でもないな、蒼いの!!」

先程のレーザーからの照準補正を頼りに、ミイバ・ザムから大口徑のビームをGマリオンへ向けるオグス。

フオ!!

ミイバからの輝かなビーム照射が宙を破る。その狙いは極めて正確。

「グレイスのフェザーバリア、耐えられるか!？」

どちらにしろ、Gマリオンへ飛びかかる高出力ビームの直撃は、損傷と消耗を覚悟しなくてはならない。

「南無、三!!」

ユウ機のグレイス・コンバーターの出力上昇と共に、その両肩のように紅い光の羽がサイコ・フィールド、ミノスフキーバリアを形成しはじめた。

ジアウウ!!

「攪乱幕グレネード!？」

どこからか跳ねてきた、簡易的な対ビーム兵器が高出力ビームを拡散させてくれる。

「よお、ヒール・レスラーさんよ……!!」

「俺を悪と呼ぶのは何者!？」

威力が分散されたビームによるGマリオンへの損害は軽微である事に安堵しながら、ユウは助けてくれた男の姿を探がそうと視線を宙へ這わせた。

「ヤザン、ヤザン・ゲープルか!？」

「良い趣味の剣を持ってんじやねえかい、ユウさんよ!？」

ハンブラビタイプよりも一回りは大きいヤザン・ゲープル機、突撃用可変モビルスーツ「ラク・シャサ」が、ユウのGマリオンの隣へとつく。

「俺も名刀とやらが欲しいぜ……」

「もう一本あるにはあるが、さ」

「なら、今の手助けの駄賃としてよこしなよ、なあ？」

「これだけで、貴重な得物をやるものかよ、ヤザン」

「ケチくさい野郎だ……」

回避機動をとっている内に、ケーラ機達とははぐれてしまったようだ。ミイバ・ザムとGマリオンの距離もユウの想像以上に、相当離れすぎている、が。

「涙ない狙いが定まされた、ヤザン!？」

「俺達がターゲットかよ、ユウ!？」

ミイバの巨大なギョロ目、メインの主砲が自分達を向いたのを見て、慌てて二人はモビルスーツの機動を再開し始めた。

「その剣、ビグ・ザムもどきの硬い甲羅へヒビを入れられたな!!」

「かすっただけではあるがな!!」

「ヨオーシ!!」

そのヤザンの感嘆声に、ユウの頭へもヤザンが考えているであろう戦い方が組み立てられる。

「突破口、頼めるか!？」

「まかせなつて、ヒール!!」

「ウロボレス、サブのヒートサーベルを貸してやる!!」

「結局、貸してくれるかい!!」

「使い方、説明が必要か!？」

「蛇腹のような海へビも出来る、オロチな相手の血をすするヒート剣であるな!？」

「何で一瞬でそこまでが解る!？」

「解らんかったら、今まで生きていねえな!!」

見ると、ヤザンと同型のモビルスーツ達が強襲形態へ可変をしたまま、二人の機体の周囲を旋回し始めた。

「ダンケル達も集まった事だしよ!!」

「行くか、ヤザン!!」

「オウ!!」

ヤザンの機体も可変をし、ユウから借り受けたヒート・サーベルをぶら下げながら、徐々にスピードを上げるGマリオンへと追従をす

る。

「来たぞ、アドル!!」

「了解!!」

アドルと呼ばれたラーク・シャサだけが、兵装が他の機体と大幅に異なる。ゴテゴテと取り付けた幾多ものポッドを保持したままに機体の機動性を維持すべく、巨大な複数の増設ブースターがその機体へと貼り付く。

「対ファンネル・ミサイル発射!!」

ミイバからの爪型ファンネル、展開機からのファンネル飽和に対し、おびたしい数のアンチ・ミサイル、それらがユウとヤザンの機体の後方のアドル機から蜘蛛の巣のごときを放たれる。

「弾幕が薄い!!」

最後のビーム攪乱幕グレネードを放ち、ファンネルからのビームを遮断したヤザンが最後尾のアドル機へ怒鳴り声を上げた。

「何をやっているか、アドル!?!」

「疑似ニュータイプ波のコントロール処理が追いつきません!!」

特殊兵装機と換装されているラーク・シャサのコクピット内で、熱暴走を起こし始めた疑似波発生器の処理をしているアドルから悲鳴混じりの声が上がる。

「ラムサス!!」

「了解!!」

ヤザンの声にラムサスのラーク・シャサが機体の調整を行いながらアドル機へと近づく。

「ダンケルも頼む!!」

アドルのラーク・シャサの背中からミサイル・ポッドをぶん取りながら、ラムサスは同僚へと声をかけた。

「向こうのファンネルとこちらのミサイルの中に光るやつこさんの光点!!」

ギャ……!!

高機動形態のラーク・シャサ、ヤザンの機体中央から大口径ビームがネオ・ジオン機へ向かって空を切る。

「アルフめ、恨むぞ!!」

そのヤザンからのビームが正確に敵機へと伸びるのを見つめながら、この自機をアーガマへと送る際、どうも手持ち火器を機体へ付け忘れてらしい蒼い腐れ縁の技師の名を愚痴混じりに叫ぶユウ。

「ユウ、お前もこの距離から奴等を狙えない訳ではないだろう!？」

「この距離どころか!!」

ファンネル群と共に放たれる、重モビルスーツからの砲撃を身軽にかわしながら、ユウはヤザンへ怒鳴り返す。

「もう半分は接近をしないと、まともな威力が出る武器がないんだよ!!」

「昔のグフへ姿を似せたジムだからと、融通の無さまで同じにするこたあないだろうによ!!」

そのヤザンの舌打ちと同時に、アドル達が撃ち洩らしたファンネルが二人の機体へ躍りかかる。

「ちい!!」

ヤザン機の手ひらから飛び出したヒート系の格闘武器らしき刃が、あたかも蛇のように波を打ちながらそのファンネルを切り落とす。

「少し無茶をやんよ、ユウさんよ!!」

「何だ!？」

飛来する鉄片を胸部のビーム砲で打ち砕いたユウの返事を待たずに、ヤザンの機体ブースターからの光が増す。

「隊長、無茶です!!」

「だったら、少しでもファンネルを押しえるんだな、アドル!!」

ファンネル群を驚異的な機体制御でかい潜りながら、ミイバ・ザムの直掩モビルスーツ隊へと怪鳥のようなシルエットの自機を飛び込ませるヤザン。

「雑魚が!!」

急速接近をしたヤザンのラーク・シャサ。高機動の形態でも使用可能な前方マニピレーターへ握られた「ウロボレス」の紅い光がゲー・マルクを一刀に切り捨てる。

「切った分だけ出力が増すと出るか!!」

正式規格外の兵装を使用したときに起動をする調整型データコンソール、融通が良く効くその器機でも、なかなか借り物の火焰剣のデータは反映は不安定だ。

「弱肉強食のポリシィとやらがあるらしい俺に相応しい剣だな!!」

ゴオ!!

グリップス戦争時に少数が生産をされたサイコ・ガンダムの量産タイプ、それらがネオ・ジオンへ流された後に独自の進化を遂げたらしき重モビルスーツから大口径のビーム砲がヤザンの機体へ迸る。

「オウオウ、狙ってくれる!!」

そのビーム砲をかわしたヤザン機の背後へ回り込む別の敵機。

「させるか!!」

そのヤザンを狙う重武装モビルスーツを、無手となっている左手の指先から放たれるバルカンで動きを押さえつつ、ユウは自前の大型ヒートサーベルで一気に薙ぎ払う。

ジャ……!!

敵機を両断したユウ機の背後へと、今度は白兵戦用と思わしき敵のモビルスーツが迫る。

「甘っ!!」

頭へと疾った感覚を頼りにそのネオ・ジオンの機体から突き出される槍状の接近武器が微動回避をしたユウ機の脇をすり抜けた。

フオ、ウウ!!

煌めく羽根を舞わせながら半回転をしたGマリオン、紅く光を燃え立たせたエグザムの剣が、その槍もろとも敵機を新たに再度両断をする。

「スーパーエースか、コイツらは!!」

奮迅をする二人に対して、僅かにネオ・ジオンのミイバ・ザム直掩隊へ動揺が走った。彼らからの火線が減少をした隙に、ヤザン隊のメンバーがユウ達の周りへとたどり着いた。

バァ!!

「隊長達にばかり、格好をつけさせるなんてよ!!」

モビルスーツ形態へと可変をしたラムサス機と敵の重モビルスーツが切り結ぶ。

「防衛に穴が空いたか!？」

ラムサス達の強襲にネオ・ジオン機の注意が向いたその時、ユウの視線には障害が何もないミイバ・ザム、豪華なエンブレヴィング処置を施された殻が強く映りこむ。

「一か九か!!」

「一か八かだよ、ユウ!!」

「いちいち突っ込むな、ヤザン!!」

「突っ込んで、はいねえ!!」

ザア……!!

「切つてばかりだよ、ヒール・レスラー」

「やるな、さすがに野獣ヤザン・ゲーブル」

「あの反則プロレスをしてのけた手前に、野獣なんて言われたかねえな……」

同時に二人の背中へ襲いかかってきたファンネルを、これまた同時に、見ずもしないで双方の火焰剣で切り落とすといった芸当を見せるユウとヤザンを、周囲の敵味方は感心と畏怖が混じったような視線を投げつける。

「では、やはり……」

ユウ機の双対の推進器からの蒼い粒子、その手に持つヒート・サーベルからの紅い粒子、それらがそれぞれ静かに、強く輝き増す。

「先にミイバへ斬り込ませてもらうよ、ヤザン!!」

「どうせ、この突撃だけではやつこさんは落とせねえよ、ユウ!!」

「だろうな!!」

それでも、どうにかミイバ・ザムの弱点なり何なりでも見つけておきたいのがユウとヤザンの心情だ。

「マリオン!!」

疑似波と連結をされたマリオン・システムの精度は凄まじい物がある。ファンネルどころかビームや対空砲の弾に微かに含まれている「殺気」の帯すらも映し出されている。

「エグザム!!」

両肩から噴き出る、蒼に紅へと閃が転換し続ける羽根屑の幕、それに加えて機体各部の内蔵火器を駆使しミイバの防衛システムを掻い潜りながら、その巨体へユウはGマリオンを押し付けた。

ズオ!!

魔剣エグザムの紅い焰が、ミイバ・ザムの殻を溶かしながら深くそのモビル・シツプの殻の内側へと滑り込む。

「エグ……」

グウ……!!

コンマ、Gマリオンの手の動きが止まった。

「ザアム!!」

ギユアア!!

再度の叫びと同じに、大きく瞬発をしたGマリオン、その手の制裁剣エグザムがミイバの装甲を大きく切り上げる。

「ミイバにヒビが入ったぞ!!」

「アカ切れだけである!!」

悲鳴を上げたネオ・ジオンの兵をミネバは強く叱咤をしながらも、各部署からの報告を聞き逃さない。

ガッ!! ザアア……!!

そのままユウはミイバの傷口を広げるように逆手へ持ち変えた剣を装甲板へと食い込ませたまま、自機の出力を増大させてその巨体の上を跳ね廻る。

「視線で脅せ、オグス!!」

「アイツは、ユウ・カジマ!?!」

「聞いているのか、主は!?!」

ポフオ!!

「幼女の御み足が悪役レスラーを倒せと轟き叫んだ!!」

怒りとも恍惚とも受け取れない表情を浮かべながら、オグスはミイバ・ザム主砲のコントロール・バーへと手を右手を差し出す。

「空いた左手は何をしている!?!」

「それでもユウ・カジマを刺しますよ、ミネバ様!!」

シユフオ……!!

ミイバ・ザム、その最大火器である大主砲の起動と共に、Gマリオンへ幾多もの照準調整用のスポットレーザー光が乱れ飛ぶ。

「偉大なる幼女の為に落ちろ、ユウ・カジマ!!」

「オグス、奴が火器コントロールの一手を!!」

その壮年の男の声と共に、昔に聞いた、一度だけ会ったことがある小娘の怒鳴り声が確かにユウの耳を打つ。

「俺のこの位置から、デカブツのメインコントロールの場所が近い……!?!」

いつまでもここでグズグズしているのは極めて危険であると思いつながらも、ユウは照準光の帯びに極力捕まらないように自機を旋回させながら、マリオンの「目」をじつとミイバへと向け続ける。

「何を中途半端な停止をしておるか、ヒールレスラー!!」

ズオ!!

ユウへそう怒鳴りながら、ヤザン機もミイバへ取り付き、その手に持つウロボレスの焰をその機体の体躯へと突き立てた。モビル・シツプの殻が再び溶解を始めた。

シイ、シャ……

幾筋ものスポット光を束ねた、一際大きな照準補正レーザーがユウ機の胴体を焼く。

「う、うわっ!?!」

その光から機体を守るかのようにエグザムを握った右腕を胴体部へ押しつけながら、ユウはその逆腕をまるでミイバ・ザムへボールを投げつけるかのように差し出す。

タァー!! タツタツア……!!

「そんなバルカン、無駄撃ちは止めな、ユウ!!」

その照準光を受けた途端、背筋が総毛立つほど強く感じたプレッシャーに、ユウは反射的にフィンガーバルカンをミイバへとバラバラと撃ち撒いてしまう。

「豆鉄砲が通じる相手じゃねえだろによ!?!」

ユウへ対してそう怒鳴りながら、ミイバからのスポットレーザー群

が今度は自分の機体へ集中をした事にヤザンは軽く舌を打ち、借り受けた細身の火焰剣を巨大機から引き抜いて、一気に自機をそのモビル・シップから離脱をさせる。

「少し脆いか、この名刀とやらはよ……!!」

そのままミイバ・ザムを切り続けていると、刀身が折れるように感じた苛立ちが少しユウへの言葉にヤザンは混ぜてしまっているのかもしれない。

「少し勘が鈍っているか、俺は!?!」

その言葉だけは口にしたくなかったユウ。パイロット寿命や持病からくる死神を呼び寄せると無意識に感じていたからだ。

「意気込み過ぎなんだよ、恐らくな」

「だから、何か踏み込み方が浅い、KO勝ちを狙うタイミングが解らなくなっているのか……!!」

スポットレーザーの光が一瞬途切れた隙に、ユウはコクピット内で小刻みに呼吸を繰り返し、自分の心を落ち着かせようとする。

「熱くなるのが、まるで小僧のやり方なんだ、ヒールレスラーさんよ……」

その言葉がどこか自分へも当てはまると思いつつも、ヤザンは自分が言った言葉が間違っているとは思わない。

「身体がなまっている野郎、ユウの奴には負けたくない、その程度の考えが戦い方へ影響するとしたら、俺も甘めえ……」

だが、ユウがヤザンへと貸した「ウロボレス」も確かにミイバ・ザムの装甲へ損傷は与えているようには見える。

シイ、シヤア……!!

ミイバの紅い視線が再度、ユウの目の前を横切った。

「しかにし、そのピーシヤカと動く目玉がな!!」

その主砲から放たれる、秘められながらも強烈なプレッシャーを無視して襲撃を続けられるほど、ユウの肝は太くない。

「その目が怖いんだよ、デカブツ!!」

ミイバ・ザムの巨体、ジオン系モビルスーツであるドムタイプを彷彿とさせるターレットラインを自在に動き回る大主砲、そこから放た

れる赤いレーザーサイト、ミイバの視線をユウはとにかく避けようと機体を動かす。

「ソイツは所詮は脅しだと解っているだろう!？」

「しかし、伊達で動く目玉ではないはずだ、ヤザン!!」

その主砲の動きに気を取られた隙に他の火器でGマリオンを落とす。そのやり口はユウのベテランとしての経験から容易に推測自体は出来る。

「シャ……!!」

「抜かっているのか、ヤザン!？」

ミイバ・ザムへと取りついたヤザン機を追ってきたネオ・ジオンの機体からインコムと思わしき火線がGマリオンの脇をすり抜けてきた。

「変な奴等を引き連れてくるな、バカ!!」

「そうかい!？」

どこか余裕がある、ヤザンのラーク・シャサを狙って放たれる幾筋もの大火力ビーム砲の光。

「ドフォ!!」

「なるほど、やり口は良い!!」

ラーク・シャサに寸前でかわされたビーム群が流れ弾としてミイバ・ザムの装甲を叩いたのを見て、ヤザンの戦術自体には感心をしてみせるユウ。

「やり口は良いんだが……」

「解っているさ、ヤレヤレだ」

ネオ・ジオンの連中を苛立たせるには良い手段であるが、やはりそのミイバへの同士討ちを狙わせた大口徑ビームもその巨体には大きな有効打は与えられていない。

「頑丈に過ぎる……!!」

好機であるとして強襲をしかけた他の部隊の攻撃でもミイバの装甲は吹き飛ばせない。リ・ガズィからビームキャノンを放ったパイロットから忌々しげな声がユウの耳へ響く。

「ネオ・ジオンの奴等が引き始めました!!」

「どうせモビルスーツ連中だけであろう、ダンケル!?」

「そうですよ!!」

その事が意味するのは、ミイバが健在な限り一つしかない。

「駄目だ、戦況も俺のGマリオンも……」

ユウがその身体を強ばらせながら座るコクピット内のコンソールモニターへ、何が原因かは不明だが機体不調を知らせる文字列が跳ね昇る。

「一旦引くぞ、ヤザン達」

ミイバ・ザムがその巨体に全く似つかわない機敏さで、その機体が生やす二本の脚部、その「脚」を連邦部隊が一番に密集をしている宙域へ放るように向けた。

「仕方がねえな……」

ユウ達から見えてちょうど裏返ったように見えるミイバ、その脚部の爪が複数飛ばされたのを確認したユウは、全味方の部隊へ警告信号を送りつつグレイスの光を放ち始める。

「一発でもメガ・カノンを撃ち込めれば……!!」

「早く掴まって!!」

愚痴るキツチマンを急かしたエウーゴの女性パイロットが乗る高機動機に、しぶしぶと攻撃隊の実動隊長である彼の乗るFAZZZの手が伸ばされた。

「FAZZZのカノンは確かに有効ではあるが、な」

「機体の動きが遅すぎて、たどり着く前に落とされちまう、隊長……」

「今が最大のチャンスであったのかもな、爺さま」

老兵が放ったFAZZZのカノンは、確かにミイバ・ザムの装甲を貫いた。その事がかえって彼らの部隊を惑わせている。

「ネオ・ジオンの増援が到着してしまったか」

老いた兵が所属をしている部隊の指揮官が、戦列を組み始めたネオ・ジオンのモビルスーツ隊を見やりながらも、自分の部隊の損害状況を確かめ始めた。

「真ん中のどでかいビーム砲、ソイツにやはり注意を奪われる……」

「マイクロ・ソーラレイと言うらしい、大佐」

「悪魔の光の小型版か……」

ユウの隣へと近付いてきたナイジェルの新鋭機リ・ガズィ。彼の機体の背中、ブロック分離式となっている背部の推進器付きウエポン・システムからは時おり大きな火花が弾ける。

「焦んなよ、ヒールレスラー……」

「解ってはいるがな、ヤザン」

「最悪の状況じゃあねえんだ」

連邦派の混成軍による、ミイバ攻撃隊の増援第二陣が到着をした事は、確かに喜ばしい事だ。

「しかし、ネオ・ジオンの連中の方へも……」

そのアドルの言葉を聞くまでもなく、皆が今の状況を理解している。

「戦力の見極めが出来ない……」

「俺もだ、ユウ」

「お前のその台詞だけは聞きたくなかったな、ヤザン」

「気休めでも欲しかったか？」

「フン……」

味方の増援も敵の増援も、皆もろともなりふりを構わない「新旧のかき集め」なのを見て、ユウはコクピット内でその唇を軽く噛んだ。

第60話 ミネバの殻まで何マイル？

「デカブツのコクピットさあ……」

アイドリング状態のラーク・シャサのコクピット内でヘルメットを脱ぎ、手鏡を手に自分の髪へ整髪クリームを塗り付けているヤザン。「いや、メイン・コントロールルームの位置が想像できたっては本当か？」

「おそらくは、な」

先程から飽きずにミイバ・ザムを中核とした部隊へ視線を向けているユウが、ラーク・シャサへちらりと視線を投げつけながら小声でそう呟く。

「それに加えて」

その言葉と同時に、ユウのGマリオンのその手に持つ裁きの剣「エグザム」が微かに輝いたように見えた。

「あのミイバ・ザム、どうもヒート系の接近武器が有効な様子だ」

「それは俺も知っている」

そう言いながら、ヤザンは自機の空いた左手、鉤爪状のマニキュピレーター中央から伸縮式の、Gマリオンの火焰剣の片割れである「ウロボレス」によく似たヒート式の刃をゆっくりと伸ばす。

「ラーク・シャサ、こいつのヒート・ブレイドでもあんたがこの戦場へ飛び込んでくる前に、アイツの軀へヒビを入れられた」

「対ビームコーティングを幾層にも重ねた外殻、それをヒート系の武器であれば貫けるか」

「連邦系のモビルスーツは好きじゃないからよ」

そう口から笑い声をこぼしつつ、ヤザンはヘルメットを再度装着し直しながら、ブレードをゆっくりと機体の腕へと格納をさせる。

「ヒートサーベルだか何だかはな」

「俺達の機体が珍しいか」

ユウも軽く笑いながらヤザンへ向けて相槌を打ちつつも、増援隊から借り受けたビームライフルのあまりの旧式ぶりにその瞳までは彼

の笑いの色が届かない。

「しかし」

ヒュウ……

ヤザン機がGマリオンから借り受けたウロボレスの刀鞭が軽く宙へしなる。

「どんなに相手の殻を打ち抜けても、所詮は単なる一機のモビルスーツが持つ剣」

この手の武器に慣れているのであろう、彼ヤザン・ゲイブルがウロボレスの特性を駆使する腕前はおそらく自分を遥かに上回っている。ユウにはそう見てとれた。

「デカブツにしてみればマチ針同然だ」

「貫いた後のその先がない、か？」

「ヒビ割れにビーム砲とかを撃ち込めば、話は別だが」

「出来るんだ」

「ホウ？」

部下のダンケルが仕入れてくれたフェダーイン・ライフルを自分の機体左手へ持たせながら、ヤザンはそのダンケル機へと発熱機能をオフトさせている、色が地金のままのウロボレスを軽く巻きつける。

「反撃の隙を与えずに、追撃をすることがかい？」

「ああ」

ヴォ……

ユウはそう呟くと同時に、火焰剣エグザムの刀の「ツバ」へと追加の設置をされたミノスフキー粒子変換器を起動させ、僅かにその出力を上げてみせた。

「なるほど」

大型のヒート・サーベルへ秘められた、もう一つの機能を目にしたヤザンはそう頷きながらも、険しい顔のまま遠目に見えるミイバ・ザムの巨体へ向けてその視線を動かす。

「だが、それでもさっきの質問を繰り返すぜ、ユウ」

「狙い場所、だろ？」

「バリアー装置の場所は分散をされている」

さすがにネオ・ジオンも旧ビグ・ザムの二の鉄を踏むつもりはないらしい。ユウも一年戦争時のミイバの原型機が、ビームバリアー発生器を破壊された事が原因で、そのままズルズルと敗北へとつながってしまったという噂話は聞いた事がある。

「コクピット、メイン管制室の場所が解ったといったじゃないか、ヤザン」

「逆効果じゃねえかい、大将だけを討ち取るのは？」

不満そうにそう呟きながら、ヤザンはチラリとコクピット内のタイマーへとその目を動かす。

「絶対に、あのモビル・シップとやらはメインの司令塔を破壊しただけでは行動に支障は出ないな、ユウ」

「シップ、艦だからな」

少し頭を傾げながら、ユウはヤザンへ言葉を返しながら自機周囲、ヤザン隊のモビルスーツ達の姿を見つめる。

「敵には回したくないな、コイツらは……」

彼から見ても、ヤザンの部下達は相当な練度であると解る。一糸乱れぬと同時に緩やかな、流水の様なモビルスーツの動かし方なのだ。

(フィリップ達、か)

そのヤザン隊の姿を見ると、どうしても古巣のモルモット隊の事を思い出してしまう自分、ユウはその甘い感傷に捕らわれる自分に少し嫌気が差してしまう。

「コントロール・ブロックへの同時攻撃を許してくれるほど、相手は思い通りに動いてはくれねえ……」

「否定的な意見ばかりだな、ヤザン」

「勝ち方を考えているだけだよ、俺はさ」

確かに、ミイバの至近まで近づく為にダンケルの機体に自機を引っ張ってもらい、機体と自己の消耗を防ごうと考えたヤザンは色々戦法をその頭の中で練っているように見える。

「絶対に上手くいくという自信はないが、それでも俺はメインの管制室を狙うさ」

「逆上をしてくれた敵の相手は疲れるんだかねえ……」

「大きな勝算はあるんだ」

そう力強く断言をしてみせるユウに、ヤザンはやや鼻白んでしまったようだ。彼が少し不愉快げに舌を打つ音が通信機越しにユウの耳へと入った。

「言ってみな、ユウ」

「非殺の剣さ」

「アン？」

「サブ・フライト・システムを持ってきてくれたか、有り難い」

再度の総攻撃はミイバ・ザムが再び起動を始めた数分後、そう各部隊へ通信を終えたキツチマンは、合流をした後詰め支援隊の顔見知り達へ軽く挨拶をしつつ、コーヒーチューブをその口へ運ぶ。

「と、いうよりも」

「ああ、ああ……」

支援隊の中から、どうにかまともな戦力になりそうなモビルスーツを選び抜きながら、どこか投げやりにモニターへと映る女性へ手を振ってみせるキツチマン。

「軍は昔のアッシマーの先行型、それとバウンド・ドック等の扱いづらい可変機を運搬機へと仕立てたんだな、オードリー」

「これもまた、生産ラインをモビルスーツやアーマーに向けすぎた弊害よ」

「そうなんだよなあ、本当に」

運搬機、サブ・フライト・システムは可変機が今後のメインになれば、多くは必要ない。その考えはティターンズとエウーゴの抗争時、その双方の軍勢の者達に確かにあった。

「しかし、やはりモビルスーツ、歩兵だけで戦闘は出来ないんだ」

同じ考えで生産計画を立ててしまった各連邦派軍の上層部は、今ま

さにその考えの甘さを悔やんでいるらしいとはキツチマンも聞いている。

「まあ、俺達も運搬機を使い捨てのように扱っていた面があったがねえ」

「ハイ・エンド機なんですよ、みんな」

キツチマンの隣に寄ってきた、彼のFAZZとは若干仕様が異なる重装型から聞こえる若い青年の声。その声と共に青年の機体の右手がキツチマンのFAZZ、その腕部へ固定されているメガ・カノン砲を軽く撫でた。

「どつちがだ、リョウ?」

どこかのモル何とかと言う実験部隊へ配備をされたという、モバイルスーツ単体としては最大の火力を誇るZZ（ダブルゼータ）

その量産機であるリョウ機の左腕へもFAZZと同じメガ・カノンが装着されている。

「可変機か、大火力機がが?」

「両方ですよ、キツチマン中佐」

その両方を備えたとされるZZは、あまりの整備性の悪さと高コストの為に、正式採用をエウーゴに断られたという話だ。

「ミイバ・ザムが動けない内に、どうして攻撃をかけないんです?」

「実の所、アイツのインターバルの時間は全く弱点じゃない」

いきなり話題を変えたリョウ青年にキツチマンは驚かない。先程から彼がしきりにミイバの巨体を眺めているのが彼には分かっている。

「あの胴体が動かず横たわっている、だけ」

「対空防衛システムは休まないか」

「少しは火線に穴は開くがね」

アツシマーの試作機へそのFAZZの巨体を乗せながら、キツチマンは一応の部下へ当たる青年へ向けて軽くため息をつく。

グウ……

「無理かしら、中佐?」

「しかたねえだろ、オードリーよ」

強引に運搬機へと改修されたモビルアーマーでは、やはりFAZZを安定して支えるのは難しいように見える。

「そして、何十分かの休みを終えた後に、ミイバを落とすきれずに周りであたふたしている連中を一網打尽に出来る」

機体バランスを調整しながら、話の続きを終えたキッチマンへ、リョウが微かに苛立ちを含めた声を向けた。

「元々の機体が、一騎当千を目指してやがったバケモノみたいですか
らな、中佐殿」

「ジオン驚異のメカニズム、だよ」

どこかぼんやりとした会話をしつつ、ミイバ・ザムを見つめているキッチマン達ではあるが、刻々と伝えられる各部隊からの報告へ対してはちゃんと聞き耳を立てている。

「何か、さ」

どうにか他の部隊も戦闘態勢を整えられたのに安堵を感じながら、キッチマンがポツリと呟いた。

「なんです、キッチマン中佐殿？」

「ヤザンの奴の部隊に加わった、蒼いジムへ乗っている奴に良い考えがあるらしい」

「パイロットの意見を取り入れるとは、なかなか器が大きい」

「パイロットはパイロットでも、一応大佐様だよ」

「へえ……」

そう何気なく返事を返しながら、リョウはミイバ攻撃隊の端へと陣取っている、ヤザン小隊を中核とする部隊が展開しているその方向へ軽くその視線を揺らした。

「抜け駆け、行くぞ!!」

「こりゃあ、また!!」

突然、そう叫んだユウへ向けて驚きの視線を向けながらも、ヤザンのその口の端には笑みが浮かぶ。

「俺と気があうんじゃないか?、ユウさんよ!」

「お前も考えていたか!」

「ヨーイドンを律儀に守る奴がドンパチを出来るかよ!!」

どこか嬉しげな声色を混ぜながら、部下達へ指示を出しているヤザンの癖のある声を耳へ入れつつ、ユウは支援へ駆けつけた部隊の隊長機へ通信を入れた。

「こちらも敵も、ミイバのインターバルを終えた時がスタートだと思いい込んでいる!!」

ユウの頼みを増援隊の隊長は聞き入れてくれたようだ。Gマリオンへ向けて一機の可変モビルアーマーが進み出る。

「ゆえに!!」

合流をした後づめ達に含まれていた大型可変機のパイロットへ自分を運んでくれるように頼みながら、ユウの視線がミイバ・ザムのその偉容を強く睨み付けた。

「抜け駆け、味方へも無断不届きな迷惑行為!!」

「二、三分のフライング、良い運が俺達へ来るかねえ!」

「さてな、ヤザン!!」

ドウツ!!

急激に加速を始める運搬タイプ改良型のバウンド・ドックの上方へしがみついたGマリオン。そのモビルスーツ用プラットフォームへ備え付けられた大口径ビーム砲の取っ手をGマリオンの左手に握らせながら、ユウはヤザン達の方を見ずに勢いよく叫んだ。

「この俺ユウ・カジマ大佐様の命令、あとでそう言い訳も出来る!!」

「身分を振りかざす、俺の大嫌いな上官筋だよ、アンタは!!」

グア……!!

突撃を開始したユウ達の進路を防ぐようにネオ・ジオンのモビルスーツ達が展開を始める。

「雑魚に混じって!!」

一年戦争時のザクに無理矢理ジェネレーター付きのビーム砲を括

り付けた劣悪な急造機の姿もあるが。

「嫌な奴がいやがるぜ!!」

最強のサイコミュ機と連邦派の兵に恐れられている「クイン・マンサ」の姿も見受けられるのに、ヤザンはコクピット内で静かに唸り声を上げる。

「例によってファンネルが来る!!」

ユウにとつては懐かしい、まだモルモット隊へ加わったばかりで心の距離があつたニムバス、彼が乗っていたギャプランの試作機「ランブライト」へと股がつたモビルスーツからの声がユウ達へ響く。

「流石に俺の考えがスンナリとは通る訳ではないか!!」

「だとしてもさ、中年!!」

故障を引き起こした簡易可変システムの基部を放棄したナイジェルのリ・ガズイ、彼もまた旧式モビルアーマーを駆りながらユウ達の突撃へと合流する。

「フェイントまがいの奇策を、フェイントでなしの全力へと切り換えれば、主導権を我々が握れる!!」

「全力を振り絞る一撃必殺のフェイント、矛盾の極みだな!!」

「だからこそ、相手へクエスチョンを与えられるよ、大佐!!」

ガオン!!

「サイズが合わない上に砲の振動も酷いな、こいつは!!」

バウンド・ドックへ腹這いになりつつ、Gマリオンの左手が操作をする大火力ビーム砲はネオ・ジオンの機体群に余裕混じりでかわされ、お返しとばかりに敵陣から火線が放たれた。

「機敏な良い動きだな、ネオ・ジオンの後づめ!!」

旧式の機体から放たれる実弾火器そのものの威力はたかが知れているが、マシンガンがバウンド・ドックの装甲を何度も叩く音、それが敵増援のパイロットたちの熟練を現している。

「だが、その素早い動きこそが慌ての証拠!!」

「傲慢な勝手もやってみるもんだな、中年!!」

「ナイジェル君もジオンの奴等も、中年を舐めるなど言いたい所だが!!」

高速で敵陣へ突撃をするユウ機を乗せた運搬機バウンド・ドック。無論ユウはそのまま旗艦ミイバ・ザムへ一直線に突き進みたい所であるが。

「シヤアの奴のノイエ・ローテ、そのの量産機とはよく言った物かもな……!!」

ミイバとの間にクイン・マンサの巨体が飛び込んだ事に、ユウはコクピット内でその下唇を強く噛んだ。

ギイイーイ!!

ヤザン隊のラーク・シヤサ達からのビーム砲の束がクイン・マンサへと疾る。ジオン最新にして最大のサイコミュ搭載型機のIフィールド・バリアーがビームの攻撃により強く輝く。

「ユウの奴から、あの緑色のデカブツ、サイコミュマシンの注意を引き付けろ!!」

「了解!!」

ダンケルの機体へ引きずられながらも、ヤザンは的確にクイン・マンサ、そしてその機体付近へいるモビルスーツへ精密射撃を行う。

「クイン・マンサ、止めてくれるか、ヤザン!」

「ミイバを潰せる秘策があると言っていたよな、お前さんは!!」

ヤザン達に加えて、ナイジェル機を含めた他のモビルスーツ達もクイン・マンサへ砲火を与えている。さすがにその巨大機のIフィールドが「軋み」始めた。

「信じてやるよ、ヒールレスラー!!」

「すまない、ヤザン達!!」

そのままクイン・マンサの脇をすり抜けるようにユウ達の機体が宙域を切り開く。幾多のネオ・ジオン機が放つ、身を伏したGマリオンの真上を突き進むミサイル群、それらの推進が放つ光がユウ機の紅い両肩を輝かせる。

「ちよい右、バウンド!!」

「了解!!」

Gマリオンから見て上方から襲来をするネオ・ジオンの部隊を下方からのロンド・ベル隊が迎え撃ち、交戦を始めた宙域からユウ達を先

頭にしたミイバへの突撃隊は進路をそらす。

「上手くいった乱戦状態の内に、どうにかミイバへ取り付きたい……!!」

なだれ込むような混戦となった宙域へは、さすがにミイバ・ザムからの火線は放たれない。ユウにしてみれば、自分がしでかした独断専行という賭けと迷惑の落とし前をつけたいのだ。

「見えた、ミイバ・ザム!!」

「上から来るぞ!!」

運搬機バウンド・ドックのパイロットからの警告に、ユウはGマリオンの片手でその取っ手を握る旧式の大形火器「バストライナー砲」に再度熱源を入れる。

「気を付ける!!」

「おう!!」

グアフ!!

二機はそのまま上昇をしかけながら、一年戦争時の連邦軍では最大の威力であるとされていたビーム砲、それを再度前方のネオ・ジオン機へと放つ。その大ビーム砲が光を放つ時の共振にGマリオンもバウンド・ドックも強く震えた。

「どいつもこいつも無理をする!!」

「今の戦場では当たり前ですよ、大佐殿!!」

旧ジオンのモビルアーマー「ビグロ」の両鉤爪が気密処理を施された砲撃用の陸戦重モビルスーツを抱え、それを頭上へ掲げて戦力とするという無茶をやってくれるネオ・ジオンの機体がユウ達とすれ違

う。

ゴウ!!

「くそ!!」

その敵機へと気を取られた隙に、Gマリオンがその手を伸ばしているバストライナー砲が敵の新鋭によって狙撃をされた。

「旧式ビーム、その二!!」

火花を上げ始めたバストライナーをそのまま使用するの危険と判断したユウは、ビーム砲を掴む左手を後腰へ差したライフルへと伸

ばす。

ボフォ!!

「ふっざけんな、ビーム!!」

瞬時の判断でビームライフルの出力をカットさせなければ、Gマリオンの左手が危ない所であったであろう。

「何がニュータイプ専用機のビームライフルだ!!」

一発もビームを放てずに暴発を起こした旧式のライフルをユウは忌々しげに睨みながら、その中古品を思いきり宙へ投げ捨てた。

「所詮は俺と同じガタガタ品!!」

「俺がそのライフルの持ち主のモバイルスーツと戦った時は凄い物だったらしいんですけどね!!」

「そんな事言ってもね、バウンドのあんた!!」

「本当ですよ、大佐!!」

「いくら昔が凄くても、今ではこんな!!」

クウ……

「言ってしまったよ、俺は!!」

自分の衰えを認める言葉をつい出してしまったユウの視界へ、死神の黒衣が一瞬舞う。どうにか呼吸を整えてユウは目前の赤いモヤを振り払う。

チー!! チャツチュ……!!

ザク・タイプの新型と思わしき機体群からビームの連射がユウ達とその後続機体を襲う。

「くそ!!」

短波ビームの連打が、バウンド・ドックの装甲をまるで工具のドリイバーのように強くえぐり取る。

「大丈夫か、バウンド!?!」

「昔のザクとは訳が違う……!!」

バウンド・ドックの強固な装甲へ風穴が空く。新型ザクがその手に持つ得物は、この運搬機の表面ビームコートを貫く程の性能があるマシンガン・ビームのようだ。

「支援、向かって!!」

「わかっているってよ!!」

女性パイロットが駆る、ゴテゴテと多数のシールド型をした追加ブースターを括り付けた旧式の半サイコミュ機「ネティクス」からの声に、老いたテイターンズ兵が強い語調で怒鳴り返した。

「切った張ったがモビルスーツ戦では無い!!」

老兵の機体を乗せた運搬機「タクテカルウェイバー」からいく筋ものシヨックワイヤー、通称「海へビ」がネオ・ジオン機へとその牙を突き立てる。

「旧式の連邦が、ドーガを舐めるな!!」

海へビの影響を受けながらも、耐電処置を受けているのかネオ・ジオンの機体は戦闘続行が可能なようだ。そのまま高速で飛行を続けるGマリオン達への攻撃を続行し続けた。

「動きがジエダに似ている、このザクは?」

機体へ過大な負荷を掛けている事は見てとれるが、高速形態のバウンド・ドックへ追い付くその新鋭ザクの機動のどこかに、Gマリオンの原型機であるジエダの面影を感じるユウ。

ドウ、ドウウ!!

シールドブースターの勢いに任せたまま、ドーガと言うらしき新型ザクへ体当たりをしかけるネティクスのパイロット。

「接近戦は無茶だ、ネティクスで!!」

ユウも一時期乗っていたネティクス、ゆえに彼はその機体の弱点である機動性の低さを知っている。

「大丈夫です、大佐!!」

「ネティクスだ、十年前の情けないガンダムのマイナーチェンジだ!!」
「その十年前の機体を彼女は熟知しています、安心を!!」

ギィーア……!!

ユウ達へ取りつこうとした高機動型のゲルググ・リファインタイプへ向かって、他のガブスレイとZプラス達がそれらを払いに加勢をした。

「早く、あなた!!」

「了解だよ、楽勝さ!!」

ガオ!!

バウンド・ドックのパイロットは陽気に女性へ返事を返しながら、機体のスピードをさらに加速させる。

「お前達も!!」

「何です、大佐殿!？」

「俺と同じだ!!」

「どういう意味で!!」

怒鳴りながら自らの士気を高めるユウ達への攻撃はますます激しくなる。ミイバへ強硬突撃をしかけているGマリオン達の、この機体達が放つ危険性、そう「オーラ」をネオ・ジオンの兵達が直感で感知をしているのかもしれない。

「ニュータイプが放つ思念は無い、連邦の蒼いのは!!」

「しかし!!」

先程の新型ザク、そのサイコミュ兵器搭載機から、何やら不気味な形のファンネルがユウ達へ放たれる。

「しかし危険な奴等です、隊長!!」

「バギ・ドーガ隊、蒼いジエダのカブトガニ付きを撃ち落とせ!!」

隊列を崩してでもユウ達へ襲いかかるサイコミュ機、それらの機体が制御をする大型ファンネルがバストライナー砲を完全に破壊した。

「十年前の老害!!」

「言ってくれますね、大佐殿!!」

ユウ機からの頭部バルカンはその歪なファンネルの装甲に弾かれ、追撃をしかけたバウンド・ドックの拡散ビームも機敏な運動性で回避をするサイコミュ兵器。

「バツタのファンネルは無視をしろ!!」

「バツタ!？」

「いいから、無視だ!!」

一瞬、Gマリオンの至近まで近づいた新型ファンネル。その虫を模した、悪趣味な形状をした戦闘用サイコミュ端末の姿に不快な気分へさせられながらも、ユウは周囲へその視線を素早く配らせ続けた。

「ちよこまかと動く高機動ファンネルだが、スピードは俺達に追い付

かない!!」

グフアア……!!

ユウの意を受けたパイロットはバウンド・ドックの機体のスピードを最高速度にまで上昇させる。ジエダの最新型の耐Gコクピットといえども、そのパイロットスーツ越しにも感じる、あたかも身体へ膜が張り付くような圧力に必死にユウは顔を前へ見据えて抗する。

ガシユア!!

「くそう!!」

ユウ達の進路を塞ぐキュベレイを股間部の連装キャノンで破壊を
してのけたガブスレイIIが、急速接近をした赤いビグロの発展型に掴
まれ、悲鳴混じりの罵倒の声を上げた。

ジャア!!

そのビグロをクロー状の両手から放たれる拡散メガ粒子砲で打ち
砕くバウンド・ドック。

「助かる!!」

「後は俺に、連邦の騎士ユウ・カジマへ任せろ!!」

ガブスレイIIのパイロットからの簡潔な礼に返事を返しながら、ユ
ウは自身の、蒼と紅を受け継いだ者のプライドをその胸へ奮い立たせ
る。

「進路クリーンか!?!」

「まだいますよ、大佐!!」

しかし、ドーガのサイコミュタイプも振り切り、目の前には旧式と
多少の大型モビルアーマーのみ。

「もう少しだ、頼む!!」

「家で待つ、未来の為に!!」

シィア……!!

二人の機体の疑似ニュータイプ波発生器から涼やかな音が響くと
共に、Gマリオン達を淡い光が包みはじめた。

「もってこれ、拡散!!」

「やってくれ、助散!!」

バウンド・ドックの両手から放たれる拡散ビーム、伏せた姿勢のま

までいるGマリオンの両手から放たれるバルカンによる威圧でどうかミイバへの道を切り開こうとする二機。

「ミイバ!!」

ネオ・ジオンの旗艦への道が目の前へ完全に開かれた。

カタツ……

「全く……!!」

悪夢から目が醒めた、ネオ・ジオンのパイロットであり、貴族主義という概念を社訓に持つ企業にも籍をおいている海賊騎士シーマ。

「最近、多い……」

悪夢から目覚めた時のお決まりの儀式、ベッドのサイドテーブルに乗せてある水差しからコップへと注いだ水で彼女は精神安定剤をその喉へと押し込む。

「毎夜の事、そう最近は本当に多い……」

昔からシーマ・ガラハウは睡眠時間が苦痛だ、出来る事なら寝ずに生きていきたいと思っている。

「あたしを呪い殺す気が、亡霊達よ……」

悪夢、その住人達の亡霊の手は昔から夢の中へ出てきたが、最近の男だか女だか解らない、翼の生えた謎のガキと共にシーマへ見せてくれる、毒霧に包まれた街並みは別のベクトルでシーマの精神を苛む。

「ハロ、ゲンキ!!」

「アタシは元気じゃないよ、丸坊主……」

私室を跳ね回る、戯れに買った玩具「ハロ」の言葉は、別にシーマにとって嫌な気分がする物ではない。軽く彼女の顔に笑みが浮かぶ。

「サソリぎ、シバラクうんガイイ!!」

「そうかい、そうかい……」

ハロの頭を軽く撫でてやったシーマは、そのまま夜着を脱ぎ捨て、狭いシャワールームへとその足を進めた。

「シーマ様」

巡洋艦ムサカスのハンガーデッキへと降りて来たシーマへ向けて、副艦長であるコッセルが敬礼の手をかざす。

「ああ、コッセル」

もはや何年もシーマへ仕えている艦隊のまとめ役であるコッセルにとっては、彼女の顔色どころか声一つでその時のシーマの心理状態が解かる。

「脇腹の突き時だね」

「これで二回目、ですな……」

シーマへ相づちを打ちながら、コッセルの今日のシーマ心理占いは「小吉」と判断している。彼は彼女を信頼こそしているが、基本的に扱いつらい女性なのだ。

「だが、今回ののは必ずしも海賊だから出来る事ではないかもしれない」

「ブツホ社への本格就職の土産、ですかね？」

「それもあるがね……」

ブツホ廃品回収会社から極秘裏に受け取ったモバイルスーツ「ギラ・ドーガ」を見つめながら、シーマはお気に入りの噛みタバコをその口へと差し入れる。

「まあ、しかし」

この艦隊へ間借りをしている、将来的にはブツホで同じ釜の飯を食う羽目になるかもしれない壮年の金髪の男と栗色の髪の女性の姿へ視線を送りながら、シーマの歯がタバコへ吸い付く。

「ネオ・ジオン、赤い彗星を裏切るのは、あたし達だけではない」

「他のネオ・ジオンの奴らもいやすし、それに……」

ニカツと笑う、コツセルの強面でシーマは彼が誰の事を言いたいのか、すぐに察する。

「戦いが終わったたら、アイツを笑ってやろうじゃないか、コツセル？」
「所詮は同類だ、と？」

「一皮剥くと、義だか何だかに立っっていようが、人間はその本当の顔を表すさねえ」

とは言いつつも、シーマ達が口に出している男は、必ずしも彼女らにとって敵対をしていた訳ではない。単に「嫌味で不愉快な男」というだけだ。

「廃棄コロニー、確保が出来たか？」

その男を嗤ってやった時に彼が見せるであろう苦渋の顔、それをしばらく良い酒の肴に出来そうだとほくそ笑みながら、シーマは腰へと差してある大振りの扇子をつまみ出し、戦後の自分達にとって最重要の案件を副官へと訊ねる。

「地球へ落とす予定だった内の一基、良い物件の奴を掠め取れましたぜ、シーマ様」

「ようし……」

シーマはその副官コツセルの報告へ対し軽く口の端を歪めて見せ、自らの右肩を閉じたままの扇子で何度か軽く叩いたあと、彼女はブツホ社からの贈り物、ネオ・ジオンではドーガ・タイプと呼ばれている機体の発展型である自機へとその視線を向けた。

「罪償いの時間だ」

「へえ、罪償い……」

先程から足音がしていたが為に、その背後からの、ややからかいの色を含んだ女の声にシーマは別に驚かない。

「悪いかい、ローベリアとやら？」

「別に」

とは言いつつも、どこか不機嫌そうな視線をローベリアはシーマへ向けている。

「わしは仕事があるので……」

「御苦労、コツセル」

そう言いながらコッセルは、軽くシーマへ睨みを効かせている女パイロットへ一瞥をくわえてから、ハンガーデッキから足早に立ち去っていく。

「その罪償いと言う言葉が、完全に嘘だとは思わないけどね」

「言つてくれるじゃないか、エエ？」

その短髪の女パイロットの言葉、その言葉にシーマの鋭い瞳が僅かに光を帯びる。

「ゴメンナサイをして、悪い事でもあるのかい、小娘？」

「別にい……」

「チツ……」

再度はぐらかすように呟いた後にそっぽを向く彼女に対して、小さく舌を打つてみせてからシーマは自機ギラ・ドーガ、そして遠目に見えるそのドーガ・タイプの派生機である、目の前の女が乗るサイコミユ搭載型のバギ・ドーガを見比べるようにその視線を何気なく漂わせた。

「何に対しての罪償いなんだ、海賊騎士シーマ・ガラハウ」

以前に面白いプロレス・リングをやらかした、騎士道とやらに傾斜をしているらしいパイロットが、ローベリアに続いてシーマへ話しかけてくる。

「何だと思う？」

その男は自身の肩まで届く金髪へ軽く指を差し入れながら、微かにその首をかしげてみせた。

「ジオンの真の理想への回帰、か？」

「バカを言うなよ、おい……」

どこか、ソロモンの悪夢と呼ばれた男と同じような立ち振舞いしながらも、僅かに自分達と同じような「匂い」を残り香としているこの男。

(妙なタイプの男だな、このニムバスとやらは)

彼は必ずしもシーマ達と相容れない存在ではない。どこか自分達、ならず者集団と言われているシーマ海兵隊がやっている生き方の承認が出来る性格の男らしいのだ。

「あのコロニーが眠る地への手向けだよ、騎士ニムバス」

「ほう……」

アイランド・イフィシュからの亡霊、昏い霧と一緒に夢へ姿を現す老若男女の事。それはもはや連邦製の一種のサイコミュ兵器ではないか、そう囁かれるほどに「観る」者は多い。

「例の悪い噂、あんた達海兵隊がしでかした、一年戦争時での行いの噂は聞いていたけど」

「聞いていたけど、何だい？」

「あたしもあなたの手助けをしたい気分」

「さつきから、ケンカを売っているのか、あんたは？」

シーマのやや陰が混じり始めた言葉に、近くにいたシーマ艦隊のパイロットやメカニック達の顔が僅かながら強ばり始める。

「あたしもニムバスも、さ」

その周囲の厳しい視線に、ローベリアもニムバスも全く動じる様子はない。「以前」のように短くショートヘアへと髪型を変えたローベリアはその栗色の短髪へ自身の手を軽く置く。

「あのコロニー、イフィシュは故郷だから」

「フム……」

その言葉に、シーマはその瞳を僅かにローベリアからそらし、ギラ・ドーガ、とにかくいわくありげなこのザクの最終形態ともいうべき機体の方へ面を向け、何かを思い出すようにその自身の顎を軽く人指し指で撫でる。

「シーマ様」

「様？」

僅かにその細い眉を上げたシーマ。彼女がその手に持つ扇ぎ団扇が、折り畳まれたままそのメカニックの肩へ軽く触れた。

「騎士シーマ」

「何だい？」

そのメカニックマンはニヤリとした笑みを浮かべてから、改めてシーマを呼び直した後、その目をニムバスとローベリアの方へチラリと向ける。

「構わない、お言い」

「しかし……」

「同じ社のムジナだ、こいつらは」

その言葉に、メカニックの男は軽く咳払いをした後、シーマへギラ・ドーガの整備報告を行う。

「ギラ・ドーガのデータ蓄積装置の点検、それとブツホ社専用のデータ読み取りコードの調整が終わりました」

「機体のネオ・ジオンへの救難信号の発信器は？」

「全て、ブツホの奴へ変えました」

「ヨシヨシ……」

そのどこか後ろ暗いニュアンスが香る会話を臆面もなく言い放つシーマ達へ、ニムバス達はお互いのその顔を見合わせながら、唇を軽く歪めてみせる。

「ギラ・ドーガをブツホへ売る気が、騎士シーマ？」

「もともと、ブツホからの配備品だ」

「ネオ・ジオンがそのブツホへ高利で貸し与えただけだろう、このモビルスーツは」

「いいじゃないか、細かい事は」

そう言いながら高い声を上げて笑うシーマへ、ローベリアが呆れた表情を浮かべながら軽くその肩を竦めた。

「細かいのよ、ニムバスは」

「そのようだねえ……」

そう呟いた後、シーマはニムバスをからかうつもりで手に持つ団扇を彼へ扇ごうとしたが。

「むっつりと、何を考えているのさ？」

彼の何か考え込んでいる風の表情を目にし、そのまま金銀、そして宝石で装飾をされた大団扇をパタンと閉じる。

「ユウの奴は元気かな……」

そうポツリとニムバスが呟き、少しその両目を瞬かせてから、再び何かを考えこむような風情を見せた。

「さあ……っ？」

「以外と目立つ男、そしてモビルスーツであるGマリオンだ」
微かにぼやりと煙るニムバスの双眸、その視線の先には彼の今までの愛機の姿が見てとれる。

「この前の、私との決闘をやった一件を別としてもな」

「あなたの機体も大して変わらないうちに、ニムバス」

シーマ艦隊特有の茶褐色へ塗装をされたムサカ、今ニムバス達がいるこの艦に、彼の近々解体をする予定の機体、威圧的な「サイコ・エグザム」の巨体が静かにハンガーを見下す。

「戦場へのGマリオンの姿が全く見えない」

「聞いた話ですがね、ニムバスさんとやら」

「何かな？」

休憩時間となったらしい、シーマ機の調整を行っていたメカニックが、口へ電子タバコをくわえながらニムバスへ声をかけた。

「あのロボットプロレス、あんたに負けた方の奴は後方へ引っ込んで、なにやら療養中らしいですぜ」

「本当か、それは？」

「連邦の提督とやらの近くに潜りこんでいたスパイ、ソイツがその話をシェアだかハマーンだかに一応として伝えたって噂だ」

そのメカニックの言葉に、ニムバスは軽く唸りながら眉間へ皺をよせ、形良く整った両眉を強く縮こませる。

「何をやっているのだ、アイツは……」

「一度勝った相手、十年前のあんたに負けた事のショックが大きかったのかしら？」

「それもあるかもしれんが」

「何、ニムバス？」

シーマも何か面白そうな話であると思っっているのか、黙って二人の話に聞き入っている。もつとも、自分の新しい乗機が整備中な事に、早く目を覚ましますすぎた事で仕事時間まで暇なのもあるのだが。

「奴の衰え、それが思っているよりも大きいのかもしれん」

「衰え、なるほどねえ……」

ニムバスのやや沈痛そうな言葉に、シーマはそう軽く呟いた後、眠

たそうに大きなあくびを一つその口に乗せる。

「誰にだってあることだ、疲れの蓄積は」

「そうだな、騎士シーマ……」

シーマにしても、彼女が毛嫌いをしている馴染みのパイロットの男も、そして。

「私も、昔の野心、ニュータイプの方への渴望に自分の身体が素直についていってくれた頃の力は無い」

「野心、か……」

どこか侘しさがこもる声色でそう呟くシーマ。彼女は何か胸へこもった気持ちを押し出すかのように深く肺の底から息を吐き投げた後、ハンガーの脇へ設置をされている飲料の自販機へと向かっていく。

「……」

カリッ……

懐から取り出したチョコレート・バーをかじりながら、ローベリアはかつてのニュータイプ研究者「クルスト・モーゼス博士」が作り出したエグザムという舞台（システム）の上で、ニムバス・シユターゼンと共にクルスト博士の手のひらの上で躍り狂ったもう一人の「蒼の乗り手」

「ユウ・カジマ……」

ニムバスの鏡面として存在する男の名を、ローベリアは何か、誰かに伝えるかのようにその舌へ乗せた。

第61話 蒼き騎士、駆ける

「どうした、騎士ニムバス？」

「いや何、騎士シーマよ」

そのブツホならではの役職名、他の会社であれば係長だかその辺りの意味合いであろうか。二人のブツホ社の騎士階級が呼び合う言葉には二人の近くにいるローベリアはなかなか馴染めない。

「シヤアがいつまで、私達を許してくれるかと思っただけでな」

「あの赤い彗星、あの男は私たちのやり方を大目に見ているはずじゃないのかい？」

「本当にそう思っているなら、少し私達は甘いかもしれんぞ」

やや影が落ちたような口調のニムバスの言葉に、三人の回りで働いていたシーマ艦隊の者、そしてニムバス達と共鳴をしているネオ・ジオンの兵達がその面を僅かに険しくする。

「もしかしてシヤアは、我々を公開処刑にするために生かしておいているのかもしれない」

「公開処刑、何のために？」

「無論、自分の意見に逆らう者への見せしめだろう、シーマ」

「昔のザビ家じゃないか、それは……」

ニムバスが言い放つ言葉、それに少し遅れて自分の背筋へと疾った寒さを振りきるかのように、シーマが声を張り上げようとしたその時。

「ローベリア？」

ローベリア、かつてのマリオン・ウエルチが黙って二人に向けてその細い腕を突き出す。

「シヤアが近くに來ている……」

ゴックツ……

その静かな、しかしハッキリとしたローベリアの言葉に、近くにいたムサカのクルーが唾を飲み込む音が辺りへ鳴った。

「シーマ様……」

シーマの腰の携帯端末から雑音混じりに伝わる、微かなコツセルの

声。

「シーマ様、聴こえますか？」

「何だ、コツセル？」

ニムバス達へ目配せをしながら、シーマは携帯端末へその手を伸ばす。

「シヤア総帥のノイエ・ローテⅡがこの艦隊の付近を通過しております」

「あのいけすかない形のモビルアーマーが出ていると言うことは」

「はい、シーマ様」

彼女はこの副官コツセルにだけは、騎士の称号を省いて名を呼んで良いと言っている。昔からの馴染みであり、形式などは今更な話だ。

「アムロ・レイのルーGPとやると、またやりあうつもりか」

「船外のジャンクを回収している連中には、艦へ退避するように伝えてあります」

「オーケーだ、コツセル」

シヤア・アズナブルの改良型ノイエ・ローテ、それとアムロ・レイ達が駆るモビルアーマーとの戦いに巻き込まれて、無事でいられる者はいない。

「近くを通過するわ、シヤアが」

「さすがはニュータイプ」

やや鼻で笑うような、刺のあるシーマの言葉にもローベリアはその表情を変えず、何かに集中をしている。

「この底知れない、どす黒いエゴイステイックな悪意」

「悪意、か」

「昔のあんたの比ではない、ニムバス」

そのシヤアの宇宙の色、暗黒の太陽のプロミネンスの心はニムバスにも感じられていた。彼の微弱なニュータイプ能力云々よりも、厄介なフィードリングの合い方がニムバスとシヤアとはしてしまうのだ。

「ニュータイプ、ろくでもないね……」

携帯端末から伝わる「大規模兵器接近中」のピィピィ鳴る警戒音に、何かシーマは腹の底が冷たくなるのを感じながら、苛立たしげに噛み

タバコを再度口へ含む。

「ニュータイプは、世界を滅ぼすものだ」

「マリオン……」

「違っていて、ニムバス？」

「いや……」

その言葉、ニュータイプ抹殺兵器を造ろうとした博士の口癖、それを否定する言葉はニムバスには見つからない。

「噛みタバコ、一つくれないかしら？」

「ほらよ」

少し憂鬱げな面差しへとなったシーマが、文字通り投げやりにローベリアへタバコを投げて渡してやる。

「歯に色素が沈着しないタイプかしら、これは？」

「しないよ、しない……」

昔の彼女、シーマならばこんな鬱陶しいローベリアのようなタイプの女へはとつくに怒鳴りつけていたはずであるのだが、歳であろうか。

「あたしが使っている銘柄だ」

「歯が綺麗なものね、あなたは」

「フン……」

自分の性格が丸くなってくる事は、我が強い面子が集まっているシーマ艦隊を率いていくのに、必ずしも彼女シーマも自分では好ましく思っていない。

「不愉快だ、乱暴な奴ら……」

近くの宙域で二機の大型モビルアーマー達が起こしたニュータイプ波の攪拌に、ローベリアは軽くその身を震わせた。

「やはり、あたしは牙をうしなっっちゃったのかもしれないが」

「ネオ・ジオン、それとブツホにさえ隠れて、何をコソコソやっているのだ、騎士シーマ」

「フフ……」

その不敵に笑う、女豹とあだ名をされた彼女の笑み。それはどこをどう見ても牙が折れた、覇気と野心を失った人間のそれには見えない。

「過去の精算と未来、人生の先への希望を、このシーマ様達は」

ピピッ……

「朝、朝だよお……」

赤い彗星の接近が起こした不気味な宇宙の海の荒れ、それにより神経がささくれ立ったシーマが口直しにコーヒーチューブを飲み干していた時、彼女の腰から仕事の時間が来たことを知らせるチャイムと合成音声が鳴り響く。

「あたし達ならず者が見いだせ始めたんだ」

「過去の清算、未来、人生の希望か」

「ん……？」

そのシーマの言葉に、強く深く頷いているニムバスとローベリアを女海賊騎士は怪訝そうにその視線を向ける。

「まあ、さ……」

「朝御飯食べて、学校行くよお……」

何か遠くを見るようにその双眸を細めながら、空のチューブを無造作に床へ放り投げるシーマ。

「ちよつと、騎士シーマ様……」

ギラ・ドーガの調整を終了した整備士が、そのゴミ捨てに対して少し嫌そうな視線を投げつけたのも気にせず、彼女はハンガーデッキから立ち去ろうと、そのしなやかな身体を強く伸ばす。

「せいせい、この戦いを利用して貰うさ」

「シヤアを欺ける自信があるのかしら、あなたは？」

「ジオン本国で飲食店を始めた、あの連邦軍の雇われ店長であるハゲも騙す事が出来たんだ」

四十近い歳だと言うのに、身体のラインが全く崩れていないシーマ

を少し羨ましそうに見つめるローベリア。

「今度も上手くやれるさ」

そのやや不躰な視線を向ける彼女へそう言いながら軽く微笑みかける、一年戦争時に最大の犠牲者を生み出す大虐殺を行わされた、原罪の賄い手である戦争犯罪者シーマ・ガラハウ。

「主義理想を掲げている連中、シャアのような奴らを騙す事に生き甲斐を感じている所もあるからな」

「主義思想か」

その主義思想の権化であった一人の男、クルスト博士の顔をニムバスはこの十年の歳月の中で忘れかけている。

「そんな女さ、あたしはね」

「悪党だな、騎士シーマ」

「もちろん」

ニカツとニムバスへそう笑いかけたシーマは、そのまま足早にハンガーから出ていく。朝御飯を食べに行くのだろう。

「過去の清算、か」

「あたし達はどうかなんだろうな、ニムバス」

「まだ、なあ……」

いつでも稼働が出来るレーテ・ドーガ、サイコ・エグザムからサイコミュ関係等の基本システムを移し替えた、その漆黒のドーガタイプを遠目に見やりながら、ニムバスはその細い両目をさらに狭める。

「まだ、エグザムはその役目を終えていない」

「裁くべきニュータイプ、一人は必ず存在しているものね」

「だが、それを成すのは」

ローベリアからチョコ・バーを一本ねだったニムバスが、おそらくは地球があると思われる方向へとその視線を向ける。閉ざされた巡洋艦ムサカノハンガーデッキからは外、宇宙や地球の姿を見ることは出来ない。

「私やユウ・カジマの事ではない、別のニュータイプがやるべき事なのだろうな」

「そうかしら、ね？」

「違うか？」

そのローベリアの返事に、ニムバスは不満と言うよりも不思議そうな物を見るような視線を彼女へ向けてみせた。

「マリオン、そしてクルスト博士よ」

「どうかな……」

だが、その彼ニムバスが暗に示しているニュータイプの男、何度か会い、言葉も交わした事がある連邦軍に所属をする「彼」がそれを成す事、悪しきニュータイプを誅する事が出来ている姿、それをローベリアには。

「想像が出来ない、あの男には毒や邪気が無さすぎる……」

チョコ・バーを胸ポケットへ差しながら用足しへ行ったニムバスの背中へ向けるローベリアの視線。

「ただの蒼い色だけ、優しさのみで構成をされた宇宙の心で出来るものかな？」

続いてそのローベリアの両の瞳はニムバスの機体へ、そして次に。

「ドーガ・タイプ、ジムシリーズの新鋭であるジェダの外装を変えたモビルスーツ」

「よく知っているな、あんた」

ギラ・ドーガの頭部を見つめながら呟いたローベリアの言葉に、その機体のデータを分析していたメカニックの男が顔へ掛けていたゴーグルを上げ、彼女へその視線を向けた。

「アナハイムの二股は、誰でも知っている事じゃないの？」

「そう、誰でも知っている事さ」

男はそう呟いた後、コーヒーチューブへその口を付けながら、ローベリアへ再度微笑みかける。

「みんな、本当に全て、誰でも知っている事」

「知らないのは、当事者達だけかしらね」

「まあ、それでも」

チューブから手を離して、再びモビルスーツのデータコンソールへ男は横目を向けた。

「知っていても、どうにもならない」

「結局、最後は力かしら？」

「そうなんだよな、嬢ちゃん……」

「嬢ちゃんはないでしょう」

その年配の男の言葉に、軽くその細い両肩を竦ませるローベリア。「二十の半ばの歳であるこのあたしに」

「なら、嬢ちゃんさ」

少し侘しげな色が混じっている彼の言葉に、ローベリアは微かに苦さをその表情へ乗せてから、再び自身のその近くへとそびえ立つモビルスーツ「ギラ・ドーガ」の面を見上げる。

「力、チカラか……」

ジオンの象徴とも言える名機「ザク」の面影を強く有したドーガタイプの新鋭であるギラ・ドーガという機体。

「裁く力……」

だが、そのギラ・ドーガとは別種の、シャアとニムバス以外の強化人間には扱えきれなかったレーテ・ドーガ。その機体の腕に握られている黄金の剣、非殺の剣を彼ニムバスはシャアからの再三の要請、脅しを含んだそれにも関わらず捨てなかった。

「裁く力を捨てたニムバスには、なおにそれでも新たな力、自分が見出だした宇宙の心がある」

だが、もう一機のレーテを管制ユニットとして使用しているノイエ・ローテ、そのモビルアーマーがその巨体へと覆う紅い血の色は、明らかに十年前にニムバスが纏っていた宇宙の心のそれである。

「裁く力……」

再び、その言葉を舌へ乗せたローベリアの脳裏に浮かんだ、最後のエグザム搭載機とも言える蒼い機体。微かにその両の瞳を閉じる彼女の目蓋の内側、暗闇の世界の中で連邦製モビルスーツ特有のバイザー・アイから紅い光が放たれた。

「ユウ・カジマ、か」

ドーガ・タイプの鏡面とも言える、連邦軍内ではガンダム・タイプと異なる意味合いでの象徴であるジエダ。ジム・シリーズの集大成機。

「そして、最後のEXAMの騎士」

今なお、エグザム、マリオン、そしてクルスト博士の呪縛を背負っている、青蒼のジエダ・タイプであるブルーディスティニー五号機。それを駆る、十年もの月日が経過をしても蒼い宇宙とやら、その残滓へと心を囚われたままと思われる男。

「しかしに、全く」

カリツ……

「実に情けない男だよ」

そうは言いつつも、チョコ・バーをかじりながら吐き捨てたローベリア・シャル・パゾム、古のマリオンの声にはどこか空虚な響きがある。

「少しはニムバス、ニュー・バースと自らの名を決めた男を見習ってほしい」

だが、新たな誕生を示す名を持つ男であるニムバス・シュターゼン。その彼が当のユウ・カジマをあれほどまでに惚れ込んでいるのだ。

「フラガナン研究所で、最高クラスのニュータイプ能力を持っていたらしい女、ララア・スン……」

今の宇宙世紀で、最も優れたニュータイプ・スキルとやらの持ち主であるらしい二人の男、シヤアとアムロがその女を取り合っているという噂。それ自体はそれこそ目の前で働いているギラ・ドーガのメカニックが言っていた通り、ほとんど「誰でも知っているゴシップ」である。

「彼女に匹敵をするニュータイプであった私、マリオン・ウェルチはなにかあの男の真価を見落としている……?」

「バウンド!!」

Gマリオン、ユウの機体とそれが這い乗るバウンド・ドックはミイバ・ザムからの対空防衛システムによる砲火を潜り抜けながら、一瞬でも敵機からの攻撃を防ぐ障害物をその宙域から探したそうとする。

「これより、Gマリオンはバウンドと分離をする!!」

「了解!!」

ユウ達の僅かに右方面、どうにか瞬時でもミイバの対空砲を防げよ
うな厚みのある金属板、おそらくは艦の外甲板と思しき残骸へその頭
部を向けるGマリオン。

「よくやってくれた、バウンド!!」

「ご無事で、大佐!!」

「あんたの機体の離脱を許可する!!」

ジャラア……!!

想像以上に損傷が激しいバウンド・ドックからフワリとその身体を
離れさせるユウの機体。近くに浮いてあつた柱状のスペースデブリ
へその腕からチェーンを伸ばし、そのデブリを軸として一回転を行う
蒼いジム、ブルーデイスティニー5号機。

ジュハツ……!!

ミイバの砲撃と同時に別の角度からも、ユウが盾として身を隠した
装甲板の表面をビームの粒子が跳ね散つた。

「後続隊、ミイバの他にも敵がいるぞ」

ユウ機の運搬をしてくれたバウンド・ドックが飛び去っていった時
に見せた光の軌跡を塞ぐかのように、連邦の後続モビルスーツ達の姿
がGマリオンのコクピット、全天視界モニターの周囲を塞ぐ。

「解つています、了解……」

ユウ達が切り開いた道へ追従をしてきた機体群の先頭は、どうやら
アーガマで会ったことがあるベテランパイロット「アニッシュユ・ロフ
マン」のようであった。

「気を抜いてくれるなよ、アニッシュユ君」

「毎度、毎度ですよ……」

数機のモビルスーツを引き連れて、太陽方面から接近をしてきたネ
オ・ジオンの部隊を迎え討とうとしている彼の口から放たれる苛立つ

た声。それは以前のゴツプ提督との一件でユウに含む事があるのか、戦闘で消耗をしているのか判断が難しい。

「しかし、それはともかく」

ギイン……!!

アニツシユの量産型Zに気をとられている隙に至近、Gマリオンへ絡み付くように迫ってきてしまったバギ・ドーガの「バツタ」をユウは火焰剣エグザムを使い、ハエ叩きを振るう要領でその害虫を遠ざける。

「敵、まだかなりが残っていたか……!!」

ミイバ・ザムの直掩機と思われるファンネル搭載機群が、最後の防壁としてミイバの体内から飛びだし、ユウ達の前に立ちふさがった。

シユア……!!

お決まりのファンネル、そして旧ジオンの試作ニュータイプ専用機から有線式のサイコミュ兵器がユウを先頭とする連邦モビルスーツ達へ迫り来る。

「サイコミュ兵器、ではあるが……」

ユウ機に搭載されている、マリオン・システムの「目」を透して見える敵性ファンネル群の輝きが妙にぼやけて見える事に、ユウは自身のその首を軽く傾げた。

ガフォ……!!

「ええと、確かキケ、キケ……」

「何ボヤツとしているんだ、あんたは……」

何発かのビームを無駄に撃ちながらも、それでもユウ機へ近づいてきたファンネルを撃墜してくれた女性パイロットが、動きが鈍っているユウへ呆れたような声をかける。

「そう、キクラゲだ!!」

「あの旧型のサイコミュ機の名前か?」

ミイバの直掩部隊、マスプロ・キュベレイがその背中から放つビームカノン砲をかわしながら、ユウとその女性パイロットは展開をしている敵部隊の構成を見極めようと、その機体をモビル・シップが支配をしている宙域からやや後退をさせた。

「俺の馴染みのモビルスーツ技師が見せてくれたらジオンびつくりモビルスーツ凶鑑に載っていた」

「胡散臭い凶鑑だな、それは……」

そのキクラゲというモビルスーツが、あたかもその二人の話を聴いていたかのように、両肩の大型有線ビーム砲の射出をし、鈍い光のビーム照射がユウ達へ飛びかかる。

「ブン!!」

チエ!! チイア……!!

ビーム照射にやや遅れて、ユウ機の手の先からの弾丸の連射、それに続きGマリオンの背後からもその有線サイコミュ兵器へ向けてバルカン砲の火線が疾った。

「損害は極めて軽微……」

「大丈夫か、そのジエダ?」

後方から支援に駆けつけたジエダがそのビームにより被弾をしまった様子である。

「安心を、大佐」

「うむ……」

ボウ……

そのモビルスーツのサイコミュ兵器は、火力が微弱なGマリオンのフィンガーバルカンでも容易く破壊が出来たほど脆弱。

「ふやけたインコムが出来損ないなんぞ、このジエガンには効きませんよ」

旧式のサイコミュ・モビルスーツから飛ばされた有線ビーム砲。その光条は見掛けの太さこそ威圧感があるが、スピードも火力も全く問題にならない。ユウ機の後方でそのビーム照射がかすってしまった新型ジエダの機体に備わった簡易ビームコートには磨耗すら無い。

「だが、それ以前に」

敵機群の機動や照準、そしてファンネルの動きに、モビルスーツの性能うんぬん以前にバラつきが見えるのだ。士気や腕が無いというよりも、何か別のものに気が捕われているように。

「戦意が低いか、裏切りの心を持っている奴らか?」

しかし、主君へ忠義を表しながら裏切りを考えている者の心は、火に炙られたチーズのように外は堅く内側はグズグズとなる、ユウ機のマリオンもそう映してくれるはずだ。

「強固な意思を持つ裏切り者達など、いるものなのかな？」

「いるんじゃないかしら？」

「うん？」

Gマリオンの背後へ音もなく近づいた若干に旧式の機体、確かユウの記憶ではネモのZタイプだか何だかというらしき白いモビルスーツから、女性パイロットの声がユウへ投げかけられる。

「いきなり後ろから迫るなよ……」

入れ替わるかのように、ジェダの発展機を駆るパイロットはミイバ攻めの別の部隊へと合流をする。どうやら彼はその部隊とはぐれていたようだ。

「油断よ、歴戦のパイロットともあろう者が」

「悪かったな」

その女性の声、どこかユウには聞き覚えがあるような気がしたが、どうも思い出せない。

「裏切りには過ちを正す、罪を償うとか正道へ戻るとか、いろいろ便利な言い換えができるから」

「だが、連中は戦闘意欲まで無くした訳ではないみたいだぞ、あんた？」

そう言いながらも、冷静にミイバ・ザムの周囲へ向けてその目を巡らせているユウ。

ガファ……!!

彼の視線の先では先程の女性パイロットが搭乗する高機動機、バイアランと呼ばれるモビルスーツがその機体背部のブースターに挟まれた外付け式の疑似ニュータイプ波発生器の力を借りて、着実にネオ・ジオンの機体を破壊していく姿が見える。

「迷っているか、あるいは……」

ミイバ・ザムの周囲には、バラバラに散らばってこそいるが、連邦派の機体の姿もかなりの数が見える。ネオ・ジオンの防衛線を突破で

きた者たちだろう。

「連邦、アースノイドの味方になるつもりとまではスペースノイドとしてのプライドが許さない」

「シヤア程に地球をボロボロにするという考えの徹底が出来ない者達が起した、内部分裂か……?」

「そうかもしれないわ」

一般常識的に考えて、シヤア・アズナブルの地球を崩壊させるといったやり方についていけない、いきれないといった人間もいて当然ではある。

「あなたが抜け駆けが功を奏したこの状況」

そう言いながら、女が自機の片手をぐるりを回し、ミイバ・ザムの周辺へとユウの視線を向けるように促す。

「味方の数が思っていたよりも多い……?」

「あなたの勝手が運よく上手くいったのね」

ミイバ・ザムの対空砲により後退をしながらも、あと僅かな余裕があればモビル・シップへ打撃を加えられたように見える機体の姿達も見受けられる。

「あなたのジェダの改良タイプの突撃で、ネオ・ジオンの注意が一気にそちらへ向いた、それが大吉と出た」

連邦派のモビルスーツ達が、ついにミイバ・ザムを包囲し、優位に立ち始めたのだ。

「俺がオトリとなったか」

「自分勝手な行いが上手くいって、良かったわね、大佐さん」

どうも何か、この女性パイロットの口調には刺がある。すこしむっとしながらも、別にユウとして自分の行いが模範的だとは思っていない。

「ミイバの防衛網、崩れたかな?」

「あなたが考えたヒサツとやらの勝ち方、何なのかよく解らないけど」
ボファア!!

ユウが一時的に所属をした部隊の中隊長、彼が駆るFAZZのアンチ・ファンネルミサイルがGマリオン達を狙ったらしいミイバのファ

ンネル群に対して迎撃をしてくれたようだ。

「犠牲が少なくなる手段なのかしらね、そのヒサツ？」

「一応、な」

ズスウ…… ズウ……

ネオ・ジオン軍から放たれる火線の量が増してきた。彼女のその言葉の裏には消耗戦を避けたいという考えがあるのかもしれないとユウは想像する。

「今なら多少無理をすれば出来るのでなくて？」

「そうかな……？」

ドオウツ!!

背後からの強烈なビーム砲の波動。その攻撃はユウ達を狙った訳ではないようであるが。

「迷っている暇はないな、やはり」

「当たり前よ、大佐さん」

その戦意を失っていないネオ・ジオン機達の攻撃に触発をされてか、ミイバの直掩機達の攻撃に対する迷いが消えていくのが、マリオンの目を通してユウにも解る。

「よし……!!」

Gマリオンのコンバーターから光が強く舞い始めた。

「やらせはせん……」

周辺の直掩機達の不甲斐ない戦い方、彼らにその戦い方をさせてしまう理由は解るの事には解るが、それでもミネバ・ラオ・ザビにとつてはシヤアをそうそう見捨て切れないものだ。

「やらせはせんぞ!!」

ミネバはその小さい口からは信じられない程の雄叫びを管制ルームへ響かせながら、ミイバ・ザムの防衛システムの総稼働力を上げる

ように周囲の兵達へと怒鳴り付ける。

「十八禁のメディアを見れる年頃になるまで、やらせはせんぞ!!」

トウ!!

「それが、何故に御み足の放ちへと繋がるのです!!」

細いミネバの脚蹴りを後頭部へ受けても、両の手で火線のコントロールを行っているオグスはその微かな痛みを抑える為の手を伸ばすことは出来ない。

「せっかく手に入れた愛の巣穴二つ物をハマーンの奴は取り上げた!!」

「教育係ですからね、あの人は!!」

「その本をあやつは笑った、喪女のくせに!!」

シツギ……!!

管制室の中央へミネバが居座る、身丈に合わない巨大な豪華座席の脇から、二本のレバーが飛び出した。

「この我らを追い詰めた先駆けとなった蒼い機体、ユウ・カジマめ!!」
そのミネバの細腕がマイクロ・ソーラレイの操作桿を強く握り締めると同時に、彼女は咆哮を上げる。

「ミネバ様!」

「あの生意気を行うユウ・カジマの蒼い尻へ、特大の悪魔大根を差し込んでやるわ!!」

「シミュレータだけの貴女が、まともに撃てるものではありません!!」
「シミュレータ!」

オグスから大主砲マイクロ・ソーラレイのコントロール権を奪ったミネバは、目の前の宙へと浮かび上がるホログラフコンソールを睨みつけながらも、そのオグスの言葉を聞き逃さない。

「年頃の妄想の何が悪いか!」

「そうそう妄想通りに、思い通りにはいかないのが実戦です!!」

「この大放射が小娘のやること、やることだとも言うのか、主は!!」

その言葉が威嚇だけではないかのように敵味方へと思わせるかのように、ミネバは照準が定まってもいない状態で主砲のエネルギー充填を始める。

「撃つ、気か!？」

Gマリオンのメイン推進器であるグレイス・コンバーターの出力を増大させておいたユウ・カジマ、その自機をあらかじめ目星を付けておいた主管制とおぼしきブロックへ急接近をかけさせようとしていた彼は、ミイバの主砲に瞬く光を見て、その身を強く引き締めた。

「しかし!？」

「シャ……!!」

スポットレーザーの動き、その照準合わせが極度に遅く、いや甘くなつたのをユウは感じ始める。

「射手が替わったか……!？」

光をその大砲身へと灯してこそいるが、その砲身がターゲットを移動する動きも鈍足だ。

「遅い、だけじゃないな、ミイバ……」

直線的に過ぎるのだ、照準用レーザーも砲身の動きも。

「プレッシャーも何も無いぞ、休憩をしているらしいオグスよ……」

今までマイクロ・ソーラレイから感じていた恐怖は、その悪魔の光の威力、その想像よりもユウとGマリオンの身動き思考を先読みし続けるレーザーと砲身の軌道にあったのだ。

「誘い、おとりも考えられるが!!」

その言葉を舌から吐ききらない内に、ユウはGマリオンを無謀とも言えるミイバへの強制接舷を試みる。

「相手の思惑を越える動きをし続けねばな!!」

「ドッ、フオ!!」

「ちよこまかと、ユウ・カジマ!!」

「アイツがユウと気がついておられるなら、ミネバ様!!」

小刻みに機体を機動させる、微かに残像すら見えるGマリオンへ、照準も砲身も全く追いつかない。

「マイクロの操作権を私に戻して下さい!!」

好機を逃さない、熟練の連邦派パイロットが駆るモビルスーツ群がユウの機体へ続いて来ることへ歯噛みをしながら、オグスは通信機で他ブロックへの責任者へ火力を上げるように依頼をする。

「連邦の男への一目惚れを吹っ切る乙女の想い、所詮はロートルのオグスには解らんか!!」

「部下をロートルなどと、暴言な!!」

「しかも、手足を使わずに脳波で妄想が出来る!!」

カツ、カツ……!!

細い脚でオグスの頭を連打しながらも、主砲の照準コントロールを行えるミネバには、確かにモビルスーツパイロットとしての才能があるように見うけられた。

「しかも、ユウ・カジマが私を狙っておる事も解る!!」

「そりゃ、この艦を奴は狙っていますよ、ミネバ様!!」

「そんな私を、喪女ハマーや偏執シヤアと同じように見下すとは!!」

又ウ……!!

蹴り続けるミネバの親指がオグスの口へ飛び込んだ。

「カフツ!」

小娘の親指の味を噛み締めたオグスの右手が滑り、デタラメに対空砲火の発射スイッチを押してしまう。

キーン!!

「何い!」

自機への微かな被弾、そして右手に持つ魔剣エグザムをミイバからの対空砲から正確に狙撃をされたユウは、宙へ弾き飛ばされたエグザムの剣を慌てて掴もうとGマリオンを下降させた。

「なんと言う手の上手さだ、ミイバ!!」

「なんと言う足の旨さだ、ミネバ!!」

体勢が崩れたユウ機へしつこく追いつがるミイバ・ザムのマイクロ・ソーレイの瞳。それがいくらか機敏さと正確さを増しつつあるといえど、オグスはミネバの親指を吐き出しながらコントロール権を戻そうと試みる。

「つくづく大人というのは度し難いな!!」

「ゴフツ!! コフツ!!」

眼下で咳き込みながらコーヒーチューブの中身を一気に口へ送り込むオグスをミネバの脚が督戦する。

ボフウ!!

「私はタコの手足に生まれ変わりたい、全く!!」

愚痴りながらも、未だにオグスはミネバから主砲のコントロールを奪う事をあきらめない。加えて迫るユウ機への対空砲火へも意識を向けているオグスにとっては頭、後頭部の疼きを抑える暇などない。

「よつとお!!」

必殺を賭けたらしい、ミイバからの集中火線をフェザー・チャフと機体のスラスタを駆使してギリギリでかわすユウ。Gマリオンの目の前まで迫った突撃型鉄片ファンネルを胸部の拡散ビームが粉碎をする。

ギイ、ギイイ!!

ユウ機の真正面へ、まさしくマイクロ・ソーレイの砲口が正対をした。

「今だ!!」

Gマリオンの股間部、原型のジエダ・タイプに元々備わっているマルチ・ランチャーの蓋が左右へと開く。

「マァー、キング、最高じゃないか!!」

シオ……!!

胸部ビーム砲の不調を知らせる警報も気にせず、ユウは自分の股間部、そこからトリモチ弾をミイバの大主砲上部へチョココンとある丸型レーザー発信器へと射出させた。

プオ……!!

「射精器に逆射精をされた!?!」

「言わんこつちやない……!!」

急いでミネバはレーザー発信器へ取りついた白い粘液を、自分の熱で溶かそうとレーザー光の出力を上げる。

ズウ!!

「取り付かれたか!!」

Gマリオンが強制接舷をしかけたのは、ちょうどミネバやオグス達がいるメイン管制室の上。

「直掩モビルスーツに伝令を!!」

「ハッ……!!」

だが、そのオグスの声に答える管制室の通信手の声は酷く暗い。

「シヤア総帥のやり口が気に入らない奴らでも」

こういう時に、居丈高に命令をしないのが一年戦争時に彼ブレニフ・オグスが学徒兵達に慕われた理由であるのかもしれない。

「ミネバ様やハマーン執政までは捨てきれないはずだよ」

「そうであればよろしいですが、オグス大佐……」

「裏切りを止める説得の言葉、思いつかないのは歯がゆい物だな」

額へ汗をかきながら唸るオグスの見つめる機体外監視モニターの中、その枠の中でユウの機体Gマリオンが紅く輝く焔の剣、両の手に持つその大剣を逆手へと持ち替える姿に彼は軽く唇を噛む。

「あんな細き物でこのミイバの膜を突き破れると思っておるのか、ユウ!?!」

「確かにヒート・サーベル一本ごときでどうにかなるミイバ・ザムの複合装甲ではないがね……」

魅惑的、そして挑発的な視線をユウの機体へ向けてながら叫ぶミネバとは逆に、オグスのその視線は険しい。

「聴こえるか、ミイバ・ザムの管制室!!」

「何だ、ユウ・カジマ!?!」

「素直だな、マイクロ・ミネバ・ザム様!!」

さすがに疲労が出てきたのか、ユウの頭の中では色々な単語が一緒になってしまっているようである。

「それが貴女の若さなのですよ、ミネバ様……」

わざわざ敵、ユウ・カジマへメイン管制室の場所を教えちゃって
いるミネバをため息混じりに見つめながら、オグスは軽い痛みを教え
てくれる後頭部へ自身の手のひらを軽く当てがった。

第62話 ユウ・カジマのラプラス

「来るかな、ミイバの爪のファンネルさん達は……」

コクピット内で静かにその息を整えながら、ユウは火焰剣エグザムをゆっくりとミイバ・ザムの体内へ押し込める。

「ユウ・カジマめ……!!」

「ジイア……!!」

そのミネバ・ラオ・ザビの声に反応するかのように、巨大機の脚部から鉄片、質量ファンネルが舞い散り、モビル・シップへ取りついたGマリオンへ目掛けて宙を切り裂く。

「マリオン……」

ファンネル避けとしてフェザーチャフを展開させながら、ユウはGマリオンの両手で保持をしてあるヒートサーベルの剣先を、逆手のままミイバへとコツンと突き当てる。

「エグ」

ズウ……!!

赤熱したサーベルが、ミイバ・ザムの外殻を溶かし始めると同時に、Gマリオンの返り血の両肩が微かに高揚したかのように発光をしま。

「ザアム……」

ズウズウ……

結局、昔のニムバスが何の為、誰の「返り血」をその機体へ纏ったのか解らないまま、その美しき血がもたらす妙な高揚感をその身へ感じつつ、ユウは軽く唇の端を上げながら、自身の紅き剣をゆっくりとモビル・シップの中へと差し込んでいく。

「体内へ太いのが侵入をしてくるか……」

微かに警告ランプが管制室へ鳴り響くが、それでも軽度の警戒を示すのみだ。

「それでも、この私の艦、ミイバ・ザムの膜は破れんよ……」

「確かに……」

どこか誇らしげにそう呟くミネバの言葉には、オグスも賛成であ

る。

「良い武器のようだが、それだけで……」

この超巨大機を、たかが一機のモビルスーツの格闘用の武器で破壊など出来はしない。シャアのノイエ・ローテ改修型でさえ、奥の手を使わない限りそうそうに破壊をすることは出来ない。

ブオア……!!

「何だ……!?!」

何か、唸り声のような物がオグス達が居座るメイン管制室、そのブロックの上方から聴こえてくる。

カフオ……!!

頭上から得体の知れない液、それが管制室の天からしたり落ちてきた事にオグスは訝しげにその眉をひそめつつ、ミイバの全ブロックのコンデイション・チェックを行おうとその図面をモニターへ立ち上げた、その時。

「ミイバ・ザムが、ミイバが!!」

オグスのやや離れた右隣の席へ座る通信士が悲鳴を上げ始めた。

「どうした!?!」

「内側から焼かれています、大佐!!」

「なんだと!?!」

Gマリオンが貫いたミイバの多重装甲の中で最も強固な外殻、それがエグザムの剣によってくり貫かれ、僅かなその傷口の一点から強烈な熱量がモビル・シップの内臓部へ疾る。

ジャツ……!!

メイン・ブロックの天井が破かれ、そこから白く輝く雨垂れ、重層装甲の間に挟まれた冷却素材が溶解をし、その結果として発生した生暖かい液体が管制室へと降り注ぐ。

「熱い、熱いのが顔に!?!」

「ミネバ様!!」

ミネバの顔と髪、それらへ微量ながらも微かにほの暖かい熱を発する、粘性のある白い液体が彼女へ降りかかるのを見て、近くの女性兵士が慌てて駆け寄ってきた。

「ミネバ様の看護を頼む!!」

多少高温の水がかかった程度の物ではあるが、それでも無視を出来るような物、科学物質ではない。

「ハッ!! オグス大佐!!」

「バーナー、ミノスフキーのバーナーか……!?!」

返事を返す女性兵の顔も見ずに、オグスはミイバ・ザムの修復バブル機能が働き、管制室の天井が泡で塞がれていくのをじっと見つめる。

「これが、ユウ・カジマの機体の全力攻撃であれば気に余裕が持てるのだが……」

オグスは頬を滴り落ちる汗を拭い、モビル・シップ内の他のブロツクへミイバへ取り付いたGマリオンの排除を依頼しようと通信機を手を取った、その時。

「聴こえるか、ミネバ・ザビ!?!」

「何をしでかすか、ユウ・カジマ!!」

女性兵士に顔と頭髪へこびりついた生臭い匂いを発する白い液体を拭いとももらいながら、やけに大きく聴こえるユウ・カジマの呼び掛け、蒼いGマリオンから響く声に負けじとその薔薇色に輝く唇から言葉を響かせた。

「あんたは熱くて危険なミノスフキー粒子の炎を注ぎ込まれたチャイルド・メインコントロールブロックだ!!」

ブフオ……!!

再度、ミイバ・ザムの外甲殻が火焰剣エグザムの熱で炙られる。

「その幼い命が惜しければ、大人しく降伏しろ!!」

「何を!?!」

「十八禁メディアも見れない年頃で、焼き尽くされたくはなकारうによ!!」

ズウ……

静かにミイバから抜き取ったヒート・サーベル、その刀身へとこびりついた赤色のパルス伝導液を軽く剣を振って払いながら、ユウは半透明の冷却液でてらついたエグザムを再度モビル・シップへと向け

た。

「ユウの奴、やってくれる……」

「おのれ、ユウ・カジマ!!」

感心をしたような声を出すオグスとは正反対に、ミネバの怒声はメイン管制室を揺るがさんとばかりに響く。

「この姑息さ、これが貴様の見出したラプラスか!!」

「ラプラスとやらが、人の成るべき姿を表している言葉であれば……」

その言葉と同時に、薄くGマリオンの両肩が紅く光る。

「左様だとも、ミネバ・ザビ!!」

「何と腐った、中身のない可能性であるか!!」

「じゃかあしいわ!!」

カツ!! ガカツ!!

ユウ機から放たれたフィンガーバルカンがミイバ・ザムの装甲に弾かれ、周囲へと跳弾をした。

「中身がなかるうが、どんな手を使おうが!!」

その威圧するユウに対しても、ミネバは全く気圧された様子はない。鋭く光る瞳で外部モニター越しに映るGマリオンの姿。そしてその機体がいると思わしき方向、管制ルームの天井へとその大きな双眸を交互に向けている。

「勝てば良いんだ、世の中は!!」

「大人とはこういうものかあ!?!」

「終わりに全てが良ければ、皆が幸せになればいいんだよ、小娘!!」

ダンツ!!

ミイバ・ザムの上で四つん這いになったGマリオンの右手がその外殻を強く叩いた。

「ああ、ミネバ様……」

「シヤアといい、ユウ・カジマと言い……!!」

その目に薄く涙を浮かべているミネバ・ラオ・ザビを気遣うように、彼女の守役の女性兵がその小さい背中へと手をやり、優しく擦ってくる。

「私は断固、歳上に恋の字を抱かんど!!」

「あなたの恋愛事情、小娘の心理なんぞ、俺にはどうでも良い!!」
「うっ……!!」

その心無いユウの言葉に、ついにミネバの両目から涙が流れ落ちた。

「俺がやっているのは、降伏勧告!!」

ダン!! ダアン……!!

ミイバへ這いつくばるユウ機の右手が、何度もモビル・シップの外装甲を連打リングをする。

「負けを認めるか、このままロースト・ミネバと化すか、イーエスカノー、オーケーオアデッド? デッド!? デエッド!」

「ハマアン、シャアア……!!」

そのネオ・ジオンの幼き当主の泣き叫ぶ声に、管制室、および周囲の宙域へ展開をしているネオ・ジオン兵達がユウの機体Gマリオンへ向けて、凄まじいばかりの憎悪の視線を放つ。

「ああ、ユウ・カジマ君……」

ダンッ、ダア……

「ん、誰だ……?」

その静かにミイバから呼び掛ける声に、ユウは自機の右手連打の手を止めた。

「聴こえるか、蒼いジエダ」

「オグス、そう……」

巨大なモビル・シップにチョココンと張り付いた蒼い機体、四つん這いの姿勢のまま、Gマリオンの顔の片頬がその機動艦の装甲へと押し付けられる。

「オグスだな、この声は」

ジッ、シイ……

ミネバの号泣がニュータイプ脳波か何かを出しているのか、Gマリオンのコクピット内の疑似ニュータイプ波発生器のメーター数値がどうにもブレを始めた。

「降伏する、いや停戦を申し入れる」

「あなたにそんな決定権はあるのか?」

「決定権、と言うよりも」

無差別通信の回線に混じるミネバの泣き声とユウを罵るネオ・ジオン兵達の罵声により、ユウにはオグスの声がよく聞き取れない。それでも何とかユウ・カジマは彼オグスが放つ冷静、そしてなおかつしっかりとした声を聞き取ろうと、自身の両耳へその神経を集中させようと試みる。

「頃合い、あんた達連邦派の部隊を完膚なきまでに叩きのめす姿を確認してから、シヤアへ反旗を翻すつもりだったよ」

「ふむ……？」

何か、ユウに対する罵声が連邦派の軍勢からも聴こえてくるのは、彼第二のエグザムの騎士の空耳であろうか。

「オーケーかな、ソーラ・システムは？」

「問題ない、アルフ技師」

全通信網、オールグリーンが表示がモニターへ映し出された時、喜怒哀楽を表さない、表す事を恥だと思っている節がある「パプテマス・シロッコ」のその顔、少し頬がこけたようにも思われる彼の面へも安堵の色が浮かんだようである。

「お疲れさま、シロッコ」

「ん……」

ここ数ヶ月の激務、ネオ・ジオンとの戦いで疲労が大きく溜まっているシロッコではあるが、レコアからのコーヒーを受けとる彼の顔には今までには無い、何か人の暖かさのような物が微かに漂う。

「流石にテイターンスの超弩級戦艦、ドゴス・ギア」

「珍しいか、アルフ技師？」

「ああ」

連邦軍の最大戦略兵器「ソーラ・システムⅢ」のコントロール艦と

して使用されているティターンズの旗艦であるドゴス・ギア級宇宙戦艦。

「この艦の設備だけで、モビルスーツの開発が出来そうだ」

「私のジュピトリスには及ばない」

そう言いながら不敵に笑うシロッコ。その対抗心の表れとも受け取れる言葉、彼は今それをあえて言うことに楽しさを感じているらしい。

(切羽詰まった状態だと言うのにな)

コーヒーを旨そうに飲むシロッコの顔を見つめていたアルフとレコアの視線が合い、どちらともなくその二人の口の端へ笑みが浮かぶ。彼女、エウーゴから出向してきたレコア・ロンドも同じ事を思っていたのであろうか。

「ソーラ・システム、確実に一回は撃てるな」

ドゴス・ギア艦、思案げにその首を傾げているアルフが眺め回すその集中情報処理ルームでは、多数のスタッフがデータコンソールを叩き、忙しく走り回っている。

「シロッコ、ちよつと」

「何だ、レコア?」

「あのタコがまたやって来たわよ」

そのレコアの言葉にシロッコは忌々しげに舌打ちをし、コーヒーを一気に飲み干した。

「木星帰りのブロッコリーはおるか!」

「貴様にブロッコリーと言われる筋合いは無い!!」

ソーラ・システムの管制ルームへ入って来ると同時に周囲へそう怒鳴り声を張り上げた、実質的には現在のティターンズのトップ「バスク・オム」へ向けて、まるで張り合うかのように彼へと叫び返すシロッコ。

「ソーラ・システムⅢのミラー展開は全て順調、である!!」

ドカドカとその巨体に付いた二本の脚が床を必要以上に踏み鳴らす音に、近くにいた短髪の女性オペレーターがあからさまにその形の良い眉をしかめた。

「こちらもあと少しで、システムのコントロール網が再建させる」

「何だと、まだ終わっていないのか!？」

「繊細なのだよ、通信網と言うのは」

「貴様、わしの事を!!」

グウ……!!

赤く上気させた顔をシロツコへ押し付けるようにしながら彼を睨みつけるバスクのその面は、本当に茹で上がったタコのように見える。

「タコの脚の様に凶太い、昔ながらの通信手段しか理解出来ぬ男だと思っただであらう!？」

「否定はしないが、タコだとまでは口へ出していない!!」

「宇宙人共がもて囃す、ニュータイプを越えたワシのスーパーニュータイプ能力がそう認識をしておる!!」

「貴様のようなタコにニュータイプ能力なんぞあるものか!!」

「やはりタコだと、お前は、貴様は!!」

グウ……!!

バスクはそのままシロツコを睨み付けたまま、なにやら懐から小さな機械のような物を取り出し、その装置のスイッチを入れた。

「何だ、私の頭が……!？」

グウ、グウグ……

「あいたた……!!」

そのスイッチが入られた途端、シロツコのその髪、紫色をした頭髪をまとめている金色の輪が彼の頭を締め付け始める。

「フハハ、痛かろう……!!」

「やはり、このバンドは!!」

輪が縮こまる力はそれほど強い物ではないが、それでも気分が良い物であるはずがない。

「私の知らない機能があるとでもいうのか!？」

「貴様がノンビリとバスルームへ入っている時にな、すり替えたのよ!!」

「どうりで風呂上がりに気分よくこの輪を掴んだ時、妙な重さがあると思っただか!!」

ズウ!!

忌々しげにそう叫びながら、シロッコはレコアが彼の誕生日の為に作ってくれたケーキ、その生クリームへと自身の人指し指を突き刺す。

「ちよつとお、シロッコ!!」

「南無三!!」

ベエア……

そのまなじりを上げてシロッコへ抗議をするレコアを無視し、彼はそのクリームをバスクが身に付けているゴーグルへと塗りつけた。

「前が見えん、うおう!」

「これで貴様は御陀仏だ、バスク!!」

「何の!!」

目の前が純白の世界へと染まったバスクは、それでも手探りでその手に持つ対シロッコ兵器のスイッチを「強」へと変えようとする。

「甘いわ、タコ・バスク!!」

すかさずシロッコが、再度ケーキへとその手をズイと突っ込み、その手に付いたベタベタのクリームをその機械へと押し付けた。

ズ、ルウ……!!

「くそ、手が滑る!!」

「どうだ、バスク・オム!!」

「しかし、まだワシは負けん!!」

それでもどうかにか、バスクは「最強」のスイッチ探りだそうとし、その太い指を機械の上へ這わし続ける。

「これ、である!!」

ビィ……

「うおおお……!!」

「泣け、叫べ、ブロッコリー!!」

その端正な顔を縦へと歪ませ絶叫をするシロッコ、その脳裏へと浸透する苦痛に彼は耐えながらも。

シャ……

自身の手の内側へ近くにあったあるものを掴ませた。

「これでどうだ!!」

「何イ……?」

視界が遮られながらも、気に入らぬ男、シロツコの苦痛に満ちた叫び声に心地好い愉悦を感じていたバスクが、その声が途切れた事に疑問の色を帯びた呻き声を漏らす。

「お前のブロッコリーが締めまりきらないのであるか……!」

「こんなものでこの私を倒せると思ったか!!」

余裕を強く見せているシロツコの言葉に対し、バスクはその額の汗とゴーグルへこびりついたクリームを拭い取った後、薄く見え始めたシロツコの姿に愕然とした。

「ローウソク、だと!」

「天才の発想であろう!!」

その頭部と輪の間にケーキの上に差し込められていた蠟燭を入れ、防護壁としたシロツコのアイデア、その天才だけが成せる考えにバスクは強く歯噛みをする。

「そのようなローウソク、打ち砕いてみせるわ、シロツコ!!」

怒りにその身を震わせるバスクは、さらに握りしめているスイッチの上へと彼の太い親指を這い廻させた。

「ふはは、小賢しいわバスク……!!」

それに対抗して、先程に右眉の上辺りへと差し込んだローウソクに続き、頭の左へもケーキのローウソクを追加するシロツコ。

「なんと硬いローウソクであるか!」

「レコアめ、良いローウソクを私のケーキへ乗せてくれた!!」

何か特殊な素材で出来ているのか、シロツコを打ち砕かんとする頭の輪の圧力にもローウソクは折れる素振りすら見せない。

「システム、完成と……」

「照射目は、確かアクシズ等の後方、細かい岩石やコロニー等のゴミ掃除だったわね」

情けない喧嘩が続いているティターンズのナンバーワンとツアの姿へ冷たい視線をチラリと向けた後、アルフとレコアは通信網の最終チェックを終えた。

「そして、二照射目で出来るだけアクシズ等の大物、それらを出来るだけ削り取る」

「そう、なんだがなあ……」

禁煙である情報処理ルームではタバコも吸えない、仕方なくアルフはシロツコが作業の最中に食べ残したロールパンをその手に取る。

「ジャミトフの事を考えているのかしら？」

「後期モルモット隊、一年戦争が終わった後の俺たちモルモット隊の古くからの上官だからな」

アルフを始め、モルモット隊にとても良く、不便が無いようにしてくれた男、それがジャミトフ・ハイマンという老人ではあるのだ。

「あの二人に責任を押し付けて、この世からオサラバしたりしないよなあ……」

「ワシはな、シロツコ!!」

どうしてもシロツコのロウソクの防御を砕けないバスクは、荒い息を吐きながらその天才の顔を睨み付ける。

「この世で自分が一番優れたブロッコリーであると思っている所がな、気に入らんのだ!!」

「凡俗が吐きそうな台詞だな、バスク・オム!!」

「バカにするなよ、シロツコ!!」

どうやらシロツコの頭の輪を巡る攻防では、パプテマス・シロツコ、木星圏からメリケンくんだりやって来た天才ニュータイプの方へ軍配が挙がったようである。

「この二人では、今後どうにもならないでしょうに……」

ため息をつくレコアの視線の先には、悔しさにその顔を滲ませながら管制ルームから立ち去っていくバスク・オムの巨体の姿がその目に入っていた。

「全く」

「お疲れ様、シロツコ」

「なんとという品性の無い男だ、あやつは」

ブツブツとそう愚痴るように呟くパプテマス・シロツコ、別にレコアはそういった彼の一面が嫌いではないのだが、何故自分がこの男に

好意を抱いたのかに解らなくなってくる姿でもある。

「これでは、到底人類に品性という物を求める事など出来んな」

「おまゆう、その言葉はご存知かしら？」

「俗世の言葉か、知らんな」

そう無関心そうにレコアへ返事を返してみせるシロッコは、自分が取り込み中であつた最中にシステムが完成している事に、軽い感嘆の声をその口から上げた。

「これならば、すぐにでもソーラ・システムを放てる」

「ちよつとまって、シロッコ」

「何だ、レコア」

シロッコのその怪訝そうな言葉に答える代わりに、レコアは彼の手が付いたクリームを軽く自分の指で拭つて見せる。

「私に何か言うことがあるんじゃないかしらね」

「ケーキの事か？」

「慣れないながらも、一生懸命作つたのよ」

「別にいいではないか」

レコアの咎めるような言葉に対して、シロッコは自分の髪をまとめている輪へと差し込んだ、鬼の角のような二対のロウソクへ手を触れながら、不満げな視線を彼女へ向けた。

「あんなドブのような味のするケーキなんぞ」

「おい、シロッコ……」

その無神経なシロッコの言葉に慌てたような声を出すアルフ。彼の掛けている眼鏡を通して、レコアのその顔のこめかみの辺りへと浮かび上がる青筋がアルフの視界に飛び込んでくる。

ジュオ……

レコアがシロッコの頭の輪へと突き刺さっている二本のロウソクへ対し、最大火力のライターで灯りを付けると同時に。

「ゴフォォ!!」

「いい加減にせえよ、ワレエ……」

彼女の渾身の力が込められたボディブローが木星帰りの天才の腹部へと深くめり込んだ。

「どうよ、ヤザン」

ド、ヤア……

「何が、どうよだよ……」

クイン・マンサを撃破したヤザン機へ合流に向かうユウはそう言い、どこか腹の立つ笑みをうかべながら、得意気にそのGマリオンの手に持たせた剣を振りかざす。

「非殺、血を流さない戦い方さ」

「気にいらねえな……」

その彼ヤザンの舌打ち、通信を通してユウの耳へわざと聴こえる大ききで打つそれに対し、思っているよりも強く消耗をしているGマリオンのコクピット内でユウはオーバーにその両肩を竦めてみせる。

「そうかな？」

「イキッているだけだよ、お前さんは」

ヤザンのラーク・シヤサにしても、万全な機体コンディションではない。先程から高機動形態への変システムに変調をきたし始めた。

「性の根が優等生であるお前さん、が無理をしてな」

「俺なりに昔の、騎士とは名ばかりの行いばかりをやっていた」

ウロボレスの剣、ヤザンへ貸し与えたヒート・サーベルを彼から返してもらい、その剣をじつと見つめながら収縮、柄へと刀身を押し込んでいるユウ。

「敬愛する男のやり方を真似てみたんだがね……」

「フフ……」

「うん？」

コンパクトに纏めた紅の剣の片割れを機体内部へ収納を始めているユウは、その謎のヤザンの含み笑いに、その眉を軽く眉間中央へ絞った。

「ハッア、ハッハッ……!!」

「な、なんだよヤザン!」

トツ!! ドウ!!

「不肖、このヤザン・ゲーブ!!」

自機ラーク・シヤサの手のひらで、ユウのGマリオン、その背中をバンバンと叩きながら、面白くて堪らないといった風の笑い声をヤザンは上げ続ける。

「あなたに感服、そう感服を致しましたよ、ユウ大佐殿!!」

「止めろ、叩くな!!」

わざとらしい敬語をユウへ放ちつつ、ヤザンはGマリオンの機体を小突き、軽く蹴り飛ばす。

「いったん後方へ補給しに戻るぜ、お前ら!!」

キィ……

最後にユウの機体をラーク・シヤサの鉤爪状の脚部で引っ掻いてみせながら、ヤザンは部下達へと大きく声を投げかけた。

「何なんだよ、いったい……」

「よかったすねえ、ユウ大佐」

「何がだよ?」

ヤザン隊で一番の若手であるアドルの機体が、ユウの近くへとすり寄ってくる。

「ウチの隊長、最近機嫌があまりよくありませんでしたから」

「そうなのか?」

予備プロペラントを機体の尻、ラーク・シヤサの給油孔へと差し込んでいるヤザンの機体が放つブースターの光を見つめながら、ユウはパイロットスーツのヘルメットを取り、その青い短髪の中へと自分の手を差し込む。

「あの人も少し歳が来たせいもありますから、それで……」

「何をやっとするか、アドル!!」

「は、はい!!」

ユウへ無駄な話をしてくれていたアドルへ、宙域から離脱を始めたヤザン機からの怒声が飛んだ。

「じゃ、ユウ大佐」

「頑張れよ、アドル君」

「へエイ……」

最後にニカツと笑って見せたアドル。彼の機体がヤザン達の後を追う姿を見つめながら、ユウが再度自らの髪へと指を差し入れ、軽く頭皮をこする。

「まあ、結局の所」

ピイ、ジイ……

Gマリオンの機体管制システムの異常を知らせるランプの光が、コクピット内を淡い緑色へと照らしだす。

「自分の殻を破る方法すら、他人のやり方、昔のニムバスを参考にし、真似る事が限界」

お決まりの機体コンバーター「グレイス」に関するバグ、ユウの身体と同じく持病みたいになっているその自機の病気のカルテ、プログラム列を脇のコンソールへと映し出させるユウ。

「所詮、俺はこんなもんだ」

ユウは技術者ではなくパイロットである。機体異常へ対しても応急処置を施すのが精一杯ではあるのだが、それでもアルフから教えてもらったプログラムコードをGマリオンの管制OSへ修復用文字列を差し込む事くらいは出来る。

「ラプラス、何とか不確定という意味らしき哲学的な言葉」

何の破損もないのに機体へ内部関係の異常が呼び起こされた時、その時に必ずプログラムへ浮かびあがる謎の単語であるラプラス・エーテル。

「それがラプラス、可能性か」

そのラプラス・エーテルというOS内の言葉全ての前後へアルフ秘伝のタレを注ぎ入れ、ユウは機体異常をなだめようとする。

「でもな、ラプラス」

何か先程まで戦っていたミネバ、ミネバ・ラオ・ザビもその舌へと乗せる謎の言葉の意味、それはユウにとっては簡単には解らないものではあるが。

「その方法」

白旗を掲げているモビル・シップ「ミイバ・ザム」へ、数機の連邦派モビルスーツを伴いながら近寄るクラップ級巡洋艦、新鋭の連邦軍艦がつい小一時間程、少し前まで激しい戦闘が行われていた宙域へと進出をしてくる。

「結局、どうあがいても」

機体制御のプログラム修復は完了したが、そのラプラスの文字列を消去したわけではない。

「自分の殻を破るやり方すら、俺は借り物だ」

キリがないのだ、可能性という面倒な文字は。

「だが、その借り物を真似て選んだ選択、それ自体はな」

再度、プログラム文字列へ新たなラプラス、その文字がどこからか侵入をしてくる。

「俺が自分の意思で選んだんだよ、顔の無いユウ・カジマが」

プログラムへの文字自体はほおっておいても大きな問題はない。むしろ機体の性能を向上、最適化させている場合があるらしいとはアルフやシロツコに聞いてはいるが。

「それが、俺の生き方だ」

その身体へ謎の可能性を蓄えたまま、Gマリオンの目鼻が無い、のっぺりとしたバイザー状の顔が太陽から放たれる鋭い閃を浴び、微かに赤みを差す。

「顔の無い男の生き方だ、そうだろうか？」

顔の無い男、僅かに自分の事を自嘲混じりに呟いた時、何故かユウはモルモット隊の部下であるシドレと。

「ラプラスのユウよ」

以前に夢に見た、少年だか少女だか解らない子供、おぼろげとした輪郭ながらどうにか貌を取り始めたその子の顔。その二人の面差しが自身の脳裏へと浮かんだ。

第63話 混成軍

「んじや、な」

「世話になったな、ヤザン」

ユウの機体であるGマリオンを跨がらせた、型落ちの高機動モビルアーマーである「ランプライト」

グウ……

ギャプランのプロトタイプであるそのモビルアーマーの運搬機改造型が静かにアイドリングを始める音を耳へと入れながら、ユウはヤザンの機体の右手と軽く握手をする。

「これだけの頭数があつても、ピナクルのトゲを破壊できるかどうかは、わからんがな」

「最近、何か弱気に過ぎないか、あんたは？」

「今までに無い戦いだからだよ、ユウ」

確かに、連邦軍の軍勢とネオ・ジオンの部隊、それらが一時的とはいえ共同して破壊工作を行うのは一年戦争以来で初と言えるかもしれない。

「隊長」

「わかった、わかった……」

部下達の呼びかけに少し鬱陶しそうな声で返事を返しながら立ち去っていくヤザン機へ向けて、名残惜しそうな視線を向けて彼へ手を振ってみせるユウのGマリオン。

「うちのお姫様」

「うん？」

ヤザンとの別れの挨拶が済むまで、ややGマリオンとは離れた場所でたたずんでいた旧ジオン時代からのエース、オグスが少し遠慮がちな声を出しながら、ユウの機体へと近づいてくる。

「うちのお嬢さん、さ」

ミイバ・ザムの巨体内へ取り残されていたゲルググ狙撃タイプ、旧式のモビルスーツを駆るオグスがユウの機体の隣まで近づき、彼へと

再度の嘔き声をかけた。

「ミネバ様はな」

「やっぱり悪かったかな、オグス？」

「まだ若い」

そのオグス、ブレニフ・オグスの声に、どこか羨ましがな響きがあったのは、決してユウの気のせいでない。

「まだ若いんだ、彼女はね」

「フフ……」

そう呟きながら漏らしたオグスの佻しげな笑いが、何かユウのその唇へも伝染をしてしまう。

「大人のやり方や世界は解らないんだよ」

「そうか……」

ミイバ・ザム、超巨大機動兵器に搭載された主砲「マイクロ・ソーレイ」はピナクルの陰に隠れて落ちてくる小型のコロニーの破壊を受け持つ。先程にそう連邦勢力を含めた全軍へ通達が届き、この宙域を受け持つおのおのの責任者達は会議を開いているらしい。何度も連邦とネオ・ジオンの艦から連絡艇が行き来している姿が見える。

「一応、我々の士気を乱さない為にも、あんたは立ち去ってくれ、ユウ」

「はいはい……」

その彼女らとの共闘、その条件の中に最初「ユウ・カジマの処刑」があったという噂は本当かもしれないなど、その彼ユウは脳内で想像をし、一人コクピットの中でほくそ笑んだ。

「お邪魔虫はとつとと古巣へ退散しますようだ……」

「お邪魔蟲さん」

タウ……

またしてもユウ・カジマへ不意に声をかけ、彼の機体の後頭部を強く叩く人間、ネモのZタイプへ搭乗をしている女の声に、ユウはGマリオンからリンク操作をしているランプライトのアイドリング出力を下げながら軽く舌を口内へ打つ。

「今、何か虫の所に変な悪意が感じられたぞ、あんた」

「私はあなたが嫌いだから、大佐さん」

「ふん……」

ユウと彼女へ気を利かせたのか、オグスの乗るゲルググがその手に持つ狙撃銃を軽く一つ振ってみせ、Gマリオンから静かにその赤茶色の機体を遠ざけてくれた。

「昔のニムバスの近くにいた周囲の人間、敵も味方も」

ランプライト、死の淵から甦ったニムバスがユウ達モルモット隊へ入ってきた時に与えられたモビルアーマー。今ではもはや、ユウの機体が寄りかかっている運搬型に改良されたこのランプライトにも。

「みんな、こんな感じの感想を奴に持っていたのかな？」

おそらくはこの大戦争にも加わっていると思われる、彼ニムバスの機体両肩にも「返り血」の赤はついていないであろう。

「はい、これ」

「ん？」

女のモビルスーツがユウの機体前面、コクピット間近へと迫り、彼にコクピットドアを開けるように促した。

「モルモット隊からのプレゼント袋か」

パイロットスーツ姿、確か旧エウーゴの黄色を基調としたそのスーツを纏う女が、ユウ機の周囲へ近付いて来たFAZZを初めとした機体達を少しうっとうしげに見つめながら、大きめのずだ袋をユウへと放り投げるかのように手渡す。

「ブライト艦長から、返してやれと頼まれたのよ」

「フン、お前はあの時の亀頭ヘアの女か……」

「空手の腕には自信があつてよ、私？」

その女が微笑みと共に出した物騒な言葉に、アーガマから出撃したときに借り受けたロンド・ベルのパイロットスーツを窮屈そうに身へと纏うユウはそそくさと宙へ浮かぶ袋をその手に取り、自機のコクピットのドアを閉め始める。

「俺もあんたが嫌いだよ、女」

「それで結構」

無愛想極まりない女のその声、用は済んだとばかりにユウの機体から遠ざかっていく彼女のZネモと入れ替わるかのように、今度は彼と

その女エウーゴパイロットのやり取りを眺めていた重モビルスーツがGマリオンへとその顔を向け、フワリとその機体を寄せた。

「みんな、嫌いだ嫌いだ言っただけのようだな、ほんとに」

「何ですかねえ、本当に全く」

トウ……

ユウが所属をしていた中隊の隊長が乗っている重装機が、そう呟きながらGマリオンのその紅い肩をポンと気軽に叩く。

「迷惑をかけましたね、中隊長」

「非殺、こういう方法もあるか」

「俺は自分が思っていたより、こういった手段をとる事に抵抗を覚えない性格だったみたいで」

そう言いながら肩を竦めるユウの姿をまるでコクピット越し、モビルスーツ越しに見たかのような中隊長からの笑い声がユウの耳へと流れ込む。

「最後のミイバへのカツコつけ、それで俺を心が清い、無益な人殺しを避けている人間だと思うのは早いですよ」

「そうかな、ユウ大佐？」

「そのモビル・シップへ向けて攻撃の為に繰り返した往復、その間に切り殺したりしたネオ・ジオンの人間の数は覚えていない」

「フウム……」

「俺たちは所詮、人殺しですよ」

何かそのGマリオンと肩を並べているFAZZ、その中隊長を任されているパイロットの顔を直接見たわけではないが、どこか自分と似たような戦績、一年戦争時からの古参である事を感じ取ったユウは。「敵を撃つ事にためらいを感じる必要はない」

少し気安くに過ぎる、何か棘も含まれている口調でそう言いながら、ユウはミイバ・ザムの方向へ流れていくオグス機を何気なく遠目に見つめている。

「大佐、あなたは、さ」

「ん？」

「ニュータイプかな？」

「まさか、違いますよ」

コクピットの中で笑ってみるユウの視線の先で、色々Gマリオンの機体を運ぶなどして助けてくれたバウンド・ドックからパイロット・スーツ姿の男がその身を乗り出し、Gマリオンへ向けてその手を大きく振ってみせた。

「一年戦争の時から、小隊長さんをやるのが限界な男です」

「私と同じだな」

「やはり、ね……」

バウンド・ドックのパイロットはそのまま彼の機体を牽引していたネティクスのコクピットへとその身を乗り込ませる。その大型機体を引っ張ってきたはいいが、結局廃棄することにしたのかもしれない。

「同じ匂いがしましたよ。中隊長殿」

「やはり、やはりユウ大佐は」

先程からユウの言葉がフレンドリーなのか敬語なのかよく解らないのは、ユウ自身の階級、大佐という身分自体は上だが、実質的にはこのFAZZに乗るティターンスの中隊長が上官へとあたるからであろう。

「最初の部下は二人」

「イエス」

「オペレーターが可愛い女の子」

「あなたの方こそ、中隊長殿」

妙な世間話をしているユウ達の視線の先には、その旧式ガンダムのコクピット前まで来た男がネティクスのハッチを開放させた女性パイロットと何やらヘルメット越しにキスをしているお熱い光景。その彼らの姿から見るに、彼らは恋人か夫婦なのであろうとユウは想像する。

「ニュータイプなのでは？」

「何をやっているんですか、二人とも……」

アニッシュ機、これまた旧式である彼の乗るジム・コマンドの姿を見たとき、一時期に、一年戦争時の最期の戦いの時に士気高揚か何か

の題目で蒼い塗装を強要されたこのジム・タイプへ乗っていた事のあ
るユウは懐かしさのあまり。

「涙が出てくるとは、本当にナイジェル君の言う中年、ヤングな老害は
当たっているかもな……」

だが、それを言ったらこの宙域にいるほぼ全ての者が中年だか老害
の名を持つものだ。榮譽のある、生きた証であるその称号。

「さつきから話を盗み聞きしていましたが」

「迂闊にも俺は、無線をオープンにしていたからな」

おそらくはミイバとの戦いでアニツシュのマスプロ・Zは破壊をさ
れたか動かなくなってしまったのだろう。そういう目にあつた時の
パイロットの機嫌は良いはずもないが、律儀に自分の見送りに来てく
れた彼にユウは心の中で手を合わし、感謝を示す。

「あんだのはヒサツとかいう格好つけじゃないさ、大佐……」

しかし、生意気な女にしろアニツシュにしろ、そしてヤザンにして
も、こうしてこの場から立ち去るユウを見送りに来てくれる人達が多
いという事は。

「立派な戦術ですよ」

「ありがとう、アニツシュ君」

「いや、なに……」

彼、ユウ・カジマはやはり「大佐」の身分に相応しい男であると受
け取れる証拠であると言えなくもない。

「元気でな、アニツシュ君」

「まさか十年経つてまた、この顔も見たくない」

忌々しげに呟くアニツシュ機の指が、ユウのGマリオンの肩を叩い
た中隊長のモバイルスーツを指差す。

「一緒にいると命がいくつあっても足りない」

何かこの中隊長へ含む所があるらしいアニツシュの声をその耳へ
入れながら、ユウはミイバ攻撃隊の大隊長であるキツチマンから入っ
た通信へと返事を返す、軍構成員として真面目な話の内容の通信だ。

「元隊長と一緒に戦う羽目になろうとはなあ……」

「いやなら、我々の共闘作戦を拒否した連中のように」

その中隊長が指、右手の指を指した方向には連邦軍と一緒に戦う事を拒否し、立ち去っていくネオ・ジオンのモビルスーツ達の姿が。

「尻を捲って逃げ出せばいい、アニツシユ」

「嫌味な言葉使いを覚えたもんだ、隊長殿」

F A Z Zの大砲が括り付けられている左腕、その腕が重たげに振られた方向には、ネオ・ジオンとの共闘を拒否した連邦派の者達が後方へと引き返していく姿が見える。

「十年前にあんたのせいで負った大怪我のせいで」

その「あんたのせいで」という部分に異様な力を込めてアニツシユが中隊長、おそらくは彼の昔の知り合いであるらしい中隊長機へと吐き捨てるような言葉を言い放つ。

「退役をする羽目になり、のんびりと地球で家族と生活をしている奴がいるんだ」

トツ……

アニツシユの機体が中隊長機が乗るモビルスーツの左肩辺り、大きく破損をしているメガ・カノン砲が備え付けられているF A Z Zの腕上方を軽く自機の握りこぶし、その裏拳で数回打った。

「やめろ、ネオ・ジオンの落とす隕石やコロニーを撃つなど言ったら、
さ」

そう愚痴のように言うアニツシユの顔には、しかめ面とも苦笑、苦笑いとも言えない微妙な表情が浮かんでいるようである。

「あんたと同じだ」

「ならばゴタゴタ言うなよ、アニツシユ」

「チツ……」

その二人の話はユウにとって、少しは興味をそそられる物であったが、最初のユウが成した奮戦への労いの言葉に続けて、重要な必要事項を述べているキツチマンの言葉を大ボリユームで伝えている通信機から彼は耳を離す事は出来ない。

「絶対にシヤアとアムロ・レイの戦闘に巻き込まれるなよ、ユウ大佐」
「了解……」

凜々しくその顔へ真剣味を帯びさせているユウは、彼キツチマンの

言葉と共に電子戦機から送られてくるデータを黙々とGマリオンへ収め続けている。

コッツ……

「中年」

応急修理を施された形跡があるナイジェルの機体がユウ機の側面へと付き、Gマリオンの左腕を軽く小突いた。

「あんたはピナクルの破壊に参加しないのか、ナイジェル？」

「ビームキャノンが壊れたり・ガズイには対艦、いや対岩石に有効な火力は無い」

それでも未だに中破、武装部分が完全に破壊をされたり・ガズイの追加機動システムを手放さないということは、彼ナイジェルはサブ・フライト・システム、運搬機の調達が出来なかつたのであろう。

「私が水先案内人を務めるよ」

「悪いな」

「モルモット隊、ストウラート艦とやらの展開宙域、それは確かソーラシステムの間近だ」

「遠そうだな……」

そう口ごもりながら、跨がっているランプライトへ火を点すユウの機体の後方へ急造された部隊、通称「地獄の宇宙」への増援隊が編隊を組み始める。

「世話になるぜ、若いの……」

「ああ、よろしく頼む」

対ミイバ戦の初手の攻撃時にアンチ・ファンネルミサイルによる支援をユウへ行ってくれた老兵の機体の後ろには、ネオ・ジオン製の数機のモビルスーツの姿が見て伺えた。

「頼みますよ、大佐さん」

「任されて」

キツチマン中佐から「扱いづらいから気を付けろ」と忠告を受けた青年パイロットからの声へあえて陽気に答えながら、ユウは本格的にランプライトのブースターを起動させようとGマリオンのコクピットから信号を送る。

ドウフオ……!!

ユウのGマリオン、それを先頭とした運搬機へと跨がるモビルスーツ群が、巨大質量兵器と化したゼダンゲート下部「ピナクル」の破壊へと作戦行動を進展させた攻撃大部隊から強い光の軌跡を放ち、急速に離れていった。

第64話 幻影のラープラス（前編）

「なあ、シロッコさん」

周囲の哨戒から帰還をしてきたカツとサラを労いながら、アルフは二本目のタバコを自分の胸ポケットからその手に取る。

「何だ、アルフ技師……？」

ソーラ・システムの第一射の指揮権を完全にバスク・オム達テイターズの上層部の者達へ譲渡をし終えたシロッコ達は、ストウラートの一室の中でつかの間の休息を取っていた。

「Gマリオン」

第一照射、ソーラ・システムの約一時間後のその時間まで、簡易な会議室としても使用が出来る一室にたむろしているアルフやシロッコ達には出番は無い。この激戦の中での貴重な休憩時間だ。

「いや、あんたのジオ・メシアへも取り付けられているグレイス・コンバーター」

カテゴリー的に重巡洋艦兼モビルスーツ空母、宇宙艦である事を除けば全天候対応万能艦ペガサス・ホワイトベース級のそれとよく似ているロンバルディア級の改修であるストウラートの一室、そのクルー達には休憩部屋として使われる事が多い多目的ルーム。

「その秘密を、さあ……」

アルフはラフな格好になっているサラ達、先程パイロットスーツを脱ぎ捨て、シャワーから上がったばかりのその姿を眺めながら、どこか気だるげにシロッコへそう訊ねた。

「教えてくれないか？」

「ん……」

ペガサスへの先祖返りとも言えるストウラート。その内部の居住性も連邦の旧ペガサス級やエウーゴのアーガマ級と同レベルな程に重要視されて設計を成されている。

「確かに秘密はある」

そのボソリとしたシロッコの言葉に、クーラーの真ん前に陣取りな

がらアイスクリームを頬張っているカツとサラがその顔、視線を微かに合わせ、交差させた。

「だが、お前達を欺こうとした秘密ではない」

「どうかな……?」

部屋の壁に寄りかかったままの、タンクトップ姿であるシドレの声には妙なトゲがある。その皮肉気な声を無視しながら、シロッコはその口を開き続ける。

「盗作なんだ、グレイスの制御コードの一部は」

「へえ……」

薄いタンクトップを身に付けるシドレのその胸の部分をジロジロと無遠慮に見つめながら、サラがそのシロッコの言葉にため息が混じったような声をその唇の間から絞り出した。

「私の兄からの、な」

「兄、ね」

そのシロッコの言葉に、アルフは以前にユウ達に話したクルスト・モーゼス孤児院に関わる情報を出来るだけ詳細に、克明にその脳裏へと浮かばせ始める。

「シロッコ様にお兄様が?」

「ああ、いたさ……」

シドレの胸の有る無し、そのチェック判定が結局出来ずに悔しげな顔を見せていたサラ。彼女が気持ちを交えるかのようにアルフ達の会話に飛びつき、その瞳にキラリと好奇心の輝きを見せ始めた。

「彼、モルモット隊の機体担当者に吐き出させてもらえ」

「そうなのでしたら、アルフさん」

ニヤリとその口の端を歪めながら浮かべるシロッコの薄笑いに、アルフは自分が彼へと仕掛けた誘引の尋問が自分へ跳ね返ってきたことに苦く笑いながらも、顔に掛けているメガネの縁を指でさすりながらシロッコと同質の笑み、不敵な笑みをその顔へと浮かばす。

「さあ、どうぞどうぞ……」

「ヤレヤレ……」

その両の手のひらを自分の肩の辺りまで持ち上げているサラには

悪いが、たとえ相手がモルモット隊所

属、身内のサラやカツ達と言えど一応は口外していいものではないのだ、ラプラストタイプの一件は。

「小姑みたくに俺に聞き耳を立てている奴もいるんだが……」

「僕も聞きたいよ、アルフさん」

チョココミント・アイスのコーンの部分をかじりながら、カツも興味深そうな視線をアルフへと、彼の気持ちも知らずに投げつける。

「好奇心の強い奴らめ……」

とはいっても、その連邦内部のニンジャ、影の観察員である「彼」にしても今のご時世ではそうそう自分に構ってばかりはいられないだろう。

(まあ、今の戦争に比べれば些細な事か)

アルフは自分自身を納得させるかのようにそう心の中で呟くと同時に十字、お守り代わりのそれを切ると、タバコを胸ポケットから取りだしながらその口を開き始めた。

「クルスト孤児院、三番目のラプラストタイプであるお前さんの兄から盗作した、と言う事は」

そのアルフの、相手の反応を確かめるような言葉にもシロツコは眉一つ動かさない。クルスト・ズム・ダイクンという名に関わる事柄をほぼ全て彼は知っていると確信をしたアルフは僅かに語調を強くしてそのまま唇を開き続ける。

「ラプラス・ユウ・カジマからと言う事だな、シロツコ」

「ユウ隊長……？」

ユウの名が出たことに驚いた声を出し、その目を見開いているカツとサラは別として、技師アルフ・カムラ、そしてパプテマス・シロツコの注意力がもう少しその会話から離れていれば。

「……」

シドレのその顔、表情の変化の乏しさに違和感を見い出だしていたのであろうか。

「クルスト博士、奴のモルモット・プロジェクトの詳細については」

レコアの特注蠟燭からのロウをこびりついた部分を髪ごと切り落

としたシロツコのヘアスタイルはやや乱れ、洗いたてのその髪からはシャンプーの香りが漂った。

「お前達が知っている以上の知識は、私には無い」

「どうかな……?」

「ゆえにな、アルフ技師」

トウ……

ポソリとそう口ごもったような声を出しながらシロツコはその腰を浮かせた後、休憩室の傍らへと置いてある冷蔵庫へと二本の脚を進める。

「あのユウ・カジマがモーゼス孤児院にいた私の兄と同一の人物であるかどうかのカマかけは」

冷蔵庫から適当な種類のアイスを取りだしつつ、その両肩を軽く竦めてみせるシロツコ。

「何の意味が無いよ、アルフ技師」

「そうかい……」

フウ……

アルフが手元へ引き寄せた灰皿へ彼の指に支えられているタバコの灰がこぼれて落ちる。

「じゃあさ、シロツコ」

三本目のタバコへ手を付けようとしたアルフは、ふと以前にフィリップ、現モルモット隊を含む汎用艦ストウラートの全モビルスーツ部隊の隊長を任されている男からの忠告を思い出し、火をつける直前にそのタバコを胸へと引つ込めた。

「孤児院のいたらしい、ユウとは一体何者だ?」

「ストレートだな、技師」

ガッ、カッ……

異様に堅く凍ったカップ・アイスにプラスチック・先割れスプーンが突き刺さらないシロツコは何度も強固なクリームへその匙を突き立てながら、アルフの顔を実と見つめる。

「確か、私が幼い頃に木星船団へ引き取られた時には」

「木星船団か」

「あの地球圏と木星を往復する大船団はな、アルフ技師」

パ、キイ……

ついに連打をしていたシロツコの手を持つスプーンが微かな音を立てて折れ曲がってしまった。

「私のような優秀な幼子を引き取り、クルーとして仕立てあげる制度があるからな」

「英才教育ってやつですかね、シロツコさん？」

「木星圏とその往復船団は、地球の廻りとは全く違う」

二個目の自分のアイスを冷蔵庫から取り出しつつ、カツは同時に気を利かせてシロツコへ別のスプーンを持ってきてくれる。

「異世界、異なる宇宙だよ」

「無能では生きていけない……？」

「物理的にな」

木製の匙を差し出しながら訊ねるカツへ一つ頷いてみせ、シロツコは再びアイスクリームのカップへ物理的な打撃を加え始めた。

「ユウ、ラプラス・ユウの事は……？」

立っている者は誰でも使えという訳ではないが、アルフはシロツコへそう問いつつ、部屋の壁へよりかかっているシドレへ何か飲み物を冷蔵庫から持ってきてくれるように言う。

「自分で持つてきなさい、アルフさん」

「あ、ああ……」

いつになく険しい顔をしながら冷たく言い放ったシドレに少し気圧されながら、あぐらをかいていたアルフは立ち上がり、そそくさと冷蔵庫へ向かった。

「私の記憶の兄の姿はな」

そのアルフとアイスの人の都合を無視する態度にムツとした声色になりながらも、シロツコはそのまま口を開き続ける。

「記憶が不自然に薄い」

「ゴーストのお兄様……？」

薄気味悪げにそう呟きながらも、サラはその話の続きへと興味を取られている様子だ。

「何か、幻影を相手にしていたような気がしているな、今にしてみれば」

「幻影、亡霊ですか？」

「私が作ったパンケーキは、喜んで食べてくれたがな」

そう言つて乾いた笑みを浮かべながら口にと挙げるシロツコの「兄」についての話、それを聞いているサラの腹の底へ何か冷たい物が淀んだのは話の内容のせいかな冷たいアイスを食べたせいなのか解らない。

「お前さんと、その兄さんとの歳の差は？」

茶を飲みながら訊ねるアルフにしても、最初に思っていたよりも遙かに実、中身のあるシロツコの話に対し、自身の顔へ一語一句とも聞き逃がさまいとするような表情を浮かべ始めた。何しろ、自分の十年越しのライフワークであったEXAMに関わる話なのだ。

「どんなに離れていても、五歳以上の差はないだろうな、おそらく」
頭を軽く捻りながらそう呟くシロツコのスプーン、その先端までがようやくアイスへ突き刺さり始める。

「と、いうことは」

話を聞きながら、無意識に自分の手が胸ポケットのタバコ箱へと伸びた事にアルフが眼鏡の端を上げながら自嘲をする。禁煙とは口で言うだけでは誰でも出来るものだ。

「あんととラプラス・ユウが離れた時、最大でも彼の年齢は十歳前後と見ていいか」

「その位だろうか」

「その歳でこんなプログラムを作れるものか？」

「一部、と言つたはずだ」

「キー……」

シロツコのカップ・アイスクリーム、今度はその中身を持ち上げようとした途端に木のスプーンが音を立てて碎ける。

「ミノスフキー粒子制御に使えそうだった為に、遊びで取り入れてみたんだよ」

「遊びかよ……」

「天才だから出来る遊び、それを忘れるなよ、凡人ども」

アイスの抵抗に苛立ち、つい言い放つてしまうシロッコの悪い癖、それを含んだ言葉にカツは不機嫌そうにその両眉を中央へ寄せた、のだが技師アルフの表情は全く変わらない。器量の差か年齢の差か。

「ラプラス・エーテル」

「その話が来たか」

アルフが簡潔に言い放ったその単語、それに答えるかのようにシロッコは自分のこめかみの辺りを軽く押さえてから、その右手を下ろして両手でカップアイスを包み、それを溶かすために暖め始めた。

「最初からそうすればよろしかったのに、シロッコ様……」

「その単語が、グレイスに時おり走る謎のコードによく含まれている」
全くどうでもいいシロッコのアイス対策へサラがその可愛い両唇からこぼした感想なぞ無視し、アルフの真剣な声が木星帰りのエリート・ニュータイプへと向けられる。

「未知の粒子だが、そんなもんの名前ですかね？」

「違うな」

両手で抑えるアイスの冷たさに耐えながら、そのエリートは疑問を発したカツへとその視線を投げつけた。

「不可思議な粒子ではあるが、未知ではない」

ピ、チイ……

今度はシロッコのその両手がアイスのカップから離れなくなってしまう。その顔、眉と瞳をひきつらせたシロッコの手の上へサラがハンカチを被せてくれる。

「我々が普遍的に使用している」

「まさか、その何とかエーテルとは……」

その眼鏡の奥の両目を見開きながら口を開いたアルフからの揺らいだ声に、ようやくカップから離れたシロッコの手のひらに細い指先の腹、離れた自分の手を軽く振りながら、一息を吐いた後にアイスと格闘をしていた彼シロッコは静かな口調である物質の名前をあたかも宣言をするように言い放った。

「ミノフスキー粒子だ」

第65話 ダイナ・ソア・バトル（前編）

「あの辺りからが、最大の激戦区だった所らしいぜ、ユウ大佐」

そう言いながら、リョウ青年の機体が指差す方向には数多くの宇宙艦、そしてモビルスーツの残骸が浮かんでいる。

「地獄であった所か」

「強者共の夢の後、と言いたい所とシヤレこみてえがね」

その肩を竦めながら言い放つリョウの声をぼやりとその耳へ入れながら、ユウはその残骸の中でも一際大きい、巨大モビルアーマーと分類をされている漆黒のガンダムの亡骸へその視線を注ぎ、軽くその口から息を吐く。

「まだまだ続くさ、大佐どの」

「そんなんだよな、戦争は……」

「あのバケモノ達が近くを通るからな」

「バケモノ、ねえ……?」

その人造アステロイド、広大なスペース・デブリの溜め池を横目にユウ・カジマ、アクシズ方面へ向かう増援隊の先頭へ立つGマリオンを載せたランプライトの機首が軽く跳ね上がり、進路を変え始める。

「おい、どこへ行く、中年」

「デブリ帯は何があるかわからん、危険だろう?」

「通信を聞いてなかったのか?」

「通信?」

そのナイジエルの言葉を聞き、ユウは慌てて自分の機体に取り付けられた通信機の様子を確かめ始めた。

「俺の機体の通信機には、何の異常もないぞ?」

「疑似ニュータイプ波通信機の方だよ」

「何だよ、それは……」

ユウの口へと出した疑問の声、その言葉に部隊にいる数人のメンバーから呆れたような声が上がったようだ。

「緊急警報専用のチャンネルの事だ、若いの」

「緊急警報、なんだそれは？」

「大規模兵器使用、その合図を知らせる敵味方を問わない無差別へ対する通信だよ」

ティターンズ所属の老兵の言葉に、ユウは何か、不思議な事を聞いたかのようにその首を軽く傾かせる。

「人道的な事でござって……」

「別にそうではなくてさ、お若い隊長さん」

微かに笑ったかのような老兵が搭乗するFANZ、その右手指先が自機の後ろへピツタリとついてくるネオ・ジオン機へ指を振りつつ、デブリの中へその機体を潜めようとさせている。

「自軍の兵が巻き込まれて良いことはにもない」

「まあ、そうだな……？」

その彼のしわがれた声に頷くユウをよそに、次々とデブリ帯の中へとその身を溶け込ませていく後続のモビルスーツ達の姿、それに対してユウは再びその首を先程と同じく傾けた。

「何が来るんだ？」

「引き裂く光と二匹の恐竜……」

「ハア？」

ネオ・ジオン兵、まだ少年と思われる彼から放たれたその概念的な言葉に、ユウの首が傾げられるのはこれで三度めである。

「すまねえな若いのが、若隊長さん」

先程に話したティターンズの老兵が、その少年が乗る機体をやや強く小突き、癖のある声でGマリオンへと笑ってみせた。

「ニュータイプらしいんだ、このチビは」

「だからか、言葉足らずな発言は解る」

「そう言ってくれると話が早い」

どうせその内、この少年も「宇宙には心が満ちていてえ」とでも言い出すのだろう。ユウは昔の、まさしく概念的な知り合いである蒼い髪をした少女の言葉をその頭へと浮かべ、微かにその瘦けた頬がコクピット内で綻ばる。

「ソーラ・システムに加えてですね、連邦の大佐殿……」

「何か解った気がする、俺は」

Gマリオンのコクピット内、ユウの座席であるリニアシートを揚げ支える支柱の側にはエウーゴの女性パイロットから返してもらったプレゼント袋。

「恐竜、ダイナソナって言うのは多分の事……」

「恐らくは察している通りですよ、ユウ大佐殿」

そのモルモット隊からの贈り物が入っているズダ袋からユウはムラサメ・コーヒーを取り出し、ヘルメットの下部へ、各種流動食品チューブを摂取する為の開閉孔へそのコーヒーのストローを強く押し込む。

「シヤア・アズナブルとアムロ・レイ、だろう？」

「正解でありますよ、正解……」

そのネオ・ジオン兵の言葉の先を取ってみせたユウは、愛飲のコーヒーを口へ含みながら、かつて戦ったシヤア・アズナブル専用モビルアーマー「ノイエ・ローテ」の偉容をその頭へと浮かべ始める。

「シヤア、ね……」

結局に、一回もユウは勝つ事が出来なかった宇宙のモノノケ。

「アムロ・レイ、勝てるかな……？」

「私の上官もサブとして乗っていますゆえ、難しいかと……」

「不愉快だな、その答え」

「フン……」

カタチ的には連邦へ下ったとも言える、複雑な心境であるその礼儀正しいネオ・ジオンのパイロットこそこのように言われては不愉快だ。それでも律儀に彼はデブリ内へユウの機体を手招きし、退避を促す。

「ん……？」

Gマリオンの身体をデブリ帯へ向けると同時に、コーヒーのストローを口へと含んでいた生身のユウの視線が何か、太陽光に反射をして光っている物体をその目の端に捉えた。

「あれ、は……？」

その残骸群、その中にあった比較的損害が軽度なサブ・フライト・

システムをユウは目ざとく見つけだす。いや、目ざとくと言うよりも。

「ベルクート、クワトロと名乗っていた頃のシャアが百式を載っけていた奴だ」

金色をした対ビームコーティングを施されたその運搬機兼、ファンネルを始めとした武装プラットフォームであるベルクート、若干旧式のネオ・ジオン製のサポート機が輝かせる派手派手しい金ピカ塗装、それは嫌でもその視界へと入るだろう。

「使えそう、かな？」

何故に他の連中はこれを無視したのか疑問に、四度目の首傾げを行いながらユウはそのベルクートへ手を伸ばそうとする。

「何をやっているんで、大佐殿？」

「いやなに、リョウ・ルーツ君」

そのベルクート、近寄ったユウが見た目には殆ど問題は無いように見えた。少し機能チェックでもしてみようと、彼は自身が乗るGマリオン下部のランプライト運搬機を軽く身動ぎさせた、が。

「早く隠れて、オジサン」

「おいまで、少年……」

二ニュータイプであるらしき少年の乗るバギ・ドーガは見かけによらず強い力でユウ機とその運搬機、そしてGマリオンがその手に引っかけたベルクートの計三機をデブリ帯へグイグイと引きずりこむ。

「そんなオモチャは早く離して、オジサン」

「何かお宝の匂いがするんだよ、クソガキ」

二度めのオジサン発言に何か腹が立ったのか、コーヒーを飲み終えたユウの口から汚い言葉が少年へと投げ付けられる。

「ニュータイプはそんな事言わない、オジサン……」

「ニュータイプじゃないから恥ずかしくないもん……」

ぶつぶつと子供じみた口調で抗弁しながらも、ユウの機体の手はベルクート、特殊運搬機から離さない。先程簡易に行った事ではあるが、Gマリオンの手のひらからのリンク接続、手持ち式のビームライフル等を使用するとき繋ぐ火器管制システムに良い反応したのだ。

「シャアの百式がエウーゴ、連邦寄りの機体だったからかな？」

「グズグズするな、中年」

「お前までオヤジ言うか、ナイジェル!?」

すでにユウ達以外のモビルスーツは全てデブリ等に隠れ、その姿を視認することが難しくなっている。それでも心配をしてユウを見に来てくれた少年とナイジェルに続き、金色運搬機ベルクートを引つ張りながらユウ機、Gマリオンもその身を隠そうとする。

「来る!!」

「フア!?!」

突如、大声で叫んだ少年のせいで、ユウのGマリオンの頭部へ白い板切れ、恐らくは宇宙艦の装甲であったと思しきスペースデブリが直撃してしまう。

「カミング……!!」

「何がだ、射精の時かクソガキ?」

その少年をやけに馬鹿にする嫌みな大人ユウにしても、彼が何を言わんとしているのかは理解できる。単にどこか昔の「マリオン・ウエルチ」に似ている彼、名前も知らないこのネオ・ジオンの少年が気に入らないだけだ。

ガアアア……

大佐ユウ・カジマが率いている混成モビルスーツ隊の全ての通信機から、恐竜の咆哮が鳴り響いた。

「わかるか、アムロ!!」

紅く塗装をされたファンネル群、ネオ・ジオン総帥シャア・アズナブルが専用機「ノイエ・ローテ」からのサイコミユ兵器が白い大型機へと突撃をかける。

「お前にサイコ・フレームの技術を流した理由が!!」

「ジャア!!」

続いてシヤア機から放たれたビーム・カノン、それがアムロ・レイ専用重モビルアーマー「ルーGP（ニュー・ジーベガス）」の長砲身ビーム砲の射撃により相殺され、同時にその紅い妖花へ向けてアムロからのインコム・サーベルが疾った。

「プロレスを成す為であろうに!!」

「私に対等な勝負をのぞんだとでも思ったか!？」

ノイエ・ローテからのファンネルはルーGPのサブ・パイロット達、主に火器管制を担当する彼らが駆使するアンチ・ファンネルミサイルで迎撃をされ、それでも防ぎきれなかった紅いファンネルからのビームは白い機体のフィールド、ビームバリアーにより拡散をされ、宙へと散る。

「シヨー・プロレスは単純な勝敗を競うだけのものではないだろう、シヤア!？」

「私がお前に渡したレーテ・ドーガからのサイコ・フレイム!!」

インコム・サーベルは所詮は模造刀だ、そのコピーの原型となったシヤア機からの有線アームクローから形成されたビームサーベルが即座にインコムを切り落とし、そのままアムロ・レイのモビルアーマーへと切っ先を突きつけた。

「爆導索チエーンを放て!!」

「了解!!」

どうにかそのサーベル、自身の管制モビルスーツへと迫りくる刃を防ごうと機体を微動、微かに許される身動きをさせながら、アムロは巨体モビルアーマー上方ブロックにいる二人のサブ要員、彼らへ通信機を通じて怒鳴りつける。

「ジャアア……!!」

爆導索、複数の紐付き爆薬がルーGPの巨大な体躯の脇から吐き出され、有線アームサーベル、およびノイエ・ローテへと直進をかけた。

「撃ち落とします、シヤア!!」

「いや、私に対応する!!」

「ハッ……」

ノイエ・ローテの方でもシヤアはサブ・パイロットへと怒鳴り、その怒鳴り付けられた彼の返事も聞かずに紅い妖花の迎撃システムを発動させようと、赤い彗星と恐れられた旧ジオン時代からのエース・パイロットでもある彼シヤア・アズナブルは自身の鉄の仮面の内側でその両目を薄く閉める。

ドウ、ゴウア……

爆導索群がノイエ・ローテの「ハリネズミ」の火線により次々と爆破されてこそいるが、さすがにその間はシヤア機からの攻撃の手が緩んだ。

「やつこさんのアームクローが引つ込んだぜ!!」

「ハイ・メガビーム砲で狙う、キース!!」

白いモバイルアーマー、通称ニューベガサスのサブ・パイロット達が独断でシヤアの機体へ攻撃をしかけようとするのをその耳へ入れながらも、アムロはその行動を止めない。

「爆導索が無効化され、メガビームもかわされると想定をすれば、次は……!!」

戦いは二手三手の先を読む、以前クワトロ・バジーナと名乗っていた頃のシヤアから聞いた言葉をその舌へ乗せながら、アムロは攻撃型ファンネル・ミサイルのコントロール権を自分へと移行させる為にコントロールへ強く指を押しつけさせる。

カア、キイン……

「シヤアではない奴の射撃だ?!」

そのシヤアのハリネズミの間を縫い、高速の実弾射撃が乾いた音を立たせながらニューペガサスの装甲へと着弾し、その振動がその巨体の管制モバイルスーツ、Gペガサスのコクピット内へと鋭く響く。軽微ではあるが損傷あり。

「相手のサブからの追撃、シヤアのサポートを務める奴の腕も良い!!」
頭の片隅でファンネルの始動制御を意識しながら、アムロの管制機からもビームライフルがノイエ・ローテへ向かい放たれる。最後の爆導索がその彼の視界の前で無意味な爆発、迎撃のレーザーにより起こされた。

「使わなかったのであろう、あのくれてやったサイコ・フレームはさ!!」

「その通りだ!!」

「何故だい!?!」

「アンフェアなプロレスに俺が付き合う理由はない!!」

ドオウ!!

メガ・ビーム、凄まじい威力を發揮する火器からの光をノイエ・ローテはその巨体に似合わぬ驚異的な機動性で直撃をかわし、紅い巨体の各部からスラスタアの光が眩く軌跡を振り散らす。

「昔のノイエ・ジールとは大違いだよお!!」

ニューペガサス。かつての大規模なジオン残党蜂起の時に使用された大型モビルアーマー型ガンダムタイプを雛形として設計された、この白く輝く巨大天馬にはそこまでの機動性などはない。その悲鳴にも似た声を上げる隣の席の同僚をよそに、もう片方のサブ操縦者が武装の残弾確認を行う。

「フィン・ファンネル、スタンバイをしとけ!!」

「俺達では使えないだろう!?!」

「アムロ・レイなら使えるんだよ!!」

ニューペガサスの体躯の上方に翼のように生えている特殊形状ファンネルの起動に必要な疑似ニュータイプ波発生器を調整をキースと呼ばれた男がブツブツと言いながら手を付け始めたのを横目に。「アムロ、後ろに取りつかれた!!」

「頼む、持たせろ!!」

「了解!!」

指示を出したサブパイロットが自機の背後についたノイエ・ローテへと後部機関砲で威嚇を試みようとする。

「アンフェアなプロレス、言ってくれるな、アムロ!!」

「サイコフレームとやらの最深部にあったウイルスに気が付いたんだよ、親父がさ!!」

凄まじいGをその身体に感じながらもアムロは機体を強引に引つ張り、シャアの放つ有線サーベルを間一髪でかわす。ビーム刃の一閃

が漆黒の宇宙空間を切り裂いた。

「良い親父さん、頭の良い父さんじゃないかい、アムロ・レイ!!」

「そうだと!!」

ギイン、ギヤア……!!

急旋回をしたニューペガサス、その長砲身ビーム砲をサーベル・モードへと移行をし、ノイエ・ローテからの有線クローサーベル、二本の腕から同時に飛ばされたその若干に旧式、しかしそれゆえに洗練をされているサイコミュ格闘兵器をその長大なビーム刃で食い止める。

「父親、ダイクンとやらの名を利用する貴様には分かるまい!!」

「七つの七光り、宇宙を導く虹の色だよ!!」

アムロとシャアのつばぜり合い、その上方でも二機のサブパイロット同士の射撃型インコムと対空砲による応酬火線が疾り始めた。

「お前は今度は何に大義を見出だした!？」

「よく私が見つかったな、連邦の士官!!」

「何度お前と鏢迫り合いをした事か、数えきれない!!」

グウ……!!

深く、アムロとシャアのビーム刃が折り畳むように重なり、軋む。

「親の名を借りる、それは建て前だろうに、シャア!!」

「私の建て前と本音が!!」

パアア……!!

サーベル同士のビーム干渉が限界に達し、二匹の巨獣がバウンドをし互いに弾かれる。

「七年も重力の井戸へ引き込もっていた、堕ちたニュータイプであるお前に解るものか、アムロ!!」

「ならば、建て前を言ってみろ!!」

「スペースノイドへ永遠の自由を!!」

「もう一つ位は言え!!」

「人類の更なる可能性を求めん!!」

ジアアア……!!

ニューペガサスの翼、フィン・ファンネルがその身体から放れ、白

い天馬の周囲の宙へ舞い始めた。

「二重底のさらに下、本音は何だ!!」

「知れた事よ、アムロ!!」

アムロ機の特種ファンネルに呼応をするように、シャアの機体背部からも大型のファンネルが展開を始める。

「ララアの姿が私には見えない!!」

「今のお前に見せたくないだけだ、シャア!!」

「違うね、アムロ!!」

ガア、ガア!!

大型ファンネル同士のビーム照射が相撃つ宙域の中、巨獣達の管制モビルスーツからのライフル、その巨大軀からは本当にちっぽけなビームの応酬がアムロとシャアから互いに放たれ、交差したそのビームが光の飛沫を散らす。

「ララアを私を感じられるならば、見える姿を持つ人類がニセモノなのだよ!!」

「まさか、まさかその為に地球の破壊、アクシズ群を落とすと!?!」

「人類の!!」

ジアファア……!!

横風ぎに振るわれたノイエ・ローテの有線ビーム刃がニューペガサスの長大ビーム砲を切り裂かんと猛光、紅い光を発しながら宇宙の闇を切り裂き、迫り来る。

「十分の十を抹殺しろとララアに言われればこうもなろう!!」

「十文の九プラス、コンマ・レヴェルの隙、その位はお前にあると思っていたが!!」

その大振りの斬撃、それにアムロはまさしく微細な隙を見出しこそしたが。

「イエー!!」

「二分の隙も与えるつもりがないか!!」

シャアの奇声と共にステルス・ファンネルの群れがモニターを塞ぐ事にアムロはコクピット内で歯噛みをしつつも、連邦派の軍内で最大のニュータイプ・レベルを持つと言われている彼は無理なサイコミュ

始動にその頭、脳髓を痛めさせながら複数の棒状ファンネルへ回転を与えさせ始める。

ギイ、キアヤ……!!

迫る有線ビームサーベルの基部へ特殊形状ファンネル「フィン・ファンネル」を激突させ、間の一髪で軌道をずらしながら、アムロはサブパイロットへ再度大ビーム砲への充填の指示を叫び散らす。

「そして、最後に私とララアだけが宇宙にいれば良い!!」

「聴いただろう!?!」

ニューペガサスの黒髪をしたサブパイロットが至近からのファンネルミサイルをノイエ・ローテへ放ちながら、顔見知りの相手であるネオ・ジオンパイロットへ強く、激しく言い放つ。

「これがこのシヤアとやら、ネオ・ジオン総帥の本性だ!!」

「解っているさ!!」

ドウグア……!!

ファンネルミサイル群へ大規模爆発榴弾、ノイエ・ローテの切り札の一つを放ち、まとめて撃ち落とすシヤア指揮下の補佐パイロット。その爆発から生じたサイコ・フィールド余波がモンスター・マシン達を強く振動させた。

「それでも、今の私には未だ大義がある!!」

「七年前から何も学ばない、分ならず屋め!!」

「貴様に話す舌など!!」

ザア……!!

大型ファンネル同士の間をつき、ノイエ・ローテからの再度のステルス・ファンネルがニューペガサスの両肩、多目的武装コンテナの内一つを大きく破損させ、周囲へ爆発物の閃光をを輝かせた。

「持たぬと何度言わせるか!!」

「そうとも、連邦のパイロット共!!」

ノイエ・ローテのファンネル群がニューペガサスのフィンを押し始め、数機のシヤアが使役するファンネルが天馬のフィールドの内側、バリアーの有効張膜内へと忍び込む。

「人のサイコ・フレームのプレゼントを無視する男達になんぞな!!」

「そのフレームとやらを使用していたら!!」

カア……

その二大恐竜達の私闘から逃げ遅れたのであろう、彼等が進航したその宙域へいたモビルスーツの一部隊がガラクタのように潰され、惨殺される。

「俺をストップさせた後にいたぶり殺すつもりだったのだろう、シヤア!？」

「私のララアの心を一部なりとも奪った男アムロ・レイ、憎むのが道理であろうに!!」

「ララアは人間だ、誰の所有物でもない!!」

至近からの大型ファンネルからのビーム照射、直接管制機を狙ったその必殺の攻撃に反射的にその目をつむりながらもアムロは。

「フィン・バリア展開!!」

「ホウ!？」

急遽呼び寄せたフィン・ファンネルがノイエ・ローテのファンネルの前でその形状「くの字」へと変化させ、その各々から簡易ビームバリアを形成させる。

「良いサイコミュを持っているではないか、アムロ!!」

「チィ……!!」

同時に降り注ぐノイエ・ローテ本体からのビームをリフレクタービット、連邦のムラサメ研究所が作製した超重サイコミュ・ガンダムからコピーしたそれを咄嗟に発動させてくれた補助員、パイロット達へ感謝をしながらも、アムロは無理なサイコミュ制御を行った事でその息が荒い。

「これが最新型のサイコミュ、サイコフレームとやらの力か……」

機体性能で明らかに劣っているのだ、妖花ノイエ・ローテに比べてこの宇宙を駆ける天馬、ルーGPというガンダム・モビルアーマーは。

第66話 焰足ル

「ジェリド!!」

カミーユ機の目の前から射撃を放ってくる二機のハイザック、彼らからの攻撃をかわしながら、Zガンダムの手を持つサブマシンガンが背後の正体不明機へと牽制をかける。

「こいつら、ネオ・ジオンの連中ではないぞ!!」

「解っているさ、カミーユ!!」

ジェリドのガブスレイ、そのセカンド・タイプには微かなビーム射撃によるキズが見える。相手の機体、戦場のおこぼれを狙った人間が駆る機体が連邦派製作のモビルスーツ、ジム・タイプだからと一瞬、友軍だと思い油断をってしまったのだ。

「戦場漁りの連中だ!!」

「こんな時、切羽詰まった時にな!!」

そのカミーユ達が展開をする宙域へ自身のカラダをあたかも「神」のように存在を誇示するアクシズ、迫り来る巨大岩石へは先程に最後の核、核弾頭ミサイルが投げつけられたばかりである。

「しかし、核も艦砲射撃も!!」

サブ・マシンガンとは逆の腕で保持するライフルの精密ビームがハイザック、謎の第三勢力の機体を撃ち抜きながら、カミーユは凄まじい火線を放ち続ける艦隊群の姿へその視線を見やりながら、ジェリド機の背後へとついた。

「アクシズを食い止められない……!!」

「だからってな、カミーユ!!」

ガブスレイIIの股間部連装砲が赤く塗装をされたボール、作業用機に毛の生えた機体を撃ち砕きながらも、彼ジェリドは後方で控えている重火力機のビーム砲充填の為の時間を稼いでいる最中である。

「逃げ出すのかよ、女の名前の男!!」

「その女の名前を持つ女達が!!」

ZZ（ダブルゼータ）へ次々とエネルギータンクを差し込んでいる

マウアー達のモビルスーツ、ジェリドの恋人が乗る機体をカミーユはZガンダムでしやくり示した。

「一生懸命と戦いをやっているんだよ!!」

「なら、つべこべと!!」

ガアフ!!

戦場漁りの機体、目前の旧ジオンのモビルスーツを蹴飛ばしながら、ジェリドが見つめる大規模なデブリ・アステロイド帯。

「言うんじゃない、カミーユ!!」

ガラクタの残骸と小惑星から構成されたその宇宙へと出来た藪の中から湧き出る者達、各軍の素行不良兵や脱走兵、そしてこの戦乱で生きる術を失った者が駆る機体が次々へと疲弊した連邦派のモビルスーツ達を狩ろうと迫り来る。

「射線、空けて!!」

「何だよ、ファ!?!」

「いいから!!」

マウアーのガブスレイと共にZZの機体を支えていたエウーゴの女パイロットからの声に、カミーユはジェリド機へ向けてジェスチャーをしながら自機をデブリ帯から避難をさせる。そのカミーユ機とは逆方向へガブスレイIIを可変させながら、ジェリドもそのエウーゴパイロットの指示に従った。

「ハイ・メガ・キャノン、照射!!」

ドウファア……!!

そのZZの頭部、額から放出される凄まじいビームの波と共に、それを撃ち放った試作重火力機の頭が爆発四散をし、周囲へそのパーツの破片を飛び散らす。

ガアア!!

頭部を無くし、機体の動力炉へも多大な影響を余儀なくされるだけの事はあるビーム砲、並みの戦艦の主砲を遥かに上回るビームの波動はデブリ内へと潜む宇宙の野盗達が乗るモビルスーツをことごとくかき消し、その機体群の爆発光が連続して光を放つ。

「さすがにすげえな……」

「ン……」

ただ単にそのビーム砲「ハイ・メガ・キャノン」の威力に感嘆するだけのジェリドと違い、エウーゴのエースパイロット「カミーユ・ビダン」のその面、未だにあどけなさの残る彼の端整な顔には深い翳りが覗え、唇からは肺の奥底から押し出される呼気、それが微かに漏れ出した。

「どうした、カミーユ?」

「戦場漁り、達さ」

「奴等が何だ?」

ガブスレイを近づけながら疑問を投げかけるジェリドの声に、カミーユはその常の激しい気性に似合わず、口をもごりとヘルメットの中で動かすだけである。

「同情は禁物だ、カミーユ君」

僅かに離れた場所、その宙へと浮いている大型モビルスーツ、ほぼ戦闘不能の状態となったZZから、その歳年齢が掴みづらい、推測が難しい声の質を持つ男性パイロットからの声がカミーユのZへと飛ぶ。

「はい……」

「軍務、己の成す事を忘れるな」

頭部がない自機をマウアーとファに引っ張ってもらいながら、その重モビルスーツ「ZZ」のパイロットであるサマナ・フユリスの厳しい声がエウーゴのエースをたしなめた。

「見よう見まねでモビルスーツを動かしている人を作り出したのは、俺たちだということを思うと……」

「なるほど、な」

ズウ……

ジェリド機、ガブスレイIIには大きな損傷こそないが、どちらかと言うとカミーユ達と同じく、パイロットの身体、精神面での疲労に問題がある。

「そういう事かよ、カミーユ……」

Zガンダム、カミーユ達が破壊をした野盗達の中には、素人同然の

動きをしたモバイルスーツの姿があつたことはジェリドもその目で確認をしている。おそらくは一般人、難民だ。

「そいつ、その事はさ、カミーユ」

「解っているよ、ジェリド」

シヤ……

「戦争が終わってからだ……」

そのジェリドの簡潔な声と共にガブスレイの指が指し示す小惑星質量兵器アクシズ、その彼の腕の動きだけでジェリド・メサ、彼が何を言いたいのかはさすがに感受性が強すぎるカミーユとて解っている、いるのではあるが。

「少しジュピトリス艦で休みましょう、カミーユ……」

「ああ」

カミーユがファ・ユイリイ、友達以上恋人未満である彼女の声に素直にしたがったのはセンチメンタルな感傷の部分が強い。このカミーユ少年はいちいち一つの物事に敏感に反応をするため、無駄に精神的な疲労、それを自ら導いているのだ。

「サマナ先輩よ」

「僕はもうティターンズではないよ、ジェリド」

そのかつてのティターンズ時代、そこでの後輩へ向かってコクピット内モニターを通して微笑みかけながら、サマナはZZの機体状況チェックを開始する。

「それでも先輩だよ、俺にとってあんたは」

「言ってくれる、小僧のジェリドが……」

「そりゃ、オールドタイプのアんたにしてみりゃ、小僧かもな」

タア……

ジェリドへ感謝の意を込めた悪態をつきつつも、実体型コンソール、キーボードへ手を置いていたサマナは、自機の破損状況を照らし続けるホロ・コンソールが述べる赤文字の大名行列に深くため息をつき、その手を早々に操作卓から離れた。

「だめだ、こりゃ……」

元ティターンズ・メンバーにして連邦軍独立部隊「モルモット」の

メンバーである歴戦兵の彼にしても、もはやこの機体は動かす事すら出来ない。

「このZZ、無茶な機体構成なんだよ」

「そりゃあな、先輩も貧乏クジだ」

「一応、可変や機体分離の機能もあるにはあるけど、怖くて使えたもんじゃない」

武装に対する被弾率を下げる為に、あえてモビルスーツの各部位の中で最も表面積の小さい頭部、そこへ戦術兵器としては最大級の火力を誇るビーム砲を取り付けたダブルゼータ。正直、その無理な機体設計を考えた設計者へ愚痴の一つでも言いたいのがサマナの心情である。

「アクシズ、ねえ……」

アア……

息一つにしても、艶かしさが混じるマウアー・ファラオ。彼女のその部分は肉体的な面でジェリドの好きな所、よくよくリビドーを感じさせてくれる物ではあるのだが。

「陰気くさい溜め息をつかんでくれよ、マウアー」

「だって……」

もはや連邦には核弾頭は一つも無い、全ての手持ち弾頭をアクシズへ先駆けて落下をする小惑星やコロニーへと向けて緊急的な使用をしたか、あるいはネオ・ジオンの機体、主にファンネル搭載機によって迎撃をされ、オシヤカとされた。

「気持ちは解るが、よ」

レビル将軍が復帰をはたし、指揮をする大艦隊でも、はたしてどこまで出来るものか。

「ん……？」

「カミーユ、帰投しないの？」

「いや、少し待ってよ」

パイロットの疲労に加え、燃料と弾薬も心許ないZ。可変型ガンダムを運搬機形態「ウェイブライダー」へと変形させ、補給へ戻ろうとしたカミーユの視線が自機のコンディション・モニターへ釘付けとな

り、やや慌てたような声をファへと向ける。

「機体の全出力が上がっている、のか……？」

「ハア……」

Zガンダムからのその呆けたような声、成り行きではあるが、この少部隊のリーダーとなつてしまったジエリド大尉の神経のそれを、気の抜けたカミーユのその声は軽くささくれ立たせた。

「そりゃ、てめえのZガンダムの故障だな」

鼻を鳴らしながら、事も無げにカミーユ機、僅かに機体制御が不安定へなつたように見える彼の機体へ向けて、ジエリドは投げやりなように放つ。

「とつとと戻りな、小僧」

「ああ……」

コクピット内でその首を傾げ、惑をしながらも、カミーユはファのZプラスに先導をされてその後部スラスターの光を輝かせた。

「さて……」

帰投をしていく二つのZタイプへ、ややに呆れたような視線を一つ向けた後、ジエリドは自機ガブスレイIIをZZの残骸へと近づける。

「あとはサマナ先輩をストウラートへと放り投げるか」

「ジエリド……」

「何ですかい、先輩？」

ジエリド機とて、行動に支障が無いとはいえさほどに遊んでいる暇は無い、連邦艦隊のアクシズへの攻撃が失敗、破壊が出来なければ後はソーラ・システム、そしてモビルスーツのレベルで扱える火器に頼るしかないのだ。ぼんやりとしている暇はない。

「あんたまで故障ですか？」

「光……」

「いや、すでに故障極まりないか、ZZガンダムは」

ブツブツとガブスレイIIのコクピット内で呟くジエリドをよそに、サマナの口からは掠れた言葉が漏れ続ける。

「光と声だよ、ジエリド……」

「ハア……」

そのボウとしたサマナの声、それを聞いた時にジェリドの身体へとズシンと重い疲れが舞い降りてきた。

「ついにこの先輩も後方、病院船送りかよ……」

すでに何人かのパイロットがプレッシャーに耐えきれず治療を受けている状態、ある程度は見慣れているとは言え、それなりに恩義がある彼をそこへ送らなくてはならないのはジェリドにとって口惜しい物である。

「本当よ、ジェリド」

「マウアー、お前まで……」

そう言いかけたジェリド機、だが、そのジェリドのガブスレイの手のひらに。

フォオリイ……

「光だと……?」

そのガブスレイの周囲へ淡く漂う、色さえも解らない位の光源、しかしそれは。

「地球から立ち昇っている……?」

地球、青い人類の揺りかごである惑星。その星の体液である海が太陽光に輝き、ジェリドのその目を打つ。

「オーストラリア……?」

その光、ホタルのような輝きの群れはオーストラリア大陸、その一年戦争時に出来た「忌まわしき人工湾」から立ち昇ってくるようである。

——あなたは、ユウ——

「フン……」

その微かな幻聴にジェリドは強く自身の頭を振り、そして淡い光も機体の手を使い、追い払う。

「俺たちはテイターンズだ」

「そうね……」

その強く言い放つジェリドの清冽なる宣言に、少し名残惜しげにしながらもマウアーもその光から視線をそらす。

「任務があるんだ」

「ああ、そうだな……」

サマナもそのジェリドの言葉に頷いてみせながら、ZZのコクピットハッチを開く。

「ジェリド、ストウラートへのタクシーを頼む」

「高くつくぜ?」

自分のガブスレイ機内へ、いささか乱暴にサマナの身体を押し込んだジェリドはそのままストウラート、ソーラ・システム付近の艦へとその進路を取ろうと、機体のセミ・オートパイロット機能を動かし始めた。

「あなたはユウ、か……」

「気にするなよ、先輩」

どうやら、サマナへも聴こえていたその幻聴の言葉、それを口にしたサマナへ対し、ジェリドがその顔をしかめながら不愉快げに軽く舌を鳴らす。

「どうせなら、あんたのボスであるユウさんの方の事を気にしな……」

「ああ、そうだな」

「元気になってくれりゃ、あの人はいい戦力になるってもんよ……」

「戦力、か」

軽く息を吐き出しながら口ごもるサマナ、その童顔に似合わずモルモット隊の古参である彼がヘルメット越しにジェリド、彼のその顔をじっと見やった。

「な、なんだよ先輩……」

「死んでくれるなよ、ジェリド」

「何を言っているんだか……」

「弟が悲しむ」

そのサマナの言葉、それに対しジェリドは不可思議そうにその首を傾げてみせる。彼らの視線の先には艦隊からの猛打を受けているアークシズ、余りの巨大さに見る者の遠近感を狂わせるが、スペースコロニーよりも遥かに巨大な小惑星は地球へと静かに、しかし確実に接近をしている。

「俺に弟はいない」

「アイツは違うのか？」

「アン？」

サマナが指差す先、ジエリド機の後方モニターには放棄したZZの姿。

「あれが何だと……」

「そのアルファベットの半分に乗っている彼の事だよ」

「半分、か？」

自機のコンディション・チェックを行いながら、そのサマナの言葉へ少し頭を傾げてみせたジエリドの脳裏に思い当たる、浮かび上がった少年の顔へ対して、このテイターズパイロットは露骨にその顔を歪めてみせた。

「ハン、下らん……!!」

その言葉によって浮かんだ男の顔を鼻を鳴らして頭から吹き飛ばすジエリド。彼がニュータイプかどうかは別としても、このテイターズ大尉の勘も頭も鈍くはない。

「可愛い弟さんね、ジエリド」

「お前まで、ふざけんなよマウアー」

「あのボウヤは今でもお嫌い？」

「いずれに越えなくてはならない、蹴落とすべき奴だよ」

ククッ……

苛立つようにそう言い放つジエリドに対し、マウアーのガブスレイからコロコロと猫が笑うような声が彼の耳を打つ。

「死ぬなよ、お前もカミーユ君も」

「小僧はともかく、俺は死なねえよ」

「残された者は、その亡霊に引きずられるんだ……」

「亡霊、ねえ……」

そのサマナの口から絞り出されるように放たれる言葉、その言葉を聞いた時、何故かジエリドはふと先程の幻聴、そして謎の光がその脳裏へと浮かんだ。

「覚えていない位の昔、僕は弟に死なれてね」

「子供の頃の話かな、先輩？」

「百年位は昔かなあ」

「真面目なだけ取り柄、それがあんただ」

グウ……

高くその声を上げて笑いながら、ジェリドはガブスレイⅡのスピード、スロットルを新型操縦器を使い、緩やかに上げる。

「真面目な奴の冗談は場を白けさせる、止めてくれ」

「言うようになったな、ジェリド」

「それはともかく、ナンだがね……」

最新の操縦機器、それを小刻みに動かしながら、同時に可能な限りの戦闘域情報をそのコンソールから読み取っているジェリドが軽くため息をつく。

「このアーム・レイカー・システムとやらは」

昨年辺りから導入された新型操縦システム「アームレイカー」はあまり従来のジョイスティック・操縦システムに慣れたパイロットからは評判が良くない。機体が敏感に反応するのは良いが、操縦姿勢の保守に疑問の声が上がっているのだ。

「危険だ、主流の操縦器になってはいけない気がする」

「本当に、さ」

「うん、サマナ？」

レイカーシステムの基部、ちょうど手袋か指紋検査器の中へ手掌指先を突っ込むような形のその新型の「操縦桿」は、意外にもジェリドより僅かに腕が劣るマウアーの方が習熟が早かった。何か感性的な操縦システムの為、女性に優しいシナモノなのかもしれない。

「言うようになった、ジェリドは」

「誉め殺しか、サマナ先輩よ？」

「死ぬなよ、ラプラス」

「ラプラ、犬の犬種にそんなのがいた気がしたが？」

「それはラブラドル、可愛いワンちゃん」

ラプラスという言葉、それはジェリドには解らん品物、ではあるが。
「まあ、約束しよう」

そう、ジェリド・メサが呟いた、決意の言葉を口にしたときに。
シィ……

彼の機体へこびりついていた一つの「光」がそのまま外装甲へ、ガブスレイの機体内へ溶け込んでいった姿は誰も気が付いていない。

「本当にそうしてよ、ジェリド……」

「だから、さあ……」

会話を盗み聞きをしていたらしいマウアー、彼女の顔が映るモニターを睨み付けているジェリドには、その顔から一粒の涙をこぼしているサマナの様子は気が付かない。

「聞き耳を立てるのはやめろって」

「ごめんなさい、ジェリド」

「女は黙って男の背中へついてくれば良いんだ」

「カミーユ君のように？」

「アイツは名前が女なだけで、男だろうに……」

そう彼の口から、カミーユ少年へ対する言葉、感想がこぼれ出した時。

「チツ……」

ジェリドはそのコクピット内で軽く、苦笑いとも何ともつかない笑み、強いて言うならば「つまらなそうな」と表現できる笑いをその面へ挙げてみせる。

「言質を取ったな、マウアー？」

「フフ……」

ジェリドのそのふて腐れた言葉にマウアーは忍び笑いをもらしながら、彼の機体の前方へ自分の同型、ガブスレイ・タイプを進み出させた。

「少なくなつたもんだな、敵も味方も」

「古今問わず、戦いの最もバカバカしい結末だよ、ジェリド」

この宙域の、アクシズの進路確保の為に行われた二月三月に渡る大攻防戦、連邦派とネオ・ジオンのモビルスーツ同士の戦いは痛み分け、両軍が互いに持つ戦闘兵器と人的資源の絶対数損失、消耗により引き分けとすることは出来る、のだが。

「結局、アクシズは地球へ落ちるのか」

「まだそうと決まった訳ではないだろうに……」

だが、そのサマナの言葉には何の説得力も無い、アクシズを止める頭数も兵器、核なども無く、その上。

「ピナクル方面はまだ期待が出来るとはいえ、ゼダンが丸々残っている」

「らしくない、ジェリド」

「俺は単に現状の確認をしているだけですよつと、サマナ」

「テイターズは力だ」

「……」

「違うのか、ジェリド・メサ?」

そのサマナの言葉、ジェリドにとっては非常に耳の痛いものではないのだが。

「力があつてこそ、全てを制する、制止する事が出来る、か……」

さすがに今のジェリドには、サマナの言葉だけで簡単に元気が付けられるものではない。

「しかし、にき……」

フウ、フアリ……

「何なんだ、この光は……?」

「無視するんじゃないのかしら、ジェリド?」

「それこそ、この蛍の光、単なる何かの化学反応だか自然現象が生んだコイツには」

この妙な強情さと、目の前の現実を認める柔軟さが彼ジェリドの良い部分ではあるのだが、それでも恋人であるマウアーにも時おり扱いが困る事がある。基本的に頑固なのだ、乙ガンダム少年と同じく。

「チカラ、力と」

シン……

また一つ「ホタル」が前方のマウアー機へと付着するのを見たジェリド。彼はその両眉を強く引き締めつつ、そのややに薄い唇を軽く開いた。

「何か、悲しさを感じないか、サマナ?」

「地球の涙だからじゃないか？」

「ああ、ああ……!!」

リイ……

また面倒くさい、抽象的な台詞を吐くサマナの顔へ軽く舌を向けながらジェリド大尉はガブスレイの進路調整、修正の為にアームレイカーからスポリと取り出した自身の指をコンソールへ触れさせる、その彼には。

「結構なお手前と言えればいいか、サマナ？」

自機の出力が微かに、しかし確実に上がっている事態に気がつかない。

「全く詩人だねえ、先輩は」

「腹が立ったか？」

「徒然なるままに縮み行く花火達つと……」

ソーラ・システム、あるいはコロニーレーザーに匹敵する集中艦砲撃をアクシズへと放っていた艦隊の火線、それが目にみえて衰えてきた、力が尽きてきた事にジェリドは舌打ちをしながら。

「どうだ、この一句？」

「下手ね、夜と同じく」

「うるせえ、マウアー」

マウアー機の尻へと随伴をし、彼女のガブスレイと共にソーラ・システム、あちらこちらからの光を受け止め、ハリボテじみたガラスの城を思わせる戦略兵器が展開する宙域へと自機を急かさせた。

第67話 ダイナ・ソア・バトル（後編）

「ここで止めといくのも、良い戦いの幕閉じとなろう!!」

小型ステルス・ファンネルの突撃により、ビームバリアー発生器が破損したニューペガサスから一旦離脱をしたノイエ・ローテ。機体各部のスラスタークラから火を噴かせながらその深紅の機体を翻し、妖花モビルアーマーの管制機内へその身体をうずもらせるシャア・アズナブルが僅かにその鉄仮面の奥で呼吸を整える。

「ゲット・アウェイ、アムロ!!」

そのシャアの裂帛の声、それと同時にノイエ・ローテ下部、推進器兼武装庫であるその妖花ノイエの「茎」の部分より大型のファンネルが次々と排出され、深紅のモビルアーマーの元へと集す。

「ラアア……」

その黄色のファンネル。それらが各々持つセンサーアイからの光が、ニューペガサスへと投げ放たれた。

「威圧的なファンネル、とどめの刃のつもりか、シャア……」

交戦相手、シャアの乗るノイエ・ローテと相対的に比べて、このアムロが乗るニューペガサス、それは決して優れた機体でない。モビルアーマーとしての長所と短所を素直に表してしまっている設計なのだ、乱暴な言い方をすると突進をするイノシシと言える。

「グルグルと私の廻りを走り回るのも、ここで終わりだな!!」

「ちい、シャアめ!!」

戦闘機を極大化、肥大化したとも言えるニューペガサスが常に推進、前進をし続ける構造は、いかに火力が凄まじいとは言え完全に時代遅れだ。フレキシブル、モビルスーツと同等の動きが出来るノイエ・ローテのようなモビルスーツ・アーマーと比べるとまさに旧世代の大艦巨砲の末裔でしかない。

「バツバア……!!」

ノイエ・ローテの特殊大型ファンネルがニューペガサスの脇をすり抜ける際に、アムロ機によって放たれた後部機関砲の弾幕をフワリと

そのサイコミュ兵器群はかわし、四方へとシヤア機ノイエ・ローテを中心として展開を始めた。

ボウウ……

「人、影!？」

そのファンネル、黄色の塗装が施された誘導兵器がニューペガサスの前面をよぎった際に、何か衣服、布のような物がアムロの視線へとちらつき、舞う。

「あの黄色のファンネル、人が乗っているぞ!!」

「ハア!？」

「いたんだよ!!」

「見えませんよ、我々には!!」

サブ・パイロット達の肉眼、それとレーダーには単なる大型ファンネルとしか映らない。疑似ニュータイプ波発生器が制御しているサイコミュ測定機器には強い反応があるが、それもノイエ・ローテの切り札であれば当然の事であると、サポートの搭乗員が思うのは当然だと言えた。

ジャ…、ア!!

「包丁!？」

ファンネル、黄色い衣服をその身へと纏う人影からいく筋ものナイフ、刃物がアムロを目掛けて、その彼の視線を逆行するかのよう投げ付けられる。

バアウ!!

サブ・パイロット達の目前で、黄色の大型ファンネルから放たれたメガ・ビームがバリアーによって拡散される。

「ビームの束、左だキース!!」

「任せて!!」

その彼らの片割れ、パイロットスーツから覗かれる顔へ薄いゴーグルを掛けている男が機体左方から迫るビーム群へ向けて攪乱幕爆雷、防衛兵器を射ち放ち、迎撃を行った。

バアウ……

ビーム攪乱幕により勢いが減衰した光条は出力が低下したはずの

ニューペガサスのバリアーをも打ち破れない。その防御成功の光景を横目で見やったサブ要員たちは安堵の声を放ちながらも、自機ニューペガサスの軌道が乱れ始めた事に互いに顔を見合わせ、目配せをする。

グウ……

「何をやっているんですか、アムロ!!」

いくら疲労をしているからといっても、いきなりニューペガサスの機体機動が低下し始めた事に対し、黒髪のサブパイロットがその巨体のコントロール権を握っているアムロ・レイへ向けて通信機越しに怒鳴り声を上げる。

「動き回らないで、何の為の天馬ですか!？」

「ラ・ラアだ!!」

「ハイア!？」

「ララア・ファンネル・ビットだ!!」

ギユオ……!!

黄色のファンネル、いや黄色の貫頭衣のような衣服を身に纏った少女、アリア系人種特有の肌色をしている少女ララアが刃物、その両手へ包丁を持ちながらアムロの乗る管制ユニットへ刺突を試みていた。

「撃ち落として、アムロ!!」

「だめだ、指が動かない!!」

「情けないニュータイプですか、あんたは!!」

自機へ向かってビーム刃を振りかざしながら迫り来る大型ファンネルへ全く無抵抗なニュータイプパイロット「アムロ・レイ」へ苛立ちつつも、サブパイロットの二人は独断でそのサイコミュ兵器へと迎撃を仕掛ける。

ドウウ!!

低出力、エネルギー充填が出来ていないニューペガサスの大主砲からの拡散ビームが特殊ファンネルを包むバリアーを碎き、破碎させながらその無線兵器を粉碎した。

キヤアウ……

「ラ、ラア!!」

その身をズタズタに引き裂かれた女の悲鳴に、どうやら本当にアムロはパニックを起こしたらしい。機体を動かす事を放棄し、火器管制員たちから兵装使用のコントロール権を奪おうとコンソールへその指を叩きつける。

「アムロさんが頓珍漢な事を!!」

火器管制システムを自らの手元へ置こうと、アムロがニューペガサスの単座時用コントロール・プログラムを動かし始めた事に、眼鏡を掛けたサブパイロットの慌てた声が隣の席へ座る男の耳を打つ。

「無視だ、コントロール権を渡すな!!」

「りよ、了解!!」

「むしろ、こっちに機体自体のコントロール権を奪え!!」

ニューペガサスのサブ・パイロットにはメインのパイロットが負傷し、機体の制御が出来なくなった時の交替要員という任務もある。混乱をきたしたアムロからの火器管制の奪取行為を阻止し続ける眼鏡の男の傍らで、彼へと指示を出した補助パイロットは予備の爆導索、特殊兵装をその大型ファンネルへ向けて撃ち放った。

ジュアア……!!

「導索、凄く上手くファンネルへ絡まってくれた!!」

そのノイエ・ローテが放った謎の黄色いファンネルの動き、それはその凶体の大きさと相まり、通常型ファンネルのそれとは大きく機動性に難があるらしい。その防護策としてのビームバリアーが備わってはいらぬらしいのだが。

ボウアア……!!

「ララア!!」

無論に非ビーム兵器、単純な爆薬兵器であるその爆導索、紐爆弾にはそのバリアーの効果はない。導索チエーンへと内蔵された小爆弾がその特殊ファンネル二基を吹き飛ばす。

——酷いわア、アムロ!!——

「俺が、僕がやったんじゃない!!」

二つの女の生首がニューペガサスの管制ユニット、アムロのGペガ

サスの前をクルクルと廻り、彼を責め立てる。

「アムロさんに発狂なんぞをさせるなよ、キース!!」

「わかっているよ!!」

アムロ・レイがその大型特殊ファンネルをどのように観ているのか、見えているのかは解らない。が、それでもニューペガサスの二人のサブ・パイロットにはこれまでの経緯からおおよその見当がついた。

「シャアの悪意が作り上げた、対アムロ用の精神兵器だ!!」

「そうとも!!」

ゴウ……!!

今までに静観、アムロの観察をしていたらしいノイエ・ローテ、その妖花からシャア・アズナブルの嗤い声と共にビーム砲が連邦製の恐竜的モビルアーマーにとランダムに疾り飛ぶ。

「ララアが死んだ時の苦しみ、いま万分に味わえ、アムロ!!」

「シャア、奴にいいように使われている幾人ものララアか!!」

ビー、フォ……!!

ニューペガサスの体躯を包むビームバリアーがノイエ・ローテからの火線により震え、様々な色をした閃光がアムロの目前へ浮かび上がらせる。そのお陰とも言うべきか、連邦軍が祭り上げているニュータイプであるその彼、アムロ・レイの瞳に僅かな正気の色が戻ったようだ。

「行くが良い、私が支配するララア達よ!!」

ドウウ……!!

そのシャアの掛け声と共に、特殊ファンネルが唸りをあげて妖花ノイエ・ローテを取り囲み、きらびやかな黄金色、かつてエウーゴへと所属をしていたときのシャアの愛機「百式」の塗装を思わせる光を放ち始める。

「お前の人生を、魂を狂わせたアムロ・レイを八つ裂きにするのだ!!」

——了解、シャア——

ニューペガサスの管制機体「Gペガサス」のコクピット、その中へ微かに震えながら佇むアムロへ向けて、ララア・スンが一齐にその手

へ包丁を持ち、両の手で構えだした。

「ララアは刺身を、沢山に包丁で僕を刺身にして食べる、まな板は渡さない!？」

「とつととアムロからコントロールを奪えって言ってるだろう、キース!!」

完全に制御を失って、ただ明後日の方向へ直進を続けるニューペガス。その気の狂った天馬の姿を嘲笑うように追尾をしてくるノイエ・ローテの姿もまた、サブ・パイロット達の神経を苛立たせる。

「狂ったなら狂ったなりに、アムロはアームレイカーから手を抜いてくれればいいのによお!!」

「前に拡がるデブリ帯、見えてんだらう!？」

太陽の光を背に、気狂いの天馬が向かう先には確かに大暗礁地帯、広大なデブリ帯が見て窺える事に補助パイロット達は強く歯噛みをし、必死で今の苦境を脱しようとその頭を働かす。

「ニューペガサスを昔のデンドロビウムのように、粉々に破砕させてどうする!？」

「俺に見えても、アムロさんに見えなければしゃあないんだ!!」

ドウ!!

「また、お前はララアを殺した!!」

迫り来るララアの姿に恐慌をきたしたアムロ・レイ、彼の管制ユニットから投げ飛ばされたビーム・サーベルが黄金に輝く服を纏った女、ララアを串刺しにした光景を睨み付けながら、シャアは怒りにその声を震わせた。

「この特殊ファンネル、通常の十倍以上のコストが掛かっている!!」

「ララアの宇宙へ散り散りに広がる臓物、綺麗だ、許せない事だ!!」

「すなわち、お前は一基ファンネルにつきに十倍のララアを殺したんだ!!」

どうやら、シャア・アズナブルが作り上げた対アムロ・レイ用の兵器、それはネオ・ジオン軍内で鉄仮面野郎と陰で呼ばれている彼が想像していた以上の効果、プレツシャーをアムロへ与えているように見える。

「ラ、ラ、ララア……!!」

その一年戦争以来のライバル、今となつては好敵手を通り越して憎悪の対象と化している男である連邦のニュータイプは確実に精神への破損状態が、疲弊が強く窺えた。

「なんて酷い奴なんだ、なんて酷い奴なんだよ、アムロ・レイ!!」

「俺は、あと何人のララアを殺せば良い!？」

「私が答えて良い質問かな、アムロ!？」

ゴウウ……!!

「ララア、包丁なんて捨てるんだ!!」

管制モビルスーツの目前まで迫つたララアを、そのGペガサスの両手で押さえつけながらアムロは「ララア」へと説得をかける。包丁、ビームの刃がそのアムロの機体表面を削り続け、辺りへ青い火花が飛ぶ。

——ずっと一緒よ、アムロ——

「ウオオ……!!」

——アムロ、痛いわ——

ブウウ……

Gペガサスの手のひらに仕込まれた内蔵ビーム砲、最至近距離から放たれたそのビームがララア・スンの肉と骨を溶かし続けた。

——骨まで愛してくれるのね、アムロ——

「ムウア……!!」

頭蓋骨のみとなったララア・スンが、その歯をかち合わせて、愛の言葉を自分へと囁き始めた事態、その恐ろしさにアムロは奇声を発しながらニューペガサスのコントロール・システムへ向けて、滅茶苦茶にその手を這わしながら、混乱にひきつった表情をその面へ張り付かせている。

「アムロさん、前方が!!」

巨大なデブリ帯、大きく加速を始めたニューペガサスはその危険地帯へと巨体を突き進ませながらも、止まる気配が無い。

「シヨックに備えろ、キース!!」

「どうしてこんな、モーラア!!」

「グダグダと嫁さんの名を言うと、死を招くぞ!!」

ゴウ、ドウ……!!

デブリ帯へその天馬の巨体が突入をし、様々な廃棄物が機体へと打ち当たる衝撃がコクピット内のアムロ・レイ、そして二人のサブ要員を激しく揺さぶり、その彼らの生身へ向けてシート・ベルトの圧迫、そして生命維持機能が過剰動作を起こしランダムな苦痛を機体内部の男達に走らせる。

ガア……!!

「ウ、ワア……!!」

機体維持に必死なサブ・パイロット達のコクピットルームへ何者かの声、悲鳴が響きわたった。

「デブリ帯、人がいたのか!?!」

「いまは無視だ、キース!!」

「解っている!!」

ガッ、カッガ……!!

後部の大ビーム砲でノイエ・ローテの特殊ファンネルを打ち砕いたニューペガサスは、そのままデブリ帯を強引に突き進み、どうにか体勢を立て直そうと必死で出来る範囲、使用権限があるコントロール機器を駆使しながら、シャアの機体からの追撃を振りほどこうとその手を休めない。

「ハアアア、ハア……!!」

猛スピードで宙を、デブリ帯を切り進む純白の天馬、そののさらに先を行く黄色のファンネルからの幻影がアムロの視線の先で薄れ始めた。

「お前、アムロのサイコウエーブが平坦になりつつある、遊びは終わったか!!」

「よくもお、シャア!!」

グウン!!

ニューペガサスが急激な反転を行い、彼アムロ・レイの機体を暗礁宙域へと散らばる「ガラクタ」を弾き飛ばしつつ追尾し続けたノイエ・ローテ。そのモビルアーマーへ向けて、その天馬の背へと残っている

コンテナが立て続けに特殊ミサイルを射出する。

「悲鳴、ララアと同じく幻覚だろ!!」

ノイエ・ローテへと飛び掛かったミサイル・コンテナの衝突により破壊された廃棄モビルスーツ、そこからの苦悶の声、幻聴を無視し、アムロはそのサイコミュ兵器の制御に神経を研ぎ澄ました。

バ、バア……!!

「こうもデブリが多いと!!」

宙へ射ち放たれたミサイルポッドが炸裂し、多数のマイクロ・ファンネル・ミサイルがノイエ・ローテ、自機へ向けて宇宙ゴミを薙ぎ払いながら迫り来る姿を目にしたシヤアは、その鉄仮面の中で苛立ちとも感心とも取れない表情を浮かべる。

「私のハリネズミの防衛装置も全幅の信頼を置けんな!!」

「どうでしょうかね……?」

「フフウ!!」

どこか他人事のような、ノイエ・ローテのサブ・パイロットの言葉にもシヤアは鼻で笑うのみだ。

「君の望んだ通りの状態であろう!」

「確かに、私はあなたのやり口にはドが出ておりますが、ね!!」

アムロ・レイが放ったファンネル・ミサイル、それは障害物やシヤアの「ハリネズミ」を巧みに回避しながら、ノイエ・ローテへと不規則な軌道で迫り来る。

「それでも!!」

ジュイア……!!

紅いモビルアーマーからメガ・カノン砲を辺りへ斉射し、ファンネル・ミサイルや廃棄モビルスーツと思しきバギ・ドーガを吹き飛ばしながらも、シヤアは常に自分へ不満や怒りをその心へ秘めている補助員へ向け、嘲笑うような声をかけ続けた。

「ここで私に!!」

ボウア!!

ニューペガサスからのフィン・ファンネルによるビームがノイエ・ローテの頭スレスレを通り過ぎ、付近の旧式のモビルアーマーを打ち

砕く。

「ノイエ・ローテの内部から放り出されたくなければ、せいぜい上手く働いてくれよな!!」

「もう、まもなくの辛抱ですからね!!」

「アムロの死の事か、それとも私の敗北か!？」

「あなたに話す舌は持ちません!!」

「言ってくれ!!」

ガオウ!!

ニューペガサスからの大口徑ビーム砲、そこからの拡散モードへと変えられたビーム散弾をシャアの駆るノイエ・ローテは先のファンネルと同じく再度身軽にその巨体を翻してビーム群を横へと流し、優位なポジションを取ろうとその自分のモビルアーマーを一旦デブリ帯から退避させる。

「逃がすか、シャア!!」

すかさずに、正気を取り戻したと思われるアムロが、ニューペガサスの後部ハイ・ブースターを噴かし、そのノイエ・ローテの後を追いかけた。

大暗礁宙域、そこには数々のデブリ、そう「宇宙ゴミ」とされたモビルスーツとそのパイロット達の苦痛のみが散らばり、残る。

「ろくなもんではないな……」

あやうく二匹の「恐竜」同士の戦いによる余波で自機が吹き飛ばされそうになったユウは、再びデブリへその身を隠しながら指揮下、一応の部下であると実質的に言える混成軍へ向けて、被害状況を報告するように伝達の声を向けた。

「かなり多く、弾き飛ばされた奴がいる」

「回収、出来るか？」

「難しいな、中年……」

ニューペガサスとノイエ・ローテ、彼らがこの暗礁宙域へ飛び込んだが為に辺りへとデブリ、様々な残骸が飛び散った事で視認での搜索は困難であると、ナイジェルは自機の指をあちこちへ伸ばし、ジェスチャーでその旨をユウへと伝える。

「少しなら、アタシの勘で出来る」

ユウ機Gマリオンの背後、黒い塗装が施されたキュベレイのパイロットと思わしき少女が澆刺とした声をユウへ向けて強く飛ばした。

「そうか？」

スウ……

少女、少年兵が駆るキュベレイがGマリオンの胸の辺りを軽くその指で押さえつけ、なぞる。

「こう見えても、ニュータイプ」

「チツ……」

イ、ライラア……

「オジサン、なにその思念は？」

「思念、だと？」

「今聴こえた、オジサンからのイツトウ狂暴な部分」

「ニュータイプは同じタイプ同士で、仲良くして……」

付近では他のモビルスーツ達が仲間、成り行きではあるが同士となつてしまった連邦派軍とネオ・ジオンの者達が互いに搜索を続ける中、愚痴めいた言葉を呟くユウのGマリオンだけはその場から動かない。

「少しは手伝いなよ、大佐殿」

「人には役割があるもんで……」

「役割？」

随分と昔から、意外と多く戦場で顔を突き合わせつづけている連邦軍の女性パイロットが近くのスズ、旧式のネオ・ジオンの重火力機体を支えながら、全く動く気配のないユウ機へ白眼の視線を向けている

様子だ。

「どうにかこの機体のシステム、マリオンの目であのニュータイプ恐竜どもの動きがな、解るんだ」

「備えてくれているってわけか……」

感心したようにそう呟いた女の目の前で赤いキュベレイ、これもまたすでに旧式のサイコミュ・モビルスーツと言えるその機体が、大きく破損をしたマスプロ・ZZを危なっかしく支えている。

「ちくしょう、あの野郎ども……!!」

「動かないでよ、アンタ……」

「……ツウ!!」

先程の少女とよく似た声をしたそのキュベレイの女パイロット、彼女が支えている機体に乗るリョウ・ルーツ青年はその生身への傷もあるようだ。苦しげな声がユウの機体にまで聴こえてきた。

「許さねえぞ……」

「コクピットを開けて、お兄さん」

深紅の塗装をされたキュベレイが、リョウのコクピット・ドアをその手で叩き、早く開けるように促してきるのがユウの視界の片隅へと入る。

「アタシが傷を見る」

「うるせえ……」

そのリョウ・ルーツの弱々しい声、それを耳へ入れながらユウは付近の宙域、そのあちこちへマリオン・システムを起動させ続け、警戒を解かない。

「ミノフスキーが強すぎて、マリオンの目にすら影響が出ているか?」
と、ユウは言いつつも、実の所マリオン・システムに不都合が発生したと、それに安堵している部分は確かにあると言える。

「いまは苦痛の色しか、マリオンはこの場の宇宙に現してくれない……」

その疑似ニュータイプ装置、エグザムの派生進化とも言うべき品物の負の部分へ久しぶりに嫌気を感じながらも、ユウは自分の責務、この部隊へ再び驚異が迫らないように、マリオンの目でニューペガサス

達が放つ光を始めとした「宇宙の心」へ向けてその視線をじっと放つ。

「痛み止めのモルヒネ、打つか？」

「大した事はねえよ、嬢ちゃん」

リヨウ青年、彼の傷は致命傷では無いようではあるのだが。

「許せ、同士よ」

「早くしてね、カリウス」

生身の腕が引きちぎられ、それでも気丈に、昔からの仲間に出身の意思を伝えるネオ・ジオンの女。

「さらばだ」

「あたし、あんたとデートの一つでもしてみたかったよ」

「あの世へ俺も行く時が来たら、よろしく案内を頼む……」

ポウ……

小型のレーザーピストルで仲間へ慈悲の行為を行っている兵達の姿も確認が出来るからには、あのモビルアーマー達による追突、それは予想以上にこの混成軍へ被害を与えているようだ。

「許さない、か」

先程のリヨウ青年の言葉、いったんマリオンの目を中断させたユウはその言葉を口にした途端、自分の心の底へ何か、激しい物が沸き上がってくるのを自覚しながら。

「許せない、よな」

「ああ、許さねえ……」

再度にその言葉を彼、ユウ・カジマが呟くと同時に、続くようにしわがれた男の声、老いた兵の苦痛に満ちたその呻きが彼の耳へ入り込む。

ズウ……

「どいつもこいつも、お偉いさんの理想とやらは、俺から全てを奪ってくれる……」

ティターンスの老兵の機体「FAZZ」が引きずる、ほぼ原形をとどめないバギ・トীগ、ネオ・ジオン製のニュータイプ専用機。

「まさか、あのクソガキ……!!」

「俺が、俺が……」

その機体のコクピット周辺、そこは深く、抉られたように陥没をしている。微かにそのコクピット・ドアの周囲に窺える紅い色、それは……

「何をしたっていうんだ……」

「……」

「十年まえから、戦争とニュータイプとやらは俺から全てを奪っていく!!」

「ジイサン……」

「何が人類の革新とやらだ、人殺しめ!!」

一年戦争、今までに続く戦争は別にニュータイプ思想から始まったわけではない。が、ジオニズムにザビ家崇拜思想、スペースノイド達による自治権の獲得を含めた全てが。

「ニュータイプ思想、いやニュータイプそのものと捉えてもよいか……」

トウ、ウウオ……!!

コクピット内ですすり泣く老兵の声に、ユウは再度バギ・トーガの粉々となった軀、先程まで、確かに若い命が存在したそのモビルスーツへ視線を向ける。

「マリオンの小僧……」

どこか、昔のマリオン・ウエルチに似ていたその少年。

——ココロ——

「ん?」

何か、何処からか、ユウへと語りかけるような、優しい声。

——宇宙には心が満ちているんだ——

「こ、小僧……!?!」

その少年の声、今この瞬間にあの世へと旅立った者の声、それが再び、刹那と、しかし確かにユウの耳を打ったその瞬間。

スウオ……

「蒼い、宇宙……」

もはや、記憶からは遠い昔に失われた、十年の時を実感させてくれる確かな宇宙の色。

——良くも——

「しかし、十年の歳月は」

——悪くもヒトを求め人の心が——

「俺に、昔の俺に見えなかった物を見せてくれる……」

——世の中の罪を産み出す——

その少年の透明感がある声を耳へと入れているユウの目の宇宙、それが蒼から紅、織り混ざった紫、そして漆黒から万色、虹へ。

——怖い人にはならないでね、オジサン——

「クソガキ、お前がそんな生意気な忠告をしてくれるという事は」

かつて、パプテマス・シロッコ。木星帰りのニュータイプの男が理論的に解き明かしてくれた、宇宙の心。その漆黒にして万色の光が開き、閉じた。

「俺の心が、自然に取捨選択をしている、選り分けている」

——宇宙にはココロが漂っている——

「蒼の人の心と」

ユウ・カジマの目前、それへ拡がる宇宙には緑色、暖かさを強く感じさせるその光を帯びた蒼。

ブオウ……

そして、その蒼の合間を縫うように。

「紅黒、が見えている事が」

漆黒、その心を宿した紅。シヤア・アズナブルがノイエ・ローテの放ち続ける、ドス黒い流血の、昏い人の心の暗部を司る紅。

「解っているようだな、ボウヤ」

——オジサンが、その闇に惹き付けられているみたいだから——

「ごめん、クソガキ」

もしかしたら、この名も知らないニュータイプの少年、彼はGマリ

オンの両肩、かつてのニムバスが戦化粧として自らを染め上げた返り血、それにずっと恐怖を感じていたのかもしれない。

「とても短い間だったけど、大人げなくて」

——気にしないで——

「本当に大人げなくて、オジサンは悪かった」

——しつこいよ、オジサン——

「フフ……」

乾いた、その不器用な笑みと共に、ユウの双眸から僅かに流れ出る涙。

シィア……

光、宇宙の心が拡散していくと共に、少年の気配は消え去り、彼の顔。

「直接、生身で顔すら見合わせてないのにな……」

その薄れゆく少年の顔は、やはりどこかマリオンの少女、生きていれば既に三十代には差し掛かろうとしている、蒼い髪の少女のそれに。

——元気で、オジサン——

「大佐様である俺が、お前がよくなついていたあのジィサン、上手く取り計らっておいてやる」

——ありがとう——

どこか、何かが彼女に似ているように感じてしまっているユウは、ついある人物の名前を、女の名前をその唇から絞り出してしまう。

「達者でな、マリオン」

——誰だよ、マリオンってさ——

「さあ……」

——ボクには——

蒼と、紅の光が渦を巻き始める。

——ちゃんとしたユウ（そのあなた）という名前が——

「へえ……」

苦く笑うユウ・カジマの目前を、紅い光の奔流が勢いよく迸り、彼と少年を押し流した。

「気味が悪いぜ……」

「そう、ですな」

マスプロZZZのパイロット、リョウ青年と壮年のネオ・ジオンのパイロットが、この宙域へと浮かび揚がっている光を見つめながら、互いに軽く息をつく。

リイ、シイウウ……

「だがな、俺はさ」

その紅い、翳りを帯びた光。それはどうやら地球の方向から舞い上がって来ているようだ。

「このホタル共の気持ち、解る気がする」

「私もだよ、連邦兵」

ユウ・カジマ、連邦軍大佐が成り行き上に率いていく事になった混成軍、それらの内、約三割程度がニューペガサスとノイエ・ローテの激突により吹き飛ばされ、そのまま宇宙の藻屑と化している様子である。

「仇討ち、いけないと思うか、ジオンよ？」

「いや……」

先程そう大型機、純白のクイン・マンサを駆る女性パイロットからそう全軍へ伝えられた事を受け、何か、何かこの世の避けられぬコトワリに対し、この混成部隊の各パイロットの気持ちが揺れ動き、蠢く。

「私が七年前に行った連邦への戦いも、この気持ちを軸にしたものであった」

「七年前、デラーズの紛争の時のパイロットか、あんたは……」

「憎しみの光……」

そのネオ・ジオンのパイロットの虚ろな声、それに応えるかのよう

にリョウ青年は、攪拌されたデブリ帯へ漂う光へと、その視線を突と、瞬きもせずに睨み付ける。

「それだ、この紅い光は」

「各員、聴こえるか？」

先程、僅かな間ではあるが心神喪失状態となっていたらしい隊長、ユウ大佐からの通信が、掠れながらもリョウ・ルーツの機体コクピット内に響く。

「状況を取りまとめる」

そのGマリオン、隊長機からの声に対し、自機をそのユウ機へ近づける者、介抱をしあっている者、ただじつとその場で佇む者。

「今、我々がいる宙域から、離れてこそいるが」

全ての者が、ユウの声を無言で聴いている。

「小規模の、病院船を含んだ艦隊がある」

ギィユアア……!!

その声と同時に、どこか遠く離れた場所、その宙域へ凄まじい勢いで閃光、戦略兵器と思わしきその光が宇宙の闇を切り裂いた。

「我々の部隊はアムロ・レイとシャア・アズナブルから受けた損害状況から、このデブリを脱出し、そこへ避難するのが最善では、ある」

「まっつて、オジサン……」

その黒いキュベレイから発せられた少女の声、大規模戦略兵器使用の通信が各モビルスーツの疑似ニュータイプ波通信機から鳴り響く。その騒音の中でもハッキリと聞こえる声を発した彼女の機体キュベレイの肩を、赤い同型機の手が軽く嗜めるように押さえる。

「だが、俺は」

リィ……

その張り上げたユウの声、それと同時にこのスペース・デブリ帯、宇宙の雑木林へ舞い廻る紅い光が、一瞬にその輝きを増したかのように見えた。

「この場で全ての元凶を断ちたい」

そのユウ・カジマの声が意味する事、それが解らない者はこの場にはいないようである。

「ノイエ・ローテを撃滅する」

「難しいな……」

茶色の塗装をされ、その手に長大な槍「ランサー」を持つネオ・ジオンの最新モビルスーツ「ギラ・ドーガ」に乗る女性パイロットから、舌打ち混じりの険しい声が辺りへと響いた。

「許せないんだ」

「ン……」

実の所、この頷くような声を発した女性が乗るクイン・マンサ、白い塗装を施された重ニュータイプ専用モビルスーツがいつ、どこでの混成軍へ紛れ込んだのか、ユウには解らない。

（気がつかなかった、それでこんな目立つ女を見過ごした理由になるかな？）

チィ……

朗々と各員へ説明を拡げながら、内心で小さな疑問に首を傾げているユウ・カジマ、彼は。

リウ、リィ……

自らのGマリオン、その背部の推進器「グレイス」へ潜り込んだ、複数の紅い光には気がついていない。

「ゴミのように、無造作に俺達の仲間を屠殺された事を」

「ああ……」

「世界はニュータイプの理屈で動いているんじゃない」

ユウの言葉の合間に、老兵が漏らした憎しみに満ちた声にユウは心を痛めながらも、彼はしかりとした声を皆へ放ち続ける。

「強制は、しない」

その声を発した後、しばしの時が過ぎるのを、連邦軍大佐「ユウ・カジマ」は待つ。

「……」

無言を続ける混成軍の傍ら、ややに遠くの場所で戦いを続けていると思わしき、二匹の恐竜が放つ光をユウはじっと睨み付けている。

「もういいでしょう、ユウ大佐殿……」

リョウ青年からの声、その彼の言葉の僅かに間を置いて、同調する

かのような声が各モビルスーツから絞り出されるように漏れだす。

「俺達が奴等を見殺ししても、あんただけはノイエ・ローテへ突撃をするつもりなんですよ?」

「付き合うよ、中年」

そのリョウとナイジェルからの声、それに続き、他の機体が自らの武装チェックを、少しわざとらしくユウへ見せつけるかのように行うのに、Gマリオンを駆る混成軍隊長は苦笑いながらコーヒー、愛飲物ムラサメ・コーヒーをその手に取りだした。

「ユウ・カジマに異論のある者はおるか?」

「あん?」

突如、しゃしゃり出てきた白いクイン・マンサの、ややに高圧的なその言葉。

「なんだ、女?」

「あるものは、今ここで答えよ」

「ああ……!!」

ユウの声など無視し、なおも威圧の言葉を舌へ乗せる、この手の事に慣れていると思われるその女の声、それにネオ・ジオンの者がモビルスーツ越しにも畏まっていると見える挙動に、大佐ユウはその唇を軽く歪めてみせた。

「女、そう女か」

「いないようであるな、ユウ・カジマよ」

「だったら、最初から名乗り出てくれよ、全く……」

一度会ったきりではあるが、それでもこの女、あきらかに貴種でございという風の態度をとる彼女の声を忘れることは、そうそうにあるものではない。

「ハマーン様」

「なんだ、プルよ?」

ハマーン・カーン、ネオ・ジオンのナンバースリーだかそこの女宰相、彼女は勢いよく拳手をモビルスーツでしてのけた少女の声に答える。

「このユウ・カジマ、オジサンは憎しみを憎しみで返そうとしている

す」

「フム……」

「憎しみは憎しみを呼ぶだけかと……」

ハハッ……

その、およそ戦いを生業とするものには似つかわしくない声、少女の意見にリヨウ青年を始めとした、一部の兵から失笑が漏れだした。

「ああ、嬢ちゃん……」

「プル、プルですよ」

「今の君にさ」

そこで、ユウはいったん言葉を切り、残りのムラサメ・コーヒーを使い僅かにその唇と、舌を濡らす。

「敵が撃てるのか？」

「だけど、大佐さん……」

「俺はシャアが、ニュータイプが憎い」

グウラ……

その、最後のユウ・カジマの声に含まれた、静かながらも凄まじい怒気。それに対し少女、そして彼女の意見を嗤った、リヨウを始めとした周囲の者もその言葉に吞まれ、自然に機体を身じろぎさせてしま

い。
ゴ、クウ……

誰かが唾を飲み込む音がユウの耳へ聴こえた。

「だけど、大佐さん」

ユウの恐ろしさに身を竦ませているプルと言うらしき少女の代わりに、赤い同型のキュベレイへと乗る、そのプルとよく似た声の少女がその身、モビルスーツ「キュベレイ」をユウのGマリオンへと近づけ、迫る。

「あんたは、シャアだけが憎いんじゃない」

「恥を知れ、プルツー」

「ハマーン様……」

成り行きを見守っていたハマーンの叱咤の声、それに言葉を失った少女はそれきりに口を閉ざした。

「ユウ・カジマ」

「ン……」

「どのみち、今はノイエ・ローテだけを狙え」

「解ってはいらさ、ハマーン・カーン……」

「それでも、上手くいくかどうかは賭け、であるからな」

待ち伏せか、罠を出して不意をつくか、そのどちらかに対ノイエ・ローテ「達」への意見がまとまり、各員武装や自機の点検を始めた生き残り達を尻目に、クイン・マンサの頭部コクピットを開きその身を宙へ浮かせたハマーン、彼女からの声がユウへと投げつけられる。

「ニュータイプってのはさ」

「何だよ、ユウ・カジマ……」

外の空気、とは言ってもノーマルスーツを纏ったままでの宇宙空間ではあるが、それでもコクピットから抜け出し、漆黒の宇宙へとその身を漂わせている二人の男女には気分転換になってはいるようだ。

「まるで、覗き魔じゃないか」

「全くだ」

そのハマーンの声、それにユウは微かに驚き、スーツ越しに彼女の顔を実と見つめる。

「人の心を覗き見る、まるで恥という物を知らない」

「ニュータイプにも、あんたのような考えの者がいたか……」

無遠慮に、女である自分の顔を覗き見るユウ・カジマの、それこそ言葉と行動の不一致にハマーンがその薄い唇を微かに綻ばせた。

「まるで、男が女に対して行う最大の愚劣なる行為だ、思わんか？」

「おい……」

宇宙へ舞う紅い光、その光にも負けないほど、ハマーンの今の際どい台詞に対し、年甲斐にもなくユウは頬を赤らめてしまう。

「思ったよりも、はしたない女だな、あんたは」

「私は痴漢の事を言っている」

クック……

その、軽く嫌みな含み笑いをあたかもユウに聴こえるように続けるハマーン。

「何を想像したか、お前は？」

「悪い女だな、あんたは」

「そうだと……」

フウ……

「シヤアにも、お前のような可愛いげがあればな……」

僅かな間、隙間の時間の会話を切り上げるように、その身をクイン・マンサへと泳がせるハマーン。

スウア……

宙を飛翔するハマーン・カーン、彼女の着衣しているノーマルスーツが浮かび上がらせている、女性ならではの優美な身体のラインは、確かに男を魅了できるだけの、魅力のある物と言える。

「全く、に……」

僅かに、そのハマーンの肢体に見とれてしまったユウは、その肩を軽く竦めてから彼女から視線を離れた。

「シヤアも見ろ目が無い……」

Gマリオン、ハマーンとは反対方向へその身体を投げ出したユウはネオ・ジオン総帥とハマーンのプライベートな関係などは知らない。しかし、それでもこの女が最後に呟いた台詞は単なる知り合い同士、仲間同士が口にするには想いが強すぎる言葉であろう。

ゴオウ……

「ニュータイプは」

Gマリオンのコクピットを開きながら、ユウは十年の呪詛、エグザム・システムを創り上げた男の言葉をその口の中で呻くように続ける。

「世界を滅ぼすモノだ……」

—— そうだ ——

「何!?!」

突如に、まさしく呪詛の如くに聴こえた、低い男の声。

——ニュータイプは世界を滅ぼす者だ——

「クルスト!!」

恐ろしいほどに強く、極めて鮮明に聴こえたその言葉、ユウはノーマルスーツがはち切れんとばかりにその首を、身体を揺らせ、周囲へ視線を配った。

「気の、せいかな……?」

しかし、そのノーマルスーツ内部、ユウの身体へと一瞬にして浮かんだ汗の玉は、はたして幻聴、空耳の類いで出来るものか。

「チツ……!!」

Gマリオンのコクピット、リニアシートにその身体を押し付けたユウは、脇のバイタル調整用のコードを自分が着る操縦服へと装備されている「受け口」へ差し入れ、無意味に汗ばんだ身体を整えようとする。

「まさか、クルスト博士は」

サアア……

人体生理調整機器によりスーツ内部へ冷たい風が疾り、僅かではあるが不快が取り除かれた自身の身体。

「クルスト・ズム・ダイクンは」

しかし、ユウの気持ちはすぐには落ち着かず、しばらく深呼吸をコクピット内で続け、何度も息を吸い、吐き出す。

「生きているのか……?」

無論、ブルーデイスティニー5号機、Gマリオン内で呻く、そのユウの言葉に答える者はいなかった。

第68話 幻影のラープラス（後編）

ジャアア……!!

ソーラ・システムⅢの照射が超大型質量兵器アクシズ等の後方、ややに主戦場から離れた宙域へ展開する小型スペース・デブリや小規模惑星等、地球へ向けられた小型の破壊槌達を消滅させている。

「ミノフスキー粒子って」

強烈な閃光が人体への悪影響、主に眼を守る為に巡洋空母艦ストウラートの全ての「窓」は閉ざされ、常夜灯に照らされる艦内は薄暗い。この部屋に關してもほとんど灯りが消えている。

「結局、何ですかねえ？」

「不勉強よ、カツ」

とは言いつつも、サラもその宇宙世紀の在り方を変えた、未曾有の粒子について多くを知っているわけではない。

「自分じゃ解けないから、こうして聞いているんじゃないか、サラ」
「全くだな」

その意外な人物、パプテマス・シロッコからの援護射撃に、カツはその自身のつぶらな瞳を丸く見開き驚いてみせる。

「溶けない時は他者へ頼むのが一番だ」

スウ……

そう自分を納得させるようにシロッコは呟いた後、彼は先程から格闘をしているカップのアイスクリーム「がちり濃厚食パン味」をカツへと放り投げた。

「それを溶いてみる、小僧」

「いいですけど、ね」

ニュータイプ研究所であるムラサメがイメージアップの為に設立した飲料、食料品部門へ対抗して、同じ種別の研究所であるオーガスが立ち上げたダミー会社からの新製品をその両手へと包みながら、意味ありげにカツは軽く口の端を上げてみせる。

「その代償として、シロッコさん」

異様に硬いその謎アイス、それを溶かす方法を考えながら、カツは何かを指し示すかのようにシャツターが降りている窓の外の宇宙空間、その方向へと自分の人差し指の先を向けた。

「ミノフスキー、凡俗のお前の頭で解るかな？」

「そのように説明をお願いしますよ、天才さん……」

その二人の会話、薄暗い部屋の中では表情こそ解らないが、他の三人、サラにシドレ、そして技師アルフもシロツコの発言に注目をしていることが場の雰囲気でもカツには解る。

「まあ、一言で言う」と

がちり濃厚、そのアイス・カップから伝わる冷気を我慢しながらカツはシロツコのその次の言葉を待ち、口の中の唾を喉仏へと流した。

「異次元から呼び出される神の恩寵、マナでありグレイスだ」

カツ、ガツ……!!

そのそっけないシロツコの言葉、それにはすぐにカツは答えずに頂面でアイスへフォークを叩きつける。

「堅いよなあ、その冷凍菓子は」

「んん……」

どこかからかうようなシロツコのその声、彼の言葉にカツはすぐには反応せず、暗い天井を見上げながらアイスから一旦手を離し、彼は自分の目頭を冷えた指手で軽く捻った。

「バカにしていますよね、僕を？」

「フフ……」

「君までシロツコさんの味方、シドレ？」

しばしアイスが叩かれる音が響くのみであった室内に、微かな怒気を含んだカツの言葉、それがボツリと彼の口から放たれた事に、シドレが少しだけ漏らす笑い声。

「バカにはしているよ、小僧」

「ジ・オの一件で？」

「まあ、な……」

廃棄予定だったとはいえ、戦力不足の為にジ・オ、シロツコが自身の傑作だと公言をしていた機体が急遽カツへ渡された事は、モビル

スーツ操縦技術にもニュータイプの能力にも及ばない彼カツが操縦することには、シロツコとしては不満があるのであろう。

「ただし」

ブウン……

「理論的には間違った表現ではない」

シロツコが何を思ったか、室内に備えつけられているホロ・ムービー再生器のスイッチを入れ始める。謎の音楽と共に立体ホログラムへと映しだされだした、映像の程度がえらく悪い動画が暗い室内を照らし始めた。

「そうだろう、アルフ技師？」

「そうだな」

ミノフスキー粒子群が存在する相転移空間というもの、それが人間にとって直接の認識が出来ない以上、シロツコの言う異世界からの来訪者という表現は間違っていない。

「ミノフスキー博士が青写真を立てた発生器、魔力召喚の方陣から呼び出して、エネルギーとして活用する」

とはいえ、シロツコへ領き賛同をしたアルフ、技術畑の人間にとってはいくらか概念的にその言葉が正しくとも。

「ただけない表現だな、科学的には」

「ロマンティックな言い方だろうか？」

「フン……」

ムービーはどうやら洋画、昔の旧世紀の品物のようである。シロツコには懐古主義でもあったのであろうか。

ガア……

「入っていいか？」

「もう入っているじゃない、フィリップさん」

「悪い悪い、サラちゃん……」

非常灯が照らす通路から、これまた暗い部屋の中へ入ったフィリップの視界には、謎の打撃音を響き出させているカツに妙なホログラム、その光景に彼フィリップ、モルモット隊の総隊長である彼は自分のこめかみを軽く拳で叩き、その横の眸の目蓋をパチパチと合わせて

みせた。

「怪談部屋かい、ここは？」

「異世界からの物質転生に関する話の最中だ」

何かそのアルフの言葉に影響を受けたか、フィリップにはその部屋のクーラーの温度が異様に低いように感じられる。

「あー、ええと……」

僅かにその皮膚へ鳥肌を立たせながら、彼フィリップは軽く咳払いをし、僅かにその声を張り上げた。

「誰か一人、パイロットとして手を貸してくれい」

「手を貸す？」

そのアルフの言葉、それにフィリップは手土産として持ってきた食べ物が入った袋を彼へ渡しながら、サラだかカツだかの顔をぐるりと見やる。

「どうも、サマナのZZがぶっ壊れたらしい」

「いつかは来ると思っていたよ」

薄く笑いながら、受け取った袋の中身ををガサガサとまさぐるアルフの技師としての視点からすれば。

「アニメじゃないんだ……」

ZZガンダムの整備にはうんざりをしていた所だ。あまりにも他機能、複雑な作りに過ぎる。

「私が行きます」

「頼む、シドレちゃん」

「あまり、興味の無い話でしたから」

「フウン……」

壁へと寄りかかっていたまま、本当に何かつまらなそうにそう呟くシドレ少尉。

トウ……

足早に部屋から出ていくシドレへ対し、フィリップは一枚の書類を手渡した。

「ジェガン、コイツを使ってくれ」

「メイブーク、あれは気に入らんか、フィリップ？」

シロツコがフィリップへ声を投げかけながら見ているホロ・ムービー、どうやらそれは、まさしく今現在にこの低く照明が落とされた薄暗い部屋、その雰囲気に合った怪談物のようである。彼の以外の趣味にフィリップとアルフはその顔を見合せ、その口の端を軽く互いに歪める。

「メイプーク・サマーンは完全な支援機、電子戦機だ」
「なるほど」

フオ……

一瞬、部屋の電灯が明るく光る。が、三秒もしない内にまた部屋の中は暗闇に包まれた。

「火力を持ったモビルスーツが必要なんだ」

「例の戦場漁り達への対抗か」

特に関心が無さそうにそう答えるシロツコの目の先では、なにやら上半身が裸の女性が奇怪な踊りを踊っている映像が浮かぶ。

「ポルノじゃないですか、やだー!!」

「ポルノ作品ではない、サラ」

そのムービーを見て黄色い声を上げたサラの言葉に、袋から菓子パンを取り出してその口へ含んだアルフがその作品の名前をパツケージ、ムービーカードが収められていたそれから読み取りながらそのくわえたパンへ歯を立てた。

「死霊のフェスティバル・ダンスか……」

「素晴らしい作品だよ、アルフ技師」

「全く画像、背景と人物の変化が無い」

「凡人には理解が出来ない名画、ムービーだよ」

シャ……

部屋の自動ドアが閉じ、フィリップ達が立ち去っていく足音をその耳へ聞きながら、カツが堅いアイスクリームをそのムービー再生器、モニターのそばの小さなテーブルへと置く。

「何のつもりだ、小僧?」

「いや、熱で」

怪しげなジェスチャー、腕の動きをみせながら、カツがアイスとホ

ロムービーへと指を差した。

「なるほどな」

「それよりも、シロッコさん」

「どうやら、アイスをモニター等が発する熱で溶かそうと考えたらしいカツはそのムービー内、立体映像へその手を差し入れながらシロッコの顔を実と見る。」

「ミノフスキー粒子とその、ラプ何とか」

「ラプラス・エーテルだよ、小僧」

スウ……

カツへとアルフがそう答えた途端、またしても電灯が不安定に灯る。ソーラ・システムから放たれた光が何か、周囲の宙域へ電磁波だかを発生させているのかもしれない。

「ブリッジの面子が色々調整しているのかもな……」

「ラプラス・エーテルとやらは何なのですか、シロッコさん？」

モソモソとパンをしがみながら、ぼやいた声を出すアルフをよそに、カツはその顔をシロッコへと詰め寄らせている。

「核兵器、放射性物質は知っているな？」

「んう……」

「答えんか、小僧」

パフウ……

室内の電灯が一際大きく灯ると共に、ゆっくりと窓側の遮光壁が上がり始める。ソーラ・システムの照射が終了したのかもしれない。

「いちいちと、当たり前前の事を僕に訊ねるのはどういう意味ですか、シロッコさん？」

「放射性物質というものは人間が無の場所、何もない所から造り出した物かな？」

「明るくなつた室内へと浮かび上がる小さな人影、ホログラフで表現をされた半裸の女性、ムービーの登場人物がその光の中で躍り狂う姿は実に滑稽なものと言える。」

「自然界に存在、は一応するよな……」

少し歳のせいかな、または一筋縄ではいかないニュータイプ研究所の

面子と渡り合ったせいかな、このアルフ・カムラという技師は自分が興味がある話題を誰かが持ち出した時、あえて気のないフリ、いわゆる「ポーズ」をして見せるような傾向が備わってきているようだ。

「その自然にある放射性物質に対する科学的処置、それを誰が思い付いたか、俺は知らんがね……」

「そして」

アルフにしてみても、最新のブルーディスティニー、Gマリオンに
関係のある話題なだけに、フィリップとミリー、ストウラートのモビル
スーツ隊隊長と通信士の男女が作ったお手製のパンをその口でし
がみながら、もその両耳はしっかりと立てているお様子だ。

「地球へ降り注いだ隕石等からも放たれている」

「習ったことは、ありますねえ……」

フウア……

一つあくびをしてからシロツコへそう答えるサラ。彼女の目線の
先にはホログラフ再生器から浮かぶ、永遠と躍り続けている半裸の女
性達。それを見つめ続けていたサラは何やら妙な眠気を感じ始めて
いる。

「古代の人間は、それらの放射性物質の危険性を科学的には解明出来
なかったはずだが」

「そりゃあ、そう……」

「肌で感じる、毒物やら呪いとして認識していた可能性は高いだろう、
小僧」

トツ……

そのシロツコの言葉にすぐには答えず、カツはホロムービーの映像
の近くに置いてあったアイスをその手に取り、中身の様子を確かめ
た。

「どうやら、未だに溶けない、食べられない感じですね」

「理解に苦しむ冷凍菓子だよ、全く……」

「一体、どんな材料を使っているよのやら」

「私を知るもんか、小僧」

永遠と続くフェスティバル・ダンスを踊る女達を前に、シロツコは

その口を綻ばせながらフィリップが持つてきた袋、差し入れが入ったそれへと。

「少し頂くぞ、アルフ」

「ああ、どうぞ……」

パイロット・スーツや長袖の服を纏う事が多い、常の彼の姿からは意外に思うほどに逞しくも、しなやかさが窺えるその腕を突き込んだ。

「人間はたとえその原理、材料の性質が解らなくても、使えるものは何でも使おうとする」

フィリップの差し入れ、そこからチューブへと入った何か、宇宙服を身に纏った時の為の食事、流動食を目ざとくシロツコは見つけたし、それへ記載をされているラベルにその目を通す。

「自分達、人体の心臓がなぜ動いているか、それも解らないくせにだよ」

「気合いでしょ、気合い……」

「ホウ……」

どこか投げやりな、カツのその理論を無視した言葉。少し彼はシロツコが展開させる話に疲れてきたのかもしれない。

ククツ……

フィリップ・パン商店の試作品「どろり濃厚食パン味」と書かれてあるそのラベルを興味深そうに眺めながら、忍び笑いも冷笑とも取れない笑みを浮かべるシロツコに対し、カツのみならずサラやアルフも批難のその視線を小さく向けた。

「シロツコ様、そのカツへの態度」

「いや、待てサラ」

めずらしく自身が敬愛しているニュータイプ、パプテマス・シロツコへ対し、憤慨したような表情をその面に浮かべているサラへ。

「んん……?」

カツが何か不思議な物を見るような視線、双眸から疑問の光を投げつけている。

「私も少し腹が立ちましたわよ?」

「だから違うよ、サラ……」

何か後先に、どこかの研究所から盗作疑惑が出されそうな名前の流動食へその口をつけながら、シロッコはようやく終わった「死霊のフェスティバル・ダンス」とやらのムービー再生器へその手を置き、立体映像をかき消す。

「私も実のところ、小僧と同じローマンを持っていたからだ」

「へえ……」

「はい……」

自分の携帯端末へ通信が入り、その画面を眺めるアルフ技師がシロッコの顔を見ないままに、どこか感心をしたような声を上げた。

「意外だな、シロッコ」

「で、なければ」

モエアガレ、モエアガレ……

シロッコ、そしてカツやサラ達への端末へも連絡が入る。カツのそのアニメの着信音は他の友人からの何気ない、私用の時の物であるらしいが。

「筋肉のリングゴが脈動をし続ける事への理論的な納得が、私には出来ない」

シロッコの古びた端末がならずクラシックは軍務のそれであるらしい。真剣な表情でその小型モニターへと浮かぶ文字を追う彼へ、カツがやや早口に問いをかけた。

「もしかして、シロッコさんは」

「何だ？」

「ボクらに解るように、気を使ってミノフスキーの説明をしてくれた？」

「何故、そう思う？」

ホロムービーを片付け、室内の片隅の壁へと掛けてある大鏡にシロッコは向かいながらも、カツのその言葉には興味深そうに返事を返す、耳を傾けてくれている様子がはた目からもうかがえる。

「ラプラス・エーテルとやら、何となく解りました……」

「言ってみるんだな、小僧」

髪型を整え、着衣のシワを気にしながら、シロッコは自分のポケットへファイリッポの作った流動食をねじり込み、やや早足でドアへと向かって歩きだした。

「ミノフスキー博士、この粒子を確認した科学者の前に!!」

「悪い、お前への宿題にさせておく!!」

再度、端末の文字へ素早く目を疾らせながら、シロッコは早口にカツへとそう言葉を投げつける。

「SFのダークマター、暗黒物質みたいにそれを霊的物質エーテルとして捉えた、存在を確認した人がいた!!」

「宿題だといっているのに、この場でやり終えるのは賢しいな、小僧!!」

「そして、それを通信媒体と考えてえ!」

「そこまでは私も確定出来んよ……!!」

「じゃ……」

そう不快さを隠さずにカツへと言い放ったシロッコは、自動ドアへその身を飛び込ませ、あわただしく部屋から出ていった。

「どうかなあ、どう思うよサラ!」

「さて、ねえ……」

何かシロッコに対して劣等感、そのような潜在的な心理から来る反動として現れる、今の勝ち誇ったようなカツの表情はサラにとつて気分が良いものではない。

「所詮は、誰がミノフスキー粒子とやらを先に見つけた事を大袈裟にしているだけでしょ?」

「うーん……」

「別にどうでもいいでしょ、そんな名誉争いは?」

そのサラの言葉、男性原理を嘲笑う女の理屈にはカツよりもアルフ、技術者である彼の方が耳が痛く感じているようだ。

「俺としちゃ、粒子の特許権を放棄した実績があるミノフスキー博士に、尊敬の念があるんだけどなあ……」

そのミノフスキー博士、彼自身もその彼の名を冠した粒子と同じくらいには謎が、プライベート・データが明かされていない男である。

「みんな大好き、ミノフスキー……」

アルフ達のような業界にいる人間にとって、それはとても歯がゆい。

「シドレちゃん」

「はい」

シロツコ自慢の電子戦機、サイコミユ波を含めあらゆる「通信媒体」に関わる制御を可能としているメイプーク・サマーン。

「さっきの怪談部屋で話していた、つまらない話ってのはなんだい？」

「大した話じゃありませんよ、フィリップさん」

乙ガンダムを始めとした並みのガンダム・タイプよりも遙かにデラックスなコストをその機器へと注ぎ込まれている電子戦モビルスーツ。その隣へとそびえ立つジェガンへ乗り込むシドレへ対し、フィリップが何かからかうような声をかけた。

「ラプラス・エーテルに関する話です」

「Gマリオン、ユウへ送った機体に付着する謎の単語だな？」

「本当に、大した話じゃあない」

そのシドレの、どこか慌てたような声が向けられたフィリップが乗る、焦げた茶色の塗装を施されたブループラウス、名前に矛盾があるその機体は廃棄処分にされる所を、戦力不足により急遽ジ・オと共に復活させた機体、かつてのユウ・カジマの愛機である。

「みんな、私は知っていた話ですから」

「ヘーエ？」

自分から話を振りかけた割りには、そのエーテル何かという物は実の所にブループラウスへと乗るフィリップにはあまり関心がない話、話題だったのかもしれない。シドレへ生返事を返しながらモット隊の隊長「フィリップ・ヒューズ」は。

「インテリ大将のご出馬、ってね」

「ファイ……」

自らが乗る指揮官機からややに後方へと置かれているジオ・メシア。シロツコの専用機がゴテゴテと追加ブースターを付けてスタン・バイをしている勇ましい姿であるそれへ、ファイリッパは軽く口笛を吹いてみせる。

「遊軍任務、一人での単独行動をを志願していたようだがさ、シドレちゃん」

「そのようですね」

「あの過労ニュータイプさんは何をしでかすつもりなのかね？」

「あの人への人助けでは？」

「んん、シドレちゃんよ……？」

そのシドレの言葉、それにやや引つ掛かる物を感じたファイリッパは、大型運搬機、サブ・フライト・システム（SFS）へもと跨がっているジオ・メシア、異形Zガンダムとも言うべきその機体へ再度その視線を向けながら。

「その人助けが正しかったとしてもさ」

「はい」

「ユウの事、ではないかもな」

ややファイリッパのその真剣味を帯びたその言葉、それに対しシドレは少しその両眉をひそめ、不快そうな表情をジエガン、ジエダⅡともいうべき新型量産機の中で浮かべてみせた。

「何故、そう思うのです？」

「もう一人、俺達の上官筋にあたる男が引き込もっていたな」

シミュレート上のデータも含まれているとはいえ、すでにユウ・カジマの能力、パイロットとして見ても、部隊指揮官としての実力も彼を上回っているという事を。

「上官、筋……？」

このネオ・ジオンとの戦い、大戦争の中で幾度となく証明してみせた、この二代目モルモット隊の隊長の言葉、直感のそれには。

「誰でしたっけ……？」

「にぶいなあ、シドレちゃん」

「うーん……」

並みのニュータイプ、シロツコ風の言い方をすれば凡人ニュータイプであるシドレやサラ、カツのその感性の先を行く事があることを、すでにシドレはこの数カ月間の戦いの中で確信が出来ていた。

第69話 可能性のハングド・マン

「宇宙難民の中に潜んで」

マリオンの目、それがアムロとシャアの再接近を知らせる事はうれしい事か、あの世へ旅立つサインかは、ユウ・カジマにしてもよく解らない。

「何をしたかったんだ、アンタは？」

「頭数、スペースノイドの母数を増やすためさ」

難民、野盗、そして各軍からの脱走兵、それらは全てこの「十年戦争」によって生まれたものだ。

「戦後に、数で地球連邦を圧倒させる」

「だとしたら、さ」

少し言っただけかと思ふ事ではあるが、それでもユウは傍らへと立つクイン・マンサのパイロット「ハマーン・カーン」へ向けて愚痴の一つでも言いた気分である。

「アクシズを含む三連の小惑星、それを落とすのを黙認しても、お前たちにはよかったのでは？」

「ゼダンはすでに動きを停止させる手筈にあるし、ピナクルはお前達が止められるだろう？」

「そういう問題じゃない……」

トウ……

ユウのGマリオン、運搬機ランプライトに乗るその蒼い機体の両手がキンキラのこれまたに運搬機、追加武装システムでもある「ベルコート」の尻を、マニピレータとコネクター接続で抱き抱えていた。「シャアと止めるか止めないか、その姿勢をハッキリと表してほしかったよ、戦争前に」

「私は女であるからなあ……」

「都合の良いときだけ女を武器にしてくれる……」

グウア……

軽く、クイン・マンサの巨体、通常モビルスーツよりも二回り以上

は優にあるその体躯が静かに揺らぐ。

「巨（おお）きな、女か」

「セクハラ的な言葉、私は好かぬぞ？」

「言ってる……」

Gマリオンの「目」に疑似波を利用した大規模兵器接近警報器、そしてハマーンを始めとしたニュータイプ共の勘、それらがあと数分後にアムロ・レイとシャアの機体がこの宙域へ接近することを複合して示す。

「だがな、ユウ・カジマ」

「フウア……」

そのクイーン、純白のドレスを纏った女王である大型機の、どこか落ち着きの無い動き、妙にフワついた挙動は。

「女、か……」

彼女の心の状態を表しているのかもしれないと、ユウは思ってしまった。

「あたしの思惑、それは」

「何だよ？」

そのシャア達へ対するおとり、それに買って出たハマーンという女には、一応の信頼を寄せる事が出来るとユウは考えている、のではあるが。

「私の思惑、それは結局の所」

「だから、何だ？」

「アクシズは地球へ落としたい」

そのハマーンの言葉、それに対してすぐには即答しないのが、ユウの大人が成す対応であろう。彼を用心深くさせてくれたのだ、この十年戦争の日々は。

「だが、シャアはどうにかして止める」

「結局はスペースノイドと女の理屈か」

「ミネバ様もそれをお望みだよ、ユウ・カジマ」

「フウア……」

ややこしく、矛盾も含むそのハマーンという言葉、だがそれに対しては正直な所、ユウは「知ったこと」ではない。

「シヤアを討つ算段、あるとは言っていたな？」

「約、五個程の手段がな」

「さすがは女狐」

「フフン……」

別にユウは彼女を褒めたつもりはないのだが、僅かにハマーンの機嫌の良さがユウの脳髓へと感じられる。

「このようなニュータイプ・コミュニケーションならば、気分はいいものだがな」

どちらにしろ、このハマーンという女、彼女の気持ちが解る、理解できるという自分の状態、それは別の意味でも今のユウにとつては有り難い。

「チンドン屋、私はやってくるよ……」

「各員、準備はよろし？」

ハマーンの機体はその身をデブリ帯から進み出すと共に、ユウは指揮下の各モビルスーツ達へ号令を出す。

「恨み晴さしておくべきか、だよ」

「任せろ、中年」

その二人、リョウ青年とナイジエルの威勢と冷静さが混じった声は良いのだが。

「この老兵、老いぼれユーア、相討ち覚悟でもやってみせるさ……」

「ハマーンの作戦の為に必要な対人狙撃レーザーライフル」

憎しみや他の思惑の、錯綜した宇宙の心。

「壊さないようにしないと……」

「あたしはミネバ様の友達、プルだから、友達の約束を果たさない……」

少し、不安定な要素を含む返答をする者達の声に、ユウは相手の機体性能に関わらず、厳しい戦いになると何気なく想像が出来てしまう。

「まあ、さ」

フオ、フオウ……

金色の運搬機ベルクートから僅かに飛び出す、ファンネル数器の準備運動をさせながら、ユウはムラサメ・コーヒーをグビりと飲み干す。「俺も人の事は言えないが……」

ポウ……

コーヒーの飲み過ぎによる尿パックを交換し、その充満したパックを外へ放り投げたユウへ、紅く塗装をされたキュベレイが静かに近寄る。

「立ちションという奴かな、ユウさん？」

「うるさい、悪趣味小娘」

黒いキュベレイに乗る少女とは姉妹らしき彼女のからかいの声へ答えながらも、ユウは初めてのファンネル制御に悪戦苦闘を強いられ、その額に軽く汗をかく。

「ファンネル、あんたもやはりニュータイプか」

「疑似ニュータイプ波発生器による支援と、雀の涙程の俺のニュータイプ能力とやらで、コイツらを動かしている」

「何故、そこまで無理をしてファンネルを使おうとする？」

「少し、な」

思い付きというものはあまり上手くいくことはないのだが、それでもユウには試したい事、戦術があった。

「もしかしたら、かなりのリターンが見込める方法が取れるかもしれないんだ」

「生兵法、その言葉位はしってるよな？」

「解っちゃいるがね」

シィ、ジィア……

脳波で機械を動かす、ユウにとってそれは全くの暗闇の中でドット単位の光をイメージするような、実に心細い戦いかたではあるが。

「まあ、結局の所に問題は」

ムオ……

わざとらしく、ユウへ見せつけるかのようにキュベレイから自分のファンネルを優雅に操ってみせるこの小娘の当てこすりに少しむっ

としながらも、ユウの初体験ファンネルは不器用に残骸に満ちている宙を舞う。

「俺に、実戦に耐えうる明確なニュータイプ能力、忌まわしいその力があるかどうかなのだがな……」

だが、先程の実験では、黙ってハマーンを少し「実験台」にさせてもらった時には、確かな手応えがユウにはあったのだ。

「マリオンか、エグザム・ファンネルはな」

「ふん、俗人どもが」

メガ・ブースターとサブ・フライト・システム「メルキャリバー」を自機「ジオ・メシア」から切り離し、その余波をもって目前のネモ・タイプのモビルスーツをその両角、ウェイブライダー形態時の先頭部分に形成されるビーム刃で切り裂きながら、シロッコは周囲の状況を確認する。

「機体種別的に連邦……」

宇宙へ散らばる野盗たち、今の戦いの第四だか第五勢力とも言えるそれらの「寄せ集め」達のお出ました。

「いやエウーゴの不平等分子とジオン系、それらの連合か？」

ギイイ……!!

数条のビームライフル、そしてザク・タイプからの射撃をいとも容易くシロッコはジオ・メシア、シロッコが手を貸したテイターンズ版Ζガンダムであるガブスレイ・タイプの派生機体とも言える高機動モビルスーツの特性をフルに生かし、再度にその対の角からビームの光を放つ。

「生意気なΖガンダムのコピー品が!!」

ジア……!!

再度シロッコ機によるビーム砲で同時に脇の二僚機を撃破された、

この野盗化したエウーゴ部隊を率いているリーダーらしきパイロットは、軽くその身を脅えの心に震わせこそする、が。

「しかし、今度は僕が撃つ番だよ!!」

ギア!!

その身体を竦ませながらも、その歳若いパイロットは果敢に自らのZ、そうZガンダムの後継と思しき機体を可変させ、シロッコへと迫り、ビーム砲の乱打を放つ。

「速いな、Zの不肖の息子のくせに!!」

「所詮はファーストZなんぞは、時代遅れのモビルスーツだよ、ティターンズ!!」

「同意しても良いが、したくもないな、エウーゴのならず者!!」

シロッコなりにZガンダムの長所を取り入れて作製したジオ・メシア、それを貶されて嫌な気分こそしたが、それ以前に。

「追い付いたア、救世主を名乗るらしきZガンダム!!」

「貴様、年頃の身分小僧か!？」

「悪いかよ、ティターンズ!!」

ザアン!!

エウーゴ機の手握られたビームサーベル、長大な特殊製のサーベルを恐るべき勢いでモビルスーツ形態へ戻りながら降り下ろすそのエウーゴの機体。

「あのアムロ・レイが十五、六の歳で初陣を成したのなら!!」

ジイ、ジイア……

急速に自機を反転させ、人型へとになりながら二刀のサーベルをもち手に構えて、どうにかシロッコはその高出力サーベルを防ごうとする。

「この僕がそれ以下の歳で聖戦にその身を投げて、おかしくはあるまい!!」

「クウ……!!」

グウウ……

「小僧が、生意気な……!!」

だが、この相手の機体性能は確かにこのジオ・メシアの能力、少な

くとも出力は完全に上回っている様子でシロッコは見た。

「単なる連邦の走狗に過ぎなかったブレックス・フォーラ!!」

ゴウン!!

シロッコ機の交差サーベルにハイパー・ビーム・サーベルを下方へ受け流され、僅かに体勢が崩ながらも、そのZの後継機は驚異的な機動でジオ・メシアの背後へ回り込む。

「そして、名があるパイロットらしい貴様とそのZモドキ!!」

ザア、ザフォ!!

素早くそのエウーゴのZタイプから身を離れたシロッコの機体へ、他の野盗機たちからのバズーカが追いつく。

「多勢に無勢、しかしに!!」

バズーカの弾速は容易に回避出来るほどの速度、しかしシロッコ機を追撃する機体が放つ紅い光条、新型のビーム放射システムを搭載したと思しきZガンダムからのライフル連打は無視出来ない。

「そして、このZⅢ（ズイー・トライ）の手土産に加えてな!!」

シロッコのビームランチャーが他の機体を撃ち抜く姿にも、その少年兵の威勢は全く衰える気配はない。他のエウーゴ兵へ気を取られているシロッコの背後へ自機のスラスターを噴かし、毒蛇のように不規則なマニニューバを駆使して、流星のごとくに這い寄る。

「ゼダンに居座る、ジャミトフさえも捕らえれば!!」

「そうそうにはさせるものかよ!!」

「このアンジェロが、やれる!!」

「賢しいだけの小僧が、盛るなよ!!」

フオフ!!

背へ取りついたらと一瞬の油断をしていたエウーゴ隊長機、その彼へ突如ジオ・メシアの腰の後部からサーベルが振り払われた。

「小細工を!!」

その、一瞬の彼の狼狽。それがこのパプテマス・シロッコという男へ、この小競り合いの勝利の方程式を組み立ててしまわせたのかもしれない。

ジア!!

「どこに貴様の負けが仕組まれていると思う!?!」

「たかが、僕の両手をつかんだだけで!!」

急旋回をし、シロッコは自らのジオ・メシアの両手でそのZガンダムのタイプ・スリー、ズイー・トライの両手首を強く掴み、一気に押さえ込んだ。

「離せ、汚らわしい!!」

ボウ!!

ジオ・メシアのその顔の十三対のスリット、センサー・アイの内の一基がその擬装ビームでZⅢの頭部を焼き。

「何だと、隠しビーム砲?!」

続き、シロッコ機の股間部機関砲が、その新型Zガンダムの同位置、腰部の辺りへ弾丸を叩きつける。

「これが大人の、歴戦の戦いというものだ!!」

「やめろ!!」

「止めろと言われて、止める奴がいるものかよ!!」

バツ、ザウ!!

高機動機、それらの類いは構造的に間接部へ強度面の不安がある事を知っているシロッコ。彼の機体の隠し下部機関砲は、その弾丸を全てズイー・トライの下腹部、そして脚部の腰への付け根へと白い閃光を放ちながら撃ちきった。

「やめてくれエ!!」

グウン!!

「これ以上、僕アンジエロに何を!?!」

そのままシロッコは、何かに動揺に襲われている気配が感じられるパイロットが乗るズイー・トライの機体本体を、支援を始めた彼の仲間モバイルスーツからの火線へと対して盾代わり、防壁とする。

「アンジエロ!?!」

シロッコが行った狡猾な戦術、それにアンジエロというらしき名前をした少年の仲間と思われる女パイロットの声。しかし、無論に彼女の悲鳴で放たれた支援射撃の勢いが止まるはずがない。

「離せ、やめろ、ヤメテ!!」

「所詮は小僧か……」

別にシロッコにとつては「人間防壁」とさせたこのアンジェロという男がどうなろうと知ったことでない。そのまま彼が破壊をされて、続いてエウーゴ・ジオンの野盗達を次時破壊すればオーケーで、ある。「だが、私も」

パウ……!!

何か、瞬時に頭へとよぎった漆黒の、昏い光に導かれるかのように、直感的にアンジェロと名乗る少年の機体を蹴り飛ばし、放たれたマシンガン、バギ・ドーガからのそれを自らの「盾」を使つて防ぐシロッコ。

「甘くなったものだよな……」

パウ、グ……

旧型からの流用であつたそのマシンガンはジオ・メシアのビーム・シールド、試作段階だとはいえ、最先端技術で作られたその光の盾を撃ち破る事は出来ない。実弾が消滅していく音をコクピット内で聞きながら、シロッコはその手に持つビームランチャーを。

「見逃してやるよ、小僧達」

「貴様ア、名前は!？」

「パプテマス……」

ビーム砲の銃口をズイー・トライへ突き付けながら、冷たくその少年へ自身の名を告げようとするシロッコの。

——強者は——

「何だ……?？」

その視界に。

——世界を滅ぼす者だ——

漆黒の、どこまでも深いアビス（奈落）のような黒い闇の底が訪れた。

死神の吐息、あえて例えればタールのような匂いとその紅黒い天と漆黒の泥土に挟まれる。

「地獄……」

「そう地獄だよ、ティターンズ」

その一片の光もなき、常闇の宇宙に満ちた。

「この世は、力なき者、僕達のような者としてはな」

——ニュータイプは——

少年、アンジェロの声と共に、共鳴をするかのような死神の声。

「クルスト・ズム・ダイクン……」

しかし、シロッコという男は、木星帰りの男はこの暗黒の中でも、いずこからかの呪詛の声を聞いても、顔色一つをも変えない。

「僕たちの、そう可能性を奪う敵」

——敵、すなわちそれは強者なり——

少年の声に、クルストは唱和する。

「乱暴なる者達だ、乱暴をする……」

——ゆえに、ニュータイプは——

ゴウ……!!

アビスの闇が、急速にその生暖かい、タールの薫りを持つ空気を攪拌し始めた。

——世界を滅ぼすモノだ——

「何が、人類の可能性だよ……!!」

カツ、ハア……!!

少年の哄笑にも、シロッコという男は眉を一つ動かしたのみ。

「下らんな、つまらん俗世の話だ」

「可能性についてこれない者もいるんだよ……」

「解りきった世の摂理だよ、少年」

その、シロッコの声に、アンジェロ少年は。

「貴様を、殺す……!!」

憎悪の、たった今この戦争でシャア・アズナブル、ニュータイプの代名詞とも言える一人の男が、その身を焦がし尽くしている宇宙の心

を、その両の目へと宿して。

「同じ人間なのに、経ち場が違うお前を……」

「やってみせるんだな、少年」

「必ず、殺してやる!!」

「そう、か……」

——止めて、ニムバス——

少女の、誘い花のような甘い台詞が、このアビスの憎しみのさざ波と少年の視線にその身を、強く耐えさせているシロツコの耳を軽く打った。

「だとしたら、強くなれよ、アンジェロとやら……」

呪詛、憎しみの心、まつろわぬ者達の宇宙の心、それらの集合体。しかし、シロツコは耐える、耐えられる。

「アンジェロ!!」

空、血の色をした天から伸ばされる細い女の腕。

又ウ……

暗黒の宇宙の淀みを切り裂き、このアンジェロ少年の仲間が彼の、そのか細い身体を引きずり出そうと手を闇の中へと伸ばした。

「どのみち、ジャミトフ、ブレックスを売ってネオ・ジオンへと経ち場を築こうとした、あたし達レッド・ジオニズムの作戦は失敗だ!!」

「覚えていろ、ニュータイプ!!」

心、そのちっぽけな感情を、この澱む闇達に耐えられるパプテマス・シロツコは。

「私の名は、パプテマス・シロツコでも言っておこうか、少年」

良くも悪くも、強者なのだろう。

「忘れんぞ、俺の心を覗き込んだ事は!!」

——止め……て!!——

その悲鳴を上げる少年。彼の言葉の語尾は、毅然とこの闇の中でその脚を立たせる事が出来ている、彼シロツコの耳を再び強く打ち据える。

「私は何も聴いていないし、見てもいないよ、小僧」

「忘れんぞ、パプテマス・シロツコ……!!」

「私には品性がある、故にお前の心をすぐに忘れてやる」

「忘れんぞ……」

フウ……

その最後の叫びを放ったきり、少年の気配はこの地獄の闇から消え去った。

「やれやれ、実に俗物共は……」

感情を感じない、理解出来ない、あるいは下等な物と蔑む事と。

「私が、どうも」

感情に動かされない、セルフ・コントロールが出来るのとは、本質的に完全に違う、むしろ逆のものだ。

「宇宙に満ちた心、それに無関心だと思っているようだな」

とはいえ、それこそこの男、木星の管理社会で育ったパプテマス・シロッコが持つ傲慢さは、他者へ誤解を与えるのに充分な要素ではある。

「まあ、以前にドウガチに言われた忠告」

半年前に地球圏へ到着した、ジュピトリスの艦長代理の忠告である「少しは愛想笑いの一つでも使えるようになれ」という言葉。

「胸には秘めているさ、使うべき必要な場面、時が未だに無いだけで」とはいえ、そのドウガチという男の話を聞いた者は、彼シロッコがそれを守っているとは思わないだろう。

「いちいちにうるさい男だよ、あやつは」

その忠告自体を、そして今の呪詛に満ちた少年の言葉に「それがどうした」という態度をとっている限り。

「私のような天才に、少し歳が上だからと忠告とはな、不作法な奴め」ニュータイプとしてのコミュニケーション能力をあまりにも理論的に捉え過ぎている、父性の星の流儀をこの母性の星「地球」のそれよりも上質な物と、思い込み過ぎている限りには。

「さて、では私も……」

ズアウ……

シロッコの脚が、漆黒の泥へくるぶしの辺りまで深く沈みながらも、力強く前へと進む。

「俗世へ戻るとするか」

「ブレックス・フォーラのようだな」

「そういう君は……」

野盗達を蹴散らしたシロツコの目前には、一隻の連絡船。

「確か、パプテマス・シロッコ」

「私の声を知っていたか」

「ダカールの議会の時、会っていただろうか？」

「そうだったな……」

何か、随分と昔の話のような気がシロツコにはしたが、実際にはほんの五年も経っていない事のはずだ。

「無防備だと思わんか、このご時世にな？」

「身内に射たれる羽目になるとはな……」

「まさか、この期に及んで第二のカミーユ、そうカミーユ・ビダンでも作ろうとでもしたのか？」

「……」

先程の部隊を率いていた少年の実力、それは明らかに高い潜在能力を持つ少年のそれであり、ニュータイプの素質もあるとシロツコには感じられる。

「不幸な身の上の少年でな……」

「もういい」

ピシヤリとそう言い放った、このパプテマス・シロッコに対してブレックスはいまだに何かを言いかけたが。

「今はそれよりも」

「ジャミトフの事ではないかな、パプテマス・シロッコ？」

「フ、ム……？」

このエウーゴの代表が乗る連絡船の周囲には少数のモビルスーツ、

それらの残骸を見つめながらシロッコは暫しの間、その両目を軽く細める。

「まさか、な」

「何だ、パプテマス？」

「ジャミトフ・ハイマンの殺害か救出」

コウ……

その彼の言葉に、微かに連絡船の中がざわついたような物音がこのシロッコの耳へと入った。

「いや、おそらくは自発的な居座りの奴を……」

「救出、いや説得だよ」

深いため息と共に、どこか沈鬱な口調でそうジオ・メシア機内へ向けて答えてみせるブレックスの声に、シロッコはその薄い唇の端を僅かに上げる。

「今さら殺してどうするよ、パプテマス」

「最後まで俺に話させるよ、全く……」

コクピット内で愚痴るシロッコを何げなく無視し、その口をシヤラと疾らせ続けるブレックス・フォーラ。

「先発隊がすでにゼダン、旧ゼダンの門の上部小惑星にたどり着いているはずだ」

「私はその話は聴いていないな？」

「命令系統がなあ……」

と、言うよりもこのアクシズ落としの状況下、それではジャミトフ・ハイマンの勝手な振る舞いなどは後回しにされてしかるべきものなのだろう。

「ゼダンにネオ・ジオンの警備部隊はいたか？」

「いたが、すぐに降伏をしたらしいな」

「戦意が無いか、あるいは……」

「内のブルーの報告によれば、だ……」

ムウ……

「だから、人の話を遮るなと」

「ゼダンの核パルス・エンジンの、その制御方法すら、アツサリと喋っ

たようだ」

「フウン……」

生返事を返しながらも、シロッコは頭の中でその話の辻褄を合わせ、その推測をブレックスへ話そうと口を開き。

「おそらく、私が思うにはだが……」

「まず、ハマーンかそこらの辺りから言い含められていたのだろうか、だがしかしにだが……」

「ムウ……」

別に木星、ないし木星船団にもこのような人物はいるにはいた為、それほどシロッコにとっては目くじらを立てるほどではない。のだが。

「遮るのも、早口なのも気にいら……」

「ゼダンが核パルス・エンジンを停止させても、何か地球の重力へ引かれるような素振りをあの小惑星が見せているのは不可思議であると思……」

「ええと、確かブルーというのはジャミトフの娘であつ……」

「彼女ならばジャミトフの阿呆も説得が出来ると思い、私はブルー、ハイリオン・ハイマンへ命令を出してな、その連絡を」

「それにしても、迂闊で無かったかと思わ……」

ペラ、ベイラ……

「だが、まさかに私達の護衛隊の中にまでそのような内通、じゃなく卑怯者がいるとは確かに油断だった、しかも最新のズイー・トライを預けていたアムロ・レイの第三のビルじゃなくて、再来と見込んでいた彼が……」

「ジャミトフの説得、私も行って良いかな、ブ……」

「助かるが、後で私達も助けてくれい」

「ノー!!」

ザワア……

そのシロッコの心無い返事に、連絡船の内部がまたざわつき始めた。

「何と、器量が小さいニュータイプ!？」

「あ、いや違うジャミトフ」

「ジャミトフ!？」

「違う、ブレックスだコンブレックスだよ、お前は」

頭へ来る謎のプレッシャーに気を取られていたシロッコは、何故か自分の口から反射的に出てしまった否定の言葉、それを慌てて妙な二重の否定をする。

「コンプレックス、私がジャミトフのスケベ野郎にだど!？」

「お前の名は、ブレッツ、クス!!」

「ハア、ハ……」

「早く俗世から離れたい、私は……」

軽く、コクピット内で深呼吸をし、無駄な酸素の消費をしてしまったシロッコは僅かにヘルメット越しに額へ手を置きながら、深くため息をついた。

「分かった安心しろ」

「すまん、ツケはジャミトフに」

「悪いようにはせん」

「頼むよ、木星帰りのニュータイプ」

「どいつもこいつも、地球に巣食う連中は……」

先程の小僧達といい、シロッコにとっては全くもって無駄な時間であると言える、この宙域でのやり取りは。

「ジャミトフは私とは知らん仲ではないからな」

「だったら、最初から……」

「しかし、時代の流れが我々昔の学友を、戦争へ連れ出すという因果が地球取り巻き、そしてわーれらエウーゴもその理念をティターンズと共に失い、もはやむしろもはや自壊させた方が良いかと……」

「ガッ!!」

「所詮はパプテマス、ティターンズの手下!!」

「まあまあ……」

ジオ・メシアの拳が連絡船の外翼へ殴り掛かった事にエウーゴの面々が非難の声を上げる中。ブレックスが部下達をなだめている様子。

「大目に見ようじゃないか、みんな」

「……」

もはや何も答える気がしなくなったパプテマス・シロッコは。

フオウ……!!

痛む頭を抑えながら、グレイス・コンバンター、ユウ・カジマの機体へ双発型として搭載されているその初期型、試作タイプ改修型へと火を入れ。

「ジャミトフを頼んだよ、シロッコ君」

「貴様に馴れ馴れしく君づけされる筋合いは無い!!」

光の軌跡を残しながら、とつとつこの、シロッコのサイドから見れば不愉快な人物から物理的に大きく距離を置いた。

第70話 魂の上で雷鳴はその手を拍する（前編）

「ぞろぞろと、ぞろぞろと!!」

突如、自分へ攻撃を仕掛けてきたハマーンのクイン・マンサのファンネルを撃ち落とした途端に、デブリ帯から猛攻を仕掛けてきたモビルスーツ達へ向けて、シヤアは驚きとも嘲りとも取れない笑い声を張り上げた。

「よくよくに私を倒す算段を立てたようだな、ハマーンよ!!」

「そう、私を買いかぶってくれるなら!!」

「シヤア!!」

半壊をしたルーGP、アムロ・レイ専用モビルアーマーとシヤアの機体の間に入る形となったハマーン機。彼女の純白の大型機から、搭載された最大数のファンネルが宙域を舞い、ノイエ・ローテへと牽制をかける。

「やりやすいな、シヤア!!」

「もうあと一步で、アムロを仕留める事が出来た物を!!」

「だとすれば、な!!」

一瞬の間、後方へと振り返ったハマーンの視界には、長大な主力ビーム砲を切断され、防衛システムであるIフィールド発生器もろとも機体を半壊されたニューペガサスの無惨な姿。

「ユウ・カジマの無茶な判断は正しかったということでもあるな!!」

「ホウ!?!」

ハマーンの乗るクイン・マンサ。紅い光を放ちながら宙を泳ぐノイエ・ローテの量産機であるその機体も、並みのモビルスーツの二倍近い全高、そして体躯を誇るが。

「ガアオウ!!」

「あの男、ユウもいるのか、ハマーンよ!!」

「悪しきニュータイプを裁く、そのような信念をあやつは!!」

ノイエ・ローテ、赤い妖花はそのクイン・マンサのさらに倍以上の巨躯を誇り、さらにハマーンが放つファンネルの射撃をことごとくか

わす機動性、あるいはそのサイコミユ端末を迎撃するシャア・アズナブルが駆るその巨機体は。

「持っているみたいではあるな!!」

「その、オールドタイプの願望のみで!!」

ジオン・メカニックの結晶、モビルスーツ技術の先駆者であるジオン公国の技術者達が造り出した、最強の機動兵器である事には疑いようはない。ハマーンからのファンネルに継ぎ、暗礁宙域から吐き出された火線の数々をも。

「世の中を!!」

「あのデカブツめ、早すぎるぜ!!」

「オールドタイプごときが世の中をな!!」

リョウ青年のマスプロ・ダブルゼータや連邦兵ライラの鹵獲機からのメガビームなど、全くに無視を、機体へかすらせもせず、シャアの哄笑と共にノイエ・ローテの残像が漆黒の宙へと舞う。

「動かせるものでは、決してない!!」

「だがな、シャア・アズナブル!!」

ギイイア!!

Gマリオン、ユウ・カジマの機体頭部、バイザーヘルムが鈍く輝きながら、強烈なスピードでハマーン機達によって誘導させられたノイエ・ローテへと迫りくる。

「そのオールドタイプを見下すニュータイプ!!」

軽く彼ユウの視線を追おうブラック・アウト、痛みを伝える腹部、激しい頭痛。

——EXAM・SYSTEM・STANDBY——

そして明らかに幻聴であると解る、古の呪縛の言葉が脳裏へ疾っているユウ・カジマの心の奥底で燃えたぎる焰。

「それを、この連邦の騎士である!!」

そのユウ機の背から放たれる紅い光の羽根、それを追うように連邦の騎士が率いる混成軍第二部隊が、ノイエ・ローテへと肉薄を試みている。

「EXAMの騎士である、このユウ・カジマが!!」

ブアア!!

彼ユウ・カジマの背後につき従う、二機の色違いのキュベレイ・タイプ。彼女達の機体からファンネルによる猛攻がシャアの機体を取り囲む中、第四部隊の一部が蛇行をしているニューペガサスの巨体へと近づく姿が見受けられた。

「裁こうというのだ!!」

「オールドタイプがこの私を裁くなど!!」

プル、プルツーンと言う名を持つキュベレイのパイロット達が放ったファンネル群、それが。

「ファンネル達が、燃え尽きた!?!」

ノイエ・ローテお得意の対空砲火で迎撃されたのではない。何か、その妖花から放たれた赤黒い光がその触手を伸ばし、サイコミュ端末を絡めとったのだ。

「これが、真のニュータイプの力!!」

「なめやがって!!」

第四部隊へ所属する、長大な実体槍を構えた茶の塗装が施されたギラ・ドーガを駆る年配の女性パイロットが悪態をつくなか。

「ジオン・ズム・ダイクンが息子である私が持つべき、選ばれしニュータイプのパワーだよ!!」

「何がニュータイプだ!!」

彼女の機体脇から、ティターンズ老兵のFAZZから放たれる火砲。

ドウウ!!

「オウ、被弾か!?!」

「俺達は虫けらではない!!」

その老兵が放ったビーム砲は、不可思議な色合いをした粒子を辺りへ撒き散らしながら、ノイエ・ローテの下方を微かにかすめる。

「私に一撃打を食らわすとは!!」

「一撃で済むもの、済ますものかよ、お偉いさんが!!」

僅かに遠くのGマリオン、それと連携をとるかのようにシーマ・ガラハウが駆るギラ・ドーガがアトランダムな軌道を自機へととらせな

がら、シャアの機体へと急加速を試みた。

「ブツホでの仕事、デブリあさりをしていたあたしの部下達がそのゴミと化してしまった屈辱!!」

「相応しき末路とは言えないかい!？」

「なにがだよ、シャア・アズナブル!!」

「スペースノイドでありながら、地べたを這いずる者達には!？」

「お偉いさんには、あたしらの気持ちは決して、解るまい!!」

ズウ!!

シーマ機と波長をあわせ、接近したGマリオンの火焰剣エグサム、それを寸前でかわしたノイエ・ローテの上方へ茶色のギラ・ドーガがその長槍の穂先を向け。

「じわりとした継戦をやらざるをえないのは、解るがあ!!」

「待て、シーマ殿!!」

そのシーマ機の隣で、何か慌てたような声を発する兵、彼の言葉を無視し。

「チャージ!!」

「機会が早すぎる、シーマ!!」

「グズグズしていく奴から死んでいくのが戦いの掟だろう、ガトーの腰巾着が!!」

ブルーデイスティニー5号機を駆るユウが率いる部隊の牽制に気を取られているノイエ・ローテに向かい、そのシュツルム・ランサーの穂先を差し向けた。

ガア!!

「無謀なり、シーマ殿!!」

「うるさい、ガトー巾着!!」

僅かに海賊騎士シーマを過小評価していた風のあるシャアからの対空砲火をその身へと、覚悟しながら受け。

「騎士シーマ様のお通りだ!!」

しかしながら、器用に機体の致命傷部位にはそのシャアの攻撃を当たらせずに自機を身動きさせながら、ランス突撃を敢行するシーマ機ギラ・ドーガ。

ヴウグウ!!

「くそお!!」

「やめろ、シーマ・ガラハウ!!」

妖花のサブ・パイロットであるアナベル・ガトー、かつて宇宙要塞ソロモンの悪夢と呼ばれた歴戦兵の動かす有線アームの基部。それがノイエ・ローテの直前へと迫ったシーマ機へ激突する。

「やってくれるじゃないのさ、ガトー!!」

「今はまだシヤアを仕留める段階ではない!!」

「なるほどな、所詮にあんたは!!」

ボウ!!

千載一遇の機会を逃させられたシーマは、悪態をつきながらもそのまま騎士突撃の勢いを生かし、真紅のモビルアーマーから離脱させようと、自機のブースターを強く噴かす。

「所詮は、あのハマーンもあんたもさ!!」

「ハマーン執政から聞いていなかったのか、シーマよ!？」

「このシヤア・アズナブル、ジオンの御子息にゾツコンと言うわけだ!!」

「違うのだ、シーマよ!!」

「あんたに飛ばす舌はないんだよ、ガトー!!」

違う違わないも、どちらにしる今のシーマにはシヤア本人が追撃に差し向けたファンネルをかわすのが精一杯だ。

「面白い事を聴いたなあ、アナベル・ガトー!!」

「どうせ!!」

ククウ……!!

ハマーン・カーンが率いる第一部隊、難民や脱走兵などが駆るモビルアスーツが中核をなしているその部隊を、僅かな数のファンネルで翻弄しながら、シヤアはその鉄仮面の奥で忍び笑いを漏らす。

「私達ザビ家に魂を引かれた者達、その企みに気がついているのでしように!!」

「ミネバがそんなに好きか、ガトー達よ!？」

「そのミネバ様はプリンス・ガルマ、あの御方のやり方をプリンセスと

して真似つつも!!」

ボウ!!

ノイエ・ローテからのファンネル群に、そのハマーン部隊は全く対抗出来ていない。中にはファンネルの姿を見誤り、誤認による同士討ちすら起こしている者もいる。

「どこか、亡くなった総帥やキシリア殿、そしてドズル様の相も見受けられる御女子だ!!」

「私よりも、支え甲斐があるようだよな!!」

ドウ、ドウウ……!!

もともとが完全に寄せ集めだ。どうにかハマーンのクイン・マンサのみがそのシヤアからの攻撃に耐えている様子がアナベル・ガトーの視線からも窺えた。

「ベルクート、ユウ・カジマ機へと放てい!!」

「りよ、了解!!」

ガオウ……!!

第三部隊、支援火線隊からの弾幕がノイエ・ローテを捉えた事を確認したハマーンは自機のすぐ脇へ控えていた旧式ゲルググ、そのヘルメット内の顔へ冷や汗をかき続けていた難民兵へ向けて声を放つ。

「第一部隊、後退!!」

「ならば、この世からもあの、ミネバの魅了からも!!」

ノイエ・ローテ機体中心で咆哮するシヤアへ冷ややかな悪態を、その心内ちで呟いていたガトーは自機のやや下方を金色の運搬機が突き進む姿、それをチラリと目にはしたが。

「もしここでハマーン・カーンが出てこなければ……」

部隊後退の為に一騎奮迅をしているハマーン機「クイン・マンサ」へ向かって吼え叫ぶシヤアにはあえて伝えない。

「私こと、アナベル・ガトーはシヤアに機体から強制排出されていたかもしれない……」

「後退させてやろうか、ハマーン!!」

シイ……

対空レーザー、それはもちろんクイン・マンサにとっては牽制程度

の威力しかないが、それでもハマーン・カーンはその射撃攻撃に秘められた、明らかなシヤアからの殺意にコクピット内で小さくその身を震わせた。

「シヤア、貴様は!!」

その軽い悲鳴混じりの声を出しているハマーンが率いる第一部隊は散り散りにノイエ・ローテからその身を翻し、ユウ・カジマ統率の第二部隊、高速モビルスーツ隊は第三部隊からの砲火線に巻き込まれないようにと紅い妖花から僅かに距離を置く。

「何がお前をここまでかきたてる!？」

「アムロ・レイに対する!!」

そして、最後の第四部隊、主戦列モビルスーツ隊は先程のシーマの独走の為に崩れた隊列を立て直すべくに、デブリ帯近くへ向けて避難をしつつも、その内の数機の機体が。

「憎しみだ!!」

「すでにそれは果たしているのではないか!？」

先程、一際大きい爆発を起こし航行不能に陥ったニューペガサス。運が良いのか悪いのか、戦艦の残骸へ緩く衝突して動きを止めたアムロ・レイ専用モビルアーマーへ向かい、再び第四部隊の数名がその大型機の護衛をするためにその場へと向かった。

「あそこまで痛めつけければ、あやつ連邦のニュータイプ!!」

ザアウ!!

クイン・マンサ、量産可能レヴェルであれば最強のニュータイプ用モビルスーツはその通常機の二倍頭頂高という巨体の重さは全く感じさせない。彼女ハマーンがその機のもろ手に構えたビームサーベルがノイエ・ローテのアームから放たれた光刃と切り結ぶ。

「アムロ・レイとの戦いは貴様の勝ちだろう、シヤア!？」

「まだ終わらんよ!!」

「何故終わらない!？」

クイン・マンサがノイエ・ローテへと肉薄した姿を視認した第三部隊、テイターンズ老兵が率いる支援隊は直ちにその老隊長の指示により砲火を中止する。

バウヴウ……!!

そして、その支援隊からの弾幕の代わりにクイン・マンサの機体各部がメガ粒子砲の輝きを宿らせ、シヤア機へ向けて零距离射撃を敢行しようとした。

「ハマーンめ、忘れたか……?」

グウ……

ニュータイプ専用運搬機「ベルクート」を受け取り、Gマリオンとそのドッキングを済ませたユウは、追加武装システムを兼ねた金色の運搬機からファンネルを放出させつつも。

「ノイエ・ローテをそのまま破壊したならば、最良の結果で相打ちになると」

この、たとえ味方と言えども本音を言えば、必ずや敵へも不可思議な原則として伝わってしまうと、策士としての経験がその身へ染み付きすぎているハマーンのその理屈は。

「まあいい、クソ……!!」

解らないでもないが、それでもこのどこかユウの心へ淡い恋心じみた品物、それを芽生えさせてくれたこのニュータイプ女性の神経質さは、住んでいる世界が違うという事が。

「よし、行け……」

慣れぬファンネルを密かにノイエ・ローテへと飛ばす、ユウの心を二重にも胃痛を感じさせてくれるものだ。

「何、だ!?!」

「この光が、ハマーン!!」

クイン・マンサからのメガ粒子砲、そのビームが、ノイエ・ローテの軀から湧き出る赤い、粘性の煌きと共に尻つぼみになり、減衰させる。

「ファンネル、ファンネルよ来い!!」

「この憎しみの光が!!」

至近まで迫ったクイン・マンサのビーム砲はさすがにノイエ・ローテ、最強の機動兵器ノイエ・ジールⅡといえども計算上防げるものではない。しかし。

「われが肉体をシヤアが錆び犯させるならば、別の意思端末で!!」

「寄る辺なき者達の光が!!」

フウウ……!!

「ファンネルが、物質的に溶けるだど!?!」

あわててハマーンが敗走する第一部隊の支援から呼び戻したファンネル群、それらがビームを放つ前に、妖花から放たれる紅き燐粉がそれへと取り付き、その機構を崩れさせる。

「私こと、ジオン・ズム・ダイクンを、宇宙の心そのものが!!」

「おのれ!!」

ノイエ・ローテへ接近をし過ぎたハマーン機、その巨体に対しても妖花の花弁から噴出される紅い光は取り付き、そのニュータイプ専用機の機体出力を乱下降させている事態に、ハマーン・カーンの額に滝のような汗が滴り落ちた。

「宇宙の意思が、かきたてる!!」

ガウ!!

そのシヤアの言葉と共に放たれたノイエ・ローテ機体中央のメガ・カノン砲、それが身動きがとれない、機体の全推進器が不全となつているクイン・マンサの両脚を吹き飛ばした。

「どうする、ハマーン!?!」

「何がだ、シヤア……」

ある程度には自分の死を覚悟しているハマーン機の背後へ迫る、ノイエ・ローテの有線アーム。

「このまま続けるか、私に従うか」

そのシヤアの言葉に、ノイエ・ローテのサブパイロットであるガトーはどうか手を打ち、ハマーンを助けたいと考えてこそ、いるが。「火器管制が、シヤアへと乗っ取られただと……?」

リイ、リイア……

そのアナベル・ガトーの呻き声は、ノイエ・ローテから放たれ続ける瘴気、バリアーのごとくに機体を包む範囲から、この宙域へと。

「機体システムに異常はない、しかしどこを押しても、動かしても」

「選べ、ハマーン……」

「粘土を掴んだような、ぐちゃりとした反応しかない」

そして、ややに離れた場所で地球へ向けて落下を続けているアクシズにもと、その赤い触手を伸ばしているノイエ・ローテのメイン・パイロット、シヤア・アズナブルの耳へ届く事はない。

「シヤア、そんな決定権が……」

「お前にあると思うか!!」

ドウ!!

そのノイエ・ローテからの紅き光を切り裂く、もう一つの憎しみの輝き。それを宿した機体Gマリオン。

「ユウ・カジマか!!」

赤黒い瘴気、それを機体から吹き付けながら、ノイエ・ローテのもろ手である有線クローアームがハマーン機の背後から強く跳ね、シヤアの機体背後から金色の運搬機を駆る蒼いモビルスーツへと向けられる。

「ファンネル!!」

「生意気なんだよ、ユウ・カジマ!!」

ベルクートからのファンネル、ユウの裂帛の声とは裏腹にフヨフヨと頼り気なく宙を漂うそのサイコミュ兵器は、ニュータイプであるシヤア・アズナブルへは全くプレッシャーを与えているようには見えない。

「オールドタイプがファンネルなど!!」

「逃げろ、ハマーン・カーン!!」

ガアギイ!!

ノイエ・ローテのアームからのビームサーベル、二刀のそれを同じく二対のヒート格闘兵器である火焰剣達で受け止めながら、ユウは僅かに運搬機のスピードを落としつつ、反対側に位置する白きクイン・

マンサへと声を投げ掛けた。

「すまない、ユウ・カジマ……」

「ファンネル……!!」

退くハマーン機からの声にユウは答えている余裕などはない。ただでさえ慣れないファンネルが、ノイエ・ローテから噴き出されるタールのような粘性を感じさせる光に防がれているのだ。

バウウ……!!

「憎しみの凝結液、シャア……!!」

「かも、しれんな」

ノイエ・ローテからのビームサーベルを弾いた対のヒートサーベル、その内。

「俺達を支えてくれている、地球からの紅き光と同質の物なのか……？」

キィ……!!

特殊蛇腹剣「ウロボレス」の方に強いひびが入ったことに舌を打ったユウ。

「まずいな」

その彼の心理の乱れに、危なげながらも制御していたファンネルの内、数基の反応がユウの脳内から消え去る。

「オールドタイプ、お前達の憎しみの光と」

ズウ……

落伍を出しながらも、どうにか機体間近まで接近をしたユウのファンネルに対して、シャアは気がついてこそいるが、あえて彼はそれを迎撃しようとはしない。

ドウ、ボウウ!!

第三部隊、砲撃隊からの支援砲火。そのビームの光条へ宇宙の心、紅い燐光を纏わせた火線の方が、よほどシャア・アズナブルへ重圧を感じさせたからだ。

「いつからか、この私ダイクンを取り巻いていた、憎しみの集束」

ザア!!

憎しみのタールに満ちた海を、自らが放射したその宇宙の黒沼から

強く飛沫を跳ね上げて、ノイエ・ローテの巨体が支援砲火からその身を守るために大きく飛翔する。

「どちらが勝つかね、ユウ・カジマ!!」
「チィ!!」

その妖花ノイエ・ローテが跳ねる前に、どうにかコントロールを失わずに済んだ二、三基のファンネルがシャア専用モビルアーマー、その機体各部の隙間へ入り込めた事にユウは少しの安堵を得られたが。

「勝てる戦いかよ、これは!!」

それでも今のシャアからの拡散ビームカノンの攻撃を回避できたのは、完全な幸運と言わざるをえない。

「マリオン……!!」

第三部隊の砲火に続き、ユウ指揮下の第二部隊と主力部隊である第四、それらのモビルスーツからも射撃やファンネルがノイエ・ローテへ向けて飛びかかる中。

「よし、見える」

ノイエ・ローテへ潜り込ませたファンネル、それらからの「マリオンの目」を通したイメージがユウの頭へと流れ込んできた。

「妖花の中心に位置するどす黒いシコリが、シャア・アズナブルに……」

マリオンの目、それから飛び込むニュータイプの感覚に身体がこそばゆく、軽い不快感をその身に感じながらも。

「ファンネルがもたないよ、プルツァー!!」

「泣き言を、プル!!」

二機の色ちがいであるキュベレイ・タイプからの攻撃を軽々とかわすノイエ・ローテを診断、そう医師のごとくに診を下すユウ・カジマ。

「困惑、動揺に満ちた攪乱した部位がハマーンの手の者、サブ・パイロットだな」

「ユウ、危ない!!」

ズウ……!!

やや前線へ進出を始めた第三砲火部隊、その部隊内へいるリョウ青

年からの警告よりも先に、潜り込んだマリオン・ファンネルがノイエ・ローテからの射撃を伝えてくれる。

「ユウの奴の動きが良いか……」

「だが、俺がノイエ・ローテで気になるのが」

オオウオ……!!

ノイエ・ローテから放たれる呪詛のタール。瘴黒のそれがどのような原理で、シヤアから垂れ流され続けられるのかはわからないが。

「シヤアの暗黒の宇宙の心に、そして……」

「雑魚に、私は用は無い!!」

ドウ……!!

妖花から噴き出す非実体の粘膜に、その身を凝らせた友軍機がそのままバルカン砲で破壊されていく光景。しかし、今のユウはその仲間の死に憤激するどころではない。

「ノイエ・ローテの尻尾……」

傍目にはプロペラント・タンクに見える二基の、妖花の下方から生えている「おしべ」から、とてつもなく強い熱量をユウは感じるのだ。

「位置バランス的に、元は三基あった様子に見える、だな」

「第三部隊、下がれ!!」

ほぼ壊滅、指揮系統を失ったハマーンの第一部隊。その難民兵達を再びデブリ帯へ避難させていたハマーンのクイン・マンサから、慌てた様子の声が通信機を通してGマリオンのコクピット内へ響き渡る。

「突出し過ぎている!!」

「何を言っているんだ、ネオ・ジオンの女!!」

ギャウア!!

その老兵の返事を遮るかのように、ノイエ・ローテからの火線と第四主力隊が互いに放つビームと実弾兵器がシヤアが放つ血の池、宇宙の心と言うにはなおも昏いその紅い泥土に覆われた宙域へと疾り飛ぶ。

「ここで接近して、奴に痛撃を与えないと!!」

「あの熱量を産む物が、ハマーンがややこしいシヤアの半殺し戦術を提唱した理由かな……?」

「俺達の大佐さんがやられちまう!!」

「何!?!」

ドウウ!!

ノイエ・ローテのアームクロウ、それにより弾き飛ばされた岩石が、マリオンの目に見えないそれがユウのGマリオンに向かってシヤアから投げ飛ばされた。

「しまった!!」

「私の動きが解る風を、オールドタイプが気取るなど!!」

シヤアの一足一刀、バルカンやレーザービームの予備動作すら解るが故に、ユウは大きく油断をしていたようだ。

「マリオン!!」

願掛けのようにそう叫びながら、ユウはGマリオンの胸部ビームでその岩を砕こうとする、だが。

ギア……!!

「あつけない物だな、ユウ・カジマ!!」

ノイエ・ローテの、残り少ないとは言え、なおも強力なファンネルがGマリオンへ向けてそのビーム刃を煌めかせつつ、ユウ機へ向かい後方から恐ろしいスピードで迫り来る。

「マリオン、ニムバス、シドレエ……!!」

勘、または目前に突如瞬間として舞い降りた死神がそれが成したのかも知れない。祈るように愛する者の名を連呼するユウ・カジマの悲鳴。

ゴア!!

「邪魔をするな、オールドタイプ!!」

「俺は、まだ……」

死を覚悟していたユウ・カジマの。

「まだ……」

その彼の機体の背後では、老兵の駆るFAZZがその砲身をノイエ・ローテへ向けたままに、刺突ファンネルによって串刺しにされていた。

「まだ、戦える……」

「ジイサン!!」

「だって、そうだろう……?」

ボウ……

静かに、ユウの目前で爆散したティターンズ老兵のFAZZ。

「俺の復讐は、まだ終わっていない……」

フオウ……

その老兵の機体であったものの破片を祝福するように薄く取り巻いた蒼い光。それをさらに優しく包み込むかのような老兵の最期の言葉が、紅く宙を光らせた。

「クラウン、がんばれ!!」

虚無の宇宙、色も何も無い空間の中で、両手を合わせ思いつく限りのカミサマの名前を連呼する、老いさばらえた連邦の兵士。

「がんばるんだ!!」

その老兵の姿へユウ・カジマ、彼の双眸から蒼い光が実と注がれる。

——お前は良くやった、クラウン——

大気圏で燃え尽きようとしている、旧式のモビルスーツへと乗った老兵の甥。運命の悪戯でジオン公国へとついてしまった、老兵の親戚であり、最後の血縁。

——シャア少佐、助けてください!!——

「助けてやってくれ、シャアとやら!!」

老兵の見つめる大気圏の横では、悠々とした顔で地球へ向けて降り立とうとしている白い軍艦「木馬」の姿。

「その連邦軍の白い奴らでもいい、お願いだ!!」

そして、そのモビルスーツ運用艦のややに離れた場所では。

——お前の死は無駄死にはない——

——助けて下さい、少佐!!——

その身を紅く染まらせながら、地球へと舞い降りる白いモビルスーツ、ガンダム・タイプ。

「助けてやってくれ、赤い奴、白い奴!!」

——ユーアおじさん——

「俺の、アイランド・イフィシユにいた妹の子!!」

——そしてユウ、ごめん——

「そしてそのアイランドに、コロニーに潰されて死んだ家族達の中の、生き残りで!!」

——俺は、クラウンは誕生日プレゼントを持って帰れない——

「最後の、守るべきモノなんだあ!!」

フウ……

そのザク・タイプへと乗っていたジオン兵は、誰にも省みられることもなく。

——ジオンの勢力圏へ木馬を叩き落としたか、よし——

——ふう、どうにか僕は生きている、ガンダムのお陰だな——

その身を、宇宙（ソラ）と空（ソラ）の間で散らした。

「クラウウ……ン!!」

その場にいた、後に英雄と称された二人のニュータイプ、彼らにとっては何も、記憶の片隅にすらも残る事はなく。

「ウウ、ウオウ……!!」

——今まで、苦しめてごめんなさい。ユーアおじさん——

ラア、ラ……

慟哭を続ける老人の魂を、蒼い光が、蒼い宇宙の心達が彼を帰るべき場所へと。

「何が、ニュータイプだ……」

優しく、優しく導き始める。

「可能性だ、革新だ……!!」

そのジオン兵の死を惜しんだ唯一の親族は、その両肩を落としながらも。

——おかえりなさい、あなた——

長き時を経て、愛する者達と再開を果たし。

「ヒトゴロシ、め……」

涙を拭き、侘しく笑みを浮かべつつ、その彼クラウンという名の男を始め、老兵の愛する者達が今現在に住んでいる「家庭」へとその身を歩ませた。

——おい、ソコノオマエ（YOU）——

ユウの視線の先で消え行く老兵の姿。その脇に鬼が立つ。

——とつとと働け、役立たずが——

——ごめんなさい、すみません——

あらゆる記憶が、紅い光が忌まわしき記憶と共に、ユウ・カジマの心の匣を刃物でえぐり、掻き回す。

——ごめんなさい——

その刃物が、ユウの脇腹へと突き刺さる度に。

シイ……

止めどなく彼の傷口から、蒼い光が天へと疾る。

——ニュータイプは——

ブウグオ……

一人の、厳めしい面を持つ厳天使の男が勁（つよ）い羽根の音と共に。

——ニュータイプは——

その太い腕から垂らした天秤を揺らしつつ、ユウの宇宙の心に導かれるかのように、天から顕れた。

「そうだ、ニュータイプは……」

そして、その天使の節くれが立つ手は。

——強者は、世界を支配し、滅ぼす者だ——

自傷行為を続ける、檻縋切れを纏った鞭打苦行者ユウ・カジマの手から、優しく血塗られたナイフを取り上げてくれる。

「ゆえに、俺は記憶が無い……」

クルスト・モーゼス、ニュータイプを新たな搾取者として捉えた男。

「記憶を、俺は棄てたんだ」

——そして、その記憶を捨てる原因となったニュータイプ、新たな支配者階級を滅ぼす力を——

宇宙へと満ちる、紅く白く蒼く黒く、凄まじきに輝く万色に満ちた光の奔流のなかに佇む、一つの匣（はこ）

——私こと、キリスト・ズム・ダイクンがお前に与えよう——
開いた匣から、黒き泥が宇宙へと満ち溢れ。

——まつろわぬ者たちの為に作り上げた、この剣を——

呪詛が充満した匣の中へ、無意識にその手を突き進ませ、掻き分けるユウの手に握られたのは。

——裁く力を——

紅く、輝く熾天使の剣。

「ニュー、タイプ……」

人の世が始まる前に、偉大なる天使がヤハウエに刃を向けた墮天使、新たなるタイプの者を裁く為に振るったとされる焰の剣、制裁剣。

「ニュータイプ……」

呆けたように呟くユウ・カジマの目前には別の天使の姿。

——やめて、ユウ——

少年少女、性という区別がない天の住人の姿。

——あなたは、ユウ——

匣が開ききり、その最期に残った蒼い光が、小さなその光源が。

フアウ……

翼をその背へ生やした、幼き人のシルエットを映し出す。

——宇宙には、ココロが満ちているの——

その蒼の運命、ラプラスの光が昏き泥を除け、宇宙を満たすと共にその幼天使。

——乱暴を嫌う、人の心が——

少年であり、少女でもあるその小さな体躯をした天使の口から囁かれる、平和の小鳥のさえずり。

「ニュータイプ……!!」

その天使のさえずりをユウ・カジマは、焰の剣で蒼き宇宙もろとも。

ゴウア……!!

燃やし、焼き付くし。

「ニュータイプめ!!」

天界の上とも、下とも取れない空間、宇宙へと。

「ニユー、タイプ共めえ!!」

人の世へと舞い下りた。

——イヤだ、死にたく無い——

——ならば——

冷たく、彼を見つめる若者は不愉快そうに鼻を一つ鳴らしてみせた後。

——私の兄の名をお前にくれてやる——

——その名前は?——

——ユウ——

——ユウ(ソコノオマエ)?——

——違うな、凡人——

——ザアアア……!!——

周囲を黄色く光る、地獄の霧に包まれた闇の中、それを必死で、命懸けで消し去ろうとしている慈雨の音が二人の若者の耳を強く叩く。

——ユウ(アナタ)だ——

その真のニユータイプ定義を単一(ユニ)かつ、一呼声(コール)のみで象徴する可能性(ラプラス)の源初語は、焔の剣を携えるユウ・カジマの耳へ入ったかどうかは、解らない。

「ニユー、タイププウウ!!」

叫ぶユウ・カジマが乗るGマリオンのグレイス・コンバーターから、白き羽の奔流が宙域を包む。

十年前の最初期対ニュータイプ戦用システム「エグザム」の発動を知らせる機械音声か、ミノスフキー通信を通して周囲へと放出され。

「ニュー、タイプウウアア!!」

Gマリオンのバイザーアイが紅き光を放ちつつ、その面が妖花ノイエ・ローテを怯ませる。

「何だ!？」

「ニュータイプ共はあ!!」

ガオアア……

ユウの獣の叫びと共に、Gマリオンの両肩が紅き光の燐を飛び散らしながら。

「この世に存在してはナラナイイ!!」

「どこだ、ユウ・カジマ!？」

ノイエ・ローテを駆るシャアの目前から、突如として姿を消しきる。

「何だよ、あれは……!!」

座礁したニューペガサス、ノイエ・ローテからの特殊ファンネルによる被爆をまともに受けて中破したモビルアーマーのコクピットから、アムロがその顔を光の海へと向けた。

「深く、かなしい人生を送った人達」

「ララア……」

「その人達だけが持つことが出来る、諦観の蒼き宇宙の心」

そのララア・スン、地球圏で小さな宗教団体の教祖を務めている女性の言葉は、アムロ達の様子と安全を確かめに来たナイジェルやケールたちには今一つ解らない。

「君と同じか、ララア?」

「ハッキリと言うのね、アムロ?」

「今の俺にとって、は」

グウウ……

ニューペガサスの突貫応急修理、コウ・ウラキやキース達によって行われたそれのお陰で、どうにか動かすことが出来たフィン・ファンネルが僅かに身動きする。

「君は声だけの存在だから」

「あのエルメスのサイコミュは」

何かフランクに、スペースランチの中でその両の肩を竦めてみせるララアの仕事は、彼女への五感をほぼ封鎖されたアムロ・レイには見るすべもない。

「エグザムやらと同じく、プロトタイプに近いものだったから」

「仕方ない、よな……」

「だけど、それがいつまでも」

ザアフ!!

蒼い機体Gマリオン、その機体スピードはアムロ・レイやシャア・アズナブルをしても、視認はおろかニュータイプのな走査能力を持つとしても至難の技だ。

「大佐を苦しめている」

「だけどさ、ララア……」

「大丈夫よ、アムロ」

そう言い、可愛くウィンクをしてみせても、せいぜいな所ナイジエール辺りを歓ばすだけで終わるのがララア・スン、教祖マザー・ララアにとっては哀しい所ではある。

「大佐は、大佐に勝つわ」

「どっちの大佐さんだよ、ララア……」

「両方よ、決まっているじゃない……」

「どうかねえ……」

ドウウウ……!!

制裁剣エグザム、長大な長さへとミノスフキー・バーナーを放出させ、ノイエ・ローテの装甲を切り裂いているユウ・カジマ機の得物が。

「勝てよ、中年……」

「死ぬなよ、情けない愚痴大佐さん……」

ナイジェルとケーラの視線の先で、激しく渦を巻き始めた。

第71話 天に光を嘖く者

「アクシズの核パルス……」

「それがなんだって言うんだ、サンダースさんよ？」

「あんな光り方、するもんですかね？」

「しらねえな、俺には……」

元々が戦車乗り、生粋のアースノイドであるエイガー大尉にとつては、コロニーや小惑星の輸送に使われる核パルスエンジンの放つ光の加減など、完全に門外漢である。

「血のような、ドロツとした紅い光かよ……」

「私達のようなオールドタイプにも見えるって事は、やはり核パルスの改良型でしょうか？」

「知るもんかよ、死神サンダースさん」

死神、その呼び名はよくエースパイロットへの尊称として使われるが。

「うちの若い者達を守る為としての死神なら、甘んじて受け止めますが、ね」

「いいねえ、あんた……」

「褒めんで下さいよ、エイガー」

先程の、テロリストと武装難民の混合部隊からの襲撃、それを十年前のモビルスーツ、陸戦ガンダム・タイプを宇宙戦用に応急改修をした機体のみで蹴散らした彼サンダース「軍曹」へ向けて、敵か味方か、誰かがそう口走ったことを。

「私の家内に、あんたは褒められた時の顔が怖いと言われるんですよ」

「確かに、今の顔は怖かったかな？」

「酷い人だ」

エイガー大尉は、ユウ・カジマと同じくらいには古参であるこの青髪の男は僅かに皮肉っているのだ。

「俺は本来、敵にも味方にも」

「ん？」

「本来なら死神、でありたくありません」

昔から十分な実力のパイロット、今ではもはや最古参として若手の教官を勤めていた「仏の鬼軍曹」という矛盾するあだ名をもつサンダースの、か細い言葉。

「しかし、それでも身に掛かる火の粉は躊躇いなく振り払います」

「そりゃ、そうだな……」

「部下達への狼藉は、決して許さない」

「そうかい……」

狼藉、その言葉をサンダース中尉が言ったとき、エイガーのその面が険しくなる。

「ノイエ・ローテだか、ニューペガサスにな」

「気に病まないで下さいよ、エイガー大尉」

「またしても強大な力に、俺の仲間は蹴散らさせた」

「そう、ですか……」

トウ……

涙、しばらくは忘れていたエイガーの、理不尽な暴力に曝された時に流される宇宙の光。

「昔の、ジオンがザクの脚で俺の仲間、アリ戦車を踏み潰した時の気持ちだな……」

エイガーが乗る、ネオ・ジオン鹵獲機を改修した重火力機。

「大尉？」

「込み上げてくるんだよ、十年前の記憶が、再びにな」

「フム……」

ギィ……

白銀の、そのモビルスーツの腕が彼の声と共に微かな身動きをす
る。

「こうやって、あなたを見ているすと、エイガー大尉」

「あん？」

シルヴァ・バレット、そのかつてのザクやジム等の一年戦争時代の機体とは雲泥の差がある高性能機、それをもってしても。

「昔の、それこそ十年前の私の隊長だった方の甘い理想」

「敵にも人権がある、解り合える、だったよな……」
ク、クウ……

再び強者によって「蹴散らされ」る経験を味わう羽目となった、このエイガーという連邦兵の口から、自嘲とも受け取れる乾いた笑い声が漏れ出す。

「一概に、否定が出来なくなります」

「俺達に、される側には人権がないと?」

そうコクピット内で呟いたエイガーの視線の先には、連邦派とネオ・ジオンの数部隊、各宙域へ分散された小隊の姿。

「無い、と言ったほうが」

先の小規模な戦闘では、サンダース中尉達の近くへ展開しているネオ・ジオン部隊からの追撃はなかった。そのネオ・ジオンのモビルスーツ達へも攻撃があつた為かもしれないと、サンダースは見ているが。

「負け犬的に、気は楽になるかも」

「言つてくれる、サンダースさんよ」

レイ、ライン……

かなりの以前からアクシズの周辺宙域をまとわりつく、蒼と紅の光。もはやその現象をいちいち気にする者はいない。

ズウウ……

この落下を続ける、赤黒い光に押されている小惑星アクシズを前にしたら、確かにとるに足らない、単なるミノフスキー粒子が成す異常現象で片づけられる品物だ。

「憎しみのメビウスの輪、私は気にいりませんよ」

「解つてはいるさ、解つては……」

「私達の様子を窺っているネオ・ジオンの連中も、あるいは……」

「解つていると、言っただろう!?!」

シイ……

そのエイガー機からの怒鳴り声に、主にオーストラリアの大地と北米大陸、コロニーの落ちた地から吹き上がる光達が僅かに震える。
「だとしたら、もしかよサンダース!!」

ゴウ!!

「エイガー!?!」

「宇宙人の連中が、この小惑星落として少しでも偽善的な怒りとやらを感じているのであれば!!」

重装機シルヴァ・バレットが急加速を始め、アクシズへと接近していく姿。サンダースはそのエイガー大尉の機体を止めようとしたが。

バア!!

「もつと、なりふりをなあ!!」

「落ち着いて、エイガー大尉!!」

陸戦型のガンダム・タイプ、その改修機へと取り付けられている姿勢制御スラスタ・モジュールがエイガー機から重く、極めて乱暴に振るわれたその腕によって形状すらも変化してしまう。

「構わないじゃねえの!?!」

「何をやる気ですか、あなたは!?!」

「そのガッツ、不可能を可能にする戦い方で!!」

ボウウ!!

いかに、アクシズを狙った艦砲射撃が、現在に各艦の砲門が焼き付いた為中止されているからといえ、自機を突出させるエイガー大尉の行いは身の安全を省みない自殺行為に近い。

「俺は、ザクを倒してきた!!」

「だから、何だと言うんです!?!」

「それに比べれば!!」

常に劣勢、そう「巨大」な相手に自身の歯を食いしばりながら、果敢に立ち向かっていたこの大尉にとっては、目前のコレは。

「こんな、石ころの一つ!!」

「おい、あんた……!?!」

「たかだが、地球を潰せる程度の砂利を!!」

エイガー機の進路先へいた、ネオ・ジオンの兵達がそのシルヴァ・バレット、白きモビルスーツへ向けて放つ訝しげな声。

「ぶち破れない道理は、ない!!」

「狂ったか、連邦に下ったあのドーベン・ウルフは……?」

ガオ!!

「そうだろう、俺の心に宿るロクイチ戦車の!!」

その機体のパンチ、それがどこか赤みを帯びた銀色の光を放ちながら、宇宙の銀嶺山アクシズの表面へめり込み。

「フェンリル隊とかいう、大層な名前をした狼を貫いたア!!」

「おい、あんたまさか!!」

「俺達の涙の拳、銀の!!」

ガオオン……!!

唸り声を揚げるシルヴァ・バレットの左腕、それから放たれるアツパーカットがアクシズを、その巨体上方を赤黒い光で覆われている小惑星の岩肌を削り取る。

「ロクイチの象徴、ダブル砲から放たれる、銀の砲弾達!!」

「生きてたつてか!?!」

「今ここに、俺の心のロクイチ魂を乗せたロケット・シルバーパンチを両手両砲で!!」

ガフウ!!

「アクシズの股ぐらを向かって、打つべし打つべし!!」

「そうだったなあ!!」

「何だあ、てめえは!?!」

そのワンツーパンチを繰り広げるエイガー機の隣へと加わる、ネオ・ジオンの旧式。

「その戦車パンチで、俺のザクの股間をよくも!!」

「しらねえなあ!!」

「女へしてくれちゃって、まあ!!」

いや、旧式と呼ぶことすら生易しい、ザクの最初期タイプから響く、老いた男の声。

「覚えがないぞ!!」

「そして!!」

バアン……!!

「あたしの初乗りザクも、女が女へ!!」

「身に覚えがないと!!」

女性パイロットが乗る、両手をアクシズへと押し付け始めたドーガ・タイプ、ネオ・ジオン軍の主力機。

「戦車に乗っても、ガンダムに乗っても、下から突き狙うしか脳のない男!!」

「無いと、言っているだろう!?!」

「さすがに連邦、酷い男しかない!!」

自分の無茶に付き合い始めた、ネオ・ジオンの兵達に戸惑いながらも、シルヴァ・バレットの銀の拳はアクシズを粉碎し続ける。

「やり逃げをされたなあ、シャルロッテ!!」

ガウ!!

「何故俺を殴る、ネオ・ジオン!?!」

「敵同士だからだろう、エイガーとやら!?!」

「ああ、そうか!!」

ボグウ!!

「そうだったあよなあ、ジオン!!」

「新型の分際で老いぼれザクを、チカラ一杯に殴ったな!?!」

ドウ!!

「そのパワーで、何か旧式だよ!!」

確かに、エイガーが乗るシルヴァ・バレット、重モビルスーツを殴打で弾き跳ばせる辺り。

ザア!!

そして、そのエイガー機からのパンチを受けても大きくは破損しないザク、そのネオ・ジオンの老兵が乗る旧式機はかなりのカスタマイズが施されているのかもしれない。

「何をやっているのかしらね、この方々達は……」

「全くですよ、実に……」

いわゆる一つの「同士討ち」を突如始めだしたそのエイガー達を無視し、ドム・タイプの機体とサンダース中尉の旧式ガンダムがアクシズ、人類史上最大の戦略兵器へ向けて、その手の平を押し当て始める。

「本当に、何をやっているんでしようかね、我々は……」

「わたくしが思うには、連邦の殿方」

ドム・タイプ、確かサンダースの記憶ではドライセンという名を持つモビルスーツから聞こえてくる女の、淑やかな声にサンダースはその耳を傾ける。

「馬鹿をやっているのでは、なくて？」

「確かに……」

何か、少し前に会った自分の元隊長、彼の奥さんを彷彿とさせる喋り方をするネオ・ジオンの女性パイロットの言葉に、サンダースは何か腑に落ちるような気がしてきた。

「そうですね、ネオ・ジオンの人……」

「いい加減にしなさい、二人とも!!」

ガアン……

女性パイロットが乗る、薄紅色へと塗装されたドーガ・タイプに自機の股間を激烈に蹴りあげられた、エイガーとネオ・ジオンの老兵は。

「グフウ……」

「そのグフを、あんたに潰されたのよあたしは」

別に痛みが生身へと伝染するサイコミュ・システムが搭載されている訳でもあるまいのに、その男二人はコクピット内で身を縮こませながら、通信機越しに呻き声をサンダース達の耳へと伝わせる。

「皆、我々人類は永遠とバカをやっているんですよ」

「なんだ、ありや……?」

すでに年配の、メガネを描けた士官がドゴス・ギア級ドレッドノート艦「ゼネラル・レビル」からすつとんきような声を出しながら、超遠距離望遠鏡でアクシズの表面へじつとその目を凝らしている。

「どうした、コジマ君？」

「あれを、中将」

「フン……」

あまりの人手不足のために急遽に完全な管轄外、陸軍将である自分がこのような不愉快極まる役割に就いてしまった、その「ローマンス・グレイ」とでもいふべき風貌を持つこの陸軍中将の機嫌が良いことは、ここしばらくは全くない。

「アクシズ、ここから左下の対空砲辺り」
「フム？」

長年の連れ添い、軍内部では「デキてるのでは？」と下らぬ噂すら立てられているこの二人の阿吽の呼吸は一年戦争時からの腐れ縁が成す物である。

「二機のモビルスーツ？」

「もう少し倍率を、中将」

ジ、ジイ……

望遠鏡、有視界戦闘が戦場へと呼び戻った今の御当世には、バードウォッチング用の双眼鏡だかその手の肉眼補正器具を作っていたメーカーにとっては時代が味方している。その業界での有力会社が作製した遠距離索敵用の望遠レンズの倍率を中将は徐々に切り換え

た。
「モビルスーツが、アクシズを殴っている？」

その首を傾げながらも望遠鏡から目を離さない中将の向ける目の先、肉眼で見える巨大質量兵器「アクシズ」の表面には、確かに重装タイプの機体が一機で、自らの両拳をその岩肌へと叩きつけている姿が見える。

「邪魔、だな」

「どうか、ライヤー君……？」

「目障りだよ、レビル」

戦列に出てからというものの、じつと艦長席で「置き物」と化しているレビル、一年戦争時代での将官レヴェルでは最大の功労者、盲目の老将である彼の声にライヤー中将は不愉快そうにその鼻を一つ鳴らした。

「どいつも、こいつも……」

チイ……

「ワシは単に君へ再度のチャンスを与えただけだけどね」

レビル将のその目からは完全に光が奪われている。にも関わらず、彼はライヤーが向けた視線を、その「肌」で感じ取っているようだ。「感謝の踊りでも披露して欲しいと？」

「長年の地球内にはびこるシラミ、それを地道に潰してくれた地球の守護神だ」

「相も変わらず、口が上手い」

「些細な職権乱用で牢獄へ押し込めるには、不利益だよ」

「組織腐敗の、第一歩となる台詞ですな……」

「張本人の君が言えた義理でもあるまい」

「フン……」

陸軍将という立場である自分がこのレビルの副将という立場に置かれたのは、ひとえに彼、レビルが常に手元へと置く私兵達、スパイ軍団に自分の不正を暴かれた為である。

「ニュータイプとは、戦争をしなくてすむ人種という事でしたな、レビル」

「そう、ゆえにワシは」

「ニュータイプ、か」

ゴツプ提督が表の政略を司る高官であれば、このレビルはまさに「裏」の連邦軍の支配者だ。

「心が読める、エスパー共か」

「気に入らないか、ライヤー君？」

「当たり前だ」

多重複に編み込まれた彼のスパイ網、それに絡めとられた情報を元に、この老獪なレビル将は風光明媚な別荘へと訪れてきた客と僅かな間話し合い、その指を黙って「対象」へ向け、指す示す。

「人の気持ち、それをニュータイプ能力とやらを使い、推し測り、火種を潰せば」

光を失ったこの老人、ゆえに彼の聴覚嗅覚を含む四感覚、それに加えて潜在的に彼へと秘められていたとされたニュータイプ能力を合わせた全「五感」であるそれらを駆使すれば。

「ニュータイプは戦争をせずにすむ人間、そして世の中を作れるよ、ライヤー君」

「言ってくれる……」

とは言いつつも、このレビルが一年戦争時から情報戦の名手であったことは、ジオンからの脱出劇を始め、オデッサ基地攻略戦における敵軍精鋭モビルスーツ小隊の増援を即座にキャッチできたこと。

(全く、聞き耳ジジイが)

他の者が全く気が付かなかった連邦高官の内通者を見抜ける程の情報網、システムを構築していた事からも否定できるものではない。

「戦闘ゼロは大言壮語だろう、レビル」

「ばれた？」

「だとしたら、あの隕石をニュータイプ能力とやらでなんとかして欲しいものだ」

「ワシも歳でのう……」

「都合の良い耄碌の老人だ……」

しかし、一年戦争の時とは大きく戦いの規模が変わり、各勢力が複雑に絡み合った十年間のこの戦役。全てに潜伏スパイを潜り込ませるには余りにも時間が浅すぎる。二重スパイを作り出すにもそうだ。

「時間の流れが早すぎるよ、最近の世の中はワシらにとつて」

「それはまあ、確かに……」

「せいぜいが、ハマーン等と繋ぎを作るのが関の山だ」

「ネオ・ジオンのナンバーツーへ手を打ったかよ、レビル」

「良い女であった」

「好色め」

だが、こうしてライヤーがレビル小將、階級的には自ら降格を選んだとは言え、目上の人間である彼へ対して侮辱罪にも当たる悪態をつき続けているのは、単に昔からいつか追い抜く、蹴落としたいと思っていた彼レビルへの当て付けではない。

(俺がこいつに会うたびに、背中に汗をかいていることを気が付かれたくないからだ)

「ブランド物のシャツ、着替えはあるだろうに」

「そうそうに着潰せる程、安い物ではないのだがな、レビル」

虚勢だ、人間の五感の内でも重要な「視覚」を無くしたが為に、完全なエスパー・ニュータイプとなってしまったこの人間嘘発見器へ対しての。

（このレビル、徹底した監視社会こそが何十億という単位の人間を統治する、それが出来る唯一の方法であることを解りすぎているよ）

「ワシは耳年増なだけだよ……」
（化け物め）

少なくとも、軍以外の人間には穏健を気取っているが、その軍内の人間にはこの子供の時からスーパー・エリートであったレビル小将の冷冽な地下水のような非情さを認識している者は多い。

（下は掃除人バイトに一兵卒、カフェテリア・スタッフに軍追従娼婦に行商人）

そして高官に軍艦艦長、全てにこのレビルの「耳」となっている者が存在し、軍内外へ監視を続けている事実を。

「何か、増えますな……」

「お、おうコジマ君？」

「計、約十以上機」

ぼやりと思索をしていたライヤーからいつの間にか望遠鏡を奪っていたコジマ、彼はそれを振りながら新手のモビルスーツ、次々とアクシズへ取り付き始めた機体群を指差す。

「何のつもりなのかな、あれは？」

「シヤアのサイコ・フィールドを中和しようとしているのではないかな、ライヤー君？」

「シヤアの、サイコフィールド？」

そのサイコ・フィールドという言葉はライヤーにしても初耳ではない話であるが、実在と概念の狭間に位置する現象を突然決めつけるように言われても、即座に納得出来るものではない。

「アクシズを後押しする赤黒い光、それが今までの艦砲撃や核を減衰させていたとみえる」

「言い切れるか、レビル？」

「で、なければさ」

ジィ……

アクシズに取り付いたモビルスーツ群の間へ飛び交う火線、それを見るに、小惑星アクシズの周囲で再び小競り合いが始まっているようだ。宇宙野盗カネオ・ジオンか。

「ここまで手が打てなかった理由が見受けられない……」

「大袈裟になってきましたよ、お二人とも」

呻くように呟いたレビルの脇で望遠鏡を握るコジマの目の先では、そのアクシズに取り付いたモビルスーツを排除しようとする「敵性機」を迎撃しようとする他の機体、友軍機が支援へ加わっている。

「連邦派のモビルスーツ、だけではないようだな……」

「ライヤー中将、これを」

「ご苦労」

近くの兵がブリッジの備品保管庫から取り出し、持ってきた望遠鏡を一つ頷いてみせてから受け取り、それを眼へ押し当てたライヤー中将。

ボウウ……

確かに彼の視線の先では、ザク・タイプของモビルスーツがアクシズを殴り続けている連邦機を守っているようにも見えた。

「下らんな、全くと……」

その助け合いの光景、ライヤーにしてみれば正直、昔に部下にいた、今では除隊をしながらも、それこそ有益であるがゆえにスパイとしての仕事を依頼し続けている能天気な男の顔が思い出され、本当に何が腹の底で疼いてくる。

「ならば、ライヤー君」

盲目の老人、彼レビルにはアクシズ周辺で奇行を行っているモビルスーツの姿と形、それがどのようにこの老将の「目」へと映っているのかは、いわゆるオールドタイプであるライヤーとコジマには解る術もない。

「じつと見ておく事を命ずる」

「そうきたか、レビル」

もともと不始末、不祥事を起こした自分への当て付けとして片腕コジマ共々に宇宙へ上がらされたのだ、絶対零度の宇宙空間で頭でも冷やせという意味であろう。

ク、シュ……

「エアコンに当てられたかな、私は」

「クシャミが可愛すぎるぞ、コジマ君？」

「私はエアコンが苦手でしたな、小人レベル」

「少将」の将を外して小、つまり「小（将）人」レベル。その言葉は少将へとあえて自らの地位を降としたレベルに対する、その手の事を平然と行えたこの老将へ対する不思議な心理。

（解る者だけ、笑ってくれとでも言っているつもりかよ、レベル）

謎の倒錯に満ちた美意識からくる、諧謔（かいぎやく）の呼び名だという事実には、ライヤー中将は心底不快である。

「だったら、エアコンが効いてない外へでも行くがいいさ、コジマ君」
「宇宙ではエアコン無しで快適なはずはないでしょうに、ライヤー中将」

あまり、宇宙での居心地が悪く機嫌が斜めの状態が続いている将官二人を尻目に、レベルはその心眼、ニュータイプ技術でゼネラル・レベル艦を中心とした空域へ、じつと椅子へ佇んだままに気配を感じ取ろうとその神経を研ぎ澄ます。

「シャアの私情を大義名分へ変えつつに、悪魔の方向へ極度に増幅させた、憎しみの光……」

アクシズという物質を、あたかもコンピュータのペイント・ソフトで切り取るように除外するレベルの心眼には赤黒い憎しみの光、昔の戦争で自らの目の光を奪った戦略兵器のそれとよく似た存在、そして。

「加えて、その悪魔を憐れみながらも立ち向かんとする、悲しみの光か」

そのアクシズ、いや悪魔の光を阻止せんとして地球、主にオーストラリアと北米の大地から吹き騰がってくる、諦観を秘めた蒼い光。

「蒼い光が勝つ、勝ってほしいものだ」

とは、思いつつもレビルの心にはその悲しみの光に混じり。

——やらせはせん、やらせはせんぞ——

地球を護ろうとする光の中、宇宙へと昇る人の心には。

——俺は、父親と名乗る可能性を捨て去れない、死にたくない——

「善意を秘めた、愛の毒の心も、な」

怒りの、悲しき憎しみの光も。

「シヤアを取り巻くモノタチが持つ、同質のその宇宙の心も、使いよう
と割りきるのが小人であるワシの務めなのだがね……」

呪詛の紅い光、悲しき怒りを司る不動明王の焰が混じっているこ
と、その事実をこの老将は、心の目から逸らさせる事はしなかった。

第72話 魂の上で雷鳴はその手を拍する（後編）

「エグザムか……」

「聞いたことはあるのか、ハマーン・カーンさんよ？」

「こう見えて、私はな」

あやうく純白塗装の愛機、ニュータイプ専用機である「クイン・マシンサ」を、ユウ・カジマによって。

「洋の東西を問わず、世の中の俗物共から陰口ばかりを言われている女ではな、連邦兵よ……」

うかつにその彼の支援を試みて、ニュータイプへ対して過剰反応を起こしているエグザム搭載機によって自機を粉碎されそうになったハマーンは、やむを得ず遠目でGマリオンとノイエ・ローテの戦いを見守りながら、隣へ立つ量産型ダブル・ゼータを駆る連邦派の男へその口をすぼめてみせる。

「伊達に女狐よ、女狐よと呼ばれちゃいけないのだよ……」

「自分で言うことかよ、アン？」

「お前達、男が頭を使わんから」

バウ……!!

シヤア専用モビルアーマー「ノイエ・ローテ」とユウ・カジマ機の一騎討ち、それははた目から見た限りでは。

「戦いばかりに視線を向けるから、さ」

「それが、男の本能だからなあ」

「いつまでも、どこまでもそれが続くから」

妖花、シヤア・アズナブルが駆るノイエ・ローテが押している風には見える。

「私たち女が、スイーツとカップラーメンをガツガツ喰らいつつに、頭と口を動かさなくてはならなくなるよ」

「糖分と塩分とが必須か」

「健康には、良くないがな」

だが、その二機の戦いは、ニュータイプとオールドタイプを象徴す

る二人の男達の戦いは。

「本当なら、両方を健康的に摂取できれば良いのだが」

「どちらが糖分ですか、ハマーン様？」

「ん、プルよそれはな……」

クイン・マンサの機体が内容物を使いきった空のファンネル搭載ポッド。それを自分の機体。

ポウウ……

黒塗装のキュベレイのそのポッドと交換しつつ、女丈夫「ハマーン・カーン」が御付きの少女パイロットが、小さな声で自らの直属の上官へとその比喻の意味を訊ねる。

「甘い夢を見させる方が、ニュータイプ」

「では、ハマーン様」

ブアコウ!!

その「観戦」を行っているハマーン達の視線の先で、大出力ビームを無差別に放ち続けるノイエ・ローテが押しているように見えるのは、まさしく見かけのみだ。

「塩辛い涙を見せるのがオールドタイプ、ですか？」

「さすがに勘が良い、プル」

「涙、かあ……」

そのユウ対シヤアの戦闘状況、それは半壊したハマーン機へとすり寄って来たニュータイプの少女達にしても。

「泣いたガキの逆切れに、あの赤い彗星と言われたシヤアが押されているとはね……」

「私はアナベル・ガトー、妖花ノイエ・ローテのサブ・パイロットを務めているあの方が心配です」

「とはいっても、どうしよもないさ、ネオ・ジオン兵」

このニュータイプ能力とは縁がないリョウ・ルーツ青年も、ネオ・ジオン古参兵であるカリウス・オットー中尉、二人共々に解っている。

「あやし達の従姉妹、元気かなあ……」

「従姉妹ねえ、嬢ちゃん……」

「昔にいたんだよ、コンパチダブル・ゼータに乗るオジサン」

サイズの大きな差こそあれ、クイン・マンサのファンネルポッドとキュベレイ・タイプのそれはある程度の互換性がある。が、それでもハマーンが乗るモビルスーツの尻へと括り付けられたサイコミュ端末放出器は、その白い巨体と小さな「黒いスカート」のコントラストもあり。

「プルの話し相手になってやれ、連邦兵よ……」

「あんたハマーンの尻、チラリズムに目を奪われてな」

「そう言ってもらえると、私としても」

クウク……

自らの「尻隠し」をハマーンへと譲り渡したプルの乗るニュータイプ専用機。

「セクハラのおジサンだ……」

「許してやりなよ、プル」

「解っているよ、プルツー」

その機体から彼女プルが忍び笑いを漏らすと共に。

「あたしプルも、サービスだ」

「全く、この小娘達……」

黒く光る尻、キュベレイ改修型の臀部を遊ぶように揺り動かしてしている光景を。

「ハマーンにべつたりの小娘共が、大人をやって……」

自機へと起こったマシン・トラブルの復帰を行っているシーマが、呆れたような顔をして見つめている。

「可愛いげのある男を、発掘する悦びを、私ことハマーンは忘れられないというものだ」

「女王様って、わけだ」

「シヤアの奴が、取り憑かれて失踪した埋め合わせでな」

「結局、結局はシヤア・アズナブルか……」

フウウ……!!

異常な高速機動を行っていたGマリオンの手から放たれた魔剣エグザムによる斬波、それをかわそうとするシヤアの腕前は実に素晴らしいが、ノイエ・ローテ自身の巨体がそれを邪魔している。高速機動

型かつ、重火力モビルアーマーの限界だ。

オウウ……!!

「偉人さんに、昔」

吼えだてるGマリオン、ブルーデイスティニーの泣き叫びに呼応されたのか。

「偉人さんに連れられちゃったの、あの従姉妹の子は昔に」

ポツリとその小さな唇から滴る、プルの声。

「いつの間にか、イジンさんに」

「イジンさんに、ねえ……」

「泣いて、塩辛い涙を流してないかな……」

「大丈夫さ、嬢ちゃん」

そのリョウ青年の言葉は、このプルという少女を気づかっただけから出た物であるのは確かだか、ある意味人間の猜疑心を反転させたのがニュータイプ能力であると言うのなら。

「気休めをやめろよな、あんた」

「フン、悪いなプルその2型とやら」

ニュータイプ少女達のもう片割れに、上面であるとはいえ優しさを一蹴されて気分が悪くなるのは、リョウ青年のせいではない。

「気休め、受け入れる心の広さを持ってよ、プルツ」

「ハアイ、ハマーン様……」

ボウ……

不機嫌そうに鼻を鳴らしたプルツ、ネオ・ジオンのニュータイプ兵の視線の先で、ユウ機の手の平がノイエ・ローテへと突きつけられ。

——瘧ーン……!!——

呪詛の言葉と共にそのGマリオンの手が輝き、ユウ・カジマがシャア機ノイエ・ローテの動きを一瞬とはいえ完全に止める。

「チョー能力かよ、ユウの旦那……」

「私も、ニュータイプも使えるかもしれない、ZZのオジサン」

「ああそうですか、プルちゃんよ……」

皆がその光景を、固唾を呑んで見つめる中。

「フィアード……」

グウウ……

全く復帰が上手くいかず、もはや自機の調整をお手上げとしたシーマ・ガラハウの虚ろな声がリョウ青年の耳へと入る。

「何だい、ソイツは？」

「妖術だよ、連邦のアンチャン……」

「面妖だな、宇宙海賊とやら」

「あたしは、それをシュレティンガー」

ガツカウ!!

ノイエ・ローテとしてもユウに一方的にやられるつもりはない、身動きが出来なくとも自機から対空砲を乱射させ、その意思表示をしているのは確かだが。

「シュレティンガー・コロニーで見た事があるんだよ、私は」

「哲学的な非道、シュレティンガーを知っているではないか、シーマ・ガラハウ」

そのラプラス、可能性を調査する実験を主目的ではないとはいえ、史上絶大な規模で行われた作戦に従事していたが故に、彼女シーマが睡眠薬漬けとなつてしまった事、それは所詮ハマーンにはダイレクトな感覚として伝わらない。

——ニュータイプ限界だ——

「パイレーツナイト・シーマよ」

「あんたの崇める、超小娘ミネバの親父さんが、間接的にしでかした事だよ、ハマーン」

「ウ、ム……」

だが、人の意思の真にシンプルなコミュニケーション、皮肉混じりとは言え今シーマが扱ったアルファベット言語、対話という偉大な力はその狭弛を乗り越えられる。

ズウウ……

ノイエ・ローテが動き始めたが、それを許さぬとばかりにGマリオンから追撃として放たれたチェーンが、紅い燐を撒き散らしながら。「やっぱり怖いよ、あの蒼い機体……」

「目と感性を、少し塞ぐ方法を身に付けた方がいいかもな、プルよ」

「怖いんです、ハマーン様……」

トウン……

片目から、水滴が流れているプルの視線の先で、そのエグザム機が降り下ろした焰の鞭。

「ファンネルも、通じんとはね……」

「今後はどうしますかね、シヤア・アズナブル？」

「どういう意味だよ、アナベル・ガトーよ……」

異世界ミノフスキー空間から招来させた魔界の火焰を纏った鞭が、シヤアの放ったステルス・ファンネルをいとも容易く粉碎した事に、もはや赤い彗星は苦笑するしかなかった。

第73話 ユウ・フロンタル

「最後の、出撃かな？」

「そうかもしれないませんが、アフレアさん」

相も変わらず、出撃を前にした部下を目の前にしても。

「頑張ってくれよ、カツ」

「了解」

多忙である、通信士長であるアフレアに部下への励ましを任せたまま。

「フィリップの奴にお願いね、カツ」

「任せてくださいよ、ミリーさん」

部下達へ、全ての用事心遣いを任せたまま、この全天候型モビルスーツ運用艦「ストウラート」の艦長、分類的には数年前に竣工されたロンバルディア級の類似艦へと当たるこの船の責任者「ヨハン・イブラヒム・ミリコーゼフ」は。

「グウ……」

「全く、置物カンチョーめえ」

「グウガア……」

クルーの皆から呆れたような視線を自らに集中させつつ、居眠りをしながら。

スウ……

その手の平を、カツへと向けて緩やかに振ってみせる。

「カツ・コバヤシ、行って参ります」

「頑張ってくれよ」

ミリコーゼフ艦長へ敬礼をした後、このメインブリッジから立ち去るカツへアフレアは再び先程の台詞をウィンクしながら言った後。

「アフレア、搬入された新型機のエネルギーパックの仕様が変なんだから？」

「ああ、データを送ってくれ……」

自分の耳へとかかる赤髪を払い、ハンガーデッキからの要請に、通

信用インカムへ改めて手を伸ばした。

「言葉で言ってくれないと、気持ちは伝わらないってのお、カンチョー」

「放っておきなさいよ、フェイブ」

「けどな、ミリーさん」

古めかしい操舵用の円輪舵、操者の肉体的感覚を重視しつつも、最新のアシスト機能が備え付けられた、艦を進水させる為のコントロール・システムを操りつつに、フェイブ操縦士が。

「俺たちはニュータイプという摩訶不思議なもんじゃない」

「仕事に専念よ、フェイブ」

「何か、言葉とか使わない限り、人へちやんと気持ち伝わらんもんかよう……」

ぶつぶつと文句を言うなか、オペレーター総括長アフラーの手元のランプが点滅を始める。

ドウフ……

ソーラ・システムⅢが展開している宙域から推し進めていた艦ストウラート、正式にはその改修艦「Ⅱ」と艦名の語尾へと付く万能艦へ、近くのジュピトリスから内火艇が接舷し、軽く艦全体が揺らぐ。

「こちらジュピトリスからのユピテル丸、ドウガチ艦長からの使者カラスです」

「五番ブロック、それらにアクセス・チューブが繋がります」

「了解」

まだ若い、少年とも感じられるジュピトリスから来た大型連絡艇、その操縦士の声にし驚きながらも、ミリーは彼へ自艦との接続方法を指示する。

「そう、こうやってミリーさんみたいに、内のカンチョーがやってくれないと」

「うるさいぞ、フェイブ」

「すみませえん、アフラーさん」

「全く……」

自分の栗色をした髪をかき上げながら愚痴るフェイブ操縦士、彼の

そのぞんざいな態度、いや声を耳にしてもミリコーゼフ艦長は。

「スオウ……」

何一つ言わず、再び寝息をその口から漏らし始めた。

「サラ、彼女はすでに？」

「ああ、機体の補給修理も済ませ」

ベーベルメン整備士から、総チエック済みのジ・オ、および大型運搬機メルキャリバーの説明を受けながらも、カツの視線は。

「サマナさん、休む間もないな……」

「どうも、あの最新型のジエガンはね、カツ」

ハンガーの片隅にそびえ立つ、重装備へと身を固めているジエガン・タイプ、噂に聴く限りではアムロ・レイが駆るルーGPをモバイルスーツ・タイプへと機体規模を落とした試作機と同レベルの性能があるらしき、現段階で最強の連邦軍製モバイルスーツ。

「サマナさんを、名指しで指名したらしいね」

「基本に忠実、あの人のそれが御上さん方に気に入られたかな？」

「それもあると思うけど……」

ビィィ……

その、二人がヒソヒソと噂をしていた当のモバイルスーツが出撃するようだ、発進準備を知らせるベルの音と共に、サマナ・フユリスを乗せたその重装ジェガンが静かにカタパルト・デツキへ続くエレベーター、昇降ブロックに向けてその脚を運ぶ。

「何か、最新型ビーム兵器のテスト機体でもあるらしいわ」

「最新型、か……」

どういう形にしるこの戦争、後にどのような名前がつくのかは解らないが、この大戦争の後始末を。

「上の人達は、考えているんだろうなあ……」

「何をかしら、カツ？」

「戦後、とやらをさ」

ズウン……

重厚なそのジエガン・タイプはエレベーター・ブロックへと乗り込み、ハンガーからの灯りに鈍くその身へと付けた新兵器の数々を光らせつつ。

「エレベーター、ハッチ封鎖」

「了解」

「サマナさん、ご武運を」

「任せて……」

メカニツクの男からの声に薄く答えながら、サマナ・フュリスは閉じられていく閉鎖壁の中へと、その堂々たるモビルスーツの体軀を隠れされた。

「僕達、どうなるんだろうな……」

あまりその手の物事、戦後の身の振り方などは考えた事がなかったカツ・コバヤシ。

「あまり、あたし達一般の兵が考える事ではないと思う、カツ」

「まあね、ベーベルメンさん……」

「どうにでもなるわよ」

少し楽観的に過ぎると周囲の人間から言われている女メカニツクの言葉に。

「確かに、そうだけだよ……」

ハア……

軽いため息をその口から吐いてみせるカツ。自分にあてがわれた機体へその身を寄せる彼の脳裏には。

「親父も、同じことを言っていたな」

——人は、目先の役目だけを果たせばいい——

彼カツの父「ハヤト・コバヤシ」の家には様々な人達、くだんのアムロ・レイを始め、胡散臭いフリージャーナリストやどこぞの女性起業家などが訪れ、広い世界というものをカツへ感じさせてくれた、父親がそれを見せてくれたものだ。

——世の中は、可能性に溢れているね、父さん——

——だが、人の手が伸びるセンチメートルは変わらない——
それでも、どこか名残惜しげに世界へとその視線を向けながら、黙々と己の仕事を勤めていた父。その父の「小さな人としての」生き方をどこか馬鹿にしていたが故に、カツはアムロ・レイの推薦を受けてユウ・カジマという男の元でパイロット、兵隊の道を進む事にしたのだが。

「僕は、果たして正しいのか……？」

もちろん、善悪ではなく生き方の問題をカツは一人の言葉として言っている。

スオ……

「……」

自機ジ・オへと、ハンガー天井から吊るされている昇降用のゴンドラへ脚を掛けながらその機体のコクピットへと自身の体を昇らせているカツの脳裏に、ふとこの広い世界の限界地から来た男。

「シロツコさんは、僕の親父についてどう思うかな……？」

この目の前の重モビルスーツを製作した、自分の父親とは全くタイプが違う木星帰りの天才の顔が、微かに浮かんだ。

「どうも、マシントラブルの様子でした」

「立ち往生か、カラスさん……」

「さん、さん付けはね」

見事な腕前で、奇っ怪なモビルアーマーをカツの機体が乗るメルキヤリバーへと随伴させているそのカラス少年によれば。

「止めてくださいよ、カツさん」

「その歳で、モビルアーマーをここまで動かせるとは、大したもんだ」
「どうも……」

そういうカツにしても二十歳前後の年齢、あまり人の事についてなんだかんと言える物ではない。

「救助を、僕はあのサラという人に提案したのですが」

「連れてこなかったのですか、結局タイタニアを？」

「突っ張られましたよ、全く……」

この謎の形をした機体、木星圏では「オウムガイ」と呼ばれている作業用機へと乗るこの少年は、ここまで来る途中で、サラが乗るタイタニアを見たと言うのだ。

「こんな、触手に絡め取られるのは嫌だと」

「まあ、気持ちは解る……」

そのノーティラスとかいう、歪に極まりない作業用モビルアーマーから。

ウエネ、ウエエ……

多数のワイヤーロープを漆黒の宙へと投げ出しているカラス少年へ向かい、カツが呆れたような声を上げる。

「まるで、しかも脳波でお前を恥ずかしめられる事が出来る、だよ」

「おや、あのゲームを？」

不気味な姿のモビルアーマーから、微かに嬉しげな声がかつへと届いた。

「知っているのか、カラス君？」

「一年前ぐらい前に僕たち、ジュピトリスVと一緒にこの地球圏へと運ばれたゲームですよ……」

「木星で、ビデオゲームが？」

「あるに決まっているじゃないですか、カツさん」

かなり高速で漆黒の宙を切っている、ジ・オを乗せたメルキヤリバー。その速度にこの「オウムガイ・モビルアーマー」が付いてこれるという辺りは、さすがに木星圏製作の機体だとカツは思う。何も木星ブランドには根拠がないが。

「木星には、娯楽は何もない」

「ああ、なるほど……」

「疑似、仮想空間が発達するのに十分な環境です」

グウウ……

カラスが乗るノーティラス、作業用機体が静かにカツ機から離れていく。もともと作業用のモビルアーマーでもあるし、そもそも彼ら木星人にはこの戦争に加わる義理も義務もない、変わり者のシロッコを除けば、まさしく中立の者達から見ると対岸の火事である。

「ヘリウムだけでは、木星人は侮られますからね」

「面白く、イヤらしいバーチャル・ゲームだった」

「強者のみが、全てを手にすることが出来る世界ですよ」

「まあ、ゲームだからね」

別にカツにしてみれば、あまりにも「淫靡と暴力」が支配するゲームであった為にあまり性癖に合わなかったのだが。

——うひゅう!!——

——気持ち悪い歓声をあげないでよ、サラ——

モビルスーツの整備状態の関係でフィリップ達の支援に先行しているサラ、何故か彼女の方が熱中していたが為に、仕方なく参加していたのだ。

「だったら、このノーティラスとらのプレイも受けろつての……」

「カツさん」

「遊びじゃないんだから……」

「カツさーん?」

「あ、はい?」

呼び掛けるカラスの声に、カツは慌ててジ・オからノーティラスの姿を見やる。すでにかかなりの距離が離れているその作業用機の先には、中立勢力である木星圏の者達、いつまでも地球へ留まったまま帰らないシロッコ、天才に業を煮やした彼らが派遣したジユピトリス五番艦の姿が見える。

「その、確かサラさん、でしたっけ?」

「ああ……」

「どうするつもりで、カツさんは?」

無論、カツにしてみれば、すでに重武装運搬機であるメルキャリバーにニュータイプ専用機「タイタイア」を乗せ、フィリップ達の増

援へと一足先に向かったサラ、彼女の事は気にはなる。

——この触手、離して欲しければ私の事を好きだと言いなさい、カツ!!——

——好き、好きだギブブギブ!!——

バーチャルゲーム「しかも脳波でお前を恥ずかしめる事が出来る」で、サラが扮する女騎士が「オーク」という豚のような顔をした種族、謎の人型生物をその手から放った触手達で締め上げた。

——……本当に?——

——え?——

——本音?——

豚人間を締め上げた、触手の動きが止まり、サラの真意な声が豚人間カツへと投げ付けられる。

「寄るさ、カラス君」

「モルモット隊とやらの隊長さん達、それへの援軍は急ぎではありませんしょう?」

「まあ、そうだが……」

スウ……

カツ機の後方、そこから届く光はサラのタイタニアと同じく、トラブルを起こし内火艇をストウラートから出してもらった。

「彼女、サラだって戦力だ」

「なるほど」

「仲間の所、タイタニアの近くへ通りすがってみるさ」

「お優しいです、カツさん」

「まあ、ね……」

船外、宇宙空間で機体外部からメカニックによる応急修理を受けたサマナ機「スタークジェガン」のそれであろうか。

「さすがに、地球人はお甘い」

「んん?」

何か、少しカラス少年の声に嫌みな物が混じって聴こえたのは、カツのニュータイプ能力のせいだけではあるまい。

「では、カツさん」

ジイ、ジッジ……

お互いの通信の声が、ミノフスキー粒子の影響により途切れ始めた。

「武運を」

「おう、あばよカラス」

「生き延びて下さいよ、カツさん……」

少し、カラスの「お甘い」という言い方に腹が立ったのか、カツはあえて乱暴な口調で木屋から来た少年へと別れの返事をし。

「まあ、あのカラス君とやらも……」

遠ざかり、すでにその姿が米粒のようにはか見えないノーティラスを尻目にしながら。

「所詮は木星人、ミニマム・シロツコさんと思えばいいか」

ドウウ……

僅かに乗馬メルキャリバーへと拍車をかけつつ。

「ありや、アクシズに着く前にサブ・フライト・システムが潰れるよ、サマナさん……」

後方から猛スピードで迫ってきたサマナ機に対し、少し呆れたような視線を投げ掛けた。

「おいおいおい!?!」

ドウウ……!!

パープル・カラーをしたZタイプ、その機体から放たれるビーム光条に直感的な危険を感じ、自分のブループラウスのシールドで防ごうとしなかったファイリッップの判断は正しかった。

ガシャア……!!

そのビームの流れ弾、それはいとも容易く宙へと破棄された量産型Zガンダムを貫き、さらに他のスペースデブリも撃ち抜いていく。

「何モンだか、知らねえが!!」

後続のシドレ機ジエガンが乗るメガ・ライダー。シロツコ謹製の重運搬機メルキヤリバーの「パクリ」と噂されるその機体が装備する大口徑ビームによる迎撃を容易く押し返す、敵機のビーム砲のその威力、精度共に恐ろしい。

「どこから、掠め取ったZガンダム・タイプなんだか!!」

「人間きが悪いよな、連邦!!」

ギイン!!

同時に可変をしたZタイプ、ファイリッパのブループラウスとその紫色のZガンダムが互いに持つビームサーベルの光を。

「選ばれし者の露払いに相応しい、このZⅢ!!」

「ハイハイ三号機ね、お元気なことって紫のゼータ・ガンダム!!」

「その余裕がいつまで続くかな、ジムヘッドのZプラス!!」

「れっきとした、ブループラウスという名前エがあるんだよ!!」

「蒼い名前の癖に焦げ茶か!!」

「悪いな、ボーヤ!!」

アクシズを遠目とした宙域の中で交差させる二機のサーベル、しかしその性能差は。

「量産機に過ぎないゼータ・プラス、さらにそれのでき損ないを駆る連邦!!」

「ろくでもねえマイナーチェンジを続けてくれるぜ、アナハイムさんも!!」

その新型Z、そののビームサーベルの出力は完全にブループラス、Zプラス・タイプCを元に作られたファイリッパ機ブルーデイスティニー四号機を圧倒している。

「顔の無い、連邦の!!」

「本当にアナハイムの旦那もよお、全く迷惑だぜ!!」

「連邦共に相応しい!!」

ジャアア……!!

シドレ機からの支援射撃、それをそのZⅢは軽々とかわしながら、自らも一旦その背へと納めた大型ライフル、機体共々最新鋭と思われ

るビーム砲を取り出す。

「不完全で!!」

バウウ!!

赤い光条、新型のビーム発信器から放射されるビームがブループラウスの間際を滑り込む。

「弱くて!!」

「直撃をされてないはずが!？」

僅かにかすったのみ、それでもその不明機Zタイプからのビームにより、フィリップ機のシールドが深く抉られた。

「アクシズへの増援どころではないぜ、こりやあさあ!!」

彼我の機体性能差が大きすぎる事に、フィリップはコクピット内で強く歯噛みをする。

ズウ!!

そのフィリップの機体後方からシドレ機ジェガンが急接近し、メガ・ライダーの上から振るったビームサーベル。

カツ、ハアア……!!

その斬撃を紙一重でかわながらも、その紫色のZタイプから響く哄笑は止まらない。

「無責任な、連中だ!!」

「無責任ですって!？」

バアア!!

ジェガン、シドレ機がメガ・ライダーから跳ね降り、その勢いに任せたままにサーベルを大上段から新型Z、ZⅢ（ズイー・ドライ）へと切りかからせる。

「アクシズ、シャアの尻馬にのって、自分達の欲を満たそうとする連中が!!」

「マイナーな雑魚モビルスーツ、ジ・ムが!!」

シュウ……

しかし、そのZⅢという名の高性能機、それからの斬撃をシドレは非常に巧みに、あえてそのビームサーベルの出力差を利用して受け流し。

「ユウ大佐に惚れ込む私たち、モルモットを無責任だと呼ぶことは!!」
「ユウ、大佐だって!？」

「許されない事だ!!」

ゴウン!!

その最後の台詞と共に蹴り上げられたシドレ機の前蹴りに、そのZタイプは僅かに虚をつかれながらも。

「そうか、あのユウ・カジマの部下か!!」

ザア……

ZⅢのハイパー・ビーム・サーベルの剣先、それを寸前でかわす事の出来るシドレ・マリオスの腕は並ではない。さすがに新兵と呼ばれなくなってから久しいだけの事はある。

「だがな、このアンジエロ・ザウパーにとっては!!」

フウウ……

その三撃めの払いもジェガンにかわされた為か、このZガンダムへと乗る少年の声に苛立ちが混じり始めた。

「ユウ大佐は、一人だけで良い!!」

「その、蒼き運命に乗れなかった人が!!」

「何、キサマ!？」

「それを、単なる廻り合わせを全てへの憎しみの種とする人など!!」

ズウ!!

シドレ機にその両手首を捕まれ。

「うわっ!？」

「私達の、大佐を一緒に!!」

ゴッ……!!

ジェガンの頭部にヘッドバットを喰らったZタイプ、アンジエロ機へと大きく振動が疾った。

「一緒に、するな!!」

「女、いや男か!？」

「どっちでもいいだろう、少年がよ!？」

「貴様の、名は!？」

少し、アンジエロ少年に油断があった面は確かにあるのだが。

「シドレちゃん、どうした……?」

「私の名はシードル・マリオス!!」

あきらかにジエガン・タイプよりも性能が上と思われるZⅢ、その機体を相手にして、凄まじく放たれるシドレ機からの光。

「その名を!!」

ブオフウ!!

アンジェロ機からの頭部バルカン砲、それに対し一旦身を引かせたジエガン、シドレのモビルスーツへ向けて。

「ユウ・フロンタル（アナタノカオ）へ伝えておくがいい!!」

「何者だよ、シードレとやら?!」

激昂した叫び声を上げるアンジェロが、猪突にサーベルを突き出し続ける。

ガア!!

「何者だと、このアンジェロが!!」

そのハイバーサーベルの光がジエガンの肩をかすめ、ビーム刃の刺突による衝撃が。

「くうっ、パープルZの少年が!!」

機体コクピット内のシドレの身体を揺らす。

「何者だと俺は、アンジェロ・ザウパーは!!」

「シドレちゃんよ!!」

ザアシユ……!!

「乱暴すぎると、ジエガンを壊すぜ!!」

「邪魔だ、ジ・ム・ゼータア!!」

「邪魔してんだよ、新型Zさんよ!!」

援護へ入ったフィリップ機が振るう光刃、それを対ビーム加工が施されたシールドで滑らせつつにZⅢ、紫紺のZガンダムがシドレ機へと迫る。

「聞いている、オトコオンナ!!」

「その答えは、アンジェロとやら!!」

ギイイ……!!

ストウラート、モルモット隊母艦の方面から飛び掛かってくる、数

基のファンネル。

「オトコオンナ、貴様が連邦共の増援を!？」

「私達マリオン・マリアスにしても!!」

ファンネル群、それを脳裏へと疾った信頼のウエーヴ感覚から味方機、おそらくはサラ機からの支援だと確信して、勢いづいたシドレが腰のグレネード・ランチャーを牽制弾としてアンジエロ機へと射出させた。

「ユウ隊長も、シユレディングーのもう一人の獣であった、お前達のユウも!!」

「貴様な、いったい!？」

「それはな、アンジエロとやら!!」

グレネードが僅かではあるがアンジエロ機を破損させ、その体勢を揺るがせる。そのシドレの攻撃に追従するかにようにファンネル群が乙皿へと迫り来る。

シユ……

だが、そのファンネルを迎撃するかのようには、宙域を切り裂く。

「あたしのタイタニアのファンネルが!？」

必殺を願掛けて、サラがタイタニアから射ち放った純白のファンネルを叩き落とす、同色をしたサイコミユ兵器。

「お前も、そのフロンタルという男も!!」

「敵に強力なファンネル使いがいるの、シドレ!？」

「無論に、この僕シドレも!!」

ギィーアア!!

乙皿アンジエロ機からの掃射ビーム、紅い光がサラのファンネルを叩き落としたサイコミユ搭載機へと向けて遠距離射撃を与えようとした後続機、サマナの最新鋭ジェガンへと牽制をかける。

「僕の乙皿が不甲斐ないばかりに、あの方へ撃たせる手間をかけさせた……!!」

「知る術などは!!」

「お許しを……!!」

ジァ、ギァア……!!

アンジエロ少年、彼を支援するかのようにはライフルを乱打してきたギラ・ドーガ、ファンネル搭載タイプに改良されたと思われる白一色の機体を駆る者へと向けて。

「ない!!」

裂帛の断をしたシドレ。その蒼色の光を放つジエガンを嘲笑うかのような、くぐもった呻きが。

「だろウ、ナ……」

敵の、野盗化モビルスーツであるアンジエロ機の目上と思われる男の口から溢れ落ちる。

「お許しを、ユウ・フロンタル様!!」

「加勢するゾ、アンジエロ……」

フウ……

昏く、呪詛に満ちた声がそのギラ・ドーガ、純白のドーガ・タイプを駆る男の唇を再度に震わせた時。

ドウウ!!

「逃がすな、フィリップさん達!!」

そのシドレ機の背後から、連邦の最新鋭モビルスーツが自機を乗せている運搬機へと過剰な負荷をかけ。

ボウウ……

ブースターが吹き飛んだそのモビルスーツ補助システムから機体を離れさせつつに。

「その男、連邦軍内の危険人物リストの上位につき!!」

なおも慣性により凄まじいスピードを放っている重装ジエガン、スークタイプと呼ばれているそれを駆るサマナの機体が、ビームサーベルの光をきらめかせつつ他の敵味方を無視し、その白いギラ・ドーガへと猛進する。

「ただちに、ここで排除!!」

「クウ……!!」

バアフ!!

そのサマナのジエガン・タイプの勢いに押されたか、自らもサーベルを抜き出し、鏢を迫り合う白きギラ・ドーガが一太刀めで押され始

めたのは。

「この、僕たちの隊長の名を騙る者!!」

「オノレ……!!」

単なる運か、または。

「生意気ナ……!!」

「アムロ・レイの再来と呼ばれている、このテロリストのリーダー!!」

バオン!!

サマナ機のサーベルが彼の機体を強く弾き跳ばした事、それから見るに。

「腕前自体は大したこと、無いと思う!!」

「何、だとお!？」

ガオウ!!

カツ機ジ・オからのヴァリアブル・ビームを寸前でかわすと共に、アンジェロの駆るZⅢはそのサマナ機へ向かい、新型ビーム砲を撃ち放つ。

「フロントル大佐に、よくも言ってくれたな!!」

「言ったからって、Zタイプのテロリストがこのスタークに何が出来る!？」

重装ジェガン、スタークへ向けて迫るアンジェロ機からの射撃に対して。

バウフオ……!!

そのサマナ機が構えたビームライフル、その銃口が光を一度淀ませから。

「強すぎるんだよ、この新鋭ジェガンはね!!」

「な、何だと!？」

ギアア!!

ZⅢのビーム光条と衝突し、それをいとも容易く攪拌させる程の集束ビームが放射され。

「くそ!!」

「く、そう!!」

その強く帯電をした光がアンジェロ機の脇を掠めると共に、二人の

口から同じ罵声が放たれる。

「狙いが不十分だった……!!」

「まともに命中してたら、確実にあの改造ジエガンに僕は潰されていった……!!」

サマナ機の得物であるビームライフル、そしてそれを構えた試験運用型ジエガンの左腕がビーム銃共々に放電をし。

「連射をしてくれるなよ、ジ・ムが……!!」

相手の機体が異常を起こしている事を気休めと感じながらも、アンジエロはサラのタイタニアから攻撃を受けている「ユウ」の加勢をしようとその自機の面を傾けた。

「連邦が、潔白を象徴させるなどとは!!」

ギイーイイ!!

「このアンジエロは、許しはしない!!」

「せっかくのファンネル・バトルでの勝利が!!」

「ザマを見たか、ドレス付き!!」

ZⅢからの集束ビームによりタイタニアからのファンネル、その「ユウ」が扱う機体のファンネル群を押していたという好状況に水ならぬ「火」を注がれ。

「これなら!!」

そのアンジエロ機を再度引き受けてくれたサマナの姿を視界に入れつつ、サラが追撃として「ユウ」機へ向けて放ったビームライフルも。

バアウ!!

「俺が、一番……」

さすがにこの男は、伊達にこの強力なZⅢを駆れる少年を従えているわけではないらしく。

「モビルスーツヲ、上手く……」

そのサイコミュ搭載型のドーガ・タイプからの射撃により相い打たれ、タイタニアからの可変ビームは相殺されてしまう。

「扱え、ルンダ!!」

「フロントル様、サイコ・ギラ・ドーガ!!」

「マリィダ……!?!」

ブォフ……

白き機体、そのモビルスーツへと乗るパイロットの声に呼応するかのようには別機体のファンネルが。

「支援に入ります……!?!」

「つまりは、一時テツタイしろと、オレに言っているな……!?!」

「サイコギラドローガ、所詮は仮の御身を預けるだけのモビルスーツです……」

「チィイ……」

バウフ……!!

ファンネルの弾幕、そしてビーム砲の乱撃が「ユウ」の機体背後から迸り、その火力により「モルモット隊」を僅かに怯ませる。

「ココは、マリィダに従うゾ、アンジエロ……」

「了解、ユウ・フロンタル」

「シャアの、尻馬に乗ることをダイイチに考えヨウ……」

ギョア……

白きモビルスーツ、おそらくはニュータイプ用の機体であるドゥガ・タイプが退き、それにアンジエロ機と後方から支援を行っていたモビルアーマーもその「ユウ」へと続く姿に。

「追撃をしたいが……」

「止めろ、サマナちゃん……」

「です、よね……」

「ユウ・フロンタル」を支援する二機、紫色をしたZ―IIIガンダムのは性は全く侮れず。

「クイン・マンサをダウンサイジングした物だと思うが」

「コードネーム、ヒヤシンスです」

「その分、対巨大機体戦術が通用しねえな、サマナ」

そのモビルアーマー「ヒヤシンス」から放たれたファンネルに対し、サラ機を運んでいたメルキャリバーへと乗っていたアルフからは何も警告が発せられなかった。

「電子戦機メイプーク、あれでも今のファンネルは映せたかどうかわ

からんぞ……」

本来、宙間で応急整備を行っていた時にサマナ機「スタークジェガン」の不安定さが気になり、機体観察の為に彼の運搬機へと乗っていたアルフ・カムラではあるが。

「それなりのアンチ・ファンネル装置が付いているメルキヤリバーには、全く映らんかった……」

「ドレス……」

メルキヤリバーがかなりの電子戦能力を持っている事を知っていたが為に、彼は途中で救助したサラ、何やらブツブツと呻いている彼女の運搬機へと乗り込んだのだ。

「また、シロッコ様からのドレスが……」

「タイタニアとのデータ・リンクは正常、それでもダメだったか」
「そんなのより、私としてはドレスの方が大事よアルフさん……」

対ファンネル・レーダーのみとしても、タイタニアへ搭載されている疑似ニュータイプ波発生器の能力に加え、サラのニュータイプ能力は決してバカにしたものではない。モルモット隊ではナンバー2である。

「シロッコの旦那ならまた新調、手直しをしてくれるさ、サラちゃん」
「そうかもしれないけど、ファイリッパ隊長さん……」

「それが趣味だからさ、あの人は……」

それでも見抜けなかったそのステルス・ファンネルによる攻撃、まるで最初から狙いを定めていたかのようにビーム砲火を集中させられたサラ機タイタニアの損害は浅くない。

「この白き妖精のドレスへ、何か深い敵意を感じたような……？」

「あのな、サラ」

「結婚を破談にされた相手……？」

特に、メイン・スラスターの部分が大きく削りとられている。

「誰かしら、ね……？」

「まだ、アクシズへの救援がな……」

「何だよ、トン・カツ？」

「おい……」

グイ……

「カツ!!」

「君まで、シドレ……」

ギイーイイ!!

「前!!」

「遅いよ、シドレ!!」

そのビームは「最後っぺ」だとも言うのだろうか、アンジエロ機ZⅢからの遠距離狙撃を身軽にジ・オを捻った姿に、モルモット隊の隊長であるフィリップ・ヒューズは感嘆したが。

ボウウ!!

「伏兵がいたか……!!」

見事に引き撃ちをやつてみせた「ヒヤシンス」を先頭にしたモバイルスーツ達からの攻撃、その内の一機マラサイ・フェダーイン、重装タイブのマラサイをシドレ機が撃破出来たのはいい。

「マリオン、ちゃん!!」

——M—LION・SYSTEM・STANDBY——

だが整備不良の状態、しばらく艦の片隅へと放つておかれたブループラウスの疑似ニュータイプ能力付与機能「マリオン・システム」を起動させたフィリップにしても、敵性モビルアーマーから放たれたファンネルは薄い光の軌跡としか彼の目に映らない、が。

ボウウ!!

「ちい、旧式のZプラスが!!」

「対ニュータイプ兵器は、ユウの奴だけの専売特許だけではないってコウト!!」

「しかし、あたしの本命は!!」

通称「ヒヤシンス」から放たれた隠密性ファンネル数基をその手に持つ大型ビーム砲スマートガンで貫けたのも僥倖、かつてのユウ・カジマに負けぬこの壮年の男が成せる技。しかしに。

「小娘エ、だ!!」

「あたし!?!」

「くたばれえ、白いドレス付き!!」

ドゥ!!

その巨体、原型機と思われるクイン・マンサに比べれば小型の機体ではあるが、その分機体へ軽快さが加わっている「ヒヤシンス」からのビーム乱打。

「くそ、クシヤ何とかめ!!」

「飛び降ります、アルフさん!!」

「だめだ、お前の破損したタイタニアの加速では!!」

バウウウ!!

タイタニアが足元であるメルキャリバー、重装型モビルスーツ運搬機の後部ブースターをアルフはフル稼働させ、その緑色をした「ヒヤシンス」を振り払おうとするが。

「やはり、飛び降ります!!」

「すまん、ブレる俺を許してくれ!!」

フウウ……

所詮は素人、技師が本職であるアルフ・カメラの操縦技術では直線的過ぎて、かえつていい的となってしまうている事に気が付いた二人が、互いに乗る機動兵器を分離させる。

「その、光!!」

ザァン……!!

急速接近を仕掛けてきた敵モビルアーマーの手首辺りから宙へと放り出されるビームサーベルの基部、それを即座に「ヒヤシンス」は握りしめ、長大なビーム刃を形成させた。

「ウエディング・ドレス、女の誇りへと身を包ませる、不愉快な女!!」

「顔も付き合わせないで女と解る、あんたはニュータイプとかさういう!!」

バァフオ……!!

敵機のビームサーベルを寸前でかわしたサラ機タイタニアのスター数基から軽く火花が散る、想像以上に先程のファンネルからの損害は大きいようだ。

「女なのか!?!」

「腹へ光を宿すことが出来る、その人間は!!」

ブオウ……

その「ヒヤシンス」からの追撃、それに呼応するかのように周囲へと舞う蒼い光が瞬く中、サラはその相手の気迫に圧されながらも自らの機体からビームサーベルを取り出したが。

パチイ!!

「女の性、それを持つ人間しかない!!」

「くう!!」

いとも容易く、タイタニアのサーベル光を自機のそれで押し潰し、あわてて使い物にならなくなったサーベル基部を放り出すサラ。

「そして、その光があたしマリーダ・クルスの戦闘的なターゲット・ポイントとさせてくれて!!」

「サラ!!」

チイ、シイ……

彼女の助けに駆け付けたカツ機ジ・オからのビーム、敵機がビームバリアー「Iフィールド」を纏っているとみて、高貫通力モードへと自機のライフルモードを咄嗟に切り替えた方がいいが。

ツウオ……

「ちよこざいな、黄色い球根モバイルスーツ!!」

「カツ、助けて!!」

今度は、そのモバイルアーマー自体の装甲をビームが貫けない。

「くそ!!」

ギユオウ!!

自機を急加速させ、カツが自機を敵モバイルアーマーへ向けて接近させようとしたのは良い、しかしその間にビームによる威嚇を行わなかったのは彼カツ・コバヤシの判断ミスであり。

「待ってる、サラ!!」

ズウウ……!!

タイタニアの「腹部」を狙われたサーベル斬撃を紙一重でサラはかわしたが。

「アアッ……!!」

「サ、ラア!!」

代償として、タイタニアの下半身を強く焼き切られる光景を目にし、頭へ血が昇ったカツの判断ミスが続く。

チィア……

「何故、効かない!?」

「カツ……!!」

苦痛に満ちたサラの声がかつへもたらしてくる焦り、それが彼の手元を狂わせ、決して満足な習熟をしているとは言えないジ・O、極めてピーキーな操縦感覚をパイロットへ要求する機体の動きが大きくぶれる。

チャア……

「こしやくな達磨の針が、あたしマリィダにはな!!」

「バリアーは貫けてるのに!!」

カツは低出力の高速貫通力モードに拘らず、重出力モードへとジ・オのヴァリアブル・ライフルを調整すればよかったのだ。そうすれば少なくとも衝撃によりバリアーもろとも相手を弾く事が出来たかもしれない。

ズウン!!

「ヒヤシンス」を支援しようとしている野盗兵団のモビルスーツの内、数機がその機体へと纏っている対ビーム・コーティング。その敵機体の特性を識別し、大出力のビーム砲「ビーム・スマートガン」で弾き飛ばしているフィリップのように。

「撃てよ撃てよと!!」

「まだ、よお……!!」

「あたしの心が、猛り叫ぶ!!」

ドウ!!

至近からのファンネル射撃により、今度はタイタニアのメインブースターが吹き飛ばさせる。

「腹を殴れば、命が消える!!」

「あたしには、未だそんな物はない!!」

「未来を言っている、あたしマリィダは!!」

ボウ、ボウフ!!

シドレのジェガン、それからのビームライフルが次々に「ヒヤシンス」とタイタニアを取り囲む敵モビルスーツを撃破しつつに。

「やるじゃないかって、言いたい所だがね、シドレちゃん!!」

「無駄口を叩いてる暇があったらあ、ファイリツプウ!!」

「呼び捨てかよ、オイ!?!」

ホウウ……

ジェガンのシールドから内蔵式ミサイルを「ヒヤシンス」に向けて撃ち放ちながら、シドレの強く焦りに満ちた声がファイリツプ機へと怒鳴り飛ぶ。

「サラを助ける、隊長!!」

「やっているだろう!?!」

「肉薄し、ぶち当たれ!!」

自らのジェガンをその通りに、安全出力を無視して絡み合うサラ機達へ突進させているシドレの言い分、それは周囲の状況を全く見えない。

ガウ!!

「よし、次!!」

「だめだ、この新型ジェガンは強すぎる!!」

「ガンダム・タイプなんで、オールドタイプは引つ込んでいろ!!」

ファイリツプはもちろん、サマナ機がこの目前で立ちすくむガンダムMKⅢ、それら等を初めとした他の「ヒヤシンス」追従モビルスーツ達へ狙いを定め、蹴散らしていなかったら、とつくにサラのタイタニアは撃墜されていたはずだ。

「撤退、撤退だ!!」

「いいぞ、そのまま逃げろ!!」

「マリィダ、フロンタル本隊と合流するぞ!!」

「そのまま、あのデカブツのモビルスーツを置いてな!!」

が、スタークジェガンを駆るサマナは戦闘行動を停止せず、そのまま自機を「ヒヤシンス」へ向けて突き進ませる、もちろんサラ機を助ける為もあるが。

「クシャトリヤ、ノイエ・ローテのモビルスーツ・タイプと共にネオ・

ジオンから奪われた機体であつたよな……!!」

しかし、サマナとて「モビルスーツ・パイロット」としてはベテランの年数に入る男だ、二兎追うものは一兎も捕れずということわざは重々承知の上、それでも。

「第一はサラ、第二はあのクシャトリヤのパイロットもろとも捕獲!!」

将人レベルの小飼い密偵としては、いつの間にかここまでの勢力にまで成長を為してしまった武装勢力「レッド・ジオニズム」改め。

「偽者のアムロ・レイを担ぎ上げる!!」

ゴウ、ウン……

スターク・ジェガンが肩部ランチャー、しかしその不発は先程からある程度予測をしていた為、サマナの神経を苛立たせる物ではない。

「袖付きとやら、内実を割らせたものだ!!」

そのスパイとしての性を心に感じながらも、サマナは右手のビームサーベルを下段へと低く構え、同時に自機の推進力を上げる。

ドウウ!!

「歳上の女、お前が子宮を抱えたまま消え去れば!!」

「不発、こんな時に!?!」

「あたしマリィダは、命の光に怯える事も無くなる!!」

サラが自機の下腹部から放ったサイコミュ・ジャマーはまともに動かず、単に「ヒヤシンス」への質量攻撃となるだけに終わり。

「とどめだ!!」

「やらせんよ、クシャトリヤ!!」

必殺の一撃を放とうとした「ヒヤシンス」と、すでにほぼ抵抗手段が無くなったタイタニアの間へ。

ジャアンツ!!

「危なかったよな、サラ!!」

「よくもあたしの邪魔を、身重いジェガン!!」

サマナのスターク・ジェガンが入り込み、その緑色をした大型機からのサーベルを受け止める。

「しかしな、この僕サマナ・フユリスは!!」

グウグ……

「押されている、このクシャトリヤが!」

「ユウ・カジマ、あのアムロ・レイへ勝ったという虚偽データを持つ人の名前を」

「これが、連邦の新型機だとも言うのか!」

「あえて言い張る、フロンタルとやらの……!!」

スタークジエガンというモビルスーツの出力、そして性能は尋常な品物でないであろう、大型機の持つビームサーベルを押し戻し。

「一目、御顔を拝見したいものだよ、実に気にいらぬ……!!」

「おのれ、量産機の分際が!!」

「袖付きめ……!!」

バース!!

大型サーベルを弾き、その巨体を揺るがせるクシャトリヤに対し、サマナは自身の機体左手へと固定されている圧縮ビームライフルの銃口を。

「光!」

「この、ビームマグナムならばな……!!」

「強い、光か!!」

その、サマナ・フユリスの機体が。

パ、ジャア……!!

腕から火花を散らせながらエネルギーを充填させている新型ビームライフルの口へ溜まった赤き圧縮光、その光が放つプレッシャーは近くで支援の機会を窺っているカツにも肌で感じられるほどだ。

「一撃で、あんたを貫ける!!」

「憎々しい、光を操る者どもが……!!」

「ゆえに、この私サマナ・フユリスはお前に降伏の勧告を……」

ビィイア……!!

遠距離から、紅と蒼の色をした燐光にと満ちた宇宙を切り裂くビームの光。

「またしても、あの新型Zガンダムとやらか!!」

その敵機からの支援を慌てて回避したサマナ機へと、身を退き始めたクシャトリヤが数本のビームサーベルを投げつけた。

ドゥウ!!

「助かる、カツ!!」

「早く、そのビームライフルを!!」

計三本投げられ、回転しながらスタークジェガンを切り裂こうとしたサーベル群をカツが左手、そしてジ・オの特殊機能「隠し腕」へと握られたビームサーベルで打ち払った事へ礼を言うサマナへ向けて、カツは自機のライフル銃身の先をスターク・ジェガンのマグナムへと向ける。

「あのモビルアーマーに!!」

「だめだ、カツ……」

「何で!？」

コクピット内でやたらと耳へ障る、カツの甲高い声に微かに嫌気を感じながらも、サマナはコンソールへと浮かび上がった警告の文字をじつと睨み付けた。

「ビームマグナムのエネルギー充填に失敗した……」

「サラがあそこまでやられたつてのに、情けない!!」

「まさに試作機、データ取りの為の機体だったんだ……」

ガア!!

そこらの宙へと散っていたデブリ、宇宙ゴミをカツは自身の苛立ちに任せたまま蹴飛ばし、なおもサマナへと詰め寄る。

「それでも戦果を上げるのが、ベテランでしよう!？」

「お前だつてへたつていただろう、カツ……!？」

「何ですって、サマナさん!？」

そのカツの苛立ち、それは完全に向ける方向を誤っており。

「あんたが不甲斐ないから、サラが死にかけたんでしよう!？」

「まともにその彼女の支援も出来なかった奴が、そこまでほざくか!？」

「僕が悪いと、サマナさん!？」

もしこの場にカツ・コバヤシの父親であるハヤト、あるいはそのハヤト・コバヤシの元上官であるブライト・ノアがいたら、確実に「修

正」を受けていた所だ。

「コクピットから出て来てくださいよ、サマナさん!!」

「おう、望むところだ小僧カツ!!」

スルースキル、それを十分にわきまえているサマナがここまで声を荒げるのは珍しい。

ゴウン!!

「痛あ!?!」

ジ・オのその顔面を、ジェガンがそのシールドで思いっきり殴りつけた。

「何をする、シドレ!?!」

「おふぎけないで、カツ……」

「お前だって、サラを助けられなかった癖、に……」

だが、そのカツの声はシドレ機が自身の機体へと突きつけているビームライフル、その銃口を見て途切れ。

「サラ……?」

シドレがそのままライフルで指し示す半壊したタイタニア、それから聴こえてくるすすり泣きの声に。

「一番の被害者は、サラちゃんなんだよ……」

「はい、フィリップさん……」

「んだ……」

同じくフィリップの機体、ブループラウスの拳によって、シドレと同じ「修正」を自機へとされたサマナも。

「俺たちモルモット隊には、スーパーマンはユウ一人だけでいい」

「昔ありましたね、そう言えば……」

「十年前、ニムバスの旦那にクルスト博士が殺された時の、ユウだろ?」

コウ、ン……

「俺達や、もう引退寸前の年頃なんだぜ……」

「すみません、フィリップさん……」

「大人をやろうや……」

サマナ機の後頭部を軽く小突いたブループラウス、見たところそれ

ほど大きな損害は見られないが。

「その勘違いスーパーマン、ユウ・カジマを諫めたフィリップさんの拳が僕に向かう日が来るとはね……」

「サマナちゃんでも、怒ることがあるんだなあ……」

「何か、少し僕としたことが」

「フィリップパン屋さんである俺様ちゃんも、こりやビツクリだった」

そのマリオン搭載型Zプラスの挙動がどこかおかしい。何か、無理な酷使をしているかのようには。

ズウ……

「ブルーデイスティニー4号機さ、フィリップ……」

「ああ、解っているよアルフ……」

フィリップ達の周囲を飛び廻り、とにかく敵と見つけたら狙いを定めずにビーム砲で牽制をし、リーダーで敵味方を問わず増援がないかを警戒してくれていたアルフの戦い方は、さすがに長年モビルスーツ関係の技師をやっていない。素人アルフが十分な成果をあげてくれた戦法だ。

「皆、旧モルモット達は歳をとった……」

「そうだな、フィリップ」

「この、ユウがさんざん使ってくれた機体と同じくな」

シドレがコクピット内ですすり泣きを続けているサラへ慰めの言葉をかけつつ、その彼女の機体タイタニアを。

シュ……

呼び寄せたメガライダーへとトリモチ弾を使い、固定させている姿を見つめながら、すでに若いとは言えない二人の男、フィリップとアルフは軽くモニター越しに乾いた笑みを浮かび合わせる。

ザウ、ザアア……

「聴こえるか、ストウラート所属モルモット隊」

聞きなれない男の声、壮年であると思われる男性の音がアルフの乗るメルキャリバーへと響き。

「来てくれたか、木屋の人が」

「なんだ、誰だよアルフ？」

「ついさきほど、俺が放った救難信号をキャッチしてくれた連中だよ、ファイリップ」

「へえ……」

その、近くに敵性勢力が展開している中で、の信号発信、アルフの行為は「招かざる客」を呼び寄せる危険もあつたが。

「近くに木星船団の連中がいることは知っていたからな」

「天才さん繋がり、コネーか」

「まあそうだよ、ファイリップ」

ヒュウ……

このような、突発的な危機に合った後でも口笛を吹いて茶化す余裕があるファイリップ・ヒューズ大尉。確かに彼には二代目モルモット隊長としての「心構え」が出来ているようにアルフには見えた。

「こちらアルフ・カムラ、ジュピトリスV木星船団からの支援、心から感謝する」

「このドウガチ、シロツコの奴とのよしみがあるのな……」

「コネ、あのパプテマスが馬鹿にしそうな物が、まさしくその本人が持つそれによつて俺達は助けられるとは」

「奴は、何だかんだ言つて不器用な」

クウ、ク……

僅かにくぐもつたような、ドウガチという名らしき救援隊のリーダーが漏らす忍び笑い。

「回りを良く見ない所があるんだよ、技師アルフとやら……」

「まあ、な」

「君たちモルモット隊の事は、シロツコから聞いている」

「へえ……」

「褒めていたよ、奴は」

「珍しい、かな？」

「特に、ユウ・カジマとやらをな」

「なるほど、な……」

数機の作業用モビルスーツ、どこか外見がパプテマス・シロツコが手製のメツサーラに似ている作業用機に引きつられて、一隻の軽巡洋

艦が先程まで激戦があつた宙域へと寄ってくる。

「その為、介抱をさせてもらおうよ」

「助かるぜ、ドウガチさんとやら」

「気にするな、モルモット隊のリーダーよ」

レーザー通信機でブループラウス、フィリップ機へと音声を指向させた木星船団艦を取り巻いているモビルスーツ達が。

ズウ……

傷ついたモルモット達へと機体を寄せ、その軀を支えようとする。

「シロッコへの貸しにしておく」

「オヤオヤ……」

そのドウガチという男の言葉に対し、フィリップは軽くコクピット内で肩を竦めながら。

「アルフ、カツの奴……」

フィリップは先程からじつと動かない、カツ機ジ・Oへ向けて心配そうな視線を送る。

「少し、放っておいてやれ」

「そう、かな……?」

「あいつにとつては久々のショックなんだよ、フィリップ」

「そうか、そうかな……」

そのアルフの言葉に少し沈鬱な色をその面差しへと出しながら。

「シロッコの旦那へ会わせる顔が無いとでも、思ってるんかいな?」

「そんなわけないでしょう、フィリップさん」

「んだな……」

「アムロ・レイ・ローマンズの映画は見る分には面白い、カツも同じ心境でしょう」

「フン……」

正直、その悲恋映画を当のカツとサラ、当事者と成りかけた二人によつて見せられたフィリップとしては、不愉快ながらもサマナの言葉には納得が出来てしまう。

「サラは、シドレに任せましょう……」

「オウ、サマナちゃん……」

シドレに介抱されているサラ、彼女の機体タイタニアが「メツサーラ達」に先導されて木星艦へと運ばれていく姿を、フィリップはぼやりと眺めながら。

「守る力、力があってこそ……」

リイ、ン……

もはや、日常風景と化して誰も気にしなくなった不可思議な現象、蒼と紅へと輝く光の乱舞へとフィリップは自機をかい潜らせ。

「ゆえに全てを制する事が出来る、テイターンズの大敵だったよなあ……」

ブループライウス達は、木星船団の艦へと向かった。

「僕は……」

燐光が舞う宙へとすくんでいるジ・オの脇を、タイタニアを連れたジエガンが通りすぎる。

「サラが、目の前で殺される所だったというのに」
「……」

そのシドレ機は、ちらりとカツの機体へその頭部、視線を向けたようだが。

「まともに、戦えなかった」

そのまま、何も言わずに救援のモビルスーツ達の手を貸してもらい、巡洋艦へと向かっていく。

——だが、カツ——

「え……」

——あなたは禁断の果实、イヴの林檎酒を口へと付けた——

「シド、レ……?」

——禁断のラプラスへ脚を踏み出した——

「シドレ!?!」

その「シドレ」が乗るジエガン、それはカツの叫ぶ声には反応がな

い。

——ユウの、追従者となるべきではない——

「だが、僕は!!」

——焔は、単に敵を打ち砕くのみ——

「力が、欲しい……!!」

——すでに、あるだろう!!——

怒気、それに満ちたシドレの「言葉」に。

「う……」

コクピット内で、カツの顔が恐怖にひきつる。

「どこに、あるというんだ!!」

——見えないか!!——

「僕には、ユウ大佐やアムロさん、そしてシロツコさんのような力は無い!!」

——愚か者よ!!——

グウア……!!

脳裏が揺さぶられるような、シドレの鳴らす叱責の声、だが。

——それはすでに君の手の先、センチメートルの世界にある——

「え……」

シャ……

その時、カツ・コバヤシの視線の先へ。

「ハヤト父さん……?」

緑蒼の光と共に、彼の視界へと浮かんだのは。

——俺は、アムロに勝ちたかつたんだよ——

——そう、あなた——

——でも、もはや勝つ必要はないんだ——

——何故?——

——可能性達を、見つけたから——

「父さん、母さん……」

カツの父と母、血こそ繋がっていないが、確かな「親」

——おそらく、それがあなたの目指すラプラス——

「サラの手を、握りしめる事……」

——センチメートルの、人のラプラスよ——

「……」

軽く、その両目を瞑るカツの瞳から一筋の雫が溢れる。

——宇宙には、人の心が満ちているの——

「そうか」

——可能性だけを貪る、その者には見ることが決して出来ない光が

「そう、だな……」

再び、カツの目前には両親の姿と、そして。

——その位、やってみなさいよ、カツ——

——せめて、私の足元程度の事はやってみせるんだな、凡人——

二人の男女が、両親の隣へと浮かぶ。

「分かったよ、サラにシロッコさん……」

——あなたは、YOU——

その時、宇宙には。

「あと少し、手をセンチ、いやミリメートルは延ばしてみせる」

小さな、ちっぽけな感傷に包まれたラプラスが産まれた。

第74話 NT—B（ブルーデイスティニー）

「さて、私も」

巡洋艦ムサカのブリッジから遠目にピナクル、それがほぼ破壊された姿を見て、ニムバスは三度めの予定変更を心へ決める。

「いよいよ、シヤアを裏切るか」

「何をいまさら……」

「言つてくれるなよ、ローベリア」

トウ……

みずからの乗機、レーテドーガのコクピットから垂れ下がったワイヤー昇降器へとその身を寄せ掛からせている、彼ニムバスのその顔は暗い。

「私にしても、あのジャミトフ・ハイマンはな」

「わかった、わかった……」

「恩義が、それこそシヤア以上にあるからな」

元々、一年戦争の頃にユウ・カジマによって半死半生の状態となって宇宙へ漂っていたニムバスを助け出してくれたのは、連邦で発足したばかりのニュータイプ研究チームの者達なのだ。レビル将軍が対ジオン戦で前線へ出ていたとき、その吹けば飛ぶようなチームの維持に尽力していたのがジャミトフであったのだ。

ポウ……

「こちら、ハンガーデッキのローベリア」

「はい、こちら艦橋」

「あれ？」

いつものオペレーターとは違う、何故かモビルスーツのOS調整担当の男の声が通信機から聴こえてきた事に。

「ローレンさん、なんであんたが？」

「いいから、内容は何？」

気にはなるローベリアであったが。

「アア、コホン……」

何故か艦橋でオペレーターを務めている彼ローレンは機嫌が悪い様子であるし、今このムサカ艦内にしても戦闘配備ではない。細かい事は気にせずに彼女は通信機へとその口を軽く近づける。

「進路変更、よろしい？」

「ちよつと、あんた達ね……」

「おねがぁい、ローレンさぁん」

「可愛く言っても、無駄無駄……」

席を外している専門のオペレータの代わりに通信機へと出たローレン・ナカモト、ニムバスにとっては馴染みのニュータイプ研究者がローベリアの三十路近い歳に合わない甘え声へ、投げやりな返事を返す。

「貸せ、ローベリア」

「ふん、あの爬虫類顔の研究者が……」

「いいから、早く貸せ」

グウ……

「頼むよ、ナカモトさん」

「あんまり、チョビチョビな進路転換はな、ニムバス」

臨時のオペレーターであるローレン研究員。彼のため息混じりの言葉には。

「艦長も、良い顔をしませんよ」

「すまんよ、ナカモトさん」

「ネオ・ジオンの他の連中にも胡散臭げに見られる」

正当性が確かにある。

「まだ私達はネオ・ジオンの人間だ、ニムバス」

「わかっている、わかっているさ……」

「それに」

パライ、パ……

「あのブツホ社長も、ギリギリまでネオ・ジオンとの繋がりを切るなど言ってますからね」

スナック菓子を頬張っている音と共の、ローレン・ナカモトの声には僅かではあるが真意な物が混ざっている様子だ。

「ン、そうだなナカモトさん……」

「ブツホには確かに野心があるが、私設軍」

ポウリ……

「いや、会社警備の部門では未だにだよ、ニムバス」

「まあな、でも……」

耳障りな咀嚼音にその顔をしかめながらも、ニムバスは出来る限り低姿勢に彼ローレンを説得しようと試みている。

「そろそろ我々も賭けに出て良いのでは？」

「ニュータイプ、そして強化人間の技術も未発達だ」

「それを手土産にして、我々はここまでブツホへ食い込んだのではないか、ナカモトさん？」

「まあ……」

ニムバスやローベリアは、数年も前からもちろんだが。

「確かにな、ニムバス」

「スズブと、いつまでも過ごす訳にはいかない」

「それでも、私は最後まで二股をかけておきたいぞ、ニムバス？」

「頼むよ、ナカモトさん」

「わかったわかった……」

すでにこの艦にいる全員は、古びたネオ・ジオンからの脱却を思うとしてる。

「艦長、電話」

「んー？」

「騎士ニムバスから」

ネオ・ジオンというものは元々、一年戦争後に行き場を失った者、旧ジオン兵や住処を無くした人間が寄宿していた面があった。

「用件は何？」

「進路変更」

「またか、ナカモト君……!!」

この女艦長にしても元エウーゴの人間であるし、ローレン研究者も連邦軍のニュータイプ施設に勤めていた男だ。

「はい、何ニムバス君？」

あまりジオン公国がザビ家、それら等へ忠誠を誓う人間とは生き方が違う、生き甲斐や可能性、そして意識が低いと無責任に言うならば生活、その保証を求めている人達である。

「艦長、進路アクシズとピナクルの間、ノイエ・ローテ戦闘宙域への要請」

「だから、最初からフラフラとしないでっば……」

「お願い申しますよ、艦長……」

その、社交という物を身に付けたニムバスの言葉に。

「楽が出来ないなあ、アタシも……」

中年の女性艦長は、オペレーター席へと座りながら雑誌を読みふけている騎士ナカモトへ向けて、その双眸から鋭く視線を投げ付けた。

「文句はニムバスさんに言ってくださいよ、艦長」

「聴こえてるでしょ、この通信機オープンならば……」

元々スペースノイドの内、ネオ・ジオンでの出世や身の安泰が期待できない人間が新興のブツホ、宇宙ジャンク取り扱いのその会社などを始めとした「他の世界」へと期待をかけている話だ。

「ジオンにも連邦にも、愛想が尽きた連中が……」

「進路確認、ノイエ・ローテ戦闘宙域よろし？」

「この十年戦争には、たむろしている……」

「おーい、ニムバス君？」

女艦長の呼び声、それは少し感慨深く、その面をハンガー天井へと向けているニムバスには届いていない。

グウ……

「お願いをします、艦長」

「仕方がないね……」

騎士の名に相応しいロマンチズムなどを駆使する男は無視し、ローベリアが彼ニムバスから通信機を奪い取り、申し訳なきような声をこの巡洋艦艦長へとかけている。

「ただ、我々はシャアのノイエ・ローテとは戦わんよ、ローベリア君？」

「大丈夫ですわよ、艦長」

「本来なら、あのジャミトフを拾い上げてブッホへの、安全パイな点数としたかったのだが……」

だが、遠くから確認するにそのジャミトフが居座るゼダン、その円盤小惑星へ数機の連邦派モビルスーツが取りついている状況では、いまさらこのニムバス隊が顔を出しても。

「まあ、世の中はままならぬ物だからね」

「すみません、うちのニムバスがフヨフヨと優柔不断で」

「この乱雑な戦局だ、ローベリア」

あまり大した事、たとえばジャミトフを引つ張り出して、救出したなどという宣伝はもはや出来ない。

「場当たりに対応するしかないわよ、ローベリア君」

もともと、ゼダン内でジャミトフが無意味にその尻で椅子を磨き続けているという情報、それをつかんだのはこの女艦長だ。それ故の妙な選択肢が増えてしまったが為に。

「このアクシズ落しとやら、私こと騎士ニムバスは傍観者となる運命かな……」

「それでは、頼みます艦長」

「ユウの奴に、笑われないか心配だ……」

「うちのバカ、にはキツク言っておきますので」

負け惜しみがそうさせているのか、センチメンタルへと没頭している四十近くの男ニムバス、まさしく自らの「男」へ向けて、ローベリアは苛立ちをその瞳へ宿しながら。

「本当に済みません、艦長……」

プ、ツウ……

彼女は、このムサカ艦の責任者との通信をシャット・ダウンした。

「あのね、ニムバス」

「あいつは今、何をしていることやら……」

「全く、こりや……」

ユウ・カジマに名と実、双方を兼ねた完全勝利をしたは良いが、どうもその為か最近日常の、様々な所で「張り」が無くなっている彼ニムバスの姿をじつと見つめながら。

「会いたいなあ、ユウ……」

「とんでもない、ダメ男だ」

以前に「目的が無いと自分には何も無い」と、この元エグザムの騎士であった男が言っていた言葉の真意、それをまざまざとローベリアは見せつけられたような気がした。

「これがな、クルスト・モーゼス」

数度の攻撃により、ノイエ・ローテの右肩がGマリオンの炎、制裁剣エグザムから噴き出されるミノフスキー・バーナーによって切り落とされた。

「エグザム・システムの真の力なのか？」

——半々、と言ったところか——

「ふむ……」

Gマリオン、いやエグザム・システムの生きたOSと化しているユウの脳内に、コマンド化されたプログラムの羅列と共に。

——何しろ、エグザムでも本物のニュータイプとの戦いは、シミュレーション上でしか行った事がない——

今は亡き、クルスト博士の声が滑り込む。

——ただ、システムの完全開放は未だに止めておくべきだな——

「そうなのか、シャア・アズナブル相手にしても？」

——OSであるお前も、この機体も——

もはやノイエ・ローテ、シャア・アズナブルは「今現在のGマリオン」では脅威ではない。シャアがどのような思考をしているのかはおろか、深層心理すらも「マリオンの目」を通して読み取れるのだ。

——NT—Dレベルが限度だからな——

「よく解らん話だ」

——昔のお前、ユウ・カジマは——

ガウウ……

そのシャア機からの対空砲、それを回避するために必要なコマンド、あたかもビデオ・ゲームに出てくるようなインターフェイスが即座にユウの脳裏へと浮かび。

——ニュータイプという者達へ対しての理解、それには全くの無知であった——

「そうだな、クルスト博士」

——ゆえにNT-B、ブルーディステイニーの発動ですら外部、マリオンの力を必要とした——

その、十五個あるコマンドの内「前進し、コンマ0・六秒を姿勢制御へと費やす」をユウ・カジマは選んだ。

——そして、ニュータイプへの感情もな——

「ニュータイプとは、このような感覚を何のサポート・システムもななく」

初期型ブルーディステイニーとイフリート改がその機体へと持つ「EXAM・SYSTEM」のOS、それにニュータイプ少女「マリオン・ウエルチ」の脳波パターンが必要だった理由が、今のユウにははっきりと解る。

「即答が出来る、恐るべき新人類」

ピ、イイ……

一・三秒後接近予測のファンネル、それに対する機動をユウは自身が見ながらEXAMシステムのOSとなってしまうているユウ・カジマは、再び脳裏のコマンド列から最善であると思わしき選択肢を掴み取った。

——しかし、今のお前はエグザムを選んだ者であると同時に——
「解っている、クルスト」

——あきらかに、ニュータイプでもあるのだ——

無論に、そうでなければ自分がマリオン、昔のエグザム・システムのOSであった彼女と同等の行いなどは出来ない。その理屈はユウと解る話だ。

「ちっ!!」

ザアウ!!

アンチ・ニュータイプ機能発動中のGマリオン、その両肩へノイエ・ローテの有線アーム・サーベルが掠め。

「さすがに、シャア……!!」

真紅の返り血、ニムバスが持つ傲慢さへと微かな憧れを持ち、自分の心に取り込みたいとユウが「願掛け」をしていた両肩のガードパーツ、放熱機能を兼ねたそれがビーム刃によって削り取られた。

「赤い彗星と言った所か」

——私の甥、褒めてやるべきなのだがな——

「ああ、そうか……」

エグザムの動きに慣れてきた、ついてこれるようになったシャア・アズナブルがクルスト博士、クルスト・ズム・ダイクンの実弟の息子であれば。

「相手がニュータイプならば、あんたは弟ジョン・ズム・ダイクンの子も殺すか」

——EXAMにも、私にも血縁を識別する仕組みなどはない——

「ニムバスの奴も、気の毒に」

確かに、そういった事情となろう。

——だが、このNT—Dモードもそろそろ限界かもしれん——

「ああ……」

——機体、良い仕事をしてくれたアルフ・カメラのこのブルーデイスティニー五号機とやら自体は——

ドウ、ウ……

OS、ユウ・カジマ自身がマリオンと化したエグザムの対ニュータイプ戦術の選択肢が一気に倍増する。

——各機能が悲鳴を上げこそしているが、しばらくは持つだろう、だが——

「俺の脳、精神の方が持たない」

——それでも、よく正気を失わないものだ——

「あんたに褒められても、嬉しくはないさ」

——やはり、オールドタイプにはニュータイプへと対抗出来る力、

可能性がありそうだな——

「そうは思えんで、俺はな」

エグザムの機動に追従する術を知ったノイエ・ローテ、紅い妖花との戦闘で選択すべきコマンドが。

クウ……

一気に百近くまで跳ね上がった文字列の洪水にクウの頭へ鈍い痛みが疾り、彼は吐き気さえ覚え始める。

——この選択肢の中から一つを選ぶ事を難なくこなすのが、ニュータイプという化け物達だ——

「なるほどな、そういう事か」

——ゆえに、ワシは——

ジャ……

コマンド列第七十八「後方へ全推力を使用して出来る限り後退し、ユウ・カジマの特技、フィンガーマシガンによる敵機関節への精密射撃により、再度ノイエ・ローテの動きを止める」を選択し、それを機体へと反映させたユウ。

——ニュータイプを、強者を恐れたのだ——

「解る、実感出来る」

ボウウ……!!

目の前をメガ・ビーム砲の光条がかすめ、僅かにその大口徑ビームの波がGマリオンの接近戦用武器「独立動力型ヒート・サーベル」と魔劍エグザムの先端へと触れ。

「くそ……!!」

その火焰劍の切っ先が溶け落ちる。

「さて、それでは」

——さて、それでは——

「俺の手番、だが……」

ジイ、ジャア……

コマンド列、ざっと「頭の中」を探ってみても、またもや百を越える勝利の方程式を司っている、文字の群れ。

——しばしのお別れだ、ユウ・カジマ——

「博士、あんたが何者で」

——未だにエグザム、そのシステムの本当のトリガーを引き出す可能性を眠らせている男よ——

「いま何処にいるのか、この世にいるのかどうかも知らないが」

一旦、その選択肢達を保留とし自分の力量、ユウ・カジマ本人の腕前だけでシャア機ノイエ・ローテからの対空砲火をGマリオンに回避させながら。

「ここまでしゃしゃり出て、今のタイミングでオサラバはないだろう？」

——言っただろう、ユウ・カジマ——

「何をだ、クルスト？」

——お前は未だ、私がマリオン・ウエルチの脳波パターンの内——
ガウ……!!

至近まで迫った刺突ファンネルをユウはGマリオンの口吻部ヒート・バイトで噛み砕かせながら、彼は昔と同じく人の話を聞かない、聞く耳を持たないクルスト・モーゼス博士へと呆れた声を放つ。

——彼女の怒りの相、何故それをエグザムOSの基盤としたかを、理解していない——

「消えてしまえ、乱暴な奴……」

確かに、そうして思い起こしてみればマリオンのその雄叫びは。

「その台詞、深く考える必要がある物だったな」

——彼女が、私や他の研究者達の前では決して言わなかった言葉だよ——

「人が持つ心の顔、その怒りの面か」

ユウにとってはすでに十年以上昔の話であり、そのマリオンが「ブルーデイスティニー」内部へと憑き霊として、幻影として顕れた時の姿形も覚えてはいない。

「怒り、憎しみに敵意か……」

が、それでも耳を打った品物は意外に記憶へと残るものである。ことに感情の働きが強く、激しい言葉に関しては。

「怒り、敵意の感情をエグザム発動の鍵としている、そう理解して良い

のか、クルスト?」

——八十点だ、ユウ——

「だったら、残りの部分を」

——宿題だ——

その、中途半端な言葉を残したまま。

「全く、博士め……」

クルスト博士の気配は、Gマリオンのコクピットから消え去る。

「まあでも、エグザムだろうが何だろうが」

シユウ……

博士の気配が消えたと同時に、エグザムの影響力が自機から離れようとしている事を察したユウは、慌てて。

「まずは、この現実からどうにかしないと……」

先程のコマンド列、百二十四の選択肢の内。

「これでいくか……!!」

九十八番目、効果率約八十三パーセントという数字がユウの脳裏へと浮かんでいる「敵機のファンネル攻撃が終了したら、その懐へコンマ0・六秒間スラスタ―出力を上げて接近をし、バルカンで牽制をかけたつエグザム・サーベルを振り上げ威嚇をし、相手がそれに引っかけたら相手の破損した右肩へと自機を向け、そのまま相手の背後に廻り込むと思わせ敵の対空砲火を起動させる、その上で直接相手のメイン・コクピットへGマリオンを一・二秒以内に密着させる」という選択肢を選ぶ、が。

「何か文句があるか、シヤア!!」

「あるに決まっているだろうに、ユウ・カジマ……」

Gマリオンの機体制御には未だエグザムの力が残っているが、肝心のOSへの「エグザムの毒」が薄れつつある今となっては。

「ニュータイプの出来損ないが、よくここまでやったくれる……」

「オールドタイプの、地球に眠る想い出に魂を引かれた男、この俺が成せる踏ん張りだよ、シヤア!!」

「自らの持つニュータイプの可能性を否定し、オールドタイプである事に誇りを持つか、ユウ……」

ズウ……

ユウの歴戦が成せる特殊能力、関節封じの呪縛から回復したノイエ・ローテがその巨体を揺らし始めた。

「それが、引力に魂を引かれた者が持つ、底力なのかもしれんな」

「賢者のような心構えとなったシヤア、危険だな……!!」

相手、シヤア・アズナブルに動きが読まれているエグザム・システムでは、もはや先程のようなノイエ・ローテを圧倒する戦いなどはユウ・カジマには出来ない。

「やむを得ん、ハマーン達に!!」

ユウは広域周波の無線を入れ、さきほどこの上なく無下に扱ったニュータイプ「ハマーン・カーン」と、そして。

「いつまでも見物しているアムロ・レイ、手伝え!!」

今更の支援要請をするユウ・カジマとて、あまりクルスト・モーゼスの身勝手さを笑う事は出来ないであろう。

「ローベリアよ」

ピ、ラア……

ニムバスが自身へと纏うパイロット・スーツの胸ポケットから取り出した、飾り気の無い封書。

「これなのだが、な……」

「なによ、ニムバス……」

その、純白の下地に蒼色をした浮き彫りでニムバス・シユターゼンの名が宛先として書かれている、小さな封書を見たローベリアは。

コウン、カア……

彼が乗るモビルスーツ「レーテドーガ」の足をその拳で軽く叩きながら、呆れたような声を出した。

「あんた、まだそれを持っていたの?」

「まあ、な……」

「私はもう、とつくに捨てたわよ」

「オイオイ……」

彼女の言葉に苦笑いを浮かべてみせるニムバスがその手に持つ封書、それは約二、三月ほど前に彼ニムバスがユウ・カジマ、彼と「騎士としての誇り」とやらをかけて決闘を挑んだ後に。

——渡そうかどうか、迷う所だが——

アルフ・カムラから手渡された、その「招待状」の中身を再度確認つつ、ニムバスは自分のアゴの辺りを軽く撫でる。

「アルフ・カムラは、この招待状をな」

「渡さなかった、と思う」

「ああそうそう、ローベリア」

差出人が「クルスト・モーゼス」と記入されている封書の中へとある手紙、それをニムバスはヒラヒラと揺らせてみせながら、彼は栗色の髪をした自らの愛人へ向けて軽く頭を下げた。

「この前、私がポルノ・ムービーを見ていたときは間が悪かったな」

「その時私を感じた劣等感、今返したわよ」

「劣等感、昔の私がニュータイプに」

その、招待状とやらの件で即座にニムバスへ会話の切り返しを行ったローベリアのそれは、別にニュータイプ能力を使った品物ではないのだが。

「ニュータイプ、そしてお前ことマリオンへと感じていた劣等感を、今更にほじくりかえしてくれたな？」

「なんで、あなたニムバスに限らず男は……」

そのまま彼女はジトツとした瞳をしながら、すでに四十の歳にも近いニムバス、再び十年以上昔と同じく短く刈り上げた彼の頭髮、金色の髪の中で色素が薄まった部分を。

スウ……

軽く、その指でつまんでみせる。

「ロリコン趣味があるのかしら？」

「別に私が見ていたポルノは、その手の劣的な物ではないが？」

「あのシヤアといい、男は皆がね……」

その口の端へと皮肉げな笑みを浮かべるローベリア、彼女には十年前にユウやニムバスに印象として与えた「清純な乙女」としての面影はもはやどこにもない。

「女がガキの頃から清純であり」

ニムバスの言い訳など一瞥もせず、そのままマリオン、一人の女性として当然でしかるべき「人の顔」を見せた生き方をしているローベリア・シャル・パゾムは。

「年を取って欲しくないと願う」

「そりゃ、今のお前をみればなあ……」

「フン……」

その言葉を受けた彼女は、心底ニムバスへ対して軽蔑の色彩を帯びた視線を投げ付けながら、自機「バギドーガ」の調整へと向かおうとする。

「所詮は、男か」

「疲れるんだよ、ローベリア」

「何がよ、ニムバス？」

「ベッドでのお前の激しさが」

その、この場に他の人間がいらないとは言えデリカシーの欠片もないニムバスの台詞に、ローベリアの足がピタリと止まった。

「私も歳だよ、ローベリア」

「マリオンの痴殻、サイコーじゃ、ないか」

「ムウ……」

「言っていた、わよね？」

「それはそうだが……」

正直、この年若き少女の頃から性に貪欲過ぎる彼女の立ち振る舞い、それが今のニムバスには疎ましく、ゆえが為に夜毎の彼女から誘われる同衾を断り。

「あたしに、飽きた？」

「食傷気味だな、マリオン」

「フウン……」

一人でコソリ、ポルノ・ムービーを観る習慣が出来たのは、一方的ではあるが納得がいくニムバスの言い分だ。

「ユウ・カジマの方がサツパリした性格だな……」

「へエ、ソウ……」

「うん、そうだな」

ただ、その彼ニムバスへ背を向けたままのローベリア、マリオンからのプレッシャーに気がつかないニムバスは確かに少し感性、ニュータイプだか強化人間だかのそれが鈍り始めているのかもしれない。

「やはり、昔のマリオンの方が騎士たる私が愛を捧げる、その甲斐があるような……」

ガァン!!

パイロット用のブーツ、それでニムバス機の脚へ思いきり回し蹴りを叩きつけたローベリアの。

「乱暴なヤツは止めてくれ、ローベリア……」

「言うなよ、ニムバス」

その彼女の、穏やかさに満ちた「形相」を見たニムバスの口から掠れ溢れる、怯えた声をローベリアは無視し。

「愛する女へ乱暴なイタシの一つも出来ない男が」

「宇宙には優しい心が満ちているじゃないか、ローベリア……」

「ああ、もう……」

再び、彼へその背を向けて無言のプレッシャーを掛け続けるローベリアは。

「イラつくわ……!!」

「ほら、チョコレートだよマリオン」

ピ、キィ……

何かと間が読めない、そういう所はユウ・カジマと同じであるニムバスへ向かって。

「うっさい、ロリコン!!」

ゴウシツ……!!

ハンガーデツキの空気が揺れる程の、大声をその唇から張り上げた。

第75話 父と娘

「私は、な」

ゼダン、旧ジオンの宇宙要塞「ア・バオア・クー」を改修したティターンズ基地。

「盗んで、地球をキャンパスと見なして描こうとした」

それが二つにわかれた内の一つ、下部を失った円盤状の小惑星の中にある、静かな一室。

「盗作の償い、そのせめてもの罪償いをしたかったんだよ」

「誰のよ、父さん……」

父、その言葉を数年ぶりに会う実の娘に言われたジャミトフ・ハイマンは、極力己の喜びの感情を面へ出さないように気をつけながら、テーブルの上へ置かれているムラサメ・ドリンクの缶を軽く持ち上げ、自分の口へと近づけた。

「ジオン・ズム・ダイクンだよ」

「くだんの偉い人ね」

「理想家である、人物だった」

「その息子もそうみたいねえ、本当に……」

カアン……!!

「全く……!!」

自分の口へと付けた酒瓶を、彼女ハイリオン・ハイマンは高級木材で作られた応接テーブルへと叩きつけ。

「ほんとうう、に全く!!」

昔に、ユウ・カジマ達が為に設立した新設モルモット隊へ予備スパイとしてレビル將軍の指示により送り込まれた肉親、ジャミトフの実の娘がその顔を強く紅潮させた。

「理想家!!」

「変わってないな、ハイリオン……」

「大体、赤い彗星の呼び名を受け入れた時点で」

「アイツと、そっくりな所は……」

「好戦的だと、血の色が好きだと自己アピールをしているような物じゃない!!」

「青色、空が好きだったよな、お前は……」

ゴウン!!

酒酔いの勢いに任せ、ブルーことハイリーンはその脚で隣の椅子を思いきり蹴り飛ばす。

「その天の蒼が好きだという理由で、ブルーのコードネームを名乗った所とかな……」

「おかげで、居残ったエウーゴのメンバーがその後、どれほど冷たいカップラーメンに我慢をしていたか!!」

「そういう、ロマンチストな所がアイツにそっくりだ……」

「何が赤い彗星よ、たんなる猛牛として、焼き肉になれば良い!!」

「ユウ君が青い髪をした女が好みならば、くれてやってもよかったのになあ……」

「聞いてはんの、父さん!？」

ドウウ!!

「私の心臓に悪い、止めてくれハイリーン」

「父さんが私達と縁を切ったせいだね、母さんは昔の実家からなんやかんやと言われて!!」

「あ、アイツはすっかりした奴だから大丈夫と私は……」

「その母さんの親戚か何か、そのウチから見れば従兄弟か何か!!」

「そいつがどうかしたかよ、ハイリーン……」

バァン!!

テーブルが、ハイリーンの張り手により大きく震える。

「だから止めてくれと、ハイリーン……」

「ウチが空が好き、大空に浮かぶ複葉機が好きだとか言ったらさ!!」

「それがなんだ、全く……」

「僕と一緒に乗りませんか、僕に乗らないかだつてさ!!」

グイ……

「馴れ馴れしい小僧!!」

「モビルスーツ運転が控えている……」

「だから、なんやっっているんよ、父さん!？」

「帰りは安全運転で帰ってほしい……」

「ハァン!？」

「ペイン、ペイン……」

髪の色とは逆に、顔を紅く染めたハイリーンは実の父親、彼が持つその広い額をデコピンで連打し始めた。

「腹が立つよね、あのマセガキ!!」

「ガキ、少年なのか?」

「リディだかなんだか、毛も生えていないような奴!!」

「ああ、あの子か……」

「ペイ、ペイペイア……」

「だから私の額を叩くのはな、ハイリーン……」

「私の様な三十路近くのおバサンに、色目え!？」

「その年頃は結構良いと言う男も……」

「あんたがそうだったもんね、この年増好きイ!!」

「うぐ……!!」

「年増好きイ!!」

「どうして、そんな事言うかよな……」

「オバン好きイ!!」

「バタア……」

「全く……」

最後にその台詞を吐いた後、テーブルへと突っ伏して酔い潰れた愛娘へ向けて、ジャミトフは仕方なくテーブルクロスをタオルケットがわりにかけてやる。

「私は皆へ苦勞をかけたばなしだ……」

もちろん、彼女ハイリーンも酒飲み操縦となってしまうにも関わらず、確信的に無視して部屋の中へと掛けてあつた高級酒をあおる、それはパイロットとして失格であるが。

スウ……

「ハイリーン……」

その飲酒を傍観していた、止めなかったジャミトフも悪いと言えば

悪い。

「許してくれ」

「父さん……」

「本当に、ろくでなしだ……」

「過激な理想家、それは最も手に負えない人物だよ、ハイリーン」

理想家。志しという気持ちをモチベーションとして身体と頭を動かす者達が、ジオン独立運動を立ち上げ、戦後にティターンズとエウーゴという地球連邦の分家を産み出し。

「頭痛い……」

「私と妻に似て考えなしの、飲酒をやるから……」

「ごめんなさい、父さん」

そして何十年前から加速された地球と宇宙に関する問題、乱麻を解決させようと、最初の理想家の息子がアクシズという鈍刀を振るう今現在。

「時間、まだあるかな？」

「本当にごめんなさい、ジャミトフ父さん」

「いいさ、いいさ……」

ジャミトフにしてもハイリーンにしても、今のこの時に時間を無駄に出来るというのが、どれ程の贅沢かは充分に理解している。

「人類は」

ティターンズの統率者である父、ジャミトフが好む謎の飲料は彼女ブルー、本名ハイリーン・ハイマンの口には合わない。喉の渴きを我慢して、彼女はその父の思想を綴った本の一文をその舌へと乗せた。「意思と感性の狭隘(きょうあい)きようあい)きを突破するだけで、ニュータイプとなることが可能である、よね?。」

「狭隘、我ながら良い言葉を見つけたもんだよ」

グビイ……

強烈なエナジードリンク「ムラサメ・ゼロ」へその口をつけながら、ジャミトフはその自身の唇を娘へ向けて歪めて見せる。

「原文はもっと簡潔だった」

「何で変えたのよ、父さん……」

「難しい言葉を使わないと」

こうして娘と話していると、ついついジャミトフは今の自分が置かれた状況、そして撒いた「種」の罪の事を忘れてしまう、感性の問題だ。

「本が売れんだろう?」

「文筆家にでもなりたかったのかよ、父さんはさ?」

「母さん、彼女の影響だよ」

フウ……

母さん、その言葉を呟いた時に、ジャミトフのその口から深いため息が漏れだす。

「彼女の入院手続き、忙しい中でやってくれて本当にありがとうな、ハイリオン」

「はい、これ」

ハイリオンと話しながらも、どこかぼんやりと、他人事のように地球へ沈み行くアクシズの姿を眺めつつけていたジャミトフの手元へ向けて。

「母さんのラブレター」

「そうかよ……」

その、分厚い封筒を見たときに、再び漏れるジャミトフのため息。

「なあ、ハイリオン」

自分の妻から送られた手書きの封書、それを娘から受け取るジャミトフの眸、人の心。

「私は」

常の彼「ジャミトフ・ハイマン」が持っていた鷹の目ののごとくに鋭利な瞳、それが失われて久しい、弱々しい光を放つ彼の眸が娘を見上げる。

「俺はこれからどうしたらいいと思う?」

「ん……」

その、覇気が失われた父。老人のその言葉に、ハイリーンは椅子から静かに立ち上がり。

トウ、ト……

「いいわよ、シロッコ」

「茶番は終わりか？」

応接室の外で彼女達を待っていた、木星帰りの男を部屋へ招き入れようと彼女ハイリーンは豪華な装飾が施された大扉、天然樹木で作られたドアを内側からノックする。

「やはり、お前がいたか……」

キイ……

外に人が居ること自体には気が付いていたが、ジャミトフは今一つ自分の脳裏に先程から浮かんでいた人物、それが近くへいることに疑いを持っていたのだ。

「このゼダンへ設置された核パルス・エンジンの停止は半分完了したようだ」

「簡単にやってくれたものね、シロッコ」

「ハマーンの奴がレビル将人へパルスワード、及びに制御方法を裏で伝えていてな」

ヘルメットを外したパイロットスーツ、特注品である純白のモビルスーツ用装備へその身を包ませているシロッコのその顔はややに暗い。

「だが、それだけでは核パルスは七割程しか止まらないのだ」

「シヤアも完全には、ハマーンへゼダンの制御方法を伝えていなかったようだな、ウン……」

「んん……？」

そのジャミトフの台詞に何か少し、感覚へと触る物があつたが、シロッコはそのまま通路の外から半開きの扉を通り。

「まあ、何はともあれだ……」

身を潜らせるように部屋の中へと入ってきた、少し頬が瘦けた風のシロッコがその顔に浮かべる薄い笑い。

「老醜を晒すことだな、ジャミトフ」

「楽にはさせてくれんか、シロツコ……」

「まだ、私はジャミトフへサヨナラを言うつもりはない」

シイ……

蒼い、宇宙の心が微かにその部屋を横切った。

「人には、使命があるのだよ……」

「私には役目が残っている？」

「バスクの愚か者や、レビルにブレックス、そしてあのモルモット隊の奴等もお前を心配している」

「私はろくでなしなんだよ、シロツコ」

「ならば、小人らしく命にすがれよ、ジャミトフ……」

コウ……

その微妙に、ジャミトフを馬鹿にしているのか気遣っているのか解らない笑みを浮かべたまま、パプテマスは閉めたドアへと寄りかかる。

「私に生き甲斐を与えてくれた事、褒めてやるよ」

「地球圏は楽しかったか？」

「なかなか、スリリングだ」

そう言つて軽い笑い声を上げるシロツコの姿、ジャミトフにとってはいささか奇妙に見える姿だ。

「お前が生きる二つ目の意味は、責任だ」

「それが苦痛なのだよ、私には」

「木星人には、な」

木星人、そのSFじみた響きがある言葉をシロツコがその舌に乗せた時、無言のハイリオンがその顔へと微かな苦笑いを生まれさせる。

「責任放棄というものは、万死に値する」

「環境、世界が違うから……」

「その木星の掟を取り入れるために、お前は私を喚んだのであろう？」

何気なく失礼なお前呼ばわり、しかしジャミトフ・ハイマンは特に気にした様子はないようにシロツコには見えた。

「地球の環境保全の為の、鉄の掟か……」

トッ……

じつと黙って二人の男の話を聴いていたハイリーン、ふと彼女が零したその台詞に、ジャミトフとシロツコが同時に頷く。

「夢物語だったのだよ、地球への絶対的な管理などというものは」

「儂ジャミトフなりに、考えたつもりであつたがな……」

「地球を支配しているのは、愚民共の感情、人の心だ」

何か、不機嫌そうにそう言い放ちながらシロツコは。

コオン……

コツコツと自分のパイロット・ブーツの踵を床カーペット、赤絨毯へと擦り付け、叩く。

「天才の理論、理性と戒を尊ぶ思想は排斥されやすい」

「そりああ、なあ……」

「ゆえに、キリストは地球という神から見棄てられたのだよ、ジャミトフ」

「フム……」

コーヒー缶へ口をつけながらその耳を立てているジャミトフにとって、シロツコのこの突拍子で言葉足らずの説明、必ずしも解らない話ではない。

「テイターンズ、巨人は地球圏によって磔にされる危険性が高かったか、シロツコ？」

「地球を支配するのは母性だからな」

クヌウ……

「多様な価値観をもって善し、それを肯定するのが地球というものなのだと思うぞ、私は」

「単一の掟、唯一神ヤハウエが属性であるユニタイプ、ユニ・エグザムは女の理論では拒絶されるか、シロツコよ」

「私の十八番、理論人種である私の言い分に、同じ土俵で対抗しようなどとは……」

父ジャミトフの眉が軽く跳ねるとき、彼の負けず嫌いな面が出てくる事を、娘であるハイリーンは母から嫌と言うほど聞いている。

「百年早い、ジャミトフ」

ムウ……

「ヤレヤレ、父さん……」

そのシロツコの切り捨てるような言葉に対し、やや苦渋の表情を浮かべる父の、この子供じみた性格。

「あのボーヤにそっくり」

「坊や、マーセナスの小僧の事か？」

「負けず嫌い、確かにそうだったよ、あの子は」

それもまた彼が年甲斐もない理想、少年の青臭さや志が残る理念を燃えて、テイターズという組織を造り上げた要因の一つであると思うとハイリーンは馬鹿馬鹿しく、そして面白みと愛しさを強く感じてしまう。

「どちらにしろ」

チィ……

腕時計を確認しながら話すシロツコの声には、僅かなこわばりが見受けられる。

「いろいろ後始末が残っているから、な」

「アクシズ、それはシャアの怨念がバリアーとなっているぞ？」

「感じたか、ジャミトフよ」

もつとも、シロツコにとつて自分がこの部屋、広大なゼダン内部で迷わず一直線に応接室へ向かう事が出来たのはジャミトフとハイリーンの思念、彼らが微かに発するニュータイプ脳波を辿ったがゆえだ。

「しかし、ジャミトフ」

再度、自分の腕時計へその視線を向けたシロツコは、少し口調を早めてジャミトフ達へ次の言葉を放つ。

「お前のニュータイプ能力では、それだけが限度かな？」

「あまり父さんを苛めないでよ、シロツコ……」

「私のヒガミだよ、孤児の天才からの」

その腕時計の時刻、それを腕を伸ばして二人に見せながら、シロツコは軽く自らの顎を引いて見せた。

「家族に愛される、このオールドタイプへ向けてのな」

「矛盾してないかしら、その言葉？」

「いかにニュータイプの素質があろうとも」

ガツタ……

「椅子に座りすぎて、腰が痛いものだよ、儂は……」

「意識を閉ざしていれば、ニュータイプの可能性を殺すことになる」

「さすがに、天才」

「まあな……」

「どうやら、今少し長生きをすることに決めたらしいジャミトフへ向けてシロツコは満足げに頷きながら。」

「時間だ、ブルーとやら」

「オーケー」

父と正対していたハイリオンにも、対話の時間が終わったことをその視線を差し向け、伝えた。

「ニュータイプになろうと、人と解り合おうと心に決めた時点でな、シロツコ」

「その者はすでにニュータイプの階段を上がり始めた事になる、だろう？」

「フン、シロツコめ……」

間髪いれずに、自分の独白に答える事が出来たパプテマス・シロツコ、腰を抑えながら歩むジャミトフが彼へ向けて、皮肉げな顔の相を見せる。

「ダイクンのな……」

スウ……

肩を貸してくれる娘へ自分の身体を寄り掛かせながらも、ジャミトフはその舌を動かす事を止めない。

「独立運動を始める前に書いた、誰にも見向きをされなかった二束三文の本、お前は読んだな？」

「知識、それはまさしく力だよ」

「物知りが、天才め……」

グ、ウウ……

「フン、全く世話の焼ける……」

その細い見かけによらずジャミトフには重たさがあるのか、ハイリーンのその身が軽くよろめいたのを見たシロッコは。

「ワシも、息子が欲しかったかな……?」

「酷い、父さん」

ハイリーンと共にジャミトフの腕を自らの肩へと乗せ、その老人を引きずるようにゼダン、テイターンズの旧拠点の中へ延びる長廊下を、心持ちに早足で駆けた。

「さて、あとは……」

「核パルス・エンジンかな、シロッコよ?」

ピッ……

ジャミトフが差し出した一枚のメモ用紙、それがシロッコの目の前へと突き付けられ、木星圏からの来訪者であるニュータイプの男は。

「誰から受け取ったものだ、ハマーンか?」

「いや、違うなシロッコ」

パプテマス・シロッコは数行のパスワード・コードが並ぶそのメモへ自身の目を向けながら、その顔を傍らのハイリーンにと向けた。

「シヤア・アズナブルからだよ、シロッコ」

「こちらブルー、核パルス停止作業の責任者、アジスという男を出してほしい」

「何気なく、私へと手渡したよ」

ゼダン後部へと設置された核パルス・エンジン、それをストップさせる為に回り込ませていたチームへ向けてハイリーンが通信機越しにパス・コードを伝える姿をじっと見つめながら。

「シヤアには、地球を破壊する意図が無い……?」

シロッコはその眉間へシワをよせながら、静かな洞察を行う。

「二基のコロニー落とし」

「二年戦争と、デラーズ紛争とやらの話だな、ジャミトフの娘よ?」

「その二つの物事から……」

核パルス・エンジン工作隊へ通信を終えたハイリーンが、自分の頭へと手を置きながら考え込んでいるシロツコの顔をチラリと見つめた後。

「シヤア、元クワトロ大尉もハマーン・カーンも、何かもつと最良の手を考えたのかもしれないわ」

「この地球を木っ端微塵にさせる、それが最良」

グウ……

厚い遮蔽窓の外に見える自機、リ・ガズイへとその目を向けながらハイリーンは礼装、十年振りの父との再会のために纏った衣服を脱ぎ捨てる。その彼女へシロツコは視線を送りながら、疑問をその口にと出し続けた。

「アクシズを含めた、圧倒的な質量兵器を地球へと投げ落としたこのやり方が、最良だと?」

「だけど、結果的に地球へは何一つとして小惑星も、コロニーも落とされていない」

「ああ……」

勿論、シロツコにしても勘は良い、良すぎるがゆえに彼は疎まれる。「一年戦争開戦、とやらか……」

「地球の意気地を削ぐ、ジオンの方法をシヤア達が研究したと、ハイリーン?」

二人の男達が放つ不躰な視線に、ブルーことハイリーンはその身へパイロットスーツを纏おうとしながら、軽く頷く。

「旧ジオンの最初の目論み、それはあるアクシデントが無ければ成功していたわ」

「そうだったな……」

「良い計画だったのよ」

そのハイリーンの半裸を見てもシロツコの表情は眉一つ動かず、当の彼女本人も気にした様子はない。

「南極で、最初にジオンが事実上の降伏勧告を突きつける事に成功したのだから」

「確かに……」

グウ……

シロッコに男性用パイロットスーツを着込むのを手伝ってもらいながら、ジャミトフは約十年前にレビル將軍を捕虜の身から救出した、ゴップ大将小飼いのラプラス・タイプ。

ムギユ……

「変な所を触るな、シロッコ」

「だったら、自分で着ろジャミトフ……!!」

文句をシロッコに言わせながら、宇宙での身だしなみを整える彼ジャミトフの脳裏に、当時は無精髭を生やしていた不老の作業員、今ではテイターンズ監査とエグザム・システムに関係した者達の後始末を兼任している百年スパイである彼の顔が浮かぶ。

「何をジロジロ見てるのよ、シロッコ？」

「遅いのだよ、お前の着替えが」

「悪かったわね……」

最初から頭部ヘルメットのみを外していたシロッコにとっては、そのバイザーヘルメットを装着するだけでよいのだが、何故かブルーがスーツを着るのに手こずっていた。

「それとも、天才さんも」

ブルー、ハイリーンは顔形こそ人並みではあるが、そのスタイルについては以前にエウーゴに所属していたニュータイプの少年から。

——いつか、ブルーさんと良いことあるといいな……——

——あかんやん、ボーヤ……——

セクハラまがいの誉め言葉をもらった事がある。

「木星帰りの天才さんも、男と言う事？」

「私は、女性の価値は生き方に宿ると思っている」

「アラ……？」

そのシロッコの、悪い意味として受けとれば似非フェミニストとも受け取れる言葉に、ブルーはその手に持ったブラジャーを床へと落とすしてしまう。

「アラアラ、嬉しい……」

「女の肉体は、欲情を呼び覚まし品性を失わせるだけの物だ」
「なあんだ……」

が、どうもそれに続いた天才の台詞には女性、ハイリオンとしてはつまらない品物であった事にガツカリし、彼女は一つため息をついた後に床へと落ちた下着を拾い上げ、裸の胸に持ち上げた。

「父さん、少し手伝って」

「全く、お前は……」

その態度、まさに彼ジャミトフの妻そっくりな性格にと育った娘へ苦く笑いながら、老人は娘のパイロットスーツを彼女の足下からたくし上げる。

「母さんにそっくりだ」

「だけど、あのリデイに私の着替え、パイロットスーツへの着用の手伝いを頼んだらさ」

「何……?」

「下手で下手で、かえって遅くなった」

「おい、ハイリオン」

フウ……

娘の豊満な胸がジャミトフの手の甲へと触れるが、そのハイリオンが吐いた言葉のせいで、彼はその事に気が付かない。

「ハイリオン、お前」

「何よ、父さん?」

「もしや、こうやってリデイとやらにも着替えを手伝わせたのか?」

「あの子は私よりも半分近く歳が下、別にいいでしょ?」

「ヤレヤレ……」

確か、ジャミトフの記憶ではその少年は十代後半、ならば。

「先程の酔った上での批判は、ハイリオンの奴が悪い」

誘惑、と受け取られても当然である娘の無神経さである。

「ユニ」

娘ハイリーンの乗ってきたリ・ガズイ、その背部追加ユニットへジャミトフを押し込めた時に。

「そう、ユニコーン」

シロッコのその唇が軽く擦れて、言葉を老人へと放る。

「あの海坊主、バスクから私は聞いたが？」

「レীগP、ニューペガサスは知っているな、シロッコ？」

「アムロ・レイ専用機、その予備らしいな、ユニコーンとは……」

ボウ……!!

「まずいな、スタスターが破裂しそうだ……」

ここまでの強行軍でハイリーンが率いてきたモバイルスーツ、テイターンズ兵の乗るそれがマシントラブルを起こしたようだ。彼女ハイリーンと兵達が機体を放棄するかどうかを話し合っている声がシロッコの被るヘルメット内へ響く。

「ニュータイプの乗る天馬でシャアを倒せなかった時に、二の矢として撃ち放たれる一角獣だ」

「それなのだか、な」

トラブルが起こった機体を放棄するかどうかに揉めているのは、どうもここら一帯の宙域に野盗、そしてそれらに一部の了見が狭きエウーゴ兵達が合流を果たし、縄張りを張っている様子が窺えるからである。

「ユニ・エグザムとは聞き捨てならん、ジャミトフ」

「単なるゲンかつぎとしての、名前だよ」

「あのユウ・カジマやアルフ技師の言っている物とは関係がない？」

「実際には、シロッコ」

ドウウン……!!

「だめだ、スラストアが完全にオシヤカになった」

「ゼダン内にあったヘヴィバザム、どうにか動かせないかしら？」

「スピードがでねえんだよ、あれはよエウーゴっぽブルーさん……」

結局、その兵のハンブラビは置き捨てにすることが決まりそうな様子だと、シロッコ達には窺えた。

「サイコミユ兵装を外したニューペガサス、それ以外の何者でもない」
「NTEEは入っていないな、ジャミトフ？」

「オイオイ……」

グ、グウ……

どうもこの手の機動兵器に乗るのは初めてらしきジャミトフ。
シートベルトを身に付けるその手もおぼつかない。

「これではまるで」

「痛、そこギックリ腰のポイントだ……」

「まるで介護だよ、ジャミトフ……」

「あれは本当に単なる噂に過ぎんよ、木星帰り」

「フム……」

フオ……

最後にジャミトフとベルトの間に僅かな隙間を作ってやってから、
シロツコはそのバック・ウエポン・システム、リ・ガズイの追加兵装
の予備パイロットルームの扉を閉ざす。

「だ、ろうな……」

「正直、単座で行動可能な事を除けば、ニューペガサスの半分程の性能
しかないよ、シロツコ」

「バスク・オムもそう見積もっていた、確かにな」

その宇宙戦闘機のようなシルエットの追加兵装機を閉めても、ヘル
メットへ内蔵された通信機で会話は出来る。ジャミトフの声を聞き
ながら、シロツコも自機「ジオ・メシア」へと向けてその身を泳がせ
た。

「あのなかなかの技師、アルフ・カムラがその噂に過敏に反応をしてい
たからな」

「彼は神経質なんだよ、エグザムに」

「ユウと同じか……」

ジャミトフが搭乗した機体、それを自身のモビルスーツで運搬する
ために。

ブウム……

父の機体から伸びるワイヤーをその手に取るハイリオン機、その彼

女を尻目にシロッコはジオ・メシア、高機動可変機のコクピットへとその手を置く。

「少しでもエグザムに関係がありそうな事には、耳を引っ掛けるんだよ、モルモット隊の連中は」

「所詮は凡人の精神かな？」

「酷だよ、シロッコ」

ジオ・メシア、総合能力やカテゴリ的には旧式可変機「メツサー」の後継に当たるが、そのウェイブライダー形態、戦闘機のシルエツトを持つその外見はZタイプ・ガンダムのように酷似している。

「その言い方はさ」

「エグザム・システムに魂を引かれた者達なのだ、奴等は……」

「確かに、特にユウ・カジマ君は過去にこだわり過ぎるきらいがあるがな、シロッコ」

スウオ……

パプテマス・シロッコの乗り込んだ可変機がアイドリングを始め。

フオ……

涼やかな音が、その旧式のシロッコ手製機体の隅々へと共動鳴する。

「不愉快だな、ユウ……」

自機ジオ・メシア、正式名称「Zガブスレイ」のグレイス推進器の調子を確かめながら。

「そして、下らん」

シロッコはそう、顔をうつ向かせながら暗いコクピットの中で小さく呻く。

「過去も未来も」

その天才の、神経質そうな声はどうにやら。

「私、天才パプテマス・シロッコにとっては、不要」

ジャミトフには聞こえていない様子だ、その代わりに彼の娘からの伝達が。

「アーガマへ向かうわ、シロッコ」

彼の機体内部へと伝わる。

「戦禍を避ける、安全策を取る」

「そうか？」

「ジユピトリスもドゴス・ギアも、危険宙域を抜けなくてはいけないから」

「了解だよ」

今現在に行われている戦争の舞台はアクシズ周辺か、そこからやや離れた位置で対決しているアムロ・レイとシャア・アズナブルのモビルアーマー。

「狭くて息苦しい、これがモビルスーツか……」

「父さん、うるさい」

「腰が痛い」

「ああ、もうジャミトフ父さん……!!」

「全く、実に……」

その二大恐竜が展開している宙域の二つ、ピナクルはすでに地球から落下ルートが外れたらしい。

「とにかく狭苦しい物だな、モビルスーツというものは……」

「やかましい、あかんわオヤジ!!」

「怒らんでくれよ、ハイリーン」

「誰のせいで皆がこんな苦労してると思てんの、ドアホ!!」

何か、グチグチと文句を言っているジャミトフが娘ブルーことハイリーンから怒鳴られている御様子。それらの物音を聴いて、シロツコのその端整な顔に笑みが浮かび、微かに彼の唇が綻む。

「私は、天才という者は」

「進行ルート、配信しますパプテマス大佐」

「現代に生きる、ラプラスであるからな」

シオア……

「こちらパプテマス・シロツコ、了解」

その電子戦機からのデータを、シロツコは自機のモニターへと写しながら。

フォウア……!!

彼はジオ・メシアの背部ブラスターから万色を吐き出させ、それら

の光が織り混じった、宇宙の常闇よりもなお黒い、オブシダンの輝きに満ちた人の心が。

「どのみち、この老人をどこかに預けんといかんからな……」

清らかに、宇宙（ソラ）を切り裂いた。

「だいたいに、シロッコという奴は」

薄暗いコクピット内、そこで一人心に秘めて呟くジャミトフにしてみれば、何だかんだ言って政治家には向いてないのだ、パプテマス・シロッコという男は。

「才覚で世の中を操れる、若さと能力で経験のその老獪が補うと思っているからに……」

ニュータイプでなくとも、自らの心へはシャッターを下ろす事なく、あるいは自己暗示を心得た政治家、ジャミトフ・ハイマンであれば造作もない。

「そして、そのシャッター、心の壁を自分本意の、都合の良い方に解釈をしてくれる」

狭くニュータイプというものを解釈すれば、それは単なるエスパ―でしかない。ならば他者を騙らかす技法を自分へと応用すれば。

「オールドタイプの旧世紀から、それこそギリシャだか中華から伝わる渉外術は、まだまだ現役というものだな……」

障りの浅い、深く相手の心へ入り込む事が出来なかったニュータイプ読心術などは未だに未熟な技法、人類へ根付いていない発展途上の品物なのだ。

「N T—E」

ズウ……

慣れぬコクピット、狭苦しくあちこちに故障をきたしている全天視界モニターから映る、実の娘が駆る機体の姿。

「蒼ざめた一角馬、ユニコーンエグザム・ペイルライダー兵装システム

か」

別にジャミトフにしてもその第二世代EXAM計画が人類の為になるとは思えない、思つてなぞいないが。

「亡霊博士、が……」

それでも、とある死んだはずの人物からアイディア面で支援を受けたレビル將軍は、その対スペースノイド抑止力計画を進めている。

「天駆けるペガサス、ルーGPが連邦所属ニュータイプ兵士用の実験機であるならば」

ニューペガサス、スペースノイド弾圧用の大型兵器であるそれは、今は連邦ニュータイプ試験体第一号であるアムロ・レイが駆っているという事は、先程に実の娘から聞いていた。

「地に伏すユニコーン、それはあくまでもニュータイプないし強化人間の調達が不可能になったときの、保険であるな」

ティターンズの表向きの方針、地球圏の秩序を守るといふそれは、この神格巨人の名を冠した武装組織「ティターンズ」が今現在、連邦内部へエウーゴ共々吸収されつつあるうとしても、いやそれ故に連邦政府へ細胞のように浸透しつつある。

「時代の流れでエウーゴともナアナアの関係になった現象、それが歴史という名の運命が」

ゴウ……

おそらく、ゼダンへ設置された核パルス・エンジンの停止作業が終わったのであろう。

「こちらアジス機、核パルス・エンジンのメイン出力をカットした」

「ブルー・マリアオン、了解した」

一際大きな振動がゼダンと、そしてその小惑星へと停泊しているモビルスーツ達を揺らす中、ジャミトフは独白を続ける。

「運命が、歴史がティターンズの前時代的な性質を、エウーゴではなく旧人類の心の相を認めてしまったか……」

そのような言葉を口にした時に彼の心へよぎる寂寥感、それが彼の「もののあわれ」を感じすぎる感性。

「完全な統制社会、それが近々この地球圏へ訪れるな……」

理想家かつ詩人肌の「ジャミトフ・ハイマン」というリーダー、大組織を率いて人の上に立つ者としては、たとえ自らその道を選んだとしても、危うく不安定なトップと言える。

「理想は現実にはかなわない、破れるという現実、認めたくないものだ」しかし、こうしてみるとジオン・ズム・ダイクンの提唱したジオン・ズム、宇宙を新たな天地と位置づけしたその思想に加えて。

「エレ・ズム……」

地球環境優先の思想エレズム、その二つの思想そのものはジャミトフにとって深く理解が出来るものであるが。

「何か、余計な人物が彼にもっとキャッチコピーの効く、耳触りの良い言葉を入れるようにと入れ知恵したのかな？」

人類の革新ニュータイプ、という概念は正直この老人にとって、人の可能性などは最初から信じる信じないというレベルからしてナンセンスであると認識している彼ジャミトフにとって。

「茶坊主、昔からいる者だからにして、リカルドやダイクンの近くにもオダノブナガの如くに座しても、おかしくはないか……」

もしかすると余計な物と言うことが出来る、組み込まれてしまったそのニュータイプ思想の恣意的かつ無責任な拡大にはどこか罪作り、スペースノイド達を惑わせる要素が注ぎ込まれているようにしかジャミトフには思えない。

「その点、俺はシンプルで単純だからな」

ネオ・ジオンの、漠然としたスペースノイドの自立という謳い文句とは違い、そう「悪い奴はぶっ倒せ」という地球保安組織ティターンズのキャッチ・コピー。

「まあ、そのシンプルさがティターンズが万人受けしなかった理由、スペースノイドはもちろん、地球人からも反発を受けた理由かも、な」彼ジャミトフが若い時に書いていた出版物、この老人が昔に執筆していた本は、正にそのシンプルさゆえにツマラナイという烙印を押され、全く売れなかったもの。

「その最初の批判、つまらんといいメールをくれたのが俺の、十年後に結婚した俺の家内であったという事だけで」

妻、恐妻「マリアオン・マーセナス」の顔を思い浮かべ、その身を震わせるジャミトフはまだまだ若い心を持つ「青年」であり。

「良いとしなければ、バチがあたる……」

そのテイターンズ総帥ジャミトフ・ハイマンが苦く、甘酸っぱい青春を思い出せるのは素晴らしく、老人の可能性（ラプラス）である。

——やらせはせん!!——

赤子というものは言語、明確な言葉単語をあやつる術はなく、したがって。

——やらせは、せんぞお!!——

自らの「父」を呼ぶニュアンスを持った言葉は、その口から放つことは出来ない。

——ようやくにも授かったミネバの為に!!——

「フ、ギヤア……」

だが、その赤子とて泣き声は、死地へと向かおうとしている父の発している獣の言葉と同質のそれは。

「ゼナ様、少し御休みになられた方が」

「大丈夫です、マ・クベ殿」

「しかし、ミネバ様が……」

その口から、意思表示をすることができぬものであり、同時に同じ言語を持つ、獣のいななきの声には反応するものだ。

「よしよし……」

母の手によりあやされる赤子、しかし彼女の顔は何か強ばり、その小さい手を固く握るのみ。

「すみません、やはり……」

「誰かいらないか？」

ズウオ……

死にゆく父へと取り付いた悪霊達、その昏き影を赤子は、実とその心で感じ取っている。

「ゼナ様達を居室へ案内しろ」
「ハッ!!」

神経質そうな声を持つこの艦の責任者、彼へ向けて一つ頭を下げてからドズル・ザビ、旧ジオン軍での軍事面重鎮であつた彼の妻、寡婦となつた彼女は一人の女性兵に案内を受け、艦橋から退出していく。
スウウ……

「フウ、ア……」

特殊ガラスが張り巡らされた艦の外周通路、そこから見える漆黒の宇宙へと、何かが疾つた。

「ソロモンは、ドズルは消えたのですね？」

「ハッ、それは……」

「いえ、いいのです……」

そのゼナ夫人の言葉に、彼女へ歩調を合わせるように歩いていた女性兵はその面を困惑させる。

「フ、アア……」

「おお、よしよし……」

その、見えているかどうかとも解らない赤子の瞳、しかし彼女は。

ウオウ、オ……

慟哭を上げる、宇宙へと散り散りに拡散していく。その黒いモノノケを。

「フウ……」

その産毛を逆立てながら、確かに心へと捉えていた。
ラプラスの悪魔を。

第76話 所詮なメビウスにもラプラスは顕る（前編）

——行け、フラウ——

——お母さん、お爺ちゃん……——

パシィ……

軽く、泣き崩れる少女の頬を少年が張った。

——アムロ……？——

——行くんだ、フラウ——

優しく、少年が少女の両手を自らの手で強く、強く握ぎる。

——君は強い女の子じゃないか——

——アムロ……——

肉親を目の前で失った、少女の瞳に力が戻り始めた事を確かめた少年は、そのまま。

——ごめんなさい——

——走るんだ——

スウ……

少女を地面から、その身を起こしてやり、そして。

——僕もすぐに追うから……!!——

——約束よ、アムロ!!——

——ああ!!——

——本当に、約束よ!!——

——さあ、フラウ!!——

再び、少年は少女の手を強く握った後に。

——走るんだ!!——

少女の身体を軽く叩き、励した。

——そうだ、フラウ——

一回、少年を振り返ったきりに少女は避難を再開し、強くその脚を荒れたコンクリートの上へと進ませる。

——走るんだ——

ガツガ……

生活を、人々の営みを破壊した巨人が、連邦の基地をその手に持つ
火器を使い、破壊し続ける音が。

——ザク……——

少年の、耳を強く打つ。

——ザク……!!——

ザク、旧世代のオールドタイプ兵器では太刀打ちが出来ない、
ニュー・タイプ・マシン。

——よくも……!!——

憎しみをその目に宿す少年。もしも彼を弱者とするのであれば。

——よくも!!——

駆逐される者、オールドタイプとするのであれば。

ガウウ……!!

機関大砲で破壊の限りを続けている巨人兵ザクは、強者はニュータ
イプと定義する事が出来る。

——あいつは、新しいマシンは人間じゃないんだ!!——

スウト……!!

避難先、軍艦が停泊している方向とは異なる場所へとその脚を駆け
させた少年の、その身体から。

——僕たちは、あの新しいタイプに負けてはならない!!——

リイフ……

一筋の、赤黒き光が宙へと舞い、何処かへゆらりと飛び去つ。

——僕に——

少年が抱く、おそらくは産まれて初めて抱く、憎しみと怒り、敵意
に満ちた宇宙の心は。

——力を……!!——

彼に、少年へと白き天の力を。

——ザクを裁く、力を!!——

ラプラスの、白き悪魔を与えた。

「レビル」

「ん、何だね？」

さすがにこの不遜、権威を傘に着るタイプの男であるイーサン・ライヤー中将にしても、この階級上は格が一つ下、少将の身分である。

「何か、ライヤー君？」

「なぜ、アクシズ本体ではなく」

盲目の小将人、レビルへの対抗意識を剥き出しにし、艦長である彼の命令に対して常のように。

「核パルス・エンジンの光へ砲火を向けるように指示をしたのだ？」

「あのな、ライヤー君……」

階級差を暗に匂わせ、レビル提督の出した命へと文句を言い、周りの人間を惑わすような真似、さすがにそれはこの緊迫状況下では行わない。

「あれが、本当に」

もちろん、彼ライヤーがそれを控えるのは視界へと、嫌でも飛び込んでくる小惑星「アクシズ」の巨体の為であるのだが。

ズウ……

ドロリとした赤黒きタールの光に後押しをされ、それを食い止めるかのように周辺宙域へ乱舞をする。

「核パルス、アクシズ推進の為に備え付けられた機械の放つ光とでも」
蒼と紅の燐光達、そしてそれを未知のエネルギーとして「現地活用」しているパイロット達の気持ちを意識しての事だ。

「感情の無い、機械的なそれだとも言うのか？」

「だったら、レビルよ」

更なる出世を望んでいる、連邦軍の頂点に立つことを目指しているライヤーにとっては、兵達を顧みない事による不支持、それはまずい。
「あの、悪魔じみたアクシズを圧す光」

「悪魔、そうか……」

「赤きタールのような光はなんだと、説明してくれないか？」

スウ……

ライヤー中將が指差す先、ブリッジから見える幾多のモビルスーツ達を取り付いているアクシズの姿を、コジマ大佐がしきりに望遠鏡を振り回しつづに。

「アクシズ、それに取り付いたモビルスーツの全てに謎の光を確認」

「了解、コジマ大佐」

「妨害モビルスーツ群、確認」

「了解」

傍らに立つ兵へ向けて、彼コジマは記録するように指示を出し続けている。

「レビル將軍」

「何だ……？」

「アクシズ、及びレビル艦隊周囲宙域のミノフスキー粒子濃度ですが……」

ゼネラル・レビルのミノフスキー粒子観測員、彼からの声がレビルの耳へと入り。

「それが……」

「続けたまえ」

「ハッ……」

言いよどむ彼へ老将は微かに頷いてみせ、その報告を促す。

「飽和限界値を超えました」

「そんな事があるもんかよ、ミケル君」

「しかし、確かです」

「チィ……」

ライヤー將軍として優れた陸戦の指揮官である。十年前の戦争、一年戦争時に未だモビルスーツを所有できなかった連邦陸軍へ配布した対モビルスーツ戦術のマニュアル、それを一から作り上げるという難儀を成し遂げた研究チームに対して積極的に資金面、現場情報面において支援をしたのだ。

「ミノフスキーが、そこまで充滿することなんで……」

ゆえに、ミノフスキー高濃度散布下での戦闘の大家、ともいえるこの彼にとつて。

「ありえん」

さんざん、従来の旧式兵器達である戦車や攻撃機の電子能力を無効化し、絨毯爆撃などという時代錯誤な戦法までも駆使させてくれたミノフスキー粒子、それに対しては並大抵の理解力ではない。

「ありえん事だよ、レビル」

「敵味方が、アクシズを支えるのもか、ライヤー君？」

「そちらは、あつてはならない事だよ」

「まあ、確かに……」

理解力を言えば小将人レビルのそれは「モノノケ」であるのだから、それでも。

「不可思議な物だな、この光景は……」

「フン……」

「そうしかめ面をするなよ、ライヤー君」

地球へと落ちた二基のコロニー、そのコロニー落としの実行によって死したスペースノイド達の心、そして。

「それに加えて、押し潰されたアースノイド達の心が」

あらゆる、この十年間戦争で消えた魂達が、アクシズ宙域のモビルスーツ達を動かしているのだろう。

「だが、な……」

レビルの心眼、それに浮かぶ蒼と紅の燐光はいい、しかし。

「憎しみの、光」

今のアクシズを支配している、その黒き光もまた、人の心そのものである。

「悪魔の、憎しみの」

「オイ……」

ズウ……

「少しは肩の力を抜け、レビル……」

「ああ、すまないライヤー君」

「震えているぞ?」

「いや……」

一年戦争時、レビルへ二度の悪寒を感じさせてくれたその内。
「悪魔の」

——やらせは、せんぞオ!!——

宇宙要塞ソロモン、そこでレビルが近くの宇宙から、自らの心の「目」で確認した。

——俺は幾多のミネバを奪ったのだ——

「影、小さな善意に包まれた……」

——ゆえに、俺は責任を取る為に、生きなければ——

巨大モビルアーマーの上部へと浮かび上がった、亡霊達のレギオンが。

——ミネバ!!——

「大きな悪意の、影」

——助けてくれ、ミネバア!!——

今なおに、彼レビルを襲う。

「運命、生き方を袖にされた者達……」

「落ち着け、レビル」

「袖ナキ、ロストスリーブス……」

ブオ、ウ……

老将軍、ヨハン・エイブラハム・レビルの身体の震えが止まらない事を訝しんだ将軍ライヤーが。

「医務室、レビル艦長を運んだ方が良いかな?」

「交戦中で艦長不在では、ブリッジと戦場全体の士気に関わるかと……」

「そうではあるが……」

近くのレビル護衛兵へとかけた声も、今の小将人には聴こえない。

「アクシズ宙域のミノフスキー粒子、更に増大」

「ウウ……」

まるで「おこり」の症状のように身体を大きく震わせ、跳ねさせるように自身の体を艦長席で揺らしている彼レビルの様子に。

「悪魔の、憎しみの手だと……!?!」

「おい、レビル!」

ザウア……

周囲の人間が、お互いに顔を見合わせながら動揺を始める。

「レビル艦長を医務室へと運べ!!」

「は、ハッ!!」

「急げよ!!」

怒鳴るライヤー中將の声により、レビルの護衛兵がその老将を席から引つ張る姿を見たオペレーターの、内一人が。

「負傷者あり、看護を頼みます」

「症状は?」

「不明です」

「誰だい、データを探すよ」

「以上」

「おい、待って……」

レビル、彼の名を言わずに一方的に話を打ち切る彼女の気の使い方、士気の事を考えてくれたその歳のころ三十前後と思われる女性オペレーターに感心したような視線を向けながらも、彼イーサン・ライヤーは。

「確か、キルステイン殿がバーミンガムに居たな……」

「中將があの方へ連絡を?」

「いや、私より……」

宇宙軍の力関係、言い換えると「縄張り」のそれは地球海軍のそれに似ているとゴジマ大佐から聞いているライヤーは、単純に地位階級上ではこの艦隊の最高位である自分が迂闊に言う、口を出すよりも。

「君が伝えたまえ」

「ハッ!!」

「レビルの事は伏せろよ?」

「了解しました」

たとえ難儀、事件とは言え何気なく、専門の通信士である彼女が伝えた方が良いと。

「こちら旗艦ゼネラル・レビル」

「参ったよ、こりや……」

「ダメ、ミノフスキーが強すぎる……」

「レーザー・モールスなら使えないかね、ミュ君とやら？」

「知っておられるので、中将？」

「まあ、見てろ……」

想像出来る位には政治力（せいじちから）を知っている彼は、だてに連邦軍トップを狙う野心を持っていない。

「この謎の状況で!!」

激戦、おそらくこのアクシズの行方を決める決定的な戦いの渦中にあるカツのジ・OIIへ向けて、凄まじい勢いで火線が迫り来る。

「戦闘相手の判断なんぞ、出来るものか!!」

「いや、出来るわ!!」

「何故言い切れる、サラ!？」

「敵意がなければ、アクシズを支えようとしていれば、そいつらは敵ではないという事!!」

完全なる乱戦、蒼と紅の輝きが乱舞するアクシズ宙域の状況、戦況はもはや誰の目にもすら。

「カミーユ、後ろへ下がれ!!」

「馬鹿を言うな、ジェリド!!」

ニュータイプである彼らにすら、解るものではない。

「あの赤き泥、それを目の前にして引けるものかよ!!」

「赤い泥、あれは何なんだよカミーユ!？」

「わからないよ、ジェリド!!」

「この、人の心のクレパスを強引に割り開くような……!!」

先程、一瞬だけ小惑星アクシズの暴力が、地球へと引きずり込まれるその圧力が乱舞する燐光達によって和らぎ止まった、その為にカ

ミーユ達は仮初めの安堵をしていたのであるが。

「俺の肌へナメクジが染み込むような不快感は……!!」

「俺も最初はクワトロ大尉、シャア・アズナブルの怨念だと思ったよ!!」

「違うつてののか、カミーユ!!」

ザオン……!!

アクシズの軀を、それを支えているモビルスーツ達の後方からレビル艦隊、ドゴス・ギア級「ゼネラル・レビル」を中核とした戦列艦隊からの砲撃が、そのアクシズの上方を包みこむ。

「あれは核パルス・エンジン、物理的な推進の光でない……!!」

「そうね、ローア少佐……」

蠢き歪む、その赤黒き靄へと艦砲の照準を定めたのは、アクシズに密着しているモビルスーツ達へ流れ弾が当たらないようにした、それだけの配慮ではあるまい。

「何かしら、このさきくれた感覚は……!!」

「何か、理屈では解けないエネルギーだよ、シャルロット……」

二人のネオ・ジオン兵の近く、その周辺へミノフスキー粒子に満ちた、紅い光が吹きすさび。

「くお!!」

その燐光にモビルスーツのセンサーを焼かれた隙に、大型モビルアーマー「ヒヤシンス」から放たれたビーム砲により破損をしたモンシアのルーガンダム、そして彼の機体を乗せた運搬機から大きく火花が散る。

「分散して逃げるぞ、バイト!!」

「了解!!」

新鋭型、ティターンズ・カラーにその身を覆われた黒きサイコミュー搭載型ガンダム・タイプである「ニューガンダム」とその僚機。

「せっかくのニュータイプ専用機、壊すなよな!!」

「使い方が、全くに判らねえがな!!」

「昔のジャグラーってな同じ事よ、モンシア!!」

同型であるマスプロ・ニューの試作機へと乗っているパイロット、

遙か昔からの戦友である彼、アルファ・A・ベイトに向かって合図を出しながらも、モンシア少佐は。

ガオン!!

ミノフスキーの海を切り裂き、バスターカ砲の連打をアクシズへと取り付いているサンダーズ隊を襲おうとした不明機達、それらへ向かい次々と撃ち放つ。

「助かります、モンシアさん!!」

「良いってことよ!!」

バウ……!!

蒼い光の波が地球オーストラリアから立ち上り、その柱がモンシアを追尾していたクシャトリヤの視界を塞ぐと同時に、そのネオ・ジオン製の大型機へ光の一条。

ギユアウ!!

「くそ!!」

真上から運搬機の出力を噴かせつつに、そのサイコミュ機へと奇襲をかけたジオンII、カツの一撃が寸前でそのクシャトリヤ。

「踏み込みが甘かったか!!」

「あの時の黄色いダルマか!？」

ハアフウ!!

一際強烈なミノフスキー粒子の烈風、それと同時にそのクシャトリヤ随伴機と付近に展開している混成軍達が。

「広角射撃ならば、何年訓練を重ねたと!!」

「無茶すんなよ、昔のジオン嬢ちゃん!？」

「あなたこそ!!」

重武装へその身を固めたバギ・ドーガと、ロング・ビームランチャーを構えた深き青の塗装が施されたり・ガズイが交戦を開始する。

「マレット様の邪魔をしないで下さいよ、ルースさんとやら!!」

「そんなハマはしねえよ!!」

ブオフ!!

クシャトリヤ、マリーダ機から振り払われたビームサーベルの出力に押されているジ・オンの背後へと迫る旧式。

「後ろ!？」

デラーズ紛争時の急造モビルスーツであるドラッツェが、その手に構えたマシンガンをカツ機ジ・オIIに向けて放とうとしたとき。

「ジャ……!!」

「ボヤツとしてんなよ、達磨モビルスーツ!!」

「すまない、助かった!!」

両手にヒートホークを構えたドーガ・タイプがその急造機を切り裂き、その彼の機体へまわりつく不明軍が数でその格闘専用機クエル・ドーガを圧迫し始める。

「ちよこまかと!!」

苦戦している彼、旧ジオン兵が駆る機体を青いリ・ガズイが援護射撃を行う中。

「ドウ、ン!!」

高出力ビームでジオン兵を助けていた連邦勢力機。その機体の高精度照準器が近くで破裂した光により。

「センサーが!？」

大きな火花が、そのサポート機器と銃身へと疾る。

「連邦、あやふやなビームを撃つってのはな!!」

蒼きミノフスキー粒子の爆発が彼らの目を攪乱させている中でも、なお。

「余計な手助けってんだよ、オイ!!」

「持ってくれよ、リ・ガズイ・カスタム……!!」

「チツ……!!」

それでもなおに冷静を保ちつつ精密ビームの射撃を行っている彼、連邦兵の機体をネオ・ジオンのモビルスーツ達、緑蒼の光を帯びた友軍達が彼の背後へと浮かび。

「二十秒でいい、持たせてくれ!!」

「長げえよ、半分だ!!」

「了解!!」

同じく緑蒼の光を帯びているリ・ガズイの発展タイプ、メガビーム・ランチャーの冷却パックを交換し始めた連邦機の護衛を行う。

ジャア……

攪拌されるミノフスキーの海、それを駆ける連邦派、ネオ・ジオン連合の部隊をもう一機のクシャトリヤ・タイプが。

ドゥ!!

深紅のクシャトリヤがその軀から撃ち放つビームにより次々と撃破をしていく中で、なおもアクシズへと取りつく良心の者たち。だが。

ポ、ズウ……

「うわあ!？」

アクシズを後押しする悪魔の光、それが「泥」をモビルスーツ達へと垂れ流し、彼ら人間達を押し退けようと、その昏き光を侵食させ始めた。

「ば、化け物か!？」

「シン、大尉!!」

「来るな、お前まで溶かさせるぞ!!」

その警告を受けても、黒き泥をもちろに被ったシン大尉のジエガンを彼の部下、ボール九〇式達がそのマニピレータを差し出し、彼を泥の沼地から引きずり出す。

「ジエネレーターが……!!」

泥により機体の出力異常を起こした彼、ベテランであるシン大尉へと狙いをつけた敵性機、モビルスーツの手首に当たる部分、袖口から昏き光を放つ不明機達を。

「下がっている、ジムにボール!!」

「俺はもうジムではない!!」

「大人しく下がらないと、また蹴り飛ばすぞ!!」

「何だと!？」

ネオ・ジオンの友軍が相手と引き受け、火線を放ち始める。

「クシャトリヤを追い回せ、サラ!!」

「了解!!」

「緑色の方だ!!」

ジュピトリスVで簡易的な改修を行ったカツ達の、パプテマス・シ

ロッココ自慢のモビルスーツ二機。彼らのしつこい追撃にマリィダ・クルスはアクシズを支えているモビルスーツ達の撃破を諦め、そのまま機体を翻す。

「もう一機のクシャトリヤとやらは、赤い方は!!」

ズウン!!

後続のファイリッパ達、ブルーディスティニー4号機とサマナのスタークがクシャトリヤの片割れ、赤く塗装されたその大型機へ向けて、運搬機からの大口径ビームを放ちつつに。

「俺達に任せろ、カツちゃん達!!」

「頼みます、ファイリッパ隊長!!」

「その代わり、あのサラちゃんを泣かせた奴は、女は!!」

「言われなくても!!」

バウ!!

ジ・オIIの全身へ追加装備されたビーム砲が、彼らモルモット隊へ奇襲を行おうとした敵性機達を牽制、薙ぎ払う。

「サラ、来い!!」

「命令すんな、トンカツ!!」

「狙うべきは一機、だがさつきからお前はよそ見を!!」

「無視出来ないオバサンがいたのよ!!」

確かにサラがそのパラス・アテネ、シロッコ謹製シリーズの初期型が率いる重砲撃隊を支援したお陰で。

「あのサラに助けられるとは……」

その重火力機が機体を半壊させながらも、真紅へ塗装された模造サイコ・ガンダムへと致命傷を与える事が出来たのは、レコアにしてもエウーゴの面々、そしてパプテマス・シロッコに対して面目が施せたと云うものだ。

「でも、オバサンもよくやってくれた!!」

「ならば、改めて!!」

シン!!

紅い燐光が波打つ中で、ジ・オIIとタイタニアが特殊運搬機ごとに並び立ち、推力を上昇させる。

「連携するよ、サラ!!」

「任せなさい、カツ!!」

緑のクシャトリヤ、カツとサラにとっては因縁の相手へ向けて銃口を向けつつ、彼等はそのマリーダ機へと自機の機動によって視覚的なプレッシャーを与えようと試みながら。

「光が、アタシを襲ってくる!!」

硬柔を織り交えたヴァリアブル・ライフルでそのマリーダ・クルスのモバイルアーマーを後退させる。

ウオウ!!

再び吹き荒れるミノフスキーに運ばれる燐光が、そのクシャトリヤという名らしきサイコミュ搭載機体を追い立てる、モビルスーツの夫婦をさらに強く後押しする中。

「くそ、早い!!」

高機動タイプへと改良を施したクエル・ドーガを駆る男が、紫色のZガンダム、その敵機へ向けて。

「スラスターが焼けたのが、今になって現れ始めたか……」

「遅いんだよ、ザ・クが!!」

両手にと持つ大型加熱斧による斬撃をお見舞いしようとした試み、それはそのウエイブライダー、Zタイプのモバイルアーマー形態の余りのスピードをその目にして諦めてしまう。

ブオ!!

苛立つ彼の目の前を、簡易型Zタイプであるリ・ガズイが宙を突き、ミノフスキーの海を潜り抜ける。

「気に触る奴だ!!」

「悪かったな!!」

「昔から、な!!」

紅くその身を色付かせたり・ガズイのカスタムタイプを駆る男にしては、そのクエル・ドーガの悪態を気にしている暇はない。機体調整が不完全な上。

「紫のZガンダム、それを守ると共に!!」

グウ……

所々に金の縁取りをされたドーベン・ウルフ達、サイコ・ガンダムの量産タイプの派生と言われている割には小型であるが、それでもその火力は全く油断できず。

「アクシズへ取り付いたはぐれ狼達を狙っているか、ドーベン・ウルフ!!」

「そういう目論みなんだろうな、若造!!」

ハイザックのアップバージョン、確か紅いリ・ガズイカスタムを駆るパイロットの記憶では。

「ゼク・アイン、いやツヴァイ……!?」

とやらの機体群を率いている重装ガンダム、ガンダムMkⅤのインコムを発動させようとしている男と共に。

「ドライ、ええと後は……」

「ドーベン・ウルフ達を退治するぞ、紅いリ・ガズイの若造!!」

「あのな、俺にはフォルドって名前が……!!」

ギイ……

その華美な装飾を施されたドーベン・ウルフ達に気が付いた白色の同型機、友軍がチラリとアクシズへ突き付けていたその手を緩めた、様子を伺ったのだが。

「任せていいかな?」

「大丈夫、そうですわね殿方」

「ああ……」

バウン!!

「ああ!!」

白きドーベン・ウルフ「シルヴァ・バレット」へとその身体を乗せているエイガーは、その援軍が瞬く間に敵性機を二機撃破した光景を見て、その手を再びアクシズへと叩きつけた。

ポツ、タア……

「赤黒い泥垂れが、気味が悪いぜ……!!」

「本当、下品ですわ」

ジャア……

だがその泥は母なる地球、そのの北米大陸から立ち昇る蒼き光に

よって吹き払われる。

「だが、俺は……」

不明機達からの射撃、光達が密集をしあたかも宇宙空間に摩擦熱を感じさせるような重く厚いプレッシャーに満ちた宙のなか、エイガーは近くのネオ・ジオンのモビルスーツ、ドム・タイプを駆る女性を、黒の泥からその身でかばう。

「どうなさって、エイガーさん……?」

「あの蠢く者達の心、何処かで……」

先程の「敵性機」からの攻撃、それによりアクシズの真下を這いながら戦線離脱をしていく一機の旧式。

「こちらザクイーマツト機、後退する!!」

「よろし、あとはこの俺!!」

「頼むぜ、連邦!!」

「フォルドに任せなつてよ!!」

連邦軍パイロットである彼エイガーが、かつて銃口を向けあったジオンの老兵が乗るザクへと、その視線を向ける姿に隣の令嬢風の声を出す女性は訝しげな視線を向ける。

「十年前、俺は確かに感じていた」

「あなたは、ニュータイプとやらでありまして?」

そのドム・タイプを駆る女性ネオ・ジオン兵の質問にエイガーは答ええない、無言のままアクシズを押し戻す「手」を、さらにその反撥心を込めた力を強く伸ばした。

「もし……?」

「圧倒的な力を、強者を」

若き日の彼、エイガーの悪夢であった「ザク」の偉容が。

「怖れ、憎んだ力なき連邦の人間であった俺達……」

物質的な意味での新型兵器、ニュー・タイプ・マシンによって、彼を筆頭とした連邦兵、いやアースノイド達は。

「俺達は、その巨人兵に踏み潰された……」

もちろん、個人的にはこの場から退いていく旧式のザクを始めとする、この場にいる元ジオンの特務部隊の連中への恨み自体は、さすが

にそれは「割り切れる」エイガーではあるのだが。

「あの黒き光はそれに」

渦を巻く、赤く昏くその光で宇宙を侵す怨念の力。

「一方的な力に、殺された連中の心ではないのか……？」

グウ……

再び、撤退していくジオン老兵のザクを見やった後、再び周囲へ警戒を始めたエイガーの後ろへ再度の艦砲、そして。

「ちい!!」

アクシズ低空域へと滑空している、白いギラ・ドーガがアクシズを支えているモビルスーツ達へと威嚇射撃を行う。

「邪魔な、ザクの十年越しのマイナーチェンジが!!」

「ジャマ、だヨ……!!」

ガウ!!

そのサイコミュ搭載タイプと思わしきギラ・ドーガの攻撃が自機シルヴァバレットの脚へと掠めた事で、エイガーは一端アクシズから離れようとしたが。

ガア、ガツザ……!!

「助かる、ネオ・ジオン!!」

「オのレ……!!」

「あれこれ考えてる時ではなかったな、今は!!」

近くのジムⅢと共に、その赤黒き光を袖口から放たせるサイコミュ機、白いヤツを弾き跳ばしてくれたネオ・ジオン兵、新鋭機ギラ・ドーガを駆る彼らへ向かって礼を言いながら。

「今が、踏ん張り時!!」

「そうですわね、連邦の殿方!!」

「人の、力は!!」

人の心を身に付けながら、再度エイガー達はアクシズを、いや。

「不可能を、跳ね返す!!」

その反骨をもって、十年前の戦争を生き抜いたエイガー機から放たれる蒼い光、その彼の閃光を一機の最新型Zタイプ、黒き光に包まれた紫色のウェイブライダーが。

「不可能を跳ね返す、だとおな!？」

ギユ、キアイ!!

赤き集束ビームでアクシズを支えていたモビルスーツ数機を無造作に薙ぎ払う、年若き少年が嘲笑う。

「やれるもんなら、やってみるんだな!!」

ユウ・フロンタル機を支援したアンジェロのZⅢ、彼はそのアクシズへと密着している機体の内。

「ん……?」

一際大きな光を放っているモビルスーツ、その姿に目と神経を奪われる。

「あれは、まさかカミーユとやら!?」

旧式のZタイプ、それが放つ紅い光にアンジェロ少年はその紅い唇を歪めつつ。

「フフ、ン……」

その双眸、不思議な色彩を持つ自身の瞳を薄く細める。

「Zガンダム、カミーユ・ビダン……」

「イコウ、アンジェロ……」

「ハッ、フロンタル様!!」

どうやら彼らはガブスレイ・タイプ二機と共に紅い光を身へと纏う、カミーユ機Zガンダムを獲物、標的として定めたようだ。

「お乗り下さい、フロンタル様」

「ウム……」

グウ……

そのままアンジェロは白いギラ・ドーガをその背へと乗せ、紫のウェイブライダーに急加速を行わせる。

ドウム……

赤き泥が、彼ら怨念の者達を助け。

「ジェネレーターが、爆発する!!」

ジムへと乗る連邦兵達を爆破、解体させつつに、そのモビルスーツの死骸が放つ閃光の中を。

「こちらクシャトリヤ・ツ、後退する」

「こちらフロントアル、リョウカイ……」

スウウ……

真紅のクシャトリヤと、ユウ・フロントアル達が交差する。

「クシャトリヤが、圧されてイルカ……？」

「フロントアル様、信心です」

「オコルナよ、アンジェロ……」

ビュイ!!

ユウ・フロントアル機からのビームがアクシズへと取り付いた連邦モビルスーツ、それをあたかもハエ叩きのように撃ち落とす光景を目にしたネオ・ジオンのリゲルグ、高機動機体が怒りの声と共に彼らを襲おうとするが。

ズウオウ!!

敵性機達の援軍、可変機多数の浮上により、その思いは叶わない。

「半分は、我々につけ!!」

「ハッ!!」

アンジェロ少年の号令により、その可変機隊は二手に別れ、その一方がリゲルグ達の相手につくその中で。

「見えた、カミーユ・ビダン!!」

ミノフスキーの海を掻い潜り続けるZⅢ、白きサイコ・ギラ・ドーガを乗せたそのウェイブライダーが目指すべき目標をそのセンサーで捉える。

「ミノフスキー粒子が異常値、しかし!!」

自機へと纏わりつく蒼い光に苛立ちの感情、相をあらわにしながらも。

バウン!!

彼アンジェロは「ユウ機」と分離しつつに集束メガビームランチャー、多目的ビーム照射システムの照準をZガンダム、ZⅢの兄へと定める。

「シャアの」

どうにか稼働が出来るようになったルーGP、アムロ・レイ専用重モビルアーマーではあるが。

「いや、すでにネオ・ジオンの者達には」

呻くように呟き続けるアムロ・レイは、サブ・パイロット達の催促にも動く、機体を動かす気配はない。

「戦闘意欲、それが急速に萎えている」

「だからといって、アムロ・レイ」

コウ少佐にしてみれば、未だユウ・カジマとその一党が攻めたてているノイエ・ローテの姿から目をそらす事などは出来ない。たとえニュータイプであるアムロに何が見えていようとも、だ。

「まさかこのまま、座して待つつもりか？」

「その、まさかだよ」

「オイ……」

「シャアの切り札、それがあと二枚も残っている」

そのアムロの、彼が目をつむったままに呟く言葉の意味は、核弾頭ファンネルによる直撃を受けた当のコウ・ウラキ達にも解ってはいる。

「確かアムロ、あなたは」

リイ、ン……

それでもアイドリングは続けているニューペガサス、その巨体へ寄り添うように内火艇を接舷させているララア・スンのからかいの言葉が、彼女がその身へと付けている鈴の音と共にアムロの耳を打つ。

「昔、核弾頭ミサイルを白いモビルスーツ」

「言わないでくれよ、ララア……」

「ガンダムのビームサーベルで切り落としたのでしたってね？」

「若気の至りだよ、全く」

正直、その物事が心に残っていたからこそ、彼アムロはニューペガサスの巨大ビームサーベルでシャアから放たれた特殊ファンネル、核

爆発を起こすその最終兵器を昔とった杵柄で。

「俺の考えが甘かったよ、本当に……」

「出来てれば大スクープだったのに、ねえ……」

「見世物じゃないんだよ、カイ」

弾頭だけを切り離そうとしたそれは、直線的なミサイル相手であった上の「運良く」出来た品物であって、融通の利く動きが行えるファンネルに対しては、完全な判断ミスである。

「まあ、ニュータイプなんだと言っても……」

スペースランチ、その内部から馴染みの男が放つ軽薄そうな声が、不覚を取ったアムロ・レイのそのボヤキへと要らぬ言葉を返し、放つ。

「所詮人間は、神様にはなれないってね、アムロちゃん？」

「あのなあ、ハヤト……」

応援、というば聞こえはいいが、正直ララア・スンと共にやって来たこの十年前の連中、仲間達は今のアムロにしてみれば。

「何で、カイまで連れてきたんだよ？」

フリージャーナリストの男、そして旧エウーゴの支援組織「カラバ」へと所属していた彼ハヤト・コバヤシを筆頭とする者たちは、物見遊山で宇宙に揚がってきたようにしか見えない。

「別にいいでしょうに、アムロ」

「俺はハヤトに聞いている、んですよ……」

そして、この女実業家にしても、彼アムロは「金持ち暇あり」という単語が頭へと思い浮かんでしまう。

「息子さんが心配みたいよ、彼は」

「ああ、そうか……」

「貴方がカツくんを、あの連邦軍ユウ大佐の所へ預けたのではなくて？」

「中立の連邦、エウーゴとテイターズの本真中にいれば、見識が広がると思ったんだ、俺は」

そう、金髪を短く刈り込んでいる彼女に言われてしまうと、アムロは言い返す事は出来ない。確かにカツ青年については彼アムロ・レイに責任がある。

「カツの奴は大丈夫なんだろうな、アムロ……」

「何故、この場にはいないカツ君の事をアムロに聞いて、ハヤト？」

「ニュータイプの勘、それでどうかと思つてな」

ハヤト・コバヤシ、背丈こそ隣へと立つ同年代、二十代後半の歳と思われる女性と変わらないが。

「俺の家内フラウも、心配していてな……」

「これだから親というものは、全く」

「うるさいよ、ハサウエイ君は……」

その堂々たる体軀、ガタイに似合わず彼はどうも心配性のようだ。

「心配いりませんよ、ハヤトさん」

「だ、そうだつてさね……」

「貴方の息子さんは……」

「マザー・ララア様の御神託だ」

大型スペースランチと言えども旧ホワイトベース、その中で特にアムロが親しかつた者達が皆宇宙服を身に付けている為。

「マジの御利益を確かめた、この俺カイ・シデン様のお墨付きだ」

「まったく、どいつもこいつも……」

「さて……」

そのノーマルスーツの幅のせいでハッキリ言つて狭苦しい、その中で特に辺りの宙域へキョロキョロとした視線を投げ付けている男の挙動は、特に。

「マザー・ララア、アムロ・レイの敗因は何だと思われませんか？」

鬱陶しい。

「止めなさいよ、カイ・シデンさん……」

「俺は彼女に聞いてんの、ベルトーチカ」

人が詰め込まれている狭い船内のなか、ジャーナリストの男にマイクを近づけられたララア・スン、彼女が微かにその顔をしかめると共に。

「アア、コホン……」

「すみません、このカイの無礼」

「良いのです、セイラさん」

何か、巧くこのカイ・シデンのインタビューをスルーできる彼女は、同姓異性問わず手厳しい性格であるセイラ・マスにも受けが良い。何かシンパシーじみた物が有るのかもしれない。

「ハヤトさん、貴方の想っている方は、何かを見つけたみたいですよ」

「だから、マザー・ララの御信託、信じるこつたね、ハヤト」

「絶対に消えませんが」

「んだと、さ」

カ、シヤシヤア……

とにかくスチル、ニューペガサスは勿論として、離れた戦線の宙域にまで。

「売れるぜえ、コイツは……!!」

「まったたく、もう……」

その記者の男が船外遠隔操作タイプのカメラ・シャッターを切り続ける姿、それに対してベルトーチカ・イルマは。

「熱心ねえ、カイ・シデンさんは」

「あんたも撮影関係の腕があるならば、シャッターチャンス逃して良いモンなのか？」

「別に……」

元カラバのメンバーにしてアムロ・レイの愛人である彼女は、その肩を疎めてみせるのみだ。

「アムロがシヤア・アズナブル、あのクワトロさんに負けちゃって、ガツカリしているだけ」

「はいはい……」

ダウン!!

「ナーニやってんだよ、コウ!」

「すまん、キース!!」

何をどうしたのかは解らないが、ニューペガサスのメイン・エンジンからいきなり火が噴き出した光景。だかそれを見つめながらも、アムロ・レイの恋人は。

「白い悪魔の時代、それは終わったのかしらね？」

「そうさ」

「まあ、その方が……」

カ、シャ……

電光石化の勢いで船外へと飛び出したカイ・シデン、ジャーナリストの男がその破損したエンジンへとシャッターを切り続ける。

「あなたの子、産まれてくるこの子には良いのかももしれないわね」

そう言いながら、みすからの腹部を軽く擦るアムロ・レイの愛人の姿、それに彼女と同じ髪の色をした実業家の女、そして。

「未来を言う、光か……」

羨ましそうに、しかし何処か哀しげにララア・スンのその褐色の顔が薄く翳る。

「私には、たとえ大佐が望んでも」

「ララア……?」

「無い光ね、アムロ」

フォン……

「邪魔だ、マスゴミ!!」

「ジャーナリストの権利だよ、昔の試作機であるゼフィなんとかの!!」

溶接トーチでレーザーGPのエンジン、その外装を修復しているコウ・ウラキのハンドドリルがその邪魔者へ投げ飛ばされ、その彼から放たれる苛立った声を耳へとしながら、アムロはララアの言葉の意味を理解する。

「シャアから、クワトロから少しだけ生い立ちを聞いた」

「そう、アムロ」

「それだけだ」

フウア……

春風を思わせる、ララア・スンの穏やかな微笑みは、アムロには決して届かない。

「GPタイプのガンダム乗りだった人、インタビューお願い!!」

「あなた、民間人だろ!」

「いまさら機密でも何でもないっての、GPシリーズのガンダム開発計画は!!」

「あのね、それでも……!!」

それでもララア・スン、彼女の声に深く昏い感情が混じっていた事を、アムロは強く感じはした。

「エルメス爆破時の初期型サイコミュ、それによるサイコ・ウェーブの暴走がもたらした」

カタア……

フィン・ファンネル・システム、単なる攻撃端末ではなく、様々な応用が出来るムラサメ研の最新型サイコミュ制御兵装の点検を、神経質な程に念を入れて。

「ララアに対する五感の内、視覚触覚、そして嗅覚味覚も失い、聴覚だけのファントムとして俺の前に顕れるしかなかった霊体」

いつでもサイコミュを稼働が出来る状態にと維持し続けるアムロへの、ララアの低く、闇を帯びた声は。

「その悲しみだけの物ではなく、母になれない女のそれか……」

——だけどね、アムロ——

「別にニュータイプ能力、それによる話し合いも盗聴の恐れが、ホワイトベース隊の皆にはあるもんだがね」

——全く、問題ないわ——

だが、ララア・スンはその心の傷痕、それをアムロ・レイへは感じさせないような、明るく澄んだ声をその心から静かに放つ。

——ここにいる人達は、みんなデリカシーを知っている——

「そうかなあ、ララア？」

だが、そのルーGPとスペースランチのお外では。

「コウ・ウラキさん、どう!?!」

「だから、邪魔だとお!!」

「赤い彗星、そしてアナベル・ガトーとの戦いの敗因は何ですかあ!?!」

「まだ、だああ!!」

「リベンジ・マッチとの意気込みで!?!」

ボウウ!!

アムロの昔馴染みのマスコミ関係者が苛立ちの頂点へと達したコウにハンド・トーチによって威嚇されながらも、無神経にインタビューを行っている姿を。

「あの人、カイは孤児院へお金を沢山寄付しているみたいよ、アムロ」
「そうなのか、セイラさん？」

「だから、彼はもつとマネーが必要」
「そうか……」

コクピットから全天視界カメラでそのマスゴミを目にしているアムロのボヤキにセイラが答え、そして彼女のその言葉に周囲の者達はその顔を見合わせながら、そして。

「だからあの人、優しいのよ、アムロ」

「そうか、ララア」

「ラブ・ユウではなくライク・ユウ」

互いに、穏やかな苦笑を浮かべる。

「でも確か、ララア」

ゴウ……

ノイエ・ローテの周囲では、数多のモバイルスーツ達がついにシャアを。

「君を助けたシャアが、それを一番良く知っている……」

エグザムの加護を失ったユウ・カジマと白いクインマンサ、ハマーン・カーン機を矢面へと押し出しながら、数で押し始めた。

「悲惨な状態から拾ってくれたシャア、彼が一番優しさの意味を知っていたと言っていたな？」

「貴方が一番デリカシーが無く軟弱な、人の心をえぐっている発言をしているのではなくて、アムロ」

「あえてそう、ララアにとテレパシー通信をしているんだよ、セイラさん」

蟻達が、弱小モバイルスーツ達が集い、赤き恐竜「ノイエ・ローテ」とノイエジールIIを圧迫している光景はシャアの疲弊、パワー負けであると言える。しかし。

「ニュータイプ電話に割り込まないで欲しいな……」

——見かねたのよ、彼女は——

「ああ、そうだろうな……」

——そういう人達には、盗聴をされてもどうって事は無い——

「だけどな、ララア」

ララア達の優しさ、それは有り難い物ではあるのだが、兵士としての今のアムロにはシャアへと対する、ささくれ立つ感情が必要なのだ。

「シャアにはあと二発の、核弾頭ファンネルがあるんだよ」

そのアムロの声は「通常」会話、口からの普通のそれとして放たれた言葉である。

「さつきから動かないと決めている、それに何か意味がアムロさんにはおありで？」

「あるんだよ、キース」

「とにかくフィン・ファンネルへエネルギーを廻している、それにも関係が？」

「考えがあるんだ、俺に」

「フウン……」

シャア・アズナブルの戦意が彼の疲労と共に失われつつある。それによりあの男が良識ある行動に出てくれればいいとアムロは願いこするが。

「人の運命が思い通りにいくならば、誰も死にはしない……」

第77話 所詮なメビウスにもラプラスは顕る（中編）

——兄さん？——

カラア……

夜風と共に一室、よく調度がなされた部屋の中へと入り込む、満月のその光にも負けぬ美しき金の髪を持つ少女の声には少年、彼女の兄はすぐには声を出さない。

——どうしたの、怖い顔をして？——

——アルテイシア——

少年の手に握られた、一通の手紙。

——母さんが、な——

——お母様が？——

——亡くなられた——

カシヤア……

その兄の言葉に、少女はその手に持つティーカップを床へと落とす。

——気が、落ち着いたらな——

——はい、兄さん——

——母さんの手紙、読んでやってくれ——

ポウ……

表情を変えず、放心をしながらも涙を流す妹の顔、それから少年は目を背け。

——ここに、置いておくよ——

あえて抑揚無き声を自らの妹へと放った後、少年は。

キイ……

小さいながらも良く調えられ、美しき月の光が射し込む妹の部屋から、静かにその身を離れさす。

——ザビ家——

厚い扉、それを通して妹の嗚咽は少年の耳に聴こえてくる。

——ザビ家……!!——

その時、少年がその目にした。

ファイア……

自らの身体から浮かび、昇った紅い光が。

——よくも……!!——

宇宙の心が、彼をして畏怖の音と共に呼ばれる「赤い彗星」と為したのかもしれない。

——僕は——

古き血を絶やし、自らがジオンを牛耳ろうと試みる、新たなタイプの政治を行おうとする血族ザビ家。

——お前たちを、ザビ家を——

無知なる大衆を煽動し、少年の父であるダイクン。そしてその彼の妻にして少年の母である女性をもろともに概念的、物質的な死へと追いやり、抹殺した強大無比なザビ家、その「力ある者」を絶やす「力」を。

——裁く為の力を、僕は——

「弱者」である少年に、その「強者」を裁く可能性を秘めた力を。

——僕は、望む!!——

ラプラスの、可能性の悪魔は少年を赤き運命へと導き、力を与えた。

「ふうむ……」

パ、チイ……!!

ユウ・カジマの機体、たかが一機のモビルスーツに圧迫させた自機「ノイエ・ローテ」の損害の酷さに、シャア・アズナブルはコクピット内で軽いため息を吐く。

「私を仕留める算段、どういう物であったのかな、ガトー？」

「あまり大した事じゃありませんよ、シヤア・アズナブル……」

　　どうにか、エグザムの呪縛を離れてもなおも狂乱を続けるGマリオン。シヤアはその蒼きジェダ・タイプからの猛攻に対応できるようなはなつたといえども、もはやこのノイエ・ローテには余力も残弾も無い。

「あなたをノイエ・ローテから追い出す、機体コントロール権を私が奪う」

「無理だな、甘いよガトー」

「その他、あと十の手段がありますよ、シヤア」

「簡単に言ってくれるよな、ガトー？」

「不思議なのです、私は」

　　ビー……

　　機体総出力が五十パーセントを下回った事を知らせる警報、アナベル・ガトーはそれを無視し、混成部隊に対して最後の意地を見せているシヤア・アズナブルの奮戦を、どこか他人事のように当のノイエ・ローテのサブ・コクピットから観戦をしている。

「さつきまでは、機体コントロールどころか」

　　ジャア……

　　牽制として振るわれたGマリオンの火焰剣を回避したノイエ・ローテの装甲をファンネル達が、一点に火力を集中させて打ち砕く音、それがシヤア達の耳を打つ。

「私がサポートを放棄することすら、出来なかった」

「ジオンの名を刻み込んだサイコミュというのは、そういうものだ」

「今なら、あなたをノイエ・ローテから追い出し」

　　ゴウ……

　　ノイエ・ローテの機体出力が変動を起こし、無意味な機体推進により余剰燃料が無駄に消耗される中、シヤア・アズナブルの口から。

「ハア……」

　　鉄仮面に覆われたその顔の奥から、疲労の色を強く感じさせるため息が漏れ出す。

「宇宙へ放り出した後、管制ユニットであるレーテ・ドーガのコクピットを開かせて」

「私の仮面を壊すか？」

「壊すにしても、レーザー狙撃もあればこのノイエの残った核を爆発させてもいい」

物騒な物言いであるアナベル・ガトーであるが、正直シャアの脳波を増幅させている仮面、鉄のサイコミユ端末があつてこそそのノイエ・ローテだ。

「それで、このモビルアーマーの性能は半分以下にまで落ちる」

「よくよく探ってくれたもんだ……」

「私は苦手ですけどね、この手の事は」

ジユウ……

コーヒー・チューブにまで手を伸ばす事が出来るこのガトーという歴戦の兵、その豪胆な観戦が彼の気骨から出ている物なのか、または緊張の度が超えすぎた為の行為なのかはシャアにも解らない。

「ハマーン、デラーズ閣下、そしてマ・クベという者が手を組めば」

「出来るな、確かに」

「故に、不思議なのです」

ピイ、イ……

機能停止を知らせる警報、戦闘兵器の「死」を知らせる音色が響くコクピット内部、しかし。

「何故、この状態でノイエ・ローテは動くのです？」

「私にも解らない」

「無責任な……」

「それが、理由なのかもしれない」

「はい？」

微かに、コーヒーを飲むガトーの喉が揺れ、彼はむせる。

「無責任が、このモビルアーマーを動かしているのかもしれない」

「ああ、ニュータイプ流哲学というものですか……」

ドウ!!

強い被弾の音、しかしそれでもガトーは、そしてシャア・アズナブ

ルも何処か呑気なものだ。

「確かに、信念などのマインド・パワーは人を動かす力になりますが」

「納得いかんか、ガトー？」

「私はオールドタイプですので」

「それでも、人の心は普遍的であり無責任に核を放ち、そしてコロニーを落とす事も出来る」

「フム……」

十年、いや彼アナベル・ガトーにとっては七年という時間、それを与えられながらも全く人の魂の形が変わらないというのは、それこそかえって不自然であり、有り得ない話と言える。

「私を否定しますか、シャア？」

「今の私は、人を否定する事は出来ない」

「ならば、せめて最初の謎かけの答えの一つでも」

「うむ……」

電力が落ち、予備バッテリーに頼っている中でも、全天視界モニターの映し出す外界は。

——ニュータイプめ!!——

ノイエ・ローテの高性能モニターは彼シャア・アズナブルに対して、蒼き悪鬼の姿をクツキリと映し出させてくれる。

「人には強い力と弱い力がある」

「ミノフスキー粒子理論ではないですか、それは？」

「強い力は弱い力を押し潰すよ、ガトー」

だが、その逆の理論が今のノイエ・ローテがユウ・カジマ達によって追い詰められているという現実だ。

「そして多分、私と」

ガオン!!

その時、凄まじい振動がノイエ・ローテの機体を強く揺らす。

「君ごと、アナベル・ガトーは強者だ」

「訓練は厳しかったですからね、モビルスーツの」

流石にその尋常ではない機体ショックに、ガトーも口にと含んでいたコーヒーを投げ捨てて、その顔を僅かに引き締める。

「だが、弱い力も密集圧縮すれば」

「どうやら、このモビルアーマーのIフィールドを貫き、強力なビーム光条がノイエ・ローテを千切った様子である。モニターが数基破損をし、ガトーには外部の状況がよく掴めない。」

「モビルアーマーの一つも動かせるし、潰す事も出来る」

「信念がこの機体を動かしている？」

「信念というよりも」

「ガア!!」

「その後も続く断続的な銃撃が「シャア・アズナブル専用モビルアーマー・ノイエ・ジールII」を揺さぶる中、それでもシャアは意地を、ニュータイプの可能性を信じて自機へと闘魂を注ぎ込む。」

「怨念、情念の類いだな」

「不可思議な話ですね、シャア」

「君のデラース紛争時での行いも、単なる一人のパイロットが出来る限界を超えていると思うが……」

「義、信念です……」

「どうもこの状況になっても、彼ガトーはシャアの手伝いをしない事に決めたらしい、別にシャアにしても彼にあまり期待などしていない。」

（元々、犬の忠誠心をヨシとする男だからな、彼は）

元々に、あまり本質的な感性が合う男ではなかったのだ。

「ああ、そうか義や信念……」

「さすがに勘が良いな、ガトー」

「とは言っても、もちろんシャア・アズナブルはこのガトーという男を無能だとは決して想像にもしない。一つの物事に固執し過ぎるきらいがある男であるが、それを個人的レベルで強く持っていた自分が非難する資格はないと彼シャアも自覚、だけは出来る。」

——エゴだよ、それは——

「彼が勝利を納める事が出来た連邦ニュータイプ兵の言葉、正しくその通りに自覚が行動へと伴わないだけなのだ、赤い彗星という男は。「それに加えて、何だかんだ言ってるな？」」

「連邦への憎しみ、ですか……」

「それが、君を突き動かしていたようだな？」

「これが、人の可能性の所詮たる由来」

確か、彼アナベル・ガトーが今は無き旧ジオン総帥「ギレン・ザビ」の次辺りにザビ家内では心服していた男であったドズル・ザビ。宇宙要塞ソロモンと共に散ったその猛将の娘が。

「ミネバ様が、おっしやっております……」

「そうだよな、なあガトー……」

「シヨセンなラプラスとやら、そういう意味か……」

ついに実弾、対空砲のそれが尽きたノイエ・ローテ、何やら昏きモヤのような物質が立ち込め始めたコクピット内で、シヤアは己の仮面へと、そつと。

「ララアにアムロ、そして……」

手を触れながら、なおもノイエ・ローテへの攻撃の手を緩めない愚民達に。

「父と母、アルテイシアには悪いが……!!」

旧ザビ家の人間などを始めとする、善悪の判断がつかないままに一部の人間に踊らされるしか能の無い衆生、彼らへの抵抗をシヤアは、勝ち目の無き抵抗をなおも続ける。

「それでも私は、愚民達に負けたくないのだよ……!!」

間接的とはいえ、その大衆達によって現実的にも概念的にも父と母を殺されたようなものであるシヤア・アズナブル、キャスバル・レム・ダイクンにとつては、何度ララアやアムロ達に否定されようとも、その憎しみの心は。

「相手に力が無くなり、立場が弱くなったと同時によつてたかつて池へと叩き落とす、度し難き者達、愚民共には!!」

——お前は、永遠に他人を見下す事しかしない——

そう友人から、気の良き男であるアムロ・レイからの気遣いの忠告を何度受けたとしても。

「許せよ、アムロ!!」

この今、ノイエ・ローテへと私刑を行っている者達、特に。

「私はユウ・カジマを裁く、裁きたい!!」

その、いつとうの強き憎しみの光を放つ愚民達の代表たる男、彼ユウ・カジマに向けて放った彼シャアの叫びには。

「君は、ユウ・カジマ君は私の人生の否定だ!!」

ドウ、ウ!!

彼シャア・アズナブルの雄叫びに対する愚民達からの答えは、凄まじきノイエ・ローテへ与えられた衝撃によって成される。どうやら巨大な質量兵器が紅き妖花へと突き刺さったようだ。

「カミーユ!!」

そのファ・ユイリイ、カミーユ・ビダンの幼馴染みから放たれた警告の声と同時に、彼が駆るモビルスーツである名機「Zガンダム」はその身を軽く。

ギーイー!!

掃射ビーム・レーザーの射線から自機を伏せさせ、不明機への迎撃姿勢をとろうと試みた。

「新型のZⅢ、聴いた事があるぞ!!」

「旧式のZガンダム、確かカミーユとやらだったな!!」

分離した白き機体は地球方面、レビル艦隊方面から急速接近してきた茶色のモビルスーツ一機、緑色をしたモビルスーツ二機によって注意を引かれた様子ではあるが。

ボウウ……!!

「会って見たかった物だよ、ニュータイプ!!」

摩擦の光を切り裂きながら放たれるファのモビルスーツ、メタス改良型からの大口径ビームを軽々とかわしながら「白いヤツ」の随伴機である紫色、高速形態へと可変しているその新型Zタイプ・モビル

スーツは、嘲りの声を上げつつ、カミィユ機へと迫り。

「アムロ・レイの再来と呼ばれていたようだね、カミィユ・ビダン!!」

「それがどうした、紫のゼータ!!」

「どうもこうも!!」

シャウ!!

紅き摩擦光、それを舞わせながら可変機能を活かし人型となったア
ンジエロ機は、そのまま自機を焔で焦がしながらも、機体のスピード
は落とさずに。

「アムロ・レイの再来は!!」

ブオン!!

頭部バルカン砲から軽い牽制弾をカミィユ機へと射ち放ちつつに、
人型となったZⅢはハイパー・サーベルをカミィユ・ビダンへ向かっ
て叩きつける。

「一人でいい!!」

「お前がそうだとでも言うのか、新型Z」

「まさかあ、に!!」

ギヤウ、ン!!

カミィユ機のビームサーベルが完全にZⅢのサーベルに力負けを
し、グイと圧されている光景のすぐ脇を。

「シドレ、モルモット隊の安定剤が!!」

「気を付けてね、シドレ!!」

「いざ、参る!!」

緑蒼の光が、サマナからの応援を受けながら強く疾る。

「エイア!!」

モルモット隊、ファイリツプとサマナの機体後ろへとついていたシド
レのジエガン、新型量産機が運搬機サブ・フライト・システムを放擲
しながら、自らの得物であるサーベルへと火を入れ始めた。

「尋常に、ユウ・フロンタル!!」

「本当に一人で大丈夫かよ、シドレちゃん!」

「安心召さされて大丈夫ですよ、ファイリツプ隊長!!」

モルモット隊の隊列から離れたシドレ機、そのジエガンの後方、

ちようどカミーユとアンジェロが鏝迫り合いを行っている真横の、
ティターンズ所属モビルスーツ二機の至近から、光が。

リイ、リイア……!!

「うわ!？」

「ジェリド!？」

鈴のような音が響くと同時に、アクシズを取り囲む魂の光達が収束
をし。

ボウ!!

プロミネンス光、猛き心がガブスレイIIジェリド機の脇から、強く
噴き出し、その焰により。

「ジェリド、大丈夫!？」

「心配するな、マウアー!!」

アクシズ周辺へ舞い乱れる燐が発する炎によって怯んだ「敵機達」
が、モビルスーツの縁々に金属色での装飾を施しているZプラス達が
僅かに怯む。

「私だつて、パイロット!!」

それでも彼ら可変機達、ユウ・フロンタルとやらの随伴部隊はフア・
ユイリイのメタス改を追い回すのを止めない。

ボウウ!!

「支援、誰から!？」

「女、カミーユと同じ位のガキ!!」

だが、そのZガンダムの従兄弟達へと向かって、アクシズを支えて
いるモビルスーツ「ガブスレイII」の肩から光が放たれ。

「しっかりするんだよ、カミーユ小僧の女!!」

「すみません、ティターンズ!!」

ビュウオ!!

アクシズを支えたままに、ジェリドは自機の肩部ビーム砲を背後へ
輪回させて光条を放ち、彼女を助け続ける。

「違う、こいつらは!!」

ドゥン!!

そのジェリド機に続いてティターンズ機達が支援射撃を行う中で、

緑色をした大型ジオン製モビルアーマー「ヒヤシンス」がその肩をサラ機により撃ち抜かれる。

「先程の宙域で戦った時とは、実に違う力!!」

そのニュータイプ用モビルアーマー「クシャトリヤ」は、シロツコ手製機体メツサーラに酷似した運搬機へと乗っているカツとサラによって、激しく。

「違う、違う!!」

激しく追いかけて回され、圧倒されている。

「訳が違うのだ、どういう事だ!?!」

ドウ、ン!!

プロミネンス光、アクシズからの焔がそのクシャトリヤ、マリィダ・クルス機から放たれたファンネルを絡めとり、人のタマシイが彼女を否定したと同時に。

ガアウ!!

「おのれ!!」

カツとサラ、二人が放ったビームライフルがクシャトリヤのビーム・バリアーを貫通し、またしても軽度の被弾を彼女へ負わせる。

「マリィダ!!」

「まだ持ちます、フロンタル様!!」

だが、そのマリィダ機を心配している暇は彼らのリーダー。

ギィアン!!

「正対せよ、ユウ・フロンタル!!」

「リョウサン、リョウサン機ごときガネ……!!」

「貴方に、ユウという単語を名乗る資格は無いのであります!!」

「言ってくれルヨ、シードル!!」

シードレ機、ジェガンによって一方的に押されているユウ・フロンタルにはない。

「フロントル様が、危ないか!？」

そのアンジエロ機ZⅢ（ズイードライ）に出来た僅かな隙、それを見逃さなかったカミーユではあるのだが。

ガアウ!!

他の敵機からの支援射撃により僅かにライフルの照準がブレてしまい、そのライフル・ビームを紫色をしたZガンダムが潜り抜け。

「ならば、一気にカミーユ・ビダンを仕留めてみせる!!」

「ちい!!」

そのアンジエロ機が身構えるハイパー・サーベルによる刺突が、カミーユの目前へと迫り来る。

「くそう!!」

バア……!!

圧倒的に出力の、サーベル出力の差があるZ・ワンとZⅢ、カミーユ機Zガンダムが受け流したハイパー・ビーム・サーベルの圧力により自機体を持つサーベル基部から火花が出た事に、カミーユは低く呻き声を上げながらも奪回の手段。

「力が弱いんだよセンパイ、カミーユ・ビダン!!」

「だがな、パープル・ゼータ!!」

ジャア!!

頭部バルカン砲による狙いをよく定め、その紫のZタイプが高压光刃を持つ機械の手へと弾丸を狙い射つかミーユ。その射撃弾により危うくZⅢは。

「モビルスーツの性能差が、戦いの決定をさせる物ではないんだよ!!」

「チイ!!」

アンジエロ機ZⅢはハイパー・サーベルを取り落としそうになり、慌ててもう片方の腕からサブ・ビーム砲をカミーユ機へ向け、その光を放たせる。

「こしやくだよ、パープル!!」

「アンジエロ、アンジエロ・ザウパーという名前がある!!」

「アンジエロだと!？」

出力が低い牽制のビーム・スプレーガンによる攻撃ではさすがに力

ミーユは怯まない。

ボウ!!

そのままZガンダム、出力が不安定となったビーム・サーベルをカミーユ・ビダンは疾風のごとくにZⅢへと襲わせる。

「男の名前のくせに女か!!」

「な……!!」

「そんな、紫趣味のZは女の服だよ、アンジエロとやら!!」

「き、キサマア!!」

ボウン!!

いったん自機を後退させつつに、その背から大型ビーム・ランチャーを取り出し始めたZⅢのその大きな隙、相手にどこか成熟さが欠けていると刃を交えて感じたカミーユの扱ったその挑発が。

「なんと、しても許さんよ、カミーユ・ビダン!!」

「人に言われた悪口も、使ってみるもんだな……!!」

功を奏したのか、アンジエロ機が集束ビーム・ランチャーを構える隙も与えず、カミーユは更なる斬撃を立て続けにZⅢへと与えようとした、のだが。

ドウ、ン!!

「うわ!?!」

カツとサラ、ジ・オIIとタイタニアのペアに防戦一方のクシャトリヤ、グリーン・カラーのそれがZガンダムに激突をし、コクピット内カミーユ・ビダンの身体を激しい振動が襲い。

グウ……

彼カミーユの前歯が下唇を押し潰し、彼の舌へとその血の味が乗る。

「こんな時に!!」

「すみません、Zガンダムの人!!」

「パンケーキだけが旨く作れる思い上がり男のモビルスーツ達、だつたらやるな!!」

ギア、ア……!!

「運は、ラプラスは僕に味方したようだね、カミーユ・ビダン!!」

ZⅢの主力兵器、ビーム・レーザー砲があたかも長大なビームサベルのように宙を切り裂き、その赤き光を寸前で回避したカミーユは、その兄弟機の攻撃に対抗をしようと。

「こっちにも大出力ビーム砲はある、アンジエロ・ガウパー!!」

「ガ、ウパーだ?!」

「すまん、言い間違えたかもな!!」

悪言葉を使い相手に牽制をしかけながらも、カミーユは急いで背中装着されているメガ・ビーム・ランチャーを取り出すのだが。

「簡単に打ち合いで俺に勝てると思うなよ、男めかけが!!」

「よくも、よくもオカミーユ!!」

ギアヤ……!!

激昂してもなお、正確な狙いが出来るアンジエロ・ザウパーという男パイロットに対しては、そのカミーユが使った外法、心理戦術は。

「微塵の、アクタとしてくれる!!」

「Zガンダムのメガ・ランチャーが、追いつかない!」

「人の、心を侵すニュータイプめ!!」

裏目にと出ているのかもしれない、それほどそのZⅢ、アンジエロ機とは性能差がある。

「あのよ、サマナちゃん!」

「何ですかあ!」

ガアン!!

アクシズの「外れ」から次々に顕れる、不気味な意匠を己の機体モビルスーツにと施している不明機達、彼らからの射撃を身軽にかわせているサマナと言えども。

「この、忙しい!!」

新型のサマナ機「スターク・ジエガン」といえど、集中力を切らして良い理屈はない。

「時にね、何ですかファイリップさん!」

ドウ!!

大口径ビーム・スマートガンを放っている最中でも軽口を叩けるファイリップ・ヒューズ、彼とは違いサマナ・フュリスは真面目なのだ、氣質が陽気なこの未来のパン屋とは違うのだ。

「早く、言つて!!」

「アクシズへまとわり付いて、いた連中!!」

フオウ!!

正体不明機からのビーム狙撃を跳ね返すニューガンダム、逃げる敵を追つてここまでやって来たモンシア機のフィン・ファンネルがそのバリアーを展開した負荷のせいか。

「アクシズを支えていた、仲良し連中はなんだ!」

「知るもんですか、ファイリップさん!!」

運搬機もろとも機体制御に難儀しているその彼、元同僚の姿を見やりながら、サマナはホン星の相手にと。

ジャア……!!

不明機達の内、狙撃タイプによる支援を受けながら、その体軀を反転させてファイリップ達を迎え撃とうとする姿勢を見せたレッド・クシャトリヤ、紅き大型機へと向かつて、サマナは肩から拡散弾ミサイルを投げ放つ。

ドウ!!

「うわう!」

「あ、しまった」

「馬鹿ヤロウ、新型ジエガン!!」

疑似ニュータイプ波発生器、機体背部へ重量過多となる位に搭載されている「機械的強化人間」を、合わせて四基ともなる補助を受けてもこのレガンダムとやらのコントロールは難しいのであろう、危うくその近接信管ミサイルの反応範囲内へと入り込む寸前であったそのモンシア機を、彼の僚機が。

「後で、ツラあ貸せよ!!」

「動くな、モンシア!!」

「うつせえよ、ベイト!!」

量産型レガンダムが自らを載せているサブ・フライト・システムを無理矢理推進させ、モンシア機をどうにか高威力を誇るミサイルの射線から引き剥がす。

ハアウ!!

「ミサイル、撃ち落とされた!?!」

「散開しろ、皆!!」

そのサマナが撃ち放った拡散弾ミサイル、それをアツシマー旧式タイプへと乗りながら長距離狙撃を行った男の声が、辺りの宙へと無線を通じて響き。

グウ……!!

「敵の、次が来る!!」

「くそ!!」

宇宙用初期型アツシマーにと自機を固定、そのまま急速に宙域から離れていく狙撃仕様ゲルググにと放たれる、マスプロ・ニューからの拡散ビームガンの連射。

「当たれば一発なのによ!!」

「避けて、インコム付き!!」

「アン、何だ重装ジエガン!?!」

バムウ……

ビーム・スプレーガンの弾幕をその身、バリアーで弾き返しながらその量産型レガンダムへ向かい、赤きクシャトリヤが猛突を仕掛けてくる姿に対し、そのマスプロ機へと乗るパイロットは僅かに動揺をす。

「こいつは、ジムビームじゃあないんだぜ!?!」

「それでも拡散弾です、散らばり過ぎて貫通は無理!!」

「そうかよ、ジエガン!!」

自機の状態、特に残りの武装弾数を頭の中へと刻み込みながら、サマナはスタークから牽制としてグレネード弾を赤きクシャトリヤへと向け、投げ放つ。

ジャ……!!

「ファンネルで撃ち落とされた、だがそれでいい!!」

どのみちスタン・グレネードの爆発では直撃でもない限り、この強敵には僅かなダメージすら与えられない。ファンネルで迎撃させて気を散らすだけでよいのだ。時間を稼げる。

「レガンダムに、量産型レガンダム!!」

そのサマナが稼いだ時間の隙に、彼の操るスターク・ジェガンが跨がっている運搬機メルキャリバーから、ややに甲高い男の声が二機のニュー・タイプマシンへと向けて放たれた。

「任せろって、サブフライト!!」

「まだ、何も俺は言っていない!!」

「言わなくてもやることは同じだ、素人じみた奴!!」

「サマナのスタークに紅いクシャトリヤは任せろ、黒いレガンダム!!」
「解っているといっただろうに!!」

ジャア……!!

だが、そのアルフ・カムラとの会話で生まれてしまった僅かな、彼らの方での隙。

ボウウ!!

「クイン・マンサもどきを惑わしたのは良かったみてえだが!!」

今度はそれを突かれてニューガンダム・タイプ二機が跨がっていた運搬機「ベース・ジャバー」が敵の狙撃部隊から狙い撃たれ、ブースターの出力が一気にゼロとなる。

「せっかく、ここまでの赤いヤツをを追えたのによオ、ベイト!!」

「一等星を得たい気持ちは解るが、な!!」

「やむを得ねえんだよ、このニュータイプ専用機がへボいんだ!!」

「あのジェガン達にデカブツは任せようぜ、モンシア!!」

その新鋭機クシャトリヤの危険性は、僅かに火線を交えただけのモンシアとて解っている、ゆえに。

「万全の状態ではないクイン・マンサもどき、やっぱり落としておきてえなあ……!!」

長年の戦場を生き抜いてきた歴戦兵である彼らにしてみれば、時折大きく機体の動きが乱れるクシャトリヤ、整備不良のせい或被弾のせ

いかは解らないが、本来の力を発揮させる前に始末してしまいたいというのは本能レベルの判断である、そしてその相手重モビルアーマー、攪乱から復活したその敵機から。

ガウ!!

連邦軍のハイエンド量産機「スターク・ジエガン」を駆るサマナへ向けて、巨大モビルアーマーからの火砲が迸る。

「ねえねえ、サマナちゃん!!」

「甘くて馴れ馴れしくて、アンタの作る菓子パンみたいな声を出さないで下さい、フィリップさん!!」

「このヒラヒラキラキラ達は、結局の所!!」

アクシズを支えるモビルスーツ群、連邦派とネオ・ジオンの機体達を襲い続ける、まさに宇宙の闇の中から湧き出てきた正体の不明な機体達を、フィリップは自機の空いた方の手で指差してみせた。

「この、手首を格好つけた連中は、実際の所何なんだろうねえ!」

機体の縁をエンブレービングで飾られたネモ・タイプ。その機体からのビームライフルを自機の微動のみでかわし。

ドウ、ン!!

「教えて、サマナ先生!!」

「前、マエだよフィリップさん!!」

「よう、と!!」

その不明機へ向けてフィリップはブループラウスからスマートガンの光条を疾らせつつに、あえて明るい声をサマナへと放って、十年来の友人を苛立たせる。

「レッド・ジオニズムだよです、フィリップさん!!」

「昔のジオン系テロリスト、生き残っていたって事か!!」

「それが、まとまって!!」

ドウウ!!

ブループラウスの同型機、敵機達に含まれていたZプラスの突撃をスルリとフィリップがかわす傍ら、サマナの機体はその敵機に随伴するドム・タイプへ向けて、ランチャー管制をロックさせた。

「吸収、そして結成をされた連中らしいですよ!!」

「ぐくろうなこつたな、全く!!」

「袖付きことロストスリーブス、そう情報部ではコードネームで呼ばれています!!」

「矛盾してないか、その名前は!？」

「そこまでは知りませんよ!!」

スターク・ジェガンは右肩のポッドから高精度ミサイルを放ちつつ、そのもう片方の左肩部ミサイル・ランチャーからは、特徴的なマークが記された特殊弾。

「おい、サマナ!？」

「いいんですよ、アルフさん!!」

ボウ、ボウオ!!

広範囲対サイコミユ攪乱幕、通称サイコ・ジャマーの試作タイプ弾頭を一気に撃ちはなった。

「デカブツ、巨大モビルスーツの他にもファンネル使いがいました!!」

「さすがに目が良いな、サマナ!!」

「えっへん、アルフさん!!」

その「デカブツ」と正対しつつ胸を張るサマナ機の脇を、数基のファンネルがフヨフヨと通り過ぎ。

「くそ、レーダーが映らんようになった!!」

「それでいいんですよ、アルフさん!!」

「確かにな!!」

情報処理能力を向上させたメルキャリバーのコクピットへ座るアルフへその声をかけるサマナ機のすぐそば、明らかにアクシズへと取り付いているモビルスーツの援軍と思わしき連中にもサイコジャマーの影響が出た様子だ。

ガオ!!

そのロストスリーブス、疑似波発生器を搭載していると思われるガザ・タイプ達の編隊が乱れ、その内の二機が激突し、相打ってしまう。

「ファンネルの第二波、来るぜ!!」

「支援を、フィリップさん!!」

「無茶をやるってか、サマナちゃん!？」

「このスタークならば!!」

ボ、ボウ!!

マリオン・システムを駆使し、出力を抑えたビーム・スマートガンでマスプロ・キュベレイから飛び掛かるファンネルを的確に撃墜するフィリップ機の下方。

グウオ!!

そこから自機を押し上げるかのようにサマナはスターク・ジエガン、急遽配備された試作兵装試験機をそのファンネル発生の源へ突き進ませ。

「相手がクシャトリヤだろうと!!」

「物知りだねえ、さすがにサマナちゃんは!!」

「どうやら、もう僕の素性は!!」

大型モビルアーマーの護衛機と思われる量産型キュベレイ達へ、特殊型ビーム・ライフルを、よくに狙いを定める。

「バレバレらしいみたいです、ね!!」

「付き合えば長げえからな、サマナちゃんとも!!」

キィ……!!

試作ライフル、超高压縮ビームを放射できるそのビームライフルの銃口へと赤き輝きが宿り。

「クシャトリヤ・タイプが二機確認、ならば!!」

ガウウ!!

放たれた赤い閃光が、ビームの波動が一気に直線上へ並んだクシャトリヤ随伴モビルスーツ達を掻き消した。

「あと持って二発の、単発マグナム、出し惜しみはしない!!」

「ビュウ!!」

そのフィリップの茶化すような口笛は、サマナ機のビーム・マグナム・ライフルの威力に感心したのか、それとも。

「けれどもやはり素早いな、このモビルアーマー!!」

ズウ、ン!!

相当に機敏な動きを見せるクシャトリヤ、クイン・マンサやノイエ・ローテの後継タイプであるサイコミュ機の目にも止まらぬ機動性に

対して吹かれたものなのか、よくは解らない。

「次世代の戦闘兵器ってか!!」

「分類はモビルスーツみたいですね、クシャトリヤは!!」

「だがね、火力が!!」

ドウウ……!!

周囲から支援に駆けつけた友軍機、ジエダ隊がそのクシャトリヤからのビームを浴び、瞬時に二機の機体が掻き消える姿をその目で見たフリリップにと。

「パワーがどこをどう見ても、モビルスーツではないだろうに!!」

ジャア……!!

そう愚痴を言いながらも敵スカームミツシユ、散兵遊撃隊から撃ち放たれた狙撃ビームをブループラス、ZプラスタイプC改良型ブルーデイスティニー四号機を手足のごとく操り、かわさせる事が出来るのは彼フリリップの、明らかな手練が成せる技だ。

ゴウ……!!!

だが、この武装組織の駆るモビルスーツ各々が寄せ集めとはいえ、そのパイロットまでも質が悪い訳ではないらしいのが。

「上かい!」

このロストスリーブスとやらをサマナフユリス、レビル將軍揮下の密偵である彼が危険と見なす理由である。

「上、太陽を背に取られたか!!」

「ジーク!!」

フォ、ン……

彼、フリリップのブループラス天頂を取ったゲルググ、それのJ（イエーガー）タイプがその狙撃銃の狙いを定め、続いて。

「ラアプラス!!」

ザア!!

烈帛の声と共に一条の閃光が宙を裂く。

「くそ、このヨナム・カークスとしたことがまた!!」

「危ねえぜ、全く!!」

「この茶色のZタイプ、エースだとは解る、だが!!」

その狙撃モビルスーツと連動して、クシャトリヤからファイリツプ機へと放たれる拡散ビーム、だが。

「それよりも危険な相手、重装ジェガンが見えない!？」

「拡散ビーム、真ん中に隙が見える!!」

あえて拡散ビーム中央へ飛び込んだブループラウスを尻目に、戦域からやや離れた位置から狙撃、相手の注意を引く為に放ったロング・ビームライフルを構え直すゲルググ、その旧式機へと向かって。

グウン!!

投げ付けられる回転板、フィン・ファンネルの基器を、狙撃タイプのゲルググは運搬機キハール、初期型アツシマーのブースターへと火を灯し、寸前でかわす。

「だてに俺たち地球人はな、ウチチュージン!!」

「くそ!!」

ザア、フ!!

まともに扱えないファンネル、サイコミュ兵器に苛立ったモンシア少佐の取った乱暴な手段はそのゲルググ付近の機体を破損させる程には有効。そして、続けて放たれるニューガンダムの、僚機と共の火線。

「支援狙撃部隊、後退せよ!!」

「何年も、お前達ジオンと戦ってはおないんだよ、アン!？」

「我々はジオンではない!!」

流星にその袖付きのパイロットも、最新鋭と判断したガンダム・タイプと自分の旧式ゲルググで刃を交えようとは思わないようだ、それでもその代わりと言うべきか。

ドウ……!!

「逃げるかジオン、宇宙人!？」

「ジーク・ジオンに換わる、我々の家は!!」

「くそ、早い!!」

旧タイプとはいえモビルアーマーの推力だ、いくら新型とはいえ運搬機を放棄したモンシアの機体や。

「奴さんが速いぜ、ベイト……!!」

「お前のニューガンダムでも追いつかないか、モンシア!？」

「ニュータイプ専用機という触れ込み、リミッターが解除できねえ……」

バイトの乗る量産型ニューガンダムの推進力では追いつけない。

「とんだ役立たずだ、このニュータイプ専用機は!!」

「ジム・ジャグラールと同じってか……」

「使えねえ、な!!」

ハイスペックではあるが乗り手を選ぶ真似をするのが「ガンダム」というもの、それに悪態をつけている二人組には。

「我々の新たな家は、継るべき袖ロストスリーブス……」

クシャトリヤの援護に向かった高速狙撃隊を率いる男のその呻き声は、届かない。

ザア……!!

最後の大型誘導弾、多目的ミサイルを撃ち放ちつつに、アルフの駆るサポート機から飛び降りて、紅きクシャトリヤに奇襲を仕掛けるサマナ、スターク・ジエガン。

「アンチ・サイコミュ追尾、上手くいくか!？」

その高速で迫る「誘導」ミサイル、ニュータイプないし強化人間が放つ思念波を逆に伝って追尾する、アンチ・ファンネル・ミサイルの攻勢バージョンはその機能自体は発揮している様子であるのだが。

ボウ!!

「クシャトリヤの周りにいるモビルスーツが、まずい!!」

新たなるクシャトリヤ随伴機により撃ち落とされたミサイル、だがそれでもその大型ミサイルの爆発を隠れ蓑にし、サマナはスタークへと拍車をかけた。

「露払いは俺達任せろ、サマナちゃん!!」

「頼みます、隊長!!」

「柄じやねえなあ、隊長って言葉は!!」

「僕も、やはり隊長はユウと付けて呼びたい!!」

「そりゃ冷たい!!」

ややに無謀とも言えるスタークジェガンの、敵部隊中央に位置するクシャトリヤへの急加速、アルフのメルキャリバーが放つ大口徑ビーム砲の支援があるとはいえ、サマナも危険な賭けであるとは解っているが。

「スタークの弾数が無い……」

クインマンサを小型化したとはいえ、まるで性能の劣化が見られないクシャトリヤというモビルスーツ、それでもその敵機を一撃で仕留められる計算ができるマグナムにしても。

「残り一発が限度と思うし……!!」

多目的ミサイル・コンテナを撃ち尽くしたスターク・ジェガンでは接近戦を挑むしかない、もはや遠距離からビーム・マグナムを放ち、外す事は許されない。

「レガンダムを初めとした味方をあてにしている訳ではないが、それでも!!」

一目見ただけで急出撃、慣れないモビルスーツへ乗らされたと思われる、想像できるニューガンダム達のパイロットは、ティターンズ・カラーで身を飾る彼らの機体にはクシャトリヤ相手は難しいと思う程にサマナ・フュリスはベテランであり、ブループラウスも性能的に難しい。

「そして、アルフさんは論外!!」

「酷い言われようだな、サマナ……」

「すいませんね、ピリピリしているんで!!」

「支援向きな性格だもんか、お前は」

「アルフさん、まあね!!」

確かに、このようにエースの成す突撃という戦い方、それはあまりサマナにとっては経験が薄いものだ。

ダウン!!

「サイコミュ・チャフ!!」

推進するサマナ機へ放たれるクシャトリヤからの、サイコミュ搭載機ではお馴染みのファンネルに対する策。

「ゴー!!」

それについては、連邦内の研究所で上は大規模から「小細工」に至るまでかなりの数の試作品が仕上がっている。その小細工の一つ、チャフ・グレネードをサマナは自機の腕部から放ちつつに。

ゴウ!!

大型モバイルスーツへと突き出されるビームサーベル、その刃はヒヤシンスこと。

「甘い、クシャトリヤ!!」

クシャトリヤの肩、その中から跳ね出てきたサブ・アームが振う小型ビーム刃をはね飛ばし。

バア、ア!!

そのままサイコミュ搭載タイプの大型敵機の、その手が保持する大出力サーベルと交差をし、周囲に激しく火花が散る。

「二騎討ち、ならばこのスタークで勝てる!!」

ゴウウ!!

フィリップのブルーブラウスが手持ち式の大型ビーム砲でサマナ機、スタークへ攻撃を仕掛けようとする他の「袖付き」機体を退かせ、彼サマナがその紅き機体を仕留められるようにと仕向けてくれるお膳立てに加え。

ジャアア……!!

「アルフさん出鱈目撃ちの、この状態でなんとか!!」

無茶苦茶な操縦を行っているアルフ・カムラの突撃。

「偶然を味方に付け!!」

「俺が一番、ブルーを上手く使いたかったんだ!!」

何やら奇声を周囲に放っている彼アルフの重装サブ・フライト・システム「メルキャリバー」が迫りくる姿に袖付き達が僅かに動揺を始める、特攻か何かだと誤解したのかもしれない。

「愛してるよ、ブルーデイスティニー、マイハニー!!」

「クシャトリヤ、今ここで僕のスターク・ジエガンが仕留める!!」

ボウ!!

至近スタークジェガンからのグレネード弾全弾発射、それに紅きクシャトリヤは機体から拡散ビームを放って迎撃を試みるが。

ドウ、グウ!!

その迎撃された爆発物を隠れて発射、いや除装されたスタークのミサイル基部がクシャトリヤの肩パーツ、その「ヒヤシンス」というコードネームの由来ともなっている四枚の肩部アーマーの内一基を大きく破損させる。

「これで、効いてる!!」

もう片方のミサイルコンテナ、それが相手の頭部へ激突した姿をその目に捉えたサマナ、彼はそのまま。

ジュウ、ア……

右手のサーベルをその相手の巨体へと突き付け、マグナムの充填を開始する。

ガア!!

赤のクシャトリヤがその太い脚部でスタークを蹴りつけ、その前蹴りの凄まじい衝撃がサマナ機を大きく揺らし。

「……グウ!!」

かなりの生命維持機能が備わっているリニア・シート、全天視界モニター・コクピット内のサマナを座席へと固定しているベルトが、骨にまで食い込むかのように彼の身を締め付ける。

「まだ、だ……!!」

が、それでもサマナはクシャトリヤの軀へと突き刺したビームサーベルからはスターク・ジェガンの腕を離さない。赤いモビルスーツ、準モビルアーマーの胴へ再び拡散メガビームの光が灯り始めた。

「ビィー、ム……」

バウ!!

その光に先駆けて放たれたクシャトリヤの機関砲。それがサマナ機スタークの胴を粉碎し、そして肝心のビームマグナムを持った腕が宙へと舞う。

「マグナム!!」

バウア!!

集束光ビームマグナムを持つその離された左腕、その腕が放たれた紅き光の余波により消滅しつつも、脱出ポットを兼ねたりニア・シート、大破したスターク・ジエガンから脱出したサマナは。

「勝った、か……?」

機体の大部分が消滅したクシャトリヤ、そのモビルスーツから脱出する人影、ノーマルスーツを纏った人間がサマナの座る脱出ポットへとその顔を向け。

——連邦め……!!——

「女、いや……?」

リニア・シート・ブロックの内部、そこから双眸でボヤリとした視線をその袖付きパイロットへ向けていたサマナは、クシャトリヤの残骸から放たれた声、いや。

「少女、だとも……?」

心の声である「思念」に、サマナは微かにその首を傾げる、その時。

リイ、ア……!!

「な、何だ?」

彼、いやこの宙域へいる皆へ向けて。

「アクシズに、光っている……!?!」

蒼い光が、小惑星アクシズの中央から重複輪のごときな波動、緑蒼光の大海嘯が押し寄せる。

「おい、カミーユ!!」

小惑星アクシズへと取りついているガブスレイ・タイプ、木星帰りの才覚者。パプテマス・シロッコが手製Zガンダム「ジオ・メシア」の派生機体である、昆虫に良く似たシルエットを持つその可変型を駆る。

「持ちこたえろ、すぐに!!」

ティターンズのパイロット「ジェリド・メサ」大尉の声が、カミーユ機へと放たれた。

「俺が、支援する!!」

「だめだ、アクシズから離れるなジェリド!!」

「お前だけではその新型Zガンダムには勝てない!!」

「わかっている、解っているけど!!」

ギイー、ア……!!

その敵機からのビーム、高出力の光条を間一髪でZガンダムに回避運動をさせる事が出来るカミーユ・ビダンのその機体操作は、すでに部分的にはかつての英雄「アムロ・レイ」のそれを超えている。

「カミーユ!!」

「来るな、フア!!」

だがしかし、そのZタイプを駆るパイロットの腕は並ではない、機体性能の差もあるが、何か。

「メタス改で、太刀打ちできる相手じゃあない!!」

圧迫、ニュータイププレッシャーとは違う何かが彼カミーユの反射神経を抑え込む、粘つく液体が彼の体内へと侵入しているような、忌まわしい感覚がカミーユの手先を鈍らせるのだ。

「それでも助ける、助けるわ!!」

「我を通すんじゃないよ、カミーユ小僧!!」

そのファ・ユイリイとジェリド・メサからの支援をカミーユが拒むのは、彼の感性に。

バウウ……!!

他の敵意ある機体達、Zタイプと同じ可変型不明敵機群が、燐光壁を切り裂きつつに浮上をしてきた仲間達を。

「迂闊に手を出すと逆にこのZⅢ達は力を、ニュータイプとは違うパワーを得る、だから!!」

ボウ……!!

カミーユ達の援軍にと駆けつけた味方モビルスーツ達を殲滅させてしまうだろうという予感もあり、どうにか自機Zガンダムが踏ん張り、戦いの流れを、ツキを引き寄せたいという気持ちであるのだ。

「俺だけで、俺がアイツを落とすんだ、ジェリド!!」

「駄目だ、カミーユ!!」

「ダメなんだ、お前達は支えてなきや!!」

ブオン!!

アンジェロ機、自機Zガンダムの三倍以上の出力と簡易計算の結果が表示されているコンソールへその目を向けながら、カミーユは大型ビーム砲の銃口を紫色のZガンダムへ向けつつも、激しくその首を振る。

「紫のZⅢ、それはお前達恋人を憎む!!」

「ハア!？」

「愛の鼓動を、否定する少年だ!!」

ज्याア……!!

そう叫びながら放たれたカミーユ機からのメガ・ビーム・ランチャーはその相手からの同系統の射撃兵器、より洗練されたビーム火器により相打たれ。

シャ……!!

「間一髪か、パープルZめ!!」

「カミーユ!!」

その集束ビームがZガンダムの脇を掠めた、それと同じ時に。

「カミーユ、支援するわ!!」

「来るな、ファ!!」

「あなたは私が!!」

想像、カミーユが予感していたよりも早くにZⅢの随伴モビルスーツ達が友軍ティターンズ部隊を蹴散らしてしまつたらしく、そのZプラス達はアンジェロ機と共にビーム砲をZガンダムへと撃ち放つ。

「守る!!」

「止めるお、ファ!!」

ドウ!!

ビームの連打が、カミーユ機を庇つたメタス、ファの機体へと集中したが。

「守ると言ったでしょ、カミーユ……」

「フア、何だよ……?」

まともを受ければモビルアーマー・クラスの機体でも木っ端微塵になると思われるビームによる集中火線、しかしこの現象は。

「バリアー、いや違うよな、フア……」

「わからないよ、カミーユ……」

半壊したパラス・アテネ、ティターンズ兵と共に支援へと駆けつけたレコア機からの援護射撃であるアンチ・ビーム攪乱膜ミサイル、それのお蔭という部分もあるにはあるが。

「何だ、あのメタスとやらは……?」

ボウ……

紅い球状の障壁、それがZガンダムとフア・ユイリイ機メタス改を包み込み。

「傷が無い、だと……!?!」

全てのビーム砲を遮断した光景、それはこのZⅢを駆る少年。

「僕の知らない機能でも、搭載されているとしても言うのか……?」

アンジェロ・ザウパー少年にとつても理解が出来ず、僅かな瞬間の間であるが、呆然としていた彼の脇を。

ゴウ、ウ……!!

「クウ……!!」

ユウ・フロンタルの白きサイコミュ搭載機がシドレによつて弾き跳ばされ、そのサイコ・ギラ・ドーガの各部から小さく火花が散る。

「シールド、やってクレル……!!」

「フ、フロンタル様!!」

不可思議な現象を起こしているカミーユ機達から気を離すのは危険であると解つてはいたが、それでも彼アンジェロは半ば本能的に自らの主が駆る機体にとZⅢ、その身を近づけようとする、しかし。

「加勢します!!」

「無用ダ、アンジェロ……」

「しかし!!」

「男同士の、タタカイに!!」

フウオ……

ややに乱暴な手つきでそのZⅢを払い除けるユウ・フロンタル、彼の言葉にアンジェロ少年はその息を飲み。

「口を、挟むナ!!」

「ハッ……」

「オレが、ドレ程に弱くてモ!!」

ボウ!!

「オレは、アムロ・レイの再来ダ!!」

「ハッ、フロンタル様!!」

「オレの可能性を信じてくれ、アンジェロ!!」

己を奮い立たせ、再びシドレ機へとそのビーム刃を向けるフロンタル。彼を信じると決めたアンジェロが駆る機体、ZⅢ（ズイードライ）は再びその顔をカミーユ達へと向ける、が。

「だがな、カミーユ・ビダン……」

腹心達、彼ら可変機部隊によりZガンダムは飽和攻撃を受けており、その彼を支援しようとしているメタス、そして少数のエウーゴ・テイターズ部隊も「袖哭き」達により押されている姿光景を。

ク、クウ……

確認したアンジェロ少年が漏らす忍んだ笑いと共に彼の面持ち、秀麗なそれが「醜く」歪む。

「終わりのようだな、偽りのアムロ・レイの再来……」

ガウウ……!!

その彼アンジェロの言葉の通り、バリアーを展開、ニュータイプ研究者が命名したいわゆる「サイコ・フィールド」展開により疲弊したカミーユ達は可変機ハンブラビからのビーム砲によって、その機体を大きく弾き跳ばされる。

「くそお!!」

ガア!!

赤く燃えるアクシズから突き出る突起、それに掴まったカミーユ機の出力が。

ポウ、トウウ……

滴り落ちる黒き泥を浴びて、大きく乱下降を始める。

「あの、赤暗き光に飛び込んではいけない!!」

カミーユの頭上へ渦巻く暗黒の渦は、シャア・アズナブルの怨念、そのような個人が作り出せる品物ではない、アクシズを揺らし、誘導させている憎しみの光は。

「あれは、総意なんだ!!」

本質を正しく言い当てるのはニュータイプの特権とも言えるが、だからといってその洞察が目前の現実に対して力を発揮することはない。

バジア……!!

「う、うわ?!」

Zガンダムを保持していた、アクシズ表面にと突き出ていた突起、それがカミーユ機を持ちこたえられず、根元から砕ける。

「くそお!!」

そのまま自機がアクシズの「奥」へと、暗黒の渦の中に流されていくのを必死に阻止しようと、カミーユはZのスラスタ―推進力を全開とさせるが。

バアン!!

渦巻くミノフスキーの波動によりZガンダムがアクシズの岩肌へと激突する。同時に機体背部メイン・ブースタ―から火が噴き出し、それと連動してか脚部のスラスタ―出力が完全なゼロの数字をカミーユの目前、コンソールへと浮かび上がらせ、機能を停止させてしまう。

「だめか……!!」

ミノフスキーの波がカミーユの機体を押し流し、アクシズ上方へと押し流す姿を見てメタス改、半壊したその機体へと乗る女性パイロットの放つ悲鳴が、絶叫とも言えるそれが動力の停止したZガンダムのコクピット内へと響き渡った。

「すまない、ファ……」

ゴウウ!!

さらにアクシズ表面へ打ち付けられ、大きくバウンドした自機の中で、カミーユは。

「お前の誕生日、明日なのに……」

恋人か、と人に言われては否定するが、それでも大切な人へと向けて。

「プレゼント、買ってあるのに……」

闇へと呑み込まれていく、そのZガンダムの手を僅かに伸ばす。

ガア……!!

「何だ……!?!」

「掴まえたぞ!!」

僅かに、そのZガンダムの手を包み込む蒼き光。

「掴まえたぞ、カミーユ!!」

ガブスレイⅡ、その機体の脚を女性の乗る同型機に支えて貰いながら、アクシズを支えていたジェリド・メサがそのZガンダムの手を掴み、強く。

「カミーユウ!!」

「ジェリド、ジェリドか!?!」

「貴様は!!」

グウウ!!

強く、カミーユの機体はそのティターンズ兵によって闇の世界から引きずり戻させる。

「俺ノオ……!?!」

ブオウ、ウ……!!

その時、恐らくはこのアクシズを巡る戦いの渦中で吹き荒れていた光、蒼い光が最も強く集束をし、昏き力を押し始める程に。

「助かる、ジェリド!!」

周辺宙域を蒼き燐が舞い、その光が運ぶ人々の心の声により、カミーユにはその後ジェリド・メサが放った言葉を聞き取る事が出来ない。

「ティターンズは、地球は!!」

恋人達、ジェリドとマウアーが駆るガブスレイⅡが淡く輝きを放ち始め。

「俺達の故郷だ!!」

「そうだ、ジェリド!!」

「俺はこの揺りかごで育ち、学校へ通い、生きてきた!!」

「カミーユ・ビダン、スペースノイドである俺も!!」

そして、その拡散を始めた蒼き宇宙へ。

「蒼き揺りかごでは、心が安らぐ物だったんだ!!」

「それが地球だ、カミーユ!!」

「そうだよ、ジェリド!!」

カミーユも、彼の大切な人が乗る機体もその壊れかけた機体を必死に動かし、光を纏いながら宇宙の魂へと加わり。

「人の、魂が還るべき聖地だ!!」

「おうともよ、カミーユ!!」

「どんなに、宇宙人だ地球人だとの区別があつたとしても、母なる大地は皆に等しい!!」

「スペースノイドが地球に住む権利は認めないが、それが正論というもののかもな!!」

「平等を説いちゃ、悪いかよジェリド!?!」

「気にいらねえが、恥は忍ぶさ!!」

ボウウ……!!

凄まじい勢いで拡がる蒼い宇宙、もしこの場にニムバス・シユターゼンなり。

「そして!!」

マリオン・ウエルチなり。

「テイターズは力だ!!」

そして、ユウ・カジマがいたならば、彼らはその唇から、一つの言葉を合わせて放つであろう。

——宇宙には、ココロが満ちているの——
ピア、ジイ……

光が、アクシズ外周へと結晶化を始める。

「アクシズの赤黒き光が……う？」

クシャトリヤからの被弾もあるが、何か突然ジ・オの機体制御が上手くいかなくなった事、戦い場では危険なサインであるが。

「押さえ込まれた……」

「綺麗な、光……」

何か、カツとサラには危機感を感じさせてくれるほど、その蒼の光で出来た羽根が織り成している。

「お花……」

「コスモス、雑草まがいの花かな？」

「語彙力がないわ、カツ……」

花、アクシズを包むように咲き乱れる花々が、その花びらの結晶を散らす。

「ウウ、ウ……」

損傷大の緑色のクシャトリヤ、すぐ近くに浮かんでいるその巨大機のkokopittoから女、少女がすすり泣く声がかつ達の耳を、静かに打ち。

「だから、アタシには無いと……」

シユウ……

その機体は、淡き蒼の軌跡を残しつつ、戦域から急速離脱を行った。

「どうしよう、カツ？」

「止めよう、サラ……」

「そう、ね……」

どのみち、蒼き光により火器管制が強制停止させられたモバイルスーツでは、止められた人殺しの兵器ではセンソウは出来ない。

「テイターズは力だ!!」

「おう、ジェリド!!」

「力があつてこそ!!」

光が、宇宙へと舞う蒼き光がカミーユ機達からの紅燐光によりさらなる剛性を与えられ、なおも強く輝きを増す。

「全てを制する、制止させる事が出来る!!」

「そうだよジェリド、アクシズも人の悲しみも!!」

「全てを!!」

ザア、ン!!

蒼い宇宙が概念的に結晶化し、その瞬時の後にその蒼光が白き羽根となり。

「守る事が、出来る!!」

光の羽根が、周辺宙域全てに展開するモビルスーツ達を包み込む。

「ZⅢのビームが、出ない……!?!」

その無尽光の核となつているZガンダム達を狙撃しようとしたアンジエロ機の銃口には光が宿らない。ZⅢの火器管制コンデイション自体には異常は見られない事に彼はその首を傾げながらも。

「そして、何だ……?」

何か、身体から徐々に力が抜けていく事を感じ、恐怖にも似た感情を抱きながらも。

「フロンタル様……」

グウラ……

「助けて下さい、フロンタル様……」

それでも気力を振り起こし、自らの主の機体を蒼い宇宙の中から探しあてようとした。

「マハル・コロニーにも」

「何だ、テロリスト?」

「あの、コスモスは咲いていた……」

「コスモス、COS・MOSか……」

直前にこの目の前の連邦兵により破壊されたモビルスーツから、負傷した自身の身体を引きずり出されて介抱をされている女性パイロット、その彼女の声に。

「俺の無くした、オーストラリアの家にも植えていたな」

「へエ……」

「家族共々、無くなった家の庭にな」

ポウ……

ミノフスキー粒子の暴風雨が吹き荒れるなかでも、それでもアクションに光を灯し続ける「花」達、紅く蒼く白く黒く咲き乱れる宇宙の心。

「懐かしいな、お袋達……」

「私も食べれなくなつて、捨てたあの子を思い出す……」

「そうか、テロリスト……」

リイ、シヤア……

そして、宇宙は深く昏く赤黒き花も。

「どうせ、お前さんは捕虜の身となるんだ」

「そうだろうね、全く……」

「少し、休みな……」

「そう、させてもらおう……」

アーティファクトフラワー、造花も虚飾も偽善も、偽りの花も宇宙の心は否定しない。たとえそれが独善の色彩を持つ単一（ユニ）の存在であったとしてもだ。

——宇宙には、心が満ちているの——

第78話 所詮なメビウスにもラプラスは顕る（後編）

バ、シイ……!!

少年と青年との境目とも言える、金髪の男の拳が、少女を「食い物」にしようとした男の頬を強く打った。

「へ、へへ……」

「失せろ」

「チクショウ……!!」

頬を打たれた男の髪は何日も洗っていないせいか、埃と油にまみれ元の蒼い地毛の色もくすんでみえる。

チャリ……

何か金の髪をした青年はその浮浪者に何か感じる物があつたのかもしれない、クレジツトステイックを投げ渡し、早く立ち去るように顎をしゃくった。

「大丈夫か？」

「……」

その額に薄く傷のある青年の声にも、襲われていた少女はフルフルと怯えたように首を振るのみである。

「……」

「フラナガン、たしかこういつた人間にニュータイプの素質があると持論を述べていたな……」

「ニュータイプ……？」

「ああ、いや……」

さすがのような少女の瞳に、青年は軽く自身の髪をかきあげて軽くその眉間をしかめてみせた。

——俺は今——

「お願い……」

——あこぎなマネをしようとしている——

目の前の褐色の肌をした少女、彼女をニュータイプ、その実験動

物にさせようとしている自分に嫌悪感をかんじながらも、それでも青年は。

「私をこの地獄から、助けて……」

青年の苦悩は少女にはわからない。しかし、その彼女の言葉で青年の心は決まった様子である。

「一緒に」

額に薄く傷のある少年、彼が差し伸べる右手、開かれしグローブから。

「来るかい……う？」

淡い光が、少女へとラプラスを与えた。

「ここまでだな」

「そうですね、シヤア？」

「あのエグザムとやらを搭載している機体に、ノイエ・ローテのスピードが追い付かん」

そうはいうもの、シヤア・アズナブルがアナベル・ガトー、ノイエ・ローテのサブ・パイロットへ向けて放つ言葉にはどこか余裕のようなものが感じられる。

「だが、この基幹ユニットである」

大剣を振るう相手、Gマリオンの機体性能がとつくに基本値を越え、オーバーヒート寸前なのを見通してか、はたまたは。

「レーテ・ドーガⅡことザ・ナツクならば」

「エネルギー残量に問題が有りますな、その基幹機体には」

「短時間で、ケリをつけるさ」

「そうですね」

グウ……

「おや」

「どうしました、シヤア？」

「ザ・ナツクのロックが外れん」

「何を遊んでいるのやら……」

「いや、本当だ」

ブオン……

鉄仮面の下の地肌に軽く汗をかいているシヤアの目前へ、燃え盛る
火焰剣が一瞬よぎり、尚のことシヤアを慌てさせる。

「モニターにはロック解除と出ているのだ」

「マリイ……!!」

ズウン……!!

ミノフスキーの渦がジェガン、シドレ機を廻り始めると同時に、そ
の刃ビーム・サーベルを交えている男の機体。

「オン!!」

「あま、イ……!!」

サイコ・ギラドーガ、純白のユウ・フロンタル機も、そのシドレか
ら突き出されるサーベルを受け流しながら。

ドウ、ク……

その機体関節から、赤く黒い呪詛のタールを噴き出させる。

「しかし、ソレニしても……!!」

「ハアア……!!」

ゴア……

シドレ機の左手、紅と蒼の燐光に満ちた宙へと差し出されたそのモ
ビルスーツの腕へと。

「アアア!!」

「腕をアゲたな、シールド……」

「そう言うあなた、ユウ・フロンタルは!!」

光、蒼きマリオンの相である光がそのジェガンの腕へと廻り込ん
で。

バアウ……!!

緑蒼へと輝く、羽がその腕から乱舞する。

「腕が落ちた……!!」

「限界ダヨ、シールドル……」

トウ……

光の羽根、それによって自機のファンネルが全て攪乱されたユウ・フロンタルは、その異形の仮面。

「シユレディンガー・コロニーでノ……」

怒りの相を表している、般若を模したその能面をなぞりつつに。

「後遺症でのナ!!」

ドウウ……

呪詛、それを具現化させた赤黒き光をその白いサイコギラドローガへと貼り付かせ、ビームサーベルの先端をシドレ機へと振り向ける。

「シールドル・マリオス!!」

「後遺症、そう貴方フロンタルも!!」

ザア、ン!!

その刃、遅い動き刺突を軽々とかわすシドレの口から、哀しみを含んだ声が吹き出されると共に、そのジェガン・タイプの。

「カジマ、そうユウ・カジマ大佐も!!」

「アノ男、ユウ・カジマとヤラの!!」

サーベル基部を投げ放った新鋭量産機ジェガンの右手が、蒼き光を纏ったままそのフロンタル機へと向けて突き出された。

「ドコに、お前は惹かれたノダ!?!」

「貴方の、薄まった部分に!!」

「彼も、オレと同類だと思いうガナ!!」

「それは!!」

ガア……!!

「貴方の言う通りだ、フロンタル!!」

光の腕、それに呼応するかのようになたれたフロンタル機の右手。その二つの腕が合わさり、絡まり合い。

「ダト、したらナゼ!?!」

「あの人には、何も無い!!」

「納得が難シイナ、その答えだけデハ!!」

「故に、それゆえに!!」

ボウ……

その二対の腕を通して、緑蒼と朱黒の心が混じった二つの機体、ジエガンとギラドーガは。

「人は、あのユウ・カジマに心を預けられる!!」

「ナルホド、ナ……!!」

「心の、匣（ハコ）だ!!」

「ダケどな、シールド……」

フウ……

暗き緑色へとその身を染めながら、燐光の波によってアクシズの外面へ。

「何もナイ、とコト事は……」

岩肌へと、自機達の身体を押し付けられ、今この場を支配している蒼き光、緑蒼の宇宙により。

「オレのようにナル、可能性モ……」

「ああ、解っている」

「ラプラスの悪魔に、魅入られル可能性を」

「わかってるさ、フロントタル……」

シドレのジエガンに握られたギラ・ドーガ、昏き蒼の光に包まれたそのユウ・フロントタルのモビルスーツのそれは。

「良く、案じてオケ……」

「だけどね、ユウ・フロントタル」

グウ……

宇宙の心により弾かれようとしているサイコ・ギラ・ドーガのその手が、強くジエガンの腕を。

「私は思う」

「何をダ、シールド？」

「貴方は、フロントタル」

シドレ機ジエガンの腕を強く、強く握り締め。

「一度、ユウ・カジマに会うべきだと」

「オレは彼の人生、ソレを妬んでイル」

「うん……」

「解っているダロウ、シールドル……」

一方的な蒼き光により朱黒の霧、重いタールの海へと流されようとしている自機を、しばし支える。

「ソシテ、そのオレの宇宙の心を頼るヒト達がいるんだ……」

「だとしたら、やはり貴方は」

近くでカミーユ機Zガンダム、そして彼の仲間達が、この「敵」を助けようとしている自分の行いを怪訝そうに眺めている事に気は付いているが。

「ユウ・カジマ大佐の、曇った鏡合わせ」

「ン……」

「必ず、ユウ・カジマに会うべきだ」

それでも、彼らが即座にこのユウ・フロンタル機を攻撃しないという事に、シドレは甘えさせてもらおう。

「考えて、オコウ……」

「さようなら、フロンタル」

フウウ……

蒼き光が、マリオンの相の心がそのギラ・ドーガを排除し始めた。

「マリア・オン……」

「その名はね、フロンタル」

「言うナヨ、シールドル……」

グウ……

そのシドレ機の腕、右腕もろとも。

「俺には神聖ナル、コトバなんだ……」

「可能性という、悪魔の言葉だ」

「フン……」

ゴアフ!!

そのままに、アクシズを圧す黒き闇の世界にと除外させられた。

男はひたすら強者、ノイエ・ローテにと杭を打つ。

その手が血に塗れようとも。

かつて、彼に感動を与えた宇宙が、アクシズへと咲いても。

——あれが、ユウが見たつていう蒼い宇宙とやらかい、アルフの旦那？——

——さあな、フィリップ——

——この小花畑が、か？——

——サイコ・シャード、天然のサイコ・フレームだよ、フィリップよ——

仲間達が。

——僕にも宇宙の心が見えるんですね、ユウさん——

——さあ、早くメルキヤリバーに乗り込め、サマナ——

——ハイハイ、アルフさん——
友が。

——見世物としては悪くないな、この宇宙の心とやらも——

——ある意味、ニュータイプ能力とやらの視覚化かもしれん、シロッコ——

——マリオン・システムとやらの拡大か、ジャミトフよ——

——遠くの知り合いが。

——花見酒つてのも、悪くはねえ——

——それだけの怪我をおつて、よく言えるわね、ティターンズの野獣さん——

——言つてくれるなよ、ジャミトフの娘、確かブルーとか言つたっか——

——良き戦友が。

——父上への手向けかもしれないな、あの蒼きラプラスの花は——
——僕は始めた見ましたね、ミネバ・ザビ様——

——よく見ておくのだな、丁稚のバナージ——
実と眺めている宇宙の花、コスモスの光に可能性を身に付けながら
も。

ゴウ!!

——ニュータイプは、強者はこの世に存在してはなら、ない!!——
何度も、幾度も、男は蒼き宇宙を忘れ、強者を裁き続ける。

——シャア・アズナブル!!——

ゴウウ!!

——お前は、俺の人生の否定だ!!——

「あれが、ええと……」

「宇宙には、心が満ちているの」

「アバズレ寸前が、言ってくれる……」

「良いじゃない、ニムバス」

アクシズを包み込む「コスモス」の、蒼き光は遠く離れたこのムサ
カ周辺からも。

「たまには、昔のマリオン・ウエルチに戻っても」

「そうだな、ローベリア・シャル・パゾム」

この二人には確認できる、感性の問題だ。

「私が、十年前にあの光を」

ニムバス・シュターゼン、蒼き宇宙の心に無知、そう無知であった
がゆえに、その光を生きる指針として認める事が出来た、元外道の騎
士。

「見たときは、何も理解が出来なかった」

「それでも、私は貴方とユウ・カジマには見せられたわ、ニムバス」

「何故、観せたのだ……?」

「愚問ね、ニムバス」

スウ……

紅きバギ・ドーガ、マリオン・ウエルチ機のその腕がニムバスが乗るモバイルスーツの腕を絡めとる。

「今の、貴方達の状態が全てを顕している」

「私はいいいのだ、その理屈ならば……」

「うん……」

それでも、この蒼い宇宙を見た所で戦いが終わると思うほど彼らは夢を抱けない。

「あたし達も、オトナになった……」

「だから、私達はいいいのだ」

そのニムバスが微かに苛立ったような声を放つ理由、それはマリオンことローベリアにもよく解っている。

「おそらく、ユウ・カジマは」

この「現実」に近い宙域世界、一時的な桃源郷と化したアクシズより離れた俗世では。

「あの、蒼い宇宙が見えていない……」

「見えていないならいい、それだけならばいいのよ、ニムバス」

「わかっている、解っているけど……!!」

「落ち着いて、ニムバス」

すでに四十の歳であるニムバス・シユターゼンがここまで子供じみた声を出す理由、それは。

「ならば、私達エグザムの網に引っ掛かった者が」

深み、赤黒き宇宙へと沈み込みつつあるユウ・カジマが、いまの彼ニムバスとは比較にならないほど。

「ユウに、蒼い宇宙を思い出させましょう……」

「ああ、マリオン……」

彼らの目に映り始めたノイエ・ローテ、そのシャア・アズナブル専用モバイルアーマーを屠っている彼が子供の、赤子が放つ原初の苦しみに満ちた叫び声、それを上げ続けているからに他ならない。

「ユウ……」

ジャ……

漆黒のレーテ・ドーガ、極めてシンプルながらもその基本性能、及び兵装は何者かに奪取された新鋭機と同等と言われているそのモビルスーツが抱える剣が。

「お前を解放してやる……」

無刃剣「クルタナ」こと聖剣マリオンが、淡く蒼き宇宙を刀身へと帯び始めた。

第79話 ラプラスの悪魔

「さっきの優しいウェーブ、アムロはどう思うの？」

「思うも何も、ベルトーチカ」

アクシズ方面から押し寄せた、何か蒼い輝きの事は無論にアムロ・レイも感じていたが。

「今の俺には、邪魔かもしれない」

「冷たいのね、アムロ……」

「ただ、それでも」

その自らの恋人、ベルトーチカ・イルマの腹部から伝わってきた鼓動、その蒼い宇宙の心に呼応したかのような声に対しては、彼も。

「産まれてくる子の、診断結果の手間が省けたよ、ベルトーチカ」

「嫌らしい言い方、アムロ……」

「すいませんね、セイラさん……」

娘の声を受けては、彼アムロも父親となる運命を自覚させてくれる。

「女の子、か……」

「そうなの、アムロ？」

「多分ね、ベルトーチカ」

蒼き光に、我が子の声。それらは常の状態であればアムロ・レイという男にとって心安らぐ物であったのは間違いないが。

「今は、俺は自分の心を暖めるのは危険なんだ……」

少なくとも目前のノイエ・ローテと、そして。

「憎しみの光、そしてユウ・カジマを抑えない限りには」

ニュータイプを裁くシステム、エグザムについてはアムロも断片的ながら知っている。そしてそのシステムに携わったユウ・カジマという男についても、しかし。

「何故変わった、ユウ・カジマ……」

エグザムは世界を滅ぼす可能性を秘めている、ニュータイプに対抗すべき為のシステムである。数年間、連邦の手によって軟禁状態であったアムロ・レイにとっては、その理屈のソフトな形としての待遇

を長年受けていたとも言えるのだが。

「どこをどう見ても、彼のあの戦い方は私情のそれで、ニュータイプを滅ぼすとは」

目前のエグザムも連邦のやり口も、相手がニュータイプだから、であるという判断基準で行った物ではないとアムロは思う。

「新人類ニュータイプを滅ぼす使命感、それは違うな」

別に相手がニュータイプではなくても、強くて変なヤツが目の前に現れれば同じ対応をするだろうというのがアムロ・レイの私見であり、それに照らし合わせてみれば、ユウ・カジマとエグザムの行いなどは。

「違うな、少し強くて変わり者のミュータントの抑制が、エグザムとやらの本質だ」

そして、それらの恐怖心から来る行動には崇高な十字軍の志など無いと彼アムロには感じる。

「あの、今のユウ・カジマにはニュータイプを意識してエグザムを使っているようには見えないからな……」

「あの変なアクシズからの光、その影響を全く受けていないように感じます、アムロさん」

「そうか、ハサウエイ君?」

「心を穏やかにさせる、その蒼い光は今のユウって人には」

宇宙の心、あの蒼き光が正しい人の在り方だと断言できる程、アムロ・レイはすでに若くはない、しかしそれでも。

「あのパイロットさんには、何も感じないのでしょね」

「偉そうだな、ハサウエイ君は」

「すみません、アムロさん……」

「いや、別に構わないがね」

今の、あのユウ・カジマの人としての在り方がどうしても受け入れられないのが、ニュータイプの是非に関わらずアムロ・レイという一人の人間なのだろう。

「ソーラ・システムⅢ、調整が完了しました」

「よし……」

ティターンズ旗艦、今では大規模破壊兵器「ソーラ・システムⅢ」の総管制ルームとしての役割を与えられているドゴス・ギア一番艦の艦長席で。

ズウ……

スパゲティ・ヌードルのチューブを啜りながら、ティターンズの総司令バスク・オムはその面を険しくしながら。

「これで、アクシズを吹き飛ばせる」

「将人レベルからの、指示待ちですか？」

「フム……」

僅かに、何か胸騒ぎがする心を押さえながら、黙ってミートソース・スパゲティをすすする。

「不愉快だよ、連邦の指示を待つのは」

「ではやはり、独断で……」

「ティターンズの力、存在を誇示しなければならん」

「ハア……」

別にこの女性オペレーターにしてみれば彼、バスク・オムの気持ちは解らないでもないが。

「デラース紛争の時と、同じ事をするおつもりで？」

「……」

昔、同じ釜の飯を食べた仲であるパイロットを、その彼の乗機であったモビルアーマー・ガンダムごと吹き飛ばされそうにされたバスク司令へ良い感情などは、持つ気になれない。

「……」

「……あれ？」

てつきりバスク・オム、彼が脇へ携えている細竹の鞭で叩かれる事を覚悟の上での発言をした彼女であったが。

「バスク、艦長？」

「ウムウ……」

何か、スパゲティを食べる手を止めしきりにしきりにその厳つい顔へと掛けたゴーグルをさすっている彼へ向けて、彼女だけではなく。

「何か、目がうずく……」

「バスク中将？」

「スペースノイドどもの、薄汚い匂いにあてられたか……？」

他のドゴス・ギアのブリッジ・クルー達も、いつになくその身体を強張らせているバスクへと、不審そうな目を向けていた。

「人の運命が思い通りにいくならば、誰も死にはしない……」

コウ……

そのアムロ・レイの言葉に、ハヤト・コバヤシがため息をつきながらその口から。

「カツ……」

また、息子の名が疾る。

「先程のララアさんの言葉、僕は信じて良いと思います、ハヤトさん」
「だけどな、ハサウエイ君……」

「あの女教祖さんの、言う通りだと思いますが？」

「ハア……」

旧ホワイトベースの戦闘要員達の輪の中に、その一年戦争時の新鋭艦艦長であったブライト・ノアの息子が入る事、最初はそれを喜んだハヤトであったが。

「あの艦長父親とは違い、うちのカツに似た性格だよ、全く……」

「良い人生を送れそうな子です、ハヤトさん」

「他人事だと思いませんか、マザー・ララア……」

そのジトとしたハヤト・コバヤシの視線にもマザー・ララア、新興

宗教の教祖である彼女は食わぬ顔をしながら。

「はい、ララア」

「無責任に、安心だ安心だなどと言う、ハサウエイ君の肩を持たないで下さいよ……」

「心配性ね、ハヤト」

教団スポンサーの一人である女実業家から受け取ったジュースを美味しそうに飲みながら、ノンビリとした顔をアムロ機「レ―GP」へと向けている。

「いや、マザー・ララアの言う通りだよ、ハヤト」

「何が言う通りなんだ、アムロ？」

「ここであれこれ心配しても、仕方が無い」

「能天気だな、お前とそして」

フウ……

「ララア教祖さんは」

「俺はララアほど、頭へ花は咲いていない……」

鼻歌、その涼やかで心地好い音色を唇から跳ね出させているララア・スンの「姿」はアムロにとっても意外ではあるのだが。

「俺はララアの事を、何も知らなかったんだ」

「皮肉な話ねえ、アムロ」

「時間にして、一月も顔を見ていない彼女ララアのな、ベルトーチカ」

「三、四回だけ顔が出ただけでしょうに、全く……」

連邦にもネオ・ジオンへも顔が利くとの触れ込みであちらこちらへ走り回っていたらしいマザー・ララア、彼女の事は実際の所。

「それで、よく初恋だと言えたもんね、アムロ？」

「自分でもわからないよ、本当に」

「何か、インパクトみたいな物があったのかしら？」

「さあ……」

どうもアムロ・レイとシャア・アズナブル、彼ら二人の男だけが誤解を拡大させ、神聖視している模様をブライト達から告げられた時にも、アムロはにわかには信じられなかった。

「昔のシャアならば、彼女の事について良く知っているとと思うけどな」

「知らないわ、大佐は」

「そうか、ララア？」

ドク、ドウク……

ムラサメ・コーヒーティラミスのチューブを口へと付け、万力のごとくにその中身を絞り出しているらしいララア・スンの唇から漏れだす。

「あの人、結構先入観が強いから」

「そうかな？」

「そうよ」

まあ、確かに五感の内、視力のみを失ったが為にかえってララアの本質を見失った彼には相応しい言葉かもしれない。

「考えを、なかなか変えない人」

その彼女の言葉に対し、一つ後ろの席に座っている女性の、その深い。

「あの、セイラ・マスさん？」

「何よ、ハサウエイ君？」

頷きというには余りにも大きく、身を九〇度近くまで歪めたその姿は。

「お腹でも痛いんですか？」

「いいえ、違うわ」

「では……？」

「同意の頷きもここまでくれば、可笑しい姿勢にもなろうという物よ……」

まさしく、謝罪のラプラスが成す昇華型「土下座」の極みである。

「出ない、このティラミス出ない……」

「俺が出てやろうか、ララア？」

「パイロットが席を外して、どうするつもり？」

「腹が減ったし、疲れたし」

その、どこか「アムロ・レイを励ます会」のメンバーが造り出した空気に充てられてしまったのだろうか。

「中年、ユウ・カジマのパワーがシャアを押ししたか、ケーラ？」

「どうかね?」

「圧倒的じゃないか、中年達は」

もはや「切り札」の事を除外すれば、ノイエ・ローテには挽回のチャンスすら無いと言える程にシヤアは追い詰められている。

「ナイジェル、ノイエ・ローテのあんな所にランスが刺さっています」「ああ刺さっています、ケーラ」

成り行きで座礁したアムロ機、そしてホワイトベース・メンバーの護衛をする羽目となってしまったナイジェル達の目前で、急激に戦局が変わっている事に。

「落武者みたい、兄さん」

「決め手はハマーン・カーンの頭投げだったと思う、セイラさん」

何か、納得がいかない様子でその宙域の面子がノイエ・ローテ対「その他大勢」の戦いの行く先を見守っている。

「頭投げ、さすが柔道家ね」

「俺はそんな技、習ったことはないけどな」

先程からハヤトが注意深く見ていた結果では、ハマーン機クインマンサがその胴体部分、ノイエ・ローテにより溶解させられた脚部を除く全身を投げ放ち。

「トドメは、シヤアを愛した女の見投げってね……」

質量兵器とさせた戦法が、勝利への布石だったとカイ・シデンも判

断している。

「マザー・ララア、昔の愛人として」

「最近の子は、大胆ねえ……」

「何か、一言コメントを」

「このテイラミス、美味しい」

「チツ……」

恐らくこのララア・スンという女性は。

「ワイドショーにも、出せやしない……」

世慣れているのだとは、この無遠慮なマス・ゴミニケーターたるカイ・シデンの嗅覚にも勘が灯る、以前に。

——ララア・スンってのは、クルスト博士が欲しがっていた被験体、

ニュータイプだったが――

――出来なかったの、技師アルフ・カムラさん？――

――クルスト博士はある少女にベツタリで、そのララアという子には愛想笑いで近づいたらしいが――

最近、今現在にシヤアと戦っているユウ・カジマという軍人、彼の名が売れている事を受けて。

――利用、それだけを考える人間を一目見ただけで、彼女ララア・スンは解ってしまうらしい――

――ニュータイプ、ですからね――

――嫌われたと、クルスト博士は自嘲していたよ――

ゴウ……!!

ランス、長槍を妖花ノイエ・ローテへと突き刺した茶色塗装のギラドーガと二人がかりでその槍を赤き巨大モビルアーマーに。

「チャンス……!!」

シヤ、カシヤ!!

カメラ・シヤッターを切り続けるカイの視線の先で、僚機達と一緒にそのランスを機体の拳で叩き、差し込み、傷口を拡げて、仲間と共に罵りの「たけび」を上げながらシヤア・アズナブル機へとさらに強く、さらに深くへと押し込み。

グ、ジャア……

返り血にまみれながらも、対空砲火を受けながらも、なおも憎しみの杭を打ち続ける、なおもその手を緩めないGマリオン、蒼いジエダ・タイプのそのパイロット。

「アムロ、に勝った男か……」

ユウ・カジマ、彼の専属モビルスーツ技師「アルフ・カムラ」へ手土産を包み、極秘インタビューに伺った時の記憶が、カイ・シデンの脳裏へとよぎる。

「まだだ、まだ終わらんよ……」

「ああ、ああララア……」

そのちよこぎいな二機の木っ端を振り払ったノイエ・ローテへ更に倍の雑魚達を取り付き、完全に墓穴を掘ってしまったているシヤア・ア

ズナブルのそのお得意の台詞口真似がララアの唇から放たれたのを聴き、アムロは軽く息を吐いてみせた。

「そう言うだろうな、アイツは……」

「だけど、大佐はもう終わり」

「死ぬのか、シヤアは……？」

「バカ……」

もちろん、その脱出しようとしているシヤアを攻め立てるモバイルスーツ達の先頭へ付くのは、両肩を紅く染めたGマリオン、ユウ・カジマ。

「バカね、アムロ……」

「なるほど、そうか」

さすがにアムロとしても、シヤアが死ぬと予見している中で初恋の相手、ララアがアイスクリームをチューブからすすっているとはいえない、故にアムロ・レイは。

「そうか、シヤアは死なないのか」

彼はララアを信じ、そしてシヤアの生を確信できる。

グウ……

ついに機体の動きを止めたノイエ・ローテへ、そのモバイルアーマーに突き刺さっている「杭」へさらに力を込め、追撃を加えようとしているユウ・カジマを何やら頭だけとなったクイン・マンサ、ハマーン機が止めようとしている姿が、ナイジェル達の目にも映り込む。

「落武シヤアか、ケーラ？」

「つまらないな、ナイジェル」

「他に、何もしようが無い……」

ナイジェル達のモバイルスーツ、五機程度ではアムロ・レイ達の護衛としては心許ないが、他に呼び寄せる者達も周囲にはいないと、安心が無いと先程まで懸念していたのが彼らには。

「バカバカしい……」

そのナイジェル青年の感想、それは少し核弾頭なり大規模破壊兵器であるコロニー・レーザーで消え去るモバイルスーツ達、すなわち「人」を見る時のやるせなく、虚無的なその気持ちに似ているかもしれない

い。

ドウウ……

そのハマーンを退け、なおもその拳で活動不能となったノイエ・ローテへ殴りかかるユウ・カジマの姿に何か不気味な、狂気のような物を感じ取ったのか。

「……」

他と比較して好戦的と言えるリョウ・ルーツ青年、彼の乗るマスプロ・ダブルゼータも大佐ユウのGマリオンを抑え始める姿、それを無言でアムロ達は。

「キヤスバル兄さん……」

「心を静めて、セイラ・マス」

「ララア、あのユウ・カジマという人は何なの……?」

「依る袖無き、世の中から袖にされた人だけが放てる」

それほどお互いの心が触れ合っている兄妹ではないとはいえ、血を分けた実の兄が一方的な暴力を受けている姿へ無関心でいられるほど、セイラ・マスは人非人ではない。

「憎しの心です、セイラ・マスさん」

「マザー・ララア……」

「もしかしたら、私の私見は」

ドウフ……

仲間であるはずのキュベレイ、黒の塗装を施されたそれが、強くユウ・カジマを止めようとしたその黒きキュベレイがGマリオンの手首から投げ出されたチェーンにより、機体へ孔を空けられた。

「間違っていたかも、しれません……」

「弱気になつてはだめだ、ララア」

「このままでは、大佐は」

バウア……

光が、黒き憎しみに満ちた赤い翼がGマリオンから形成される姿に。

「ツウ……!!」

動揺し、恐怖をしているノイエ・ローテ狩りの部隊からの思念がア

ムロ・レイ達、旧ホワイトベースのメンバーの頭を強く打った。

「大佐、シヤアは」

「君の言葉を最後まで信じたい、そう思っていたが……」

「可能性の悪魔に殺されるかもしれないわ、アムロ」

「悪魔……」

フオウ……!!

シヤア・アズナブルの光、悪魔の光を奪い取ったGマリオン。そのミノフスキー粒子の疑似結晶、あるいはサイコ・フィールドと定義する事が出来る昏き羽根が。

——NT—C・STANDBY——

ユウ・カジマのそれがノイエ・ローテを、そして同じ志を持った仲間達を切り裂くと同時に響き渡る機械音声に混じり。

——バカナ、エグザム・システムは解除されたはずだ——

驚愕の叫びを上げる年老いた男の声、それがこの全宇宙域に展開している命ある者達の耳へと木霊する。

「悪魔とは何だ、ララア？」

「ソロモンの方陣、それへ生け贄にと捧げられた魔物」

もはやノイエ・ローテどころの話ではない。そのまま焰を噴く剣をシヤアへのトドメとして突き出したGマリオンへ向けて。

ダウ!!

クイン・マンサの頭が追突し、間一髪でそのユウ・カジマの行いを阻止する。

「小さな善意に包まれた大きな悪意の血をすすり、集束召喚された」

「ドズル・ザビ……」

「悪意とは行い、心ではないわ」

「自らの悪行を認識出来なかった男の、噴き上がらせた影……」

何か、全てがアムロには解ったような気がしてくる。見たことがあるのだ、いや。

「何故、今まで気が付かなかったのだ、俺は……」

「シユレディンガー・コロニーからの悪魔が、最初に贄へと選んだ悪行者、ドズル・ザビ」

「シヤアへと、あの男のモノノケが憑依していたのか、ララア？」

「悪魔とはね、アムロ……」

大破したノイエ・ローテから一機のモビルスーツ、そして人の姿が這い出てくる光景をその視線の先へと留めながら、急いでコウ達は各々の持ち場へと戻っていく。

「悪魔とは、すなわち責任転嫁」

「他者のせいにする、その人の弱さが悪魔を産み出したと？」

「悪い事が起きる、悪魔の仕業だ」

「旧世紀からの、伝統だな？」

「仕方がなかった、やむを得なかった、そしてコロニーへ毒ガスを注ぎ込み」

ブォウ、ウ……!!

船外修復を行ってくれていたコウ・ウラキ達のお蔭か、どうにか半分の出力は出せそうなニューペガス。アムロはサブ・パイロット達へ感謝の言葉を放ちながら。

「コロニーを落とし、地球を蹂躪したのち、憎しみはスケイプ・ゴートのコロニーを必要とした」

「スケープ・ゴート？」

「グローブって名のね」

休息が終わり、再び「戦士の刻」が来た事を感じ取りながらも、アムロにはそのララアが吐き捨てた最後の言葉、それだけは耳へと残る。

「俺は知っているぜ、アムロ……」

ガア……

真空と有酸素、二つの空間を隔てる中間ルームを急いで越えながら、息を切らしているカイの。

「じゃあ……」

珍しく常の軽薄な声を潜めているジャーナリストへ、通信機越しにアムロは彼にと問う。

「じゃあ、何なんだよカイ？」

「人は、どうあがいても」

スウ……

暇人であった時に身に付けた自己流のセルフ・コントロール、いわゆる瞑想の真似事を行うアムロの、冴え渡り始めた感覚へと。

「神様にも、ホトケさまにも成れないって事」

「フム……」

カイの言葉へ疑惑を持たない人間、すなわちララアの言っている言葉を理解している仲間が、実業家セイラを初めとして多数いることにアムロは自分の無知を思い知らされる。

「悪魔や鬼にはなれるけどな、アムロ・レイ」

「ナイジェル、あんたも知っている様子だな？」

「仕方がなかった、マザー・ララアが言ったそれの」

ズウオ……

憎しみの黒き光、Gマリオンから放たれるその肌がささくれ立ち、総毛立つ感覚に包まれながら、矛盾した心理であるとは解っていないながらも、ナイジェルの声を聞きながらアムロは。

「最大の象徴さ、アムロ・レイ」

「八つ当たり、か」

「に、しては規模が大きすぎるがね……」

「フウン……」

シヤア達の、無事を神様とホトケ様にと祈る。

「神の拳、発射準備完了」

「うむ……」

「ジンネマン殿？」

第一、第二目標の内から状況に合わせて判断せよ、そうフロントルから指示を受けている男は。

「目標、ソーラシステム」

髭面の年配の男から飛んだ指示に、付近のロストスリーブスのタッフ達が慌ただしく動きはじめる。

「第二斉射目標、ゼネラル・レビル」

「よろしいので？」

「ああ……」

私怨、そしてこの袖付きこと「ロストスリーブス」のエアースであるアンジエロ少年やマリィダ達の気持ちを思い、それに従えば第一目標をレビル艦隊へゴッド・ハンドを向けるのが筋ではあるのだが。

「我々は組織だ」

「神がお怒りになられませんか？」

「なるかも、知れないな……」

この世に神やホトケはいない、それはこの今自らが居座るコロニーの惨劇が、十年前の惨劇が象徴している。

「が、大局は見た方がいい」

「はい」

「ユウ・フロンタルの概念的オリジナルである、ニュータイプ・アムロ・レイをな」

「我々は、越える……」

「そういう事だ」

だが、今彼らはニュータイプを越える、いや越えたいと思っている。

「グローブ、鉄槌の矛先はソーラ・システムⅢへ」

もう一つのアイランド・イフィシユ、原罪を秘めし神の名はグローブ。

第80話 憎しみの光たち

「復活を、したか……」

「ミネバ様？」

「最初は小さく」

「ミネバ様……？」

「そして、どこまでも大きくなる」

「なんですか、それは？」

「知らん、どこぞの童話だったと思う」

ほぼ破碎作業が完了したピナクル、地球への落下軌道にと乗せた三基の巨大惑星の内、尖塔の名を持つゼダン・ゲートの下部。

「北宋バーガーから、具がこぼれていますか？」

「うるさい小僧だな、お主は」

「お前ではありませんよ、僕は」

「フン……」

旧ア・バオア・クー要塞の下部を消滅させる為のマイクロ・ソーラ・レイ、ビッグザムIIであるミイバ・ザムが放つ小型コロニー・レーザーが発射されるカウン트의始まる合図が、ネエル・アーガマ艦内に響く。

「オレンジ・ジュース」

「僕には、バナージ・リンクスという名前が……」

「オーレンジ・ジュース!!」

「は、はい……!!」

マクベナルドというのは、元々ジオン共和国、旧ジオンの本拠コロニー「サイド三」を治めているダルシア首相の、連邦による間接統治から始めたフード・サービスという面がある。

「あの、マ・クベ店長……」

「ミネバ様、というのは良い方なのだぞ、バナージ君？」

「あの人、怖いです……」

「それも社会勉強だ」

「はあい……」

この旧ジオン公国で、けったいな珍人物として知られたマ・クベに

は、その神経質過ぎる気質により人に疎まれる所は確かにあるが、それでも旧ジオンの兵が行く先、テロリズムへ走らずにまともな生活を送れるようにするには、元ジオンの人間が行う。

「オレンジジューズです、ミネバ様」

「ご苦労」

民間への溶け込み政策、連邦軍発案によるその試みを支持する位には、先見の目を備えている。

「お主も、この若さで大変だな」

「僕には、両親が遠い人たちなので」

「そうか、そうか……」

そして、家族とは縁遠い少女少女達を極めて短時間の間、アルバイトとして雇う特別許可を連邦へ申請する辺り、何か遠く先の未来を考えている節が見られる。どちらにしろ、もはや武闘派ジオンの歴史はこのバナージ少年の勤め先店長であるマ・クベという男にとって。

「少し、私の肩を揉んでくれぬか、バナージとやら」

「ええ……？」

「少し、ラプラスの悪魔に目を凝らしすぎたせいかな」

「悪魔？」

「肩と目が痛い」

終わった時代だ、ジオンの残党などという話は。

「このイバラ・ステークはいけるな、元ジオンのカリスマ」

「そうか」

「が、誉めてはやらん」

終わりにしなればならないのだ、このエギーユ・デラーズを最後に、キツチマンたちにとっては。

「せいぜいコロニー落としの罪償い、がんばるんだな」

「ワシも、こんな身分に成り果てようとはな……」

デラーズ紛争時のコロニー落としでもジオンの発言力は上がらなかった、ゆえにこれ以上の抵抗は無駄と判断し「ジオン軍人再建プログラム」という手段をとったこの男「エギーユ・デラーズ」の判断力は大したものである。

「ミンナ・デラーズ、轟頂にするぜ」

「それは、なにより」

たとえば、キツチマンの言葉に口をはさんだミネバの命令があつたとしてもだ。

——
バアン!!

「よし、シャアのコクピットをこじあけた!!」

近距離遠隔プログラムでノイエ・ローテを操作していたアナベル・ガトーの放った喝采と共に、彼の腹心であるカリウスが対人用レーザーライフルを自らのモビルスーツから乗り立たせ、その照準をシャア、鉄仮面へと向ける。

「カリウス、シャアの鉄仮面だけを狙えるか!？」

「仮面を破壊すれば少しはノイエ・ローテの制御」

狙撃用ライフルをややに驚いた風のシャア・アズナブルに向けているカリウスの声は半信半疑だ。

「いや、悪霊達を抑えられるってあうのは、少し樂觀視しすぎでは?」

「しかし、他に手は無い」

「まあ、確かに」

ピューイー……!!

その最後の台詞を言ったか言わないかの内でいとも簡単にレーザーを放った彼、カリウスの豪胆さに付近にいるハマーンはなかば呆れながらも、固唾を飲んでシャアの様子を見守る。

「グウ……!!」

「命中、したか……?」

軽きバイオ・ウエーブを辺りへと撒き散らしながら、苦悶にその顔を歪ませるシャアの姿を見て、ハマーン・カーンはそつと胸を撫で下ろした。

「私は、今まで何を……!?!」

「その、責任転嫁が」

シヤアのザ・ナツクのすぐ近くまでやってきたGペガサス、Pの管制ユニットを駆るアムロ・レイから呆れとも怒りともとれない声が、苦々しく周囲の宙域へ疾る。

「悪魔、それを呼び起こしたのだろうに……」

「言ってくれるなよ、アムロ」

「そこまでして、俺に勝ちたかったのか、シヤア?」

「勝ちたかったさ」

ノイエ・ローテの自律は僅かには遅くなった様子であるが、それでもシヤアのコントロール下を外れてもこの妖花は動きを止めないあたり、人外の力で動いているのは明確であった。

「もつとも、こんな妖花に頼る必要はなかったかもしれないがね」

「そりゃあ、そうさ……」

「お前の力がここまで落ちてようとはな、全く」

「七年の軟禁だ、昔と同じだとおもうなよ……」

毒、それが少しは削がれたシヤアの声にアムロはその面に僅かな安堵の浮かべる、が。

「悪魔、だと……?」

「お前が言うか、シヤア?」

「だが、あれはなハマーンよ……」

ヴオウ……

微かに「蒼み」が帯びた宙域にと浮かぶ、赤黒き憎しみの翼を宙にと拡げるGマリオン。そのユウ・カジマ機は緩慢な動きではあるが。

「何をする気だ、ユウ・カジマ……」

「エグザム、確か私が旧ジオンのニタ研、ニュータイプ研究所フラガナに訪れていた時に」

「ララアに可愛がられていたよな、お前は」

「マリオンというオトモダチ、にもだよ、当時の私は」

その、悪魔の羽根が周囲の宙へ跳ねるだけでも、サイコミュ搭載機に及び。

「新しい姉、そして同級生が擬似的に出来たようで、嬉しい気分だったよ」

「昔話は、私も良いものだと思っているがな」

「解っているよ、シヤア……」

ニュータイプ有能力、脳へ伝わる情報が遮断されるような気分を、この二人のニュータイプ男女は感じている。

「どう、すりゃあなあ……」

「頭が、痛いよ……」

「しつかりしろ、嬢ちゃん達……」

「でも……」

二機のキュベレイ・タイプへと乗っている少女二人に与えている影響ほど彼女達の機体を支えている青年。

「頭の中と、目の前が暗くなっていく……」

「精神兵器、ニュータイプだけに通用するウイルスだとも言うのか、ユウさんよ……?」

リョウ・ルーツ青年は、ユウ・カジマ機から発せられる邪念の影響は受けていないが、それでも友軍機であり、世話になった上官が乗っている機体であり。

フオウ……

「いや、ユウ・カジマさんに取り憑いた幽霊……」

ニュータイプなどは単なるインチキであると考えていた節もある彼にしても、この紅きGマリオンの姿を見て、錯覚であると言いつ張る事は許されない。

「ドズル・ザビ、あの方の最期のように……」

「そうなのか、ガトー?」

気乗りこそしなかったのだが、それでも彼女シーマ・ガラハウとて機能停止したノイエ・ローテから這い出できた彼アナベル・ガトーを見殺しにするのは何か夢見が悪い。そう、まさしく。

「あたしは、アイランド・イフィシユへと毒ガスを投げ入れた時に」

「シーマ殿、その話は……」

「うるさい、ガトー巾着」

そのカリウス機の手のひらへとガトー、モビルスーツに比べれば哀れなほど矮小に見える高潔な戦士を彼に預けながら、シーマは微かに自身の頭を押さえ始める。

「毎夜、あたしの夢の中で責め立てている連中さ……」

「アイランド・イフィシユの噂は本当だったのか、シーマ・ガラハウよ……」

「知らぬはあんただけだよ、ガトー」

もはや、シーマのようなオールドタイプにしろ。

「そのカリウスか、そいつも知っているさね」

「スペースノイドの可能性の為に、我らが贖にした同胞か……」

「銃やモビルスーツで人を殺すのはあたしには構わない、だがね……」

アムロ・レイのようなニュータイプにしろ、このアクシズが落下を始めた時から、僅かずつ確認されていた光の正体は疑う余地はない。

「訳が違うんだ、人間の数字がアリやハエ、死んだ虫を数えるレベルなんだ」

「亡霊達、か……」

「理屈なんか、解るもんじゃないがねえ……」

総意だ、モビルスーツ戦争が始まった時から、発生した死者達が依り集い、形を為した。

「地球からも、宇宙からも……」

なおも憎む力、そしてそれを食い止めるべく地球から発せられた善意の、死者達の総意。

シャウ、ア!!

アクシズから流れてきた結晶体、様々な色に満ちたその輝く光を触発されたかのように、Gマリオンがその身に纏う悪魔の翼から熱風。

「クウ……!!」

「しつかりしろ、シャア!!」

「強化人間に、なった甲斐があったな……!!」

鋭利なサイコ・フィールド、赤黒き風が闇を疾り、生身で宇宙を漂っているシャアを含めて付近のモビルスーツ達を吹き飛ばす。

ブオウ!!

「各員、ともかく!!」

「ニューペガサス、アムロか!?!」

ν-GP、メカニックが見れば後退を勧めるであろう程に機能が低下したアムロ・レイ専用モビルアーマーが、宙へ漂うモビルスーツ達に気を付けながら。

「何をする気だ、アムロ!?!」

「下がっている、シヤア!!」

やや低速で、そのユウ・カジマ機に向けてその巨体を近づけようと試みる、のだが。

グウ……

ゆつくりとその身をアクシズへと羽ばたかせるGマリオン、ブルーデイスティニー五号機から放たれる、ニュータイプを。

「前が、目が見えない……!?!」

「ニューペガサスの操縦権、こちらへ譲って下さい、アムロ・レイ!!」
「サイコミュ・ジャマーとかいう品の話は聴いた事が……!?!」
彼らの可能性を殺すというのがエグザム・システムの基本設計であるらしいとはアムロも聞いているが、この。

「機械的ではなく俺の生身、脳が焼けるような……」

あたかも、伝染性の熱病のように自らを蝕むユウ・カジマ機の機能だか怨念の心に、目視もニュータイプ脳波による探知も出来なくなっていく現象にアムロは戦慄を感じざるを得ない。

「まるで、ニュータイプだけが感染する疫病じゃないのか……?」

「コウ、アムロさんからコントロールを奪うぜ……!?!」

スウオ……

余力が無いというのに、危うくノイエ・ローテの残骸にぶつかりそうになるニューペガサス、その状態に苛立ちながらサブ・パイロットであるキースが操縦権を自分達に引いた為に、どうにかν-GPはその巨体を安定させた。

「怨念達が、ノイエ・ローテからユウ・カジマに身を移したか……?」

この身体への影響を別とすればGマリオン、二元の蒼き機体色と黒赤の光が混じり合い、毒々しき青き泥土の肌を持つ。

ズウ……

その背中の翼を重たそうに引きずりながら、虹色の光を放っているアクシズへと宙域を掻い潜る腐乱死体、ユウ・カジマ機が他のモビルスーツ達を眼中に入れていない様子はある程度の安心をアムロ達へ与えてくれるが。

「核、弾頭……」

ブウ、ウ……

未だにノイエ・ローテにも悪霊達の意味が残っているであろう、シヤア・アズナブル専用モビルアーマーの切り札である核弾頭ファンネル二機が、妖花の「おしべ」が静かに揺らぐ姿をアムロ・レイは感じる。

「悪く思うなよ、中年……」

「やるのか、ナイジェル？」

「撃ってはみるけどな、ケーラ……」

ドウ……!!

ニューペガサスに掴まり、この宙へと運ばれてきたナイジェル機からのビームライフルに続き、ニューペガサスからもサブ・ビームが放たれた。

ヌウ、ウ……

「やはり、効かぬか……」

彼らに続き、クイン・マンサの頭部から撃たれたビーム砲も、全てGマリオンを取り囲む黒き光により。

「サイコ・フィールドだな……」

たやすく、その光を吸収させる。

「魂の壁だ」

「一千万を越える人間が織り成す怨念の壁か、ハマーン……」

「ユウ・カジマの気配を確認するのさえ、難儀だというのに……」

皮肉な事に、アクシズ方面から放たれてくる強力な善意の光、宇宙の心達がハマーン達のニュータイプ能力を強く引き付け、戦闘意欲の奮起が難しいという面に。

「勝つ、勝たない以前に戦い方が解らないな……」

「何か、俺達にも視界に影響が出てきましたよ、アムロさん」

「ゴウさん、単に視界があつた翼により錯覚を受けていると暗示を、自分を信じ込ませた方がいい……」

僅かにGマリオンから距離をとるニューペガサス、どうにかそのフィン・ファンネルの起動だけはスタンバイさせているアムロの口から、低い唸り声上がる。

ゴウウ……!!

「あの、リビング・デッドのオジサン……!!」

翼、暗黒のオーラに満ちたそのサイコ・フィールドが大きく拡がり始め、Gマリオンのコンバーターからもタールの波が迸り、薄く蒼い。

「何だよ、嬢ちゃん!」

「憎んでるんだ……!!」

宇宙の、人の心を溶かし始める。

「アクシズに咲いた、人の魂を!!」

「だからといって、プル……!!」

「妬ましいんだよ、あの人はプルツ……!!」

「それが解つても、ね!!」

攻撃はおろか、視認もニュータイプ能力による感知も妨害されるとあつては、文字通り手も足も出す事は出来ない。

「どうしろと、あの大佐さんを……!!」

明らかに推進力、出力を矯めておられるユウ・カジマ機、彼のその身が腐肉。

ポウ、ト……

ブルー・ポイズン、腐り落ちた光が一つ足元の宙へ浮かぶと共に、その翼が強く発光を始めた。

「やむを得ん、キース!!」

「オウ……」

おそらくこの宙域に展開している機動兵器の中では最も強力な、ニューペガサスのその主砲をGマリオンへと向けるアムロ・レイ機のサブ・パイロット達。

「あの世で謝るよ、ユウ・カジマっていう大佐さん……」

「俺も同罪だからよ、キース……」

「あれは、悪いモビルスーツなんだ……」

とはいえいくらか心に覚悟、同軍の者を殺す決断をしたといっても、そのメガ・ビーム砲がGマリオンを包むサイコ・フィールドを撃ち破れるという保証はない。

「人でなくなったモビルスーツなんだ……」

それでも、キースは相手がモビルスーツ・クラスの機体ならば確実に破壊ができる出力を持つその大口徑ビーム、並みの艦砲よりも高い威力を誇るそのビーム砲の狙いを定め、その砲門へと薄く光が宿り始めた。

——宇宙には——

「ん？」

——心が満ちているの——

「ラ、ラア？」

何か、静かな声が残された核弾頭ファンネル達への対策の為に、あらゆる「雑音」に耐えながらも集中、精神を整えているアムロの脳裏へと響く。

「いや、違う……?」

——ゆえに、この蒼き宇宙が見えていない彼を、私マリオンこと——

「マリオン・ウエルチ、ララアの言っていた？」

——蒼き運命を忘れつつも、このローペリアと——

「キース!!」

アムロが主砲を発射させようと、サブ・パイロットへ向けて声を張り上げた、その時。

「メガ・ビーム、撃つのを止める!!」

——私、ニムバス・シユターゼンが!!——

ザア!!

流星雨、蒼き輝きに満ちたその光と共に、一機のサイコミユ搭載型ドーガタイプ、紅き「バギ・ドーガ」がその悪魔Gマリオンをファンネルによって怯ませると同時に。

ザア、ン!!

「ユウ・カジマ、騎士たる私ことニムバス・シユターゼンが!!」

輝く剣、マリオンの聖剣を振るう黒きレーテ・ドーガが悪魔の翼を引き裂く。

「騎士道たるに基づき、弱者保護の精神を持つて!!」

バアウ!!

そのニムバス機による斬撃に奮い起こされたのか、ユウ・カジマ機Gマリオンの手に持つ魔剣が、どす黒き焰を噴出させ。

「お前こと、ユウ・カジマを助ける!!」

ガアン!!

その魔剣エグザムと、聖剣マリオンが刃と光を合わさせた。

「ローペリア、支援を頼む!!」

「了解、ニムバス!!」

「いや、今は!!」

マリオンの剣、対サイコ・フィールド抑止力として試作段階である接近戦用サイコミュ端末、言い換えれば手持ち型ファンネルであるその剣の蒼き光が。

「あえて、君の事をマリオンと呼ばせてもらう!!」

「オツケー、ニムバス!!」

「何故かと、問えば!!」

簡単に魔剣の焰を押し返し、激昂したかのように邪念のウェーブ、ニムバス機へと差し向けられる死者の魂達を。

スウ……

蒼い流星雨、宇宙の心を宿した小型ファンネル「ピクセル・ビット」達がGマリオンの怨霊達からニムバス機を守ると共に、その悪魔の翼へ幾多の穴を開ける。

「それが、蒼い宇宙ことブルーデイスティニーに携わった者の、使命だ!!」

——ニム、バス……?——

「そうだろう、ユウ・カジマ!!」

悪魔の翼を別とすれば、驚くほどGマリオンの動きには「キレ」が

無い、その事をニムバスは、ややに勝手ながら。

「お前は、ユウだ!!」

——俺の名は、ユウ……——

「そうだ、宇宙には信念が満ちている!!」

——乱暴なヤツめ、男……!!——

「そして、お前はエグザムではない!!」

彼が持つ蒼き宇宙、その心による抵抗、すなわち。

「合力しろ、ユウ・カジマ!!」

ユウ・カジマの可能性を信じ、彼を依り代にと選んだアイランド・イフィッシュ達の亡霊達の手（グローブ）から。

「お前の力は、何も無い事!!」

——俺には、何も無い——

「故に!!」

救い上げる為に、刃をもって蒼き宇宙を。

「ニュータイプとオールドタイプの両方を受け入れられる!!」

——俺は、ニュータイプが憎い——

「空の、器なのだ!!」

——強者が、妬ましい——

「ならば、ユウ・カジマ!!」

マリオンの、宇宙の心を。

「私の、刃にその憎しみをぶつけろ!!」

——ニムバス……——

「私の剣の動き、見失うなよ!!」

——ニムバス!!——

その非殺の剣へと、蒼き宇宙を映し出しつつ、ユウ・カジマの毒を吐き出させようと試みる。

「ニムバス・シュターゼン!!」

「ホウ!？」

その気迫のこもった一撃は、ニムバス機をやや後退させると共に。

「なんだ、呆気ないぞユウ!!」

「すまない、ニムバス!!」

自ずと、死霊達の呪縛からGマリオンを解き放とうとユウ・カジマの心が蠢き始めた。

「そしてローペリア、いや!!」

だが、アイランド・イフィシユの亡霊達は、なおもユウ・カジマを復讐代理人にと。

「マリオン!!」

「今さら、よくも気が付かなかったものだ、ユウ・カジマ!!」

「俺は、本当は!!」

固執をし、その機体へと集合を続ける。

「蒼い宇宙を、信じられなかったんだ!!」

「知っているわ、ユウ!!」

「生きる為に尻まで売り、他人を食い物にしてきた俺には!!」

「解っていたわよ、ユウ・カジマ!!」

「それが気に入らないんだ、ニュータイプというものは!!」

「クルスト博士と同じ思想よ、それは!!」

「だが、俺には彼が否定出来ないんだ、マリオン!!」

ズウ……

再び、ガスを始めとする暴力によって屠殺されたヒューマン・モルモット、彼らの怨念に自機を支配されるユウ。

「蒼い宇宙を、ソラを見る可能性を消し去られた人間、俺は彼らの気持ち理解出来てしまうんだよ!!」

「シユレディンガーの獣に殺されるぞ、ユウ!!」

「それでも、それでもニムバス、俺は!!」

ドズル・ザビ、そしてシャア・アズナブルに続く死霊達の第三の依代とされたユウの放つ怒気、だかその再度に放たれた憎しみの光達は。

ゴウウ!!

「サイコ・フィールドとやらの外膜が無くなっているぞ!!」

「そのまま攻撃を続けろ、キース!!」

「アムロさん、フィン・ファンネルが動いていますか!?!」

「いいんだ!!」

アムロ・レイを始めとする、他の友軍達によってその光を、徐々に分離させられていく。

「ノイエ・ローテの残り核弾頭が、悪魔の手により動き始めた!!」

「フィン・ファンネルでどうにかなると!？」

「なるんだ、出来るんだよキース!!」

バウ!!

全弾を射出されたフィン・ファンネル達の影で剣を合わせ続けるユウ・カジマとニムバス・シユターゼン。

「まずい、ニムバス!!」

「何だ、ユウ!？」

「悪魔の光が、増幅される!!」

「そのくらい、気骨で押さえい!!」

「違う、この場を取り巻く憎しみの光じゃない!!」

「だとしたら、何だと……」

ジャア、ア!!

その時、悪魔の光。

「ソーラ・レイだとお!？」

ユウ・カジマを支援しようとしたリョウ青年達の視線の先に、悪魔の右手（グローブ・ライト）の光が宇宙を敵意にと満ちさせた。

第81話 贖罪の花

「ジャアアア……!!」

「散った、花が!!」

そのアンジェロ少年の言う通り、アクシズを包んだコスモスの花が次々とパリンと割れる。

「みたか!!」

グローブ・ソーラ・レイが宇宙を切り裂く姿を見て、アンジェロ少年は禍々しい喝采をあげる。

「どうだ、みたか!!」

満面の笑み。

「どうだ、まいったか!!」

いや、泣き哄笑とでもいうべきであろうか。

「アンジェロ、イチジテツタイするぞ……」

「見ましたか、ユウ・フロンタル!!」

「タシカ、ニ」

「ザマを見たか、連邦ども!!」

「サ、イクぞ……」

「母さんの仇だ、連邦ども!!」

彼アンジェロの機体、ZⅢは内部から強く震える、彼のどこか虚しい笑い声と共に。

「ドゴス・ギア、左舷大破!!」

「総員退避、ミラー展開部隊への通告も忘れるな!!」

「そんな暇がありますか、バスク艦長!!」

「無理でもやるんだよ、スペースノイドどもに良いようにさせるな!!」

「ノイエ・ローテだ!!」

ユウ・カジマを始めとする怨霊達、それを集束させているのがノイエ・ローテだと、激しい頭痛の中でアムロはニュータイプの「勘」で気がついた。

「シャアの妖花、その残骸が未だに怨霊達の依代となっている!!」

「そうは言ってもな、アムロ・レイ……」

宇宙に咲くモノノケ、ノイエ・ローテを守護するGマリオンとその付近を取り巻くオーラを睨みながら、ニムバスは聖剣マリオンの刃にもう片方のマニピレータを撫で付けながら、忌々しげにその眉をかめてみせる。

「私が飛び込もう、アムロ・レイ」

「出来るのか、ニムバスとやら?」

「マリオン!!」

正眼に構えられる剣、マリオンとは名を同じくして異なる存在にニムバスは列泊のごとき声をなげつけ、自身はそのままGマリオンに向けて機体を向けさせた。

「ノイエ・ローテの心臓部へ切り込み、案内を頼む!!」

「お前一人では難しいか、ニムバス!」

「あの紅きモビル・アーマー、恐らくはエグザム・システムの逆制御を受けていると思う!!」

「一方的ではないか!」

「ユウの馬鹿者が、怨念の虜になっているからな!!」

レーテ・ドーガ、ニムバス機がそう言い放った後に、彼の機体は矢が放たれたようにユウ・カジマの機体へと突進する。

ゴウウ!!

「ニムバス!!」

「怨念の動きだけは、止めさせてもらう!!」

そのままに聖剣が一闪、サイコ・フィールドが弱まったと同時に二

ムバス機は即座に反転をし、ノイエ・ローテの中央部、ザ・ナツクが無くなり空となった巨機体の中心へと自機に拍車をかけた。

「後は頼んだ、マリオン!!」

「させるか、ニムバス!!」

ユウの血を吐くような叫び声と共に、ついにノイエ・ローテの切り札、核弾頭ファンネルが無人の機体から放出される。

「アムロ・レイ、どうにか出来るんだろう!?!」

「その為のフィン・ファンネルだ!!」

「ようし!!」

ひとまずはそのアムロの返事に納得ができたニムバスは、自機をノイエ・ローテの中心核へと飛び込ませた。

「しかしにな、ニムバス!!」

「なんだ、アムロ・レイ!!」

「俺には、お前こそ心配だ!!」

「怨念達の祟りを一身に受ける、その心配だな!?!」

「オカルトでも、人は殺せる!!」

「大丈夫だよ、アムロ・レイ」

フィン・ファンネルが核弾頭を包み込み、何処かへ飛ばしていく姿を他の面々が固唾を飲んで見守る中。

「私ことニムバスは、身体が頑健なラプラスタイプだ!!」

マリオンのピクセルが再度ユウ・カジマ機の怨念を弾き飛ばす。

「早く、ニムバス!!」

「解っている、マリオン!!」

「あたしも、長くは持たない……!!」

ガオ!!

魔剣エグザムがマリオン・ウエルチのバギ・ドーガをはね飛ばし、ニムバスを追おうとした、その瞬間。

「うお!?!」

「甘いな、ユウ・カジマ!!」

ハマーン・カーンのクイン・マンサ、その頭部が丁度Gマリオンのコクピット周りへと命中し、その彼の動きを止める。

「いま、だ!!」
「バァ、ン!!」

禁断の箱が、ニムバス・シユターゼンによってこじあけられ、紅黒き泥が彼の機体を包み込んだ。

「ニムバス!!」

その声は、ユウ・カジマが放ったものだ。

「ニムバス!!」

正気に戻った、いや元の彼に戻ったと言うべきか、ユウ・カジマは機体出力を上げ、ニムバスのレーテ・ドーガを助け出そうと試みる。

ド、フウ……

「ニムバス!!」

マリオンのピクセルの支援も受け、どうにかノイエ・ローテの残骸からニムバス・シユターゼンの機体を引きずりだす連邦の騎士、ユウ・カジマ。

「グウ、ウウ……」

「ニムバス!!」

「さわるな、ユウ!!」

乱暴にその腕を振るうレーテ・ドーガにやや鼻白むユウ・カジマであったが、元はといえば自分の責任なのだ、まさしくニムバスはホワイト・ナイトであったのだ。

「ユウ……」

「なんだ、ニムバス？」

「私のムサカへこい、修正してやる」

焦燥しきったようなニムバスの対して、ユウは彼が己と同じく正気を失っているのかと一瞬思ってしまう。

「ニムバスの顔を立ってやってよ、ユウ」

「ああ……」

マリオンの、いやローベリアの声にユウはようやく自分の「声」を

戻したかのように、元の冷静な声を取り戻す。

「そうだな」

「それが良い、ユウ・カジマ」

「ありがとう、ハマーン」

最後の頭部すら失い、もはやたんなる瓦礫と化したクイン・マンサの姿を見て、ユウはなにやら照れくさい気分になる。

「シャアの面倒も見てやってくれ、ハマーン」

「言われなくても、他の連中が見ているさ」

「そうか……」

ザ・ナック、レーテ・ドーガⅡの周辺に他のアムロ・レイを始めとする者達が集まっているのを見て、ユウは機能不全を起こしているGMarioンの惨状にふとため息をついた。

「髪を短くしたのは、良い根性だな、ライバルよ」

「いいから、一思いにやってくれ、ニムバス」

バ、キィ……!!

「さすがに、痛いものだな」

「これでも、私は本調子ではない」

「まあな」

ムサカのハンガーデツキでニムバスによる「修正」を受けたユウは、痛む頬を抑えながら、それでも挑発的に彼の顔を睨み付ける。

「騎士道、それも影響しているだろうな？」

「無抵抗の相手だからな」

「なら、俺と抵抗しようか」

「勝てるものなのか、お前が私に？」

「無理だな」

元々、ユウ・カジマの格闘技の腕前は大したものではなく、対するニムバスは肉体的な能力も合わせて、騎士の名に相応しい格闘能力であつた。たとえ、義足の身であろうともだ。

「俺が三人はいないと、勝てるものではない」

「情けない、ユウ・カジマ」

「言ってくれるじゃないか、ローベリア」

嘲笑うマリオンことローベリアを無視し、ユウはニムバスの事を実と睨みつける。

「なら、答えは一つだ」

「それはなんだ、ニムバス？」

「モビルスーツ」

その答えを聞き、ユウの顔が強く渋った。

「共に機能不全、半死半生の機体だぞ？」

「だからこそ、だよ」

「引導を渡すつもりか、あの二機に」

「私のレーテ・ドーガは残念な結果、ほとんど使わない内にクラッシュするようになったがな」

「いいだろう」

ユウは地面、ハンガーデッキの床に唾を吐きつけると、そのまま満身創痕の愛機「Gマリオン」へと跳び乗った。

「あの小惑星が良さそうだな」

「私についてこい、若造」

「若造って、俺はもう三十なかばだぞ？」

「若造、さ……」

その台詞を聞いて、ユウは重力と無重力を隔てるブロックへ機体を踊らせる彼の歳が、すでに。

「四十、か……」

確か、そのくらいの年月であることを思い出し、少し感傷が心に走った。

「なんだ、ありや？」

「ケットーじゃなくて、カイ？」

「せっかく、得体の知れないドンパチが終わったというのに、お元氣なこった」

劍劇、それを小惑星の上で繰り広げている二機のモビルスーツを見て、フリージャーナリスト「カイ・シデン」があきれたような声を強く出す。

「う、うう……」

将人レベル、彼の乗る地球連邦軍旗艦「ゼネラル・レベル」はグローブからの照射の直撃こそ受けなかったものの、謎の怪現象を引き起こしている。

「医務室、動力が!!」

「く、ぬう……」

「電力が、回りません!!」

ややにヒステリックな声を張り上げている医務室の看護医を無視し、レベルは自らが横たわっていたベッドから這い出た。

「ワシを、怒っているのか……?」

グローブからの光はただ肉眼で見ただけでは、まさしくただの巨大光。しかし。

「まあ、当然だな……」

心の眼、それを使って見ようとすれば、それはドロリとした怨念に満ちている事が、ニュータイプやオールドタイプ以前に気がつくものだ。

「ワシが、グローブ事件を主導したのだからな」

やむを得なかった、そう言うことはできる。そうでもしなければ連邦兵卒に暴動や、最悪反乱が起こっていたかもしれない。

「ウウ……」

居てもたつてもいられず、医務室からヨロヨロと出ていくレベル将

軍には、医師達は気がつかない。謎の現象によりそれどころではないらしい。

「性、悪説」

あのグローブで繰り広げられた「饗宴」はまさしくその具現である。

「だが……」

「おい、レビル!!」

ダッ……!!

だが、この自らへと駆け寄ってくるこの、自身を常にライバルとみていた男「イーサン・ライヤー」の放つ気は。

「何をやっているか!？」

「しょ……」

失禁をしている将人レビルが感じている、この暖かいオーラは。

「性善……」

「軍医、早くレビルを連れていけ!!」

「性善、説」

「しゃべるな、レビル!!」

人は心の狭搾さを取り除けば、だれでもニュータイプになれるという証明に他ならない。

「軍医、何をしておるか!？」

「信じて、みたかった……」

ガッ……

「おい、レビル!!」

後に、イーサン・ライヤー大将が語るには、それが将レビルの最後の台詞、臨終の言葉であったという。

第82話 禊の剣

「シユレティンガーの箱って知っているか？」

「聴いたことは、ある」

「説明は出来るか、ティターンズ？」

そのミネバの言葉にラムサスは軽く眉間へ皺を寄せたまま、モゴモゴとその口を動かしてみせる。

「確か、五十パーセントの確率で毒ガスが発生する箱の中に、えーと」

「大雑把に言えばその通りだよ、ラムサス」

「ヤザン隊長!？」

ネエル・アーガマのブリッジへ入ってきた上官の顔を見て、そのヤザン・ゲール、ラムサス・ハサの顔が一気に引き締まった。

「後方の病院船へ下がっていたのではなかったのですか!？」

「花見、がしたくてよ」

「花見、ああその後ろの人たち」

ヤザンに続き、ネエル・アーガマのブリッジへ入ってきたジャミトフラを見て、ラムサスはどこか納得したかのようにその自らの首を何度も頷かせてみせる。

「中に猫を入れてな、猫が死ぬかどうかを確かめる実験だ」

「猫……」

「猫」その言葉を聴いたとき、バナージ・リンクス少年の顔がキュと締まった。

「どうしたの、坊や?」

「僕の姓がリンクス（山猫）だから、つい」

「あら、それはごめんなさい」

そのバナージ少年をなくさめるブルーの声を無視し、この手の事にかけては十八番であるあの男がしたり顔でその口を開く。

「実際には、猫が死ぬ確率を調べる実験だ」

「確率……」

やはり、まだバナージ少年には難しい話のようだ。話に飲まれてい

る。

「箱を開けた時に、猫が死んでいるかどうか、それは実験をした観察者でないといけない」

「お前はその手の課題が苦手だったよな、ジャミトフ……」

「うるさきブレックスめ……」

苦々しく顔をしかめる二人の老人を無視し、ミネバが北京バーガーを食べながら話を続けさせそうとする。咀嚼する音が辺りへと鳴り響く。

「だが、それを百パーセントにまで押し上げたのがアイランド・イフィシュだ」

「住民を皆殺しにする、そういう計画だったな」

そのミネバの言葉に、旧ジオン派の二人であるマ・クベとデラーズが互いにその顔を見合わせ、ややに沈鬱な表情を浮かべて頷き交わす。

「だが、その計画を実行した我が父ドズル・ザビはな」

スツ……

バナージ少年へ飲み物の催促をしながら、ミネバ・ラオ・ザビ、かつての猛将ドズル・ザビの娘は真剣な顔をブリッジ外の蒼い宇宙へ向けている。

「その百パーセントを信じていなかったのではないかな？」

「信じて、いない……？」

「どこかで何人かは助かると思っていたのかもしれないぞ、テイターズ総統よ」

「だとしたら、偽善だな」

「ホウ、ジャミトフよ？」

自らの主君筋、その父親への無礼な言葉にわずかにその姿勢を構えたマ・クベとデラーズをその細い手で制し、ミネバは興味ぶかそうにジャミトフの瞳を实と見つめた。

「主もそう、思うか」

「儂としては、百パーセント死ぬと確信出来ていたギレンやキシリアの方が、より誠実におもえるな」

「私もだ、テイターンズ總統」

何か、得体の知れない重力みたいのがその場を包み、皆が無言でマクベナルドやミンナ・テラーズの食べ物を口へ放り投じているなか、ふとブルーがその口を開く。

「でも、一人や二人位には生きている人もいたんじゃないやなくて？」

「それだ、ジャミトフの娘とやら」

我が意を得たり、と言った風にそのブルーことハイリーンの言葉にミネバが強くその首を振る。

「致死率百パーセントの中で生き延びた人間は」

「ミネバ様……？」

「果たして、平穏な人生が送れるのだろうか、な」

バナージ少年の声に答えたか答ええないか、ミネバは断言するように、力強くそう宣告をした。

「……」

そして、その姿をパプテマス・シロッコは黙ったままにみつめている。

「死んだ怨霊達がそれを赦してくれるか、という話だよ、パプテマス」

「どうかな、ミス・ミネバ……？」

「世辞を使えるようになったな、主も」

「どうも……」

「怨ーん!!」

ガ、ギィ!!

「さすがだな、ニムバス」

「さすがもなにも、このような手で、私が倒せると思うか、馬鹿者」

「シヤアにすら、通用したのにな」

奇声と共に両手のフィンガーバルカンから相手の関節を狙い、単発

で弾丸を発射し、動きを止める。

「暗器術の真似事、良いと思っただのによ」

「尋常に出会わんか、尋常によ」

「尋常に戦い勝てる相手かよ、今のお前は」

ブウン……

魔剣エグザムを震わせながら、ユウはコクピットの中で不敵にわらう。

「このユウ・カジマ、相手の心理に刃を隠す」

「読んだな？」

「性にあつた」

軽く、二人の刃がふれ、乾いた振動音が二人のコクピットへ響きわたる。

「さて、お次はこれだ!!」

ガッ、ガガッ!!

「バルカンの猛打だど!!」

「ははは、踊れ踊れニムバス!!」

単なる連射であれば大したことではないニムバスであるが、このバルカンの連打は一味違う。一撃一撃が的確なのだ。

「必殺、死霊の盆踊り!!」

「どこでこのような業を、ユウ!?!」

「天才が見せてくれたホロ・ムービーも役にたつものだ!!」

「ならば!!」

ニムバスの聖剣マリオンが独特の構えをとり、同時にレーテ・ドーガの姿勢が低く落ちる。

「いきなり、必殺を念じなければなるまい……!!」

「また、このまえの連打技か!?!」

ナイン・ドラゴン・ヘッド・チャージ、強力な突進技である。

「二度も、同じ技が通用するんでも!!」

「違うな、ユウ・カジマ!!」

大上段、それに構えた聖剣の姿勢は確かに以前の技とはちがうようだ。

「あれを遥かに越える技であるよ!!」

「ニムバス、あれを使うつもりか……?」

マリオン、いやローベリアの唇から掠れ出る吐息が、不思議な事にユウ・カジマの耳へと入る。

「ニムバス、大技のようだな」

「そうだと……」

先程から宇宙へと漂っていたローベリア機バギ・ドーガ、それにラア・スンやハマーンが近寄ってくる姿をその目にしながら、ユウは軽く自らの唇を噛む。

「ならばに、俺も一世一代の大技を見せてやろう!!」

大音声という言葉がよく似合う大声を上げたユウを付近の者達がびっくりした様子でじっと見つめる中、ユウも魔剣エグザムを両の手に構える。

「タイガー・フォーリング……」

そのユウ・カジマの声に合わせるかのように。

「スカイ・ドラゴン……」

「また、ドラゴンか!!」

「うるさい、ユウ・カジマ」

ニムバスからも、静かな声が周囲のモバイルスーツ・コクピットを震わす。

「スパーク!!」

ザアン!!

気合いの声と共に、ニムバス・シユターゼンの無刃刀が跳ね、ユウ機の真上を掠める。

「甘いぞ、ニムバス!!」

「まだだ!!」

「何!?!」

シユウ……

対サイコ・フィールド兵器「聖剣マリオン」から光が迸り、周囲の物質を収縮し始めたのにユウは驚き、あわてて自らの斬撃を繰り返すと試みる。

「ダウン!!」

「何、どこだ!？」

スウ……

聖剣での吸引効果に自信を、それこそモビルスーツサイズの品物でさえ引き寄せることができる「スカイ・ドラゴン・スパーク」に信頼を置いていたニムバス。彼が期待していた場所にユウ・カジマ機がない事に僅かな狼狽が生まれた。

「どこだ、ユウ!!」

「どこだ!!」

「な、何だと」

そのユウ機Gマリオンがとっている姿勢、それはまさに。

「土・下・座だと!？」

「そうだとも!!」

そのユウ機が、力強く跳ねた。

「土下座の姿勢で、相手の反発心をゼロにする!!」

再びの土下座の姿勢、その腕の先には魔剣エグザム。

「そして、有無を言わさぬ二段土下座!!」

「うむう!？」

「これこそが!!」

ザオン!!

「ごめえん、なさーい!!」

「アアー」

ユウはそう叫びながら、ニムバス機レーテの目前スレスレ、そこで魔剣はその刃先を止めた。

「土下座の極み……!!」

「天駆ける龍の斬撃も」

先程から二機の戦いを観戦しているローベリアの近くには彼女の後輩、ララアとハマーンがクスクスと笑っている。

「地を這う土下座には、勝てなかったようだな、ニムバス・シユターゼン」

「言わないでくださいよ、ハマーン・カーン……」

まさか、あのような隠し玉を持っていようとはまさしくニムバスの不覚であった。

「どうだ、見たかハマーン・カーン」

「何がだ、ユウ・カジマ?」

「俺は強い」

傲然とそう言い張るユウに、ノーマルスーツのままのハマーンはその首を傾げてみせる。

「さつき、お前は捨て身で俺を止めてくれたよな?」

「まあ、な……」

「それは、つまり……」

コクピットの中で、何やらモゾモゾと言いよどむユウに、ハマーンが怪訝そうな視線を向けた。

「俺の赤ちゃんを生んでくれる、覚悟があつてのことか」

そのデリカシーの欠片もない言葉に、ハマーンを含めてその場に居る全員が呆れた表情を浮かべた、が。

「ユウ・カジマ」

「どうだ、ハマーン?」

「お前、良い男だな?」

「なら、やはり……」

「だが、断る」

フツ……

そう言い、一つ微笑を返したきりハマーンはややに遠くで騒いでいるアムロ・レイ達、そして。

「やつぱり、アイツはシャア・アズナブルか、ニムバス?」

「当たり前だ、馬鹿者」

無酸素とはいえ、ある程度は呼吸が出来るシャア・アズナブルの元へと泳いでいった。

「ふられちまったな」

シャ……

「ん?」

何やら、呑気に歩み寄りを行っているアムロ達の近く、大破し四散

したノイエ・ローテのすぐ近くを紅いラインが通る姿を目にしたユウ・カジマは。

「なんだろう……」

その目をこらしたままに。

「まずい……」

その意識を失った。

「蒼い、宇宙……」

アクシズを止めたサイコ・シャード、ユウ・カジマがその輝きを見たのは、夢か現か。

「私が見た宇宙でもあるよ、ユウ・カジマ」

「そして、アタシが造り出した宇宙でもある」

無数のサイコ・シャードの上に立つニムバス・シユターゼンとマリオン・ウエルチの姿は、夢というには余りにも現実味が有りすぎる。

「大丈夫だろうな、これは……」

「多分、大丈夫」

「どうかな、お前が赤ちゃんを産めんようになったら……」

サイコ・シャード、砕けちったコスモスの花をその手に納めながら、マウアーが恋人に微笑みかける。

「無粋だな、ジェリド」

「うるさいぞ、カミーユ」

そのカミーユの手にもピンク色の「コスモス」のシャード、彼はそれを恋人未満友達以上の娘へとわたす。

「綺麗ね、カミーユ」

「おい、あまりそう鼻を近づけるなよ」

人に言っている事と矛盾しているカミーユの言葉に、ジェリド・メ

サが軽く微笑む。

「花、私の名前ね」

「まあ、そうだけでもさ……」

見ると、あちこちで散った花を取ろうとしている連邦、テイターンズ、エウーゴ、そしてネオ・ジオン兵の姿がみえる。

「採るべし、採るべし天然サイコ・フレーム!!」

「品がないよ、アルフさん」

「うるさい、シドレ!!」

人は、浅ましいのかもしれない。

「棄てたあの子を、思い出す……」

「しばらくあんたは捕虜だ、ロストスリーブス」

「ええ……」

「想い出に浸りな」

あるいは、過去を振りきれないのかもしれない。

「バナージ、あれだ、あの特大のが狙い目だ!!」

「急かさんでくださいよ、ミネバ様!!」

「未来のラプラスだよ、小僧!!」

それでも、未来へ進んでいく。

コポウ……

深く昏い奥深くに一つの研究施設が見える。

——予想外だ——

一機の巨大モビルスーツ、その脇に置いてあるコンピュータが文字列を吐き出す。

——第二世代エグザム、NT-Eを意思の力で発現できるとは——
コホウ……

巨大モビルスーツが、軽く唸りを上げた。

——ユニ・エグザム——

文字列に名を呼ばれたモバイルスーツが二度の呼吸を行う。

——これより、お前にニュータイプ殲滅の使命をあたえる——
モバイルスーツの両目が、紅く光る。

第83話 ヨミツヒラザカ

——ここは、どこだ——

昏い、瘴気に満ちた洞窟の中、襪褌布を纏ったユウは手探りで先へと進む。

——フィリップ、サマナ、どこだ——

そのユウの声に答える者はおらず、ただ雨音が足されるのみ。

——マリオン？——

洞窟の奥、蒼い砂場で砂遊びをしている子供がユウをじつと見つめる。

——ユウのお兄ちゃん——

——なんだい？——

——一緒に遊ぼ——

その少年の差し伸ばす手、その手を取ったユウは……

「うわ!？」

——遊ぼ、遊ぼ——

ボキイ

少年の腕が折れ、そのまま腕から腐敗していく姿をその目にし、驚愕と脅えのいり混じった声を上げた。

——オニイチャン……!!——

「く、来るな!!」

身体中の肉が溶け落ち、骨と内臓だけとなった少年がユウを追いかける。あわててその砂場から逃げ出すユウ・カジマ。

「来るなど言っている!!」

ザア!!

地面に撒き散らされた砂、紅い燐光を放つそれを少年の亡者へと投げつけ、そのまま不格好に走り去るユウ、それを追いかける少年。

「くっ!!」

ドアを閉じ、少年の進行を妨げて一息つくユウ。

「全く……」

悪夢から飛び起きて、そのまま部屋の前、ストウラートの艦内通路

の辺りまで寝間着のままに来てしまったは、その首を辺りへと傾げて、汗で濡れた下着を気にする。

「とんでもない夢だ」

艦内は薄暗く、紅い常夜灯しかついていない、背後にはユウの部屋を表す青いランプが音を立てて彼を照らす。

「ブリッジにでもいくかな」

紅い照明に導かれるかのように、ユウはそのまま足をメイン・ブリッジへと向けた。

ザアア……!!

コロニーの円筒中央に設置された、降雨用の散水器が狂ったように水飛沫を放つ。

少年から青年の間、その位の歳であろうと思われる男が必死でその散水器の近くにある足場に掴まっている。

——嫌だ——

地面が霞んで見える眼下の彼方、そこには禍々しい色をした霧が立ち込めている。地獄の悪魔が吐き散らす死の吐息、それに捉えられたらそのまま瞬時に奈落へと引きずり込まれる。彼にもそれが直感により理解が出来た。

ズウ……

正気を失ったコロニーの天候管理システム、散水器から伸びる連絡路、その鉄製の通路を満たしている水の暴流に彼の手が滑る。

——嫌だ!!——

この高さなら、霧が身体を侵す前に地面へと叩きつけられて命を失うのが先であろう。

サア……

「大丈夫か？」

若い、神経質そうな男の声。それとともに差し伸べられる細い手。彼は必死にその男の腕を掴む

「おっと……」

「……」

「臭いな、貴様は……」

別に悪気はない言葉のようだ、単に反射的に檻を纏っている彼へ向けて言ってしまったのであろう。

「生まれ故郷のコロニーが地球へ沈むというから、わざわざ危険を犯してやってきたのに」

「……」

「大して、感慨も湧かんもんだな」

一つ鼻をならしてから、男は内火艇に臭い青年を誘う。

「まあ、何かの縁だ」

「……」

「何か言わんか」

「何も、言うことはない……」

「そうか」

また一つ、その言葉と共に少年は鼻を鳴らす。

「とにかく、スペースランチへ入れ」

「ここから逃げるため、か……?」

「逃げ切れるかどうか、私にも解らんよ」

プシュ……

「ん？」

スペースランチ、内火艇のドアが閉まる時に、ユウは何か人影をみたような気がしたが、が。

「ガス避けのシャッターを架けるぞ、ええと……」

「俺に、名前はない……」

「ならば」

分厚いシャッターが閉まり、人影と外からの灯りを隠した。

「私の兄の名前をくれてやろう」

「名前……?」

「ユウだ」

「ユウ（そのお前）？」

「違うな、凡人」

内火艇の内部に灯りが点り、計器類の光が二人の男の顔を照らす。

「ユウ（あなた）だ」

「ユウ……」

「ガスの壁が、結構厚いな……」

「俺の名は、ユウ……」

いままで青年が呼ばれていた「そのお前」ではなく「あなた」

「なあ、あんた……」

「今、話しかけるな」

「あんたの名は……？」

「一つでも操縦ミスをおかしたら、ガスによって御陀仏になる」

——船外GG（ダブルジー）ガス、致死率四百パーセント——

「アタシは、知らなかったんだ!!」

「くっ!!」

コロニーから飛び出した途端に、謎の巨大兵器から砲弾による連射が内火艇の近くを掠め、少年の顔が僅かに歪む。

「毒ガスだなんて、知らなかったんだよお!!」

「おおかた、権力者に利用された凡人といったところか……」

その巨大人型兵器から内火艇を逸らさせ、少年は何処かヘスペースランチを操縦する。その最中。

「俺の名はユウ（あなた）……」

青年は、ブツブツと少年の言葉を反芻する。

「全く、何て悪夢だ」

以前、パプテマス・シロッコから聞いた神話さながらの悪夢に、ユ

ウは一人愚痴る。

「フィリップ、サマナ達にも聞かせてやりたい」

その二人の名前がでるのは、薄暗い通路を歩いている寂しさがあるからかもしれないと、ユウは一人自嘲する。

「そう、フィリップ達にも……」

そう、呟いたのちにユウはギョつとした。

「脚が進んでいない……?」

ドア、蒼い光を放つその扉からユウの身体が離れていないのだ、先に続くは無限とも思える紅い通路。

「それに、この昏さはなんだ?」

消灯時間は過ぎているとはいえ、余りにも灯りが暗い。まるで黄泉への道しるべのように。

「フィリップ、サマナ……!!」

たまらず、ユウは二人の名を叫んでしまう。

「シドレ……!!」

「何を叫んでいるんだ、お前さんは」

ポソツ……

その肩に手を置かれた途端に、辺りへとまばゆい光が灯る。

「元氣そうじゃねえかよ、蒼い稲妻」

「古く、誰も使わない名前をな、フィリップ……」

「んで、どしたん」

「い、いや」

さすがに一から十まで順序立てて説明することは出来ず、ユウは軽く自身の短髪を指でなでた。

「何か艦にあったのかなつと……」

「停電だよ、単なる故障だ」

「そ、そうか」

「艦内放送で言っていたじゃねえか、旦那」

「あ、ああそうだよな」

ギユ……

安心したような声を上げた途端に、ユウはフィリップの肩へと軽く

抱きついた。

「どこにもいかないでくれよ、フィリップ」

「なんだよ、気色悪い」

「俺を置いていかないでくれ」

スツ……

あたかも子供を見るような目で、フィリップはユウの顔をじっと見やり、落ち着いた声でユウ・カジマを諭す。

「俺たちはモルモット隊だ」

「ああ」

「例え、解散してもモルモットはモルモットだ、つるむ」

「ああ、そうだよな!!」

そう、明るい笑顔で言いはなったユウは彼の顔と同じ位に明るい艦内を駆け抜ける。

「俺が一步も前へ進んでいないなんて、気のせいだ……」

「俺達がお前さんを置いてきぼりにしているんじゃないよ、ユウ」

駆けるユウに手を振りながら、フィリップはボソリとそう呟いた。

「お前さんとエグザムが、何処か違う場所へいこうとしているんだ」

除隊が決まり、嫁さんとパン屋を開く夢を叶えてもユウは常連になっってくれると約束してくれた、だが。

「俺の店のパンの味以前に、その約束が守られるのか……?」

「腐ってやがる」

「そうか?」

「ああ、まちがいないわね」

このベームルベン整備士の齒に物を着せぬ言い方には慣れているものの、いまのユウにとっては気が滅入るものだ。

「内部の機構が、メチャメチャだ」

「無理をさせたからな、Gマリオンは」

「たんなる機体疲労じゃなくて……」

ベッドから身を乗り出したユウに布団を掛けてくれるシドレに一つ頭を下げてから、女整備士は言葉を続ける。

「回線がね、爛れているんだ」

「あることなのか、そういうことは？」

「あるわけないじゃない」

ユウの枕元へと置かれたパンをその指で擦りながら、ベームルベンは呆れたような顔をした。

「異常よ、こんな現象」

「異常現象か……」

「ユウ大佐、あなたと同じくね」

その言葉に、ギツとシドレがベームルベンを睨み付け、ユウの寝室にしぼしの緊張が訪れる。

「ユウ、いるかい？」

その緊張を破ったのは、外からのフィリップ・ヒューズ、元モルモツト隊の隊長の声だ。

「開けるぞ」

「どうぞ」

静かな音を立てながら自動ドアが開き、シドレとベームルベンが睨み合う姿を見て、フィリップはわざとらしくその喉から咳払いをもらしてみせる。

「修羅場だったか」

「全然」

「ならば、いいがな……」

その言葉は、ニムバスとの戦いの後に完全にグロッキーとなった、その機体Gマリオンのままストウライトへ運ばれたユウの身を案じての事だろう。

「俺のパンの効果が薄れてしまう」

「時代錯誤も甚だしい、パンを頭の上に置くとは……」

「言い出したのはシロツコの旦那だし、作るのを手伝ってくれたのもあのインテリさんだよ」

「意外だったな」

シロツコ、パプテマス・シロツコがパンを作る事に長けているとは聞いてはいたが、正直ユウにはここまで上手いとは思わなかった。

「折角の天才さんのパンか、フライリップ少佐」

「そゆこと」

「だったら、その恩恵にあずからないとね、ユウ大佐」

そういつたきり、彼女ベーメルベンは身軽にユウの部屋から出ていく。

「新しい観光名所、アクシズでも観に行くか」

結局の所、文字通り「宙ぶらりん」のままの超巨大惑星「アクシズ」は今のユウ達がどうこう出来る問題ではない。偉い人が考える話だ。

「ユウ」

「何だ、フライリップ？」

「健康診断の時間だ」

その言葉と共に、ストウライトの医師がユウの部屋にと入り込んできた。

「注射は嫌ですよ、先生」

「注射はしないよ、大佐」

「そうですか……」

「もはや、注射の一本や二本で治るような病気ではない」

「ジ・オIIとは、これまた大層にして、不遜だな」

「すみません、シロツコさん……」

「五十パーセントのリミッター」

「ユウさんが七十パーセントならば、僕にはこれくらいがいいとドウガチさんが」

「フーン」

ニヤリとシロッコは笑うと、カツがアクシズ主戦場に到達する前に立ち寄った補給艦、ジュピトリスの艦長の顔をじつと見やる。

「私のジ・オをここまでデチューンしおって」

「その少年には、その位が丁度よいと思ったのだよ、私は」

実直そうなそのドウガチという男はそう言うと、シロッコからその目を逸らし地球へとその視線を向ける。

「美しい星だな、地球とは」

「話題を逸らすな、ドウガチ」

「この星の蒼さ、守らねばならんと思わんか？」

「人類を甘くする、心が弱くなる」

ブツブツ言いながら、シロッコは逆魔改造されたジ・オの表面をその手で再び撫で始めた。

「全身へのビーム砲、隠し腕の性能劣化」

「しかし、僕には……」

「挙げ句の果ての、機動性の低下」

カリッ……

チョコレート・バーをかじりながらダメだしをし続けるシロッコへ、彼の脇に控えるサラがその可愛い唇を尖らせる。

「ですが、パパテマスさま」

「言うなよ、サラ」

「カツは良くやっています」

「言うなというなに……」

苦笑しつつも、シロッコはチョコ・バーを噛み下す。

「まあ、ここまでやれたのだ」

「シロッコさん」

「褒めておいてやろう、小僧」

「ありがとう、お義父さん」

「貴様にお義父さんと呼ばれる筋合いは、まだない!!」

僅かにその顔を紅潮させているパプテマス・シロッコの隣では、ドウガチが満足そうに地球を眺め続けていた。

「しかし、パプテマス殿」

「なんだ、カラス？」

「あの、ロストスリーブスという連中は」

「私が知るか」

その実も蓋もなく、相手の先取りをする言葉に、カラス少年はその唇を尖らす。

「大方、野盜崩れだとは思うが」

「宇宙海賊、ですか……」

「はて……」

カラス少年、パプテマス・シロッコ程ではないが、万事に充分な天才と呼べる素質をもつ彼は、シロッコ用新型モビルスーツを調整するその手を止め、頭に輪を付ける趣味がある男の声をその耳へと入れる。

「それだけとは、言いがたい」

第84話 進出交奏曲（前編）

「おめでとう、フィリップ」

そう言って、ユウはフィリップ・ヒューズと強く握手をする。

「パン屋、ミリーと共に上手くやれよ」

「ああ、わかっているって」

「解散しても、モルモット隊の絆は永遠だ」

モルモット隊、含めてストウラートはあと一月後に解散することが決定した。存在理由が無くなってきたのがその訳である。

「ワシにも責任が回ってきたよ、ユウ・カジマ君」

「申し訳ありません、ジャミトフ閣下」

「いや、いいんだよ」

ユウの「独断先行」により隊の寿命が縮まったこともあるが、フィリップの退役が良い切っ掛けになったとも言えた。

「シロッコ直伝のパンケーキ、売れると思うよ」

「へへっ……」

そう、他の面々とも握手をするフィリップの側に寄り添う元通信士ミリーの姿をみて、ユウはかつて十年前の通信士であったモーリンの姿を思い出す。

「モーリン、元気かな？」

「やっぱり気になりましたか、ユウさんも」

「言ってくれるなよ、サマナ」

その時、メイン・ブリッジの内部へとカツがフラフラと入り込んでくる。

「おう、カツもフィリップに挨拶をしなよ」

「アルフさん、えーとですね」

キョロキョロと辺りを見回したカツがユウの姿を見つけると、その指を強く差し出す。

「アデナウアーさんという人が」

「はい、何だよカツ」

「アデナウアーさんって人が、ユウ大佐に用事があるみたいですよ」

「どうも、私がユウ・カジマです」

「アデナウアー・パラヤです」

そう言つて、帽子を被つたヒョロリとした男は、律儀にユウに対してその頭を下げた。

「まずは、こちらの書類を見て頂きたい」

「はい……」

分厚くこそないが、上質紙が納められたその書類の内容を見て、ユウの眉が引き締められる。

「俺の足長おじさんは、なぜここまでしてくれるのです?」

「親がわり、とでも思っているのではないですかね?」

「御冗談を」

「親というものは、いつまでも子が可愛いものです」

「あなたにもお子さんが?」

ユウがそう言つと、彼アデナウアーはコーヒーを飲む手を止め、その顔をしかめてみせる。

「そうみたいですネ?」

「何でも、インドに新興宗教を開いているマザー・ララアという女性に弟子入りしてね」

「ララア、あああの……」

その名はローベリア、いやマリオンから聞いた事があるユウ・カジマ、シヤアとの死闘の時も戦場に馳せ参じたらしい。

「インドの偉い人に弟子入りか」

「ごまつた娘です」

「まあ、ララアさんなら上手く面倒を見てくれるでしょう」

「そうなら、ありがたいですな」

そのまま彼アデナウアーはコーヒーを一気に飲み干し、ユウ・カジマの顔を伺うような顔つきをしてみせる。

「で、どうでしょう?」

「はあ、なんとも……」

「規模が大きい？」

「俺には過ぎた話かも、しれません」

「あなたのえーと、足長おじさんであるゴツプ提督は」

「はい」

「しばらく、考える猶予を与えると書いておりました」

その台詞を聞き、ユウの口から嘆息の音が軽く漏れ出す。

「さすがに、大事な話ですから」

「そうならば、助かります」

「よいか、ガトー」

「ハッ、デラーズ店長」

威風堂々とした「ミンナ・デラーズ」の店長であるエギーユ・デラーズへ向けて、アナベル・ガトーはその頭を深々とさげる。

「我々はあの向かいに見えるマ・クベナルド、あのキシリアの残滓には負ける訳にはいかぬのだ」

「ハッ!!」

「それまでは、そなたの命……」

ポフウ……

アナベル・ガトーの肩に、彼デラーズの厳つい手が強く置かれる。

「このワシが預かった!!」

「ハッ!!」

「仕事だ!!」

バツ……!!

そのまま、店長室から厨房へとその歩を進めるガトーは、歩きながら闘志をその胸に宿らせる。

「たとえば、平均時給が半分でも」

厨房には、すでにカリウス・オットー、ガトーの腹心が準備万端で待ち構えていた。

「勤務時間が長くても、私は辛くない!!」

そのまま、洗い物へと洗剤をぶちまけるガトー。

「なぜなら、義によって立っているからな!!」

「ガトー様、特別なおお客様です」

「特別なお客だ?!」

いそいそと、その特別なお客が待つ席へと駆けるアナベル・ガトー、その客の顔を見たとなんに彼は凍りつく。

「おやおや、シケた店だねえ……」

「シ、シーマ・ガラハウ……」

「おや、客を呼び捨てかい？」

「シーマ、殿」

サディステイクな笑みを浮かべているシーマはそのまま。

「このタン塩シチューを頂こうかねえ」

「そ、そのシチューは品切れです」

「ああん、なんだって？」

「お客様に出すタンはございません」

「聴いたかい、クルト」

そのシーマの言葉の後に、彼女とともに来店した「客」が下品な笑い声を上げる。

「とんだ、サービス精神のない店だ」

「も、申し訳ありません、シーマ、殿」

「まあ、他ので勘弁してやるか」

「政界へ進出だって、アイツがか？」

「かねてから、オフアーがあつたみたい」

「あいつに政治が出来るもんかよ……」

そこまでカミーユに言われては、ジェリドも立つ瀬がない。意外な話ではあるにはあるが。

「少佐に昇進して、その後退役」

「俺に何を期待しているんです、マウアーさん？」

「アイツの政界への進出昇進、支持して欲しいの」

「お断りだ」

マウアーの頼みを無視して、彼カミーユはそのまま愛機「Zガンダム」の整備調整へと戻ろうとする。

「カミーユ、いいじゃないの?」

「フアまで、何を言い出す?」

「全て、水に流しなさいよ」

「いやだね、俺はアイツが嫌いだ」

取り付く隙もないカミーユの態度に、フアとマウアーはお互いその顔を見合わせて肩を竦めた。

「何で俺の政界進出に、旧エウーゴの支持が必要なんだよ?」

「昔の敵からの支持、それを取り付けられる人間こそ今の地球に必要なんじゃない、ジェリド?」

「んなこといってもな、マウアー……」

名家マーセナスとの会食を終えたジェリドは、カミーユが露骨に反対しているという話を聞いて、その眉を潜める。

「カミーユが、あの小僧が俺の味方につくもんかっつての」

「アクシズの時の事があるじゃない」

「あー、あー、聴こえない聴こえない」

「ハア……」

しかし、マウアーにしても彼ジェリドの気持ちは解らなくはないのが、痛い所である。

テイターンズ軍の一室に、様々な人物が顔を見合せている。

「エウーゴ側の出席者、カミーユ・ビダン」

「ちっ……」

自分の昇進にこの小僧が関わっていると考えると、ジェリドの胃がいたくなってきた。

「いっそ、敵同士なら戦果って面で俺に貢献できるのによ、カミーユ」

「何をブツブツといつている、ジェリド・メサ大尉」

「何でもありませんよ、ジャミトフ元帥」

キリツとしなくてはならないのに、どうにもしまらない。

「僕はジェリド・メサ大尉の昇進に反対です」

(ほら、きた!!)

その気持ちか面に出してしまうのが、彼ジェリドの若い所である。

「少しは腹芸を身に付けろ、ジェリド」

「申し訳ありません、閣下」

とはいえ、カミーユが反対の理由を訥々と話すなか、ジェリドは心の中でその舌を出す。

「しかし、いくらお前さんが反対しても、全体の流れは俺に味方しているぜ……!!」

確かに、他のエウーゴ、連邦の参加者はジェリド・メサを擁護する発言をしているのを、彼は聞き逃さない。

「まあ、カミーユのことなんざ気にすることはない」

その通り、ジェリドの昇進は決まったようなものだ。

「聞いた、ジェリド?」

「何をだよ、マウアー?」

「貴方の昇進は、カミーユのおかげだって」

「何をバカな!!」

唾を飛ばして怒る恋人をなだめるかのように、マウアーはその両手を大きく振るう。

「アイツは最初から最後まで反対だったはずだ!!」

「ちよ、ちよつと落ち着いてよジエリド」

「す、すまない……」

第85話 進出交奏曲（後編）

「で、何で私に聞くのだ?」

「いや、シロッコさんよ、あんたなら公平な意見が聞けるとおもって……」

少しこぎつぱりとした衣服にその身を包んだジェリドは、そのままややにラフな姿勢で彼パプテマス・シロッコに質問を続ける。

「カミーユの奴は、俺の昇進に反対してきたはずだ」

「ふむ……」

「それなのにどうしてアイツのお陰で昇進できたと言える道理があるんだ?」

「最初から説明してみろ」

そのシロッコの言葉に、ジェリドはともすれば頭に血が昇りそうになるのをどうにかおさえ、一部始終を出来るだけ客観的に説明しようとした。

「なるほどな」

「な、おかしい話だろう?」

「そうかな?」

「違うっていいのか、オイ!」

「まあ、落ち着け」

シロッコの目は、分厚い本に落とされたまままでその手のみをジェリドに指す。

「つまり、最後には小僧は賛成したという話になるってことだな、お前の言い分によると」

「そういう噂みたいだな、俺がその目で見たわけじゃないが……」

「ならば、あの小僧がお前の昇進に一役買ったという話、道理があるぞ」

「どういう道理だよ!」

詰め寄るジェリドを無視し、シロッコは読んでいた聖書のページをめくる。

「最初、反対していたのは確かだと思うが、その後に賛成したとなれば」

「なれば？」

「お前の人事を、カミーユが行ったという道理は強く立つ」

「そ、そうか」

「で、なければな」

ペラア……

聖書をめぐりながら、シロッコはジェリドの目を見ずに話を続けた。

「ジェリド、お前の昇進は遅れていたかもしれないぞ？」

そのシロッコの強い口調の言葉に対して、暫しの間その眼をパチクリさせてきたジェリドは、不承不承ながらも。

「アイツに、菓子折りの一つでも持っていくべきなのかな、俺は？」

「政治家としての、贈賄第一歩だろう」

「チツ……」

それでもなお、舌打ちをして不満げな顔付きをしているジェリドを無視して聖書をまた一つペラリ。

「パプテマス・シロッコ」

「なんだ？」

聖書を読むのを一旦中止し、軽めの昼食をとっていたパプテマス・シロッコは、その「男」の無遠慮な声にその細い両目を軽く閉じてみせる。

「ユウ・カジマからの言付けか？」

「いいえ」

「では、なんだ？」

「クルスト博士のメモ」

カロリーバーと形ばかりのサラダという、あまり美意識が感じられない食事へ再び手をやりながら、シロッコのその眉が軽くひそめられ

た。

「一部を破いたのは、あなたでしよう？」

「何の事かな」

「ハッキングして、頭脳面での天才であったラプラスタイプのデータも」

聖書、それを指さしながら男はその舌を疾らせる。

「消したのは、あなただよ」

「ハッキングではないな」

別に言い逃れる必要を感じなくなったのであろう、シロツコは微笑みながら、サラダの皿を脇へと押しやった。

「ふと地球へ降りた時に立ち寄った基地にいた、博士のアカウントを使用したのみだ」

「なぜ、消した？」

「ラプラスタイプというものが現実にあるならば」

カロリーバーを飲み下しながら、シロツコはその両の手を組み、何かを納得させるかのようにそう呟く。

「私は現在に生きるラプラスタイプだからだ」

「過去は不要と……」

「納得いかんか？」

「いや」

男は苦笑いをしつつに、彼シロツコの言葉にその首を振って答える。

「長い間生きている、僕には解る話です」

「どいつもこいつも、どうして私に聞くのだ？」

「何か先客でもあったのかよ、シロツコ」

「なんでもないさ、ユウ」

聖書というものは、分厚く飽きないのがシロツコにとっては面白い所。

「それに、やってきた理由も解る」

「知っているのか？」

「結構な噂、そうあのニムバスという男も知っていると思うぞ」

「全く……」

それでも、色々な意味で公平なシロツコの意見をユウ・カジマは聞きたい。

「俺はもう長くない」

「私の地球滞在も、長くない」

「おい……」

「冗談だよ、ユウ」

「人の病気を何だと」

「ゆえに、悔いなく生きろと言っているんだ、私は」

そのシロツコのまっとうな言葉に、聖書をその指で綴る彼へユウは顔を歪ませる。

「悔いなく、か」

「お前の足長おじさんとやらも、それを期待しているのではないか？」

「そうかもな」

その言葉を言った最中も、シロツコは聖書からその目を離すことはない。

「ああ、言い忘れた事がある」

「何だ、ユウ？」

「アイランド・イフィツシユの時、ありがとうな」

「……」

ペラア……

「気紛れだ」

「はぁー食った食った」

腹を膨らませ、散々にガトーをいびったシーマは、部下のコツセルに財布を出すように命じる。

「うちはクレジットスティックだけなもので……」

「あん、何だつて?」

「いえ、何でもございません……」

そのまま現金による支払いを行おうとするシーマを嗜めようとしたガトーは、彼女の眼力にその身を縮こめます。

「ない……」

「何をしているんだよ、コッセル」

「落としたようで、シーマ様!!」

「何だつて!?!」

その様子を見たガトーは、その視線をキラリと。

「困りますな、お客さま……」

「くっ……」

「少し、事務所まで来ていただきましょう……!!」

その言葉が終わるか終わらないかの内に、シーマは飲み残していたビールをガトーへと投げつける。

「逃げろ、コッセルにクルト!!」

「シーマ様!!」

「あたしらは、故あれば食い逃げるのさ!!」

それでもシーマ艦長の命令には条件反射でしたがってしまう二人は、ファミレスの出口までその歩を進める。

「おのれ、獅子身中の虫め!!」

「お客に対して、その態度はなんだい!?!」

「貴様のような志と現金を持たぬ女に、見せる態度はない!!」

いがみ合っている二人へ、大声で合図をするコッセルとクルト。

「シーマ様、こっちが食い逃げに適したルートです!!」

「ガイドビーコンなんか出すな、逮捕されたいのかい!!」

だが、そのシーマの警告は一步遅く、複数の警備員を率いたデラーズ店長によって二人は取り押さえられる。

「志を持たぬ者に、食物を提供した不覚であったか……!!」

「コッセル、クルト、言わんこっちゃんない!!」

だが、そのシーマの腕にも男の腕がガツチリと締め付けられる。

「シーマ殿、どうかこちらへ」

「離せカリウス、このガトー巾着めが!!」

「何とでも言ってください」

周囲の人間に奇異の視線を向けられながら、店の奥へとズルズルと引きずられるシーマ・ガラハウ達。

「あたしは知らなかったんだ、知らなかったんだよ!!」

「貴様の意見なぞ、我々ミンナ・デラーズの者には関係がない!!」

「ちくしよおお!!」

「娘と上手くないかない、リデイとかいう少年の対応についてだ」

「知るか、ジャミトフ」

「その少年がな、航空機があ、空があ、とかいってばかりで、娘の怒りを買っているのだよ、シロツコ」

「だから、知るかといっている」

「ファンレターの代筆、お願い出来ないかしら、シロツコ」

「だから、どうしてどいつもこいつも……」

「貴方と私の仲じゃない、シロツコ」

「馴れ馴れしくするな、レコア」

しなだれかかるレコア・ロンドを邪険に払うと、それでもシロツコは律儀にそのレターを読もうとする。

—— バナージという少年とカプについて意見が一致しません、あと仕事をしないシャアのせいでハマーンが過労死しそうです、どうかしてください、プー。あとあと、豪雪ネコ下さい——

—— 差出人、オードリー——

「同人会の神から返答が来たよ、ミネバ様」

「趣味の時はペンネームを使えといっているであろう、バナージ」

「そっくりながら、ミネバは古風な紙媒体での手紙の封を切る。」

「——意見が一致しないのは、貴様らがオールドタイプだからだ、シヤアとかいう奴のことは心配なくてよい、いずれ治る。あと豪雪ネコはやらぬ——」

第86話 招待状

「おや」

パジャマ姿のユウが通路を歩いていると、アルフの部屋が開いていることに気がついた。

「不用心な」

パソコンのモニター光が漏れ出す彼の部屋。その室内に興味を湧いた彼は、そのままアルフの部屋へ無断侵入する。

「まあ、大したデータはないと思うがね」

もしかすると、昔サマナがやっていた「蒼の伝説」でもダウンロードされているかもしれないと彼は考え、気分転換にそのゲームをやりたいなど思いつつにパソコンのキーボードにその手を触れる。

「ホログラフ・ボードにでも変えればいいのに、アイツも古風な」

ブツブツと言いながら、キーボードにその指を這わすユウ。あまり手慣れた手つきではないが、もともとこの手のものにはあまり興味がないのだ。

——パスワード、入力——

「パスワード、か」

もうこの時点でアルフのパソコンの中身を見ることを諦めたユウ。しかしそれでもダメ押しに「あの単語」をキーボードから入力する。

——パスワードが違います——

「はい、そうですよね……」

第一、四文字ではパスワードとして短すぎる。

カララツ……

「あれ？」

何処かで何か乾いたような音がなると同時に、パソコンのモニターへ様々な情報が映し出された。

「まさか、本当にこのEXAMがパスワードだったのか」

不用心な、そう言いながらもユウはディスプレイの中身へとその瞳を實と見つめさせる。

「何だ、これは？」

何か一つ、異様なアイコンの姿をしたファイルへとユウが有線マウスを使い（ミノフスキー粒子対策の為、無線は敬遠されている）、その中身を確かめる。

「紹介状？」

差出人の名は。

——クルスト・モーゼス——

「全く、あのバカ」

監視カメラ、それが備え付けられている事は当然である事をユウが知らないはずが無いと思っていたアルフは、映像を確認しながら呆れたような声を出す。

「そして、タバコの粉も移動していると」

キーボードのキーにわざと落ととしてあるタバコの灰、それが「すり減らされている」事にアルフはまたも呆れ声一つ、アナログな防犯システムのの一つである。スパイのやり口だ。

「まあ、それでも」

今度は安堵の声、十文字以上にも及ぶ複雑なパスワードを入力し、その中身を確認する。

「中までは、見れなかったようだよ、うん……」

カタツ、タ……

そう言ったきり、アルフ・カムラは仕事へと戻った。

「これが今回の報告書です、サマナさん」
「ご苦労、シロー君」

スパイ活動の一端をまかなっているシロー・アマダは、東南アジア特有の蒸し暑さにも扇風機のみで過ごし、その胸元へ団扇を扇ぎ入れる。

「たまにはお茶でも、サマナさん」

「いや仕事があるものでね、奥さん」

モルモット隊が解散し、元の諜報部へと戻ったサマナは、一時期ユウ・カジマの監視からも離れたテイターズズの監視も終え、フリーな時間がえられると思ったのに。

「シャンブロ、ね……」

ロストスリーブスに盗まれた機体、ネオ・ジオン製のモビルアーマーの行方を探る日々である。

「隣のカムランさんはお元気で？」

携帯式再生機でシローから預かったメモリーを再生しつつ、サマナは世間の小話をその舌から出す。

「奥さんを亡くしたショックからも回復して、元気ですわよサマナさん」

「モーリンさんも？」

「一時期、旦那さんを亡くしたせいで落ち込んでいたけど」
「不謹慎だけど、お互い上手くいくといいな」

カララツ……

再生機から、ホログラフ・テープが再生される。

——あれは、私が愛用のザクでいつものように河へ洗濯に行ったときでした——

ホログラフには、洗濯かごをその背に担いだザクが再生された。

——子供達のたまった洗濯物をザクで洗濯しているとき、不気味な眼光が私を差したのです——

ザクの足元、目に棒線を入れられている年配の男は、オーバーアクションでその時の様子を再現しようとしている。

——私はザクの手に岩を持たせ、そのモンスターへ投石を行ったのです、そうしたら——

タダン!!

その時、再生機から緊迫したBGMが再生された。

——その怪物は河から大空へ飛び立ち、一声大きな咆哮をあげたのです!!——

先程からその映像を興味深げに見ていた子供が、その時に身をのりだす。

「ギニアス、見えないじゃないか」

「だって、シロー父さん……」

「面白いのは解るけどさ」

——間違いありません、あれは怪物クナツシーです!!——

「クナツシーだってさ、父さん」

「ああ、怖いもんだな」

その時、再生機からのホログラフが白衣をその身に纏った男へと変わり、同時に音楽がおどろおどろしいものへと変わる。

——クナツシー、次に現れるのは貴方の目の前かもしれません——

サマナはその映像を真面目な目で見やりながら、シローから受け取った報告書をへとその眼を通す。

「ミノスフキークラフト搭載型に改良された、水陸両用モビルアーマーか……」

「僕も、あんなモビルアーマーを作りたいもんだな」

「止めとけ止めとけ、ギニアス……」

「僕、大きくなったら技術者になるんだ……」

その言葉を聞いて、シロー・アマダの妻であるアイナが渋い顔をする。

「止めときなさい、ギニアス」

「いや、なるよ!!」

そう言っつて、ギニアス少年は部屋から飛び出していった。

「困ったもんだ」

「せっかくサハリン家の再興がなったというのに」

「サハリン家の再興？」

「私とあなた、そしてあの子」

「ああ、家名とかに囚われない、家庭」

「多分、死んだお兄様も本心では望んでいた家庭よ」

「そうだな、アイナ」

家、家名に縛られた兄とは別の「家」を作ってほしいと、彼シロー・アマダは心から思う。

第87話 空と宇宙（ソラ）の間

「ユウさんは？」

「休暇をとるかいつているわ」

「フーン」

「シドレ？」

不満げな顔つきをしているシドレに、サラがからかいを含んだ笑みを浮かべる。

「誘ってくれないのに、不満なのかしら？」

「別に」

「フフ……」

「何だよ……」

と、なんだかんだ言いながらも、シドレの不満は周囲へとオーラとして漏れだしていた。

「ただ」

サラがそう言いながら、その細い両肩を竦めた。

「休暇の前に、一つ用事があるみたい」

「どんな用事かな、私が役にたちそう？」

「そうじゃない、と思う」

その言葉を聞いて、みるみる内に不機嫌そうになるシドレ。

「ジェリド少佐に、ムラサメジャンパー返さなくせに生意気」

「それとこれとは関係ないでしょうに……」

「うるさい!!」

「君がリデイ君か」

「はい、ユウ大佐」

大佐、その名を聞いて顔をしかめたユウの面をみて、あわててリ
ディ・マーセナス少年は言葉が続ける。

「何か、不興を買いましたでしょうか、僕は」

「いや、なんでもない……」

ジャミトフ総帥から「少し鍛えてくれ」と頼まれたは良いが、正直
ユウにしてみても、何をどう鍛えたらいいか解らない。

「パイロット志願だそうだが、どんなモビルスーツが好きなんだ？」

「何か、その手のマニアみたいな質問ですね」

「言葉の取っ掛かりが上手くない、俺を笑ってくれ」

その冗談によりリディ少年の緊張が多少はほぐれたようだ。その
顔に笑みが浮かぶ。

「モビルスーツというよりですね」

「と、いうより？」

「昔の複葉機が好きなんです」

「はあ？」

「ですから、複葉機……」

「戦力のセの字にもならんぞ、それは」

「好きな機体を聞かれたので、答えたのですが」

そう言われても、ユウには全くピンとこない。

「空中戦に興味がある、そう解釈していいか？」

「構いません、大佐」

「空中戦か……」

そういつて、ユウは曇天の空を大きく見上げる。

「雲の上にいけば、青空が拡がっていると思うか？」

「思います、この低い雲ならば」

「さすがに複葉機ファンなだけはある、勉強している」

「どうも」

「ジャミトフ閣下から、空中モビルスーツ戦のイロハを鍛えろという
お達しだ」

「頼みます、ユウ大佐」

そう、彼は再度その顔を綻ばせながら、宿舎のある方向へとその指

を向けた。

「ハイリーンさんも、さそって良いでしょうか？」

「惚れたか、三十近い彼女に」

「まさか」

クツ……

大人びた仕草で両肩を竦めてみせる彼にムツとしたユウを無視し、リデイはその顔を歪める。

「無視すると、うるさいんですよ」

「アイツにそんな趣味があつたか」

「家同士の付き合いもありますがね……」

「何、そのお守りの群れは？」

「シドレからのと、カツ達からのサイコなんとか」

「サイコ・シャードね」

「あと、フィリップからの腐らないパン」

「小さく怪しいパンねえ……」

「俺もそう思う」

ハイリーンはそう言いながら、肩を竦めてユウの首にかけられた二つのお守りをその手に取る。

「一つはあたしが渡した御守りね」

「もう一つはシドレ、俺の部下からの贈り物だ」

「部下に恵まれたわねえ……」

「毛入りの御守り」

「あら、ま……」

「よく、そんな骨董品があつたわねえ」

「俺も驚いている」

ユウ・カジマ専用ジムコマンド……とアルフ・カムラ秘蔵ののびつくりモビルスーツ凶鑑に乗っている蒼い機体を運搬機したランプライト、ギャプランのプロトタイプへとさせているユウは、後続のハイリーン機へと向かって呆れた声を放つ。

「あたしのリ・ガズイも青い青い……」

「僕のメタスも青いですよ」

確かに、リディ少年の駆るメタスは青い塗装をされている。なにやら新鋭機の試験用機体だそうだ。

「空は慣れた、リディ君」

「はっはい、ハイリーンさん!!」

「ハイリーンでいいわよ」

その後ろ二人のやり取りを出歯亀根性で聞きながら、ユウは空の蒼さにその気を取られる。

(空が、蒼い)

蒼い宇宙、その単語がユウの脳裏へと浮かぶ中。

(蒼い、手付かずのもう一つの宙)

実と、その蒼い空へと視線を這わすユウ。

「あ……」

「どうしたの、ユウ?」

「怨念の線だ」

「怨念の、線?」

「ノイエ・ローテから拡散した、死者達の念」

その通りに、紅く空へと筋を曳く線達。

「成仏していないのか」

「あたしには見えないわよ」

「そうなのかもな、俺だけなのかも」

そう言いながらも、ユウはややに上方、未確認機の接近にその心を研ぎ澄ます。

「黒いギラ・ドーガ、いや」

ギラ・ドーガタイプよりも一回り大きく、ユウと同じくギャプラン・タイプの運搬機へと乗っているその機体は、ユウ達の背後に付くよう

にその機動を動かす。

「ユウ!!」

「大丈夫だ、ハイリーン」

未確認のギャプラン・タイプ、確かユウの記憶ではアルフが手掛けたブルーデイスティニー六号機と呼ばれている機体「バイコーナ」

「あれは、ギャプランは敵ではない」

「でも怖い機体です、ユウ大佐」

「勘がいいな、リディ君」

紅いライン、死者達の怨念の筋にと乗る未確認機、いや。

「ニムバス、ブツホでの正式入社はどうだ？」

「冗談ではないな」

「なぜ？」

「テストパイロット、このテッサ・ドーガのテストに追われる日々だ」

「ドーガの名を冠するということは、未だネオ・ジオンとの繋がりがあるということだな、企業として」

「個人的には切れている」

頭上のニムバスにそう言わせながら、ユウ達三機の前面へと出るバイコーナ。

「お久しぶり、ユウ」

「元氣そうで、ローベリア」

「このバイコーナ、ブルーデイスティニー六号機といっても、もはやエグザムでも何でもないわ」

その言葉に安堵の色が浮かんでいるのは、ユウの気のせいだろうか。

「エグザム・システムもマリオン・システムも搭載されていない」

「アルフがオーガスタから、ブツホへ裏工作として与えた機体だと聞いている」

「機能的には素晴らしいんだけど、ね」

そう言って、フレキシブル・バインダーを交互にずらしてみせるローベリア。そのバインダーには蒼と紅、両方の塗装で色分けされている。

「片方だけ返り血か」

「宇宙の心の色、返り血じゃないわよ」

不満そうに呟くローベリアをニムバスが嗜める声が通信機ごしに聞こえてくる中、興味本意でユウはデッサ・ドーガとかいう機体の特性をニムバスに聞いてみた。

「小型モビルスーツの実験機だよ、こいつは」

「小型、逆に大きいではないか」

「ジェネレーターが小型なのだ」

「ノミの心臓って所か？」

「機体も、あえてデッドスペースを開けてあることで来るべき小型機への実験データを収集している」

ギユア!!

その言葉を証明するかのようには、デッサ・ドーガは一旦バイコーナから機体を離し、自機の出力のみで空中を飛行するという芸当をユウに見せつける。

「お前には出来まい」

「出来るわけがないだろう、ジム・コマンドで!？」

「フン……」

「嫌みな……」

そのままデッサ・ドーガで短時間滑空を行った後、ニムバスはユウ機にとその機体を擦り付ける。

「な、何だよ？」

「聴いたぞ、悩みごと」

「お前の耳にまで届いているのかよ？」

「そのオフアー、受けた方がいい」

「お前には関係のない話だ」

「友人としての、忠告だよ」

バイコーナの軌道が変化する、どうやら別れの時間がきたようだ。

「残りの寿命、大切に使うことだ」

「無責任にいうなよ、ニムバス」

「お互いにだよ、ユウ」

ズウン……!!

そのままバイコーナの背に載り、夕陽が見え始めた空へと向かって加速するニムバス達を見送りながら。

「お互いに……？」

ユウはニムバスの最後の言葉の意味を考えていた。

第88話 ロストスリーブス

「ネオ・ジオンの少年兵」

「そう、名前はユウ」

「ユウ・フロンタルではなくて？」

偵察型ジェガンを整備中のサマナは、そのユウ・カジマの問いにその童顔を軽くしかめてみせる。

「確かに、ユウと言った」

「死んだ身、死人の素性をあれこれと探ってどうするんですか？」

「気になってな」

「ハア……」

ジェガンのコクピットからその身を乗り出したサマナは、近くにいるアフラーに機体の調子を確認させる。

「サマナ、通信機器オールオーケーだよ」

「ありがとう、アフラーさん」

少し無視された格好になったユウは、少しムツとしながらも、サマナの顔を睨み付けた。

「わかりました、わかりましたから」

「頼むよ、サマナ」

「調べてみますよ、ユウさん」

「お久しぶりです、ロゴージン中佐」

別にユウにしてみれば、かつての上官よりも階級が上になったことを自慢しているわけではないが、それでも。

「元氣そうでなりよりだ、ユウ大佐殿」

苦虫を噛み潰したような元上官の顔を見るに、嫌味ととられてし

まったのだろうか。

「こんな辺境の基地に、何の用だ？」

「いえ、休暇が取れたので、昔を懐かしみに」

「呑気なことだな、大佐殿」

アルフのコンピュータに納められていた「クルスト・モーゼス」からの招待状には、十年前に彼が死んだ場所。

「それとも、あの変人博士の墓参りか？」

ニムバス・シュターゼンに殺された基地の場所が書かれていた。

「だが、今この基地は化学兵器のテスト場所だということは知っているな？」

「暴徒鎮圧用の、弱い毒ガスですな」

「二、三日前に実験したそれが未だに、そう博士の墓の辺りに漂っている」

「行つて大丈夫ですかね？」

「すでに大きく拡散しているはずだ」

「博士の屍に鞭を打つ感じですね」

「この基地の惨状を見ろ、ユウ大佐」

確かに、この辺境の基地はあちらこちらに手が行き届いておらず、鉄骨が剥き出しになっている場所が散見されるのが痛々しい。

「その手のテストの他に、使い道がない」

「まあ、確かに」

「全く……」

その不満顔は、ユウ「大佐」に向けてか、基地の状態に向けてなのかは、さすがにニュータイプに覚醒しつつあるユウ・カジマにも解らない。

「墓参りにいくんなら、防ガスマスクを付けていけよ」

「はい」

そう答えながら、ユウは背中に背負ったザックから菓子折りをかつての上官にと渡す。

「つまらないものですが」

「おつ、すまん」

別にユウにしてみれば、クルスト博士を弔う義理も無ければ招待状を「受けとる」義理もない。

「しかし、ノイエ・ローテとの戦いの時の会話、そしてユニ・エグザムという名……」

それでも、気になるのが人としての性分だろう。ユウ・カジマという人間はもしかしたら好奇心が強いのかもしれない。

「ガスマスクも、しっかりとな」

正直、旧世紀から大して変わらないガスマスクのつけ心地は悪いの一言に尽きる。辺りへと漂うガスの残り香が、ユウの視界を覆う。

「確か、博士の墓はあの辺り……」

薄茶色に包まれたみすぼらしい基地、その基地の端に博士の墓があるとロゴージン中佐は言ってきた。

——身辺に気をつけろよ——

その言葉が意味するのは、月のない夜道の背中に気を付けろという意味であろうか。

「いくら、俺の出世が妬ましいとはいえどもな」

大人気ない、とはユウも思う。

「さて……」

石造りの簡素な墓、その墓にユウが軽く触れ、僅かにその表面をなぞる。

「どこに何があつて、何が招待状なんだ？」

「さて……」

その聞き慣れぬ声に、ユウはゆっくりと後ろへ振り返った。

「どうだろうな、ユウ・カジマ君」

「どういう趣向だ、ロゴージンめ」

「彼の娘を、少し人質とさせてもらった」

「奴も被害者か」

周囲に広がる、ガスマスクを付けた男女の群れ。薄茶色の煙に映え

るその姿は、まるで死霊の群れのように見える。

「あんたの名は」

その彼らのリーダーと思われるその男が、ユウのその声にゆっくりとガスマスクをはずす。

「ユウ・フロンタル」

美しい右顔をしたその男は、顔の左半分へと垂らしたその薄布を気にしながら、わざとらしい礼をユウに対してしてみせる。

「聞いたこと位は、あるだろう?」

「もちろん、サマナからな」

そう言いながら、ユウは無遠慮に彼の垂れ布へとその視線をジロジロと向けた。

「失礼、その布は?」

「顔に醜い傷があるものでね」

パラア……

その布をヒラリとめくり、その「傷」をユウに見せびらかすフロントル、それに対して、眼を逸らさないユウ。

「確かに、飲食店では入店を断られそうな傷だな」

「気にしないか、君は?」

「気にしたところでどうなる?」

パチ、パチイ……

マスク・メンバーの内、小柄な少年と思わしき人影が、その手を拍する。

「無礼だよ、アンジエロ」

「良い対応だと思ひまして、フロンタル様」

「まあ、確かに」

その言葉を最後に、辺りへと舞う沈黙。ガスの残り香だけが風に流されて、空気を動かす。

「どうした、ユウ・カジマ君」

「何が?」

「クルスト博士の招待状、それに導かれたのではないのか?」

「ふむ……」

周囲の視線、ガスマスク達の視線を気にしながら、ユウは博士の墓を調べ始める。

「おや？」

「何かあったか、カジマ君？」

「馴れ馴れしい奴だな、あんたは」

「すまんすまん……」

そう言うフロンタルの垂れ布が微かになびき、彼の歪んだ顔をチラリチラリと隠す。

「性分でね」

「邪魔だけはするなよ」

「私も興味があるんだ」

顔を近づけあいながら、博士の墓を調べる二人に対して。

「さすがに連邦のエース、フロンタル様と肩を並べる事ができる」

「無駄口よ、アンジエロ」

「別にいいではないか、マリィダ」

外野が、あれこれと勝手な事を言い合う。

「お？」

「あったか、カジマ君？」

「小さなメモリーカードだ」

「それだな」

石と石の間に挟まっていたメモリースティックをその手にとりながら、ユウはどうしたもんかとフロンタルの顔を見やる。

「ロニ、再生機を」

「はい、フロンタル」

ガスマスクを付けたメンバーの内、一際小柄な少女と思われる人影が、その手に携帯式の再生機を二人の元へともち、彼らの元へ駆け寄る。

ジ、ジイジ……

ミノスフキー粒子の影響か、残留ガスの影響か、えらく映りが悪いホログラフから声が辺りへと響く。

——初原の大地、コロニーの落ちた地へ行け——

ホログラフ上の博士が、その生前の姿のままに指示をだす。

「まさか、デラース紛争の時のアメリカではあるまい」

「オーストラリア、コロニーの落ちた地だな」

「このアメリカからは、結構な距離があるぞ、フロンタル」

「心配はいらん」

そういつて、フロンタルは今度は大柄な男へと何事かを囁く。

「旅費は用意してある」

「お前達も行くのかよ、オイ？」

「いったらう、カジマ君」

フロンタルはそう言いながら、ガスマスクをつけ直そうと四苦八苦している様子だ。旧世紀のガス・マスクは簡単に身に付けられるものではない。

「私達も気になると」

第89話 家族（前編）

コウ、ン……

——まもなく、宇宙へのドライブが発射致します——

「このコロニーのモニメントらしいな、アンジェロ君」

「あなたに君付けで呼ばれる筋合いはありませんよ、ユウ大佐どの」

「じゃあ、アンジェロ」

「そっちの方が」

オーストラリアのマストドライバー射出場、そのロビーにと鎮座させられてあるコロニーのモニメントに二人の男が張り付いている姿は、どこか滑稽である。

「気が休まる」

「もう一人のユウ、ユウ・フロンタルはどこへ行った？」

「あの方は、忙しいのだ」

「フーン」

「ああ、あつたぞ」

スツ……

そう言いながら、アンジェロはモニメントの隙間から一片のメモリースティックを取り出した。

「マリィダ」

「了解」

アンジェロにマリィダと呼ばれた少女は、携帯式の再生機を取り出しながら、風船ガムをプツと破裂させる。

——連邦始祖の銅像の元へと行け——

「連邦始祖の銅像、アンジェロ？」

「確かとはいえないが……」

その二人の男は、そのクルスト博士の言葉にその首を傾げている。

「ダカールのリカルド首相像の事ではないのか、ユウ・カジマ」

「リカルド首相？」

「そんな事も知らないのか、連邦のくせに」

「俺の過去には、いろいろとあつてな……」
「フム……」

その言葉に、アンジェロ少年は何かを合点したかのような表情を浮かべていた。

カウー、ン

——ドライブの行き先は、サイドⅡです——

「チーズ」

「は？」

「粉チーズ、パルメザン」

「ああ、ほれ……」

アンジェロの不躰な言葉にもユウは腹を立てた様子もなく、彼のスパゲティへと粉チーズをかけてやる。

「ほら、チーズだ」

「誰が、かけろといったか？」

「ちがうのか？」

「ちがう」

とはいいつつも、アンジェロ・ザウパーはそのユウの行為に腹から怒った様子はない。

「何かさ、あの二人」

「何だ、ロニ？」

「似てるよね」

そのロニと呼ばれた少女は、褐色の口許へドリアのソースを付けたままに、隣の大男へとポツリとそう呟いた。

「雰囲気か、どこか」

「そうかな……？」

「そうだよ、ヨンム」

ヨンムと呼ばれた大男は、それでも合点がいかずに、イカスミパエリアへとその口を運んだ。

「そつちにはあったか、アンジエロ」

「無いな、ユウ・カジマ」

ダカール議会での、宇宙世紀での始祖「リカルド・マーセナス」の銅像を二人の男が調べている。

「お母さん、あれ気持ち悪い……」

「見ちゃいけません……」

周囲の人間の冷たい視線を無視して、ユウとアンジエロは銅像を調べ続けている。

「あつたぞ」

さつきから銅像の股間の辺りを調べていたジンネマンという男が、そのコツクの辺りを取り外して、メモリーを取り出した。

「なんで、こんなところに……」

「あたしが知るもんか」

二人の女、マリィダとロニがその配置場所を見て、露骨にその端整な顔をしかめてみせる。

「ロンニさん、再生機」

「おう、ユウの旦那……」

「ジ、ジジッ……」

——最後のコロニーに似て、コロニーに問わず所へ行け——

「どういう意味だ、アンジエロ？」

「アクシズ、かなあ……」

「そうか？」

そのアンジエロの答えに納得がいかないマリィダではあるが、他に答えようがないのはアンジエロとて自分で理解している。

「ムスリム？」

「チーズ」

「口を挟むなよ、アンジエロ」

と、いいつつもユウ・カジマはアンジエロのスパゲティに粉チーズを振り掛けてやる。

「イスラム教とか言っていたな」

「よく知っているわね、連邦のくせに」

「その手の宗教関係に、詳しい男がいてな」

「会ってみたいわ、その男」

「そいつはキリスト教が宗派のようだがな」

と、いつてもユウにしてみても、彼女ロニとパプテマス・シロッコが宗教談義を繰り広げる光景は見てみたい気がする。

「コーヒー」

「自分で頼め、アンジエロ」

「気の効かない男だ、あの方の足元にも及ばん」

「フロントルはそんなことまでやってくれるのか？」

その言葉には答えずに、アンジエロはコーヒーをクリープ付きで頼んだ。

第90話 家族（後編）

「中古のザンジバル」

「悪かったかな、ユウ・カジマ？」

「乗り心地が最悪だった」

ジャンク回収船に偽装してアクシズへ接近したユウ・フロントルに、ユウ・カジマが悪態をつく。

「さて、お宝はと……」

「ストレートな言い方は下品だぞ、カジマ」

「飾った所で、内実が変わるもんでもないだろう？」

メモリーステイツクに示された座標、それによればこの宙域のホビーハイザックのコクピットに隠されているはずだ。

「あれじゃないですかね、フロントル」

「さすがに目がいいな、アンジエロ」

確かに、そのアンジエロが指差す先にはカラフルな塗装が施された競技用のモバイルスーツが漂っていた。

「チーズ」

「はい」

「チ、もつと」

「はいはい……」

戦場出張ファミレス「ミンナ・デラーズ」で食事をとっているユウ・カジマとアンジエロの姿を見て、ユウ・フロントルはその半面を微笑ましく歪めてみせる。

「アンジエロに気に入られたな、ユウ・カジマ……」

自分も食事を取りながら、フロントルはメモリーからのクルストの声を、自らに焼きつけていた。

——コロニー始源の地を目指せ——

「グローブの近くか……」

確か、その近くにはコロニー製作施設「メガラニカ」があつたはず、ならばそこに次の目標が秘められているに違いない。

「ニュータイプに対抗するためのモビルスーツ、ユニ・エグザムか……」

自身が宿敵と一方的に見ているアムロ・レイを相手にするには、どうしても必要な機体なのだ、対ニュータイプ専用機は。

「カレー」

「アンジェロに続いて君まで俺の金でメシを喰うか、マリータ」

「カレーライス、大盛」

「はいはい……」

何か考え事をしていて食欲がないといっても、水が貴重な宇宙ではお冷やも出やしない。

「チ」

「あいよ、アンジェロ」

「チ、チ」

「どういう意味だ？」

「二倍という意味だ」

「そう、了解」

「これが、グローブ・コロニーだというのか、ユウ・フロンタル？」

「ああ、ユウ・カジマ」

そのコロニーには、辺り一面に美しい花が咲き乱れ、それに調和するかのよう様々な施設や居住空間が設けられていた。

「どうだ、綺麗だろう？」

「あ、ああ……」

「これが、我々ロスリースリーブスが目指していた理想郷だ」

「理想郷……」

「我々は、決して単なるテロリストではない」

「……」

「むしろ、平和を求めているんだよ」

その言葉を聴いたとき、ユウ・カジマはあたかも催眠術にかかったかのように。

「ユニ・エグザムはもう諦めようかな……」

「それがいい、ユウ・カジマ」

「アンジエロ……」

フラフラとしているユウ・カジマの手に、彼アンジエロのその細い両手が重ねられる。

「それどころか、貴方ことユウ・カジマは」

「俺は……？」

「我々、袖付きの家族となるべきだ」

「家族、か」

そのアンジエロの言葉に同意するかののように、他のメンバーからもユウに対してその手が差し伸べられる。

「そうよ、ユウ」

「ロニちゃん……」

花畑が何か桃源郷を錯覚させるかのような術を発動させるのか、ユウはその誘惑に囚われそうになる、その時。

ジ、ジイジ……

ユウ・カジマの首から下げられている「お守り」達が、フィリップ達からくれた御守りが彼の肌を焼く。

「いや、俺は行かない」

「ユウ・カジマ!!」

「俺には、別に帰る場所がある」

「……」

その彼ユウの断固とした言葉に、アンジエロはその口をつぐむ。

「わかった、ユウ・カジマ」

「メガラニカにあるメモリー、その場所だけ教えてくれ」

「いいだろう」

そう言いながら、フロントルはその焼け爛れた半面を布からさらけ出し、彼ユウ・カジマへその手を伸ばす。

「だけど、覚えておけ」

「何をだ？」

「お前の返るべき場所は、ここだということを」

「フロントル様、危うく」

「言うな、アンジェロ」

「計画の事を、言いそうになりましたね」

餞別として旧式モバイルスーツを「袖付き」からいただいたユウは、宇宙を漂っているうちに、一機のジェガン・タイプとめぐりあう。

「メガラニカからのステイックは、僕が回収しときました」

「やはり追跡をしていたな、サマナ」

「僕の素性はフィリップさんから？」

「あいつも確証はない、とは言っていたが」

偵察型ジェガンにその身を預けながら、サマナはコクピット内での両肩を竦めてみせた。

「盗聴もしていたな？」

「ええ、もちろん」

「全く……」

「あの花畑コロニー、真のグローブ・コロニーじゃありませんよ」

「そうか……」

第91話 ラプラス事件再び

「では、ゴツプ提督」

「うむ」

目の前にデンと居座る肥満した男から、新しい階級勲章を受けとるユウ・カジマ。

「少将への昇進、慎んでお受け致します」

「私が君に望む事、解るな？」

「ハト派の軍人、ですか？」

「せっかく残り少なく、ここまで生き延びさせてやった寿命だ」

ギシイ……

椅子を軋ませながら、ゴツプ提督は葉巻に火を付け、その煙を軽く揺らせる。

「死んだレビルの代わりでも、せいぜいやってくれ」

「ハッ!!」

「大衆をアクシズから目をそらすセレモニーを行うんだからな、せっかく」

「ダカールでの、パーティーですな」

「パイロット上がりが少将、昔ジオン残党に将官がパイロットをやることはあつたらしいが、あくまで臨時だ」

葉巻を灰皿へ擦り付けながら、ゴツプ提督はニヤリとわらう。

「宇宙世紀初だよ、パイロットが将へなるとはな」

「目そらしのいいスキヤンダルというわけですか」

「察しがいいじゃないか、ええ？」

「どうも……」

そのままゴツプ提督は身体を重そうにして立ち上がり、ユウ・カジマ少将の肩へとその手を置く。

「君に、新しい護衛をつける」

その肩から手を離し、ややに離れた場所にいる秘書へと合図を送るゴツプ提督。

「ヴァースキ君だ」

「いつから、民間軍事会社を？」

「アクシズ紛争が終わってから、ですかね」

そう言いながらヴァースキ、昔馴染みの男はニヤリとその頬を歪める。

「出世、おめでとうございます」

「嫌みにしか聴こえないぞ、ヤザン？」

「では、シャバに出たらぶちのめしてやるぞという考えが顔に出ていることも？」

「まるわかりだ」

「ハッハ……」

そう豪快に笑いながら、ヴァースキはユウ・カジマの制服の乱れを直してやった。

「なんだ、この荷物は？」

「どうした、ハンバーガー」

「マクシミリアンと呼んでくださいよ、レイヤー隊長」

そう言いながら、マクシミリアンと呼ばれた男は謎の荷物が入ったダンボール箱の中身を確認しようとする。

「ありゃ、これは極秘モンだ」

「開ける、マクシミリアン」

「んなこといったって、責任は俺がとるんでしょ？」

極秘マークが付いた荷物は、たとえ不審物であろうとも一介の人物の一存では開けることはできない。

「マスター、ちよつと来て」

「いいから、中身はチェックしておけよ、マイク」

部下のあだ名をよびながら、同じく部下の女の言葉にその場を離れるダカール演説の警護隊長「マスター・P・レイヤー」

「全く……」

しかし、その部下であるマクシミリアンは気楽に過ぎる面があり、彼の言葉を。

「まあ、いいや……」

守らない。

「せっかくの、ジオン戦争の終戦記念パーティーだ」

もしも、人が感情というちっぽけな物に囚われず。

「悪い事も、起きないだろう」

理性を働かせていたら、この後に起きる惨劇も起こらなかったかもしれない。

「どうしました、ユウ隊長？」

「い、いや……」

男装の麗人、シドレのそのスーツ姿を見たたん、その言葉がユウの脳裏へと疾った。

「あまりに綺麗なもので」

「フフ……」

艶然と笑うシドレ、その彼だか彼女が顔をユウへと近づけて、イタズラっぽくその唇を尖らす。

「クイズです、ユウ隊長」

「お、おう何かな？」

「私は男だともいますか、それとも女？」

「こ、これだけ綺麗だと、どちらでも」

そのユウの言葉に、シドレは大声を出して笑った。

「ダカールか、私が演説をした所だな」

「遠い昔のような気がしてきたよ、シヤア」

暗い部屋の中、二人の男と一人の女がテレビ中継をされている番組へとじつとその視線を注いでいる。

「私たちは所詮過去の人間よ、アムロにシヤア」

「そうだな、ララア」

「で、なくてシヤア」

あつさりとうなずいたアムロに対して、シヤアには未だ未練があることをララア・スンは的確に見抜いている様子だ。

「私もね、あの宇宙の花を見てから神聖さに目覚めたからね、ユウ・カジマ君」

「ハハ……」

「今度、多額の寄進をすることにしたよ、ガハハ」

ぶくぶくと太った男と挨拶を交わしながら、ユウはいわゆる「上級社会」というものの礼儀作法に疲れてきた。これで五人目だ。

「まあ、いいか……」

金持ち達の自慢話というものは大変に疲れるものであるが、まあ内容自体は不快なものではない。見栄とはいえ、貧しいものに寄進をしようとしているのだ。

「あー、ぐっ出席の皆様」

そのゴツプ提督の声に、そのダカール・パーティーに参加しているメンバーが皆一様にその顔を彼へと向ける。

「こちらが我らがニューホープ、ユウ・カジマ少将であります」

パチ、パチッ……!!

その彼の言葉に、出席者が皆拍手を贈った。

「彼こそは、今後の連邦を支える若き貴公子なのであります!!」

その大上段に構えたゴツプの言葉に、我先にとユウ・カジマに握手を迫る富裕層の皆。

「ありがとう、ありがとう……」

そう言葉を返しながら、ユウのその瞳はある人物を探し求めていた。シドレである。

(いないな、シドレ……)

「ユウ、少将様ねえ」

念願のパン屋を開く為に行っている工事の合間を見て、フィリップはテレビを覗きこんでいる。

「店の工事、見てほしいところがあるって、フィリップ」

「あいよ、ミリー」

「おじさん、これ……」

「おう、ありがとう」

もう何人目かは解らないが、目の前の少女から花束のプレゼントを受け取りながら、ユウは何か違和感を感じ始めていた。

(なんだ、このグニヤリとした感覚は……)

「ユウ少将?」

「いや何でもないよ、ヴァースキ」

「凄い汗だぜ……」

その時。

ボフウウ!!

何処からか爆風が弾けとび、辺りへいた人々を吹き飛ばす。

「な、何だ!?!」

「ユウの旦那、その花束から手を離せ!!」

反射的、それこそヴァースキの言葉が聴こえるか聴こえないかの間にユウは自身の手にある花束からその手を離した。

ズウム!!

刹那、花束が爆発を起こしヴァースキがその花を蹴り飛ばす。

「くそ!!」

パーティーの出席者に変装したテロリストがユウの目前へとその拳銃を突き付けた。

「甘い!!」

怪鳥のように跳躍したヴァースキがそのテロリストの手から拳銃をはね飛ばし、そのまま回し蹴りをお見舞い、制圧をする。

「ユウ・カジマ!!」

能面を身に付けたタキシードの男、その姿を見て、ユウは直観的にその男の正体を見破った。

「ユウ・フロンタル!!」

そのフロンタルの手から投げ飛ばされる手榴弾、それがユウ・カジマへと飛びかかる。

「隊長!!」

その時、まるでユウ・カジマにとってはそのシドレを含む世界がスローモーションのようにみえた。

「ゴツプ提督、お怪我は?」

「ああ、幸いな事に、ない」

その言葉に一息を飲み込んだサマナは、辺りの惨状を実と見やる。

「あのと、百年前のラプラス事件と同じだ……」

「爆発です、テロでしょうか!?!」

興奮したキャスターが、暗い部屋のテレビからがなりちらしている。テレビの前には先の三人の姿は無い。

スプリングラーの水飛沫に爆発物の煙により、周囲の状況は解らない。

「シドレ……」

それでも、かつてシドレだった「物」の姿はよく見えた。

「人の姿をしていないから、これはシドレじゃない……」

「うう……」

能面を付けた、芝居じみた男の呻き声、それがユウにとってはやけに遠くから聴こえてくる。

「ユウ・フロンタルウ!!」

ようやく我にかえったユウ・カジマがヴァースキに制圧されたフロンタルの胸ぐらを強く掴む、その時。

ズ、ズウ……

——蒼い光が、二人の「ユウ」を包み込む——

第92話 ユニ・エグザム

——諦める、名付けたばかりのユウ——

——しかし、あの人は——

——もう、間に合わん——

ガスに覆われたコロニー、アイランド・イフィツシユの野外建物の屋上に佇み、呪詛の言葉を吐く男を、スペースランチは無情にも見捨てた。

「ユウ・カジマ……」

半面を爛れさせた男が、ユウ・カジマにと問う。

「俺とオマエ、どこが違う？」

「……」

「どこが違うかと聞いている!!」

激昂したフロンタルの声、それに対して、ユウ・カジマは掠れた返事を返す。

「違わない……」

「俺たちは一介のテロリスト、オマエは少将様だ!!」

「違わない!!」

「ただ、ノアの方舟に乗り遅れただけで!!」

「違わないさ、フロンタル!!」

そのユウ・カジマの語気に、今度はフロンタルが黙る番だ。

「何をしている、ユウ!!」

その時、蒼い光を切り裂いて現世が訪れた。

「そいつは懐に手榴弾を持っている!!」

そのヴァースキの必殺の一撃により、フロンタルの肋骨が砕け散り、彼は盛大に血を吐き出す。

「やりすぎだ、ヤザン!!」

「やらなきややられてたぜ、ユウ少将殿!!」

「聴かなくちやいけないことがあったんだ!!」

「そうかい!!」

そういったきり、ヤザンはフロンタルに戦闘能力が無くなった事を認めたのであろう、そのまま他のテロリストのもとへと拳銃を携さえて走っていく。

「そうとも!!」

死したフロンタルの近くで何かが、ユウ・カジマの中でパチンと音を立てて弾けた。

「俺のすべき事は、お偉方の為でも!!」

そのままユウは、混乱の最中であるパーティー開場を立ち去り、外に止めてある運搬機へとその脚を運ぶ。

「地球に安穩と暮らしている者のシンボルでもない!!」

運搬機「ランプライト」はその火を付け、サマナから聞いたユニ・エグザムの場所へと一路飛び出す。

「蒼い運命に乗れなかった者、ロストスリーブスの為にあっただんだ!!」

股間に無花果の葉を付けたユウが、必死に天高木の林檎の木へとその手をのばす。

「どうしよう、とれないよ——」

その時に、一匹の蛇が彼ユウ・カジマの元へと這いよる。

「そんな天高木の林檎よりも、このシードル（林檎酒）を飲みなよ——」

「わあ、ありがとう——」

そのままユウは何も考えず、安易にイヴの林檎酒へと飛び付く。

「とっても美味しいよ、シードレ——」

——喜んでもらってよかった、ユウ隊長——

「ロゴージン、なぜあなたがここオーストラリアに？」

「もともと、ここが俺の持ち場だったんだよ、ユウ少将」

少将、その言葉には凄く刺があるのは無理もないかもしれない。

「まあ、いい……」

そう言いながら、ユウはその手から一枚の命令書を取りだし、それをロゴージンの目の前へと突きつける。

「水中用モビルスーツの手配だと？」

「すぐに稼働できるのはあるか？」

「アクアジムなら、数機は」

あえて居上にそう言ったユウにかえって鼻白んだのか、ロゴージンの顔色はあまり変化はない。

「それでいい」

「さっそく手配しよう」

「ああ、あとこれを……」

そう、切り出してユウは饅頭の入った箱をロゴージンにと渡そうとする。

「重い饅頭だ」

「何のつもりかね、ユウ少将？」

「サマナ達に、黙っていてほしい」

「……」

そのロゴージンの無言から、ユウは賄賂作戦が上手くいかなかった事を実感した。

(猶予はないな)

アクアジム、水中用ジムの目の前を魚達の群れが疾る。あちらこちらに散らばるのは、アイランド・イフィツシユの残骸であろう。

「クルスト研究所は、確かこちらへん……」

昏い海の底、そのような人目に付く付かないを通り越した所に、ムラサメ、オーガスタに続くニュータイプ第三の研究所の派生施設があるらしい。

「あれだ……」

メモリースティックに描かれていた地図、それと同じ形をした研究所が眼下に控えている。

ブシユ……

内部は二重扉による防水設備となっているらしい、その排水が終わった後にユウはアクアジムからゆつくりと降り、ときおり感じる耳鳴りを気にせずに施設の奥へと進む。

「クルスト博士!!」

その声に答えるかのように施設内に電灯が点くということは、クルスト博士の「意思」が存在しているという証であろう。

「このドア……」

EXAM、そう表面に刻印されたドアを、ユウは軽く触れる。

ガア……

「モビル、スーツ……!!」

その蒼一色に塗装された内部には、一機の巨大モビルスーツと一つの簡素なパソコン。

「額に一つの角……」

——別名、ユニコーンガンダムだ——

「クルスト!!」

パソコン、そこから機械的な音声がユウの耳を打つ。

「生きていたのか!!」

——マリオンだよ——

「何!?!」

——昔のブルーデイスティニーの時のマリオンと同じく、亡霊とし

て生きている——

昔のマリオン、その言葉を聞いたときに、ユウには全ての合点がいった気がした。

「エグザムの亡霊マリオンは、何もマリオンが作ったわけではないからな」

——亡霊となるのは、なにもニュータイプの特売特許ではない——
「かもな」

素晴らしいながら、ユウはユニコーンガンダムの奥に追加兵装コンテナがあることに気がつく。

「あれは……?」

——ペイルライダー、ユニ・エグザムの母艦だ——

「レーGP、ニュータイプ専用機と同じというわけか」

「あくまでも、ミノフスキークラフト用の補助だ」

その言い分だと、何か単なる「おまけ」だとユウには聞こえた。

——NT—E——

「勘がいいな、クルスト」

——私もニュータイプなのかもな——

自嘲げにそういうクルスト博士を無視して、ユウの興味はNT—Eというシステムにと向かう。

「NT—Eとは、結局の所なんだ?」

——エグザム第二世代だよ——

「第二世代エグザム……」

——NT—Aはアンアウェイクン、非活性モードだ——

「Bは?」

——ブルーディステイニー——

「聞くまでもなかったか」

——本来なら——

ビー——!!

突如として響いた警報音に、ユウはその身を固くする。

「なんだ!?!」

——侵入者だ——

「サマナか!!」

—— 乗り込め、ユウ・カジマ!! ——

「くそ!!」

罵りの声をあげながら、ユウ・カジマはユニコーンガンダムへとその身を預けた。

—— Bモードは本来なら、ビーストモード、可能性の獣の機能だ——

「なぜ、変えた!?!」

—— ロマンがなく、直接的すぎる ——

「センチメンタルな!!」

コクピットが独特の位置にあり、身を飛び込ませるのに苦労したが、どうにかユニコーンガンダムの火を点すユウ・カジマ。

—— 人類の四分の一たるニュータイプの実質を持つ者を、可能性の獣で殺すモードだ ——

「Cは!?!」

—— カウンター、ニュータイプのみで通用する病気をもって抹殺する。

ガァン、ガ……!!

E X A Mの刻印が施された扉が何かに叩きつけられる音がする。サマナ達の仕業であろう。

「ユニ・エグザム、ユニコーンガンダム起動する」

静かに、一角獣のニュータイプ抹殺兵器が起動すると同時に、格納庫の上方から海水が漏れだしてくる。

—— 私はいつでもお前と共にある ——

「いやなマリオンだな……」

—— ミノフスキー通信を使つてな ——
ダウン!!

高性能火薬を使用して扉が吹き飛ばされると同時に、ペイルライダー兵装システムにと股がったユニ・エグザムが海中に飛翔した。

「NT—Dは……?」

—— BとCをあわせた、殲滅モード ——

「デストロイ……」

ゴッ、ガガッ……

「何だ!？」

——ミノフスキー通信の乱れだ——

「無敵の通信システムではないのか」

——全くミノフスキー博士め、口ほどにもない——

月夜が、海中から這い出た蒼い一角獣を強く照らす。

「最後の、N T E」

——……を、裁く——

「なんだって?」

ガッ、ガガッ……

第93話 誘惑するユウ

「スクランブル発進ですって!?!」

敵性機は不明、詳しいことは全く解らないが、とにかく出撃せよというのがハイリオンたちへと与えられた命令である。

「この新兵たちが主流の戦力で何を!?!」

「命令ならば、しかたありません!!」

「だからって、リデイ君!!」

「リデイ・マーセナス、リゼル出ます!!」

「ちよつと!?!」

氣勢に逸つて出撃した新兵「リデイ・マーセナス」を放つてはおけず、ハイリオンも出来る限りの情報を耳へと入れてから、愛機リ・ガズィを出撃させた。

「敵性機、サイコガンダムMK-IV」

「所属を聞いているのよ、私は!!」

「不明だといってるの!!」

虫の居所が悪い男性オペレーターの声にムツとしながらも、ハイリオンはリ・ガズィを加速させる。

「若い子達が死んだら、どうするの!!」

少し、ハイリオンはパイロットにしては母性本能が強すぎるのかも知れないが、それでも皆が皆ハイリオンの三分の二程しか生きていない若者、少年とも少女ともギリギリにいえる年ごろなのだ。

「見えた、不明機!!」

かなりの大型機である、量産型サイコガンダムと同じ位、通常のモビルスーツよりも一、二廻りは大きいだろうか。

「攻撃を開始します!!」

「待ちなさい、リデイ!!」

ビューーイ!!

「効かない!?!」

「バリアーだともいいますか!?!」

「下がって、リディ!!」

そうこうしているうちに、後続のリゼル部隊が展開を始め、その不明機を包囲しはじめる。

ガッ!!

不明機を乗せた運搬機、蒼ざめた騎馬にも見えるそのサブ・フライト・システムが急速旋回をし、運動性能の高さをハイリオン達へと見せつけた。

「邪魔だ!!」

「何ですって!?!」

「邪魔だと言っている!!」

「ユウ、ユウなの!?!」

「ハイリオンか!!」

正体不明機は攻撃を仕掛けてこない、代わりに各リゼル隊のレーダーに異変が起こっている。

「ステルス、いやジャマーか!?!」

その妨害のため、未熟なりゼル乗りの内二機が正面衝突を起こしパイロットが脱出する姿がユウとハイリオン達の目に止まった。

「これがアンアウェイクン、隠密モードとでもいうのか?」

「止まりなさい、ユウ!!」

「そこを除け、ハイリオン!!」

バツフォ!!

リ・ガズイのビームキャノンが不明機のバリアーを貫通して肩をえぐり抜きその行為に。

「どうしても、敵に回るといふのならユニコーンガンダムで!!」

ユウ機「ユニコーンガンダム」ことユニ・エグザムから火線がハイリオン機に向かって疾る。

「きゃあ!!」

「ハイリオンさん!!」

リゼル、他のリゼルとは仕様が異なる機体が、被弾をしたハイリオンの援護にと加わった。

「ユウ少将、止めてください!!」

「リディ君か、ちょうどいい!!」

ユニコーンガンダムは運搬機から急速離脱を行い、そのリゼル改良型へとその身を密着させる。

「俺の部下第一号となれ!!」

「何を言っているんですか!?!」

「俺は、この青空に!!」

朝の日が差してきた大空、それをユニコーンは指さしながら、大声でリディ少年に向かって怒鳴った。

「王国を創るつもりだ!!」

「はあ!?!」

「まつろわぬ者達の楽園だよ!!」

ユニ、その単一を意味するユニコーンガンダムの一角がその言葉を受け、鈍く光る。

「一緒にこい、リディ!!」

「行っちゃダメ、リディくん!!」

ややに混乱状態に陥ってしまったリディ少年は、そのまま飛行形態のままのリゼルをもて余したまま。

「行くぞ、リディ!!」

「リディ君!!」

グウ!!

ユニ・エグザムにより連れ去られ、そのまま運搬機にと乗ったユウ少将機により、天高くへと飛翔していった。

「俺に微弱でもニュータイプとしての素質があるのであれば」

ユニコーンガンダムに乗ったユウ少将、彼はそのまま念を凝らし「仲間」を呼び寄せようと試みる。

「届け、ユウ・フロンタルの同腹たちよ……」

その願いは。

ゴウウウ……

巨大輸送艦「ガラシエール」が地球へと降下したことにより、叶えられた。

「どうだ、リデイ……」

「僕には、よくわかりません……」

「いずれ、解るさ」

その言葉に、リデイが傲慢さの影を感じ取ったのは、決して彼が愚鈍でない証である。

第94話 ジーク・ラプラス

「アンジエロ」

「はい、ユウ少将」

「君はニュータイプが嫌いかね？」

「はい」

率直な返事、それこそが彼が微弱ながらもニュータイプの要素を
持っている証であるのだが、ユウ・カジマはそれにはふれない。

「我々ロストスリープスは、貴方ことユウ・カジマに従います」

「フロントアルにそう言い含められていたのか？」

「あの方の死の間際、思念が我々の間を貫きましたので……」

「そうか……」

その言葉を聞いた時、将人ユウの胸に軽い痛みが疾った。なかば彼
が殺したようなものだからだ。

「ユウ少将」

「何だ？」

「空中に我々の楽園は創れるのでしょうか？」

「説明はしたはずだ」

「余りに滑稽夢想なもので……」

「ならば、何の為にミノフスキークラフトがある」

「永久に続くモノではないでしょう？」

「オールドタイプとニュータイプを働かせれば、無限ともなれるさ」

その言葉に、アンジエロの脇に控えているロニ少女が軽くその細い
眉をしかめてみせる。

「我々は、ラプラスタイプだ」

「ラプラス、タイプ……」

「大地と宇宙の狭間に生きるもの、それが我々だ」

すでに大気圏内飛行可能なレウルーラ、宇宙戦艦は数隻この宙域へ
と降下を始めている。

「これは地球圏への反乱です、ユウ少将」

「違うな、リデイ」

「違う?」

「これは、愚かなる地球市民への裁きの鉄槌なのだ」

その言葉はユウ・カジマのオリジナルではない、もっと昔に同じ言葉をついた独裁者がいた。

「神の放ったメギドの火が、我らラプラスタイプを必ずや理想郷へと導いてくれるであろう!!」

その拳を振り上げる仕草に周囲の人間は最初は戸惑ったもののがて。

「ジーク・ラプラス!!」

「ジーク・ラプラス……」

「ジーク・ラプラス!!」

「ジーク・ラプラス……!!」

唱和を、始めた。

「我々ラプラスタイプは、今ここに天空の城を築く事を宣言する!!」

その将人ユウ・カジマの宣言に、テレビ、その他のあらゆる媒体の前の皆は呆れるしかない。

「狂ったか、ユウ・カジマは……」

旧ストウラート艦長「ミリコーゼフ」の言葉は、全ての人間が感じていることでもあった。

「意外としつくりくるな」

「そうかしら、アムロ?」

「ノイエ・ローテの小型機とか言っていたな、シャアのやつは」

「本当なら、シヤア本人が乗りたかったみたいね」
「冗談はよせよ……」

運搬機「フェネクス」に乗せたニュータイプ専用機は、反乱を止めるために大空高く揚がっていった。

「昔の百式に似ている……」

「操縦系が、大きく改良されたみたいだな」

「礼をいうぞ、ハマーン」

「それでも、時代遅れの機体になっているかもしれない」

「なに……」

そういいながら、仮面を外したシヤア・アズナブルは運搬機にガンダム・タイプを乗せながら宇宙へと飛び出した。

「ドウガチ、よく持つてきてくれた」

「こんなもの、お前しか使える者がいない」

「すまん、世話をかけて……」

「お前からそんな言葉を聴けるとはな、人は変わるものだ」

「その変わったヒトを、私はこれから成敗しに行くのだよ……」

そう、木星船団団長に向けて淋しげに笑ったパプテマス・シロッコは最新鋭機を駆り、大気圏内へと突入した。

「やはり、僕たちも行きます!!」

「だめだ、カツにサラ」

必死の形相で食らいつくカツとサラを振り切り。

「もう、お前達だけの身体ではないのだぞ」

「はい……」

ニムバスはデッサ・ドーガへと乗り込む。

「ローベリア、聖剣マリオンの調子は大丈夫か？」

「いつでもオーケーよ、ニムバス」

「お前は残っていてもいいのだぞ、ローベリア？」

「そういう訳にはいかない」

「そうか……」

バイコーナ、ブルーデイスティニー六号機へと乗ったデッサ・ドーガはカツ達に見守られながら、大空高く飛翔していった。

「すまねえな、サマナちゃんよ……」

「いいんです、フィリップさん」

「ガキの顔を見ずに死ぬのが、怖くてよ」

「ユウさんの尻をひっぱたくのは、僕に任せてください」

そう領きながら、サマナは新鋭量産型モビルスーツ「ジェスタ」へと乗り込む。

「ユニコーンガンダムだか、ユニ・エグザムは俺は全く関わっていない」

「だから、気を付けろと？」

「遠慮なく破壊してくれ」

「どうせなら、ユウさんの心配をしてくださいよ……」

「大切なエグザム時代からのモルモット、殺さないでくれよ」

「難しい問題だな……」

コクピット内で苦笑しながら、サマナは運搬機に空を翔ぶように命じた。

第95話 将人ユウ

朝陽が昇るとき、先手は連邦軍可変機隊から進軍された。

「NT—B……」

早い、いや目にも止まらぬスピードとはこれのことか、第二世代エグザムを発動させたユニコーンガンダムにより、そのハンブラビを中核とした可変機隊は瞬く間に殲滅させられる。

ギィーイ!!

いきなり部隊を半壊させられ、指揮を失った可変機隊がアンジェロ・ザウパーのZⅢによる斉射により追撃を受け、完全に沈黙した。

「挟撃だ!!」

リデイが駆るリゼル改がその悲鳴じみた声を上げると同時に、ヨウムがチーフを務める空中型シャンプロがその一部隊を受け持つ。

「下、大型機接近!!」

ヒユイ、キュア!!

フィン・ファンネルを制御翼とした運搬機「フェネクス」を駆るナイチンゲール、純白のアムロ・レイ専用機が黒い袖付きZプラス達を蹴散らしながら、ガラシエールへと一直線に突き進む。

ザアン!!

「アムロ・レイ!!」

「ユウ・カジマか!!」

ビームサーベルを合わせてみたところ、純粋な出力だけならば完全にユニコーンガンダムの方が上である。そのうえ。

「NT—C!!」

「くそ、頭が!!」

ニュータイプ相手ならば圧倒的なアドバンテージを誇る第二世代エグザム、それによる恩恵を受けたナイチンゲールが瞬く間に制御を

失い、落下していく姿をユウ・カジマは愉悦の笑みを浮かべたまま見下していた。

「たわいもない、これがニュータイプか!!」

辺りを見ると、シロッコ専用機「ジオユニコール」がそのNT―Cの影響を受けている様子だ。明らかに格下の空中戦用クシャトリアに苦戦している。

「パプテマス・シロッコ、俺に付いてくれば……」

シロッコだけではない、バイアランの部隊に宇宙から奇襲を仕掛けてきたシャア専用レガンダムもそのコントロールを失っている様子がまざまざとみてとれる。

「ククク、圧倒的じゃないか、我々の軍は!!」

ロストスリールズ第二陣、それを待たずしてこの宙域へと展開している敵機達を殲滅させることが可能かもしれない。そう将人ユウが錯覚をしたとき。

シャフオ!!

紅い、鋭い弾速のビームが地上から次々と上がってくる。

「ニュータイプではないな、こいつらは」

ならば、機体性能そのもので相手をするしかない、そうユウが心に決めた時。

ギイン!!

「そうか!!」

「そうだとも、ユウ・カジマ!!」

「お前がいたな、ニムバス!!」

ニムバス・シユターゼンはそのユウ・カジマの声には答えない、そのまま聖剣マリオンを振るい続ける。

「傲慢さを償え、ユウ!!」

「償えだど!!」

ザオン!!

やはり、出力はユニコーンの方が上だ、そのまま鏖迫り合いでグイトニムバスのデッサ・ドーガを押し込むユウ・カジマ。

「それこそが、貴様の言う傲慢さの顕れだろう!!」

「私はそれを乗り越えた!!」

「俺はそれを我が物とする!!」

「その傲慢さで、お前は何を手に入れた!？」

「力と!!」

ガッ!!

そのままバイコーナ、デッサ・ドーガの運搬機を蹴り飛ばしながら、自身の運搬機「ペイルライダー」を呼び寄せるユウ。

「狡猾さだ!!」

「それは過ぎた力だよ、ユウ・カジマ!!」

「さすれば、勝つ!!」

デッサ・ドーガは所詮は量産機に毛が生えたようなものだ、バイコーナから離れたその機体は、明らかに機動力が落ちている。

「NT-D……!!」

数では連邦、そしてあるいはネオ・ジオンに劣るロストスリーブスは、短期決戦でしか勝機は見出だせない。すでに太陽が中天に差し掛かった時にいつまでも戦いを続ける訳にはいかないのだ。

「ぐう、頭が!!」

未だにアクシズ紛争時での後遺症が残っているシャアのレガンダムがまらずは落ちた、しかし。

「ちっ、さすがはシャア!!」

フラフラと力がなく飛行しながらも、シャアはレウルーラを一隻轟沈させ、そのパイロットとしての能力を見せたこと、しかしそれでもユウ・カジマの余裕は落とせない。

「ん?」

その時、生身のユウの胸の辺りから蒼い光が立ち上る。

「うわ、あ……!!」

見るに「御守り」がぶら下げてある皮膚、胸の辺りから肉の焼ける臭いがし、ユウ・カジマの身体を焼く。

「止めろ、焼くな!!」

フツウ……

その御守りを手に取り、それを投げ捨てようとしたユウ、しかし。

「くそお!!」

将人ユウ・カジマは、その御守り群をどうしても投げ捨てる事が出来なかつた。

第96話 夕暁のユウ

「やむを得ん……!!」

夢想、時期尚早、それらの「ツケ」を払いたくないユウは、夕陽に輝くユニコーンガンダムの真の力を発揮させようと試みる。

「シャンブプロもクシャトリアも落ちたか……!!」

NT-Dをもつてしても数の力には勝てず、ついにガランシエールまでも落ちたとなつては、もはや凌ぎきれる物ではない。

「NT-E!!」

その機能を発動させたとき、何かユウは自分の唇に軽い感覚を覚えた、どこかで感じたような感覚。

バツバ!!

そのNT-Eが発動したときに、竜のごときな電流が辺りの宙へと舞う。

「どうだ、これが力だ!!」

電流により、敵も味方も落ちていくなか、ユウは哄笑をコクピット内で続ける。

「アレキサンダーか、チンギスハーンか、社会の下層出身の俺がこれだけの事ができるのだ!!」

「ユウ・カジマ……」

「これほど、痛快なことはない!!」

アンジェロの低く呟く声にも耳を傾ける事もせず、ユウは敵味方を落とし続けた。

「ユウ……」

「あん?」

グウ!!

何故かすぐ近くまで接近が可能であったジエスタ、それによりユウ機の脇腹がくり貫かれる。

「な、なんだ……!?!」

「すまねえな、ユウ……」

「フィリップ、か……?」

そのフィリップの一撃。

「なぜ、電流が……?」

「しらねえが、裁かれるべき者だったんだろうよ」

「俺が、か……」

「ああ……」

それによりユウ・カジマは裁かれた。

「おめえの事、忘れねえよ……」

「フィリップ……」

再びユウ・カジマの胸を焼く御守り達。その時ユウの瞳から。

「俺は、何を……?」

涙と共に流れ出す、ユニコーンの脇腹からの紅い奔流。

「あ、これはシャアの……」

シャア、ノイエ・ローテへと取り付いていた怨念。

「シャアに取り付いていた、死霊達……」

「取り付かれていたのか、ユウさん……」

「サマナ……」

そのサマナ機が宙域から退き、その先には。

「ジオユニコール、ロンギヌスモード……」

パプテマス・シロッコの駆るニュータイプ専用機「ジオユニコール」

の先端。

「穢れを、膿を絞り出してやる!!」

「やってくれ、シロッコ……」

「お前はもう消えていい、ユウ・カジマ!!」

「やってくれ、パプテマス!!」

ギユア!!

そのまま、猛烈な勢いでユニ・エグザムへと突進するジオユニコーン、その穂先が。

「ありがとう、シロッコ……」

ユニコーンガンダムを貫くと同時に、ユウ・カジマの身体が機体から投げ出される。

「ユウ!!」

ほぼNT―Eにより半壊したデツサ・ドーガを無理に動かし、そのユウの身体を掴まえようとするニムバスであったが。

「ごめん、ニムバス……」

ユウの身体は、夕陽を浴びて海へと落ちていく。

——あなたは、ユウよ——

「俺がユウなら」

夕陽が天と地、アイランド・イフィツシユの沈む海からユウを照らす。

——君は誰だ——

——私の名は、貴方の林檎酒——

——……そうか——

結局、彼ユウ・カジマには自身に語りかける女性の名は解らなかった、が。

——俺には——

天と地の祝福を受け、御守りから白い羽根を散らしつつに海へと落ちていくユウ。

——帰る所があるんだ——

その帰るべき故郷は、人の脚では及ばない所、しかしそれでも。

——これほど、嬉しいことはない——

ユウ・カジマの魂は故郷、アイランド・イフィツシユへと帰還した。

「ユウ・カジマは」

海へと消えたユウの姿をいつまでも見続けているニムバス・シユターゼン。

「いったい、何者だったのだろうか？」

「あなた……」

「すまない、マリオン」

「もう、一週間よ」

「もう少しだけ、頼む」

「ユウは死んだのよ、皆去っていった」

「解っている」

それきり、マリオン・ウエルチは何も言わずに、黙って夫ニムバスの食事の支度を始めた。

「僕は、ユウ・カジマに何を期待していたのだろうか？」

「解らないよ、アンジエロ」

「そうかい、リデイ……」

これからこっぴどい折檻を受けるとなると、リデイ・マーセナスの顔色は暗い。

「リデイ」

「なんだい、アンジエロ？」

「僕は、木星に行こうと思う」

「それがいい」

「地球には、嫌な思い出しかないから……」

「シロッコさんがよくしてくれるよ、アンジエロ」

「ああ、リデイ……!!」

最終話Ⅰ

ユニバーサル・センチュリー

「ユニバーサル・センチュリー!!」
「パァン!!」

そのテレビ内の掛け声と同時に、あちこちから拍手とクラッカーの音が聴こえる。

「ジェリド議員、やはり対テロ組織の増員を推進するおつもりで？」

「はい、揺るぎない決意です」

軽薄そうなインタビュアーからの言葉にジェリド・メサ議員は眉一つ動かさず、正面を向いてハッキリとそう答える。

「奥様をテロで亡くされたことと、ご関係な？」

「ノーコメントです、しかし」

その不躰な質問にも、ジェリドはやはり眉一つ動かさない。

「平和を願う心、それは今は亡き妻も同じですから」

「マザー・ララアを始め、愛する人達に囲まれて大往生」

「何の話よ、カツ？」

「アムロさんの話さ」

「そうね……」

子供を抱きかかえながら、カツ・コバヤシはアムロ・レイの葬式の事を思い出していた。

「熱中症か……」

「誰だつて、ちよつとした暑さ寒さで死ぬつて言っていたわよね、アムロ・レイは」

「当の本人がそうなつちや、世話はない……」

それでも、英雄として死ぬよりはよほどいいと思えるのが彼らカツとサラ、二人の夫婦としての意見である。

「シロッコさん、もうすぐ木屋から帰ってくるんだつて？」

「ええ、あのアンジェロという子と一緒に」

「ケーキ、作ろうか」

「そうね……」

「雨だねえ……」

「フィリップ、フランスパンを三つ」

「あいよ、アルフ」

新聞を読みながら、パン屋店主「フィリップ・ヒューズ」は客にパンを袋に包んでやる。

「コロナーの気象機構、壊れているんじゃないか？」

「そう思うなら、コロナー公社に文句でも言うんだな」

「チツ……」

奥からフィリップの妻ミリーが顔を出し、アルフへとコーヒーを淹れてやる。

「研究、忙しいのかい？」

「最近はどうでもない」

「人生にゆとりが出来た、アルフ？」

「俺にとつちや、研究がゆとりだよ、フィリップ」

「頑張れよ、アルフ・カムラ大佐殿」

「止めてくれよ、監視の為の大佐階級だからよ……」

—— エグザムについてだがな、クルスト博士——
—— なんだ？——

—— 結局の所、NT—Eとはなんだったのか——
アルフの指がキーボードを這い、姿なきクルスト・モーゼス博士と「会話」をする。

—— 教えてくれないか——

—— 裁くモノだ ——

—— 何を裁く？ ——

—— 力を持ちすぎた者 ——

ズウ……

サマナが淹れてくれたムラサメ茶を飲み干しながら、キーボード上の手は動き続ける。

—— すなわち、可能性を持ちすぎた者だ ——

—— 可能性は悪とでも？ ——

—— 過ぎたる希望は、破滅への道筋だ ——

—— だから、NT-Eはユウ・カジマを裁いた ——

—— あえて、ユニコーンガンダムに隙を作つてな ——

—— ふうむ ——

サマナが呼ぶ声が聴こえる、どうやら客のようだ。

—— ミノスフキー粒子、何か強く係わっていたな、エグザムに？ ——

—— ラプラス・エーテル、ミノスフキー博士は最初はそう呼んでいた ——

—— 物理的にも、通信手段的にも使えるところとおもったのかな？ ——

—— 「焚き火」それと同じようにな ——

—— 火で、Gマリオンの限界を突破させたのか ——

サマナのアルフを呼ぶ声が大きくなる、どうやら重要な客人らしい。

—— ではな、クルスト博士 ——

—— 私はいつでも「ここ」にいる ——

—— 研究で煮詰まったときに、来ることにしようか ——

そう、クルスト博士が言ったきりフツとモニターから彼の気配が消え去った。

「アルフさん、ゴツプ提督がお呼びです」

「わかった、わかった……」

そう言いながら、椅子から立ち上がるようにするアルフ・カムラ。

「あいたた、腰が」

「何をやっているんですか、アルフさん……」

「俺ももう……」

歳なんだなど、アルフはそう思った。

「シャア」

「なんだ、ハマーン？」

「私達は、結局結婚はしないのか？」

「結婚したら」

そう言いつつに、シャア・アズナブルは胸のロケットに入ったアム

ロ・レイの遺影を実と眺める。

「彼に申し訳ない気がしてな」

「そうか……」

だが、その道理はハマーンには解らなくはない。

「聞けば、拉拉ア姉さんも結婚はしないつもりらしいな」

「拉拉アらしいな、全く……」

「ま、どっちにしろ」

そのまま「伸び」をし、三十前後とは思えない身体のラインをシャアに見せ付けてから。

「結婚が女の幸せではないし、人生でもない」

「言ってくれるじゃないか、ハマーン」

「フフ……」

艶然と、微笑んだ。

最終話2 白い影の中で

「雪か……」

ジャミトフ・ハイマン、今では隠居の身ではあるがそれなりの政治的発言力がある彼は、飽きずに深々と降り注ぐ雪を眺めていた。

「父さん、紅茶よ」

「おお、ありがとう……」

熱そうに娘が淹れてくれた紅茶を飲みながら、ジャミトフは再び窓の外へとその視線を向ける。

「ユウ・カジマ君と出会った時も、雪の日であつたな……」

もつとも、感傷的になつているのは今の彼にとって現実逃避かもしれない。

「マリアオン・マーセナス……」

彼の前妻と後妻、奇しくも同じ名前なのは偶然ではない。彼の小飼いの密偵「サマナ・フリリス」からある報告書が届いたからだ。

「ネオ・ジオンに所属していたユウがパプテマス・シロッコの兄で、フロンタルと名乗っていた男が後妻マリアオンの子か……」

不老のラプラスタイプ、その言葉がジャミトフの脳裏へと浮かんだ。

「またクビになつたんだってな、カミーユ」

「うるさいぞ、ヤザン」

「そろそろ、どうだい？」

「何がだよ」

マ・クベナルドでハンバーガーを頬張りながら、馴れ馴れしくカミーユの肩を抱くヤザン・ゲールブルことヴァースキ。

「もう、その話は断つたはずだ」

「お前さんなら、うちでも高給で雇つてもいいんだがね……」

「民間軍事会社なんていっても、所詮は人殺しだろ？」

「お前もそのうちの一人にしてやるといつているんだ、カミーユ」

「お断りだ」

「チツ……」

一つ舌打ちをしながら、会計の伝票をその手に取るヴァースキは、そのままレジへと向かう。

「ここは俺が支払っておくぜ、カミーユ」

「あ、ああすまないな、ヤザン」

「奥さん、悲しませるなよ」

「だから、大きなお世話だって……」

そのまま軽い足取りで店の外へ出ていくヴァースキを見送りながら、カミーユ・ビダンの口からため息が一つ。

「マジで、次の仕事を見つけないとな……」

次こそは上司を殴って退職しないようにしよう、そう心に決めているカミーユである。

「お帰り、アンジェロ」

「お帰りもなにも……」

ロニから花束を渡されたアンジェロはそのジュピトリスから浮揚し、器用にそれを受けとる。

「俺の故郷は、木星だよ」

「もうすっかり、木星人ね」

「だと、さ」

そう言いながら、アンジェロは背後からやってきた人影にとその視線を向けた。

「もうすっかりだと、シロッコ艦長」

「良い話ではないか、アンジェロ」

ロニに対する挨拶も程ほどに、パプテマス・シロッコはそのまま船外活動を開始する。補給船とのドッキングの必要があるのだ。

「マリーダやジンネマン、ヨンムたちはどうしている?」

「マリーダはハマーン・カーンの所にいると思う?」

「ハマーン・カーン?」

「サイドⅢの宰相だ、知らないの?」

「俗世には疎くて……」

「パプテマス、その受け売りよね」

ククツ……

軽く笑うロニを軽く小突きながら、アンジエロもシロツコの呼ぶ声に合わせ、返事を返す。

「第三ブロック、繋げてくれ」

「了解、シロツコ艦長」

宇宙空間で身軽にその身を泳がす二人を邪魔してはいけな
いと思っただのか。

「じゃあね、アンジエロ」

「ああ、またな……」

「ヨンム達も、元気でやっているわ」

「それはなりより」

ロニは、その場から細い手足をばたつかせて宙に行く。

「シドレの事は、私もよくは知らないの?」

「そうですか、サラさん……」

「同じ、孤児仲間だったというだけで」

自分の子供の遊び相手になりながら、サマナの問いにサラはそう答えた。

「本当に、何も知らないの」

「本名がシードル・マリオスだったという事も?」

「この前に、初めて聞いたわ」

「そうか……」

遊び相手になりながら夫であるカツの弁当を作るとい
う、主婦特有

の器用さをみせつつに、サラはその顔を曇られる。

「まあ、もうすこし調べてみるさ」

「もう、死んだ身でしょう」

「……」

「ユウ隊長と同じように」

その言葉にサマナは何も答えず、ただ、強い雨に濡れているアジサイの花を眺め続けるのみ。

「もう、すべて私達の戦争は終わったのよ、サマナさん」

「手向けだよ、ユウ隊長への」

「彼も死んだ」

「僕の心のなかでは」

窓の外でシトシトと降り注ぐ雨の中、何かを宣言するかのようになり、サマナは語勢を強くする。

「まだ、ユウ隊長は生きている」

最終話3 蒼い宇宙

「だが、それでも十何年もかけて、成果ゼロか……」

雨が強く降り注ぐなか、その身を雨に濡れるにまかせつつ、サマナは深くため息をついた。

「縁が、ないんだろうな」

サマナの諜報員としてのプライドからして、それは少し寂しい気分である。

「どうにか彼女、女ということだけがわかったのみ」

雨が、謎の渦を巻いてサマナの髪を強く揺らす。

「そして、マリオンかマリオスか……」

人名、男性名と女性名の代表的な名前。

「それすらも解らない」

彼女が「マリオス」と同じ位に、「マリオン」であるという証拠がある。

「ユウ隊長……」

その声には、無論に死した昔の隊長は答えない、その代わりに。

雪、か……

妙な天候不順の中そう呟いたのは、最原初のラプラスタイプ「サマナ・フユリス」である。

「綺麗だな……」

すでにユウ・カジマが死んでから二十年近くが経過し、その間にも様々な人達がこの世を去っていった。

「アムロ・レイにシロッコさん、アルフさん、確かアンジェロという男もそう……」

時代の終わり、その言葉が彼サマナの脳裏へと疾る。

「でも、僕は生きている」

時代の立会人になれということか、そうパプテマス・シロッコのよきな事をサマナはその舌に乗せた。

「ゴツプ提督も死んだ、原初のラプラスタイプと言えども不死ではな

いということか」

それでも、彼は生き続けているし、歴史をその目で確かめている。

「ニムバスさんや、マリオンさんの墓参りにでもいこうかな……」

最近、フィリップも調子が良くないらしい、その事が彼の気をより重くさせていた。

「でも、僕は」

雪が、豪雪にと変わり始める。

「生きている」

雪の中、端正な顔立ちの少年がコスモスに囲まれた二つの墓へと花を添えている。

「もし……」

「はい？」

その遠慮がちな声に、少年がクルリとその身を翻す。見ると少年の片目には眼帯が付けられている。

「何か、オジサン？」

「その二人の墓は誰？」

「僕の両親です」

「そう、か……」

「謎の病気で……」

そう言ったとき、少年は実と初老の男の顔を実と見やる。

「何か、宇宙の妖花を引っこ抜いた時に受けた後遺症みたいですよ」

「宇宙の妖花、ノイエ・ローテか」

「そう、確かそういつてました」

「俺のせいかな」

「はい？」

「いや、なにも……」

それきり、少年と男はその口をつぐみ、二つの花に囲まれた墓の掃除を始めた。

「あまり、哀しまないね」

「別に……」

大人びている、そういう言葉がよく似合う少年だ。

「感情を処理できないのは、格好悪いと思っっているから……」

「ハハ、まあね……」

「何が可笑しいんですか？」

「いや、正論だと思って」

「正論？」

「感情のままに動いて、自滅した男を俺は知っっているからね」

片目の少年、その残された目が真実を探るかのように、男の顔を睨み付けた。

「オジサンの名前は？」

「俺はな」

その時。

ファサ……!!

コスモスの海が、強く揺れた。

「ユウ・カジマ……」

「ユウ・カジマ……」

「可能性を、見誤った男だよ」

蒼い光、コスモスに男の身体が包まれ。

「オジサン……？」

初老の男の姿を消し去り。

ファ……

花が、紅く蒼く白く黒く天へと舞い。

「リディ隊長」

「何だ、レーン？」

「花であります」

「花……」

大空を光で埋めつくし、そして。

「ハマーン、シャア、ラプラスの花だ」

「左様で、ミネバ様……」

「総員、左舷に注目!!」

戦艦の左舷、そこには蒼い宇宙の光が舞っている。

「蒼い宇宙、ですか……」

「そうだ、バナージ」

「僕も歳をとったもんですな、ミネバ様」

「もう、何歳だっけな？」

「どうに三十を越えています」

「私も、すでにオバサンだよ」

「フフ……」

「私達の時代は終わったのだよ、バナージ」

「はい、ミネバ様」

「宇宙の蒼は、新しい世代のものだ」

「はい、ミネバ様……!!」

光は宇宙へと、大輪の蒼い心を咲かせた。

く了く

スペシャルサンクス

Orotida 様

モジヤ亡者 様

他、読者の方々 様